續群書類從

第拾五輯上

東京
續群書類從完成會

續群書類從第拾五輯上目次

和歌部

續群書類從第拾五輯上目次終

續群書類從卷第四百一

總檢校保己一集
男源忠寶校

和歌部三十六

高陽院行幸和歌（萬壽元年 稱殿宴和歌）

高陽院殿にてきしのきくひさしくにほふといへるやまとうたの序　　爲政

おほ中宮あめのしたにみかさ山といたゝかれ給。ひのもとのはゝ木々とたちさかへおはしまし。ゆくすゑもたのもしき事。おほはらの千年の松のかせに吹つたへ。朝夕によろこはしき事。ありすかはひとたひすめる水の心のゝとけき世にし。おほくのまつりとをすへをこなはせたまふ。左のおほいまうちきみも。いもせの山の雲をへたてぬ御なからひなり。こゝにもゝしきの東いくはくもさらさるほとに。いにしへよりすくれたるところあるに。あたらしく花のいらかをつくりつゝけ。たまのうてなをみかきなして。よしある草木をほりうへ。かとあるいはほいしをたてなへて。萬代をよはふへき山をたゝみ。よものうみを心にまかせたまへる。池の水をもたゝへしめたるを。御らんせさせたまはんと。中宮なかつきのとうかようかに。あからさまにわたらせたまふるか故に。わかすへらきもきのふみゆきをせさせたまへる。ひねもすに御あそひせさせたまひて。あくるけふはこゝろのとかに。あきのそらもくもりなく。夜半の月かけもくまなくて。御まへにあまたの上達部雲の上人まいりつとひたまひて。きしのきくひさしくにほふといふ事をたひにて。やまとうたをたてまつらしめ給ふ。けふのありさまをかきしるさむことは。ためまさなんめりとおほせとありけるに。ことはのはやしも老木になりて。花のおもひをわすれにたり。ことはのいつみもあさくなりゆくに。人なみならぬみくつ（水くきイ）を哀にきこしめして。あらたまのとしたちかへらん。は

るのあかためしにもらされす。かすまへさせたまへとしかまうす。

みとりなる松のよはひをあらそふは汀にゝほふしらきくの花　關白殿

わかやとのきしにゝほへる菊の花久しき君かゝけそみえける　中宮大夫

おちとまる淵とそならんきしちかみ波間にこゆる菊の白露　式部卿

岸のおもに波おりかくる菊の花いとゝにほひそ久しかるへき　春宮大夫

をちこちの岸にかれせぬ菊の花いくよの秋にあはんとやみし　中宮權大夫

菊のはな池のしら浪たちかけて世々になかれて匂ふへきかな　皇后宮大夫

いとゝしく千代をかきりてすむ水に久しく匂ふきくの花かな　右衞門督

匂ふよりにほひをそふる(乙脱)みなそらにすみてそかほる白菊の花　權中納言

白波のはなもろともにきしのきくちとせをあきに匂ふ宿かな　左衞門督

菊の花匂ふあたりの水のおもは千世まてすめる影そみえける

祝言をきくの色そふわか君のちとせのほとをおもひこそやれ　皇后宮權大夫

つきもせすにほへる岸のきくの花君か千代こそ思ひやらるれ　兵衞督

かきりなくにほへる岸の白菊にちとせの鶴のおるかとそみる　右大辨

岸にさく菊のにほひを久しとも君かよにこそしるへかりけれ　源宰相

ゆくすゑも匂はんほとは菊の花しつくの流くみてこそしれ　頭中將

池水にこほりとみえしきくの花松のともとなりにけるかな　左頭中將

流れゆくすゑのよまてにつきもせすさしてにほへる菊の白露　辨義忠

萬壽元年(壽)九月十八日高陽院行啓。同十九日殿宴和謌并序波。文生博士名譽之筆跡之序也。今日半日依有暇之。爲後代令書寫之了。

正治二年八月四日　定家判

〔右高陽院行幸和歌以扶桑拾葉集校合〕

嘉應元年宇治別業和歌

冬日陪宇治別業同詠河水久清應　敎和歌一首并序

治部少輔藤原兼光

聖代嘉應歳天下無爲也。我攝籙尊閤當玄冬白雪之令節。催雍州宇縣之歡遊。詣徒歌伴之掉華舩也。酌新豐以唱長樂。青娥粉態之透珠簾也。來雲背以飜風流。逢感朝野之霧沽（旁イ）。各詠河水之久淸。斜岸年深。萬澤之流潟色。長堤風靜。蓬瀛之浪傳聲者歟。既而魚梁日沈。牛漢星轉。興味之餘。僉相語曰。處則累葉豪貴之勝地。花月永富。主只二代攝行之重臣（之家）。材藝共兼。人地相須。不其然乎。請記本鄕之閑趣。將歸城闕爲美談。其詞曰。

御詠

うち川の流れ久しきかひありてすむへき君か御代ものとけし

刑部卿重家

むかしより絶せぬうちの河みつに幾よろつ代の影をうつさん

散位源兼雅

靑さすあさひの山をとめておつる水はよゝにもくもらさり鬼

近江介源俊光

せき入るゝやそうち川もわか君も千代へてすまん宿とみるかな

中宮亮藤季經

昔より流れたえせぬうち川のやちよすむとも君こそはみめ

散位淸輔

君にけふあふせ待てやむかしよりすみはしめけんうちの川波

中務權大輔經家

年へたるうちのはしもりことはんいく世に成ぬ水のみなかみ

左近衞權少將源顯信

千世をへてすむうち川の水の色を今いくたひか君はみるへき

散位源俊淸

よゝをへてたえぬ流のみなかみも君に心をよするなりけり

民部權少輔源定能

宇治川のきよきなかれのゆくすゑはいく萬代と神もえしらし

中宮大進光長

うち川の流れたえせぬ君か代はうれしきよゝそ久しかるへき

中宮權大進朝親

君かへんやを萬代にたえせすはちたひやすまんうちの川水

民部大輔源兼定

むかしよりすみはしめけるうち川の流れの末そ久しかるへき

散位季廣

君か代にとたひすむへきうち川のこれやはしめの千年成らん

皇后宮權亮源師家

ゆくすゑ（いにしへイ）をくみてしる哉むかしよりなかれ久しきうちの川波

散位兼能

朝日山かけすみわたる川なれは千とせはふとも猶もにこらし

水上に千とせすめとやさためけんやそうち川のふかき流は（にイ）

尾張權守顯家

水きよきうちの河瀨に君か代の萬代ふへきかけそうかへる

文章得業生基光

君か代はなかれ久しきうち川のみつは幾たひすまんとすらん

女　房

いくとせと君も限らしうち川のたえすよにすむ宿のしるしは

師公進朝臣女

萬代をすむへきかけのみゆるかなやそうち川のたえぬ流に

とし經てそ君もすむへきうち河のたえぬ流を宿にまかせて

嘉應元年十一月廿六日

讀師　　重家朝臣

講師　　光長

女房歸洛之時被獻歌

とゝめおく心にかなふ身なりせはたちかへらめやうちの川波

御返

とゝまらんと思はゝ猶もとまれかしみよりほか成心やはある

〔右嘉應元年宇治別業和歌以秘閣本校合〕

最勝四天王院名所障子和詞

しらかわのみゆきはゝなのさかりのみやはとて。承久のはしめ神無月の十日ころに。最勝四天王院へ御幸なり侍。その九條右大臣殿けふなんこゝろを盡し侍らんと申給。その〳〵しかるへき和歌つかうまつれとおほせられけるに。きくもみちゑいするたいにやと。樣々はからひあひ給を。土御門内大臣通光。四天王院のみゆきには。御たうのはへ侍らんをやよく侍らん。御障子のしきしかたの名所主たいにて。御製をはしめて。その〳〵つかうまつらんと申給。おもひよらさりつる人々のこゝろいとはつかしなから。まとにさるへしとて。通光はいつれをとかおほせらる。おほ井かはのゐせきをと申給。かねてあんしたるふしのあるにや。ねんなくとて。なるみかたを給はせたるに。とりもあへす。

内大臣通光

浦人の日もゆふくれになるみかたかへる袖より千鳥なくなりことに院の御かんありて。詠させたまふほと。いとはへはへしく侍り。おもひよらさりつるしきしかたの名所の。こゝろにとまりつらんほとそいとやさしく侍。

御　製

見わたせは山もとかすむみなせ川ゆふへは秋となに思ひけん

大臣二人定家家隆これをゑいし申給さま。せう〳〵なられたにおもしろかるへし。ましてとはりえ。

右大将公經

つらゝとけ岩に碎けてよる浪にたましま川のなこそつらけれ

おほ井河にうふねいとおもしろき所を

九條大納言良平

おほ井河くたすうふねのかすみえて篝火なひく夕やみの空

大宮中納言實氏

けふよりは秋もたつたの山風になかむるからの夕暮のそら

きりのたえまの初せやまを

九條右大臣

はつせ山みねたちこむる霧のうちに聲むせふなり入相のかね

四條大納言隆平

しらさりきあつまみ空にすむ月のわけるゝすまの浦の秋とは

（なつ歟）（本ノ）

定　家

わけすさむこ萩か露の下になく虫のねさむしみやきのゝ原

みつくきのをかにむらさめしける所を

中將爲家

みつくきの岡のあき風ふきまよひ草葉さためぬむらさめの空

みもすそかはに月やとりてほたるとひたるかたを

右大臣公澄

そこきよきみもすそ川の水の面にすゝしくやとる夏の夜の月

をくら山にしかのねきこゆるところを

一條宰相中將信能

をくら山しかなくみねのあき風に雲こそなけれありあけの月

うちかはのあしろきかきたる所を

大納言定通

あさほらけやそ氏人の霧のまにたえ〳〵みゆる瀨々の網代木

源三位中將道平

おもひをく人にいそへのしほちにてあすは霞のうらの明ほの

つくはやまに雲かゝりたるところを

家　隆

筑波山このもかのもにたつ雲のうきてものおもふ夕くれの空

そてのうらかきたるところを

按察光親

いつまてかまくりてにてもつゝむへき乾くまもなき袖の浦浪

ますたの池にをしのうきねしたる所を

二條宰相中將雅經

我戀はますたの池にゐるをしのよをへて浪にうきねをそする

たかしのはまを

秀　能

忘らるゝうきなたかしのはま風にいくたひこえぬ袖の浦浪

あはてのもりの露を

宰相中將信成

したはもる露のみ袖に道ひきてあはてのもりのなこそつらけれ

しかすかのわたりをたいにて。きと和歌つかまつれと。吉水僧正のもとへ御使あり。とりあへす。

慈　圓

うらみわつ思絶えぬといひなから猶しかすかのわたり悲しも

はまなのはしを　　少將顯隆

せきあへぬ袖(さ歟)ははまなの橋なれやしたゆく水にこひかよふ之

ふしみのさとかきたるを　　中將通方

いまはとておもひふしみのさとの月とふもかなしき袖の秋風

ときはのもりを　　大納言通具

風かよふよそのこすゑの秋の色にときはの杜もうつろひに鬼

みむろやまにしくれしたる所を　　中將具實

むら時雨すくるあらしのあとの雲ちるやみ室の秋のやまもと

たかまとの野邊を　　侍從信雅

はきはらや下葉かれゆく秋風に鹿のねすさ(きイ)むたかまとの野邊

よしのかはかきたる所を　　中納言實信

いくたにのこけの下水流れあひてよしのゝ川のみおと成らん

さゝきの　　中納言有實

あつまちやふしのふもとの秋風にあたりの山の峯そたなひく

かへるやま　　右兵衛督公雅

あはれなりひとりまちする狩人のかへる山路のあけほのゝ空

中納言則實

いとゝしく心にあまるなかめ哉いかにそいはんあまの橋立

あすかゝはかきたるところを　　高倉中納言經道

よゝをへてふちせかはらぬあすか河たえぬ流の末をしそ思ふ

とはかきたる所を　　宰相中將敎資

なにとしも思ひもわかぬなかめかなとはたの面の秋の夕暮

たつのいちを　　宰相中將これひら

ゆくすゑを猶いくたひかたつの市むかしの跡もふりにける哉

ふけゐのうらを　　大納言定輔

波のをとはふけゐの浦にきゝなれて月にとわたる秋の鴈かね

ぬのひきのたきを　　秀　能

みなかみはたかねの雲やさらすらんあらしにおつる布引の瀧

あまのかくやま　　秀　澄

夕立の空ものとかにすみなれて月さしのほるあまのかくやま

かやうにをの〳〵よみあへ給ふ。これを定家家隆ともにせんし侍り。ことにめつらしきふしおほく。めつらしきにはくことにてんをあひ侍と。ゝりもあへすなまれたるそ。思よられける風情いとやさしくはへる。めいくたいくあひてめつらしきふしおほく侍り。御所御てんをの〳〵たまはる。内大臣のやまと歌を。こゝろとく。我ひとりとおもはれたるねんなしとて。たいかへしまいらするほとのなんたいをたまはせんとて。文字五にふた(マヽ)心すへて歌つからまつれときこえ給。よその人こくをみかはしてきゝ給ふに。

神無月こほれるなみのひと里はすまぬ(ひとりこ脱歟)ふはのせきもり

これを人々いつれのふしならんと案侍に。御所にこそこゝろとく御覽しいたさせ給て。あまりに御かんありて詠せさせおはしませ。こほれるなみのひと里を。まつひとさとゝよんてのちにひとりとよむなり。おもひよられて侍こゝろをしはかられ侍る。通光のひもゆふくれになるみかたと。やまもとかすむ御製おなしことにそ侍。定通のたえ〳〵みゆるあしろ木とこのふよしのしかなく〳〵みねのあ〔[illegible]〕きかせおなしほとに侍り。右大將のたましま河のなこそしられれとも。大納言良平のくたすうふねのかすみえけんかゝり火にはをとり侍りけん。大みや中納言の秋もたつたのやまかせとなかめられけんも。右大臣殿のこゑむせひけんいりあひのかね。とり〳〵におもしろく侍。定家卿のむしのねさむしみや木のゝはらもおもひしられて。ものあはれなれとも。大納言たかひらのすまのあまのあきほとには侍らさりけん。〔マヽ〕冷泉中將のみつくきのをかの秋かせふきまよひけんほとは。よろほろくあはれなりけん。されとも右大臣公繼のみもすそかはの水のおもにやとりけん夏の月は。なをすみまさりけん。宮内卿つねたかのいかにいはせのもりのした露は。めつらしきふしにおもしろく侍れとも。源三位中將のあすはかすみのうらのあけほののほとはいかてか侍らん。按察光親のかはくまもなき袖のうら。をしはかられてなさけふかけれとも。家隆のこのもかのもの雲はなをたちまさるらん。秀能かうき名たかしのはまかせ。いとおもしろけれとも。宰相雅經のますたの池にゐるおしは。いますこしうきれのほとはあはれにこそ。慈圓僧正のなをしかすかのわたり〔[illegible]〕かなしかられけんも。宰相中將信成あはてのもりの名つらくおもひけんも。おなし事なるへし。土御門少將のしたゆく水にこひかよひけんも。みくるしくこゝろくるしけれとも。中將通方のおもひふしみの月はなをすみのほりけん。堀河中將具實ちるやみむろのあきのやまさと。さこそはおもしろかりけめとも。大納言通具のときはのもりのうつろひにけんほとはなをおも白く侍。侍從のふまさのしかのねすまんたかまとの野邊はあはれなれとも。中納言實信吉野川のみおとなかめられけん。いかにおもしろかりけん。中納言〔さね歟〕ありまさのあたりの山のみねにたなひくとなかめけむもやさしけれとも。いゑみつのやうそしらなみおとまりて。君をいはひまいらするそめてたくは侍。中納言のりなりのいかにそいはんあまのはしたて。なさけふるけれとも。右兵衛督公雅のかへるやまちのあけほの。いかにおもしろく侍けん。宰相中將あつみちのとはたのおもの秋の夕暮。ものゝあはれをしはかるれとも。中納言つね

みちのふちせかはらぬあすかゝはおもしろく侍り。大納言定輔なみのをとはふけゐのうらにきゝなれけんやさしさも。宰相中將これひらのむかしのあともふりにけるかなとなかめられけんもいとあはれなり。おなしとなるへし。秀康かたかねの雲さらしけんもおもしろかりけめとも。秀澄は月さしのほりけんあまのかくやま。猶おもしろく侍り。定家家隆ともに詠申。

北山行幸倭歌　正嘉三年

春日侍　行幸北山第同詠翫花應

太上皇製和謌一首幷序

従一位行左大臣臣藤原朝臣道良上

春樂屬於誰人。上淸凉之賢主也。時興見於何處。西薗寺之勝形也。國母仙院就此金剎如來之道場。講以素恆覽藏之眞門。我上皇不忘聞法之昨美。令侍臣各獻應製之露詞。觀之花因地勢添粧。地蓄華色增榮者歟。拂雪持霞。群樹遠近之風落衣。洗錦洗緒。一池淺深之浪如讀。叡賞之趣。猗哉盛哉。況亦通三儲貳之和曲調也。音協治世之政。外祖前相之爲元老也。而遇今日之儀。小臣貞觀宰輔之後。雖顧餘風十五代之蹤。宴莚歌仙之中。獨隔出雲八重垣之什。其辭曰。

まれにきくよゝの例をとりあつめて君そ千年の花もみるへき

春日於北山第翫花和歌

色々にえたをつらねて咲にけりはなも我世もいまさかりかも

少將内侍

山さくらいまの御ゆきを待とてや花も千とせの色にさくらん

辨内侍

櫻花あまたちとせのかさしとやけふの御幸のはるに逢らん

春日侍　行幸北山第同詠翫花應

太上皇製和歌

従一位臣藤原朝臣實氏上

いろ〳〵にさかへて匂へ櫻はな我きみ〳〵の千代のかさしに

従一位臣藤原朝臣公相上

さくら花けふのみゆきを待えてやかれて千年の春をしるらん

右大臣正二位兼行皇太弟傅臣藤原朝臣實雄上

君か爲うつしうへける花なれは千代のみゆきの春はかはらし

内大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣基平上

けふよりはちらてし匂へさくら花きみかちとせの春を契りて

正二位臣藤原朝臣隆親上

はなもけふ色にいつらし絲竹のこゑよろつ代にあふか樂しき

正二位行權大納言臣藤原朝臣良教上

山さくら千代をかけてもみゆるかな光となるはるのみ行に

正二位行權大納言兼右近衛大將臣藤原朝臣公親上

もろ人の手ことにかさす櫻花あまた千とせのはるはしらるゝ

正二位行權大納言兼春宮大夫臣源朝臣通成上

いくちよもかさねてにほへさくら花一方ならぬはるのみ行に

正二位行權大納言臣藤原朝臣師繼上

あひにあひて花もけふとや匂ふらん一方ならぬ千代のみ行に

正二位行權大納言臣藤原朝臣通雅上

はる風のゝとけかりけるときをえてちよもへぬへき花の影哉

正二位行中納言臣藤原朝臣資季上

のとかなる春のかさしの櫻花けふをちとせのはしめとやせむ

正二位行權中納言兼中宮權大夫臣源朝臣雅忠上

幾春もかはらすにほへ山さくら久しかるへき御代のかさしに

正二位行陸奥出羽按察使臣藤原朝臣顯朝上

例なきあまたみ幸のけふに逢てはなもちとせの色にいつへし

正二位行權中納言兼左衞門督臣源朝臣基具上

さくら花けふをちとせのはしめにて思へは御代の花そ久しき

從二位行權中納言臣藤原朝臣爲氏上

花の色にはるの光をさしそへてかた〳〵ちよのみ幸をそみる

從二位臣藤原朝臣顯氏上

ゆく末もなかき春日にさく花はちよのはしめとけふみつる哉

參議正三位行左近衛權中將臣源朝臣通世上

末とほくはなにそちきる萬代のはるの御行をけふはしめつゝ

參議從三位行左近衛權中將兼加賀權守臣藤原朝臣隆顯上

松よりも花そ久しき君か代のいくその春のかさしと思へは

正三位行左近衛權中將臣源朝臣通賴上

あしひきの山のかひあるさくら花けふこそ雲の上とみえけれ

從三位行春宮權大夫兼左近衛權中將臣藤原朝臣公宗上

萬代のためしを君にはしめおきてさきそふはなの春そ久しき

藏人頭正四位下行左近衛權中將兼信濃權介臣藤原朝臣爲教上

さくら花とにもかくにも咲そへて君かやちよの春にあはなん

正四位下行左近衛權中將臣藤原朝臣忠繼上

またれつるけふのみゆきの花櫻猶いくちよのはるをかさねん

正四位下行右近衛中將兼肥前介臣藤原朝臣信家上

君か代のかさしに匂へやま櫻はなにちとせの春をかさねて

正四位下行右近衛權中將臣源朝臣具氏上

さくらはなみ行あまたの春に逢て數々千代のかさしとそなる

藏人頭正四位下行春宮亮臣藤原朝臣高定上

咲つゝくたかねは花のおりにこそあまた千年の春にみえけれ

正四位下行左兵衛督備後權守臣源朝臣資平上

ときにあふ例は花もしりぬらんちよのみ行の春をかさねて

正四位下右近衛權中將兼相摸介臣源朝臣具房上

はなの色もけふのみゆきをはしめにて千年を契る春ぞ久しき

正四位下行中宮權亮兼左近衞權中將美濃權介臣藤原朝臣公雄上

春をへていつもさくらの花なれとけふを千年のはしめとや知

正四位下行左近衞權中將兼播磨守臣藤原朝臣基顯上

櫻花きみかみ行のはるに逢てあまたちとせのかさしにそさす

正四位下行權右中辨臣源朝臣雅言上

さくら花はるのみゆきに契りてもけふこそちよの例なるらめ

藏人宮內大輔正五位下兼行春宮大進臣藤原朝臣資宣上

いくちよとかきらぬはるの山櫻さこそ御行のけふにあふらめ

正五位下行勘解由次官兼春宮權大進臣藤原朝臣經任上

咲まさる花もみゆきの時に逢てかねてちとせの春やしるらん

講師　　權右中弁雅言朝臣

御製講師

讀師

正嘉三年三月六日

嚴島社頭和歌 正應五年

秋日陪　嚴島明神寶前同詠卅三首和謌付小序

少納言季長

夫和謌者起自八雲之古風。已作吾朝之習俗。天動地動。鬼感神感。爰散位藤原親範老父前下州判（上無）史禪門。數月有恙。十全失驗。而親範偸凝精誠於懇府之底。試致祈請於嚴島之處。病源忽盡。殆以遠於鵲療。生涯久保。彌可長於鶴齡。彼耶渠悲老父之耄。着天下祥兮白鬒變。親範歎老父之疾。明神垂鑒兮丹心安。和漢雖異孝行相同者歟。仍爲酬神恩。新廻我意。限三十三聖之歌仙。勒三十三首之佳什。所謂以嚴島之文字。而置和歌之其初。揭會塲玉聲。而報楚痛之秋本。分四季戀雜之部。爲六義篇詠之題。方今或棘路之卿。蓬壺之客。或臥雲之侶。湌霞之倡。各凝華實之風（令無）情。皆彰黼黻悅目之色。亦逕優美之露詞。唯甄金玉振聲之性。令懷紙之奧書提要品。志之所之。自捧自起。凌雲浪煙波之海路。掉鷁舟兮頻飛檝。詣菁松翠栢之社壇。展歌筵兮亦講經。抑和歌者（寺無）縱雖有錦句之譽。妙典者是宜消綺語之咎。然則結緣之尊卑。隨喜之親疎。預吾神之擁護。成二世之願望。其詞云。

海邊霞　　權中納言藤原朝臣爲世

なにはかた浪はをよはぬはま松のこするをかけてたつ霞哉

梅風　　權中納言藤原朝臣爲方

もとみしにはなもかはらぬにほひかなはるや昔のむめの下風

春曉月　　權中納言藤原朝臣俊定

いりやらて山のはちかき月影のかすみにくもろ春のあけほの

雲間花　　從二位藤原朝臣隆博

月にいるみねのくもまのあけかたにいろみえかはるやま櫻哉

岸山吹　法眼源承

くれかゝる春のかさしにをりはへて浪こす岸にさける山ふき

關郭公　左近權中將藤原朝臣爲道

しはしとて聲をもとめよほとゝきす鳴つゝこゆるすまの關守

浦五月雨　入道中納言公雄

ま袖ほすひまこそなけれあま衣うらかきてもる五月雨の空

葉間螢　從三位藤原朝臣兼行

野さはなるあしの葉みたれ吹風にみえみ見えすみ行螢かな

初秋風　從三位高階朝臣重經

たかたあとわきてはつけぬ秋風にもよをされぬる我涙哉

露知秋　右近權中將藤原朝臣實躬

今よりの露こそあらめ草葉にもあらぬ袂のなにしほるらん

近鹿　前權僧正良覺

身にさむきのきはの山の秋風になをつまこひのさをしかの聲

月前船　修理大夫藤原朝臣實時

やそしまや沼地はるかに月はれていそく舟人夜半にこくめり

杜紅葉　前關白家一條

うつり行けしきの杜の木末にそしくるゝほとの色はみえける

夜時雨　住吉神主津守國助

しくれ行たゝひとすちの空ならて月をそおくる夜半の山風

浦千鳥　大藏卿

むら雲のたゝよふすゑのとも千鳥月住かたにうらつたふ之

雪中松　左馬頭藤原朝臣定成

しはしたゝあらしも殘せ岡野邊のまつのうへなるけさの白雪

山路嵐　少納言藤原季長

むめかゝを山路のすゑに吹おくる嵐や花のしるへ成らん

旅泊夢　沙彌明覺

遠からぬ浪のうきねのとまり船夢ちはかりにみやこをそみる

寄衣戀　左近權少將藤原朝臣隆教

うしやたゝおなしつらさの涙のみかゝるへたての中の衣手

寄玉戀　侍從藤原爲守

のきはよりこほるゝ露の白玉もしのふにあまる色やみゆらん

寄春戀　玄輝門院少將

そよといふ便もかなしをきの葉の風のつてなる露の玉つさ

寄船戀　[illegible]院新大納言

まつしまの渚によするあま舟のみるめもからて漕歸れとや

寄貝戀　右近權中將源朝臣親平

うきてのみたゝよふ浪のうつせかひ心くたけてなをや恨ん

浦鶴　散位藤原親範

かけこほるうらはの月の有明に松かせさむくたつも鳴なり

磯鶴　寂忍法師

なにはえやいその松風さへくれてすさきの鵆なみになくなり

夕述懐　　左近權中將藤原朝臣爲實

へにけるかむなしき月はしたはれて夕へとにはもの思ふらん

曉懷舊　　右近將監豐原政秋

さてもわか昔はいつも忘れねとねさめそしのふ限なりける

壽量品　　沙彌寂覺

せめてなをたゝもとよりの事はかりさとりしらする命之けり

普門品　　藤原仲光女

及ふへきかきりもあらし深き江にみをつくしてもたてし誓は

玄佛本願力　　漸空

はなのなをそれときゝてもゆふかほの光は露の秋そまたるゝ

社頭花　　三所禰宜鴨祐治

しろたへの色をかさねて咲花にゆふかけそふるしめの中かな

社頭月　　明玄

まほるへきかけとたのめは嚴島神も月にはてらしみるらん

社頭祝　　從三位藤原朝臣經尹

せめて世をまもる誓やいつくしま浪のほかにも風そのとけき

提婆品畧之。

依散位藤原親範宿願書之。

正應五年八月十日　　藤原朝臣經名

和歌幷序者以藤三位經尹卿眞跡書寫之了

續群書類従卷第四百二

和歌部第三十七

詠法華經和歌 正和三年

あひかたきみのりの花は皆人のさとりひらくる種にそ有ける

夏日詠法花經序品和歌

關白從一位藤原朝臣家平

出るより萬八千さとてらすにそすくれてきよき月そともしる

夏日陪春日社壇聽講法花經詠方便品和歌

從一位行左大臣兼皇太子傅藤原朝臣道平

是法住法位　世間相常住

をのつからまよふ心のさめぬれはあたなる夢の世こそ常なれ

詠譬喩品和歌

從一位右大臣藤原朝臣經平

法のまゝにみつの車を頼みて　そうきふる里は影はなれぬる

夏日陪春日社壇聽法花經同詠信解品和歌

從一位源朝臣通雄

五十あまりまよふ心の雲はれてのりのみやこにすめる月かけ

夏日、、、、各分一品和歌

藥草喩品

從一位藤原朝臣兼敎

草木みなしな〳〵もれすうるをひぬいとたひくたる雨の惠に

夏日、、、、同詠授記品和歌

正二位行大納言源朝臣通重

世々をへてつもる袂の露の上にうつろふ月そ光となる

夏日陪春日社賓前聽講法花經各分一品和歌

化城喩品

正二位平朝臣經親

いろ〳〵に千草花さく宿にきてなを末とをき月そとふへき

五百弟子品

[illegible] 大納言二位

ゐいの内は有ともしらてまなひこし衣の玉をいつかみかゝん

夏日、、、、各分一品和歌

人記品　前大僧正道昭

まちえたるおなしゆふへの郭公たれも初音をあたにやはきく

詠法師品和歌　寂　具

いりかたき佛のみちにむかふよりまよふ心もやゝはれぬへき

夏日陪春日社寶前聽講法花經各分一品和歌

見寶塔品　從三位藤原朝臣雅孝

古しへの誓しられておもふ友にみかさの山にたつねあひぬる

提婆品　（白露集歌合）永福門院内侍

わたつうみのひとつの珠の光こそやかて南の浦にさしけれ

勸持品　（白露集歌合）押小路三品

あひかたきみのりの花に手向なんをしからぬ身のつゆの命を

詠安樂行品和歌　前大僧正實超

むかしより人にしられぬのりの玉あらはすいまや光そふらし

詠涌出品和歌　前大僧正慈順

いまきなくはつねときけはいにしへにふりぬる春のをなし鶯

詠法花壽量品和歌　前大僧正忠源

いくめくり久しくとをくてらす覽をなしそらゆく秋の夜の月

夏日陪春日社寶前聽講法花經各分一品和歌

分別功德品　從二位藤原朝臣道輔

風すさふそらにみたれて飛鳥のすかたにゝたる花そちりかふ

夏日陪丶丶丶丶一品和歌

隨喜功德品　從三位藤原朝臣基[illegible]

山ふかきこゑそゆかしき郭公ひとつてたにもあかぬなさけに

夏日陪丶丶丶丶一品和歌

法師功德品　從三位平朝臣惟[illegible]

露もろくなひく草木のいろ／＼もみぬよの風の音にこそしれ

詠法花經不輕品和歌　雲　雅

なへて皆花のこもれる木々なれは空しき枝もあたにやはみる

夏日陪丶丶丶丶丶一品和歌

神力品（[illegible]）　參議正四位上平朝臣親時

いつくにもたとられなから郭公よもにそとをく聲はきこゆる

夏日陪丶丶丶

囑累品　正四位下行左近衞權中將藤原朝臣顯兼

うきみをももらさしよのみをしへおく（以下闕）

夏日陪丶丶丶

藥王品　從三位菅原朝臣長宣

後もまたやすく樂しき國にゆけはむまれんとそかれて嬉しき

夏日丶丶丶丶

妙音品　散位正四位下藤原朝臣親方

空にすむかけしわかねは濁江のにこれる水に月はみえけり

普門品　（白露集歌合）勾當内侍

三十あまり三のかたちにあらはれて法をときてそ皆渡すなる

夏日陪、、、

陀羅尼品 乃至夢中亦復莫恠疑云　　法印權大僧都覺守

法の爲うれへなき身のよろこひは夢のうちにも數のみそへふ

詠嚴王品和歌 昔友結等與入山中寺亥致經引以下疑云　　法印圓伊

木陰にそなをおしへやる山深くちきりし友はいまもかはらて

夏日侍春日社境聽法花經各分一品和歌

勸發品　　正二位行權中納言藤原朝臣公秀

あかすみるわしのたかねの花ゆくれに猶色そへていつる月影

夏日、、、

普賢經　　參議正三位藤原朝臣資親

世々をへておもひみたれし我心もとのまとにかへるうれしさ

夏日陪 春日社境聽無量義經詠德行品見色聞香自然曽
足文和歌

さきにほふ色かになれてをのつから春の心そはなにみちぬる

詠無量義經說法品和歌　　静 貞

はたらかねみつも水もたつなみもその源はかはるものかは

夏日陪 春日社境聽法花經同詠無量義經十功德品和歌

如從一種子生百千萬

限りなきことはの花のいろ／＼も心ひとつのたねよりそさく

詠般若心經和歌　　玄 心

大空のみとりの色をむなしくはうへなき法のをしへなりけり

夏日陪 春日社境詠阿彌陀經和歌

散位從四位上藤原朝臣賴清

さま／＼の鳥のさえつり風の音きくもみのりの心をそなす

詠唯識論久修開示謬執我法迷唯識者令達二空於唯識理
如實知故倭歌

登計賀多喜美遊起毛幾盈以春日能幾與支見閑氣濃與雲衛天良
世は

詠唯識論令達二空於唯識理如實知故和謌

圓 阿

心にてむなしき物〔可思者〕をさらにまた人とのり〔有〕とをわきておもはし

夏日於 春社境聽講唯識論詠非實種故如空華等和歌

從一位藤原朝臣師教

さめてみよ空にはまよふ雲もなしはるよりほかの花は夢そと

夏日於春日社〔唯識論〕 唯識論詠有爲法滅不待因故和謌

正三位行權大納言藤原朝臣冬實

さけはかつ移ろふたにもあらし色に猶風またて花そちりける

夏日、、、唯識論、、、依他起性如幻事等和歌

從一位藤原朝臣冬平

月をこほりさくらを雲となかめなすかりなる色も心なりけり

夏日、、、唯識論、、、心性淨者說心空理所顯眞如眞如
是心眞實性故和歌

正二位行權大納言藤原朝臣冬教

底淸きこゝろの水にやとる月もすますよりこそ影もへたてれ

延政門院高倉

さとる外は皆空しきをあるになして移變るとみるそはかなき

後一條五道關白女

夏日陪　春日社壇聽講唯識論詠解脫一切障圓鏡智相應和歌

やへ雲はたちへたつれとあまつ風吹はらふより月もさやけき

正二位行權大納言藤原朝臣兼季

むら雲をはらふ三笠の山風にあめのしたてる月そさやけき

夏日陪　春日社壇同詠唯識論第三卷和歌

根之異變

從二位行權中納言藤原朝臣季雄

松かねはおひかへるともかすか山みのりの種はつきしとそ思

夏日陪　春日社壇聽講唯識論詠心雜染故有情雜染心淸淨故有情淸淨和詞

從一位藤原朝臣公顯

おもひなす心によれる身にしあれはすむも濁るも形をそみぬ

夏日陪　春日社壇聽講唯識論詠離自因緣必不生故和歌

正二位行中納言藤原朝臣實衡

傳ひくるみなもとふかき法の水なかれの末そはるけかるへき

夏日陪、、、論詠令外轉識恒成雜染和歌

權僧正覺圓

なかれゆくふちせもかはる色もなしみなかみにとる山川の水

詠眞無我解達我執故和歌

靜覺

あさつくひ嶺にゝほへは山ふかみ木の下闇ものこらさりけり

夏日陪、、、詠能爲此世他世順益故名善和歌

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣忠兼

物にふれて今より深きあはれひは後の世まてそ同しかるへき

夏日陪春日、、、詠云何爲念於本習境令心明記不忘爲性和歌

喜賀丸

移りゆくむかしはとをくなりぬれとなを忘られぬよゝの面影

夏日陪　春日社壇聽講識論詠如水精珠能淸濁水和歌

正二位行權大納言藤原朝臣家定

濁りある心の水もすみぬへしみかけるのりの玉をやとして

夏日、、、論詠諸煩惱生必由癡故和歌

從二位藤原朝臣家親

おろかにてくらき心のまよひよりさめぬ幾夜の夢そかなしき

夏日陪、、、論詠嫉妬者聞見他榮深懷憂戚不安穩故和歌

正四位下行左京大夫藤原朝臣定兼

愚なる心はくるしひとの世のさかへをみるもうられへと思へは

夏日陪、、、論詠先惡所作業後方追悔故和歌

正二位行治部卿藤原朝臣俊光

ひく方のこゝろのまゝになすとは思出てそさらにくやしき

夏日陪　春日社壇講唯識論〔題脫歟〕未得眞覺恒處夢中故佛說爲

生死長夜和歌

藏人頭造東大寺長官正四位上行左大辨兼藤原朝臣資名

なかき夜のねふりの中に見る夢はさめん現そいつとしられぬ

夏日丶丶丶詠即現識等物名分別虛妄分別爲自性故和歌

藏人正五位下行左衞門佐藤原朝臣資朝

あるをあるなきをなきともわかれぬや愚なる身の迷なるらん

夏日丶丶丶唯識論同詠第八卷和歌

正二位行兵部卿藤原朝臣定資

きゝつともあまねくかたる郭公こゝろしそなを人やまつとて

夏日陪丶丶丶詠復次生死相續由內緣不待外緣故唯有識

和歌

從二位行權中納言藤原朝臣爲相

今そしる代々のふちせもあすかゝは外になかれぬみつの心を

夏日陪丶丶丶二空所顯圓滿成就和歌

法印權大僧都顯範

障なきあしまに影はあらはれてあまねくてらす難波江の月

夏日丶丶眞謂眞實顯非虛妄如謂如常表無變易和歌

從二位行中納言藤原朝臣實孝

寔もなくかすみも霧も見えぬ空のたゝむなしきを心にそ思ふ

夏日陪丶丶丶論詠愚夫顚倒迷此眞如無始來〔受生死苦和歌歟〕

從三位藤原朝臣俊言

いつとても曉らすすめる月なれは隔つる雲のはるゝをそまつ

夏日丶丶丶丶論詠謂正利益一切有情和歌

從四位上行內藏頭兼藤原朝臣爲基

しるしらぬ人のなけきも身の上におもひなしてそ哀なるへき

夏日於春日社壇詠於極善地見這初斷和歌

藏人正五位下行左衞門佐藤原朝臣資朝

けさよりは冬のはしめと神無月さむきあらしにちる木葉哉

夏日陪丶丶丶丶詠雖有客染而本性淨和歌

實聽

いさきよき心の月しすみぬれは身をうき雲ものこらさりけり

夏日陪丶丶丶丶丶詠生死沈溺不解觀心勤求出離和歌

法印權大僧都顯俊

迷ひこしをのか心をさとらすはうきよをいてん道あらめかも

夏日陪　春日社壇講唯識論詠離自因緣必不生故和歌

正二位行中納言藤原朝臣實衡

傳ひくるみなもとふかき法の水なかれの末そはるけかるへき

明和年六丑年中夏十五日寫之。　平貞林

竹内僧正句題歌 長享元年十一月廿五日

桑蠶作繭自纏裏　良鎭
とにかくに我身に思ひまとはれて桑子のいとのたへ難きよや

蛛蟹結網工遮邏　冬良
秋のいろを籬にとめてとふ蝶のはかなやむすふさゝかにの糸

燕無居舍輕如帆　實遠
春とにきつゝ巣かくるつはくらめおのか家そと思ひやすらん

蝶爲風光勾引破　通秀
身の行衛しらすも蝶のまとふ哉はなも夢なる春の薗生に

老鴟銜石宿水飲　教秀
むれゐるやすさきのみさこ夜は又浪の枕にうきねすらしも

稗蜂趁衙供蜜課　高清
巣をつくる軒にとひかふ山蜂の花をくすりとなすはかしこき

鵲傳吉語安得閑　永崇
よしあしを誰に告てか宿をにうかれからすのなきさわくらん

雞催晨興不敢臥　親長
となふる時を違へぬ庭鳥のおのかねぬよをよそにしらせて

氣陵千里蠅附驥　宣胤
遠しとも知らす千里や過ぬらん毛にそふはいの馬にまかせて

狂過一生蟻旋磨　政爲
をろかなる心を見せて世の中にすむ身も有のすさみならすや

虱聞湯沸尙血食　爲廣
わく湯もて身を徒になさん虫ひとつ衣をなにしたふらん

雀喜宮成自相賀　實隆
わかための殿つくりかは村雀かたらふ聲のうれしかほたる

晴天振羽樂蜉蝣　尋貴
哀てふ夕へをしらぬたのしみやはるゝあさけの日をむしの聲(聲イ)

空穴祝兒成螺蠃　宣親
何とこの虫よ空しきあなかちにさもあらぬみを我にゝよとや

結蜣轉丸賤蘇合　基綱
おのか姿まろねの虫よいく藥よもきかしまも同とやおもふ

飛蛾赴燭甘死禍　良巖
はかなくもおもひをかけす夏虫ののかれはてぬる(罪イ)哀をそしる

井邊靈杏(李イ)蠐苦肥　寂譽
みをむすふやとの楕のすくも虫すくす世をうき物とやはしる

枝頭飲露蟬常饑　和長
枝ことの露のむ程を命(人イ)とや身をうつ蟬のねにもなくらん

天蠖伏隙錄成語　宗巧
いかなれは虫の命もあたの世にあしきをわきて記しおくらん

射工含沙須影過　俊通
江の水に眞砂をつゝ(よくイ)みすむ虫の影まちわふる世をわたる(やわたイ)らん

訓狐啄屋眞行怪　冬良
曇るよの窓うつ雨におとろけは槇の板家をたゝくとりかな

蠨蛸報喜太多可　實遠
待人に心つくさてさゝかにのふるまひしるきやとの夕くれ

鸕鷀密伺魚鰕便　和長
柳かけ水ゆく石にいるさきのねふるすかたはうをやまつらん

白鷺不禁塵土涴　通秀
濁り江に涯くもなにをあさるらんさきの蓑毛も色かはるまて

絡緯何曾省機織　永崇
はた織の枕にちかきこゑはあれと猶かたしきの袖そやつるゝ

布穀未應勸種播　高清
春來てもまたたねかさぬ苗代にうつゝちくれの鳩のなくこゑ

五技鼯鼠笑鳩拙　親長
身の程を思もしらてつたなしと人のうへをはいはすそ有らし

百足馬蚿憐蠶跂　俊通
足たゝぬたくひをなそと我かほにいそくも同し虫のあはれさ

老蚌胎中珠是賊　宣胤
をのか身のあたと成らん玉のある貝とて人のひろふならひに

鷇雛銓裏天幾大　政爲
ひしほすによるてふ虫や僅なるをのかすみかを空にしるらん

螳螂當轍恃長臂　寂譽
小車を狩場の道にかへさすはしらしなむしの猛きこゝろを

熠燿宵行矜照火　致秀
ともし火の光にまさる螢哉くらき夜てらす數もあまたに

提壺猶能勸沽酒　實隆
竹の葉のそよはるふかき山鳥にゑひをすゝむるとりのこゑ哉

黃口只知貪飯顆　良鎭
きぬのつまふせこの下を離れぬや手かひになるゝ雀なるらん

伯勞饒舌世不問　基綱
くつてこふ鳥もかへらぬ忍ひねは忍はすとても誰かとかめん

鸜鵒纔言便關鑽　宣親
こにいるゝ鳥さへ物をいへはえにいわすは憂目見へむ物かは

春蛙夏蟬更喧雜　宗巧
折ふしをわすれぬこゑのはかなさよ梢のせみも水の蛙も

土蚓壁蟫何碎瑣　等貴
たとふなるもしのすかたを見る虫の己かたくひのしみの古文

江南野水碧於天　良嚴
難波江の浪もはるかにみわたせはみとりのそらにつゝく海原

中有白鷗閑似我　爲廣
靜なる入江の水をすかたにてねふるかもめそ我にひとしき

【右竹内僧正句題和歌以圖書寮本校合】

内裏御屏風上帖大永六年

先皇御製

春

今日にあけて春とや霞む玉簾雪にむかひし山もはるかに
一年の鳥の初ねに鳴そめてわれはかほなる春のうくひす
峯高み去年のふる雪思ひいてゝ花をそたとる今朝の春風
鳥のねにおとろかされて柴の戸の花も咲そふ春をしる哉
うらやまし花は久しきさかり哉よゝの春風吹つたへつゝ
瀧の糸のみたりに風の吹くるや花のしらかはせく方もなき
咲藤に山時鳥いつかとも心のまつは春にしられし

夏

いかにきくいかに見てまし時鳥空行月の夕くれのころ
にほへ猶花たちはなの我身さへよゝの數とて忍ふ昔を
夕闇の庭のかゝりひたきけちて木蔭冷しく月になりぬる

秋

よそにこそへたてもあらめ自からわかみる月は雲の上にて
出入に山有月の行衛とはさてもおもはめ半天の影
雲にあふ曉月にもれ出てひとりくまなき鐘の音哉
秋よいかにいはほの中も今更に世の憂事を隠そ晞なる
山深み霧分いてん歸るさもくれはてけりな日くらしの聲
今はわれはこやの山の秋の菊うつろふ花のおりをしらなん
花に見し春の錦の中たえて紅葉の秋にうつる色哉

冬

水の上にちるやはとまる枝なから木葉にかけよ風のしからみ
月なれや夕川わたり程もなく氷をしける水の寒けさ
心まて雪にそなひく涼しさの夏こそと見し竹の下風

戀

心よりあまる涙をせく袖の又ふたしへにうきおもひ哉
見にて知を思へはおなし關守のしらぬ夢路の末もとをらす
とりいてゝ文をそみつるいとせめて戀しき時のともし火の本
思ひやる心にたえむ山路かは日比の雨の雲間なくとも
おもへとも限ある夜のしのゝめに(をイ)人にしたはんとの葉もなし
かはらしと猶たのめとや松山のあたし波をはみすしらすして
あはすはと思ひなからも片糸のたえむとまては恨みさりしを

雑

ちる花ももろき木の葉もかくて見ん深山の嵐ふくにまかせて
吹のほる谷風見えて初瀬山夕のかねに雲のかゝれる
旅にして忍ふ草生る古郷はすむらんよりも荒てそおもふ
旅(浪イ)枕なれぬるまゝにねぬる夜のうらめつらしき夢の通路
世中よ夢路に過てうつの山行先しらぬ物をこそ思へ
かなしきは心にうかふ面影の又みぬ人そ月にまきれぬ
我身とてそれも心のまゝならぬ此世に人のうらみあらめや

よをうらみあるは我身をうしと思ふ人にいつかは心やすめん

もろ人のちとせのよはひかさねてや鶴の毛衣世におほふらん

右者後柏原院御製也。依
今上勅定色紙形三十六枚書進上之。則御屛風被新調云々。
御製共數多。愚見難撰定。大畧近年御製所奉書出也。

大永六年八月十四日

同御屛風下帖

堯空愚詠

春

うごきなき山をためしに春毎の霞もいくよ立かはるらん

月うすく煙たえ〳〵呉竹に梅かゝとをき岡のへの里

うへし世を三代の雲井の春の花我もなれぬる數にわするな

長閑なる春の光に空蟬の世（春イ）をわすれたる花さかり哉

たつとやいとゝかたのゝ花ならん絕て櫻の外にさかすは

我のみといはぬ色かは鶯のなく夕陰のやまふきのはな

暮にけり春よいつくに行鳥の入相のかねの峯の白雪

夏

忍ねはなをゝしとりの池水にあらぬ雲井のほとゝきす哉

うきてよるみるめ涼しくすみわたる月も南の浦風そふく

限りあれはくれかたかりし夏の日も月になりてそ風も吹ける

秋

年へても一よは旅ね七夕の枕は草をかさむとそおもふ

一村はうへてたにみん花薄露をく秋の袖のたくひに

谷の戸は道もつゝかて棹鹿のたつをた卷の陰そさひしき

たれにかもいはたのをのゝ秋の月ひとりはあかぬ山路越行

秋の水すめらは何を荒磯の月にそなれてうたふ船人

名殘あれや鴫の羽かきかそふれはもゝよにたらて秋の暮ぬる

冬

たれも世にふるはさそなと定めなき身をしる雨は村時雨哉

さえ〳〵てちるや霰の玉はやすむこの浦風波にしくめり

程なしや薄をしなみふると見し雪はよの間の松の下折

戀

あはしともいはて過しやつれなさのみさほなるへき初之けん

よしやその人をへたてぬつれなさに見はてゝ後の憂身之せは

あひ見まくほり江の小舟漕（いくイ）かへり同し波にもひかれてかこし

戀しさは折節との面影もさらに夕のものとなりぬる

そらねなく鳥たにあれな明る夜をまたぬ別のなくさめにせん

思ふには末もとをらぬうらみとや人にまさしき報しもなき

はらふへき昔の袖をかこちても見せはやあれしとこの浦波

雜

柴の戸は花も紅葉も幾度かはらはぬ苔のうへに朽なん

一通り夕日に晴てめにちかき山より高き遠の川波
ふるきよの風やいつくと棹さしてをしへん和歌の浦人もかな
あかすおもふ袖の中にや玉津島入江の月のおきつ白波
しるしをく筆に何かはます鏡手にとりてみぬいにしへもなし
消とまる程や（をやイ）はありと水の泡のうき世之けり何をたのまん
われとわたる道やはあらん橋柱たてしちかひを思ひとらすは
かけていはゝ遠き道かは人の世も神代のまゝの天の浮橋
民の草かけてもしるや春の雨秋の露とは君かめくみを

右愚詠依勅定及再三書進上之。後見可恥々々。

大永六年十二月十日

〔右内裏御屛風和歌以圖書寮本校合〕

中書王御屛風

中務卿貞敦親王伏見入道宮 又號莊嚴院宮

春

春の日にふるはつもらてをのつから殘るは猶ものこる白雪
いくかへり雲ゐのかりのうらみにも春の心をおとろかす覽
咲しより見れは思ひしをはりも散まかふ花にかきくらしつゝ

夏

浦遠く歸る波をも時鳥うらやましとや啼わたるらん
すみわたるかけをたつねて天の川ありとや高く行螢哉
凉しさの程にくらへは落瀧津松の嵐のいつれたかけん

秋

いつはあれと松を秋風吹音もいさよふ月に住吉の浦
草の戸をゝしあけてゆけは鴫のたつ野澤の月にあふ人はなし
いくたひの霜にうらみをかさねきてとをき別の衣うつ覽

冬

さもこそは冬こもりせめ難波人月ともいはす芦火たくらし
波にきえ煙にたちてしほあめの磯邊ほのかに行千鳥哉
手にとりてみるにそ雪は久方の月もおよはぬ光なりける

戀

行末をとかくと人のたより（とイ）しや憂年月のはしめ之けん
諸ともに夕附鳥と鳴わひぬ又あふまての下紐の關
もらさはや此一ふしは忍ふとも終にかくさんうらみならぬを

雜

夢にこし古郷人の歸るさもいかゝあらしのしのゝめの山
すむうちも哀ふかくさ今はとて見さらん後を思ひをく哉
うつまてもなに計なる名にもあらし深山の苔に身は任せてよ
おほけなや背すへらきの海山を我ものかほに民のあらそふ
老の後おなし事とていふへくは南無阿彌陀佛〳〵

小屛風可被押之。可書進上之由。嚴命之間書之。

大永六年十一月十一日

右屛風三帖以逍遙院入道前內大臣自筆寫之。

慶長四年閏三月七日馳筆也。

也足子素然

上帖

右方

ほのかなる月や霞のみをつくしふかきしるしのみゆる空哉

とはるゝもとふもいかなる人ならん花にふけたる蓬生の月

こてふのみ春の園もる古郷はちるよりも猶おしき春哉

時鳥今一こゑとなかめすは月をのこしてねなまし物を

池水にみさひかたよる風たちて夕日涼しき庭の松陰

荻の葉のおきふしつらき風の音に夜深き露も枕にそちる

千種をもおほふはかりの袖と見て尾花にゆるすのへの秋風

白妙の鶴の毛衣月さえてねくらの松に秋風そふく

吹からに風のしからみかけもあへす又山水に行木の葉哉

哀猶身は數ならめなるみかた友なきねをもなく千鳥哉

時の間も草葉に色の匂ふ哉枝より出ぬ花のしら雪

千早振神の心も白ゆふをとりかけていのる我おもひ哉

うちわひて今はたのまん夢もやは有明の月に鐘ひゝく聲

折しもあれ秋やいとひしとの葉の露もみにしむしのゝめの袖

しりにけん人よいとふも苦しくはましてうきには深き思ひを

宿とはむしるへともなれまつち山夕越くれはむかふ月影

あちきなく思へは此身いくほとをふへき物とて世をなけく覽

とく法の是やまことの色ならん耳無山の口なしの花

同下帖

大かたはかすめる春の空なからよにへたてなき日の御影哉

思いては花なき里になかむとも此面影や春のあけほの

浮世をはいてやと思ふ折しもあれ花さへさそふみよしのゝ奥

時鳥かたらふ聲に袖ぬれて晴ならぬ夜の夢路をそ思ふ

木陰行いさゝは舟の音はして御秡涼しき森の下風

さひしさに古郷人のならひしもよしやよしのゝ秋の夕暮

月更る淀の川風秋さむきたかこも枕夢むすふらん

夜をこめてたつ秋霧の朝しめり紅葉もおくもふかき山哉

色は先うつりにけりな秋風になひくあさちか庭の白菊

冬枯の山の下水くもりなく落葉か上にこほる月哉

行人の影さへさひし霜の上に月白き夜の森の下道

つもらはと人もちきらぬ庭の雪に心とまちてたれをうらみん

心にもあらて涙やこたへまし思ひを人にとはれすもかな

あらはあふよに年ふるもはかなしやをのか物からしらぬ命を
衣〳〵を思ふ涙としりかほに鳥もをくれぬ初ねなくゝ
一夜ねし磯の浦半の舟出にもさすかあさけの名殘ある空
濁り江のうきに朽せぬ亂芦のもとのねさしや我身なるらん
聞て過見てこし程の何事か昨日にまさる今日にあひぬる

下帖 ホノマヽ
右方　又同

右二部於浪華旅宿以尾崎雅嘉本書寫之

長壽院内府九十賀和歌 文祿元年

元日宴　紹儀 前内府勸修寺
行年はとをとて三をみつの濱に猶ひろふへきかひもあらなむ

都初春　惠空 禪閤九條殿
すへらきの見そなはす袖の打はへて春たつ庭そゆたかなりける

子日　晴季 菊亭右大臣
うくひすの初音きかせてたのむるや都ならなむ春のあけほの

山霞　基孝 持明院中納言
けふよりや猶引そへんねのひする松の千とせの春をためしに
さほ姫の霞の衣かさねきて千代萬代と山よはふなり

野霞　兼孝 九條前關白
天の戸のあくる霞のひかりよりのへのゆくゑは春めきにけり

鶯出谷　尊性 大覺寺
霞たつみやこにいてゝ谷の戸のふるすにきかぬ鶯の聲

澤若菜　光宣 烏丸大納言
澤水のこほりふみ分もろ人のつむ心もや若菜なるらん

依風知梅　最胤 梶井宮
さそはれて谷の戸出る梅かゝも千代よろつよを松の春風

簷梅　輝資 日野大納言
花もなを咲そふ軒の梅かえやかはらぬ春のかさしならまし

里梅　尊朝 青蓮院殿
色も香もかはらぬ春のよゝをへて梅さく里はゆたかにそすむ

行路柳　雅朝 伯三位
するとをくゆくみちのへの春風におらぬもなひくそての青柳

二月餘寒　昌叱
あら玉のはるも半にうつる日の空さへ寒き朝あらしかな

春曉月　常胤 妙法院殿
春の夜のあかぬなかめの有明に千々の秋をや待らきらまし

歸鴈知春　邦房 伏見殿
久かたの雲のうへよりのとかなる時をわすれす歸る鴈かな

凌霞尋花　慶親 中山中將

咲ぬへき木縫とをき花にきてかすみをわくる春の山ふみ

初花　道　澄

百年の春もみよとやあかさりしいろ香かはらて花のさくらん

翫花　内　基

なれ〳〵て春やかそへむ咲花はみても見まくのほしき色香に

花主　智　仁

うつし植て花のあるしと今年より幾代の春かかけてかさゝん

禁中花　龍　山

かけ高く色にさくらのなみ木こそむへも雲井の花と見ゆらめ

社頭花　晴　豊

祈るてふ神のいかきにいく春もおひせぬ花のかけそうれしき

花忘老　雅　春

花みつゝ老をわするゝ心よりなをたのまるゝ身の向後哉

歎冬露　爲　親

河水のなかれもとをくかほるらしつゆおちそふるきしの山吹

池杜若　宗　澄

幾とせもかはらぬやとのいけ水にさきて色こきかきつはた哉

藤埋松　雅　枝

緑なるこすゑをこゆる藤浪のはなにそこもる松かせのこゑ

殘春　昭　實

雲とりはよし歸るとも餘波ある春のひかりは千世もかはらし

竹亭夏来　重　定

うへをきし砌ふかむる呉竹のなひくみとりや夏にそふらん

新樹朝風　玄　仍

軒ちかき木々のわか葉はふく風もみとりに明るあさほらけ哉

聞郭公　信　房

うたゝねのさむる枕の明ほのに聲めつらしきほとゝきすかな

採早苗　經　遠

岡のへや生そふ松のした水のみとりをわけてさなへとる也

苅菖蒲　家　雅

かり運ふ今日の菖蒲の長き根やつきせぬ代々のためし成らん

五月雨晴　總　光

まきあくるこすの外面の山の端も雲間にみえてはるゝ五月雨

閑庭螢　兼　見

うへしより千代や經にけん橘のにほひをさそふ庭の夕かせ

樗諸家　義　演

すゑ遠くなをもさかへん直なる御代にあふちの花のみさかりは

夏月　道　勝

詠つゝやすらふ袖にあかす猶なつをわするゝ月の下みち

連夜照明　公　遠

明はのや端山の月のおり〳〵をいく度かへてともしさす覽

鵜河　資　勝

鵜かひ舟かゝりたきつゝくたすにや闇もたとらぬ宇治の河波

夏草　忠業九條殿御方御所

朝ことにみとりふかむる夏草にこすゑの色やわかれさるらん

池蓮　覺圓竹中宮門跡殿

をきあへぬ蓮の露の白玉の月にひかりをそふる池水

夕顏　元仲五辻

百草にひとりひらけて夕顏のおりにあひぬる花の色かな

納涼水　基任園少將

涼しやと友をさそひて夕〳〵むすふ岩井の水はたえせし

立秋朝　氏成水無瀨中納言

から衣かさねてやみんけさよりの三十を三の秋のはしめに

待七夕　資胤中御門前參議

年ことにけふのこよひをまつ程やさそな久しき星あひのそら

織女契久　賴國大炊御門三位中將

天河とし に一夜をいつよりかちきりてたえぬあふ瀨なるらん

七夕後朝　秀直富小路

立歸るけさよりは又七夕のたえぬちきりの秋やまつらし

荻知秋　敎遠山科侍從

秋のこゑ先あらはれて昨日けふのきはの荻にかせわたるらん

萩漸盛　秀以羽柴侍從

釣簾のとにうち出てみれは村萩のきのふより猶けさそ咲そふ

風前薄　重保庭田大納言

咲そふる千種の中にわきてしもまねくおはなの袖の秋かせ

女郞花　季持飛鳥井中納言

咲そふや玉をかさしのをみなへし色めく野への露のあけほの

原苅萱　兼勝廣橋中納言

暮ぬれはふもとのはなの秋かせにみたれにけらし露の苅萱

秋田　時慶西洞院三位

するとみき田のもの原の稻葉より秋に色なるなみやたつらん

夕虫　公盛轉法輪三條

いく秋もかきりはあらし夕暮の千種にやとる松むしのこゑ

夜虫　兼成水無瀨中將

行末もかきりはあらし九重やいく十かへりの松むしの聲

曉鹿　有廣六條

月影は猶あり明の長きよにあかすも鹿の聲を聞哉

野鶉　範遠高倉侍從

秋とたにうつらの床も眞萩はらさくてふ野邊の花にまかせん

初鴈成字　實久德大寺

秋風の雲間にみゆる玉つさやとわたるそらの初かりのこゑ

堤上霧　實益西園寺

行水のかきりもあらす今朝はなを野さわのつゝみ霧深くして

月多秋友　季秀正親町中納言

かはらすも猶いく秋か友なはんめてこし月のなれ〳〵し袖

關月　季　康（正親町少將）

あきらけき月のよな〳〵關の戶もさゝぬそしるき人の行かひ

江月　充　房（萬里小路）

名にしおふなには入江の月も今猶久かたの空にすむらん

湖月　宗　滿（松木中納言）

なみの上のあかぬなかめの月かけに松そ名たかき志賀の浦風

終夜月　基　福（園）

みる〳〵もなかき夜あかぬ月にこそ千代萬世の秋をちきらめ

隣擣衣　慶　志（祭主）

こゝろある隣なりけりぬる程はうちとたえたるさ夜衣かな

翫菊花　光　豐（勸修寺）

詠あかぬ籬のきくの末葉まて千とせの秋を猶やちきらん

嶺紅葉　雅　賢（飛鳥井侍從）

しくれつるみねは夕日の影に猶わきて紅葉のふかき色かな

山路秋道　實　條（三條西）

秋とても紅葉をよそのときは山ふみ分つゝや行ゑいそかん

初冬時雨　資　淳（藤原宮內權大輔）

冬のきて空いく廻りしくるとも千とせの松の色はかはらし

落葉帶霜　重　通（庭田中納言）

限なくつもる木の葉はちりひちの山とやならん霜のあけかた

寒夜月　淳　光（柳原大納言）

寒き夜も月におてつゝ久方のそらをあふきて萬代やへん

湖上氷　清泉季賢

にほの海や氷に波はおさまりて松に音するしかの浦風

湖水鳥　景　敦

あた浪もたゝぬ湖とや鴛鴨のみなれて床をはなれさるらん

濱千鳥　基　久（持明院侍從）

なみの音もたかしの濱の鹽風にたちさはきてやちとり鳴らん

鷹狩日暮　信　良

暮るまておへりもやらす末遠きかた野のみのゝあかぬ狩はゝ

林神樂　實　顯（日野侍從）

をのつからふかき林の木のまより聲たかゝれやうたふ榊葉

庭雪厭人　永　孝（高倉右衛門督）

とふ人のこゝろあさくは花とふる雪の砌やふみもわけまし

逐日雪深　親　淵（中山大納言）

雪も日もつもるか上にあふきみん雲井にちかき山となるまて

遠炭竈　信　將

小野山やそこともみえぬ雪の內にけふりそしるきおくの炭竈

網代　隆　忠

風さゆるあしろの床の夜をかさね月をかたしく浪の音かな

向爐火　公　仲（正親町三條中納言）

冬こもるかきねの梅に待春とまつしる物やうつみ火の本

佛名　經　頼[illegible]

冬の夜もやゝ明方になりにけりほとけのお名をとなへ殘して

歲暮　光　廣烏丸

春ちかきほとしおもへは咲ぬへきはなにわするゝ年の暮かな

山館燈　頼　宣[illegible]

世々をふる山のすまゐのね覺をもなくさめけりな灯のかけ

山柳　時　慶[illegible]

分のほるうへよりうへも柳葉のなをいや高きあまの香久山

愛鶴　玄　以[illegible]法印

行衛まておなしよはひと馴きつる手かひの鶴の聲そふりせぬ

嶺椿　豐　家[illegible]大夫

春くれて木ふかき嶺も咲つゝくしら玉つはき知へにそ行

墟屋煙　友　[illegible]左衛門大夫

藻鹽やく煙はのけふり立のほるそらやとたえしすまの浦風

巖苔　經　[illegible]

うこきなき岩ほの上にむす苔の緑や千世の春にあはまし

田家雨　小槻孝亮　新藏人

笘をあらみ田面の庵にすむ民もときをたかへぬ雨はいとはす

旅泊夢　宗　治[illegible]

かり衣よをかさねても夢やたゝ都のかたのまれにみゆらん

名所松　紹　巴

三笠山さしてそちきる松かえのいま十かへりの春を待つゝ

祝言　秀　次關白

つかへきてみてるよはひも九重に猶かそへてよ百とせのくれ

【右長壽院內府九十賀和歌以圖書寮本校合】

續群書類從卷第四百三

和歌部卅八

高野山金剛三昧院短册 康永三年

賢俊
行末もめくりあはむとたかの山その暁を月にこそまて

な　尊氏
なにはつのみきはの波ものとかにていまは春へと霞たつなり

む　直義
むろのうちに光はみちて灯火のおのか影こそ又あまたなれ

さ
さためなきうき世の中と知なから猶あらましを思ふはかなさ

か　重茂
から衣うらにかけゝる玉をなとしらて年月まよひ来ぬ覧

ふ　爲明
ふたつなき佛のみちとしりなからわくる心にまよひそめてき

つ　顯氏
月にわか心のみちをまかすれはへたつとみつる雲もまよはす

せ　有範
せをはやみ行水よりも程なきはむなしくをくる月日なりけり

む　貴秀
生れあふみ法の道のうれしさよ人の身をたにうけかたき世に

し　師直
しら雪のつもる我身のつみをたに思もしらてふるそはかなき

む　行珍
むつの道めつるもしらて見る夢のさめぬや闇のうつゝ成らん

さ　頼春
さてもさは佛のかたみ殘しをきて今のよまても法はたえせす

り　尊氏

りやう山にときおく法のあるのみかしやりも佛の姿なりけり

な　直義

長き夜の月はしはしも曇らぬをねふりのうちの闇にそ有ける

む　尊氏

むら雨のおとはの山のほとゝきすなく一聲はまかはさりけり

さ　爲秀

さ月きて後はとおもひしほとゝきす今たに聲のあかすも有哉

か　行春

かりそめに雲かくれせし月影のあとをそてらす法のともし火

ふ　和氏

ふきつたふわしの山風いまゝても匂ひそたゝぬ法のはなふさ

つ　道惠

つもりきてうき老と成月もなをくもりなき代を賴ますはなし

せ　貞賴

せをせけは淵となるてふ山河のふかきみのりの水はにこらし

む　成藤

六の道いつかは出ん小車のわつかなる世に又むまれぬる

し　慶運

しなくにたつるみのりの位山のほりはてゝも我身なりけり

む　重茂

むすひける契の程もあらはれてさもきゝかたき法に逢ぬる

さ　實性

さとるへき心をほかにもとむるそやかてまよひの初なりける

り　爲明

りうくうに分ちおさめし玉のうちも空行月そみかきそへける

な　爲明

等閑にあらぬ敎をまよふ身はいつれのかとかやとりならまし

む　爲秀

むなしとて思すてぬるあたし身をうかふ心そありかほになす

さ　尊氏

さとりてはかはらし物をいかなれはやつ九つにときはおく覽

か

限なき御法の道をたつぬれはかたくもあらすやすからぬかな

ふ　賴春

ふくる夜の鶴のはやしの木のまもる月こそしはし雲隱れすれ

つ

つきもせぬうき世の闇もはれぬへし心の月のきよきひかりに

せ　行珍

せきの戸もさゝぬ昔の跡とめて又あふさかのみちはさはらし

む　直義

生れきてうけかたき身を受なから御法に入らぬ人そはかなき

し　蓮智

しくれつる雲ははれ行山風に木の葉やいとゝふりまさるらん
む　　　　道　惠

六十にはなれてもさらにめつらしき華洛の初雪の空
さ　　　　廣　秀

さま〳〵にうつりもて行心こそ物を追てふまよひなるらめ
り　　　　顯　氏

りやくには誰かもるへきをしなへて御法を聞ぬ人しなけれは
な　　　　有　範

存命ふる身にしあらすはうきをへて今明らけき時にあはめや
む　　　　賴　春

むかしよりつたふる法のはなふさの匂ひをそへしわしの山風
さ　　　　廣　秀

さたかなる色もすかたもなかりけり心といつる其名のみして
か　　　　尊　氏

かせさむみ雪氣になりてよひのまの時雨にもにぬ村雲のそら
ふ　　　　直　義

ふかゝらぬ世のとはりのそのまゝに心をもつも猶かたきかな
つ　　　　行　春

つたへ聞教の外のとはりは尋ねしよりそまよひそめける
せ　　　　和　氏

せめて今後のいほ年すきぬよにあふもかひある我身ともかな
む　　　　兼　好

むさしのや雪降積る道にたにまよひのはてはありとこそきけ
し

しつかなるあか月とに思かななかきねふりのさめぬ心を
む　　　　直　義

むかしいま猶ゆく末もまとにはたゝ時のまの思ひなりけり
さ　　　　成　藤

さとらんとおもふ心もかへりてはあやまりとなる法のみち哉
り　　　　頓　阿

龍宮にかくれんとも程とをしさそなみのりのよをまもるらん
な　　　　爲　秀

なれゆけは梅そうつろふ山さくらそむる心の色はまさりて
む　　　　顯　氏

むはたまの夢にかはらぬ世の中をうつゝとなにゝ心とむらむ
さ　　　　直　義

さてもわれたかちからにてをきふすと思そ法に入はしめなり
か　　　　貞　賴

かみかきにしらゆふかけてふる雪は幾代たえせぬ手向成らん
ふ　　　　尊　氏

ふりぬるに立かへりつる道なれはさはらすはこふみつき物哉
つ　　　　清　[illegible]

つゐにまた心の月のはれやせんしはしまよひてかゝるうき雲

せ　道　恵

瀬にたかき波おさまりて彼岸のよる邊たとらぬ法の舟人

む　尊　氏

むつの道にまよひそめしはこの法の心をしらぬこゝろなり鳬

し　重　茂

しなてるやかたおか山の昔よりくちせぬ法の花そさきける

む　頼　阿

むなしきも色をへたてぬとはりはこのみのりにそ顯れにける

さ　尊　氏

さきましる千草の花の色なから露さえかはるむさし野ゝはら

り　有　範

輪廻せしわか故郷のやみちにも月はもとよりすみける物を

な　和　氏

なに事もむくゐときけは後のよのためにみ法をちきりをく哉

む

むつの道迷ひは多くかはれともいつれも夢のうちとこそきけ

さ　爲　明

さのみやは此世なからにしつむへき浮木の龜の期つくすまて

か　直　義

かしこきと愚なるとそへたてなき心にてしる法にあらねは

ふ　有　範

ふけぬるかねふらてかへにむかふ夜の窓にきえゆく灯火の影

つ　尊　氏

つたへきてよゝにかはらぬくれ竹のすゑ葉ひさしき家の風哉

せ

せきわくるよものなかれの法の水末はひとつの海とこそきけ

む　貞　頼

むねのうちにすむともしらぬ程なれや空ゆく月にめてし心は

し　兼　好

しはの戸に獨すむよの月の影問人もなく指人もなし

む　行　春

むまれあふ契ありてやこのたひもかゝるみのりの道を聞らん

さ　直　義

さま〳〵の色やかたちを尋ぬれは鏡にうかふ影にそ有ける

り　爲　秀

理にそむく道とおもはゝ和歌浦や沈みても世をいかゝ渡らん

な　廣　秀

なかき夜のねふりのいつか驚ろきて夢なりけりと思あはせん

む　光　政

むらしくれ又めくりきていく度かおなしねさめに音をきく覧

さ　高　範

さてもとて我身の後を思ふにそしはしうき世の夢もさめける

か　道　惠

かけまくも賢き時の鳥そとや山ほとゝきすまつ名のる覽

ふ　爲　秀

ふけまさる名残を月におもはすは猶もくもらぬ影をみてまし

つ　直　義

津國のなにはの浦のよしあしは名のみかはりてひとつえけり

せ　尊　氏

せきもりもよひ〳〵ことにうちやねんおさまれる代に逢坂の山

む　實　性

むくひそと思ひしりぬる身のうさをなにゆへなけく心成らん

し　直　義

しつかなる夜のねさめにわか心いかになりぬとかへりみる哉

む　蓮　智

空しともありともいはゝ中〳〵にのりのまことを猶やへたてん

さ　慶　運

さとりとは我心そときくにこそをろかなる身は猶まよひけれ

り　兼　好

理即より究竟にいたる佛こそひとつ心の玉と見ゆらめ

な　行　珍

なか〳〵にをしへし後やとふ鳥のあとなき法に迷ひそめけむ

む　爲　明

むつのみちめくる子の身そを車ののりにあふへき便なりける

さ　淨　辨

さためなき夢の中にもなをみゆる夢やまことのこゝろ成らん

か　兼　好

かにゝほひ妙なる道にあらはれてみのりの花や春をつくらむ

ふ　慶　運

ふたつなき本のさとりをとく法の道はかた〳〵なとわかる覽

つ　頓　阿

つたへきて今みる玉やいにしへの鶴の林のはなの下つゆ

せ　爲　明

せめてもの惠とそ見る三國まてたきゝつきても殘すかたみは

む　頓　阿

むまれあふ契もふかく今も猶雪のみかほのなこりをそみる

し　尊　氏

しらさりし法にもあへはわたつ海の深き心をさとらさらめや

む　成　藤

むなしきは夢にうつゝのかはるとそ思わけしもまよひ成けり

さ　和　氏

さめぬると思ふはかりやへたつらん夢も心のほかのものかは

り　行　春

靈山の春のかすみに入月や其魂にめくりあはまし
な　浄辨
中〳〵に吹よはりてや山かせの雪になる夜はしつかなるらむ
む　實性
結ひをく契しなくはいかにしてかくあひかたき法にあはまし
さ　行春
さめぬれはうつゝと思ふ心こそ夢をもしらぬまよひなりけり
か　成藤
かゝける人もさすかに絶せねは代〳〵にかはらぬ法の燈
ふ　行珍
ふけにける我よもしらて老らくの傾く月をよそにやは見む
つ　實性
つたへきていまもあふけはわしの山面かけのこる有明の月
せ　直義
せきかぬる心の水のみなかみを尋ぬれは又露たにもなし
む　高範
むかしには猶立こへて君か代にかゝけそゝふる法のともし火
し　頓阿
しかのそのわしのたかねに入月ののこす光そ世をてらしける
む　尊氏
むなしきと思ふもそむきあると又いふもいよ〳〵たかふ之鬼

さとりとて外にもとむる心こそいとゝまよひの数をそへけれ
さ　蓮智
り　慶運
理智ふたつありとも何かわきていはんさとるも本の心一つを
な　道恵
なかめやる外山の花やさきぬらむひとむらかすむ嶺の白雲
む　慶運
むすふてに濁るはかりもなかりけり深きみ法の水のこゝろは
さ　行珍
さやかなる胸の鏡をいたつらにくもると見てや猶まよふらむ
か　實性
かくしつゝおなし迷のまゝならは幾度かうき性々をうくへき
ふ　廣秀
ふしておもひおきて思もかはらぬは心の法のつとめなりけり
つ　兼好
つたへきて聞もはつねを郭公み山にのみはなにたつぬ覧
せ　爲秀
せきの戸はさゝてふり行相坂のゆきにやしはし道をとつらん
む　和氏
むつの道にまよふ心をてらせとや光をのこすありのともし火
し　成藤

しらさりを闘すは如何に疑の上にてやかてさとりありとは

む　　　季行

村雨にはれ行跡のなかそらにこゝろもともにすめる月かけ

き　　　有範

さめぬよの夢路はいつを初にて今までまよふ身となりにけん

り　　　直義

靈山の付屬をいまもわすれねは君かまもりて法そ久しき

夫寶積經要品者示供養如來之眞理。著空寂自性之本元。寔是修行大乘之直路。證得菩提之通門也。是以新書一軸。奉納高野山金剛三昧院。以爲常住持經矣。是中迦葉會分。始則余自書之。其次夢窻國師書之。優婆離會分。則征夷大將軍書之。抑先年因或人感靈夢。以南無釋迦佛全身舍利之數字。各冠和歌之首句以詠之。旣而成軸矣。爲令彼詠歌之衆悉結良緣。寫眞文於其紙背者也。伏冀三十一字之綺語。契當三藐菩提。二十餘輩之歌人。成就二世願樂。兼施餘薰。普及三界。敬白。

康永三年十月八日

從三位行左兵衛督兼相摸守源朝臣直義

經旨和歌 號夢中和歌

亜相大夫征夷大將軍。一夕夢從姫君鍾愛殿贈一品大夫人。仙山大師現童。眞三面異瑞之相。短髮垂肩。手執優曇華一朶。仰視于天上。有一天神。不露其面於雲中。垂示五色之衣帶。姫君云。我亦欲上天而未能也。若得諸山有道行僧侶如昔日夢窻國師者。可作歌一百首資薦我。則可以生天上受快樂而無窮也。我今只在天龍龜頂塔上。往來遊戲。乃自作一歌。意謂五濁之世可厭。得世界如鏡之清平可樂也。其時夢中記云甚詳。亜相覺來。德夢之異。次日對等持禪寺住持南明永禪師。具言其事。禪師乃兼君得戒之師也。於是命禪律教諸山尊宿及諸高僧作歌。共成一百首。各以經旨爲題。初章以其夢窻國師之歌爲首歌。後又即金剛經。以新羅君十一月初九日三周年忌辰之次。專用資棹。以助冥福。卷成徵予爲序引。遂實書其事于首云。時文和四稔乙未歲十一月初三日。前南禪四明東陵永璵叙。

夢中和歌　　　贈一品大夫人

さりともとよをは守りの鏡にてくもらぬ影をいつまでもみん

世尊不說說迦葉不聞聞和歌　　　夢窻國師

さま〲にとけとも說ぬ言のはをききかすして聞人そすくなき

和歌詠金剛經法會因由分　　　南禪德見

金剛の初會のみのりのちからにや五障(啓蒙)一時にのそこなる哉

詠金剛般若波羅蜜經善現起請分和歌

比丘妙高

きはもなくすめる心を忘れてそ言葉の外の法はしらるゝ

詠金剛般若波羅密經大乘正宗分第三

比丘清琚

若菩薩有我相人相衆生相壽者相即非菩薩

うへもなき法の心に雲晴て空にかけすむ夜半の月哉

詠金剛般若波羅密經妙行無住分和歌

妙門玄九

たち歸る心なとめそ跡遠くわけ〔題缺〕入法の道芝の露

詠金剛般若波羅密經妙理實見分和歌

沙門正智

凡所有相皆是虚妄若見諸相非〔相歟〕相即見如來

春秋に花も紅葉も色かへて山こそ山のすかた之けれ

詠金剛經正信希有分和歌

比丘曇生

法尚應捨何況非法

よしあしと心とむれはつの國のなにはの事も迷ひとそきく

詠金剛經無得無說分和歌

釋長英

雲晴て月影淸き冬のよにをとさへ寒き松風そ吹

詠金剛經依法出生分倭歌

沙門景仙

爲他人說其福勝彼

さきたちし人の爲にも法の道ときつくすにはしく物そなき

詠金剛經一相無相分和歌

沙門僧輝

人中最爲第一

ときをける禪りのうへの悟にてまたはもとむる道やなからん

詠金剛經莊嚴淨土分和歌

釋子宗古

應無所住而生其心

なき人の玉の行衞は知らねともさそな禪の道はたとらん

詠金剛經無爲福勝分和歌

建仁義天

七寶を沙界にみてゝ布施すとも般若一偈の福に及はし

詠金剛經尊重正教分和歌

釋宗友

われからの僞ならぬ教をはかろくも人の頼むものかは

詠金剛經如法受持分和歌

釋但令

心より外にしるへき法もなしたもつや人のまよひ成らん

詠金剛經離相寂滅分和歌

釋仁球

ありとみる憂よの夢の覺て後佛なきそまこと之ける

詠金剛經持經功德分和歌

釋義快

この法を聞にはいかゝ及へき數しらぬ身を日々にすつとも

詠金剛經能淨業障分倭歌

釋世燈

先のよにつくりし罪の消果て數しらぬみも佛とそなる

詠金剛經究竟無我分和歌

釋禪心

法の道まことに道もなき物を我身をわれと何おもひけん

詠金剛經一體同觀分和歌

釋言足

迷ひそとしる心こそさとりなれさとりとしるは迷ひなるへし
詠金剛經法界通化分倭歌　釋清樸
わかほとけ普く人を導ひきて夢にも法をとけと社きけ
詠金剛經離色離相分倭歌　釋普傳
宮城のゝ草はの末にをく露を玉かとみれははやこほれけり
非說所說分　一清
言の葉にとくへき法のあるならは佛をそしるとかとなりなん
無法可得分　東福一草頓首
心より外には法のなき物をもとめて得へき道あらんかも
文和乙未十月　日〔行者分也〕
淨心善行　三聖寺與淳
いさ淨きこゝろのまゝに行へは善あしのりの外ならぬかな
文和四年十月十九日
莊嚴藏院福智無比分　士昭
もろ〳〵の蘇迷盧の程の布施よりも般若をとくは猶増りけり
詠一首化無所化〔分歟〕　沙門玄起
落たきつ浪にたゝよふ水の泡も消ぬほとこそ玉はなすらめ
法身非相分　釋崇均
色をとめ聲を尋ねし夢覺てあけ行空にかゝる雲なし
無斷無滅〔分歟〕　龍淵子文頓首
男山源高きいはし水なかれはたへし千世をふるとも

謹承
將軍殿命詠一首　桑門玄悅頓首
不受不貪分
貪ふらすうけすといふもはかなしや本より物のなしと知なは
威儀寂靜分　桑門景甚
更にまたさるも來るもなき物を猶跡とひて何したふらん
一合相理〔[illegible]〕　風城景春
有といひなしと云名に迷ひきて夢のよに猶夢を社みれ
詠金剛般若波羅密經知見不生分　常在光院正日
あけくれといとなむ事のなきまゝに過る日數を惜まさりけり
謹詠金剛經應化非眞分一切有爲法偈意和歌　釋周澤拜献
智惠の海むつの檝の法の舟にうかひて岸にいたる旅人
妙法蓮華經序品第一
詠序品和歌　輔
鷲の山法のむしろに散花の匂ひは今もかはらさらなん
詠法華經方便品和歌　　傳園
若有聞法者无一不成佛
鐘のをとの聞ゆる里はむは玉の夢路に迷ふ人やなからん
詠譬喩品倭歌　沙門高嵐
白雲のかゝる高ねのなかりせはなにゝか花の色をたとゑん

詠信解品和歌　亮性
止宿草菴
ともすれは心そとまるむすひ置草の庵のかりのやとりに

詠藥草喩品和歌　學與
ひとつ雨になへて草木のうるふこと法の惠をうくるもろ人

詠授記品和歌　祐助
宿世因縁吾今當說
いにしへに結ひ置ける契ともけふ岩代の松に社しれ

詠化城喩品倭歌　准三后道昭
行すゑの遠きに身をは休むとも心とゝむなかりのやとりに

詠法華經和歌　前大僧正增仁
五百弟子授記品
をしへけるそのまゝなれは嬉しさの同し心におほき友哉

詠人記品和歌　前大僧正賢俊
空晴てつらなる星の數〳〵にひかりをみかくよはの秋風

詠法師品倭歌　妙友
余所にきく花に紛れぬ花の香に吹やよしのゝ山の春風

詠寶塔品和歌　中樹
たて置しもとの誓のふかけれは寶のさとそ今もひらくる

詠提婆品和歌　祇園
かさねこしさとりもおほき雲霧を月に殘さぬ鷲のやま風

詠勸持品[illegible]倭歌　法堯
皆人のをしへをうくる其中に獨はいかゝ數にもるへき

詠安樂行品[illegible]倭歌　沙門惠鎭
跡をとふ心のやみのしるへとや夢にも法の道をつくらん

詠涌出品和歌　信海
如何なれやまた年も經ぬ鶴の子の親より髪の老てきこゆる

詠壽量品和歌　沙門下生
今もすむ月としらてやはかなくも入にし山を恨みきぬらん

詠分別功德品和歌　房仙
かきりなく齡久しき惠みにて猶行末もいくちよかへん

詠隨喜功德品和歌　行盛
きかさらん人にたへなる法の花ありと傳へよいその數迄

詠法師功德品和歌　周詮
色〳〵にみるも匂ふも類ひなき法の花こそしるへ也けれ

詠常不輕品和歌　僧景海拜首
朝日さす光に花の色みへて匂ひを送る春の山風

詠囑累品和歌　希雄
かけしけき鷲の高根の木のもとに絕ぬみ法を聞そ嬉しき

詠藥王菩薩品和歌　清視
玉くしけ二つのひちを燒て社法の爲には身をは捨しか

詠妙音品現一切色身和歌　性英拜上

十寸鏡くもらぬまゝに照すそよもとより色のあるとおもふな

詠普門品和歌　參議左中將義詮

けさは猶天の戸明て出る日もあきらけき影と世を照すこ

詠陀羅尼品和歌　沙門寛尊

法の師を守らん道のたかふたにあさくはあらぬ罪と社きけ

詠妙莊嚴王品和歌　不　傳

いにしへの跡ある法のそのまゝにみへさる夢の末もたのもし

勸發品　靈　致

つとめこしたへなる法に罪消て普賢彌勒の友となる哉

詠無量義經和歌　前眞如明千和南

はかりなきくもゐにかすむ芳野山花の道をは我そふみける

詠普賢經觀心無心法不住法倭歌　沙門慈永

照しみし心の鏡清けれは夢も現もおなし面影

般若心經　權僧正範緣

なしと問物を何そと尋ぬれはありかほにみる心之なり

詠阿彌陀經和歌　淨　阿

說誠實言

佛の言の葉ならぬことの葉と皆數〳〵にとく御法かな

首楞嚴經卷第一（憍陳）

謹詠憍陳那聲塵得入和歌　妙勵拜呈

出初し御法の聲をしるへにてもとの都にかへる旅人

謹詠優波尼沙陀色塵得入和歌　妙葩主臣

さく花の色より深く尋いる鷲のみ山の花そうへなき

謹詠香嚴童子香塵得入和歌　契鐘拜呈

木にもあらす火よりも出す是や此絕ぬ烟の匂ひなるらん

謹詠藥王藥上味塵得入和歌　彌講拜呈

ありなしの味もなきあちはひは心の外の心にそしる

謹詠跋陀婆羅觸塵得入和歌　周立拜上

洗ふへきあかもなしとは身にふるゝ水より深く悟りこそいれ

詠摩訶迦葉法因爲上倭歌　沙門契恩

みても猶おられぬ花の面影は人の心や種となるらん

謹詠阿那律陀眼根得入和歌　周祚拜上

日によらぬ光そ猶も照しける天津空よりよもつ國まて

謹詠周利槃特鼻根得入倭歌　妙演拜首

花を觀ひかすのそふにしられけり風のとかなる春にあふとは

謹詠憍梵鉢提舌根得入和歌　祖令惶恐

籠いつる鳥やさとりの山こえてをしへの外の法をとくらん

同畢陵迦婆蹉身根得入倭歌　周楨拜上

よしあしの身は難波江の捨舟を擢のさすにそこきて行なる

詠須菩提圓通意得入和歌　志　玄

圓通にいりける道をとふ時は高根の外のかとはなかりき

詠舍利弗圓通眼識得入和歌　契　深

むかしより心にみても淸けれは眼にうるももとさはりなし

詠普賢菩薩圓通耳識得入和歌　善　均

ふかぬ間もかはらさりけり松の風聞とおもひし心なけれは

詠彌陀羅難陀圓通鼻識得入和歌　紹　榮

結ひける氷もとけてしき浪のしらゆふはなによるみきはかた

詠富樓那圓通舌識得入和歌　妙　蔡

言の葉のさはりなきにそ知れけるまとの道の舌てとかぬを

詠優波離圓通身識得入和歌　蓋　芳

身を悟るさとりの外に尋ぬへき心ありとはなにおもひけん

謹詠大目乾連意識得入和歌　昌侊拜上

さはりなき心はたかき望月の露にもかけをやとす秋の夜

謹詠烏芻瑟摩火大得入和歌　周皎頓首

大方の薪にあらてもゆる火や水にも消ぬほのをなるらん

冬日首楞嚴經持地菩薩圓通同詠倭歌　正二位源尊氏

我心すなほにもてはをのつから御法の道にかなふえけり

謹詠月光童子水大得入倭歌　周幸拜上

土や火と六にかはらぬみなかみはいつも絕せぬ流之けり

敬詠琉璃光法王子圓通風大得入和歌　西禪良椿悚息

のとかなる日影に花は咲初て匂ひもふかくわたる春風

同虛空藏菩薩圓通空大得入和歌　良玉悚息

あまねくもくもらぬかけと照す之あくるもしらぬ秋のよの月

謹詠彌勒菩薩唯心識觀章大和歌　周蔡拜呈

よろつたゝ心としれる道よりそよを救ふへきくらゐにもいる

同大勢至菩薩念佛三昧根大和歌　得珹拜呈

今そしる思ひそめにし心より外に觀へき佛なしとは

同觀音菩薩耳根得入和歌　天龍光祚頓首

聲をみな娑婆のをしへの姿とは三摩地の月にむかひてそみる

圓覺了義

詠圓覺經文殊師利菩薩章應敎和歌　前惠日山主至孝

いにしへをまなひて跡を尋ぬらし悟りの月のあらたなるらん

普賢菩薩　萬壽竺堂

山の名も高根を出る月かけは賢き人の夢に社いれ

文和四年十月十五日

普眼菩薩　萬壽寺本慶

眞木檜原その下草の露迄は普き月の影もやとらす

文和四季十月十五日

金剛藏菩薩　同　得　僖

山たかみおしみかたきは咲花の匂ひふきとる嶺の松風

文和四年十月十五日

詠圓覺經彌勒菩薩章五性差別二障勤斷和歌

眞如住持比丘興志

五しなに迷ふ姿もあらしかし二つの障なきみのりには

詠圓覺經淸淨惠菩薩章修多羅敎如標月指和歌　沙門惠廸

まとかなる心の中にすむ時はをしへの外の月を社みれ

詠圓覺經威德自在菩薩章出生如來與一切法倭歌　周鑑

佛をも法をも出たすをしへをはまとかに悟る心にそしる

詠圓覺經辨音菩薩章二十五倫倭歌　沙門得昭

二十五のをしへの道はおほけれとさとれはひとつ心之けり

詠圓覺經淨諸業障菩薩章應敎和歌　安國寺沙門鍐彌

もとよりもさふる物なき心社淸きさとりの宮古之けれ

詠圓覺經普覺菩薩章應敎和歌　沙門祐巖

我ひとゝへたつる心捨はてゝともにたゝしき道に入ぬる

詠圓覺經圓覺菩薩章應敎倭歌　桑門呂文

やすくゐる御法の日數夏を經て月まとかなる秋の空かな

詠賢善首菩薩章　普紹

數しらぬ水のなかれはおほけれと同し光をわかつ月かけ

中院也足御所持之本申下令書寫者也。

心敬僧都十躰和歌　芝草詠歌内次第不同

有心體

立春

今朝はまたかすまぬ山も昨日より遠き計を春のいろ哉

山霞

朝かすみ色こきかたをしるへにて隔てし山も見えぬ春哉

簷梅

われなくは忍の軒の梅花ひとりにほはん露そかなしき

春月

面かけは春やむかしの空なから我か身一にかすむ月かな

古郷花

深夜の軒の忍に露落て花にかすめる有明の月

野花

おもひ出て去年みし人をあたしのゝ夕の風に花も散らん

雨中花

ぬれぬたゝ身を知雨の櫻かり又立なれん花の影かは

落花

なきをこひあるをすさむる世間の心を知て花もちるらん

菖蒲

かけ捨しみすの葵はかれはてゝあやめも匂袖の朝露

古郷橘

なき玉や古にし宿に歸らん花橘に夕風そ吹く

螢

螢消軒の忍の下露は光そひ行しのゝめの空

露

おろかにそかゝる浮身にたくへにし露は草はの宿もあるよに

月

扨もよに誰かは老とならさらんめてすはつらしよな〳〵の月

秋夕

世は色もおとろへそ行天人のうれへやくたる秋の夕暮

稲妻

槿をつれなき花とみつるかなしのゝめ渡るいな妻のかけ

古屋月

宿ふかき蓬かつゆに月深てむなし車に殘る俤

山月

まてしはし我俤のあらましをすゝむる山にかゝる月かけ

紅葉

薄ちる枯野の上の朝霧に殘るもうすき嶺の紅葉ゝ

欵冬

見るまゝに花の外さへ山吹のいろに成行夕暮の宿

暮秋月

秋の行心もさそな薄ちるかれ野の上にほそき月影

暮秋風

秋のいろや物思ふ宿に殘らん我袖したふ木からしのかせ

古郷時雨

此夜よりふりぬるやとの小夜時雨うき身を苔の下にきく哉

霜夜鐘

白妙の霜はいつもの聲深て霜の夢にさゆる鐘哉

閑山雪

思絶またしとすれは鳥たにも聲せぬ雪の夕暮の山

旅人渡橋

たのみしは世を早川の浮橋に獨たゝよふ跡のたひ人

曉遠情

よゝの夢とふは心の末消て燈あをきあかつきの雨

行路市

待人の市の爪木の一束命かくへき歸さともなし

幽玄體

早春

朝ほらけ花鶯の面影によはうちかすみ冬やきぬらん

關路霞

關路ゆくをちかた人に霞けり袖吹こゆるすまの浦風

尋花

櫻かり雨は降きてけふのみと思ふ名殘にぬるゝ袖哉

水鶏

山里は水のひゞきもかすかなる杉まの月に水鶏鳴也

蚊遣火

暮かゝる末野の家居うち煙り蚊遣に霞森の一むら

荻

露なからむすほゝれぬる夕暮や心も庭の荻の上かせ

暁虫

夜半の虫聲の千種の色なから花に成行しのゝめの庭

暮山鹿

夕暮は遠さかり行山のはを軒はにかへすさをしかのこゑ

鴫

小山田や暁さむみなく鴫の羽かき曇月は時雨て

野虫

七夕の手にもをとらす野への虫花色衣誰にをるらん

初冬

神な月都の宿も山深み木葉音する夕ぐれの空

落葉

袖の苔軒の忍も埋て紅葉にあれぬ宿のやまかせ

霰

こほれつる霰はすきて深よに獨音する軒の松かせ

江殘鴈

深にけりかたふく月も遠きえの氷に落る鴈の一こゑ

爐火煙

埋火の煙や閨に殘らん朧にうつる袖の月かけ

炭竈

山賤の炭焼嶺の松の雪煙にとけておつる露哉

冬戀

おき出る夢もかれ野の衣〳〵に面影さむき山のはの月

不逢戀

きぬ〳〵にのこるはつらき物とたに月をもみをもいつか恨ん

海邊松

橋立や木末を遠きくもてにて浦風わたる松のむら立

面白體

鶯

雪はみなこゑよりとけて鶯の色に草木もなれる春哉

夜梅

心なき鳥そ鶯よもすからにほへる梅の花にねぬらん

春曙

ふくる夜の月に四のを霞むえもしかしなにはの春の曙

旅宿花

ふけ臥又やねさらん霞むよの月の手枕花の假莚

寄花述懐

ふけあらしちらすはかりの世中に吹理の花やなからん

蛙

蛙なく田のもの小草末よはみこゑに若葉の露も亂て

郭公

今夜きく山時鳥忘れすや去年の初音の末のかねこと

夏月

夏そうき心つくしの木間たに思ひたえたる月の山さと

河上月

木間もる月に河音小夜更て舟に人なき宇治の山かせ

古屋月

しきわひぬ淺茅か露に宿は荒て跡も枕も野への月かけ

野分

朝またき虫に露かふ草もなし夜半の野分の庭に亂て

旅宿時雨

深夜の夢の故郷荒はてゝ旅ねの山にふる時雨哉

閑庭霜

荻のはそ獨落ぬる霜の庭深行月は風もそよかす

月前雪

雪をもる外山の杪下折て待あへす出る月のさやけさ

樵路日暮

薪とるをちの山人いそくなり夕暮はこふ鐘のひゝきに

山家水

我ためや筧にうけて松の葉を苔の庵にはこふ山水

麗體

海路霞

須磨のうらや心盡に船出せし昔も遠く霞む浪かな

山家鶯

春とたに人は音せぬ山陰の竹の戸あくる鶯のこゑ

谷殘雪

人のみか谷の柴橋春の來る跡たにみえすふれるしら雪

夏山雲

此夕山のは青き五月雨のなこり涼しき月の薄雲

雨後蟬

むら雨は杉のはくもる山本の夕日によはき日暮のこゑ

夕顔

尋しよなにそは花とうちわたす遠方人にしろくいとはす

月似雪

おれ臥も雪やはをもき野分せし草木の上の秋の月影

山路紅葉

都まて袖に時雨よ夕日かけ紅葉こき入て歸さの山

湖千鳥

おきつなみ高島めくる聲深てかち野の月に千鳥啼之

江殘鴈

ふゝきするこしの遠山越侘てなこえにおつる鴈の一行

爐火似春

深行は白成行うつみひに佛むかふ春のあは雪

深夜神樂

ふくるよの霜にもかれす葵庭ひやぬるき森の下草

逢夜待戀

つれなしな幾三日月にうつるらん契しまゝの在明のかけ

忍逢戀

ほのかなる眉の匂ひもよそめうき閨にそむくる灯のかけ

寄枕戀

ほのかたの身にたにとをる秋風を古枕にたれかきくらん

江鷺

うちそゝき水もゆるかすふる雨の細えに霞む鷺の一連

暮山雲

獨りのみ苔の扉に入くるも雲は音せぬ夕くれのやま

遠村烟

たえ〳〵の煙も水も日くるれはむすほゝれ行遠の山本

思往事

手を折て逢見し人も夜移かそへむとすれは明るしのゝめ

釋敎

人たえて草のみふかくなるときく鶉の闕生やのりの故郷

長高體

山霞

春きてやわかもろこしに歸らん霞もたゆるみよしのゝ山

深夜梅

ふかきよの梅の匂ひに夢さめてこす卷あへぬ袖の春風

夏草露

山里の夕かけ草に露おちてこぬ秋ふかき日くらしのこゑ

曉露

よかれ行蓬かすゑの露寒み在明の庭や月の故郷

河邊鹿

淡路かた山をはるかにさをしかの鳴音淸けつ秋の舟人

尾上霞

我庵（宿イ）の軒の杉葉末くちて傳ふあられのこゑそ短き

山冬月

深山かせ木葉吹まく聲絶て苔のむしろに月そ深行

古山猿

よそふかき梢より西に月落て横川の嶺のさるの一こゑ

窓竹

吹まくもむなしき窓のよゝの文見る人なれや竹の下かせ

濃體

春田

いろ〳〵にうつろふ小草花に先秋にはかへす春のあら小田

螢

袖ちかく入くる螢をちかたに歸羽早きこすゑはたかせ

寄燭戀

まち深て出ればねやに影そゝふ涙にふかしよはの燈

撫民體

花有遷

ためし變此世に咲て末のつゆ本の雫と花そおち行

閑居花

うちむれて尋し人の音もなし花と二人のゆふ暮の山

雉子（を脱歟）

きゝす臥藪なやきそ山賤も子をはかなしむ心あるらん

萩露

我そおく雲ゐのかりの涙ともまたあへぬやとの萩の上露

鹿

わかよをはかけてもしらす山賤の鹿驚すこゑそはかなき

山家

山ふかみ苔路を誰か通ふらんかきねをこえてしとゝ鳴之

山家風

夕まくれ軒はの山そ色みえぬ松はあらしのこゑに殘て

披書知昔

まき捨し内外の文に住むしをはらふ袂に露そこほるゝ

一節體

田霧

山里は梢も見えぬ朝霧に稻葉を殘すしかの一こゑ

薄風

夕まくれ木下薄すみそめの袖とふいろの秋かせそ吹

小鷹狩

誰か鳥の跡とも分す荻のはに付てそ過る秋のかり人

秋田家

山賤のさゝのかりふきあれはてゝ袖にいなはの秋風そ吹

落葉

絕まなくさそふかせよりたゝ一心とおつる山そ閑き

霰

よな寒みさはくときけは村とりはねくらの竹にちる霰哉

草庵雨

おき出て我もり捨る夜半もうし雨を主の草のかり庵

尊古體

古寺花

玉はゝき手にたにとるな庭の雨に花散しけるしかの山かせ

秋田風

雁鳴て秋風さむみわかやとの山田の柳したはちるころ

山家冬月

山里はやもめからすの鳴こゑに霜よの月の影をしる哉

（後撰）旅力體

靜對花

桐の葉の砌にもろき秋はあれと夕の苔に花落時

山路落花

はし鷹の鈴香の山ち花そちるおを引雉の跡みゆる迄

盧橘年久

花も我よはひを經てにほふらん宿は久しき軒の橘

夏日

照にけり夏の末のゝ朝日影草葉な夜のつゆものこさて

夕雁

かり鳴て夕浪さむみわたなへや大川のへの洲ちるころ

月前風

夕されは嵐をふくみ月を吐秋の高嶺の松寒して

述懐

我そこの鳥にもあらぬ鶴のとく悲きすみそめの袖

祝言

君そみんまれに天人袖ふるゝいはほもさゝれ石と成よは

〔右十躰和歌以心敬法師集校合〕

續群書類從卷第四百四

和歌部三十九

日本紀竟宴和歌

日本紀竟宴各分史得大鷦鷯天皇二首

皇太后宮大夫藤原朝臣國經

氣不利奈岐也度遠女玖美之須女良己曾也曾度世阿末利玖爾之
良之氣禮

けふりなきやとをめくみしすめらこそやそとせあまりくにし
らしけれ

於保散々岐多加都乃美乃安女毛留遠布可世奴古度乎多美波
與呂古布

おほさゝきたかつのみやのあめもるをふかせぬことをたみは
よろこふ

日本紀竟宴和歌

日本紀竟宴各分史得神日本磐余彦天皇幷序

從五位下大内記兼周防權介三統宿禰理平

日本書紀者一品舍人親王從四位下太朝臣安滿等奉　勅所撰也。神代上下紀。帝世廿八紀。惣三十卷。筆削成功。其勤至矣。此紀元慶歲以來二十餘年倚席不講。時人竊歎師說將墮。甲子歲降　綸旨。令大學頭藤大夫説之。大夫下惠之間上口而荅。畢前備之干矛。驟依生之耳目。況亦散而無倦。勸以傾懷。始於四年秋八月廿一日。終於六年冬十月廿二日。即閏十二月十七日。聊屈師禮以成竟宴。于時在朝公卿大夫莫不畢會焉。數巡酒後。人耳熱。宜歌舊史各述緣情。其詞云。

渡飛加氣留阿麻能伊波布禰多都禰呂蘇阿岐都志麻珥波美野波
志迷勢留

とひかけるあまのいはふねたつねてそあきつしまにはみやは
しめせる

このすめらのみことたきしみゝのみこと。ゝし卅五歳なるときのたまはく。あかあまつみおやたゝしきみちをおこなひて。このにしのほとりをしろしめすそのゝちはるかなるくにには。なほみうつくしみにうるほはぬかことくにして。むら〳〵のきみもあひきしろへり。またしほつゝのおほなのいひしには。これよりひむかしにあまのいはふねにのりてとひくたれるものあり。よきくにありと。あれそこにはしめてみやつくりして。あまつひつきをひろめむ。これあめのしたのもなかなるへし。みこたちこたへたまはく。ことわりなりと。そのとしすめらいくさをひきゐて。ひむかしをうちたまへり。またこのすめらみこといてましてをかにのほりてのたまはく。このくにのすかたはなほあきつのとなめせるかことくもあるかなと。これよりはしめてあきつしまのなありといへり。あきつはむしのなゝるへし。

得國常立尊　従五位下守大學頭藤原朝臣春海

苫芽道邪能幾佐斯裳度保遅羅須阿麻都比津機能波志米度母弊波

あしかひのなみのきさしもとほからすあまつひつきのはしめともへは

あめつちひらくるはしめ。うかひたゝよへるなかに。ひとつのものあり。かたちあしかひのとくにして。かみとなれり。これをくにとこたちのみことゝまうす。かみのよのはしめなり。あしかひはあしのつのくめるかたちなるへし。

得日臣命二首　學生藤子従八位下葛井宿禰清鹽

伊佐遠志久多陀斯岐彌知乃於牟迦斯佐斗弖曾和我那毛岐徴波多末比

いさをしくたゝしきみちのおむかしさとてそわかなもきみはたまひし

かみやまといはれひこの天皇。いくさをひきゐて。うちつくにをしつめんとて。おもむきたまふに。やまのうちさかしくして。ゆくへきみちもしらて。なけきたまふよのゆめに。あまてるおほむかみのたまはく。われやたからすをやらむ。みちひきとせよと。さてからすそらよりとひくたれり。すめらゆめにかなへることをよろこひたまふときに。ひのおみのみことつはものをひきゐて。からすのむかふままにあふきゆく。すめらほめてのたまはく。なむちいさをしくしてよくみちひけり。なをあらためてみちのおみといはんといへり。

以婆禮比古美流伊米佐女弖耶馱賀羅須和禮斗曾府多理美知波

遠志弊祀

いはれひこみるいめさめてやたからすわれとそふたりみちはをしへし

かみにみえたり。

得天穗日命二首　學生藤孫從七位下矢田部宿禰公望

阿麼能褒臂傚彌農美飫野誄耶佐賀珥廼伊[illegible]濘儒波屢豫多蕩登胡楚耆鷄

あまのほひかみのみおやはやさかにのいほつすはるのたまとこそきけ

すさのをのみこと。みきのみつらにまつへる。いほつすはるといふたまを。みきのてにおいて。あまのほひのみことをうみたまへり。

倶婆幾微儺擧都夜謎豫斗底娜肆攤羅乃矩兒閉多智彌芝夷裝鳴那梨氣藍

くさきみなことやめよとてあしはらのくにへたちにしいさをなりけり

あまてるおほかみの。すへみまをあしはらのなかつくにのきみとせんとするときに。そのくにゝさはへなすあしきかみたちあり。またくさきみなものいふ。たかむすひのみこと。やほよろつのかみたちをつとへてとひたまはく。たれかかのなかつくにのあしきものをはらひにつかはすへき。みないはく。あまほひのみことこれかみのいさをたりと。さてつかはしてたいらけとらんといへり。

得櫛玉饒速日命二首　學生藤孫從七位上藤原朝臣忠紀

蘇朗美[illegible]通阿麼能伊[illegible]布然玖陀斯志波比志理廼儺[illegible]貪和多賀登傳那理

そらみつにあまのいはふねくたしゝはひしりのみよをわたさとてなり

かみやまといはれひこの天皇。なかすねひこをうちたまふときに。なかすねひこつかひをまたしていはく。むかしあまつかみのみこいてまして。あまのいはふねにのりてそらよりくたりませり。なをくしたまにきはやひのみことゝいふ。それをきみとしてつかへまつれり。いかてかあまつかみのみこふたはしらありて。ひとのところをうはへきと。すめらのゝたまはく。あまつかみのみこおほし。なむちかきみとするところまことならは。しるしものみせよ。なかすねひこ。あまのはゝやゆきらをたてまつれり。すめらみそなはしてのたまはく。まことなりけり。さてまたこれよりあまのはゝやゆきをつかはしてみせたまふに。なかすねひこあまつしるしをみて。つゝしみかしこま

るといへり。またにきはやひのみとのあまのいはふねにのりて。おほそらにめくりあるくゆへに。このくにをそらみつやまとのくにといへり。

毗佐迦陀能阿麻農婆波那能那賀理勢波阿羅布留比度袁那邇迦牟得末斯

ひさかたのあまのはゝやのなかりせはあらふるひとをなにかむけまし

かみにみえたり。

得玉辰爾

少内記從六位上藤原朝臣博文

譽能那阿尼吉美那賀利勢婆嘉羅須皤爾加集流古登皤々那禰幾爾奈麻志

よのなかにきみなかりせはからすはにかけることはゝなほきえなまし

こまよりからすのはにもしをかきてたてまつれり。そのはくろけれはしりかたきを。この玉辰爾はをいひのけにむして。しろききぬにおしうつして。わきまへよめり。

得事代主神

式部少丞正一位下藤原朝臣佐高

須女美萬仁夜志末手佐利豆奈美能宇倍乃阿波布事加幾邇多比爲須留可那

すめみまにやしまをさりてなみのうへのあをふしかきにたひゐするかな

あまてるおほかみ。すめみまをあしはらのなかつくにのきみたらしめんとして。かみたちをいつものくにゝつかはして。おほあなもちのかみをはらひしつめたまふに。おほあなもちのかみのいはく。わかこにとひて。かへりことまうさんとて。ことしろぬしのかみのみほのさきにいてゝつりするところに。つかひをくまのゝもろたふねにのせて。みことのりのかへりことまうさんことをとふに。ことしろぬしのいはく。わかかそさりまつるへしと。さてわたのなかに。やへのあをふしかきをつくりて。さりぬといへり。かそはちゝをいふ。ふしはしはをいふなるへし。

得思兼神

左大史正六位上兼行算博士阿保朝臣經覽

於蒙飛加禰多波賀利許度乎勢佐利勢波安萬能伊波度波飛羅氣佐良萬事

おもひかねたはかりことをせさりせはあまのいはとはひらけさらまし

あまてるおほかみ。すさのをのみことのしわさあちきなしとて。あまのいはやにいりて。いはとをとちてかくれます。ときにくにのうちとこやみにして。ひるよるのかはる

をもしらぬに。おもひかねのかみふかくおもひはかりて。とこよのなかなきのとりをあつめてなかせ。たちからをのかみをいはとのわきにたてたり。あまてるおほかみほそめにあけてみそなはす。たちからをのかみおほんかみのみてをたまはりて。ひきいたしたてまつれり。なかとみいむへのかみら。しりくへなはをひきわたしてまうさく。またなかへりましそといへり。

得天手力男命

外従五位下大外記阿刀宿禰春正

止己也美保多乃之支美與止奈利介留波安女多知加良乎多須介
安利介利

とこやみもたのしきみよとなりけるはあめたちからをたすけ
ありけり

おもひかねのかみのことは。かみに見えたり。

得猿田彦

刑部少輔従五位下紀朝臣淑望

比佐加多乃安萬乃也弊久毛不利和計天久多利之支美乎和禮曾
無加弊之

ひさかたのあまのやへくもふりわけてくたりしきみをわれそ
むかへし

あまてるおほかみのみこ。みつほのくにゝくたりまさむとするときに。さいはらひかへりまうさく。あまのやちまたにかみありと。おほむかみあまのうすめをつかはしてとはしめたまふに。ちまたのかみこたへていはく。あまてるおほかみのみこくたりますへしときゝて。むかへまちたてまつるなり。わかなをはさるたひこのかみといふと。あまのうすめかへりて。そのよしをまうすときに。すへみまあまのいはくらをおしはなち。あまのやへくもをいつのちわきにちわきてあまくたりますといへり。

得玉依姫

刑部大輔従五位下大江朝臣千古

四羅[illegible][illegible]彌多萬餘理毗咩能古志己登波奈[illegible]砂也[illegible]比[illegible]東末利
難理計武

しらなみにたまよりひめのこしことはなきさやつひにとまり
なりけん

たまよりひめはわたつみのむすめといへり。

得太玉命

諸陵頭従五位下物部宿禰安興

比佐嘉多能阿麻乃流呵美乎伊能留度曾要多抜須惠々彌奴佐波
志弖氣留

ひさかたのあまてるかみをいのるとそえたもすゑゝにぬさは
してける

日のかみあまのいはやにこもりますときに。あまのちこやのみこと。まさかきにゆふとりして。ふとたまのみことをしていのりまうさしむるに。ひのかみことはのうるはしきをきゝて。ほそめにいはとをあけてみそなはす。たちからをのかみ。そのわきにかくれさふらひておしあけしかは。ひのかみのひかりくにのうちにみちぬといへり。

得巴提便

從五位下守左兵衛權佐藤原朝臣忠房

多禮毋古能加奈之幾止支波美遠須天々東羅乃之多支留那毋多知奴倍之

たれもこのかなしきときはみをすてゝとらのしたきるなもたちぬへし

はすひくたらにつかひとして。かへりてまうさく。つかひにつかはされて。めこもろともにまかりしに。くたらのはまにひくれてとゝまれるに。わかこにはかにうせてゆけるところをしらす。そのよおほきにゆきふれり。あけてもとむるに。とらのつゝけるあとあり。やつかれかたなとりよろひきて。いはほのくきにたつねいたりて。いはへつゝしみてみことのりをうけて。このみちにたしなむことは。こをめくみておやのわさをつかしめんとなり。なんちもこをめくむことはおなし。こよひわかこうせにたり。いのちをうしなはんとをおちす。むくひせんとてきたれるなりと。とらくちをあひてくはんとす。はすひひたりのてしてとらのしたをとり。みきのてしてさしころして。かはをはいてかへれりといへり。

得段揚爾

從五位上博士兼備中權介惟宗朝臣具範

伊苑斗毛能布濔岐乎飛止波多耶也宇耶古禮乎无爾止曾度毛爾乃利止流

いつとものふみよむひとはたにやうにこれをむねとそともにのりとる

くたらより五經博士をたてまつりて。はかせ段楊爾にかへんとまうせれは。かへつかはすといへり。

得天萬豐日天皇

從五位上行少納言兼侍從播磨權介藤原朝臣眞上

乎須國乃能理多禮多末布於保美與波那爾波能那加良度己曾支己由禮

をすくにののりたれたまふおほみよはなにはのなからとこそきこゆれ

このすめらなにはのなからのとよさきにみやこうつりしたまへり。そのゝちつかさ〳〵をさため給へり。

得木兎宿爾

散位従五位上額田朝臣余似

都玖數久禰須女羅加美許弥那加倍世流許己呂波伎美乎伊波布
奈理氣利

つくすくねすめらかみ（皇子）こになかへせるこゝろはきみをいはふ
なりけり

おほさゝき天皇むまれますひ。つくらふやにとひいれり。そのあしたに。ほんたの天皇。大臣たけうちすくねをめしてのたまはく。これいかなるしるしぞ。こたへまうさく。よきしるしなり。きのふおのかつまこうむときに。さゝきうふやにとひいれり。これもあやしと。すめらのゝたまはく。わかこと大臣のこと。おなしひむまれて。ともにしるしあり。そのとりのなをかへて。みこをはおほさゝきの皇子といひ。大臣のこをはつくのすくねといひて。のちのよのしるしとせんといへり。

得土倉阿弥古　　前刑部大輔従五位上紀朝臣有世

阿彌波禮留安比古爾阿比天阿知支奈久四年之間解由無之

あみはれるあひこにあひてあちきなくよとせのあひたとくるよしなし

おほさゝきの天皇のみよに。つちくらのあひことりをとらへて。たてまつりてまうさく。つねにあみをはりてとりをとらふるに。かゝるをはえさりつと。すめらさけのきみをめしてとひたまふ。これなにとりぞ。こたへまうさく。このとりくたらにおほし。ならしえてとりをとらしむ。かのくにのひとこれをくちといふ。（和名十八種）すめらさけのきみにたまひて。かひならさしめたまふに。いくはくのほとをもへすして。をしかはゝをゝあしにつけて。ちいさきすゝををにつけて。たゝむきのうへにすへたてまつる。そのひすめらもすのゝにいでまして。あまたのきしをとらしめたまへり。これいまのたかなりといへり。

得保食神　　従五位上行神祇大副大中臣朝臣安則

宇介毛智能加美能知加良波伊津久佐能多那津毛能乎曾美與利
那志多留

うけもちのかみのちからはいつくさのたなつもの（穀）をそみより
なしたる

あまてるおほんかみ（天照太神）のたまはく。あしはらのなかつくに（葦原中國）にゝうけもちのかみ（保食神）あり。くにゝむかへはくちよりいひいて（自口出飯）。わた（海）にむかへは。はたのひろき（鰭廣）はたのさき（鰭狹）くちよりいて（自口出）。やま（山）にむかへは。けのあらき（毛麁）けのにこき（毛柔）くちよりいて（自口出）。そのかみ（其神）みうせてうしむま（化爲牛馬）となりて。またくさ〳〵のものをみよりいたすといへり。

得淳中倉太球敷天皇

正五位下守右中辨兼行勘解由次官藤原朝臣道明

嘉良須羽通黒毛見分奴玉津沙波君賀御世爾曾獣氣流

からすはにすみもみわかぬたまつさはきみかみよにそたてまつりける

王辰爾かよめるもし。このすめらのみよのことなり。

得天國排開廣庭天皇二首

従四位下行文章博士兼備中守三善朝臣淸行

保登計須羅徴迦斗加志胡美斯郎陀弊能那徴迦幾和計傳宜麻勢流母遠蔑

ほとけすらみかとかしこみしらたへのなみかきわけてきませるものを

このみかとのみよに。くたらのきみ。釋迦ほとけのかね（金銅）のみかた（像一軀）とはしら經論らをたてまつれり。

斗都惠阿米理夜都惠遠胡遊流多津能都麻幾美須佐米然婆於伊波傳奴弊志

とつゑあまりやつゑをこゆるたつのこまきみすさめねはおいはてぬへし

おなしみかとのおほんときに。やまとのくにいまきのこほり（今來郡）のまうせる。ひのくまのむらのひと（檜隈邑人）。たかとのにのほりて（登樓）のそむに。よきこまをみえたり（望見良駒）。かけをみてたかくいはえ（睨影高嘶）。かろくおもをこゆ。これきのくにのあまのにへおほせたるめむまのこなり（是紀伊國漁者負贄馬之子也）。かひとりてとしをへてのちつりもちゐるに（買取歷年後駆）。たつのことくにひゝりて。たにをこえわたること十八丈といへり（如龍翥越度）。そも〳〵このうまをめしもてあそふとみえたり。

得下照姫

従四位下行左中辨兼木工頭源朝臣當時

賀羅古呂裳下照媛能勢那古比曾阿女仁幾古遊留都留奈良奴禰波

からころもしたてるひめのせなこひそあめにきこゆるつるならぬねは

したてるひめはあめわかひこのめなり。そのを（夫）ふとうせたるとき。かなしふこゑそらにきこゆといへり。またからのふみに。つるさはにないてこゑそらにきこゆといへり。それをつらねいへるなるへし。

得伊弉諾尊

従四位上行式部大輔兼春宮亮備前守藤原朝臣菅根

阿遠宇那波羅伊散那祇美麗波於保夜志麻岐土蹟實能我蘇邇曾阿理氣流

あをうなはらいさなきみれはおほやしまさとゝものかそにそありける

いさなきのみこと。いさなみのみこと。あまのうきはしの

うへにたちて。ともにはからひてのたまはく。したつそこにくになからんやとて。あまのたまほこをさしくたしてさくるに。あをうなはらをえたり。そのほこのさきよりしたゝるしほ。こりてしまとなれり。これをおのころしまといふ。ふたりのかみこのしまにくたりまして。めをふと(夫婦)ゝなりて。くに／＼やつをうみいたしたり。それかなかにあはちをはえ(胞)とせり。おきさとをはふたこにむめり。これよりおほやしまのなははしまれる。そのつきにうみ。かは。やまをうみ。きのおやくゝのち。くさのおやかやのひめを。うみてのたまはく。われこれらをうみつ。あめのしたのきみをむまさらんやとて。ひのかみ。つきのかみをうむ。つきにひるこをうみて。みとせまてあしたゝすといへり。

得豐御炊屋姫天皇

右大辨從四位上兼行侍從備前守藤原朝臣忠平

堤乎波豐浦宮爾都幾曾女弖世々乎部奴禮止水波毛良佐須

つゝみをはとよらのみやにつきそめてよゝをへぬれとみつはもらさす

このすめらとよらのみやにしてくらゐにつきたまへり。おなしきおほむときに。聖德太子まうしたまはく。ひとのいのちはたつくることによる。たつくることは。いけのつゝみによる。もしひてりにあひぬれは。たみそらをうらみて。とかくにゝくたる。くに／＼にみことのりして。いけをつかしめんと。すめらよろこひたまひて。あまたのいけをつかしめてのち。あめのしたひてりのうれへなく。おほむたからゆたかなることありといへり。

得天命開別天皇

參議左大辨從四位上兼行讃岐權守紀朝臣長谷雄

佐々奈美乃與須留宇美倍爾美夜波志女與々爾多衣奴加支美加美乃知波

さゝなみのよするうみへにみやはしめよゝにたえぬかきみかみのちは

このみかとのみよむとせといふに。あふみのくにゝみやこうつりしたまへり。

得天渟中原瀛眞人天皇

參議正四位上行左兵衞督兼修理大夫近江權守在原朝臣友于

與古加波能安多利爾多知之久毛乎美弖阿麻乃比津支波衣弖之支美奈利

よこかはのあたりにたちしくもをみてあまのひつきはえてしきみなり

この天皇ことありてあつまにいりましゝとき。よこかはにいたりて。くろきくものひろさとつゑあまりなるか。そらにわたれるあり。すめらあやしみて。みつからうらなひ

てのたまはく。あめのしたのふたつにわかるしるしなり。
われつひにあめのしたをえてむといへり。

得氣長足姫天皇

參議大藏卿正四位下平朝臣惟範

日月之行久星乃波可者留止毛新羅乃國波加知波可和可之
ひつきのゆくほしのやとりはかはるともしらきのくにはかちはかわかし

この天皇新羅にむかひたまふときに。そのくにのきみおちわなゝきて。みふねのまへにくたりていはく。いまよりのち。あめつちとゝもにみむまかひとならん。ふねかちをかわかさす。むまのくし。むまのむちをたてまつらん。またちかひていはく。ひむかしのひのにしにいて。かはのいし（河石）のゝほりて。あまつほしにならすよりは。としことのみつきものをはかゝしといへり。

得橘豐日天皇

參議正四位下行右兵衞督兼播磨守藤原朝臣淸經

多知波那能須女羅乃支美遠々之美介無多須那可末己止和禮毛於止良之
たちはなのすめらのきみをゝしみけんたすなかまことわれもおとらし

この天皇みやまひしたまふときに。くらつくりのたすなまうしていはく。やつかれすめらのおほむためにいへてしておこなはんと。またほとけのみかた（像）。てら（寺）なとをつくりたてまつれり。いまのさかたてらの丈六のほとけこれなり。

得御間城入彥五十瓊殖天皇

參議正四位下行宮內卿兼伊勢權守十世王

多々禰古乎無（毛無）止女佐毘世波由女爾見志於保毛乃奴之乃可美安禮奈末之
たゝねこ（田田根子）をもとめさりせはゆめにみしおほものぬしのかみあれなまし

この天皇のみよなゝとせといふに。くにのうちしつかならす。すめらみかはあみ（沐浴）ものいみして。おほとのゝうちをきよめていのりたまはく。われかみをゐやまひたてまつるとのおろそかなるか。ねかはくはゆめにをしへたまへと。その夜のゆめにひとありて。おほとのゝうちにむかひたちて。おほものぬしのかみそとなのりていはく。すめらくにのをさまらさるとをまたなられへそ。わかこゝろなり。もしわかこのおほたゝねこをしてわれをまつらは。すみやかにたひらきなむと。すめらゆめのことはをよろこひて。あめのしたにおほたゝねこをもとめたまふに。するのむらよりたてまつれり。すめらあさちはらにいてゝ。お

ほきんたちをつとへて。おほたゝねこにとひたまはく。なんちはたれかこそ。こたへていはく。おほものぬしのこなりと。すめらのたまはく。われさかえなむ。さておほたゝねこをして。ものゝへのやそてかつくれるまつりものをもたしめて。おほものぬしをまつらしむるに。えのやまひはしめてやみ。くにのうちしつまりぬ。

得日本武尊

参議正三位行左衛門督伊豫守藤原朝臣有實

也末止多介仁之比无賀志乃久爾遠宇知天太比良介與世之美古仁波也良奴

やまとたけにしひむかしのくにをうちてたひらけよせしみこにはやらぬ

おほたらしひこおしろわけの天皇。やまとたけのみことをつかはして。くまおそをうたしめたまひて。にしのくにしつまれりといへり。

得大泊瀬天皇

中納言従三位兼行民部卿春宮大夫藤原朝臣有穂

美可利須留幾見加弊留止天久女加波仁比度古止奴之曾以天末世利介留

みかりするきみかへるとてくめかはにひとことぬしそいてませりける

この天皇かつらきやまにかりしたまふに。たけたかきひとあへり。かほすかたすめらにゝたてまつれり。すめらかみとしろしめせれとも。とひてのたまはく。いつこのきみそ。こたへていはく。あらひとかみなり。まつみなをなのりたまへ。のちにわれといはむと。すめらこたへてのたまはく。われはわかたけのみことなりと。つきにかみなのりていはく。やつかれはひとことぬしのかみなりとて。ともにかりのあそひして。しゝをおひてやはたつことをゆつり。むまのくちをならへはしらしめて。ことはゐやまへり。ひくれかりやみてかへりますに。このかみくめかはまてにおくりたてまつれりといへり。

得聖徳太子

中納言従三位兼行右衛門督源朝臣貞恒

以可留可能彌美支乃見也爾多天之乃利以末乃散加之支美與爾安不可那

いかるかのなみきのみやにたてしのりいまのさかしきみよにあふかな

たちはなのとよひの天皇なみきのみやにます。これは太子のみおやなり。またこのみこいかるかにみやつくりしたまへり。おなし天皇の十二年に。太子みつからいつくしきみのりとをちあまりなゝをちを作りて奏したまへり。

得武内宿禰

大納言正三位藤原朝臣國經

ツ久之幣天久可多知世之爾支與支見波武與乃數女良爾都可禁支爾介利

つくしへてくかたちせしにきよきみはむよのすめらにつかへきにけり

ほむたの天皇たけうちすくねをつくしにつかはして。おほむたからをかむかへみしめたまふに。たけうちのすくねのおとうと。むましうちのすくねすめらにまうさく。たけうちすくねあめのしたをねかふこゝろありと。たけうちすくねこれをきゝて。おほきにうれへて。ふねよりまうでいたりて。つみなきよしをまうす。すめらかむかへとひたまふに。おの〳〵あらそひてさためかたし。すめらみとのりして。あまつやしろくにつやしろにまうして。しきのかはのほとりにして。ともにくかたちをせしむるに。たけうちすくねかちぬといへり。くかたちはゆをさくるなるへし。

得譽田天皇

右大臣從二位兼行皇太子傅右近衞大將源朝臣光

波之幣多流不留幾宇喜礒遠須弖年波佔散耶許起毗比喜登保玖幾許遊流

としへたるふるきうきゝをすてねはそさやけきひゝきとほくきこゆる

この天皇のたまはく。おほやけふねあり。なはかれの。これいつのくにのたてまつれるなり。いまはくちてもちゐかたし。ひさしくおほやけものたれは。いさみわすれかたし。いかてかこのふねのなをして。のちのよまてはつたふへきとて。そのふねのきをとりてたきゝとして。しほをやきて。あまねくくに〳〵にたまひて。ふねをつくらしめたまふ。またしほのたきゝとしてたくときに。もえくひのやけぬあり。あやしみてたてまつれり。すめらとにつくらしめたまへるに。そのこゑさやかにとほくきこゆといへり。

得大鷦鷯天皇

左大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣時平

多賀度能丹乃保利天美禮波安女能之多與母爾計布理己伊萬祥淺美奴留

たかとのにのほりてみれはあめのしたよもにけふりていまそとみぬる

このすめらくにしろしめすよとせといふに。たかとのにのほりまして。とほくのそみたまふに。さかひのうちけふりたゝさりけれは。たみのまつしきなりとおもほして。みとせみつきものはたらす。つかふとなくして。めくみたま

へり。またみやつくりもせられさりけれは。あめかせいりておほむそをうるほし。ほしのひかりもりて。みゆかもあらはなり。そのゝちあめかせときにしたかひて。たみとみゆたかなり。またおなしきなゝとせに。たかとのにましてのそみたまふに。けふりおほくたてれはのたまはく。われすてにとみぬと。おほよそたかつのみやにましてくらゐにますと八十七年といへり。

得雄朝嬬稚子宿禰天皇　式部卿是忠

甘樫乃丘乃久可太知支與介禮波爾己禮留多見毛可波爾數末之幾

あまかしのをかのくかたちきよけれはにこれるたみもかはねすましき

この天皇のたまはく。いにしへのくにをゝさむること。おほむたからところをえて。かはねたかふことなし。いまわれあまつひつきしてよとせ。かみしもあひあらそひて。おほむたからやすからす。あるいはあやまちておのかゝはねをうしなひ。あるいはことさらにたかきうちをもとむ。われをさなしといへとも。そのたかへるをたゝさゝらんやとて。もろ〳〵のうちのひとゝもに。ゆかはあみものいみせしめて。あまかしのをかにくかへをすゑて。くかたちせしめて。いふてまことならんひとはまたく。いつはれらんひとはやふれよと。それよりのちうちかはねさたまりていつはるものなし。おほむたからとはたみをいふ。くかへとはゆをさゝへるほときなるへし。

・得瑞齒別天皇　兵部卿貞保

見ツ乃爲能曾己爾之奈天留波奈乃以呂也數女良美己度乃見奈度奈利介武

みつのゐのそこにしなてるはなのいろやすめらみとのみなとなりけん

この天皇あはちのみやにむまれませり。そのみかたちはうるはしうしてみはわかれたまへり。このところに井あり。みつのゐといふ。くみてみこにあむしたてまつるときに。たちはなゐのうちにちりいれり。それによりてみこのみなとす。たちはなはいまのいたとりなり。たちひのみつはわけの天皇とまうすといへり。

元慶六年歌　大納言國經卿　一人二首

延喜六年歌　三十六人（此中四人各詠二首）　合四十首

上卷合四十二首三十七人

序一首三統理平

日本紀竟宴和歌 天慶六年

日本紀竟宴各分史得王仁一首并序

從五位下行大內記兼近江權少掾橘朝臣直幹

原夫有國有家之后。先設記言記事之官。所以知萬代之規摹察百王之號令者也。是用元正天皇御宇之時。勅一品舍人親王從四位下太朝臣安麻呂等。俾撰日本書紀。上起混沌。下列人神。始於辛酉之元。終於壬寅之歲。總三十卷。勒爲一家。自彼天孫排雲僑八重之路。仙蹕降日向千穗之峯。神倭踰曲浦而逢漁人。烏鳥指中洲而爲鄕導。洎于推乾禪讓之際。傳以洪基。文武謳歌之初。受其曆數。乃是四十二帝之興衰者遠徵必錄。一千餘年之治亂者皆要無遺。寔著述之菁華。爲皇王之炳戒。由斯弘仁承和之朝。元慶延喜之世。重開講席。累叩疑問。聖上纂統。天下無爲。扶桑之域歸仁。細柳之鄕慕化。超周郁々。邁舜巍々。運屬時休。思講同典。故承平六年之冬。令紀洲別駕田大夫說之。大夫桂苑甲科。蘭臺高弟。網羅百氏。尋其廣則雲夢鄧林之飛走不遁。苞括群流。論其深則三江五湖之波濤盡入。內染提撕之慈訓。外受教誨於先師。即應綸綍。始披講授。藻鏡懸鑒。光澄宇宙之間。華鐘待撞。響徹雲霞之表。天慶二年季冬之末。東西邊州風塵不靜。干戈之備嚴肅。講誦之音寂寥。俄而邊鎭二兇。澄淸四海。寰區寧謐。禮樂復興。尋以講之。其禮如故。中間別駕果遷美州紀州。六年九月傳授始畢。至其十二月二十四日。聊仍舊貫之儀。以行澆章之禮。于時王公大夫碩儒博學。鴻鸞接翼。朱紫成群。宛然第洞之春遊。髣髴蓬壺之夜宴。鳴琴緩鼓。別鶴啼烏之曲欲終。羽爵頻飛。中山上若之流無數。請分舊史各詠新歌。欲扇遂古之餘風。續先朝之故事。其詞曰。

和多津見野千倍野卑羅奈身古江天沽曾八島乃國仁布箕波都太不禮

わたつみのちへのしらなみこえてこそやしまのくにゝふみはつたふれ

ほむたの天皇のみよに。くたらより王仁きたれり。みこう（太子菟）ちのわかこ（稚郎子）これをし（師之）として。もろ〳〵のふみをならふ（習諸典籍）といへり。

得天稚彥二首　學生蔭子正七位上藤原朝臣利博

安麻都賀美耶保與魯都皮波意賦奈禮度阿咩和賀飛古能難古蘇多賀氣禮

あまつかみやほよろつとはいふなれとあめわかひこのなこそたかけれ

たかみむすひのみことゝ。すめみまをたてゝ。あしはらのなかつくにの きみとせむとするときに。かのくにゝあしきかみたちあり。たかみむすひのみと。やほよろつのかみたちをつとへて。とひてのたまはく。たれをしてかかのあし

きものをはらひにはつかはすへき。みなまうさく。あまつくにたまのこ。あめわかひこたけきものなり。こゝろみるへしと。たかむすみのみこと。あまのかこゆみ。あまのはゝや をたまひてつかはす。あめわかひこかしこにいたりて。うつしくにたまのむすめ。したてるひめをめとして。とゝまりていはく。われもあしはらのなかつくにをはをさめてむとて。かへりことまうさす。たかみむすひのみことあやしみて。ななしのきしをつかはしてみせたまふに。そのきしあめわかひこか（門）かとにたてるきのすゑにをり。あまのさくめみて。あめわかひこにまうさく。あやしきとりきのすゑにをり。あめわかひこ。たかむすひのみことのたまへりしゆみやをとりている。そのやきしのむねよりとほりて。たかむすひのみことのみまへにいたる。みことみそなはしてのたまはく。このやわかあめわかひこにたまひしやなり。そのや（皇産霊其矢）ちにこけり。これくにつかみとたゝかへるかとて。やをとりてなけおろしたまふに。そのやくたりて。あめわかひこかむなさきにたちてしぬといへり。

度利能禰遠度加武流比度能難賀利勢波安麻能發波耶發駕幣羅裴良摩寄

とりのねをとかむるひとのなかりせはあまのはゝやはかへらさらまし

かみにみえたり。

得天穗日命二首

明經得業生從六位下行伊豫權大目桑[illegible][illegible]教光

阿麻能保毗宇氣毗母志屢句安禮麻斯弖賀美能意[illegible][illegible]度難理爾氣流賀難

あまのほひうけひもしるく（誓約灼然）あれましてかみのいさをとなりにけるかな

安志波羅能美豆保能句爾々智發耶布留賀美武計與度蘇阿麻句多志鷄流

あしはらのみつほのくにゝちはやふるかみむけよとそあまくたしける

この二首のこゝろかみに見えたり。

得天兒屋根命二首

文章生正六位上源朝臣仲遠

度固野美耳阿萬旦瑠阿美袁異廼離弖蘇苑岐飛度度毛耳能智婆瑳鵞遊流

とこやみにあまてるかみをいのりてそつきひとゝもにのちはさかゆる

阿瑳儺阿瑳儺底瑠飛廼飛駕離彌屢語苦耳固野泥能美盧度伊苑伽倭儒麗倖

あさな／＼てるひのひかりみるとにこやねのみといつかわす

れむ

かみのふとたまのみことのところにみえたり。

得秦酒公

外従五位下行造酒正葛井宿禰清鑒

己止能禰濃阿波麗理禮波夜數[illegible]羅[illegible]多能多久美濃[illegible]美爲
[illegible]留勢流

ことのねのあはれなれはやすめらきみひたのたくみのつみを
ゆるせる

わかたけの天皇ひたのたくみたにおほせて。たかとのをつくらしめたまふに。みたくみたかとのにのほりて。とくはしることとふかことし。これをいせのうねへあやしみみるほとに。にはにたふれて。さゝけたるみけつものをこほしつ。すめらみことうねへをみたかをかせるかとうたかひて。ころさんとするときに。さけのきみことをひきて。そのこゝろを天皇にさとらしめて。つみをゆるさしめたり。

得[illegible]

勘解由次官従五位下三善朝臣文明

多仁野宇仁比止爾古惠太留波加世加毛和加夜之麻々天奈見和
氣久禮波

たにやうにひとにこえたるはかせかもわかやしまゝてなみわ
けくれは

かみにみえたり。

得思兼神

従五位下行大外記兼近江権少掾三統宿禰公忠

度[illegible]那[illegible]伊婆斗々智[illegible]利[illegible]波安氣波
芝[illegible]氣流

とこよなるとりのこゑにそいはとゝうひかりなきよはあけに
しめける

かみに見えたり。

得浦島子

少納言兼侍従従五位下大江朝臣朝望

宇羅志麻能許々呂兒加奈布都摩遠衣天加米野世波比遠東[illegible]兒
曾部氣留

うらしまのこゝろにかなふつまをえてかめのよはひをともに
そへける

わかたけの天皇のみよに。丹波のくによさのこほりのつゝかはのひと。みつのえのうらしまのこ。ふねにのりてつりするときに。おほいなるかめをえたり。そのかめをむなとなれり。うらしまのこめてゝ。これをめとしてゝともにわたにいりて。とこよのくにゝいたりて。ひしりにあふといへり。とこよとは蓬萊。ひしりとは仙をいふ。

得木祖句句廼馳

[illegible]從五位下源朝臣公輔

具政之知[illegible]古[illegible]伊呂[illegible]古之[illegible]佐里奈利氣禮

くゝのちからみほとこせるいろ〳〵のきこそみやこのかさりなりけれ

いさなきのみことのところにみえたり。

得[illegible]伯孫

從五位下守治部大輔藤原朝臣近相

伯孫可埴輪馬作之時與利會器佐都豐奈利氣留

はくそむかはにむまつく〔り歟〕しときよりそうつはものさへゆたかなりける

わかたけの天皇のみよに。かふちのくにのまうせる。あすかへのこほりのひと。たなへの伯孫むすめのこうむときゝて。むこのいへにゆきて。つきよにかへるときに。ほんたのみさゝきのもとに。あかきむまにのれるひとあへり。そのむまたつのことくにひゝる。これをみてこゝろにねかひて。わかのれるみたらをのむまにむちうちて。ならへはしらしむるに。あかむまこえのひてをよひかたし。そのゝれるもの伯孫かこゝろをしりて。むまをかへてわかれさりぬれは。よろこひてむまやにいりて。くらをおろしまくさをかひてねぬ。そのあしたにあかむまははにむまになれり。あやしみてさらにほむたのみさゝきにもとむるに。あかみたらをのむま[illegible]り。それ[illegible]へてか[illegible]といへり。このゝちおなしきすめら。はにしのむらしにしみことのりして。あしたゆふへのみけつものもるへき。きよきうつはものをたてまつらしむ。それよりはにしのむらし。つのくに[illegible]いなはのわたくしのたみをたてまつりて、にへのましへといへり。

得[illegible]

兵庫頭從五位下平朝臣[illegible]

[illegible]志古[illegible]留也[illegible]之[illegible]良之比女野[illegible]毛也[illegible]毛丸佐之毛由良无

としとのはるやむかしのかやのひめのにもやまにもくさのもゆらん

いさなきのみことのことはに見えたり。

得玉依姫

從五位上少納言源朝臣泉

和陀[illegible]遠伊底玖[illegible]斯計武胡[illegible]路故蘇夜[illegible]智比胡能與[illegible]度作弊那禮

わたつみをいてくましけんこゝろこそやまさちひこのよめとさへなれ

たまよりひめはひこほゝてみのみことのよめなり。ひこ

ほゝてのみこと。ひとつのなはやまさちひことい へり。

得事代主神

從五位上守權右少辨源朝臣俊

蒲胡斗能讀俄斯古美傳胡楚毛路陁布禰思志學理美保能讃捲舊

都麗勞禰

みとのりかしこみてこそもろたふねこしよりみほのさきにつ

りせね

かみに見えたり。

得玉辰爾

從五位上守右少辨菅原朝臣在躬

事留古發能安流「度飛」雖岐度能弊多天遠發三日波獨利度毛伊

布邊嘉理氣利

しることのあるとなきとのへたてをはみかはかりともいふへ

かりけり

こまよりたてまつれる。からすのはのもしを。三日までひ

と〳〵わきまへしらさりけるを。この王辰爾よめりとい

へり。

得衣通郎姫

從五位上行少納言兼侍從紀伊介橘朝臣實利

天利爾天留加保波太禮會止度不末天仁比賀利度保禮留幾見加

於度飛女

てりにてるかほはたれそとゝふまでにひかりとほれるきみか

おとひめ

をあさつまわかごそこねの天皇。にひやにあそひたまふ

ときに。すめらみことをひき。きさきたちてまひたまふ。

まひをはりてまうしたまはく。をんなこたてまつる。すめ

らこたへたまはく。たれそと。またまうしたまはく。おの

かおとうと。なはおとひめ。かたちすくれてころもよりと

ほりてみゆる。ときのひとそとほりひめといふといへり。

得阿直伎

從五位上行式部少輔紀朝臣在昌

久太良與利奈見遠和氣許之岐見奈禮婆奈遠波奈加禮天乃許須

奈留倍之

くたらよりなみをわけこしきみなれはなをはなかれてのこす

なるへし

ほむたの天皇のみよに。くたらよりちときたまたせり。こ

のひと〳〵ふみをよむといへり。

得擲玉饒速日命

從五位上守左少辨藤原朝臣有相

久多利古志阿麻能伊波布禰伊波禮比古美也波志志咩世流志流

雖理氣利

くたりこしあまのいはふねいはれひこみやはしめせるしるへ

なりけり

かみに見えたり。

得土倉阿弭古

從五位上行前參河守源朝臣治

安美乃宇知丹加々利波志女之久知與利裳者那知加弊佐奴那氣岐萬佐禮里

あみのうちにかゝりはしめしくちよりもはなちかへさぬなけきまされり

かみにみえたり。

得聖德太子

從四位下行右中辨藤原朝臣師尹

佐支弭保敷波奈乎者於幾弖登與止美己萬津爾者見萬須伊呂那賀利介理

さきにほふはなをはおきてとよとみこまつにはみますいろなかりけり

はるもゝのはなのあしたに。ちゝのみこ太子ともろともにそのにあそびたまふに。みことひてのたまはく。もゝのはなをやたのしひとする。まつのはをやおもしろしとすると。太子こたへたまはく。まつのはをおもしろしとす。みこまたとひたまふ。いかな[れ界]はそと。太子こたへたまはく。もゝのはなはしはらくのもの。まつのはゝひさしきゝなり。ゆへにおもしろしとのたまへり。

（春桃花之旦　遊於後園　花爲樂　松葉爲賞　桃花一旦之榮物　松葉萬年之貞木　也故可賞之）

得物部麁鹿火大連

從四位下行左中辨小野朝臣好古

阿羅賀比羽都久志野伊者井多禰良氣弖古許呂由賀須曾於毛布倍良奈留

あらかひはつくしのいはゐたひらけてこゝろゆかすそおもふへらなる

をほとの天皇のみよに。つくしのいはゐそむけり。すめらあらかひのむらしをつかはして。うちたひらけしめたまふ

（磐井　男大迹）

得伊弉諾尊

從四位下行民部大輔兼文章博士大江朝臣朝綱（補）

賀曾伊呂婆阿婆禮度美須夜毗留能古婆美斗勢爾那理奴阿之多々須志天

かそいろはあはれとみすやひるのこはみとせになりぬあしたゝすして

ひるのことかみにみえたり。かそいろはちゝはゝをいふなるへし。

（父母）

得豐玉姫

備中權守從四位下藤原朝臣俊房

奈美遠和介倭我比能毛度遠多都禰古之毗志利濃美與能於夜仁佐利藝留

なみをわけわかひのもとをたつねこしひしりのみよのおやにそありける

このかみ(兄)ほのすせりのみこと(火酢芹命)。よくわたのさちものをえ。おとうと(弟)ひこほゝてみのみこと(彦火火出見尊)。よくやまのさちものをう。ともにそのさちものをかへんとおもひて。ゆみとつり(釣)(以下同)をとりかへたり。ともにうることなうして。ひこほゝてみのみこと。つひにそのつりをうしなひて。ほのすせりのみことにせめられて。わたのへたにいたりて。たゝすみなけくときに。ひとりのひとありて。しほつゝのおきなとなのりて。このみことをわたつかみとよたまひこのみやにゐてましぬ。わたつかみむかへをかみて。ねむころにつかうまつりて。むすめとよたまひめをあはす。さてわたつみやにとゝまること みとせをへて。ことをおほいなるわにゝのせておくりまつる。これよりさきにとよたまひめのいはく。われすてにはらめり。なみのたかゝらんひ。わたのへたにいでむ。うふやをつくりてまてと。そのゝちにとよたまひめきたりて。ほゝてみのみことにまうさく。こよひこうむへし。なみましそと。みこときゝたまはすして。ゆくしをひにともしてみそなはすに。とよたまひめやひろのわにとなりて。はらはひもこよふ。さてはちしめられぬることをうらみて。わたのさとにかへりぬ。そのおとうとたまよりひめをとゝめてやしなはしむ。そのちこのなをは。ひこなきさたけうかやふきあはせすのみことゝいふ。これうふやにうのはをふけりけるか。ふきあはせられさりけれはなつくといへり。

得隣宮立草

從四位下行大學頭兼文章博士備前守大江朝臣維時

安馬能芝多乎佐牟留波之女牟須比於幾旦與呂豆萬弖耳多愛
務那利氣理

あめのしたをさむるはしめむすひおきてよろつよまてにたえ
ぬなりけり

かみにみえたり。

得月夜見尊

從四位下守右大辨兼行近江守源朝臣公忠

都寄保美乃安女爾能保利天夜美乎那久安幾良介幾乎美留我
陀能芝佐

つきよみのあめにのほりてやみをなくあきらけきよをみるか
たのしさ

いさなきのみことのゝたまはく。われあめのしたしるへきうつのこをおきんとて。みきのてにますみのかゝみをとりて。つきよみのみことをいたせり。そのひとゝなりてりうるはしくして。あめのしたにてりのそむといへり。う

つはよきといふなるへし。

得的戸田宿禰

右兵衛督従四位下源朝臣仲宣

久爾賀禰能麻度遠度保世流伊佐美爾蘇奈烏多麻波利弖與爾都多弊計留

くろかねのまとをとほせるいさみにそなをたまはりてよにつたへける

おほさゝきの天皇のみよに。こまのくにくろかねのたて。くろかねのまとをたてまつれり。かのくにのまろうとにあへたまふひ。まちきむたちをつとへて。そのまとをいさしめたまふに。いとほすことなし。たゝたてのすくねいとほせり。こまのまろうと。このゆみいるとのすくれたるをおちて。ともにみかとをゝかみす。これによりてあくるひかはねをたまひて。いくはのとたのすくねといふ。

得保食神

従四位下行兵部大輔源朝臣由道

伊津久散能多奈津毛能雄者宇介毛智野加美曾那志介流與呂津夜能多咩

いつくさのたなつものをそうけもちのかみそなしけるよろつよのため

かみにみえたり。

得菟道稚郎子

従四位上行式部権大輔藤原朝臣有声

磐田能幾美波於止古遠曾迷久美多麻倍留久仁遠由都留古止濃不可幾爾

ほたのきみはおとこをそめくみたまへるくにをゆつることのふかきに

ほむたの天皇。おほやまもりのみこと。おほさゝきのみことをめしてとひたまふ。なんたちこうつくしや。こたへていはく。いとうつくし。またとひたまふ。おいたるとわかきといつれかまされる。おほやまもりまうしたまはく。おいたるにはをよはすと。すめらのみおもへりよろこはす。おほさゝきかのみもへりをみそなはして。まうしたまはく。おいたるはおほくとしをへてひとゝなり。いきとほることなし。わかきはそのひとゝなりをしらねはいとあはれなりと。すめらおほきによろこひて。うちのわかこをたてゝつきとしたまふ。そのひおほやまもりにことよさせて。やまかはをつかさとらしめ。おほさゝきをしてはみこのたすけとして。くにのことをしらしむといへり。

得秦大津父

従四位上左京大夫源朝臣國淵

大可美遠多須介天能智曾大津父可不歌久佐與利波那利天多利

介留
おほかみをたすけてのちぞおほつちかふかくさよりはなりて
たりける
ひろにはの天皇のわかくましゝとき。ゆめにひとありて
いはく。すめらはたのおほつちをめくまは。ひとゝなりて
のち。かならすあめのしたをたもたんと。みことつかひを
してあまねくもとむるに。やましろのくに。きのこほり。
ふかくさのさとよりえたり。そのなゆめにかなへり。み
ことよろこひてとひたまはく。なんちなにことかある。こ
たへていはく。ことなし。たゝいせにまかりて。あきなひ
してかへりこしときに。やまにふたつのおほかみのあひ
いさかひて。ちにぬれたるにあへり。むまよりおりて。て
あらひくちすゝいでいのりていはく。なむちはこれたふ
ときかみなり。あらきわざをこのみて。もしかりひとにあ
はゝ。とられんことすみやかならん。いさかふことをやめ
よと。ちにぬれたるをのごひあらひてゆるしてきと。みこ
とのたまはく。かならすこのむくひならんとて。めくみた
まふことかぎりなくして。くらゐにつきたまふとぞ。おほ
くらのつかさにまけたまふといへり。

得雄朝津間稚子宿禰天皇

参議左大辨從四位上行備中守藤原朝臣在衡

於賀宇智遠久可倍遠須惠傳和玖能美箇王多濃當摩讃部安羅波
禮仁計禮
まかふうちをくかへをすゑてわくのみかわたのたまさへあら
はれにけり
くかへのことかみに見えたり。このすめらあはちのしま
にかりしたまふときに。ひねもすにひとつのしゝをえす。
さらにうらなふに。しまのかみたゝりをなしていはく。し
ゝをえさることはわかこゝろなり。わたのそこにたまあ
り。もしそのたまをわれにまつらはしゝをえてむと。この
ゝちたまのおほきさもゝのごとくなるをえて。かみに
まつりしかは。おほくしゝをえたまへり。

得天國排開廣庭天皇

参議從四位上行左兵衛督兼紀伊守源朝臣庶明

於保美度求比呂邇波須女良徽與那禮波阿多志久爾佐倍阿麻多
幾都加布
おほみとくひろにはすめらみよなれはあたしくにさへあまた
きつかふ（来仕）
かみにみえたり。あたしくにはことくにといふなるへし。

得御間城入彦天皇

参議大宰大貳正四位下兼行播磨守伴朝臣保平

美萬支比古與禰奈加和多須古々呂阿利天奈久天者阿之古不

可久利介利

みまさひこよのなかわたすこゝろありてなくてはあしきふね
つくりけり

この天皇のゝたまはく。ふねはあめのしたのむねつもの
なり。おほむたからふねなくして。おゆみはこゝことくる
しめりとて。みことのりしてふねをつくらしむ。

得天命開別天皇

參議正四位下兼右衞門督行備前權守源朝臣高明

須女羅枳能阿布彌濃美也爾都久利於枳斯登枳能麻爾麻爾美與
毛多斎勢數

すめらきのあふみのみやにつくりおきしときのまに〳〵みよ
もたえせす

このすめらひつきのみことゝましゝとき。みつからとき
はかみうつはものをつくりて。にしめて　あふみのおほつ
のみやにおきたまふといへり。

得大泊瀨天皇

中納言源朝臣清蔭

與岐古度遠與呂都與賀禰亭衣都留賀那可津良幾夜麻乃
美嘉利乎

よきことをよろつよかねてえつるかなかつらきやまのけふの
みかりに

かみにみえたり。

得大鷦鷯天皇

從三位守大納言兼行中宮大夫藤原朝臣師尹

大鷦鷯須女羅貴與々利多津氣數里阿麻能比都伎仁毛江萬散留
賀奈

おほさゝきすめらかよゝりたつけふりあまのひつきにもこえま
さるかな

かみにみえたり。

得活目入彦五十狹茅天皇

大納言正三位兼右近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣實賴

意氣美都耳俱遁散嘉江計流萬紀牟久能多萬紀乃加世波伊麻毛
能古禮利

いけみつにくにさかえけるまきむくのたまきのかせはいまも
のこれり

この天皇まきむくにみやこつくりせり。これをたまきの
みやといふ。おなしきみよに。つかひをつかはして。かふ
ちのくにゝいけをつかしむ。そのゝちくに〳〵にみこと
のりして。おほくいけをつかしむ。これよりおほむたから
とみゆたかにして。あめのしたやすらかなりといへり。

得天萬豐日天皇

中務卿重明

安馬與呂豆與呂豆乃美那烏都多數留波久爾多比良氣伎與々能賀須賀毛

あめよろつよろつのみな（一作名）をつたふるはくにたひらけきよゝのかすかも

かみに見えたり。

得大巳貴大神二首

從五位下行紀伊權介矢田部宿禰公望

久仁牟氣芝保古能佐紀與利都多倍久留美多麻能布由波氣布曾宇禮之岐

くにむけしほこのさきよりつたへくるみたまのふゆはけふそうれしき

いさなきのみこと。あまのたまほこをさしくたして。あをうなはらをさくりえてしか。くに〳〵をうみて。つきにおほなもちのかみをうめり。みたまのふゆはまつりするななるへし。

知保安幾乃久爾遠志米多留阿度乎能美與呂都余伊萬毛和須禮野波洲流

ちほあき（千五百秋）のくにをさめたるあとをのみよろつよいまもわすれやはする

あまてるおほかみのゝたまはく。あしはらの千ほあき（五百秋）のみつほのくには。わかこむまこのきみたるへきところなりといへり。

此卷天慶六年竟宴歌三十七人（此中闕八人各詠二首）合四十一首

序一首（橘直幹 上下序合二首）　上下合八十三首

二首讃歌三首　合八十八首

養老五年始講。

博士從四位下太朝臣安麻呂。

弘仁四年講。

博士刑部少輔太朝臣人長。（見日本紀弘仁三年）

承和十年講。

參議從四位上滋野朝臣貞主。（[illegible]）

元慶二年講。

五年畢。六年宴。助教從五位下善淵朝臣愛成。

延喜四年講。

六年宴。紀傳博士矢田部公望。明經葛井清鑒。

承平六年講。

天慶六年宴。

西宮記云。講日本紀博士等例。天長承和其人未詳。元慶六年。（右大臣宣[illegible]博士之例。以[illegible]名字書[illegible]）講博士伊豫介善淵愛成。序者大江記者

野惟肖。得土倉阿珥古。未得解由者前三河守菅野高松。其詞曰。日本紀竟宴各分史得土倉阿珥古。前三河守菅野高松。土倉能綱尼駕々令流鷹抑哉繋絆手無解由（ツチクラノアミニカヽレルタカナレヤツナキホタシテトクルヨシナシ）。歌體大略如此云々。

續後撰集神祇部云。

元慶六年日本紀竟宴彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

兵部卿本康親王

わた津海波かきわけてあらはれしたけうのみといくよへぬらん

右二首此本にもれたる歌なり。また六帖第六蘆の歌に。

あしつのゝおひてし時にあめつちと人とのしなはさたまりにけり

此歌も竟宴の歌あ　きたり。若元慶六年の竟宴に國常立尊を得てよめる歌歟。

又古歌とて。

ぬほこたれおのころ島にくたります神そかそいろ國をうめれは

これ若古歌ならは。伊奘諾尊を得てよめるにやあらん。

又續古今雜中に。

太上天皇

ひさかたのあめよりおろす玉鉾のみちある國そ今のわかくに

神代紀云。廼以天之瓊（瓊玉也。此云努）矛指下而探之。是獲滄溟。古事記には瓊矛を沼矛とかゝれたり。瓊をおほくは爾とよめるは。瓊は赤玉なれは。色によりて丹といふなるへし瓊と奴と音かよへは。ぬほことといふ歟。日本紀に後に至りて瓊（此云努）と自注あるへきに。なき事は今にゆつるなり。さてみなぬほことこそあるを。初てたまほことよませ給へるは。此太上天皇は後嵯峨院。此本かゝせたまへる宗尊親王の御父なるに。此本かなのところに。たまほことといへるとふたつあれは。御覽しおきてよませたまふなるへし。

又新古今集賀部に仁徳天皇の御歌とて。

高き屋にのほりてみれは煙たつ民のかまとはにきはひにけり

これ往古の歌のすかたにあらねは。元慶の竟宴に。此みかとを得たてまつりて。たれそのよみたまへるなるへし。朗詠集には刺史の歌とす。刺史は國の守なれは。もはら此歌のこゝろあるへき故に。意を得て取られけるなり。もしまた此歌は延喜の竟宴に藤原左大臣のよみたまへる歌のかくあらたまりたる歟。おほかた似たる詠なり。

元慶延喜天慶三代の竟宴。皆六年におこなはれけるは自然の事歟。

又上の三代の竟宴に土倉阿珥古を得てよめる人。みない
また解由を得さる人なりけるもあやしきなり。

元慶六年日本紀竟宴歌

譽田天皇　　右大臣多

ひしかたのをくらの山ははるけきを君をまもるにかけも
はなれす

右此日本紀竟宴歌上下二巻者。鎌倉中書王眞跡本。藏在肥
後國熊本城下本妙寺矣。余不慮得臨寫彼之本。更寫臨摸之
本。與今井自閑者則此本也。

元祿十三年正月　日　　契沖書之

【右日本紀竟宴和歌以齋藤秀麿校本校合】

續群書類從卷第四百五

和歌部四十

蒙求和詞幷序

夫蒙求者李翰之所撰也。述數百家之事跡以教人。和歌者柿本之遺流也。聯卅一字之篇什以傳世。如予者素禀愚魯之性。雖非和漢之才。少日受訓說。壯年求簡要。是以試和皇漢之曩行。聊呈我朝之風俗。假男女於此文之中。訪言行於他書之外。寄其詞於花月。歌詠二百五十。分其題於春秋。卷成一十有四。偏爲幼童之易覺。不顧耆老之所嘲而已。于時元久甲子之歲。初秋壬申之日。朝議大夫源光行。閑居暇慨然記之云爾。

蒙求ハ李翰カ意根ヨリオコリテ。フルキ跡ヲアツメテ人々ニツタヘ。和歌ハ柿本ノ言葉ヨリサカエテ。アラタナル詠世ニ弘マレリコヽニコヽロハヤマトモロコシノミチヲタトリ。コトハ花ト月トノ色ニマトヘルモノアリ。イトケナクテコノ書ヲツタヘヨムトイヘトモ。竹ノエタニムチヲウチテ。サカヒヲカヘリミルコトヲワスレ。サカリノ時ハ。ソノ心ヲサトラムトスレハ。又ヤナキノハヲアムニモノウクシテ。オクヲキハムルニオヨハス。ナカコロハ北闕ノ北ニ家ヲワスレテ。霜ヲフミ星ヲイタヽクニイトマナク。今ハ東邑ノ東ニスタレヲトチテ。雪ヲカヽケ。ホタルヲトモトスルニタヨリアリ。トキニ男女ナノ名ヲ一卷ノウチニヌキイテヽ。カシコクオロカナルタメシヲ。アマタノフミノソコヨリウカヽヒイテタリ。歌二百五十ヲツラネテ。卷一十有四ヲナセリ。チヽノシルス所クラシトイヘトモ。コノサトル所アキラカナラムタメナラシ。年ハヽシメヒサシキ。時ハキノエノアキノトケキミツノエノナミニ。ムラサキノサヲケノフテヲソメテ。シロキアサノカミニシルストナリ。

蒙求和詞第一

春部廿首

漢祖龍顔 立春　丁固生松 子日　孔光温樹 霞
干木富義 鶯　安國々器 梅　張敞畫眉 柳
吳丹青蒲 花　汲黯開倉 早蕨　戴封積薪 春雨
齊景駟千 春駒　王粲覆棊 歸雁　㒓勝不屈 喚子鳥
伯成辭耕 苗代　李廣成蹊 桜　羅含收資 雉
壺公謫天 菫菜　濟叔不癡 藤　靈運曲笠 卯花
劉寵一錢 款冬　蒯通歷家 暮春

漢祖龍顔 立春

漢高祖姓劉。名邦。字季。沛縣豐人也。母劉媼。々々夫大公ナリ。劉媼昔大澤ノツヽミニヤスミフシタルトコロニ雨フリ神ナリケリ。夢ノ裏ニ神ニトツキケリ。大公ユキテミルニ。龍其上ニ有。劉媼コレヨリハラミテ高祖ヲウミテケリ。高祖ウマレテ龍顔アリ。ヒケヒムヨシ。左ノモヽニ七十二ノ黒子アリ。トキニ呂公ト云人アリ。賢才ヨニ聞テ。國ノ老父酒ヲ持來集テ。宴飲シテ世ノ中ノ事ヲ云合セケリ。高祖ワカクイヤシクテノコロ來リ臨メリ。座中ノ人各アサムキワラヒテ。此座ニハ千ノ錢ヲモタサル人ハ來事ナシト云テ。ムシロノスヱニスヱテケリ。上客呂公シハ〳〵高祖ヲミテ。驚テ座ヨリクタリテ。高祖ノ手ヲ取テ。臣ハワカクヨリコノミテ人ヲ相シキ。相スル所タカフ事ナシ。君ハ天子ノ相アリト云。座上ニスヱテ。子ムコロニカタラヒテ。我カムスメニアハセムトチキリテケリ。座中(ノ人)目ヲオトロカサスト云事ナシ。呂公カ妻大キニウケサリケレトモ。ミルトコロ有ト云テ。ツヒニムスメヲ高祖ニアハセテケリ。一男兩女ヲウメリ。呂后(公女)ミチノホトリニ屋舍ヲタテヽ。物ヲウルヨシヽテ高祖ヲカクシスヱテケリ。舍屋ハ秦ノ東南ニアタレリケリ。秦ノ始皇帝東南ニ天子ノ氣有トイキトホリ給ヘリ。呂公彌恐レケリ。其ノ屋舍ヲ去テ芒碭山ノ巖ノ中ニ隱レヌ。妻尋子來レリ。驚キ問ニ。紫雲ヲシルヘニテ來レリト云。高祖アハレト思ヒ知ヌ。高祖カヰタル所コトニ紫雲タナヒキケリ。時ニ秦皇崩カクレ給テ。丞相趙高ヨヲトリテ。秦皇ノ長子扶蘇ヲウシナヒテ。弟胡亥王トシテ二世皇帝トス。趙高心ニタカフ事ヤアリケム。(我威ノ程ヲ知トテ)鹿ヲ馬ト云ニ。群臣皆趙高カコトハニ隨フ。サテ二世帝ヲウチツ。二世ノ兄ニ扶蘇ノ子子嬰ノイトケナキヲ王トシテ。國既亂ヌ。趙高子嬰ニウタレヌ。子嬰位ニアル事僅ニ四十六日也。楚懷王此事ヲ聞テ。項羽ヲ大將トシ。高祖ヲ次將トシテ。秦ノ國ヲ打ニ遣ス。項羽ト高祖ト兄弟ノ契ヲ成テ。先ツ入ラム人宮中ヲオコナフヘシト云ヒ定テ。高祖サキニ入ト云トモ。項羽後ニ入テ。契ヲタカヘテ萬余里ヲトリテ我カマヽニセリ。高祖千里ヲトレリ。懷王ヲ神テ皇帝トスヘキ處ニ。項羽地ヲ得テ懷王ニシラセスシテ。オノレカ諸將ニ分ケ與テ。ハテニハ懷王ヲ打殺ツ。高祖深悲シミイキ

トホリテ。天ニカハリテ項羽ヲ打ト思ヒ成ヌ。僅百余人ノ將ヲ
モテ。百万ノ軍ニアラソヒタヽカヘリ。項羽四面ヲカコミテ。
高祖アヤウクミエケルニ。逆風吹テ四方俄ニクレヌ。ソノマキ
レニノカルヽコトヲ得タリ。哉ヲカサヌト云トモ。陳平張良カ
ハカリコトヲエテ。終ニ項羽ヲセメオトシテ天下ヲ得タリ。皇
帝トス。父大公ヲハ太上皇帝トス。ソレ天无二日。地无二主。大
公雖爲父一人臣也。高祖ハ子タリト云トモ人主也。人主ヲシテ
人臣ヲ可拜アラサルユヱニ。大公ミツカラオリテ高祖ヲ令拜セ
凡ソ政ヲオコナフコトニ仁德ヲホトコシ給ヘリ。賢者ヲスヽ
メ讒者ヲシリソケ。能ヲホメ忠ヲ賞シ給ヘリ。カクテ四海タヒ
ラキ萬民タノシヘリ。春和暖ノ氣トヽノホリ。秋清涼ノ景ソナ
ハレリ。スヘテ高祖ヨリ獻帝ニイタルマテ。子孫ヲカサヌル事
廿七代四百十八年也。

〔あめの下行末遠き春の色は澤邊の草にあらはれにけり〕

丁固生松

楚漢代人。爲項羽將。丁公名固。季布母弟也。
丁固尙書タリシ時。夢ノ内ニ腹ノ上ニ松オヒタリト見テ。人ニ
語云。松字ハ十八公ナリ。十八年ニシテ公タラムカト云ヘリ。
如夢云々。

トヽセヨリヤトセフリニシ夢チヨリ子日ノ春ニアフノ松原

〔とゝせあまり八年の春の夢さめて子日にあへる松の曙〕

孔光溫樹

漢ノ長樂宮ニ溫室殿アリ。孔光尙書ノ令トシテ傳ケリ。家ニテ
兄弟妻子ナト物語スルニ。朝省ノ政トノ間事。ツユハカリモチ
ラス事ナシ。或人ノ溫室省ノ内ノ樹ハナニノ木ソト問ヘハ。モ
タシテコタヘス。サラニアラヌ事トモヲイヒマキラカシツヽ。
ソレヲモモラサスソアリケル。

ミ山キノナヲサヘアタニモラサシト思ヒコメケルヤヘ霞哉

〔おほかたの名をたに花にちらさしと思ひこめける八重霞かな〕

干木富義

段干木隱居シテヨノマシハリヲコノマサリケリ。魏ノ文侯干
木賢事ヲ知テ。シキリニ召セトモシタカハス。文侯干木カ家ヲ
スクルコトニ。車ヨリオリスト云コトナシ。人々此事ヲアヤシ
ミケリ。若イヤシクモ國ノアルシトシテ。タヤスク人ヲウヤマ
フコト。其ノ心ヲエカタシト云。文侯云。我ハ財ニトメリ。干木
ハ義ニトメリ。此故ニ義ナウヤマフナリトソキコエケル。

鶯ノアルシナリケル谷ノトヲミステヽタヽニスキム物カハ

〔鶯の身にしむ聲をとめつれは谷の戸をさへあたにやはみる〕

安國久器

韓安國梁ノ孝主ニツカヘテ中大夫タリキ。才智謀リキ。財ヲム
サホリタシナマス。我身ヨリカシコキモノヲ求テ。シルヘシテ

君ニツカヘケリ。所謂壺遂。臧閎 邦鄭。他皆天下ノ名士也。此故ニ安國ヲ医ノウツハモノト云ヘリ。

心アレヤナタカキ里ノムメカヽヲ花ナキヤトニサソフ春風

［心あれやまた見ぬさとの（なたかきイ）（以下同ジ）］

張敞畫眉（春） 平陽人。

張敞京兆尹タリ。經術ニ明ラカナリ。所々ニチ賢アラハシ善ヲホトコセリ。人ノ過ヲナタメ。事ニ臨テナサケフカヽリキ。女ノマユヲヨクツクリケレハ。長安中ニ張京兆カ畫眉トソホメツタヘケル。アリトアル女コノミマナヒケリ。

心ヲソタレモソメケルサホ姫ノヤナキノ眉ノアケホノヽ色

［みるからにこゝろうつさぬ人そなき柳の眉のあけほのゝ色］

史丹青蒲（花）

史丹字君仲。魯國人也。賢人トシテ而モ忠臣タリキ。頻ニウツリテ侍中タリ。時ニ（漢ノ）元帝太子ヲステヽ。定陶王ニ位ヲユツラムトス。此事世ニ聞ニテ。人オホキニカタフケトモ。コトハヲ出ス者无。史丹オホヤケノ御トノコモレル内ニ入テ。青蒲ノウヘニフシテ（又ハ）皇儲サタマリニシウヘニ。ヨコサマノマツリコト出キタラハ。ス則ニ世ノミタレト成ツヘシト。ナクナクイサメ申ケレハ。オホヤケ此ニ隨ヒ給ケリ。

青蒲ハアヲキカマノ莚ナリ。又青規ノ地ヲ青蒲ト云也。

イタツラニ春ノアルシヲ尋ヌラム春ノミ山ノミチヲ忘レテ

［いつかたに花のあるしをたつぬらん春のみやまの道をわすれて］

汲黯開倉（早）

汲黯淮陽人也。汲黯ニ至マテ七代卿大夫タリキ。時ニ河内ニ火アリテ千餘家燒ニケリ。オホヤケ汲黯ヲ遣見セラレケリ。還參リテ申云。河内ノ火屋ナラヘテ燒ケソキヌ。數クモノリスヲシラス。又河内ヲスクルニ。水旱ヲウレフルマツシキモノ萬餘家アリ。臣謹ムテ御使ノツヨリヲエテ。倉ノ粟ヲ開キテ悉クニ分チ與ヘオクリヌ。臣ステニアヤマテリ。矯制ノツミニオコナハルヘシト申ケリ。オホヤケ賢ナリトホメ給テツミナシ。

［雨そゝく春のめくみのなかりせはかけのゝ蕨ものうからまし］

戴封積薪（春雨）

後漢戴封西花ノ令タリシ時。天ヒサシク日テリテ。民悉農耕ノムナシク絕ニヌル愁ヘイタキケリ。戴封我カオコナフ所ノミタルヽユヘニ。天ノトカメ給フナルヘシ。我カナカランニハ。雨モフリ民モユタカニナリナムト云テ。薪ヲ積テ其上ニフシテヤケシナムトス。ステニ火ヲ放ツ時ニノソミテ。天コレカタメニオホキニ雨ヲクタシケリ。

雨ソヽクヤヨヒノ空ハシヌモニノ烟ヨヤコソ曇リソメケレ

〔身にかへて世をおしみける涙かな彌生のそらの雨とひとつに〕

齊景駟千（春部）　馬四疋爲駟。駟千ハ四千疋也。

齊ノ景公ノ馬千駟アリ。死時其德ヲ云人ナカリキト云ヘリ。

春草ノ野飼ノ駒モノチノヨノ後ノシルヘトナラハ社アラメ

〔春草の野飼のこまもなきあとの法のしるへとならはこそあらめ〕

王粲覆碁（雜部）　山陽人也。祖曾並爲漢王公。

魏王粲大臣ニ至ル。若カリシ時。人トツレテモノヘユク道ノホトリニ碑文ヲミル。ツレタル人ノ云。汝ヲ此碑文ヒトタヒ見テソラニ　オホエテムヤト云。王粲ウシロムキテソラニ誦ルニ一字モオトサス。王粲昔圍棊ノ局ヲヤフルヲミル。王粲モトノ如ニ石ヲオキテケリ。人コレヲ信セス。サラニ石ヲオキテ。ヒトタヒミセテ。ウシロムキテ、他局ニ石ヲオカセテ。後ニナラヘテ見ニ。石ヒトツモオキタカヘス。スヘテヒトタヒモキヽ。ヒトタヒモミツルコトヲワスルヽコトナカリケルナリ。

カヘル鴈ヘタツル雲ノ名殘マテオナシ跡ヲソ思ヒツラ子シ

〔打みたれ霞にきえて行鴈のおなしあとをそおもひつられし〕

龔勝不屈（眞子局）　王莽ハ成帝ノ舅。王曼之子。初封都侯。以女爲平帝后。進封安漢王。遂即眞改號新室。改元建國。在位十五年。凡十八年。

漢龔勝意賢ニシテ名節ヲアラハセリキ。光祿大夫タリキ。漢ノ平帝カクレ給ヒテ後。宣帝ノ玄孫孺子嬰即位之時。王莽先帝ノシウト、シテ攝政程ニ。嬰ヲ捨テ、ミツカラ位ニツキテノコロ。意有人各ニケ隱レテ此ニシタカハシトス。春ハ日テリ水絕テ東作ヲ忘レ。秋ハ風アラク蝗フリテ西收オコタレリ。道ヲ知ル人无リケレハ。行フ所ロ亂テ國ヲサマレル時无シ。民ツカレツハモノ飢テ。金一兩カ直ノ米三升ニ成ヌ。此時龔勝深クコモリキヌ。王莽龔勝ヲ講學ニ祭酒ニ成テツカハムトスレトモ。病ノ由ヲコタヘテシタカハス。後ニ大師ノ印綬ヲ以テ。郡ノ守[illegible]カサトニ入テ致詔。オモクワツラヘルヨシヲモラシテ。東頭ニシテ朝服ヲキテ使ニカタリテ云ク。我レ漢ノ厚恩ヲウケテムクイムト思ニ。トシステニオイニタリ。豈以一身事二姓。下見故主哉。朝ニ來リタニ來テイサナフトモ。イツヘカノスト云テマサニシタカハス。又仁承君ト云賢人有。身タハフ心アリテ王莽ニシタカハスシテコモリヌ。頻ニ召イタサムトスレトモ。イツハリ清盲ヲツクリテイテス。シヌシキウトキ皆マコト、思ヘリ。少兒ノアヤマリテ井ニオチイルヲミレトモ。術業カキリ有テ。タスカラサラムモノユヱニ。タスケントセハ。我イツハリノアキシヒアラハレナムスト思テ。ミスカホニテヤミヌ。妻彌マコト、思テ。承君カメノマヘニシテマヲトコニアヘリ。ミ

レトモツユハカリモ色ニイテス。カクテノミスクシケリ。長沙定王發六代ノ孫光武。外ニハ武威有リ。内ニハ仁惠有テ。人民悉クニ歸シケリ。イクサヲオコシテ王莽ヲウチテケリ。隱レコモレリシ聖賢ノ人藝能ノ徒。コヽカシコヨリ出。亂レタリシ政ヲ改メテ。仁徳ヲオコナハレケリ。イツシカヨヲサマリ人ヨロコヘリ。一莖ノ種ヲウヱテ九穗ノアハヲナセリ。實ニ賢才ヲ賞シ深ク讒佞ヲ退ラレケリ。

ナニトナク思ハヌ山ニヨフコ鳥キシカタニノミカヘル心ヲ

〔舊本歌同〕

伯成辭耕 苗代

伯成アサナハ子高諸侯タリ。堯天下ヲヲサメテ舜ニユツリ給フ。舜禹ニ授ク。子高侯ヲ辭シテ田ヲ作テ靜ニ世ヲワタリケリ。

〔心をは苗代水にさはかせて世をうき草のねをたえてけり〕

李廣成蹊 桃

李廣隴西成紀人也。弓箭ノ道ニ賢コカリケレハ。タヽカヒノ功コヽニ重リテ。將軍ニウツサレニケリ。大史公カ云。余觀李將軍悛々タルコト如鄙人。口不能道辭云ヘリ。死時天下ニシルモシラヌモ。此ヲヽシミテカナシミヲツクセリ。世ノ人ノコトワサニ云ク。桃李不言。下自成蹊ト云ヘリ。李將軍ヲヤヲ虎ニクハレテ野ヘヲ行ニ。草ノ中ニ虎有ト見テ。此ヲイツラヌキテケリ。其矢飲羽ト云リ。近クヨリテ見レハ。虎ニハアラスシテオホキナル石ナリケリ。石ト見テ後ニイルニ。其矢タツ事无シ。オヤヲクラヒシ虎ト思テ。イケルニヨリテ石ヲツラヌケル也。

モノイハヌ花モ人メヲサソヒケリ道モサリアヘス桃ノ下陰

〔舊本歌同〕

糜竺收資 燒

糜竺昔シ京ヨリ車ニ乘テ家ニ歸ル。イマタ家ニイタラサル數十里ナルニ。ヒトリノ若キ女ノカチヨリ歩ミクルニ値リ。糜竺アハレミテ車ニ乘セテケリ。此女歸ラムトスルニノソミテ。我ハ此天ノ使トシテ東海ノ糜竺カ家ヲ燒ニ行也云。糜竺アサマシト思テマトヒカヘリテ。家ノ内ノ資ヲハコヒイタシ。人ヲオヒイタシテ待ニ。日中ニ火イテキテ燒ニケリ。

イカ計コヲ思雉子マヨハマシ燒ヘキノヘヲケフトシラスハ

「子を思ふ雉子やのへにまよはましやくへき春をかねてしりせは」

壺公謫天

壺公ハ其姓字ヲ不知。汝南費長房市ノ掾也。時ニ藥ヲウル人有リ。藥ヲウルニ直ヲカキル事ナシ。ヒトツノツホヲヤノウヘニオイテ。日イリテ後ニトヒテツホノ中ニ入ル。人此ヲ見コトナシ。長房ノミソ樓ノ上ニ居テ見ケル。タヽモノニアラスト知ヌ。ツホヲ身ニシタカフル故ニ壺口ト云ナリ。長房壺公カ居タ

ルアタリヲハラヒキヨメテ。餅ヲス、ムルコトタヒカサナリニケリ。壺公長房ニナサケヲ思ヒ知ス。日ノ入ル程ニ長房ヲヨヒテ。我カツホニ入ラムヲ見テ。我ト、モニヲトリイレトヲシフ。長房トモニツホニ入ヌ。内ニ樓觀五色ニシテ重門閣道有。左右ニ侍者數十人。壺公カ云ク。吾ハ仙人也。天曹職ヲツカサトリテスフル所オホシ。ツトメオコタル事アルユヱニ。罪ヲ得テ謫セラレテ。シハラク人間ニ來レル也ト云テ。仙術ヲ、シヘムトチキレリ。

旅人ノ宿カルノヘノツホスミレ思ハヌ春ノヒカスヲソツム

〔舊本歌同〕

濟叔不癡 晉書　晉代太原人也。身長七尺八寸。隆額大鼻アリ。晉代王湛ト云者ノ有リ。字ハ處沖ト云リ。賢才人ニ勝レタレトモ。色ニアラハス事無レハ。兄弟家族ト云ハトモ。王湛ヲオロカナル物ト思ヘリ。父昶ヒトリノミ此ヲ知レリケリ。父死テ後ハカノホトリニイホリヲムスヒテ。門ヲ閉テシツカニ世ヲスコシテ世ノマシロヒヲコノマスシテ。昔ヲコヒツ、涙ヲ流テアカシクラシケリ。王湛カ兄ノ子ニ濟ト云者有リ。嘗王湛カモトニユキテミケレハ。ユカノホトリニ周易アリケリ。モト思ヒアナツリケル心ニテ。此ヲハナニ、カハセムトスルト、ヘハ。王湛アサワラヒテ思トコロアルニ、タリ。ツヒニ論易ヲ濟ツマリニケリ。武帝濟ヲ見給フコトニアサケリテ。汝カ家ノ癡叔ハ死レテカヤ。未タシヤト、ヒ給ヘハ。濟コタヘ申カタ无シ後ニ簡問給トテ。臣カ叔コトニオロカナラスト申。カサネテ讓トカヒトシキト問ヒ給ヒケリ。濟申テ云ク。山濤已下魏舒已上ト申セリ。此ヨリ名ヲアラハセリ。

フミカヨフ山チヲタニモイハ[illegible]イハネハ跡アト深キ句ヲ

〔舊本歌同但句作心〕

靈運曲笠 宋書

謝靈運コノミテ曲柄笠ヲモチヒケリ。孔隱子士ソシリテ云ク。汝ハ心スナホナラム事ヲ思ヘリ。マカレルモノヲステサルコト。汝チミニ、スト云ヘリ。靈運答テ云ク。オノカミノ影ヲオロカニニクム人有キ。オノカ、ケハオツヘキモノニアラス。イタリテオロカナル人トイヒツヘシ。マカレルカサハ。枯木ノマカレルカケヲキラヒニクマハ。スナハチカケヲオチシタクヒナリ。我ハミノ影ヲオツル心ナケレハ。曲レル柄ノ笠ヲステスト云ヘリ。影ヲオツル人ト云ヘルハ。昔シ漁父ノ孔子ニ申テ云ク。身ノ影ヲオチテニケハシル人有。足ヲアケテ早クハシルニ。影モシタカヒテハヤシ。身ヲセメテハシルニ。我ハ尙オソク。オフ物ハハヤキコ、チシテ。力ヲツクシテハシルニ。イキタエテ死ヌ。イタリテオロカナルタメシヲ云ル也。

ミカサ山松ノヨコエヲトカメキテ宿カル藤ノ花ニヲラルナ

〔三かさ山松のよこえに今そしる色こきふちの下の心を〕

劉寵一錢 款冬

劉寵會稽ノ守ニウツリテオモムキケリ。若耶溪ノウチヨリ六ノ老翁ノ歳ミナ七八十許ナルナヒ、キヰテ劉寵ヲオクリケリ。各錢ヲ百ツヽヲモタセタリ。劉寵此ヲトラハ人ノ寶ヲムサホルニ似タリ。此ヲトラスハ人志ヲウシナフニナリヌヘシト思ヘリ。時ニ人コトニヒトツノ錢ヲトリテケル。國ニキタル程。人ノツヒエヲヽシミテ。人ノモトヘモユクコトモナカリケレハ。ヨルホユル犬モ无ト云ヘリ。後ニメシテ爲將作大匠。

イヘツトニヒトフサヲリシ山吹ノ春ニイロアルヰテノ旅人

〔一ふさを家つとにせん山吹もゐてのかさしの名とそなるへき〕

薊訓歷家 暮春　　後漢人也。

薊訓ハ齊ノ國ノ人也。心有人薊訓カミチニカシコキコトヲシリテ、各々ユカシク思テ、イカニモシテ相ヒミムト云ニ。次日廿三家ニオナシ時キタレリ。家コトニカホノ色モ衣ノ色モカハラス。身ヲワケヽルナルヘシ。後ニ驢ニ乘東ヲサシテカヘリサルニ。貴人各馬ヲモテオフ。ユクコト半日オノ〳〵ツカレテ返ル。薊訓昔シ隣人ノ兒ヲイタキテ。トリハツシテオトシテシニヽケリ。母サケヒナキテウツミテケリ。次日薊訓行テホリ《出テ。生タルモトノ兒ヲ懷テ母ニカヘシ》ケルニ。母マコトヽオモハス。ウタカヒヲナストイヘトモ。コオヤヲシレリ。カハルコトナカリケレハ。カキリナクヨロコヒテ。

ヤトコトニオナシナコリヲシタフ哉春ノワカレノ夕暮ノ空

〔舊本歌同〕

蒙求和謌第二

夏部十五首

辛毗引裾 更衣　孟嘗還珠 卯花　漆室憂葵 葵
樊噲排闥 水鶏　漂母進食 郭公　時苗留犢 菖蒲
常林帶經 早苗　高鳳漂麥 夕立　陸績懷橘 盧橘
車胤聚螢 螢　卞和泣玉 [illegible]　田單火牛 篝火
黃香扇枕 扇　西施捧心 夕顏　魏顆結草 夏草

辛毗引裾 更衣

辛毗ハ潁川人也。オホヤケ冀州ノ人戶ヲ河南ニウツサムト仰ラレケルヲ。高モ苟キモ愁歎ケリ。辛毗侍中トシテ人ノ愁ヲカヘリミテイサメ申ス。オホヤケ御氣色タカヒテ。タチテ入リ給ヲ。御裾ヲヒキテ。君ヲ思ヒタテマツル故ニ。世ノイタミヲ申也。此ヲモチヒ給ハサラムコトハ。我身ノ爲非ストヽメ泣々イサメ申ニアハレヒオホシテ此事ヲ留ラレニケリ。

タカタメモウラナカリケリ夏衣ヨヲハクヽミシ情ノミカハ

〔宿ことにしほれし色を夏衣うらなくけふそおもひしらする〕

孟嘗還珠寄花

後漢孟嘗字ハ伯周ト云リ。合浦太守タリ。郡ニハ田ヲナムトツクル事モ無シ。珠許ヲ貿トシテ世ヲワタル所ナリ。前ノツカサマツリコトヨコサマニシテ。人ヲワツラハシ珠ヲムサホル故ニ。人シリソキ玉交趾ニウツリニケリ。孟嘗心清潔ニシテムサホルコヽロナキ故ニ。シリソキニシ人來リスミ。サリニシ珠返リニケリ。郡トミサカエテ昔ノ如シト云リ。

アレハテシ垣ノウツキモ花サキテ昔ニカヘルタマカバノ里

〔しはしこそ世をうの花のしそめともむかしにかへる玉川の里〕

漆室憂葵葵

魯ノ漆室ノムスメハトキヲスクルマテヲトコニモミエサリケリ。ユフヘノソラノ心ホソキニ。柱ニヨリカヽリテ。ウソフキタチテケルヲ。隣ノ婦アヤシト思テ。ナニ事ニウソフキカナシムソ。人ノ戀シキカト問ニ。我カ魯ノ君ノオイオトロヘテ。太子イトケナキコトヲウレフルナリトコタヘケリ。隣婦カ云ク。ソレハ大夫ノウレヘナリ。汝カコトニオヨハスト云。女云ク。シカハアラス。昔世ノヲサマラサリシ時。晉ノ客我家ニ宿リテ。馬ヲソノヽウチニツナキシニ。馬ハナレテ葵ヲフミカラシキ。我レトシヲフルマテアフヒニトモシ。我カコノカミ隣ノ女ノニクルヲオフミチニシテ。水ニオホレテシニヽキ。我身ヲヲフルマテニコノカミナシ。皆是世ノシツカナラサル故也。我閭河浸ニ九里。漸洳三百歩。今魯ノ君老オトロヘ給ナ。太子マタイトケナクオハス。國亂テ君臣父子ソノ辱ヲカフラムニ。婦人ヒトリノカルヘキニアラストコタヘケリ。

イカニシテ長閑キミヨニアフヒ草ソノカミ出ソ思シルニモ

〔ありしにもあらぬ袂にあふひ草むかしをかけてしのふかな哉〕

（増）樊噲排闥水鷄

樊噲ハ沛國人也。漢高祖ノ忠臣タリキ。位ニツキテ天下ヲトリテ後。病アリテ人ノ多クマキル事ヲトヽメテ。ヒトリノツカヒ人ヲ身ニソヘ給ヒキ。勅下シテ門戸チマモラセテ群臣ヲ入ラレス。樊噲世ノタメ此ヲ歎テ。オシテ門戸ヲヒラキテ。近クスヽミマキリテ。涙ヲ流テイサメ申テ云ク。君ノ世ヲトリタマヒシハシメヨリツカヘテ忠アリキ。天下ステニサタマリヌ。君ノ御ヤマヒヲ大臣オチオソレ申ス。群臣ニミエ給テ。ハカリコトヲメクラシ給ヘキ所ニ。一人ヲノミチカツケテ。群臣ニウトマレタマハムコトノ心ウクカナシキ也。昔趙高カ故ヲハシリタマハスヤト奏スルニ。オホヤケワラヒテオキイテ。此ニシタカヒタマヒニケリ。

〔くらかりし心のやみも明にけりまきの板戸をたゝく水鷄に〕

漂母進食[illegible]

韓信ハ淮陰人也。（[illegible]）若時家マツシカリケリ。下郷ト云所ニ行テイヘヲツクリケルニ。漂母來テ韓信ヲウヤマヒアハレミテ。オノカ家ニ入テヤスメナクサム。食ス丶ムルコト日カサナリニケリ。韓信此カナサケヲ思シリテ。オモクムクイムト云ニ。漂母カ云ク。我王孫ヲアハレム故ニ。君カコトヲオロソカナラサルナリ。ムクイムコトヲハノソマストコタヘケリ。後ニ韓信楚王トシテ下郷ニ都トシテ。漂母ヲメシテ百金ヲ給ヒケリ。

アハレトソオモヒシリヌル時島カタラヒオキシ古ヘノコエ

〔舊本歌同〕

時苗留犢[illegible]

魏時苗ハ清廉ノキコエ有シ人也。壽春ノ令トシテ任ニオモムク。始メ犨車ニ黄ノ牸牛カケタリ。牛國ニシテヒトツノ犢ヲウミテケリ。時苗年限キハマリテ任ヲサルトキ。犢ヲト丶メテ云ク。コノ土ノ所ロヨリ生ル。カルカユヱニト丶ムト云。

コノ里ニネサスカハヘノアヤメ草都ニイカ丶引ウツスヘキ

〔舊本歌同〕

常林帯經早苗

常林若クシテ書生タリキ。漢ノ末ニ世オホキニ亂テ。人安事无リケリ。時ニ常林田野ニコモリテ。父ヲ身ニソヘテ田ヲツクリケリ。其妻カレヒヲモチテユキテ。ウヤマフコトアルシノコトクニシケリ。後位大常博士ニ至リニケリ。年八十三ニテウセニケリ。

沈ミテモフミ丶ル道ヲウレシヤト山田ノ早苗思ヒトリケム

〔舊本歌同但ヤト作とや〕

高鳳漂麥晩立

後漢ノ高鳳勤學ノ人也。其妻トカクシテマツシキヨヲワタリケリ。麥ヲ庭ニサラシテ。ス丶メニハトリヲオヘトテ。竿ヲ高鳳ニアタヘテ妻ハ市へ出ニケリ。時ニ雨ニハカニフリテ。麥ナカレニケリ。妻市ヨリ返テオホキニ恨ミケレハ。我レアヤマテリ。書ヨミツル程ニ。雨ノフルコトモ。麥ノナカレツラムコトモ。ワスレニケリト云テ。ワヒナケキケリ。オホヤケキ丶給テ。公車ヲツカハシテモ。イツハリノカレテマキラス。妻ト田ヲツクリテコモリ居ニケリ。

夕立ノ庭ノチキリモワスレミツフカキ流ヲタムトセシマニ

〔夕立の雲のちきりもわすれ水軒の雫のか丶るへしとは〕

陸績懐橘盧橘

陸績六歳ニシテ袁術カモトニユキケリ。橘ヲトリイタシテアタヘタリケルヲ。陸績フトコロニトリイレテヲサミケリ。袁術トヒケレハ。母ニアタヘムタメナリトソコタヘケル。

橘ヲマタウラワカキ梢ニモミニシム風ノイロハアリケリ

〔風おつる梢の外と身にしむはは花橘のにほひなりけり〕

車胤聚螢螢　晋代大臣也。河東人也。位至大司空。見晋書五十三卷。

車胤若リシ時コノミテ書ヲ誦ニ。家マツシクシテ。油ナカリケレハ。螢ヲアツメテ。絹ノフクロヲヌヒテ。ホタルヲ入テ。トモシヒトシテフミヲヨミケリ。後ニ司徒ニ至リニケリ。

ヒト卷ヲヨミモハテヌニアケニケリ螢ヲトモス夏ノ夜ノ空

〔舊本歌同〕

卞和泣玉璞　此說異說尤多。

楚人卞和楚山ノウチニテヒトツノ玉璞エテ武王ニタテマツル。玉ツクリニミセラル丶ニ石ナリト申ス。イカリテ卞和カ右ノ足ヲキラレヌ。後ニ文王位ニツキタマヒヌ。マタ卞和コノ玉ヲタテマツル。玉ツクリニミセラル丶ニ。コレハサキニモステラレシ石ナリト申シケリ。イカリテ左ノ足ヲキラレヌ。卞和アラタマヲイタキテ。楚山ノフモトニ三日三夜チノ涙ヲ流テ歎居タリ。王コノ事ヲユヱアルラムトサトリテ。玉ヲメシテ玉ツクリニオホセテミカ丶ル丶ニ。ヒカリ上古ニスクレテ。和氏璧トソキコエケル。琴操云。卞和カ玉石ヲ〔始ハ〕懐王ニタテマツル。次ニ平王ニタテマツル。次平王ノコ位ニツキテ。玉ヲミカキテアラハサレテ。卞和陵陽侯トナサル。サレトモ辭シテサリヌト云ヘリ。

ヒニミカクミ子ノ梢ニナク蟬ノコヱコソタマノ響ナリケレ

〔舊本歌同但ヒ丶キ作光〕

田單縱牛燧火

田單城ヲマモリテ燕ノイクサヲフセクニ。牛千頭ヲ取テ。アカキカトリニ五色ニヱカキテキセテ。ツノニアフラヲソ丶ケリソノウヘニ兵双ツクリテ。尾ニ葦ヲツカ子テ。ソノサキニ火ヲツケテ。夜牛ヲハナチテ。壯士五千人ヲシリニタテオハシムルニ。千頭ノ牛火ノアツクナルニシタカヒテ。タケリイカリテ燕ノイクサノ中ニハシリミタレテイルニ。ツハモノシカシナカラサワキマトフ。龍カトノミソミエケル。牛ノアタルトコロ死傷セスト云事ナシ。田單ニ賞ヲオコナハレテ平晙君トス。

ナニハカタアシヲリクフルカヤリヒノ煙ヲウシト思ケル哉

〔舊本歌同但カタ作めか〕

黃香扇枕扇

黃香孝子也。夏ノ日ノアツキニハ母ノ枕ヲアフキ。冬ノアラシノサユルニハ母ノユカヲアタ丶メケルナリ。九歲ニテ母ニオクレテ。カナシヒウレヘケレハ。サトヒトキツトヒテ。タスケアハレミケリ。

アフクヘキ人ナキミコソ悲シケレオナシ枕ニ夏ハキヌレト

〔しての山子をおもふやみの枕にも扇の風をおもひいつらん〕

西施捧心顰

西施ハミメモカタチモタクヒナカリシ女ナリ。ヤマヒニフシテ。ムネヲオサヘテメヲヒソメケレハ。イヨ〳〵コヽロクルシクイタハシキサマナリケリ。其里ノミニクキ女トモ。コレヲウラヤミテ。ソラムネヲヤミテメヲヒソメケリ。西施カ顔色コソイカナルニツケテモ。イミシクアテナリケレ。ミニクキ女トモメヲヒソメケルヤマヒスカタ。イトヽオソロシクソミエケル。

ヲ顰ノヌソリレ時ノソラメニモタクヒニスヘキ花ノナキ哉

〔一本叢同但終句作花そのこらぬ〕

魏顆結草夏草

魏顆ハ武士カコ(子)ナリ。武士寵妾アリケリ。武士病ニツキケルハシメニ魏顆ヲヨヒテ。我死テ後ニハコノ妾ヲ汝カ妻ニシテ。イトホシクセヨト云ケリ。ソノヽチヤヽヒオモクナリテ。モトノ心モウスレテ。我レ死ナハ妾ヲモコロシテ。オナシヒツニイレヨト云テ。武子シニケリ。魏顆オモハク。狂亂ノ時ノ事ヲモチフヘキニアラス。正念ノコトハニシタカハムトオモヘリ。サテメニシテケリ。後ニ秦ノ國ト晉ノ國トミタレタヽカフニ。魏顆晉ノ將トシテ秦ニ(向フニ。)旅宿夢ノ内ニ。ヒトリノオキナ草ヲムスヒテ。秦ノイクサヲフセキテサリヌ。アシタニ秦ノイクサオホキニヤフレニケリ。ソノヨノユメニ。コノオキナマタキタリテ。我ハ汝カ妻ノチヽナリ。汝道ヲシリサトリアルユヱニ。ワカムスメヲコロサヽリシウレシサヲ。キタリテムクイツルナリトイヒツヽサリヌ。サメテノチ此事ヲ思ヒ合セケリ。

夏草ノナヒクスヱハヲミツルカナシケミヲムスフ夢ノ枕ニ

〔夏草のおいのするゑはをみつるかな野中にむすふ夢の通路〕

蒙求和歌第二

秋部廿首

張翰適意立秋　郗隆曬書七夕　季倫錦障霧

袁盎却座女郎花　聚顆貝判萩　楊修捷對蘭

息躬歴詆苅萱　陳范五袴　蘇武持節雁

五鹿嶽々薄　楊寶黄雀鶉　公超霧市霧

顔駟蹇剝述　鄭庄置驛　眞長望月月

伯瑜泣杖擣衣　荆軻鑿楹虫　桓景登高菊

離朱明目紅葉　秦彭攀轅暮秋

張翰適意立秋

張翰齊王ニメサレテ東曹掾タリキ。齊有(ニレ)時。秋風ノ颯然トシテハシメテイタレルニ。江南ノ菰菜(サイノ)アツモノ鱸魚ノナマスヲ思イテヽ。ニハカニカヘラムトス。人トヽムレトモキカス。人ノタノシフコト心ニカナフヲヨシトス。オホヤケコトニ羈(ホタシ)。數千里ヲマモリテ。ツカサクラヒヲモトメテモ。ナニヽカハセムト云テ江南ニカヘリヌ。ソノ後无二程一齊王ホロヒタマヒニケレハ。時ノ人張翰ハヨノヒサシカルマシキコトヲ棄テサトリテ。

サリニケルナリトソイヒケル。

故里ノナニハノナミニ思ヒタツチリシモソテニ秋ノウハ風

〔さらてたになにはの波にさそはれて袖にかさねて秋の初風〕

郝隆曝書七夕

郝隆文道ニカシコクシテ。ヒロクマナヒ。フカクサトレリシ人也。七月七日ニタナハタマツリニ。ヨ人フミチサラシケリ。文章チエムカタメナリ。時郝隆ハ庭ニアフキフシテ。腹チサラシケリ。其故チ問ヒケレハ。我腹ノ内ナルフミチタナハタニカスナリトソコタヘケル。

棚機ニミチソカスヘキ心ヨリ外ニハ文ノアラハコソアラメ

〔舊本歌同〕

季倫錦障　晋代人。

晋季倫ハ石崇カ字也。家トミ財ニユタカナリケリ。時王愷ト云人。ムラサキノ歩障ツクルコト四十里ニツヽキケリ。ミル人メオトロカシケリ。季倫錦ノ歩障チツクルコト五十里ニオヨヘリ。カレニ敵シケリ。

武藏野ハ萩ノニシキチオラヌマソワカ紫ニシカシトハミシ

〔むさしのゝ萩の錦をみぬまにそ若紫にしかしとおもひし〕

袁盎却座女御花

漢ノ文帝ノ上林ノミユキニ。愼夫人イヘル女御カタハラニ有リ。袁盎タチヨリテ夫人ノ座ヲシリソケヽリ。オホヤケ御ケシキカハリ。夫人イカレル色アリ。袁盎カ云ク。オホヤケハキサキアリ妾アリ。夫人ハ妾ナリ。妾ハオホヤケトユカヲヒトツニスル事ナシ。昔ノ人彘カタメシヲ思ヒシレトイヘリ。オホヤケ袁盎カシコキ心ヲホメテ。金五十斤ヲタマハセケリ。オホヤケ人彘カタメシト云ルハ。漢ノ高祖ノキサキ呂大后ノ太子孝惠ヲウメリ。マタ戚夫人カハラニ趙王如意ヲウメリ。夫人御志フカヽリケル故ニ。東宮孝惠ヲステヽ。趙王ヲ東宮ニタテカヘムトシ給ヒケルヲ。呂大后モナケキヨヒトモカタフキケリ。張良ハカリコトヲメクラシテ。商山ノ四皓ヲカタラフニ。四皓山ヨリイテヽ東宮ヘマキリケリ。高祖コレヲミタマヒテ。四賢ヒトツコヽロニキタリタスケタテマツルコトヲ。コヽロニクキコトニオホシテ。東宮タテカフヘキコトヲオモヒトヽマリタマヒヌ。高祖カクレ給ヒテノチ。孝惠クラヰニツキタマヒヌ。呂大后趙王ヲウシナヒ。夫人ヲウシナハムトスルヲ。孝惠帝ナサケフカキコヽロニテ。コノコトヲサトリテ。趙王ヲミニソヘ。夫人ヲハクヽミタマヘトモ。帝ユミイ[illegible]マフヲリ。趙王ノヒトリキタマヘルヲウカヽヒテ。鴆酒ノマセテケリ。夫人ヲハアシテヲキリ。ミヽヲフスヘ。クスリヲヌリテ。オニノヤウニツクリナシテ。厠ノ下ニオキテ人彘トナツケヽリ。惠帝カナシミウレヘタマヒケリ。鴆酒トイヘル毒酒ナリ。鴆ト云鳥有リ。クチナハヲノ

ミクランナリ。ソノ鳥ノ毛入ヌル酒也。マタ鴆ノハヲ酒入テ。ノマセテコロセリトモ云リ。惠帝コノ後ヨノマツリコトヲオコナハス。ヤマヒニシツミタマヒテケリ。人彘ト戚呂后トリコロシテケリ。父呂公昔呂后ヲミテ云ク。幸貴ノミナントモ、千夫ノ相アリトイヘリケリ。高祖一人カホカミエタル人ナクシテシヌ。ハカニヲサメテ。寝床屏風ノカサリイキタリシトキノコトシ。ツキノ日狩獵人千余人タカヲスヱイヌヲヒキテ。雨ニアヒテ日クレヌ。ソカノモトニカヘリテ。オノ〳〵アツマリヤトレリ。内ニ美人有リ。モノ云コトナシ。ソノミヲマサクルニ。ハタヘアタヽカニシテ。ナツカシキニホヒナリケレハ。ヒトリフタリチカツキアヒニケルホトニ。ミウラヤミツヽ。ワレモ〳〵トアラソフホトニ。九百九十九人ニアタルタヒ。ソノミトケウセニケリ。カリヒトタレト云フコトチシラス。後ニコソ呂后トハシリニケル。高祖チタハヘテ千人ノ相ムナシカラスソアリケル。

女郎花タヽノマカキハ心セヨサテソムカシモ露ニシヲレシ

「女郎花まかきの宿はこゝろせよ露のもれきくこともこそあれ」

廉頗負荊蒔

道ノ將軍廉頗。藺相如ト位ニシテカミニアルコトヲイキトホリケリ。藺相如此事ヲキヽテ。廉頗カイツル時ハ。ヤマヒトイヒナシテイテサリケリ。後ニ道ニイテヽユキアヒニケリ。藺相如車ヲシリソケテカクレサリヌ。舍人カ云。廉頗悪言ヲイタセリ。庸人ナホハツヘシ。イハムヤ將軍トシテオソルヽコト。フカヽルヘキニアラサルヲヤトツケシラセケリ。藺相如カ云。秦王ノ威アリシヲタニモ。ユキテナホヒソメキヽ。廉頗ヲオソレオツヘキニアラス。秦ノワカ國趙ヲセメヌコトハ。ワレト廉頗トフタツノ將軍アルヲオソルヽユヘナリ。タトヘハフタツノトラタヽカヒアハヽ。ソノイキホヒトモニイクヘカラス。我國ノタメニミヲステムコトヲサキトシテ。ワタクシノアタヲムタニルコトヲノチニストコタヘケリ。廉頗此事ヲモレキヽテ。ハチカナシミテ屓荊相如カ門ニ至テツミヲ謝シケリ。云少人イヤシクシテ君子ヲカルクシ。アナツラシメケルコトヲタクユナリト云ヒケリ。

トモスレハソヨク時雨ノオトカヘテ軒ニヲレフス荻ノ下風

〔舊本歌同〕

楊修捷對蒔

楊修魏王曹操カ主簿タリキ。江南ニ至テ曹娥碑ノ文ヲミルニ八字アリ。黄絹幼婦外孫齏臼トカケリ。曹操此ヲサトリエス。楊修シレリト云ヲ。シハシト云テ。アユシテ卅里ニシテサトリエタリ。マツ楊修ニトカシムルニ。楊修カ云ク。黄絹ハ色ノ糸ナリ。色糸ハ絶字ナリ。幼婦ハ少女ナリ。少女妙ノ字ナリ。外孫ハ

女子ナリ。女子ハ好字ナリ。齏臼ハ受辛ナリ。受辛ハ辭字ナリ。四字ニツヽメテ絶妙好辭トイヘリ。曹操コレヲキヽテ。ワカサトレルコトシトホメケリ。

ミルカラニシルクヤハアラヌ糸薄ホトヘテ誰カ思トキケル

「舊本歌同」

息躬歴詆

漢書ニ云。息躬ハ容姿ウルハシク心人ニハチラレタリキ。ヨニ佞臣ハスヽミ賢人ハシリソクコトヲ。ヨノツ子ノコトノハニハカタフキケリ。丞相王嘉ヲハスクヨカナルニヽタレトモ耆宿タリ。モチキルヘキニアラストイヒ。御史大夫賈遂ヲハヨワ〳〵シクシテソノ職ニタヘストイヒ。左將軍公孫祿。司隸鮑宣ハミナホカニスナホナルキユエアレトモ。（內ニハ愚ナル心有テ政ノ道ヲサトラス。）時ノ諸官イツレモカタクナニシテ。カソフルニタラス。ニハカニコハキツハモノヨヲミタラムトセムニ。タレカシツムルハカリコトヲメクラサムトソ。ヨヲソシリケリ。

「夕風の吹もみたらはいかゝせんまかきあれたる庭の苅萱」

廉范五袴

廉范蜀郡大守ニウツリテコトヲオコナフニ。國ニユタカニタミヤスラカナラムコトヲノミオモヘリ。サキノツカサハコトニフレテ國ヲミタリケリ。ヨル火ヲフセクニモ。人ノワツラヒヲナシケリ。廉范ハサキノマツリコトヲアラタメテ。人ヲアハレフ心フカヽリケレハ。イヘ〳〵ニミツヲマウケテ。火ヲフセカシムレハ。人ノワツラヒナシ。トキニタミウタヒテ云ク。廉叔度來何暮。不㆔禁㆓火㆒人安措。昔日無一襦。今有五袴。

日ニソヘテ秋ノ哀ハオホエ山イクノトモナキフチハカマ哉

「日にそへて秋のあはれは大原やいくのともなき藤袴かな」

蘇武持節

蘇武漢王ノツカヒトシテ。匈奴ヲセメニオモムキテ。忠節ヲツクス程ニ。カヘリテエヒスニトリコメラレニケリ。匈奴王單于蘇武ヲオヒヤカシテシタカヘムトスルニ。漢ノ節ヲウシナハスシテヒサマツカス。ナホツルキヲカヽヤカシテセムレトモ。蘇武堂々トシテ云ク。我漢ノ使也。エヒスニシタカヒニハコサリキトコタヘテ。カタナヲトリテ自刺。匈奴オホキニオトロキテトリハナチテ。キスニクスリヲツケテタスケテケリ。後深窖ノ中ニコメオキテケリ。ワツカニユキハカリクヒテ。イノチヲイキケリ。七日ヲスキテヒラキテミルニ。蘇武ツヽカナシ。匈奴蘇武ヲ神ナリト思ヒナリヌ。北海ノホトリニ出シテ。ヒツシヲカハスルニ。ナホ漢ノ節ヲウシナハス。ワツカニイケルニヽタリトイヘトモ。牡羊ニ乳ヲ期シテ歳花ムナシクカサナリニケリ。武帝カクレタマヒテ。昭帝ノ世ニナリテ。帝ノ使匈奴ノ國ニイタリテ蘇武ヲタツヌルニ。ハヤクシニヽキトイツハリコタヘ

ケリ。イマタアリトハカリタニモ。フルサト人ニキカレハヤト思カヒナシ。アキノソラヲムカヘテ。宮コノカタヘユク鴈ノアシニ。フミヲムスヒツケテケリ。鴈南ヲサシテトヒサリヌ。帝上林苑ニアソヒタマフヲリシモ。賓鴈書ヲカケテイタレリ。トリテミタマフニ。蘇武サリテヨリコノカタ。十九年ノウレヘヲカキツヽケタルナリケリ。カキリナクアハレトオホシテ。タシカニ蘇武ヲタテマツレトセメラレテ。ソノトキカヘシタテマツリテケリ。アマタノトシヲヘタテヽケレハ。カホノ色オトロヘ。カシラシロクナリテ。アリシニモアラスソナリニケル。

ヘタテコシ都ノ秋ニアハマシキ越路ノ鴈ノシルヘナラスハ

〔さても猶ふみかよふへき雲路かははつ鴈かねの便ならては〕

五鹿嶽々

五鹿君子充宗ト云ヘリ。權威ヨニシラレ談説名エタル人也。朱雲ト云人口弁アリ。コレヲヲルモノナシ。トモニアラソヒテコトヲ論スルニ。五鹿ツマリヌ。トキノ人云ク。五鹿嶽々タリ。朱雲ソノツノヲヲルト云ヘリ。

雲井ヨリノハラノ草ヲ吹風ニヲレフス鹿ノコヱキコユナリ

「舊本此項作鳴鶴日下士龍雲間其歌云梓弓いるの〻をしか聲たて〻心よはしとつまにみゆらん」

楊寶黄雀

後漢ノ楊寶七歳ニシテ。花山ノ内ニ行テ。一ノ黄ナル雀キスヲカフリテ。アリニツカマレタルヲミル。楊寶アハレミテトリテ家ニカヘリヌ。ハコノナカニ入テカフ。五穀ヲ不食。黄花ノ蘂ヲトリテカヒヤシナヒテ。十日ヲスキテキスイエニケリ。アシタニサリテ。ヨハニキタリテ。ハコノソコニトマルコトヤヽヒサシ。後に變シテ黄衣少年ノ人トナリテ。白環一雙ヲモチテキタリテ。楊寶ニアタヘテ云ク。コノタマヲタクハヘテ。ナムチ子孫ヲカサネテ三公トナルヘシト云テサリヌ。後ニタカフコトナシ。續齊諧記云。黄衣童子楊寶ニムカヒテ再拜シテ云ク。我ハ西王母カツカヒナリ。キミカ仁愛ニ〔ヲ感メ。〕白環四枚ヲアタフルトコロナリト云ヘリ。

ワカ門ノワサタノ雀タツアトノイナハニオケル露ノシラ玉

「舊本歌同」

公超霧市

後漢公超長楷カアサナヽリ。術道カシコカリシ人也。善爲五里霧。學者隨之。所居成市。故花陰有公超市ト云リ。時ニ關西人裴優三里キリヲツクレリケリ。

ヘタツルモハレユク色トミルモノヲ人ノ心ヲアキヽリノ空

〔たなひくも晴行色のなかめまて人のこヽろの秋きりの空〕

顔駟蹇剝

漢武帝昔輦ニノリテ至郎署ニ。ヒトリノ老郎鬢眉白ヲミテ問ヒ給

ニ顏駟文帝時ニ郎タリキトナノリ申ケリ。トシハルカニタケニケルマテ。ヨニアハサルユヱヲカサ子テトハルヽニ。コタヘ申テ云ク。文帝ハ文ヲコノミ給キ。我ン武コノム。景帝ミメヲコノミ給ヒキ。我カホミニクシ。君若キヲコノミ給フ。我レステニオイニタリ。コノ故ニ三代アハサルナリト云リ。オホヤケコノコトワリヲアハレトオホシテ。會稽ノ大守ニナサレニケリ。

蹇剝ハ蹇ハ難ナリ險ナリ。剝ハ不利有攸少人長ナリ。

ツヒニカク春サヘ秋ニアヒニケリヨヽニシヲレシヨハノ槿

〔思へたゝ日かけにあはぬ朝顔のよゝにしほれし老の末葉を〕

鄭莊置驛 前漢　陳留人也。

鄭莊ハ孝景帝ノ時ノ人也。毎ニ五日洗沐スト云リ。イハユル一月五日。一年六十日ヲイトマノヒマトス。鄭莊家ニ天下ノ名人アツメテ。湯ヲワカシテ。ヒルハヒクラシ。ヨルハアクルマテ。オモフサマニアソヒテ。心ヲヨロコハシメケリ。人々ユキカヘル馬ノツカレヲカヘミテ。長安城ノ外ノ四面ノ郊ニムマヤヲオキテ。傳馬ヲタテオキケルナリ。

イクタヒカ駒ヒク秋ヲムカヘコシアフサカ山ノセキノ旅人

〔もち月のこまひく秋をむかへきて思ふ人にもあふさかの關〕

眞長望月 月

眞長ト玄度トハナサケフカクイロヲシレルトモナリ。花ノ春モミチノアキ。心サシヲ通セストイフコトナシ。月ノクマナキヨ。眞長前文カモトニユキテアソフニ。眞長慨然トシテナケキテ云ク。清風朗月ニウラムユヱハ玄度カナキコトヲソト云リ。

玄度ヲハスキモノト云リ。

イカニセム友ナキ月ニ袖ヌレテオモハヌ里ニアリアケノ空

〔思ひ出るなかめに袖のかはかぬは友なき月に有明のそら〕

伯瑜泣杖 孝衣

伯瑜イトケナキトキ。心ニタカフコトアレハ。母ツヱシテウチケリ。伯瑜ツヱヲウケテイタミナクコトナシ。母オイテ後マタ伯瑜ヲウツニ。伯瑜オホキニイタミナキケリ。母ノ云ク。我昔ウチシニナクコトナカリキ。今サラニイタミナクコト。我ヲウラムル心アルヘシトアヤシミ云リ。伯瑜コタヘテ云ク。母ノワカクシテウチシツヱハ。ツヨクアタリテミニシミシカトモ。心ニハイマタイタマサリキ。今モツヱチイタミウラムルニハアラス。ツヱノヨワクアタルニツケテ。ヨワクオトロヘテ。チカラノツキハテタルコトヲウレヘナクナリト云リ。母コレヲキクニ。ゼンカタナクアハレトオモヒケリ。

秋ノヨノ老ノ子サメニウツ衣ヨワルヒヽキハイカヽ悲シキ

〔秋のよの老のねさめにうつ衣よはる音こそ身にはしみけれ〕

軻親斷機出

軻親孟母ナリ。孟軻カ母ナリ。孟軻ヲハ鄒孟子ト云ヘリ。孟母カ家ノカタハラニフルキハカアリ。孟軻イトケナキヲリ。タハフレテハカヲツキケリ。母我カ子ニアシキ事ヲナラハサシトテヤヲコホチテホカニウツリヌ。ソノカタハラニ市有リ。孟軻モノウリカウコトヲシレリ。母我カコニヨカラヌコトナラハサシト思テ。又ヤヲコホチテホカヘウツリヌ。ソノカタハラニ學篇アリ。孟軻文字ヲマナフニウツハモノニタレリ。コノ地ヲスミカトスヘシトサタメテケリ。孟軻モノナラヒテカヘリキタレルニ。ナムチマナフルトコロイタレリヤト問ニ。マタシキヨシヲコタヘケリ。母ハタヲオリサシテ。カタナヲトリテハタヲキリステケリ。孟軻オトロキテ問ニ。汝カ學問ヲスタル丶事。ハタヲステタラムコトシト云ニ。孟軻コトワリヲオモヒシリテ。勤學ヲシテ文長シテ。後ニ大儒ノ名得タリ。

コレヤコノ丶ヘノ錦モアサシトテ機ナル虫ノウラミケル聲

「聲たて丶はたをる虫のうらみすは野邊の錦やあさくみえまし」

桓景登高菊

汝南ノ桓景費長房ニシタカヒテ。ミチヲマナヒテ年ヲオクリケリ。長房カ云ク。九月九日ニ汝カ家ニワサハヒアルヘシ。スミヤカニ家ヲサリテ。家人ヲシテキヌノフクロニ茱萸ヲイレテ。ヒチニカケサセテ。高キ所ニ登テ菊花ノ酒ノノムヘシ。サテワサハヒヲサルヘキナリト云フ。桓景コノヲシヘノマ丶ニ。山ニノホリテカヘリテミルニ。家ノ内ノ猪鶏牛羊ヒト丶キニシニ丶ケリ。

ケフハシモ麓ノ花ニヱヒナマシ高根ノ菊ヲカサ丶サリセハ

「はかなくて麓のゑひにしつま丶し山路のきくの情ならすは」

離朱明目

黄帝ノ臣離婁ト云モノ有。離朱コレナリ。目アキラカニシテ。毫末百歩ノホカニミシナリ。戰國策曰。離朱千里ノ内ノ山ノコスヱ。野邊ノ草ノ色ヲタトルコトナシ。馬ヲ十里ノホカニタテ丶。耳ノ中縫ノナカヲイケルナリ。

ナカメヤルチサトノ山ノ紅葉ハ丶軒ノ梢トイハヌハカリソ

「舊本歌同」

秦彭攀轅

秦彭潁川ノ大守トシテ任ニオモムキテ。人ヲアハレヒ門ヲイタハリ。任ヲサル日。オイタルワカキナカエニヨリテ。ナク〳〵ヲシミシタヒケリ。

限アリテカヘル習ハフリヌレトナホコノ秋ハシタハシキ哉

「舊本歌同」

蒙求和歌第四

冬部十五首

盛吉垂泣初冬　震畏四知落葉　原憲桑樞時雨
閔損衣單霜　鍾離委珠霰　孫康映雪雪
趙勝謝躄寒蘆　蒼頡制字千鳥　王覇氷合氷
羅含呑鳥水鳥　羊續懸魚網代　郅都蒼鷹鷹狩
陰方祀竈炭竈　阮孚蠟屐雪　祖約好財埋火
虞延剋期歳暮

盛吉垂泣初冬

々々ハ延尉ナリ。冬ノ節ヲムカフルコトニ。イマシメケルツミ人ヲコトワリシルシケリ。ヨナ〱ミツカラメクリテ。オノ〱カカタチヲミルニ。シモトノアトヲヤモヘルモアリ。カナクサリニイタメルモアリ。オヤヲコヒ子ヲコフルモアリ。サムキヲウレヘウヱヲウレフルモアリ。盛吉ハ筆ヲトリテナキ。妻ハトモシ火ヲトリテナク。トモニナミタヲナカシケリ。

灯火ノ影サユルヨノアクルマヲ人ノヤミトフ冬ハキニケリ

「ともしひの影さゆるよを行めくり人のつみとふ冬はきにけり」

震畏四知落葉

楊震東萊ノ大守トシテ任ニオモムクニ。昌邑ト云フ所スキケリ。昌邑縣ノ令王密トイヘルハ。昔楊震カ秀才ニ擧セシ人也。王密金ヲフトコロニ入テ。求キタリテコレヲアタフルニ。楊震ウケス。密カ云ク。昔ノナサケヲムクユルナリ。人ノシレルナケレハ。ヨニキコユヘキニアラスト子ムコロニ云リ。楊震コタヘテ云ク。天シレリ。地シレリ。汝シレリ。ワレシレリ。ステニ四知有。サテツヒニウケス。

散サシトイハセノ杜ノ紅葉ハモ嵐ハ空ハシラスシモアラシ

「舊本歌同」

原憲桑樞時雨

魯ノ原憲家マツシクシテ。ヨモキノトノアタナリケレハ。桑ノ木ヲトホソトセリ。イタマニハアメモタマラスシテ。トコモクチスハカリニナリニケリ。ツ子ニ絃歌ニ心ヲスマシテノミソナクサミケル。

アトヽムル桑ノトサシノ夕暮ヲ時雨ナラテハトフ人ソナキ

「門とつるよもきの宿をとふものは夜半の時雨のなさけ成けり」

閔損衣單霜

々々ハ孝子ナリ。チヽノヽチノメノハラニフタリノコ有リ。ノチノメ閔損ヲニクミテ。我フタリノ子ヲノミ世ニアラセムトオモヘリ。フタリノコハ綿入タルコロモヲキセ。閔損ニハ蘆花ヲ入タルコロモヲタヽヒトヘキセタリ。冬ノヨチヽノクルマヲヨスルニ。手コヽエテ轡ヲオトシテケリ。チヽセメテツミニ

オコナフニ。コタフル事モナシ。後ニ父ノ先ノメノマヽコノタメニナサケナキコトヲサトリエテ。ワカレサリナムトスルヲ。閔損ナケキテ云ク。ハヽノオハスルニハ一ノ子コソサムケレ。母ナクハ三人ノコサムカリナムト云ニ。チヽコトワリヲシリテ思タユミニケリ。マヽハヽコノナサケヲウレシト思シリ。三人ノ子ヲオナシサマニハクヽミケリ。〔モリ歌歟〕

コロモテノコスヱハ初霜ニウラカレユクヲアハレトソミル

〔本項舊本第十六閔子辛之間〕

「よもすから鶴の毛衣霜ふけて芦の葉かくれ子を思ふ聲」

鍾離委珠歟

後漢ノ鍾離意アサナハ子阿ト云フ。顯宗位ニツキテ。メシテ尙書トス。時交趾守ツミニオコナハレケリ。ソノ資物ヲオホヤケ群臣ニアカチタマハスルニ。鍾離珠璣ヲシテク地ニステケリ。ソノユヱヲトハルヽニ。コタヘテ申云。孔子忍渇於盜泉之水。曾參廻車於勝母之閭。其名ヲニクムナリト申セリ。オホヤケコレヲキヽテ。賢ナルカナ尙書トホメ給テ。倉ノ錢卅萬ヲタマハセテ。右僕射ナシタマヒケリ。大臣ナリ。

盜泉水ハヌスス人ノイツミトカキタリ。孔子水ニウヱテモ。ソノミツヲノミタマハス。勝母閭ハ母ニカツサトヽカキタリ。曾參イソクミチナレトモ。其里ヲヨキテスキヽ。ミナソノサトヲイトフユヱナリ。

雲井ヨリ霰ニヽタル玉ノ色ヲヒトリヤ庭ニツモヒスツヘキ〔チ歟〕

「玉葛あまたはふ木はみえしかとたゝ一枝そ思ひすてける」

孫康映雪

々々家マツシクシテ油ナカリケレハ。映雪テヲシテ書ヲ讀ニケリ。少ワカヽリシ時小人ニマシハリアソフ事モナク。文ニノミ心ヲソメケル。後ニ御史大夫ニイタリニケリ。

ヨモスカラ簾ヲノミソカヽケツルフミミルニハノユキノ灯

〔舊本歌同但ニハ作宿〕

趙勝謝躄

平原君アサナハ趙勝。高樓ニノホリテ人家ヲミルニ。躄者盤跚ヘムサムトヨロホヒユキテ。水ヲクミケルヲ。樓上ノ美人コヱタカニワラヒケリ。アクル日躄者ヨロホヒキタリテ。水ヲクミテ門ニイタリテ。美人ノカウヘヲコフニ。ワラヒテアタヘムトイフ。後ニ又來テセムレトモ。チヒス。時ニ門客コト〳〵クニサリシリソキニケリ。ソノユヱヲトフニ。君ハイロヲアイシテ人ヲイヤシウス。コノユヱニサリシリソクナリトイヘリ。心サシフカキ女ナレハ。イタハシクカナシトオモヘトモ。門客ノイキトホリニタヘスシテ。美人ノカウヘヲキリテ。躄者ノカトニカケテ謝之。ソノヽチ門客カヘリ來リニケリ。

ナニハエノ芦ノ下折トニカクニヨシヽヽ鬢ノクチスサヒ哉

〔舊本歌同〕

蒼頡制字千鳥

々々ハ黄帝ノ史官也。賢才ナラヒナカリシ人也。鳥ノ跡ヲミテ文字ヲツクリシナリ。鳥獸ノアトヲミテ。分理ヲサトリツキテエケリトモ云リ。蒼頡字ヲツクリシカハ。鬼夜哭シケリト云リ。字ニ六ノ體ヲカテリ。一云象形。二云象事。三云象意。四云象聲。五云轉注。〔三體〕六云假借也。蒼頡家塚在馮州縣利陽。墳高六尺也書ヲコノムシモノコト〴〵クニ。コノハカニ來テ姓名ヲカキテオケリ。

濱千鳥昔ノアトヲタツ子テソフテノ海ヲハクムヘカリケル

〔濱千鳥とひたつ跡をたよりにてふみはしめけるあまの通路〕

王霸氷合

漢紀云。光武世祖〔漢紀〕ヨリ王莽イクサヲサリテ。南ノカタ曲陽ニイタリテ。呼池ヲワタラムトスルニ。氷ハヤク舩ナシト云リ。左右ノ人ヲノヽキオソレケリ。時ニ王霸ヲツカハシテミセラルヽニ。ハカリコトヲメクラシテ。コホリイタクムスヒテワタリヌヘシト申ニ。衆人オホキニヨロコヒテナラニワタリニケリ。

羅含呑鳥 水鳥　晉時爲侍中。

々々イトケナキトキ。夢ニ五色ノ鳥飛テ口ニ入ト見テ。サメテ後モム子ノ内ニ物ヲノミタル心地シケリ。羅含母ニカタルニ。汝チ文章アルヘキヨシヲアハセケリ。ソノヽチ才藻日新ナリト云リ。羅含家庭ニハカニ蘭オヒテケリ。德行鬮感トオモヘリ。ナツケテ書帶草トイヘリ。

水鳥ノウキ子ノ夢ノ名殘ヨリナミノ心ロモフカクナリニキ

〔舊本歌同〕

羊續懸魚

々々ハ南陽郡ノ守ナリ。羊續カモトヘ主簿生魚ヲ送クレリ。羊續内ヘモトリイレス。ニハニヲケリ。ホトヘテ主簿又魚ヲ送レリ。モトノ魚ミセテ。ソノ心ヲトヽメテケリ。

厭ハルヽミヲ宇治川ノ網代木ニ子タクソヒヲノ思ヨリケル

〔舊本歌同〕

郅都蒼鷹

郅都直諫ニシテ人ニオソルヽ所ナク。時ノ大臣ヲモヨコサマナルコト有レハ。ハヽカル心モナク云ソシリケリ。世人目ヲソハメテ蒼鷹トナツケヽリ。郅都鳳門ノ大守ニウツリテ。匈奴ヲシタカヘケリ。匈奴木偶ツクリテ。郅都トナツケテ。弓箭ヲトリ馬ヲハセテイルニ。時ニノソミテ郅都ソト思フヨリ。心ニマコヒテワナヽキテ。ヤヲハナツコトアタハス。人ニオチラレタルコト。カクナムアリケル。

蒼鷹ノカケウツルラシ入日サスカタノヽ草ニ鳥サワクナリ

〔はし鷹の軒はうつなる音にさへかたのゝきゝす草かくる也〕

陰方祀竈

後漢ノ陰子孝養フカヽリシ人ナリ。トシノクレニ。黄羊ヲモテ竈神ヲマツリテ。三代ノ孫ニイタル。

今ソシルヨニスミ竈ノシルシトテユクスヱ遠クタヘヌ煙ヲ

［舊本歌同］

阮孚蠟屐（缺）　祖約好財晋六　晋代人。

阮孚ハアシタヲコノミ。祖約ハタカラヲコノミシ人ナリ。ツネニコンヲイトナムコトアヒ同シ。人ユキテ二人カ得失ヲハカルニ。先祖約カモトニ行テ見レハ。タカラヲ屏當シテ。スタレヲウシロニアテヽ。ミヲカタフケテ。カクシソハメテ。ソノケシキ心ヨカラス。次ニ阮孚カモトニ行テ見レハ。火ヲフキテ蠟屐一ナケキテ云ク。シラス一生ノ内ニイクハクアシタヲカモチヒムトスルト云リ。神色怡然トシテ困暢ナリ。コノ時ニ阮孚得。祖約失トサタメテケリ。

屏當ハタヽミノシヲサムトイヘリ。屏ハ去聲ナリ。併當トモカケリ。（缺）蠟ト云ルハ錯誤ナリ。

消カヘリ思フモカナシ埋火ノイケルアシタノ程モナキヨヲ

［舊本歌同］

虞延剋期後漢

後漢ノ虞延ハ細陽ノ人也。獄舍ニイマシメオカレタルモノ。カスモシラスオホクシテ。年ノクレニノソミテ。幽閉カナシミ。故郷ヲコフル心子ムコロナリケルヲ。アハレミイタミテ。獄門ヲヒラキテ。オノ〳〵ヲユルシテ。ソノコロホヒマテトタノメテ。イヘニカヘシスヱケリ。ツミ人虞延カ仁徳アフキテ。期ヲタカヘス獄カヘリ來リニケリ。家ニアリテ病アルモノハ。獄ニキタリテシニケレハ。關外ニウツミテ。リサノコトヲヲヘテ。アハレミトフラヒケリ。後ニ大尉ニイタレリケリ。

歳暮シ雲ノトサシヲ吹トクハ嶺ノアラシノナサケナリケリ

［舊本歌同］

蒙求和謌第五

戀部廿首

紀瞻出妓　宿瘤採桑　（缺）諸紛買魏

楚莊絶纓　無鹽如漆　文君當壚

雍伯種玉　盧充幽婚　衛后髮鬒

飛燕體輕　班女辭輦　大眞玉臺

董永自賣　買妻恥醮　龐儉鑿井

陳平多轍　孟光荊釵　韓壽竊香

齊后破環　宋女愈謹

紀瞻出妓

尚書紀瞻カ家ニアマタノ妓女有ケリ。王道周顗ヲヨヒモロ〳〵ノ朝士ヒキツレテ。紀瞻カ家ニ行ニケリ。紀瞻妓女ヲサマ〳〵カサリトヽノヘテ。トリイタシテケリ。歌舞ノ曲ヲホトコスニ

ノソミテ。人心ヲウコカサストイフコトナシ。其中ニ紀瞻カ愛妾有リ。ミメカタチコヱノニホヒヨリハシメテ。心サマニイタルマテ。辞ニヌケテミエケリ。周顗コレニ心ヲウツシテ。ヨソノ人ノトカムハカリニナリニケリ。アルシ紀瞻カミルトコロヲモハヽカラス。人メニハツル心モウセハテニケリ。有司オホヤケニ周顗カトカアルヘキ由ヲ奏申ス。勅シテユルサレニケリ。

思餘リ色ニ出ルモトカナラハアハテモ戀ニミヲソカヘマシ

「夕まくれ涙の露にせきわひぬ月の袂のあらはるゝまて」

宿瘤採桑

宿瘤ハ齊東郡(衍歟)郭ノ女也。項ニシヒ子アルユヱニ宿瘤トナツケヽリ。閔王アソヒニイテヽ東郭ニイタリ給ニ。サトヒトコトコトクニハシリサワキテミタテマツルニ。宿瘤桑ノハヲトリテヨコメモセサリケルヲ。王チカクヨリテミ給ニ。ナマメキヨシアリテ。カホアカメテハチシメラヘルサマナリ。人コトニ王ヲミタテマツルニ。宿瘤ミヲウコカスコトナキユヱヲトハルヽニ。我カチヽハヽ桑ヲトレト云ツレハ。桑ヲトリハムヘルナリ。王ヲミタテマツレトハイハサリツトコタヘ申ニ。イカニモユヱアルヘキモノトオホシテ。車ニメシノセラルヽニ。我父母内ニアリ。コヽヨリメサレテマヰラムコトハ。ステニ奔女ニニタリ。後ニトノカレ申ニ。オクフカキ心ヲハチテ。イトヽ心ヲウツシタマヒツ。サテカヘリ給テ。黄金百鎰ヲツカハシテムカヘ給ニ。父母オホキニオトロキテ。ユアムシ。アタラシキコロモヲキセムトスルニ。我コノスカタニテ王ニミエタテマツリツレハ。アタラシキコロモヲキテ。ミシラレ(レ脱)タテマツラムコトモコソアルトテ。モトノスカタニテマヰリヌ。ミナレヌマフニシタカヒテ。心ノイロヲメテタマヒテ。キサキニタテニケリ。

露深キクハトル袖ノナコリヲソカヘル空ナク思ヒオキケル

「舊本歌同」

昔紛異(魏)魏

々々魏ノ武帝ノイミナヽリ。昔數萬騎ヲヒキツレテ。山澤ニノテヽカリシ給フ所ニ。ニハカニ輜軿ノ天ヨリトヒクタレルナリケリ。近クヨリテミ給ニ。イヒシラヌカタチヨキ女アリ。我レハ天女ナリ。命ヲウケテ來レルナリト云。帝心アヤシトハ思ヒナカラ。ヨヽノチキリニマカセテ。タチユカニ夜ノアカシ給ニ。ケシキコトカラヨリハシメテ(=心サマヽテ。)コノヨノ人ノタクヒニアラス。ウチツキニカキリナクオホシケリ。一夜ユメヨリモアヤナクテ。五更ステニアケナムトスルニ。アカヌナコリセムカタナクシタマフオモヒ。タヘシノフヘキニアラス。マタコムトシノケフトハカリヲイヒオキテ。アメノコトク。カセノコトクニシテワカレサリヌ。帝コノヽチニ心ヲソラナルナカメニアカシクラシ給フニ。去年ノ今日ニモナリヌレハ。又山

澤ニミユキ有リ。時ノオシウツルモ心モトナク。マタレタマフニ。天女一人ノヲノコヽヲイタキテキタレリ。コレハ君ノ子ナリ。子孫ヨヲカサ子テ帝王トナルヘシト云フ。帝イタキトリタマヒテ。ムツコトモツキヌニカヘリサリヌレハ。アサマシクアヤナクナケカシク オホシケリ。始祖 元帝トキコエシハコノ小兒ノ事ナリ。

ナキシコノ行末遠キイロミレハ別シハナノカタミカ〔ナ歟〕リケリ

〔名殘とて袖に涙はふるものをこのしたはるゝ村雨の空〕

楚莊絕纓

々々王ヨル人ヲアツメテ酒スヽメテアソヒ給フ。トモシヒノ風ニキエタルヒマヲエテ。御カタハラナルキサキノソテヲヒク人有リケリ。キサキソノ人ノカフリノ纓トリテ。我ソテヲヒク人有リ。トモシヒヲカヽケテ。纓ナカラム人ヲトカメ給ト申ニ。王モトヨリ人ヲアハレヒ。ナサケフカキ心ニテ。ソノトカヲナタメムタメニ。人ニスヽムルニハ酒。人ヲセムルニハ禮ヲモテス。コヨヒトモシヒヲカヽケサルサキニ。人々ミナ纓ヲトルヘシトオホセラレケレハ。オノ／＼纓ヲトリテタテマツリケリ。サテキサキノソテヒキケル人モマキレニケリ。コヽロヒトツニコソ思ヒシリニケレ。ソノ後晋ノイクサ楚ヲカコムコトイクヘト云カスヲシラス。楚ノイクサノ中ニ。タヽヒトリホコヲアケテ。ヌケイテヽタヽカフモノ有リ。スナハチ晋ノイクサヲヤフリツ。王アヤシヒトヒタマフニ。ソノカミキサキニ纓ヲトラレタリシ人ナリケリ。ミヲステヽ王ノナサケヲ思ヒシリニケルナリ。

〔舊本歌同〕

誰トシモワカヌナコリノトモシヒソ心ニキエヌ情ナリケル

無鹽如漆

齊ノ鍾離春ハ無鹽邑ノ女也。ミニクキコトタクヒモナカリケリ。カシラハ臼ニヽタリ。目フカク指ナカク。フシフトク鼻タカク。ノトムスホヽレ。ウナシコエ。髮スクナク。ム子イテコシヲレテ。ハタヘウルシノコトシ。四十ニナルマテヲトコナカリケリ。市ニイテヽヲトコヲカヘトモ。メヲカクル人ナシ。オモヒワヒツヽ。宣王ニマヰリテ。キサキニソナハラムトノソミコフニ。マコトニウトマシク。オソロシキケシキナリケレトモ。ナサケフカキ御心ニテ。コレヲイトハヽ。イタツラニナリハテムコトハカリヲアハレミタマヒテ。人ハワラヘトモ。キサキニタテタマヒテケリ。無鹽漸臺ニハヘリテ。殆哉トヨタヒ云フ。宣王ユヱヲ問ヒ給ニ。申テ云ク。西ニハ秦ト衞トノウレヘアリ。南ニハ强楚ノアタアリ。外ニハ三國ノ難有リ。内ニハ奸臣アリテ衆賢スヽマス。一旦山陵社稷シツカナラシ。コレ一ノ殆也。次漸臺五重ヲカサルトテ萬民ツカレタリ。コレ二ノ殆也。次賢者山林ニカクレ。諂臣左右ニコハクシテ諫者ナシ。コレ三ノ殆也。次飲酒沈

湎シテ以夜繼晝。女樂《倡遊。》縱横無度。コレ四ノ殆也ト申セリ。コヽニ宣王コトワリヲオホシヽリテ。無鹽コトハニシタカヒテ。漸臺トヽメ女樂ヤメ。讒臣ヲシリソケ。直諫ヲスヽメ。四門ヲヒラキテ。衆ノ賢ヒトヲイレテ。ヨヲサマリニケリ。

色ナクテ盛スキヌトミシホトニ名高クナリヌ秋ノミヤマキ

〔色なしとなかめし秋の深山にもこゝろの月に有明のそら〕

文君當鑪　蜀都人ナリ。

文君ハ臨邛ノ富人卓王孫カ女美女也。マユハ遠山カトオホエ。マナフタハ芙蓉ニ似リ。ツ子ニ心ヲスマシテ琴ヲヒキケリ。時司馬相如ト云モノ有リ。家マツシケレトモ。文道カシコク。管絃ニ名ヲエタリシ人ナリ。相如卓王孫カ家ニ行テ。文ヲ談シ琴ヲヒキケルニ。文君メテヽ心ヲソメケリ。ツヒニ相如ニアヒニケリ。相如文君トヽモニ成都ヘカヘリニケリ。家ヲミレハ庭ハヨモキニトチラレテ。ノキハシノフニウツモレテ。ハツカニ四壁ノミソアリケル。文君トカクシテヨヲワタリテ。マツシキコトヲウレヘス。フタ心ナカリケリ。オヤハラカラハオホキニウケヌコトニオヒケリ。相如車騎ヲウリテ。ソノアタヘヲ得テ。文君トヽモニ臨邛ニユキテ。一ノ酒舍ヲカヒテ。酒ヲツクリテウリケリ。文君ハ鑪ヲマモリ。相如ハ着犢鼻褌滌器ケリ。卓王孫コレヲハチテ杜門イテス。諸公卓王孫ニアヒテ。汝相如マツシキヲイトフコトナカレ。人ノヨニアル。タカラニトメルヲハウヤマハス。ミチニトメルヲ貴シトス。相如ミチニ長セルユヱニ。ウヤマフトコロフカシ。マツシキヲアナツリテ。ハツルトコロナカレトイサメケリ。時ニ僮僕百人錢百万ヲアタヘテ。成都ヘカヘシヤリテケリ。子虛賦ツクリテ。オホヤケニタテマツルニ。帝シキリニホメタマヒテ拜爲郎。カサ子テ交園令トナリヌ。ツ子ニ病ノミトイヒナシテ。閑居ヲコノミケリ。

鑪字本作盧ナリ。酒盧ナリ。酒ヲウル所ナリ。酒ヲ火ニアタヽムルモノニハアラス。

板マモル月ヲモ二人ナカムレハ荒タル宿モサモアラハアレ

〔ことのねの身にしむ秋の夕風そあれたる宿も心ひきける〕

雍伯種玉

雍伯陽公カアサナヽリ。ツ子ニ美漿マウケテ。ミチユキ人ニアタヘテ三年ヲヘケリ。人來テ漿ヲノミヲハリテ。フトコロヨリ石子一升ヲイタシテアタヘテ云ク。コレナムタマノタ子ナリ。マキテヨキ玉ウヘシ。又好女ウヘシト云テサリヌ。陽公コレノウヱテ玉田トス。時ニ北平ノ徐氏ト云人オホキニトミテ。好女ノイマタトツカサルアリ。陽公ユキテコフニ。徐氏ソラヒテ玉ヲ一雙エサセハアタヘムト云ヘリ。陽公スナハチ玉田玉ヲアタヘケリ。徐氏オトロキテムスメヲアハセテケリ。平北陽氏ハコレソノヽチナリ。

テニクミシ雫ノ末ノシルヘ哉ツヒニアフセノキテノタマホ

「手にくみし人のしるへを思ふにもあふせられしき井手の
玉水」

盧充幽婚

漢ノ盧充ハ范陽人也。城西三十里ニ崔小府カ墓有リ。盧充ユキテカリシケルニ。ヒトツノ麞ヲオヒテ朱門官舍ニ至ヌ。人盧充ヲヨビ入テ云ク。汝カ亡父我ニ書ヲオクリテ。ワカオトムスメヲ汝ニアハセヨトカケリトイヒテ。書ヲオコセシムルニ。マコトニ我亡父ノ筆ナリケリ。スナハチ東廂ニ盧充ヲ入テ。ムスメ崔氏ヲアハセテケリ。ウチツキニオモハシクナリニケリ。カクテ三日アリテ。ワカレナムトスルヲリニノソミテ。ステニハラミタリ。若男子ヲウメラハ汝ニアタフヘシ。女子ヲウメラハ。トヽメテヤシナフヘシトイヒテ。ナク／＼ワカレサリヌ。ソノ後三年三月三日。盧充水ノホトリニイテヽアソフトコロニ。ウシカケタルクルマノ。ナミノウヘニウキヌシツミヌスルカ。近ク來テキシニノホルアリ。崔氏ト三歳ノチコトヽモニノレリ。兒ヲイタキテ。詩一首金垸一枚トヲソヘテ盧充ニカヘシケリ。盧充ウケトルホトモナク。車モ主モサリヌ。少兒ヒトリニナリテ。後數郡ノ守ニウツリテ二千石タリ。盧充後ニ車ニ乘テ市ニイテヽ。金垸ヲイツハリウラセテ。ミシレル人ヲウカヽハシムルニ。ヒトリイヤシキ女コレヲミテハシリカヘリヌ。スナハチアルシトオホシキ女ヲクシテ來レリ。アルシコノ金垸ヲミテ。ツタヘタリシオコリヲオトロキトフ。カサネテ云ク。崔小府カムスメアリキ。我ハソノヲハリナリ。イマタトツカスシテ。イノチヲハリニシヲ。オヤハラカラヲシミイタミキ。ヒトツノ金垸ヲヒツキニ入タルコト有キ。スナハチコノ金垸ナリ。又イフ。盧充カイヘニ來テナホシヒトフニ。ハシメヨリノコトヲカタリキカセテ。チコヲイタシテミセシムルニ。コノ兒崔氏ノカタチナリ。タカフトコロナシ。アハレニカナシクオモヘリ。仙界ヨリキタリ。トツキケルコトヲサトリシリヌ。又云ク。崔少府カコトイマタツマヒラカナラス。崔子玉コトヽモ云ヘリ。オホツカナシ。

淺カラヌ契ハサテモアリス川同シヨニタニスマヌミナレト

「かきくらしやよひの空のなくさめは泪にのこる三日月の
影」

衞后髮鬒

漢ノ武帝ノ衞皇后アサナハ子夫。モトハ平陽公主ノ家ノ歌ウタヒナリ。カミオホクシテクロシ。帝公主ノ家ヲスキ給ヒ、子夫カコヱノ色ニメテヽ。車ニトリノセテカヘリ給ニケリ。公主イタシタテヽ。セナカヲナテヽ云ク。御心サシフカヽラムノチニ。ワレヲワスルナトソキコエケル。後ニキサキニタチテ。三男一女ヲウミテケリ。時ノコトワサニ云ク。男ヲウミテモヨロコフコトナカレ。女ヲウミテモイカルコトナカレ。衞子夫ヲミ

スヤトソイヒケル。

ナホサリニ思ヒソメテシ黒髮ノ心ナカクヤムスホヽレケル

〔舊本歌同〕

飛燕體輕

趙飛燕ハ河陽公主ノ家ニテ歌舞ヲナラヒキ。ヒトタヒカナテ。ヒトタヒウタフニ。アヘレヲモヨホシ。ナミタヲモヨホサストイフコトナシ。ソノ體カロクシテ。マヒノスカタニタレルユヱニ。飛燕トナツケヽルナリ。歌舞ノ曲ノミニアラス。ミメカタチ心サマ。タトヘムカタナカリケレハ。オホヤケシノヒテカヨヒタマヒケリ。又ヒモノヽカタラヒ。ヲシノフスマ。龜文キマクラアリ。ツヒニキサキニタチニケリ。女弟アリ。昭儀トス。ミメカタチホトホト後宮ヲカタフクルホトナムアリケル。

故郷ノ子クライテケルホトモナク雲井遙ニトフツハメカナ

〔燕とふ人のたひねを哀とそなかき秋まておもひしりける〕

斑女辭輦

斑女ハ孝成帝ノ婕妤也。女ナレトモ賢才通辯ナリケレハ。オホヤケコトニ御コヽロサシフカヽリケリ。ムカシ同輦ニノセラレケルヲオソレ申テ云ク。イニシヘノ圖畵ヲミルニ。賢聖ノ君ハ名臣カタハラニアリ。ミルトコロハツカシカルヘシ。三代ノスヱニ女嬖ナリキ。ソノタメシニナラシト思ヘリト申ケレハ。帝モイヨ〳〵コヽロノカシコキコトヲホメタマヒケリ。時ノキサキモトコロヲケルコトヲヨロコヒテ。イニシヘハ樊姫アリキ。今ハ婕妤アリトソホメラレケル。後ニ趙ノ飛燕、婕妤讒言申テ云ク。婕妤邪ヲサシハサミ呪咀スト申セリ。オホヤケ問ヒ給ニ申テ曰ク。妾キク。死生有命。富貴在天。修正尚未蒙福。爲邪欲何望。且鬼神有知。不受不臣之訴。如其无知。訴之何益ト申スヲ。オホヤケコノコトヲヨミシテ。アハレミホメ給キ。金百斤ヲタマヒケリ。

先タチシ道ノタメシヲヒクカラニ後ノ車モノリオクレニキ

〔うかりけるあたをためしに引てこそ同し車にのりうかりしか〕

大眞玉臺

大眞ハ溫嶠カアサナヽリ。メナクナリテ後。ヤモヲニシテスミケリ。姑劉氏ヒトリノムスメ有リケリ。スカタアテニシテ。心ナサケ深カリケリ。ヲハカムスメニヨカラムムコヲツタフヘキヨシヲ。大眞ニイヒアハスルニ。コヽロニイカテエテシカナトオモヘリ。ヨキムコハエカタシ。ワカミノホトナラムヲトコヲハ。イカヽアルヘキトコタヘケレハ。ナムチカホトナラムヲトコヲハ。イカニシテカウヘキト云ヒケリ。ソノ後ホトヘテ。ヨキヲトコモトメイタシタリ。スミカモ人カラモ。ワレラホトノ〔コ說〕人ナリト云テ。玉臺一枚ヲイタセリ。ヲハオホキニヨロヒテ。ステニウケヒキテケリ。トキニムスメ紗扇ヲヒラキテ。タナコ

ヽロヲトチヽ。ナホキニワラヒテ云ク。ワレウタカフラクハ老奴ナルヘシト云ヘリ。ツイテコヽロノウラニタカハサリケリ。

ワレトハヌ心ノ草ハミエシカト玉ノカヽミノ影ハカヨヒキ

〔われとはぬ心のくまは（已下同）〕

董永自賣

〻〻イトケナクテ母ニオクレテ。家マツシカリケレハ。田ヲツクリテヨヲワタリテ。ヒトリノチヽヲヤシナヒケリ。チヽノヒトリ家ニアラムコトヲ。コヽロクルシク思テ。少車ニ乗テ田ノホトリニクシテユキテ。木ノシタカケニスヱテ。ミツカラ田ヲツクリケリ。父死テ後ヲオモヒワヒツヽ。ミヲウリテ一萬ノセニヲエテ。ワサノコトヲヽヘテカヘルミチニ。ヒトリノ女アヘリ。ミメカタチイヒシラスタクヒナキホトナリケリ。女スヽミテイヒヨリテ。董永カメニナリテ。一月ニカトリ三百疋ヲオリテ。ミヲウリシアタヒヲツクノハセテ。董永ヲウケイタシテ。家ニカヘリスミテ。ヒトリノ子ヲウミテケリ。仲舒ト云。後ニ我ハ天ノ織女ナリ。天帝汝カ孝養ノコヽロサシヲホメテ。ミヲウリシアタヒヲツクノハセムタメニ。ツカハシテチキリムスフトイヘトモ。下界ニヒサシクスムヘキミニアラストイヒテ。ナク〳〵ワカレサリニケリ。

ハヽキヽノ跡ヲトハレヌミナリセハ獨伏屋ニ沈ミハテマシ

〔をくるゝも別るゝ道もかはらぬは同し名殘の泪なりけり〕

買妻恥醮

朱買臣モトハ會稽ノ人ナリ。家マツシクテ。文道ヲコノミタシナムコトオコタルトキナシ。ソノヒマニハタキヽヲコリテソヨヲワタリケル。買臣カメヨノワヒシサヲタヘカ子テ。イトマヲコヒテ。ワカレナムトイフヲ。ワレ四十ヨリトミサカユルコトアルヘシ。ステニ卅九ニナレハ。コトシハカリヲマチミヨト。子ムコロニイヒコシラヘケレトモ。キカスシテサリハナレニケリ。サスカニトシコロニモナリニケレハ。トニカクニシタハシクオモヒケレトモ。（（カヒモ））ナシ。サテ次ノトシ買臣カ文道ニカシコキコトヲホメテ。武帝メシテマツ侍中ニ拜シテ。次ニ會稽ノ大守ニウツサレヌ。富貴ニシテ不歸故郷一。如下衣錦一夜行上。汝今ステニフルサトニ至ルヘシトキコエケレハ。ヒサマツキテカシコマリケリ。任ニオモムクトキ。サキノメアヤシノシツノスカタニテミチヲツクリケリ。コレヲミルニ。メモクレコヽロモキユル心地シテ。ヨヒテミレハ。イフハカリナクヤセオトロヘテ。アリシニモアラスナリニケリ。女ハシメハオモヒモヨラサリケリ。ヨク〳〵カタラヒワタルマヽニ。昔ノ買臣トオモフヨリ。ハツカシサノアマリニヤフレフシテ。ヤカテシニヽケリ。恥醮ハ改醮ヲハツルナリ。昔日皮京カ妻龍氏。皮京ニオクレテ後。射者オホケレトモ。心ニチカヒテ不改醮ト云リ。マタ馬元正カ妻尹氏。元正ニオクレテ後。コヽロナラス玄盛ニトラシ

ニケリ。再醮ヲウレフルアマリニ。三年モノイハサリケリ。

マテトイヒシ春ニモアハテ荒ニケル後ノ心ハハツカシノ杜

〔まてといひし春にもあはてかれにける心よはさのはつかしの杜〕

龐儉掘井

々々ハ魏都人也。昔世ノミタレニアヒテ。父ノユキカタヲシラスナリハテヽ。母阿宏ニシタカヒツカヘテ廿年ヲ送ケリ。龐儉盧里ニスミテ井ヲホルニ。銅ノ錢十萬ヲホリイテヽ。家ユタカニナリテ。奴(ヤツコ)ヲモトムルニ。ヒトリノオキナヲカタラヒエタリ。家ノ内ニツカハレテ。ヒカスヘテ後云ク。堂上ノ母ハコレ昔ノ妻タリシ人也ト云リ。母ソノユヱヲトフニ。カサ子テ云ク。汝ハ艾氏ノムスメ。アサナハ阿宏。左リノ足ノシタニ黒子(ハハクソ)アリ。右ノワキノシタニ赤誌アリ。如牟(シ)[illegible]トイヘリ。母ノ云ク。マコトニワカヲトコナリ。スナハチ昔ノコトクメヲトナリヌ。時人ノ云ク。盧里龐公。鑿井得銅錢。買奴得翁。

ヘタテコシ昔ノ影ヲナラヘシハホリカ子ノヰノ主ナリケリ

〔逢見てもなをよの人となりなまし心そもとのしるへなりける〕

陳平多轍

漢ノ丞相陳平ハ陽武ノ戸牖ノ人也。家マツシクシテ文道カシコカリキ。黄老ノ術ニアキラカナルユヱニ。漢ノ高祖陳平カハカリコトヲモチヒテ。項羽ヲウチシタカヘ給ヘリケリ。時ニ富人張負カ一リノ女孫アリ。五嫁(タヒテ)ソノヲトコシニヽケリ。陳平イカテエテシカナトオモヘリ。張負アヤシト思テ。陳平カ家ニユキテミレハ。ムシロヲカトニシテ。スヘテマツシキアリサマナレトモ。ミチニカシコカリケルユヱニ。カトノホカニ長者ノ車アトオホカリケレハ。コヽロニクヽオホエテ。張負孫女ヲ陳平ニアハセテケリ。張負カ子仲コレヲウケヌコトニオモヒケリ。張負カ云。有美如陳平而貧賤上乎。後ニ世ニ仕ヘテ丞相トス。陳平ワカキトキ。船ニノリテツヲワタルニ。船人陳平カフトコロニ金アルラムト思テ。コロシテトラムト思ヘリ。陳平サトリエテ。衣ヲヌキテ船人ニカシケレハ。船人金ナシトシリテコロサスナリヌ。スヘテハカリコトノカシコキコトカクナムアリケル。陳平父母ニオクレテ後。メマタウセニケリ。人トフラヒケレハ。昔舜人王壽夢ノウチニ嫁(マヒテ)イハク。ワレミツノタノシミアリ。一ニハ、ハヽナシ。二ニメコナシ。三ニ財貨ナシ。コノユヱニタノシヒマフナリト云リ。ワカオモフトコロ。王壽カ文ノコトシトソコタヘケル。

アタナラヌ車ノ跡ニシカシトヤムシロノカトニ心ヨセケル

〔舊本歌同〕

孟光荊釵

孟光容貌ハナハタミニクカリケレトモ。徳行コトニスクレタ

リキ。萬里オホクコレヲ聘トモ。タヤスクユルスコトナシ。昔ニナルトシ。父母イカナルイロヲカオモフトヽヘハ。家マツシクトモ。コヽロサマ梁鴻カコトキノモノヲト云リ。サテ梁鴻ニアハセテケリ。ツ子ニオトロノカムサシ。ヌノヽ裙ヲキテ。オノカミヲイヤシクシテ。梁鴻カコトヲノミオモクオモヘリ。クヒモノヲスヽムルニ。ツクヱヲアクルコト齊眉ノ禮ヲナセリ。梁鴻ヨヲスサマシクオモヒトリテ。孟光トヽモニ覇陵山ニコモリキニケリ。

「とにかくに我思ふ筋にたかはねはをとこの袖(襲)もさもあらはあれ

韓壽竊香

々々容姿美麗ナリキ。女コトニイカテトノミ思ヘリ。時ニ大尉賈充カホヨキムスメアリ。韓壽ニコヽロヲウツシテケリ。ツヒニシノヒテカヨヒケリ。賈充カ家ニ人々キタリアツマルトキニ。韓壽コトニカウハシカリケリ。オノ〳〵コレヲアヤシメトカ(千金香)ムルニ。外國ヨリ武帝ニタテマツレル香物ヲ。賈充ニワカタマハラセケルヲ。賈充カムスメニアタヘテケルヲ。韓壽ヨノマノウツリカニシミニケルナリケリ。アラカフカタモナクテ。ヒコロノシノヒコトモ。コレヨリソアラハレテケル。ソノヽチムスメヲ韓壽カメニナシテケリ。

ナキナソトイフヘキモノヲ我袖ニ隱レヌモノハヨハノ移香

「なき名そと人にいふへき我袖に(已下同)」

齊后破環(舊本第四四損孫臏之間)

齊ノ襄王ノキサキハ大史激(敫)カムスメ也。昔樂毅カ齊ノ國ヲオカストキ。襄王カクレ給アヒタニ。タレトモシラヌサマニテ。大史激カ家ニヤトリヰテマヘリケリ。ソノ家ノムスメ。ヤトリ人ヲタヽ人ニハアラヌサマニミナシテ。ヒソカニキモノクヒモノヲオクリテ。ナサケヲホトコシケリ。カクレツヽニタカヒニコヽロカヨヒニケレハ。ツヒニアヒタマヒニケリ。後ニ襄王クラヰニカヘリツキテ。此女ヲキサキニタテラレニケリ。秦始皇齊ノ國ヲウチトラムト思テ。マツキサキノコヽロヲハカラムタメニ。連環ヲオクリタルヲ。キサキソノコヽロヲサトリニテ。コレヲウチクタキテ。秦ノツカヒ謝シケリ。使カヘリキタリテ。アリノマヽニ秦皇ニ申スニ。秦皇コヽロノ色ヲホメテ。齊ノ國ヲカサムコトヲナカク思ヒトヽマリ給ニケリ。

玉葛ハフキモカヒソナカリケルハラフアラシノ心ツヨサニ

「わきも子か衣の袖を吹かへす風にあられの玉そくたくる」

〔舊本此間大初日月而歌闕〕

宋女愈謹

宋女ハ鮑蘇カ妻ナリ。ヲトコノコヽロニツユハカリモタカハス。シウトメヲヤシナフ事ハナハタ子ムコロナリ。鮑蘇衛ノ國

ニツカヘテ。三年ヲヘケルホトモ。シウトメヲヤシナフコトオコタラス。鮑蘇アタラシキ女ヲムカヘオキテケリ。宋女イマノメノモトヘサマ〴〵ノ物ヲオクリ。ナサケヲカケヽリ。シウトメヲヤシナフコト。イヨ〳〵フカクツヽシミケリ。コノコトヨニキコエテ。人ノメノヨキニハ。マツ宋女カタメシヲソヒキケル。オホヤケキヽアハレヒ給ケリ。鮑蘇コヽロサシヲオモヒシリテ。ツヒニフタコヽロナクナリニケリ。

有ハテヌトカトツ今ハナリナマシウキヲモ慕フ心ナラスハ

〔年をへてかはらぬ道もあはれえうきを恨みぬ心のみかは〕

蒙求和謌第六

祝部十首

王戎簡要　裴楷清通　落下曆數
子公高門　曹參趍裝　陸凱貴盛
春申珠履　王濬懸刀　相如題柱
張氏銅鈎　黃覇政殊

王戎簡要　裴楷清通

晋ノ文王ノ時。吏部郎闕アリテ。コノツカサニオカルヘキ人ヲ鍾會ニトハルヽニ。王戎ハ簡要ナリ。裴楷ハ清通ナリ。コノフタリヲト申セリ。裴楷ヲモチヒラレヌ。武帝位ニツキテ探治數策得一。オホヤケノヨヲヽサメ給トシノ多少。コノカスニヨルカユヱニ。一ヲエタルコトヲオホヤケウレヘタマヘリ。群臣ノナカニモコレヲイヒヽラクモノナクシテ。オノ〳〵イロヲウシナヘリ。時侍中裴楷スヽミテ申テ云ク。臣キケリ。天得一以清。地得一以寧。王侯得一以貞也ト申セリ。コノ後オホヤケ子ムコロニヨロコヒ給ヒテ。裴楷カ才智ノアキラカナルコトヲイヨ〳〵ホメタマヘリ。簡要ハ簡略ナリ。要約ナリ。要妙ハ約好ノカタチ也。清通ハ清朗潔澄清也。通ハ通達他也。博覧古今ノ者為通人。得一ノ事老子経ニ有リ。王弼注曰。一ハ数之始物之極也。各是一物之所以為主也。各以其一致此清寧貞也。王戎裴楷ハ時ノ明人也。各ノ智ヲアラハシ。サトリヲキハメタリキ。王戎ヲサナクテ成人ノ智アリキ。ヲサナ人アマタツレテ。イテヽアソフニ。ミチノホトリニスモヽノ木アリ。ミヲムスフコトサカリナリケレハ。ワレサキニトアラソヒユキテ。手コトニヲリトラムトスルニ。王戎ヒトリニカキスモヽナルヘシト云テシリソケリ。人ソノユヱヲトフニ。コタヘテ云ク。コノスモヽミチノホトリニアリ。アマキスモヽナラハ。ミチユキ人ノコスヘカラス。サカリマテ人ノメテヌニシヨヌ。ニカキコトヲシリヌトイヘリ。スモヽ王戎カコトハノコトクニカヽリケリ。

思ヒキヤヨソニキヽコシ春ノナノ我身ノ上ニナラム物トハ

〔花の色たゝ一しほのいはね松さてもときはのたのもしき哉〕

落下歷數

落下閎筭術ニカシコカリシ人也。ユクスヱ千年ノコヨミヲツクリテ。オホヤケニタテマツリケリ。後ニ一行阿闍梨ソシルトコロアリケレハ。イヅレニツクヘキソト、ハレテ。カレコレ用捨ヲサタムルニ。コヨミノウラニ。ユクスヱニ上人イテキタリテ。ワカコヨミヲソシルコトアルヘシト。カ子テカキオキケルナリケリ。オノ〳〵メヲオトロカシテ。ツヒニアラタマラレスト云ヘリ。

アマノカハ空ニカゾヘシ月ナミモチヨヲカ子タル水莖ノ跡

「天の河かきなかしたる月なみも(已下同)」

于公高門　東海人也。

于公カ子ヲ于定國トイフ。アサナハ曼倩トイフ。家ノ門ノヤフレタルヲ親子モロトモニツクロヒケリ。于公カイハク。コノ門ヲ高大シテ。駟馬高蓋イルホトニタツヘシ。我獄ノツカサトシテコトヲオコナフニ。陰徳オホキカユヱニ。ワカ子孫カナラス家ヲオコスヘシトイヘリ。サテオホキニタカクタテ、ケリ。ソノ、チ定國ニイタリテ大臣ニナル。ソノ子永御史大夫ニナリニケリ。

カケナヒク車ヲミレハワカ、トヲ心ヒロクソ思ヒタチケル

「舊本歌同」(遺)

曹參趁裝

曹參ハ沛人也。丞相蕭何ウセテノスナハチミツカライハク。趁(遺)治行裝。ワレマサニソノカハリタラムトイヒテ。イデタツホトニ。ヒカスアリテ。メサレテ齊相トナレリケリ。史記云。趁(遺)治行。漢書云。治行ニ言修治行裝ト云リ。

サリモト思ヒシ末ヲトホリヌルミヲシルモノハ心ナリケリ

一舊本歌同一

陸凱貴盛

陸凱アサナハ敬風。吳郡ノ人。丞相遜(遜族)族子也。忠鯁有大節。孫皓ト云人トヒテ云ク。君一家トミサカエテ。朝ニツカヘテ皇恩ニアツカル人。イクハクカアルト、フニ。コタヘテ云ク。二相五侯。將軍十余人アリトコタフ。孫皓サカリナルカナト云ヒケリ。陸凱云。君賢臣忠國之盛。父慈子孝家之盛。今政荒人弊。覆亡是懼。臣何敢言盛ト云ヒケリ。

一枝モハルヽ色ナキハル山ノ花ノサカエハタクヒアリヤハ

「うとからぬ袖をつらねて位山いくへの峯をたちのほるらん」

春申珠履

楚ノ考烈王黃歇ヲ相トス。春申君ト云リ。趙平原君カ使楚ニ來レリ。瑇瑁ノカムサシ。刀劒ノサヤニ珠玉ヲカサリテ。春申君カ家ニノソメリ。シタリカホナルケシキニテ。楚國ニホコラムトオモヘリ。時ニ春申君カ家ニ三千余人ノ客アリ。ソノ上客ミ

ナ玉ノクツヲハケリ。堂上ノヒカリ。門前ノヨソ（ホヒ。）メヲオトロカシ心ヲウコカセリ。平原君カ使コレヲミテ。オホキニハチテ。カウヘヲタレケリ。

旅人ノ心ノウチモオトロキヽ玉ヲフミケルクツノヒヽキニ

〔たゝ人のあとふむへくもなかりけり玉をあつめしくつの通路〕

王濬懸刀

王濬アサナハ士治ト云リ。ユメニ三ノ刀ヲフシタル家ノ梁ノウヘニカケタリ。ヤカテ又一刀益トミテ。心ニアシキユメトオソレオトロキケリ。時ニ主簿李牧アハセテ云ク。三刀ヲ州ノ字トス。一刀ヲマスヲハ益州トス。汝益州ノ刺史ニソナラムスラムトアハセテケリ。後ニ益州刺史トナリニケリ。

或說云。王濬字士治。主簿字毅トモ云リ。（衍歟）

カハセ吹ハカタナヒキナル竹ノヨヲワケテソミツル夢ノ曙

〔はかなくそかたなのはとてあやふみしさめてうれしき夢の通路〕

國掌分竹散云。

相如題柱　　蜀郡人也。

漢ノ司馬相如ハ成都ノ人。蜀成（疑誤）ノ北七里。升遷橋トイフハシアリ。相如ハシメテミヤコヘムカフニ。コレヲスキケルニ。アヤシクマツシキスリタヲウシトオモヒテ。ワレ大夫トシテ大車肥馬ノラスハ。又コノハシヲワタラシトチカヒテ。ハシラニカキツケテケリ。後武帝相如カ才智ヲホメテ武騎常侍トス。カサネテ中郎將ニウツリテ。ツカヒトシテ。蜀郡ニイルニ。郡守ムカヘニキタリ。郡ノ令ユミヤヲオヒテ前駈ス。蜀ノ人コレヲミテメヲオトロカシケリ。

嬉シクモ道アルミヨニアフミ哉セタノカラ橋フミモ違ヘス

「このたひは春の日かけにあふみちや（已下同）」

張氏銅鈎

張氏カ先祖功曹アシタニオキテミレハ。ヒトツノハト承塵ヨリトヒキタリテ。几ノマヘニアリ。コノ鳩ワサハヒヲナスヘクハ。承塵ヨリカヘリヰルヘシ。ヨロコヒヲナスヘクハ。ワカフトコロニイレトイヒテ。フトコロヲアケタレハ。マヘニ鳩スナハチトヒイリヌ。フトコロヲサクルニ。ヒトツノ銅鈎ヲエタリ。コレヲオヒニシテ。朝ニツカフルニ。數郡ノ守ニイタリ。九卿ニツラナリニケリ。時ニ蜀ノ客人々キタリテ。張氏カモトニツカフ女ヲカタラヒテ。ヒソカニ銅鈎ヲカヒトリテカヘリニケリ。蜀客ニハカニモノアシクナリテ。オトロヘニケリ。アヤシミオソレテ。銅鈎ヲ張氏カヘシテケリ。張氏七世孫マテニトミサカエケリ。

數フレハナヽヨマテヲソ子サメケル鳩フクアキノ行末ノ空

〔うれしさをなゝ世までをそ重ねける（已下同）〕

黄覇政殊
黄覇潁川大守ニナリテ。仁風ヲホトコシ。徳政ヲオコナヒテ。天下オホキニヲサマリ。人民シキリニタノシヒ。國嘉禾生ニ。堺鳳凰アツマル。宣帝ヨミシテ金三十斤ヲ給ナリ。

山フカミナヲノミヨソニキク鳥モ人ノ心ヲメテヽキニケリ

「舊本歌同」

蒙求和謌第七

旅部十首

袁宏泊渚　博望尋河　郭文遊山
子猷尋戴　管仲隨馬　李陵初詩
廣德從橋(農)　呂望非熊　郗康留錢
張房縮地

袁宏泊渚　晋代人。是ハアクシヤウ晋也。秦ハ不疑奉也。

晋ノ袁宏アサナ彦伯ト云。ワカクヨリ文道ヲコノミテ。名ヲエタリキ。コトニフレテナサケフカヽリシ人也。袁宏海ノナキサ船ノトマリノ物アハレナルニ。ヒトリ心ヲスマシケリ。時ハ秋ノ初也。更闌夜閑ニシテ。風スヽシク月アキラカナル(音鮮)ニ。遠漢ノ凛々タルニアタリテ。長江ノ眇々タルヲノソハメハ。松ノヒヽキ浪ノオト。ヒトツトシテ心ヲクタカスト云コトナシ。キシカタユクスヱノ事ヲ思ヒツヽケテ。涙ヲオサヘテ。ミツカラツクレル詠史ノ詩ヲ誦ケリ。時ニ謝鎮西ト云ヒハヒキ。同シナキサニトマリアヘリ。ホノカニ詩ヲ誦スル音ヲキクニ。ナニトナク旅ノ心アクカレテ。商人ノ船ニコキマシハリテ。チカクヨリテタレソトトハスルニ。袁宏トナムキコエケレハ。フ子ヲスヽメテカタラヒヨリテ。旅天ノ景氣モノカナシキニ。アルヒハ往事ノ夢ニニタルコトヲウレヘ。或ハ舊友ノナカク(ハイ)サレル事ヲアハレミツヽ。タカヒニタモトヲシホリケリ。カクテ月西ニウタフキ。雲東ニアケナムトスレハ。ナク／＼ナコリヲヲシミテワカレサリケリ。

イカニセムオナシウキ子ニ有明ノ月ノトモ船コキ別レテハ

「尋くる人もなきさの月ならはなこりあり明の別せましや」

博望尋河

漢ノ武帝張騫ヲツカヒトシテ。河ノミナカミヲキハメニツカハシケリ。ハルカニ十萬里ノ浪ヲシノキテ。牽牛闕ニイタリテ。タナハタツメノ紗アラフニアヒヌ。織女アヤシミトフニ。漢帝ノツカヒトシテ。河ノミナカミヲキハメニ。マウテキツルナリト云。織女ノ云ク。河ノ源ハキハムヘキコトカタシ。コヽヨリオクヲオモハヽ。ナムチイノチアルヘカラス。ヽミヤカニ故郷ヘカヘリテ。漢帝ニミエタテマツラムコトヲオモヘトイフ。サテヒトツノウキヽニノセテ。ヒトツノ石ヲソアタヘケル。張騫コレヲエテ。コトナクカヘリニケリ。漢帝封爲博望侯。東方朔

コノ石ヲミテ。織女支機石トナム云ヒケル。

天ノ川ウキヽニカヘル道ナクハ猶コソキカメ雲ノミナカミ

「舊本歌同」

郭文遊山

晉郭文アザナ文擧ト云。心ヲ山水ノ景氣ニソメテ。人ノアトタエタル山カケノコノモトニ。カリイホヲムスヒテ。ヒトリヒカスヲオクリテ。イヘチヲワスレケリ。ヨノマハシリヲコノマスシテ。スケル心ニミヲマカセツヽ。アクカレアリキケル ナリ。アシキケタモノ。カタハラニアレトモ。害ヲナサス。

ヲク山ノ花ト紅葉ニアクカレテ都ノウチハスムナハカリソ

「舊本歌同」

子猷尋戴

晉ノ王羲之カ第四ノ子王子猷ト戴安道トハ 多年ノトモナリ。琴詩酒ノアソヒニハ。ムシロヲヒトツニシ。雪月花ノナカメニハ。ソテヲツラ子スト云コトナシ。子猷山陰ニコモリキタルニ。ヨルオホキニ雪フレリケリ。子猷子フリサメテ。酒ヲクミテ四望スルニ。景氣皎然タリ。ヒトリ心ヲスマシツヽ。左思カ招隱ノ詩ヲ詠シテ。剡縣ノ戴安道ヲ思ヘリ。即一小船ニサホサシテ。剡縣ニオモムク。沙提(堤)雪白クシテ水面ニ月浮。船ノウチノナカメ。浪ノ上ノアハレ。ヒトツトシテ心ヲクタカスト云事ナシ。アクカレユクホトニ。戴安道カ家ノ門ノホトリニイタリヌ。五夜マサニアケムトシテ。萬感ステニツキニケレハ。ムナシクコキカヘリシヲ。アハテハイカニトキコユレトモ。雪月ノ興ニノリテキタリキ。興ツキテカヘリヌ。ナムソカナラスシモ戴安道ニアハムトソコタヘケル。

何カマタアハテカヘルト思フヘキ月ト雪トハ友ナラヌカハ

「舊本歌同」

管仲隨馬

管仲ハ齊ノ桓公ニツカヘテ上卿タリキ。桓公孤竹ト云トコロヲユクトキ。オヽキニ雪フリテ。ミチニマトヒニケリ。時ニ管仲カ云ク。老馬智ヲモチフルヘシト云リ。コヽニ老馬ヲハナチテ。ソノアトヲユクニ。馬モトコシミチヲワスレ子ハ。ツヒニシルヘトナリニケリ。

管仲公子糺カ將トシテ。タヽカヒニヲモムキテ。桓公ノヽヒセムルニ。アヤウクミエケルチ。帶ノウエヲイテ。イツハリタスケテケリ。桓公ノチニ管仲ヲムカエテ。マツリコトヲナセリ。

迷ハマシ雪ニイヘチヲ行駒ノシルヘヲシレル人ナカリセハ

「是も猶人の心のしるへかなこまの跡とふ雪のふる道」

李陵初詩

李陵漢王御使トシテ。胡國ヲセメニオモフキテ。五千ノツハモノヲシテ。十萬ノエヒスニトリコメラレテ。トシヲヘケリ。エヒスノ王祿ヲホトコシテ。ツカハムトスレトモ。シタカハスシ

テ。漢ノ節ヲオモヘリ。エヒスイカリテユルサス。ハルカニ故郷ヲヘタテヽ。タヽ異類ヲノミソミケル。時蘇武ステニ宮コヘ返ルヨシヲキヽテ。蘇武ニ詩ヲオクレリ。携手上河梁。遊子暮何之。又云。二鳧俱北飛。一鳧獨南翔。余自留斯館。五言詩コレヨリハシマレリ。

同シエニムレキル鴨ノ哀ニモカヘル波路ヲトヒオクレケル

〔舊本歌同〕

廣德從橋

後漢ノ御史大夫薛廣德。アザナハ長卿ト云。オホヤケ廟ヲマツラムトテ。イテタマフニ。ソノミチ風波ケハシキワタリヲ船ニノリ給ニ。廣德橋ヨリワタリタマヘト。シキリニ申オコナフヲ。王モチヒタマハス。時光祿大夫張孟ト云人申テ云。君聖ナレハ臣ナホシ。フ子ニノリテハアヤフク。ハシニシタカヒテハヤスシ。廣德カ申スニシタカヒタウヘシト云ヘリ。コトワリヲ思シリテ。ハシヨリワタリタマヘリケリ。

浪アラキハマナノ海ヲアヤフミシ心ノハシノアサカラヌ哉

〔舊本歌同〕

呂望非熊

周ノ文王渭濱ノカリニイテムトテ。史篇ニウラナハセラルヽニ。エモノクマニアラス。シクマニアラス。天君ノ師ニオクラムスルナリトウラナヘリ。文王七日イモヒシテ渭濱ニイテヽ。ヒトリノオキナノツリスルニアヒタマヒヌ。呂望トキコエシ人也ケリ。文王コレヲエテヨロコヒテ。クルマノミキニノセテカヘリテ。マツリコトヲマカセタマヒケレハ。ヨスナホニ。タミヤスクナリニケリ。呂望昔妻アリケリ。呂望カマツシキニタヘステ。ニケサリニケリ。後ニ呂望齊ノ國ノキミトシテオモムクミチニ。ナキカナシム女アリ。アヤシミトフニ。ワレハ呂望カ妻タリキ。イマ齊ノキミトナレルヲキクニ。心ミシカヽリシコトヲクイカナシフナリト云。呂望ワカコトナリトコタフ。女カヘリスマムコトヲノソム。呂望ミツヲ女ニクマセテ。ツチニイレテ。マタモトノヤウニウケヨトイフ。水カヘルコトナシ。トキニイハク。ナムチオムアイツキニシコトヲ。ミツノコトシト云テスキヌ。

カキクラシヽラヌ翁ニアヒミシモ心ノウラノ鏡ナリケリ

〔舊本歌同〕

郝廉留錢

郝廉ハルカナルミチヲユクニ。カハチワスルトテ。馬ニ水カヒテケリ。セニヲ水ノソコニナケテスキヌ。サテアチカイヘニイタリニケリ。アチイヒサケヲスヽメケリ。セニヲムシロノシタニトヽメテカヘリニケリ。ツユハカリノコトニモ。カクナムムクイヲ思ヒケルナリ。

旅人ノ駒ニ水カフチキリマテヒノクマカハノアサカラヌ哉

〔舊本歌同〕

長房縮地

費長房壺公ニシタカヒテツホニイリテ後。長房カ仙道ナラヒテ。キハムマシキコトヲミテ。ヒトツノ竹竿ヲアタヘテ古郷ヘカヘスニ。長房竹竿ニノリテ。思ハハルカナルミチナレトモ。地ヲツヽメテホトナクカヘリニケリ。ソノ竹竿ヲ葛波ノ内ニナケヽレハ。化シテ龍ニナリニケリ。後漢書云。長房壺公ニ信ノミチヲナラヒテ。オトロヲ群虎ノウチニフミテ。フカキ山ニシタカヒユクニ。オソルヽ心ナシ。長房ヲフセテ。クチタルナハニ萬斤ノ石ヲカケテ。ムチノウヘニアテヽカケタルニ。衆蛇キアヒキタリテ。コノナハヲカムニ。石ノオチムコトヲオソレス。ミヲウコカスコトナシ。壺公コレヲナテヽ。ミチヲヲシフヘキコトヲオモヒサタメツ。ツキニ糞中虫三ヲアタフルニ。臭穢コトニハナハタシ。長房コヽロニウトマシクキタナシトオモヒテ。イトヒステヽケリ。壺公カ云。汝チイクハクカミチヲエタル。ウラムラクハコヽニシテキハメサルコトヲ如何。長房ツイニ辭シテカヘル。壺公ヒトツノ竹杖ヲアタヘテ。コレニノリテユクトコロニマカセハ。カナラス古郷ニイタリナムトヲシフ。又ヒトツノ符ヲカキテ。地上ノ鬼神ニツカサトルト云リ

幾里ヲコメケル竹ノ杖ナレハヒトヨニカヘル家チナルラム

〔舊本歌同〕

蒙求和謌第八

閑居部十首

范蠡泛湖　於陵辭聘　許由一瓢
嚴陵去釣　孫敬閉戸　仲連蹈海
顏回瓢簞　揚雄草玄　蔣詡三逕
張湛白馬

范蠡泛湖

范蠡越王勾踐ツカヘテヨノ政オコナヒケリ。呉王夫差イクサヲアラソフホト。數十年心ヲヒトツニシテ。會稽ノハチヲキヨメテケリ。國ヲサツケヽレトモ。ウケトラスシテ。シツカニヨヲワタラムトスルヲ。勾踐ネムコロニヲシメトモ。シヒテサリヌ。人ヲヤリテトヽムレトモ。ワレキミノタメニ忠フカヽリキ。イトマヲタマハラムヲムクイトセムト云テ。ツヒニカヘラス。湖上舟ウカヘテ。舟ノ内ニシツカニヨヲソリタリテ。心ノマヽニアソヒケリ。勾踐昔ノ忠ノ空カルヘキ事ヲウレヘテ。會稽山ヲ給ヒケリ。後ニ陶ニユキテ朱公ト云ヘリ。陶ハ天下ノ最中ナルカユヘニ。アキナヒニ便アリケリ。ソノ利十九年ノ中ニ三タヒ千金ヲソナヘケリ。フタヽヒ別チテ。マツシキトモ。シタシキユカリニソアタヘケル。

老子ハ漢武帝ノ時ハ東方朔ト云ヒ。文帝ノ時ハ河上公ト云ヒ。齊ノ時ハ陶朱公ト云。越時范蠡云ヘリ。漢高祖ノ時

蕭何ト云ヒ。周ノ時ハ大公望ト云。堯ノ時ハ四嶽ト云。黄帝時風詔ト云。伏羲ノ時ハ勾亡ト云ヘリ。スヘテ万八千歳ヲカサ子タリ。

雲サワク都ノ空ヲヘタテキテノトカニスメルサヽナミノ月
〔都には心もひかすなりはてゝこまつのおきのさゝ浪の宿〕

於陵辭聘

楚王於陵子オホキニ賢ナル事ヲシリテ。相トセムトシテ。ツカヒヲツカハシテ。金ヲ百鎰オクリテメセトモ。金ヲカヘシテマキラスト云ヘリ。

陳仲子高傳云。於陵子モトハ仲子。齊ノ國ノ人ナリ。妻トヽモニ楚ニユキテ。於陵ト云所ニコモリキテ。ミツカラ於陵子ト云フ。マツシケレトモ。イヤシクモ非儀ノムサホリヲモトメス。楚王賢ル事ヲキヽテ。相トシテツカハムトオホシテ。金百鎰ヲオクリテ。頻ニメシニ遣シケレハ。妻ニイヒアハセテケリ。ケフ相トナリテ。アス駟ヲムスヒ騎ヲツラ子テ。ナムチカ心ヲタノシハシメムイヒケリ。妻ノ云ク。駟ヲムスヒ騎ヲツラ子テタノシム所。ヒサヲ方丈ニイルヽニスキシ。アマクスル所一內ニスキシ。アヤシキイホノ內ニシツミテハ。中々オタシキミナリ。スヽミテ楚國ニツカヘテ。ウレヘヲイタカムコト。オソラクハ汝チ命ヲタモ〔チハ恐〕〔マヽ〕ツヘシトコタヘケリ。於陵ノカル方ナキコトハヲイヨヽ思シリテ。使者ニ謝シテ金ヲウケトラスシテ。ツヒニマキラス。妻トヽモニナホ山フカクカクレサリヌト云ヘリ。

トモスレハ人ニトハレシ道カヘテ猶山深クスミソナレツル
一舊本缺同一

許由一瓢

許由潁川ノ人ナリ。ヨヲウキコトニ思トリテ。箕山ニコモリキテ年ヲオクリケリ。堯王許由賢ヲシリテ。ヨヲユツラムトキコエケリ。許由ウキ事キヽツト云テ。左ノ耳ヲ潁川ノ流ニアラヒケリ。時ニ巣父牛ヲヒキテ潁川ノ流ヲワタシテ。水ヲカハムトスルカ。許由耳ヲアラフヲミテ。水ケカレヌト云テ。牛ヲヒキテカヘリニケリ。許由箕山ノ松下ノイツミノ水ヲ手ニクミテノミケリ。人コレヲアハレミテ。ナリヒサコヲオクリケリ。許由水ヲクミテノミヲハリテ。コスヱニカケテケリ。ヒサコ風ノフクタヒニ歷々トシテナリケリ。許由ナルコヱヲワツラハシク思テ。ウチワリテステヽケリ。

シミツクム跡タユトテモ松陰ヤ風ニミタルヽ音ハヨシナシ
〔とふ人の風のつてまてよしなきは清水くみける松の下蔭〕

嚴陵去釣

後漢ノ嚴光字子陵也。是故ニ嚴陵ト云。昔光武ニツトメフカカリキ。光武位ニツキテ後。嚴陵ヲワスレタマヒニケリ。嚴陵ヨ

ヲウラミテ。孤亭山ニコモリヰテ。ツリヲタレテスキケリ。光武ミタヒメセトモマヰラス。時ニ天變アリ。司天奏シク云ク。舊臣アリテ君ヲウラミタテマツルコトアルヘシト申ケリ。帝嚴陵ナリトテ。ナホタヒ〳〵メセトモ。ツヒニマヰラス。嚴陵カツリセシ所ヲ嚴陵瀨トハイヘリ。

サリトモト頼ミシセヽヲコキスキテ恨ニシツムアマノ釣舟

「さりともと頼みしせゝをしつみきて釣する海士の恨をそする」

孫敬閉戸

楚人孫敬。アサナハ文寶。ツ子ニトヲトチテ書ヲヨミケリ。子フタカリケルヲリニハ。ナハシテカシラニカケテ。メヲサマシケリ。市ニイキケレハ。人コレヲミテ閉戸先生トソ云ヒケル。後ニミチニ長セリ。帝召トモマヰラス。

年ヲヘテサシコモリケル槙ノトノ内ニ千里ノクラカラヌ哉

「槙の戸にさしこもるとはみしかとも心にくらき道そなかりし」

仲連蹈海　齊人也。

魯仲連奇偉倜儻ノ畫策ヲ好ミテ。心ニ高節ヲ思ヒテ。フカクコモリヰニケリ。秦王官ヲサケテ職ヲサツケ給テメセトモ。ヨノアヤウキ事ヲサトリテマヰラス。シツカニ趙ニアソヒケリ。タトヒ東海ヲ蹈テハシヌトモ。秦ノ臣トハナラシト云ケリ。

清見潟浪ノ關守ハアユムモウキナヲトメシト思フハカリソ

「舊本歌同」

顏回瓢簞

顏回家マツシカリケレトモ。文道ニ心ヲヨロコハシメケリ。一簞ノ食一瓢ノ飲（ノミモノ）ノミアリ。ヨソニミルタニモタユヘクモナク。アヤシキイホリノスマヒヲミツカラハウレヘス。孔子ソノ賢ナル事ヲソツ子ニホメ給ヒケル。

簞ハ竹ノ籠。イヒイルヽウツハモノナリ。瓢ハナリヒサコ。水イルヽウツハモノナリ。

淋シサヲ誰嘆クラムウキヨヲハ沈ミテシモソ住ヘカリケル

「舊本歌同」

楊雄草玄

楊雄漢代ノ人。アサナ子雲ト云。文ト酒トヲタシナミテ。シツカニヨヲワタリシ人也。ニハノカヨヒチアトタエテ。カトノホトリニ人ノキタルコトマレラカナレトモ。書巻ヲヒラクトキ。故人ニムカフカコトシ。縛酒ヲクムトキニ。ミノウレヘナキカコトシ。後ニ大玄經ヲツクリテケリ。人キタリテ此ヲミテ。オホヤケニ申テケリ。オホヤケコトニモテアソヒ給ヒケリ。

水莖ノアトニ昔ヲミルモナホ宿ノ人メトナラスヤハアラヌ

「舊本歌同」

薛覇三逕

蔣詡性廉ニシテ家ノマツシキ事ヲウレヘス。ヨヲソシル心ナクシテ。シツカニヒヲオクリケリ。羊仲求仲ト云二人ノトモノミソ。オナシ心ニヨノマシハリヲコノマスシテ。トモナヒアソヒケル。ニハノホトリニタケヲウヱテ。竹ノモトニワツカニ三ノ逕ソアリケル。三逕ト云ルハ門ノミチ。井ノミチ。厠ノミチ也。三逕ハ車。井。厠ノミチトモ云ヘリ。

蓬生ノ露ワケワフル通路ハ跡タヘタリト云ハヌハカリソ

〔舊本歌同〕

張湛白馬

張湛後漢扶風人也。ツ子ニ白馬ニノリケレハ。ヨノ人白馬先生トソナツケヽル。オホヤケ心ノカシコキ事ヲキヽ給ヒテ。司徒ニナサレシカトモ。スナホナラヌヨノマツリ事ヲカタフキシタカハス。朝堂ニイタリテ。イツハリテシタチユハリヲシタリ。病ノヲモキヨシヲノフ。ツヒニコモリキニケリ。

トリツナク人ニハアレテ故郷ノノハラノ草ニ駒ハカクレヌ

雪の色のこまひく春にさそへとも猶ふる郷の雲になつみぬ」

蒙求和謌第九

懷舊部十一首

王道公忠（晉）　東平爲善　魏儲南館

花歆忤旨　陳蕃（羞）蔵容　宋弘不諧（諧）

劉阮天台　何武去思　季札掛劍

王修輟社　子路負米

王道公忠　晉代人。

王道晉ノ中宗ニチカクナレツカウマツリテ。年月ヲオクリムカフルニシタカヒテ。御心サシモフカクナリマサリケリ。ツ子ニヒトツユカニメシケレトモ。カタクオソレ申シテ。彌ミヲツヽシミケリ。中宗カクレ給テ後。昔ヲシノフアマリニ。ナクナクミサヽキヲオカム事。日ヲカサ子テオコタル事ナシ。百官ノミサヽキヲ拜スル事コレヨリハシマレリ。

オクレキテ慕フ涙ハタメシアレト苔ノ下マテトフハマレ之

〔さらはまたなくさむ道のなきまゝに幾度苔の下をとふらむ〕

東平爲善

東平憲王蒼ハ粛宗ノオトヽナリ。粛宗憲王蒼ニアヒテ。人ノ家ニアルニ。何事ヲシテカタノシヒトスルトキコエケレハ。爲善ヲモトモタノシヒトストコタヘケリ。コノ事ヲキヽテ嗟歎セスト云事ナシ。憲王蒼東平ニユキテ。長安ノ古郷ヲコヒテハカナクナリニケリ。ソノハカノウヘノ松柏西ニナムナヒキケル。後ニフルサトニユキテ粛宗ノイハク。ソノ人ヲ思ヒテ。ソノサトニイタルニ。ソノ所ハ存シテソノ人ハ亡セリトソ。カナシヒ給

ヒケル。

讒言ノ名殘ニヨハヽフケシカトナシトテ歸ル旅ハナカリキ

「舊本歌同」

魏儲南館

魏ノ文帝儲君タリシ時。朝歌ノ令吳質カモトヘツカハス書云。每憶昔日南皮之遊一。馳騁北場(塲)。旅食南館一矣。

タヒ人トナリテソミツル山サクラ春ヤ昔ノナラノフルサト

「舊本缺闕」

華歆忤旨　陳群感容

魏受禪。朝臣三公以下ミナ受爵一。トキニ司徒華歆字子魚。顏色忤。尙書令陳群字長文。感容。爵ス、マス。帝御氣色カハリテ群臣ヲメシテ。朕應天受禪一。人々ヨロコヘリ。花歆ト陳群トハモニヨロコハサル事ノユヱヲトハレケリ。陳群ヒサマツキテ申テ云ク。臣相國トナラヒテ事漢朝一。雖欣聖代一。獨義形於色一。オソラクハ御心ニタカフラム事。ノカレカタキヨシヲコタヘ申ニ。帝フタリカフルキナサケヲホメテアハレミ給テ。彌オモクシ給ヘリ。

メツラシキ空ヲミルニモ悲シキハ昔ニカハル春ノアケホノ

「舊本歌同」

宋弘不附(諂)

後漢ノ宋弘明帝ノ時侍中トシテツカヘケリ。宋弘容姿花麗ニシテナサケ深カリキ。時ニ帝ノヲハ湖陽公主。宋弘カモトヨリメアル事ヲシリテ。色ニハ出子トモ。イカテモト思フ心フカヽリケリ。イカナルヒマカアリケム屛風ノ中ニチカツキヨリテカタラヒテ云ク。富易交一。貴易妻一トキコエケリ。宋弘コタヘテ云ク。臣聞。糟糠之妻不下堂。貧賤友不可忘。カクマコヘテサリヌ。公主宋弘ヲ思フ心マス／＼フカクナリテ。トカムルハカリニナリニケレハ。帝キヽ給ヒテスヽメ給ヘトモ。昔ノナサケヲアラタメカタク思ヒトリテ。ツヒニウケ申サス。

フリニケル契ヲイカヽ忘草アタナル露ニムスホヽレヘキ(ル歟)

「昔おもふ心のみこそます鏡久はうつろふかたもなき身そ」

劉阮天台

漢明帝ノ時剡縣ニ劉晨阮肇(肈)ト云フタリノ人アリ。永平十五年ニトモニクスリヲトラムトテ天台山ニイリケリ。ミチヲフミタカヘテ。カテツキニケリ。山ノホトリヲノソメハ。ヒトツノモヽノ木アリ。トモニモヽヲトリテクヒテ。チカライテキヌ。谷ニクタリ。テ手アラヒ口ス、ク所ニ。アヲナニラノハナ山ハラヨリナカレイツ。又ヒトツノサカツキニ。コマノイヒノクタケツキタル。ナカレユクヲミルニ。人サトトホカラスト心エテ。水ヲワタリテ一里ヲスキテ。一ノ山ヲコエテ。オホキナルタニヲワタリテミレハ。二人ノ仙女アリ。姿ニフレテタクイナキサマナリ。仙女スナハチ劉阮カ姓名ヲヨフ事。マシハリフル

キ物ノコトシ。ヨロコヒテ随テユクホトニ。黄金珠玉ヲカサレル縮ノ内ニ入ヌ。左右ニツラナレルヲンナ。ミトリノソテヲナラヘテコト〳〵ク端正ナリ。スヘテヲトコハヒトリモナシ。ハシメニハコマノイヒ。羊ノホシシヽ。サケ。モヽ十五ヲスヽメ。ノチニハ絃歌ノ曲ヲホトコセリ。ミヽニフルヽ所心ヲウコカシ。ナミダヲモヨホサスト云事ナシ。カクテ日クレヌレハ。劉阮肇フタリノ仙女トオノ〳〵フシニケリ。ナサケフカキ心サマタメシナキホトニオホエケリ。十五箇日ニモナリヌ。今ハカヘリナムト云ヲ。仙女シタフケシキ子ムコロニシテ。キミコヽニキタレル事。宿福ノマ子ク所アリテ。チキリヲムスフ事ヲエタリ。イツレノトコロヲ子カフヘキソヤト云テ。アナカチニセキトムレハ。サスカニステカタクオホエテ。トシナカハカリニモナリケリ。天氣和暖ナルコト二三月中ノコトシ。百鳥カタラヒナキテ。萬木サカリニ花サケリ。フルサトヲコフルナミダ。コノ時ニシテ彌切ナリ。ステニカヘルアシタニノソミテ。モロ〳〵ノ仙女アツマリテ。絃歌ノ曲ヲツクシテ。二人ヲオクル。ナコリカタミニセム方ナクオホニケリ。東ノ洞口ヨリカヘレトヲシヘテ。ナク〳〵ワカレサリヌ。サテフルサトニカヘリテイタリヌ。ハツカニ半年ト思ヒシニ。昔ノ家アトカタモナク。アヒシレル人モナシ。サト人コレヲアヤシヘリ。七世ノ孫ノイハク。ツタヘテキク。上世ノ祖翁山ニ入テノチ。ユキカタヲシラスナリニケリトイヒツタヘツルコトアリ。モシソノ人カト云リ。ヤトラムトスルニ所ナク。カヘラムトスルニミチナシ。時ニ大康八年ナリ。

故郷ハアリシニモアラスキシ方ニ又歸ルヘキ道ハワスレヌ

「まよひ行旅はうつゝをたとりしに歸る家路も夢の古里」

何武去思　漢代人。

漢書ニ云。何武アサナハ君緋。蜀郡ノ人也。コトニフレテナサケフカヽリキ。コノミテ人ヲスヽメテ。人ノヨキ事ヲアラハサムト思ヘリ。ソノ所ヲサリテ後。ツ子ニ何武カ事ヲオモハスト云事ナシ。

ハルカスミタチワカレケル山人ノ心ノ花ヲヲシムハカリソ

〔舊本歌闕〕

季札掛劍

呉ノ季札オホヤケノ御使トシテ。隣リノ國ニユキケルニ。徐君カ季札カ劍ヲミテ心カケテケリ。季札ソノ心ヲサトリテ。カヘリテアタヘムト思ヒテユキヌ。カヘリキタリテ徐君ヲ尋ヌルニ。ハヤクシニヽケリト云。季札徐君カツカニユキテ。劔ヲトリテ栢樹ノ枝ニカケテサリヌ。ナキアトマテモ。思フステヲタカフヘカラサリケルナリ。

「あはれにも消にしあとの梢まて思ひをきける秋の霜かな」

王僧孺社

魏王僧七歳ニナリケル時。母社日ニシニヽケリ。王僧社日ヲムカフルコトニ。母ヲコヒツヽカナシミイタミケリ。隣ノ里人コレヲ哀ヒテ社日罷レ社。カノアトヲトフラヒケリ。

里トハ廿五家ヲイヘリ。社日トハ春秋分ツチノエノ日ヲ云ヘリ。鷰トシコトノ春社日ニキタリテ。秋ノ社日ニカヘルナリ。

秋カヘルツハメモ春ハクルモノヲナカキ別ソケウモ悲シキ

一舊本歌同一

子路負米

子路ト云人家マツシクシテ父母ヲヤシナフ志アサカラス。ミツカラ米ソヲヒテ百里ノミチヲユキカヨフ。ワカミハ藜藿ヲクヒテ。オヤノクヒモノヽヨカラムヲノミ思ヒケリ。オヤウセテ後。楚國ニユキテ官ヲタマハリ職ヲカサ子テ。イヘトミタカラユタカニナリヌ。カクテモオヤニミエヌコトヲノミ。子テモ思ヒサメテモウレヘケリ。衣ノツテノ錦繡モ。オヤナケレハ誰ニカ見エントカナシク。倉ノ内ノ金玉モ。オヤナケレハタレカタメニカタカラトセムトウレヘ。百乘ノ車ノカサリモカヒナシ。千鍾ノアハノタクハヘモヨシナクオホエツヽ。マツシクテオヤヲヤシナヒシ時ノミ。コヒシクオホエケルマヽニ。昔ノアヤシカリシスカタニテ。アフヒノミヲクヒテスクシケル。

論語云。六斗四升曰釜。十六斗爲庾。十六斛曰秉。秉五合爲八十斛。

又云。釜十則鍾ナリ。一石四斗ナリ。十六斛秉トス。

タラチ子ノミヌハ心ノヤミナレハ夜ノ錦ニヌルヽ袖カナ

〔舊本歌同〕

蒙求和詞第十

述懐部廿首

梁鴻五噫　秉去三惑　屈原澤畔
漁父江濱　陸阮無人　賈誼非次
范冉生塵　孫晨藁席　君平賣卜
孔伋縕袍　田方簡傲　郤詵一枝
山豫儉素　晏嬰脱粟　叔敖陰德
柳下直道　季布一諾　莊周畏犧
伍倫十起　子罕辭寶　朱家脱急

梁鴻五噫

梁鴻後漢ノ代ノ扶風ノ人也。才學ヨニスクレタレトモ。オホヤケモチヰ給ハ子ハ。ヨヲウキモノニ思ヒトリテ。イツヽノナケキノ歌ヲ作リテ。覇陵山ニカキコモリニケリ。孟光ト云心カシコキメヲミニソヘテ。アケクレハ書ヲ誦シ琴ヲヒキテソ。心ヲナクサメケル。

五噫事。一登彼北邙兮噫。二顧視帝京兮噫。三寥々未央兮噫。四宮室崔嵬兮噫。五人之劬労兮噫。遂於越中也。

嘆キコシ山ノイツヱノ奥ノ色ハミノウキ雲ソトサシヽケル

「思いつる家路の奥の岩かけに身のうき雲そさしゝける」

柔去三惑

々々ツ子ノコトハニイハク。ワレニ三惑アリ。一酒ニマトヒ。二色ニマトヒ。三タカラニマトフ。コノ三ノマトヒヲ心ノソコニウレヘケルナリ。

夢ノヨヲカリノ情ニホタサレテサメヌハヱヒノ惑ナリケリ

「舊本歌同」

屈原澤畔　漁父江濱

楚屈原懐王ニツカヘテ三閭大夫タリ。王甚世ノタカラトシテ。同列ノ大夫靳尚カ心ニ。屈原カ才智ノスクレ。賢慮ノイタレルヲソ子ミ子タマシク思ナリヌ。サマ〳〵ハカリコトヲメクラシテ王ニ讒シケレハ。王人ノコトハニツキテ。トカナキ屈原ヲナカシハナタレヌ。屈原江濱ニアソヒテ吟澤畔顏色オトロヘタルサマナリ。時ニ漁父江濱ニツリスルアリ。屈原カ憔悴トシテミツカラタノシヘルヲミテ。汝ハ三閭ノ大夫ニアラスヤ。コヽニハナニセラルヽソトヽフ。屈原イハク。ヨハミナニコレリ。ワレヒトリスメリ。衆人ミナヱヘリ。ワレヒトリサメタリ。コレユヱニハナタレタルナリト云リ。漁父カ云ク。聖人ハモノニ凝滯セス。カルカユヱニ世トオシウツル（ツ世上）世ミナニコレラハ。何ソソノ泥ヲ淈ニコシテナミヲアケサル。衆人ミナヱヘラハ。何ソソノ精(カスチ)酺(スヽラ)ヲ歠(シル)サル。屈原カイハク。我キク。アラタニ沐(カシラアラフ)モノハカナラス弾冠(ハシク)ニアラタニ浴(ユアフル)モノハ〈ニカナラス〉衣ヲフルフ。安身(イツクンソ)ノヨク察々タルヲモテ。モノヽ汶々タルヲウケムヤト云。漁父莞爾トシテワラヒテ。フナハタヲタヽキテサリニケリ。又ウタヒテ云ク。滄浪ノ水スメラハワカ纓ヲスヽクヘシ。滄浪ノ水ニコレラハワカアシヲアラフヘシ。カク云テサリキ。トモニモノイハスナリヌ。

懐王秦ニイタラムトスルヲ。秦ハトラオホカミノ如シ。キミユキテカヘルコトヲニシト。屈原イサムレトモキカスシテ。秦ニムカヒテ項羽カタメニホロホサレヌ。襄王位ニツキテ後。靳尚カ讒ニツキテ。屈原ヲスヽメラレサリケレハ。シリソキコモリニケリ。屈原五月五日身ヲナケテシヌ。ヨノ賢人ヲモトメス。人ヲシラサルニソナリニケル。後ニ妻ノユメノウチニ。屈原キタリテツケテ云ク。淵中龍アツマリテ我カ食ヲ奪ヘリ。汝飯ヲ五色ノ糸シテカサリテ。龍ノカタチノコトクシテ。五月五日ヲムカヘテ淵ニナケヨ。龍ハオソレテサリナム。ワレワシリテウケムト云リ。妻ユメノツケノマヽニトヽノヘケリ。楚國ノ人今日コトニ屈原ヲマツレリ。楚ノ襄王馳射ヲトヽノヘ。一日ノ宴ヲマフケテマツレリ。

ムスフテニヽコル雫モアルモノヲ獨スミケル山ノ井ノミツ

「舊本闕同」

陸阮無人

陸阮ハ徳望人ニスキタリケレドモ。ミヲカスナラスオモヒナシテスクシケリ。時ニ王道(導)郗鑒庾亮ウチツヽキウセニケルヲ。ヨノ中オホキニヲシミケリ。オホヤケ陸阮ヲメシテ司空ニナサレニケリ。陸阮ノカレ申セトモカナハス。人キツトヒケレハ。ワレソノウツハモノニタラスシテ。ステニ三公ニツラナレリ。天下ニ人ナキニヽタリト云ヘリ。キク人ナホ陸阮ハカリノ人ナシトソホメケル。

「あやにくにつゆこもりにし心こそ人にもすきて春を知けれ」

賈詡非次

賈詡ハクラヰイヤシカリシヲ。魏ノ文帝人ヲコシテメシヌキテ大尉ニウツサレニケリ。孫權コレヲキヽテ。人ヲシラヌヨノ政トソアサムキケリ。ワラヒケリ。

クラヰ山ミチナキ道ニナリニケリ麓ハミ子ニ嶺ハフモトニ

「舊本歌闕」

花冉生塵　後漢代人。萊蕪令。

范冉ト云シマツシキ人ノスミカ。コシキノウチニハ。チリツモルマテ。シハヲリクフルイトナミヲワスレ。カマノソコノ水ニハ。イヲノスタクマテ。アサケノケフリタエハテニケル。マコトニ心ホソクナムアリケル。

カキツメヌ木葉ノチリハツモレ𪜈宿ノ烟ハタエハテニケリ

「わひ人の宿のあさけに立煙たへてしもこそ心ほそけれ」

孫晨藁席

孫晨家マツシクテ冬ノ月ニフスマナカリケリ。藁一束アリケルヲ。クルレハフシ。アクレハカクシオキケリ。

住ワヒヌ葉ヤノ床ノサ莚ニ心ニモアラヌヨヲソスコシツヽ

「月影も時雨もゝりて冬の夜はわらやの床に有明の空」

君平賣卜

嚴君平蜀郡人也。オホヤケシキリニメセトモ。ヨテウキモノニ思ヒトリテツカヘス。賣卜(ウリテウラ)成都ノ市ニテ日々ニ百錢ヲトリテ。肆(クラチ)トチテスタレヲオロシテソスミケル。烏帽ヲイタヽキテ墳曲ヲタツ子テ榮祿ヲモトメス。

都ヨリ心ノウラヲタノミキテウルマノ市ニミヲカクシケリ

「都をはらしといはれの市にきて心のうちに身を任せつゝ」

孔伋温袍

々々イヘマツシクシテ。温袍オモテヤレテウラナシ。十旬九食(クヒケリ)。田子方ト云人狐白ノ裘ヲオクレリ。孔伋カ云。ワレキク。人ニオクルモノヲハ不肖(トモシト)ノ者コレヲウク。ミソニスツルカコトシ。ワカミハ雖無德。アヘテミヲハ溝トオモハストテ。ツヒ

ニカヘシテケリ。
十句ハ十日ナリ。明王不受咫尺之玉。而愛一寸之句。々猶時。
空サユル雲ノコロモヲアマツ風心ツヨクモフキカヘシケル
「恨ける雲の衣をいとひすて心の月のなをもあらはす」

田方簡傲

田子方魏ニユク。魏ノ太子迎於郊。子方車ヨリオリス。ミチオコレルサマナルヲ太子トカメテ云。貧賤者驕人乎。子方コタヘテ云ク。以天下驕人失天下。以富貴驕人失富貴。唯貧賤ニシテ可以驕人。言不從行不合。則授履適秦楚。安往而不得貧賤哉。又云。田子方魏文侯ノ師也。文王封太子於中山。路逢子方。下車禮謁。子方不爲禮。太子不悅。因曰。富貴者驕人乎。貧賤者驕人乎。子方曰。國君トシテ人ニオコレハ。スナハチソノ國ヲウシナフ。大夫トシテオコレハ。スナハチ家ヲウシナフ。貧賤ノ者ノ行不合。言不用。則安往而不得貧賤乎。
トカメスハ心ノ内ヲシラマシヤユキアフサカノ關ノタヒ人
「あは雪のよにふるかひはなけれとも我身をいかゝ思ひけつへき」

郄詵一枝

晉ノ郄詵アサナハ廣基。賢才ヨニキコエテ對策天下第一ナリ。武帝郄詵ニ浪カ才ノカシコキ事イカホトヽカ思フトヽヒ給ヘリ。郄詵申テ云。臣舉賢良。對策爲天下第一。シカハアレトモナホ桂林ノ一枝昆山之片玉ノコトシト申セリ。詞壞折桂コレヨリハシマレリ。
ヒトエタノ月ノ桂トイヒナセトヨニアマリケル光ナリケリ
「千里あまりくまなき影も一枝の月のかつらと思ひける哉」

田豫儉素　魏人。

幷州刺史田豫清約儉素ニシテ。オホヤケヨリアテオコナハルヽ賞賜ヲハ。ミナ將士ニワカチアタヘケリ。ミヲノチニ。人ヲサキニスル心ノミソアリケル。
イニシヘヤ我身ニマサルモノナシト思人タニアリト聞シカ
「いにしへや我身にまさるものなしと思人たに有ける物を」

晏嬰脫粟

晏嬰ハ齊ノ國ノ人也。オコリヲイトヒイヤシキヲ好ミケリ。ツ子ニ食脫粟。不重味也。齊ノ景公晏嬰ヲツカヒトシテ楚國ヘツカハシケリ。楚王晏嬰カ智弁ノホトヲキヽテ。心ミムトオホシテ。ヒソカニ人ヲシハリテ殿ノ前ニオイテ。ソラシラスシテキニモノソト人ニトハルヽニ。齊ノ國ノモノヽヌスミタルヲメシイマシムルナリト申セリ。楚王齊ノ國ノ人ハヌスミヲスルナラヒニテアルヤト晏嬰ニ問ヒ給ニ。コタヘテ云。君キヽタマヘ。江南ノタチハナノ木ヲ江北ニウツシウヽレハ。ソノ木枳棘トナレリ。水土ノコトナルユエナリ。人モ齊ニアル時ニハヌス

スミモセ子トモ。楚ニキタリテハカクナラヘリ。アキラカニシリヌ。土俗ノシカラシムルナルヘシト申セリ。王オヨヒ左右ノ人オホキニハチテコタフルカタナシ。

脫粟ハ纔脫粟而已。不精鑿也。說苑云。晏子曰。令升斗之穀以滿倉廩。太山之高非一石也。累卑然後高也。夫治天下者非用一二之言也。晏子一日ニミタヒ齊ノ景公ヲイサメキ。景公莉オモクナリテノコロ。晏嬰一日ニミタヒワレヲセメキ。イマタレカワレヲセメムトソ心ホソクキコヘケル。

アハツノヽクサハ梢ニカヽリテモ露ノ命ハナカラヘヌヘシ

（舊本歌同）

叔敖陰德

々々ハ楚ノ令尹ナリ。乘棧車牝馬。冬ハ羊裘ヲキ夏ハ葛衣ヲキテ。事ニフレテ儉約ヲコノミシ人也。イトケナカリシトキアソヒニイテヽ。兩頭ノクチナハヲミテ。コロシテフカクウツミテケリ。カヘリテ母ニムカヒテナキヰタルヲ。母オトロキトフニ。兩頭ノクチナハヲミツ。コレヲミルモノハスナハチシヌト云コトヲキケリトイヒケリ。サテソノクチナハヲハイカヽシツルトヽヘハ。後ノ人ノミテシナムコトヲヽシミテ。コロシテフカクウツミヌト云ケリ。母イハク。ナムチサラニシヌヘカラス。ノチノ人ノミテシナムコトヲヽシミテ。フカクウツミツレハステニ陰德アリ。ソレ陰德アレハカナラス陽報アリ。德ハ不祥ニ勝。仁ハ百禍ヲノソク。天ハタカキニヰテ卑キクトイヘレハナリ。ソノヽチ叔敖楚令尹トナリヌ。

心アリテ降クル雪ヲ埋マスハノヘノオトロヤ危フマレマシ

「旅人を後の草葉におもひおくなさけそ露の命なりける」

柳下直道

柳下惠アサナハ展禽。家ニ柳アリ身惠德アリ。コノユエニ下惠トハナツケヽリ。魯ノ典獄官トシテ。ミチナホウシテツカフルニ。群邪コレカスナホナルヲニクムユエニ三タヒ黜タリ。アル人。魯ノ國ヲハサルヘカラスヤトヽヒケレハ。世ミナ邪ナリ。直道事人。イタラム所ノ國イツクニシテカ。三タヒシリソケラレサラム。ミヲマケテ人ニツカヘマシカハ。魯ニアリテシリソケラレサラマシ。何必去父母所居之國ヤトソコタヘケル。

カヒナシヤ人モスサメヌヤナキ陰心ヒトツノ道ハアレトモ

〔明けき心の道もかへりてはくらきにまよふ浮世とそみる〕

季布一諾

々々ハ楚人也。一言ノ信ヲ變スル心ナカリキ。ソノカミ窘漢祖。々々天下ヲトリテウラミヲノコシケレトモ季布ヘツラヒシタカハシト云テ。屬朱家ニカクレヰニケリ。後ニ思ユルシテ爲郎。ハナハタオモクセラレケリ。時ノ人ノコトワサニ云ク。得黃金百鎰ヨリハ不如季布一諾ニハト云リ。

タノモシナ移ロフヨヽニウツロハヌオホナシ常磐ノ松ノ心ハ

「年をへてかはらぬ色の一枝もときはの松のたのもしき哉」

荘周畏犠

々々ハ楚ノ人。天下ニスクレタル賢者也。楚王ツカヒヲツカハシテ相トセムトオホセラレケレハ。荘周ツカヒニアヒテ云。ナムチ犠牲ヲミスヤ。ハシメハ繒綵ヲキセ菽藿ヲカヘトモ。ヲハリニハヒキテ大廟ニ入テ孤犢トナリヌ。ワレ犠牲ノタメシニナラシト云テ。フカクコモリヰニケリ。荘周ハ夢中ニ胡蝶トナリシ人也。

時ヲマツオナシ羊ノミトナシテ思ハヌ方ニアユムヘキカハ

「うき世をはともしにさそふ夏山の鹿のためしをいとふ計そ」

伍倫十起（舊本先須讀）

後漢ノ第五倫アザナ伯魚ト云。アル人トヒテ云ク。キミワタクシアリヤイナヤトフニ。コタヘテ云ク。ワカコノカミノコアリキ。昔ヤマヒセシトキ。一夜ニトタヒオキテミトフラヒテ。シリソキカヘリテハ。スナハチヤスクイ子ラレキ。ワカコヤマヒスル時。ユキテミスト云トモ。ヨモスカラ子ラレスシテナケキアカス。コレヲモテコレヲハカルニ。ワタクシナシト云ハムヤトコタヘケリ。

起臥テトカヘリ人ヲトフヨリモコヲ思フ床ハ休ムマソナキ

子罕辭寶

宋人ヒトツノ玉ヲウ。子罕ニアタヘタリ。子罕ウケスシテ云ク。ワレナムチカタマヲトラハ。ナムチカタカラモウセナム。ワカ人ノモノヲムサホラヌヲタカラトセシ心モ。ムナシクナリナハ。ナムチモワレモ。タカラウセタルカコトシト云テ。玉ヲカヘシテケリ。

寄クレハ浪ニカヘシテイセノ海ノキヨキ渚ニ玉モトマラス

「伊勢の海きよきなきさによる珠を浪にかへすは磯の春風」

朱家贍急

魯ノ朱家高祖ノ時ノ人也。魯人コト〳〵クニマシハリムツヒケリ。朱家ヨニツカヘテコトヲオコナフニ。トカアルモノヲカクシイケタルコト。何百人ト云コトヲシラス。人アヤマチヲタスケハクヽム心。オノカミノコトヨリモフカヽリケリ。季布将軍カアヤフカリシヲ。ハタスケシカトモ。富貴ノヽチハトハスソナリケル。セキヨリ東ノ人。シカシナカラクヒヲノヘテ。コレニマシハラム事ヲコヒ子カヒケリ。

コヲ思フ親ニモスキテ深カリキシルモシラヌモステヌ情ハ

「しるしらすはくゝむ道のおほき哉子を思ふ闇はなへて成けり」

蒙求和謌第十一

哀傷部廿首

墨子悲絲

墨子シロキ糸ノソムルニ隨テ。黄ニモナリ。クロクモナリユクニ付テ。ウキヨノ色モ又ウツロヒヤスク。サタメナキ心ホソサヲ思ヒミタレツヽ。カナシヒケル也。

白糸ノ移ロヒヤスキ色ヨリモ程ヘヌモノハウキヨナリケリ

「舊本歌闕」

楊朱泣岐

楊朱モノヘユクミチノホトリニタチテ行客ヲミレハ。アルヒト東ヲサシ。或西ヲノソム有リ。キタトヤセム。南トヤセム。イツレカイヘ。イツレカタヒト思フニ。アリハテヌワカレモ。アハレニ思ヒシラレテ。ナキタテリケルナリ。

イツチトテ我サヘ急ク道ナラム行モトヤルモ有ハテヌミヲ

「舊本歌闕」

仲文照鏡

仲文ハ殷ノ人也。モトヨリ名望タカヽリキ。朝ニツカヘテハマツリ事ヲトルヘキミソト思ヒケル。ソノ事ムナシクテ。東陽ノ大守ニナサレケルヲウキ事ニ思ヒケリ。コノユヱニ桓胤トヽモニ謀反ヲオコシケリ。ソノ時カヽミヲミルニ。カシラミエサリケレハ。オトロキオソレケルホトニ。後ニコロサレニケリ。

「おしとみしかしらを雪はます鏡きゆるはかりの影そ悲しき」

陵母伏劍

陵母トハ王陵カ母ナリ。漢祖ト項羽トアラソヒタヽカフ時。王陵黨ヲムスヒテ數千ノツハモノヲアツメテ。漢祖ノカタニツキヌ。項羽王陵ヲ聘ハムト思心フカシ。ハカリテ陵母ヲトリコメテ王陵ヲヨフニ。陵母ヒソカニ王陵カモトヘ使ヲヤリテコカミカクテアレハトテ。イタミ思フヘカラス。漢祖ノタメニ忠ヲキハメテ。フタ心ヲミエタテマツラサレトイヒヤリツ。ワカミシハラクモカクテアラハ。王陵ワレヲ思ハムユヱニ心ヨリキケシキモソ人ニミエルトテ。陵母ナク〳〵劍ノウヘニフシテ命ヲウシナヒテケリ。

存命ヘハ我ユヱモノヤ思フトテコノタメスツル命ナリケリ

「いきてこそ子を思ふやみにまよふなれ命をすつる道も有けり」

紀信詐帝

々々ハ漢祖ノ將軍也。容貌漢祖ニヽタリ。漢祖滎陽ニテ項羽ニカコマレテ。アヤフクミエケルトキ。紀信スヽミテ云ク。事スミヤカナリ。ワレキミニカハリテ王車ニノラム。項羽ワレヲ高祖ト思ヒテ。ワレニカヽラムヲリ。キミハノカレ給ヘト云テ。車ニノリカハリヌ。漢祖食ツキテ楚ニクダシタマフヨシヲイヒナスニ。項羽ヨロコヒテアタリヲステヽ車ヲカコメリ。高祖ソノヒマニノカレヌ。草車ステニチカツキキタレリ。高祖ニハアラスシテ紀信ナリケリ。項羽ソノ心ヲホメテ。ナムチヲワカヽタノ將トセムトイフニ。紀信カ云ク。忠臣ハ不事二主ニ。勇士ハ不得諂言テ。汝マサニ漢ニ降セヨト云ニ。項羽イカリテ紀信ヲコロサムトスルニ。クユル心ナシ。ミヲマカセテヤキコロサレヌ。

立ノホル煙ヲミテソミニカヘテ思ヒケリトハ思ヒシリケル

一今はとてやきける藻のもしほ火にくゆる煙の色なかりけり一

隱之感鱗

呉ノ隱之アニオトヽ。丹陽ニ有リ。母ニオクレテ後。アナカチニナケキカナシヒケルホトニタニイリニケリ。道ユキ人キタリアツマリテ。アハレミタスケテ。イキイテニケリ。トナリノサトニ韓康伯ト云人有。ソノ母隱之カナクコヱヲキクニ。オヤヲ思フ心ノアサカラヌコトヲアハレト思ヒシリニケリ。康伯ヲヨヒテ。汝チ選官タラムトキハ。隱之カ心シタラムトモカラヲモチフルヘキナリト云ケリ。

キヽワタル隣ノサトモ悲シキハコスヱシヲルヽ松風ノオト

一あたりまでね覺に袖のかはらぬは梢しくるゝ松の秋風一

王褒栢慘

晉ノ王褒チヽニオクレテ。ハカノホトリニイホリヲムスヒテ。ナク〳〵アカシクラシケリ。ナミタハカノウヘ松栢ニカヽリ。松栢コレカタメニイタミカレタル色ヲナセリ。ツ子ニ詩ヲヨミケリ。又云ク。褒ツ子ニ墓所ニイタリ。栢ノモトニヒサマツキテナク。ナミタ木ニカヽリテ。木コレカタメニカレタリト云ヘリ。慘字ナシ。オホツカナシ。

應ナスヲカヘノカヘノ下枝マテ同シナケキノ露ツコホルヽ

一舊本歌同一

羊祜識環

晉ノ蔡邕カ外孫羊祜ハ大山ノ人也。身ノタケ七尺三寸。容貌美麗ニシテ。ヒロクナラヒフカクサトレリ。羊祜五歳ノ昔。メノトヲヨヒテ。ワカモテアソヒシ金環ニサセヨトイヒケレハ。サキ〳〵サルモノナカリキトコタヘケリ。トナリ人ノ李氏カ家ノカキノ桑ノ木ノナカニアリトイフ。コノ時ニメノトユキテサクリイタシテケリ。アルシオトロキテ。コノ金環ハワカ小兒ノ五年カサキニハカナクナリシカ。ウシナヘリシモノナリ。イカニシテトリイタセルソトアヤシミトフ。メノトハシメヨリ

ノ事ヲツフサニカタリケリ。李氏コレヲキクニ。ワカコノウマレカハリニケルヨト思フニ。セムカタナクカナシク。アハレニオホエケリ。

故郷ノ池ノタマモヲトフ人ソ昔スミコシアルシナリケル

「袖ぬらすもとの雫の悲しきはたまをとひける露のふる郷」

臨江折軸　　漢書云。景帝四年爲皇太子。四歳爲臨江王云々。

臨江閔王ハ漢ノ景帝四年ニハシメテ皇太子タリキ。ステラレテ臨江王ニナサレヌ。後ニメシカヘサル、時。臨江ヲイツトテ。車ノヨコカミヲレニケリ。江陵ノオキナ父老コレヲミテ。ミチノカトテニ車ノヨコカミステニヲレタリ。ワカキミカヘラムコト。ハナハタアヤフカルヘシトナキケリ。サテ長安ニ中尉ノ府ニイタル。郅都責訊王。々恐レテ自殺シヌ。藍田ニハフラレニケリ。ツハメ數百アツマリテ。ツチクレヲフクミテ。ハカノウヘニオキケリ。

年ヲヘテシツミシ花モアル物ヲカヘリ車ニカ、ルヘシトハ

「年をへて沈みしたにも有物をかへる車にかゝるへしとは」

史魚黜殯

衞ノ大夫史魚ヤマヒオモクナリテ。シナムトスルニノソミテ。子ヲヨヒテ云ク。靈公ノ蘧伯玉カ賢ナルヲモス、メ給ハス。彌子瑕カ不肖ナルヲモシリソケ給ハサル事ヲ。イキテイサメ申ヲハキ、給ハサリツ。ワレシナハ階下ニ喪セヨト云テシニ、ケリ。靈公オホキニキ、オトロキテ。ワカアヤマテル所ナリトテ。喪ヲ正堂ニウツシ。蘧伯玉ヲス、メテ上卿トシテ。彌子瑕ヲシリソケラレニケリ。孔子コレヲキ、給ヒテ。古シヘキミヲイサメシモノモ。シヌルマテハオモハス。史魚カハ子ヲモテイサメ申。直ナリトソホメ給ヒケル。

露キニテ苔ノ下マテトニカクニ道ナキヨソ思ヒオキケル

「消かへること迄君をおもひおく涙の露を哀とそみつ」

酈寄賣友

々々ト呂祿トハマシハリフカキトモナリ。高后崩シテ。酈寄テサケナク大尉周勃ニカタラハレテ。呂祿ヲハカリテコロサセテケリ。天下ノ人酈寄友ヲウレリトソハチシメケル。

アサマシヤ思ヘハウトキ中タニモ終ヲシタフ情ヤハナキ

「はかなくそ我身一つとまよひける月と花との友をわすれて」

范張雞黍　　後漢代人。

後漢ノ范式ト張元伯トハ心サシアサカラサリシトモナリ。フタリノスミカノトホサ。千里ヲヘタテタリケレハ。春ノ天ニワカレサリテ。秋ノスヱニ後會ヲ期シケリ。元伯九月十五日ニキヒノイヒヲシテ。ニハトリヲマウケテ范式ヲマツニ。母ノイハク。ミチ千里ヲヘタテタリ。タ、イマカナラスシモシカルヘカラスト云ホトニ。范式ステニキタレリト云ヘリ。

又云。范式元伯ニワカルトテ。二年ノ丶チ日ヲサタメテ後會ヲチキリケリ。期イタリテ。母ハ酒ヲアタ丶メテマツニ。范式キタリテ拜飮ストモ云ヘリ。

又云。元伯ヤマヒオモクナリテシナムトスルトキ。ワレ范式ト命ヲカキリシトモナリ。シニテモ范式ニアハムト云テヒキ入ニケリ。ヒツキニヲサメテ。ハカニウツマムトスルニ。ヒツキウコクコトナシ。人オトロキアヤシミケリ。母ノ云ク。元伯イマハノ時ニノソミテ云コトアリキ。范式トワレトハ命ヲカキルトモナリ。シニテモ范式ニアハムト云ト。コノユヱニマツトコロアルヘシト云ホトニ。西ノ方ヨリ素衣白馬ノ人ノハセキタルアリ。スナハチ范式ナリケリ。ヒツキノカタハラニオリヰヌ。ワカユメノ中ニ元伯キタリテ云ク。命ステニヲハリヌ。イマヒトタヒアヒミム事ヲ思ニ。ヨミチモユキヤラストイヒキ。サテオトロキテハセキタレル所ニ。ステニユメノウチノコトシト云モハテス。カナシヒナクコト。コヱモヲシマス。シタシキウトキコレヲミルニ。アハレヲモヨフサストイフ事ナシ。シハシアリテヒツキヲモツニカロクナリヌ。ハカニヲサメテ。范式ミツカラツチヲハコヒテ。ハカヲツキテ。喪禮ヲ丶ヘテナク〳〵カヘリヌ。

消カヘリ雲ノチサトヲヘタテ丶モトモマツ雪ノ哀ヲソシル

〔舊本歌同〕

扁鵲起死

扁鵲姓ハ秦。名ハ越人。時ノ名醫ナリ。齊ノ太子ノステニシヌルヲミテ。扁鵲治シツヘシト云テ。スナハチ治スルニイキニケリ。コノカミフタリアリケリ。ソノサト人ノ中ニハヤマヒスルモノナカリケレハ。治方ノシルシモキコエヌホトナリ。扁鵲齊ノ桓公ヲミテ。君ニヤマヒアリト云フ。桓公モチヒス。後ニフシテミ。アフキテミテ治セムトコフニ。ナムチヤマフナキミヲミテ。治シテソノ功ヲタテムト思ヘルナルヘシト云テナホモチヒス。扁鵲又桓公ヲミテタチハシリテカヘリヌ。時ニ桓公ヤマヒオモクワツラヒテ。扁鵲ヲメシテ治セヨト云ニ。扁鵲コタヘテ云ク。ハシメ病ヲミシニ。ヤマヒカハヘニアリテ。針灸ノオヨフ所ナレハ治セムトコヒシニ。キミキ丶給ハサリキ。ツキニマタ病ヲミシニ血脈ニアリキ。湯藥ノヲヨフ所ナレハ治セムトコヒシニ。君病ナシト云テキ丶給ハサリキ。後ニ病ヲミシニ。病ステニ骨髓ニイリテ。クスリノオヨフ所ニアラサリシカハシリソキニキ。イマ丶サニ治シカタカルヘシトコタヘテサリヌ。サテ桓公命ヲハリニケリ。秦穆公ニハカニタマシヒウセニケリ。扁鵲ニミセシムルニ。シヌヘカラス。七日アリテイキカヘルヘシト云。七日ニイキカヘリテ云ク。ワレ鈞天ニノホリテ百神ト丶モニアソヒツ。天帝ヨロコヒテ鈞天ノ廣樂ノ妙曲ヲツクシキ。スナハチコノキヨクヲツタヘテキタレリ。コノユ

ヱニ扁鵲カサトリヲホメテ。田百丁タヒケリ。扁鵲カ云ク。ワレイフ事ノ験ヲアラハシツレトモ。治スル所ノ功ナケレハ。賞ヲウケスト云テサリヌ。

カレハツル色カトミシヲ春雨ノトキハニカヘスイキノ松原

「すまの浦にもしほもやかぬ海士人のはては煙とのほる成けり」

謝敷應星

晋ノ謝敷アサナハ慶緒ト云。初月ノ小徴星ヲオカセル天變アリ。コノホシノヒトツノ名ハ處士星トモ云ヘリ。司天ノウラナフ所隱士ノツヽシミト奏セリ。時ニ戴安道隱士トシテシカモ美才アリ。ヨノ人コレヲヽシミウレヘケリ。シカハアレトモ戴安道ハツヽカナクシテ。謝敷ソ殃ニアタリテシニヽケリ。ソノ後會稽ノ人士呉ノ人ヲアサケリテ云ク。呉中ノ高士ハ死ヲモトムレトモエスト云ヘリケリ。

コモリエノ水草隱レニスムニホノ終モ空ニシルモヤアラヌ

「こもり江のきゆるつらゝの跡はゝや星の光のきすにそ有ける」

張華台坼

晋張華アサナハ茂先。范陽人也。鷦鷯ノ賦ヲツクリシ人也。後ニ司空タリ。張華カ少子韙アフキテウラナフニ。中台ノ星坼タリ。張華ヲスヽメテ。ツカサヲノカレヨトイサメケリ。張華カ云ク。天道ハ玄遠ナリ。スヘカラク徳ヲ修シテコタフヘシト云テ。オトロカスシテスキケリ。ツヒニ害ニアヒテハカナクナリケリ。

影マカフホシハ雲井ニナヲトメテ浪ニキユルハヨハノ篝火

「舊本歌闕」

庶女振風

齊ノ庶女カヲハヒトリノ女メアリケリ。コノ女メハ、ノタカラヲトラムト思フ心アリテ。ハヽヲコロシテ庶女ニリクトイヒケリ。庶女コレヲキクヨリ。アサマシク心ウク思ヘトモ。人ニハエイハスシテ天ニツケテケリ。時ニ雷電クタリテ景公臺ヲウチカタフケ。海水オホキニイテヽ。ヨオトロキ人コト／＼クサワキマトヒケリ。

雨トヨミ風サワクナリヨノ中ノ人ノコヽロノウキクモノ空

「あらはれし人の心のうき雲に風さへさはくゆふたちの空」

綠珠墜樓

々々ハ石崇カ妓女也。艶色美麗ニシテナサケフカク。スヘテ物ノアハレヲシレリケリ。舞ノ曲ノタヘナルノミニアラス。フエヲタヘニフキケル。石崇コレニ心ヲウツシテ年月ヲヘケリ。石崇金谷別館ノ清涼臺ニノホリテ。清流ヲムスヒテ。綠珠ト、モニスヽミケリ。時ニ孫秀ト云人綠珠ヲイカテエテシカナトオモヘリケリ。孫秀使オコセテ石崇ニ綠珠ヲコヒケリ。石崇カタ

ヘノ妓女數十人ヲシタテヽ羅縠ヲキセテスカタヲカザリ。蘭麝ヲツヽミテニホヒヲソヘツヽ。ナラヘスヱテヱラハシムニ。使緑珠ニ心サセリ。緑珠ハワカトシコロ心サシフカキモノナリケレハユルサス。使ムナシクカヘリヌ。孫秀イカリテ趙王ニウタヘテ。石崇カモトヘツハモノヲツカハシケリ。ツハモノステニ門ノホトリニキタリスヽムヲ。石崇樓ノウヘヨリコレヲミルニ思カタナクテ。汝カタメニタチマチ命ヲウシナハムコトノイタミ思ニアラスト云ニ。緑珠キヽモハテス。ナムチカツミヲニムコトワレユヱナリ。ワレマツ命ヲヽヘムト云テ。ナク〳〵樓ヨリオチテシニヽケリ。

ワカ草ノツユノ契ノカナシキハミトリノ玉ノオチニケル哉

〔かきくらす心のやみの軒端より泪もともにおつる玉みつ〕

鉏麑觸槐

〻〻ハ晉ノ靈公ノ力士也。晉ノ大夫趙遁忠臣トシテ。靈公サカリニオコリテ。マツリ事ノヨコサマナルヲイサムニ。靈公心エヌ事ニ思ナリテ。趙遁ヲウシナハムトス。鉏麑ニオホセテコロシニツカハス。鉏麑ユキテミルニ。朝服ヲキテアカラサマニヨリフシテ。夜ノアクルヲマツケシキナリ。鉏麑コレヲミルニ。今モ忠勤ノスカタナリ。モトヨリモキミヲイサムルハ忠アリテトカナシ。コレヲコロサムコトハ不忠ニナルヘシ。コロサスハ命ヲウケタマハリテ違スルニナリヌヘシト思ヘリ。時ニミツカラカウヘヲ觸槐ニシヌ。

趙遁首山ニカリシテ桑ノ下ノ餓人ヲミル。示眯明ナリ。趙遁食ヲアタフ。ナカハヲクヒノコシテ。母ニアタヘムト云ヲアハレト思テ。ナホ飯宍ヲアタヘタリ。サテトモニユクヘヲシラスナリヌ。又後ニ晉ノ靈公趙遁ヲウシナハムトテ。酒ヲスヽメテ數盃ヲセメケリ。示眯明スヽミテ〔君賜觴三行シテヤムヘシト云ヘリ。趙遁ステニ去ヌ。靈公ノ壯士縱嚙狗名獒ト云ヘリ。示眯明趙遁ヲタスケニカタメニ搏殺狗。又車ノカタワヲヌキテ。趙遁ヲコロサムトスルニ。示眯明ヨコカミヲヒヂニウケテイヘニオクリテケリ。趙遁我ヲタスクル人タレソトナク〳〵トフニ。桑下ノ餓人ナリトハカリ云テ。名ヲハアラハサスシテサリヌ。

年ヲヘテカタミニ契ルナカタチモ命ニカフルアヽハ稀ナリ

〔難波潟あしかりぬへきことのはに入江の苫の音なきそとや〕

王果石崖

將軍王果ムカシ益州ノ大守トシテ任ニオモムクニ。ミチニ三峽ヲスキケリ。舟ノウチヨリ江岸ノ石壁ノウヘ千余丈ヲノソミヽルニ。梆ニタルモノ。キシノナカハノホトニカヽレリケリ。ミチユキ人ニトフニ。コレヲミル事ヒサシクナリヌト云ケリ。人ヲヨセテミスルニ。スナハチヒトツノヒツキナリケリ。ナカニ骸骨アリ。カタハラニ石誌アリ。銘ニ云ク。三百年ノ後。

水漂ヨハシテ我ニ行及長江垂ニ淚隨。欲隨不隨。過王果ニカケリ。
王果コレヲミテ悄然トシテ云ク。數百年ノサキニ我アルヘシ
ト云コトヲシレリ。ワレミスツヘキニアラス。スナハチアラタ
メウツメテ。マツリシテナミダヲオトシテサリヌ。

アハヽヤト思フ心ノクチセテヤカハ子ノ後モ我ヲマチケル

「よゝをへてめくりあふへき契こそかはねの後も朽せさりけり」

董奉活燮

董奉ハ候官ノ人也。交州ノ刺史士燮毒ニアタリテニハカニシニヽケリ。三日ヲスキテ後。董奉太一ノ散ヲ水ニワシテ。士燮〔ク脱〕カチニソヽキケレハ。スナハチイキニケリ。ミツカラ云ク。ハシメ人キタリテ車ニノセテ。アナヲホリテ。ワレヲウツミテ。ツチシテフサキヽ。時ニ太一ノツカヒト云人キタリテ。アナヲホリアケテワレヲイキイテタルナリト云ヘリ。

タチカヘル浪ノシルヘハミツセ河ソヽキシ雨ノ雫ナリケリ

「みつせ川かへりし浪の跡はゝやそゝきし雨の雫なりけり」

蒙求和謌第十二

管絃部十首

女媧補天　簫史鳳臺　向子聞笛
蔡邕倒屣　蔡琰辨琴　巫馬戴星
宓賤彈琴　師曠清耳　荀勗音律
伯牙絶絃　戴逵破琴

女媧補天

女媧ハ女帝ナリ。伏羲氏ノ妹吉祥菩薩ノ御身ト云ヘリ。昔四極スタレ九州サケタリシニ。五色ノ石ヲネリテ補蒼天。女媧ハシメテ笙簧管ヲツクリ給ヘリケリ。笙ヲツクリテハシメテヒクトキ。白雲トヒテマヘニキタレリ。簫ヲツクリテフクトキ。六月ニシモクタレリ。ヒトタヒ曲調ヲナスニ天下大振フ。笙ヲツクリテフク時。ウクヒスキタリナクト云リ。

笙ハ皆ト絶モミエスハレニケリ琴ノ子ニヱソ雲ハ開ヒク

〔舊本歌同〕

簫史鳳臺

々々ハ秦ノ穆公ノ時ノ人也。ツ子ニ心ヲスマシツヽ簫ヲフキケリ。孔雀トヒキタリテハ子ヲカヘテマヒケリ。スヘテ簫史カ〔簫ノ〕コエヲキク人ノナミダナモヨホサスナシ。穆公ノムスメニ弄玉ト云ヘル人。ナサケフカクイロヲシレル心ニテ。簫史カ簫ノコヱニメテヽ。シノヒテアヒタマヒニケリ。フタ心ナクテトシ月ヲオクリムカヘケリ。簫史弄玉ニ簫ヲヲシフルニ。タトル所ナクマナヒエテケリ。鳳鳴ノ曲ヲフクニ。鳳凰トヒキタリテ。ヤノウヘニスミテコレヲキヽケリ。スナハチ鳳臺ヲツクラレケリ。モロトモニ臺ニノホリテ。月ノ光ノ蒼々タルヨ。

フユノソラモノアハレナルニ。簫ヲフキケリ。鳳凰コノ二人ヲイサナヒテ。ハルカニトヒサリニケリ。ソノアトニ鳳女祠ヲタテラレニケリ。

笛ノ子ヲ雲ノイツクニ誘ヒケム月ニウテナノ跡ヲノコシテ

〔舊本歌同〕

向子聞笛　向秀字子期。

晋ノ向子期清悟ニシテ遠識アリシ人也。舊友嵇康琴詩酒ニタツサハリテキコエタカキ人也。大將軍トシテマツリ事ヲトレリ。内史鍾會ト云人。嵇康ニマシハリヲコノミケレトモユルササリケリ。鍾會ソネミテ。嵇康カヨノ政ヲソシレルナリト。司馬文王ニ讒シケレハ。文王人ノコトニツキテ嵇康ヲコロサムトス。嵇康ウレヘタル色ナシ。タチマチニ琴ヲトリテ。黄陵散ノ曲ヲヒキテ云ク。ソノカミ袁孝尼ワレニシタカヒテナラハムトイヒキ。ワレ秘シテヲシヘサリキ。ウラムラクハコノ曲ノナカクタエナムコトヲト云ヘリ。鍾會キタリテ。ワレニシタカハヽ命ヲタスケムト云トモ。嵇康モチヒスシテ。クヒヲノヘテツヒニシタカヒヌ。三千人ノ學士コヒウケテ師トセムトスレトモ。ツヒニカナハサリケリ。ソノヽチ向子期フカクコヒシノヒケリ。時ニ嵇康カフル里ヲスクルニ。日虞淵ニセマリテ。氷リ凄然タル冬ノソラノ心ホソキニ。カハラヌスミカヲミルニモ。ユクスエナクナリニシアハレヲオモヒツヽクルヲリシモ。トナリニフエノコエノスルヲキヽテ。涙ヲオサヘテ思舊賦ヲツクレリシ。ソノコトハニ云ク。隣人有吹笛者。發其聲之寥亮思讌昔遊宴之好ト云リ

思ヒキヤヌシナキ宿ニソテヌレテ隣ノ笛ニ子ヲソヘムトハ

〔舊本歌同〕

蔡邕倒屣

（魏）中郎將蔡邕賢才世ニキコエ。管絃ミチヲキハメタリシ人也。昔王粲ヲミテ子ムコロニホメケリ。ソノ後家ニ賓客ヲアツメテ大會スル時。王粲門ノホトリニ來テノソメリトキヽテ。倒屣イソキ出テムカヘテ云ク。ナムチ王公孫ナリ。異才アリ。ワカ家ノ書籍文章コト〳〵クニアタフヘシト云ヘリ。王粲ヨハヒイトケナクカタチ短少ナリ。一座ノ人コト〳〵ニメオトロカシケリ。十七ニシテ司徒タリケリ。蔡邕柯亭ノ館ニイタリテ。竹椽ヲミテ良竹ナリト云テ。トリテフエニエリ。コエヨニスクレタリ。又大山ニ桐ノ木ヲタキテ飯ヲカシクモノアリ。ヤケハタメクコエヲキヽテ。良木ナリトサトリテ琴ニツクルニ。ハナハタ美聲アリ。ヤケメヲツクリノコセリ。焦尾琴トナツケテ寶物タリ。

蔡邕枕銘云　哲人降靈。居安閑傾。

雨ノコスエ竹ノ葉モミヽシミキ人ヲシリケル心ノミカハ

蔡琰辨琴

々々アサナハ文姫。蔡邕カムスメナリ。蔡琰九歳ナリケルトキ。蔡邕ヨル琴ヲヒクニ。アヤマチテヒトツノ絃ヲキリテケリ蔡琰ニイツレノオトヽカキクトヽヘハ。第二ノヲナリト云。又ワサトヒトツノヲヽキリテトフニ。第四ノヲナリト云。サトレル所イツレモタカフ事ナシ。蔡琰カ云ク。昔季札観化ニ興亡國ヲシリ。師曠ハ律ヲフキテ南風ノ不競コトヲシレリキ。コレヲモテコレヲオスニ。何ゾソレヲモシラサラムト云ケリ。

〔秋風の松にこたへしくれのみか子を思ふつるの聲もかはらす〕

巫馬戴星　宓賤弾琴

巫馬期單甫令ナリテ。日夜ニヤスクキル事ナシ。星イタヽキテイテ。星ヲイタヽキテイリツヽ。ミヲイタマシメテ。所ヲヲサメケリ。後ニ宓子賤單甫令ニナレル時。琴ヲヒキテ堂ヨリオリサレトモ。所ヲサマリケリ。巫馬期ソノユヱヲトヒケリ。宓子賤コタヘテ云ク。汝ハチカラヲモテヲサム。ワレハ人ニマカセテヲサム。チカラヲツクスハ労ス。人ニマカスレハヤスシトイヘリ

瀧ツセヤミトリノ水ヲムスヒテソ末ヲハ人ニマカセケル哉

〔瀧つせきみとりの水をむすひても末をは人に任かせける哉〕

師曠清耳

々々ハ心管絃ニ長シ。耳清濁ヲワカチテ。晋ノ平公ノ時。大鐘ヲ鑄テタクミニキカスルニ。ミナコヱトヽノホレリト思ヘリ。師曠イマタトヽノホラスト云リ。師涓モ師曠ニ同ス。師曠琴ヲヒクニ。鶴南ヨリ來テ廊門ノウヘニアツマリテ。クヒフノヘテ（ナキ。ハ子ヲノヘテ）マフ。照王トキニ琴ヲヒカシムルニ。風曲ヲヒク時ハ。大風フキテヤノカハラミナトヒ。雨曲ヲヒクトキハ。天暗々トシテ雨クタリケリ。師曠カ琴曲ハ陰陽調和ストゾ。王ホメ給ヒケル。

師曠シニテ後ヒトツノ琴アリ。カナシヒナケルコヱアリト云ヘリ。

山風ニトフヘカリケル花ノ鐘ニマタ色カヘヌコヱノ匂ヒヲ

〔山風にとふへかりけり花の鐘また色つきぬこゑの匂ひそ〕

荀勗音律

晋ノ荀勗アサナ公曽ナリ。鍾繇カ外孫ナリ。ヨク音律ヲワキマヘクリケルニ。楽官ニナサレニケリ。昔遇趙商人於路。懸鐸於牛角。識其聲。後音韵イマタトヽノホラサルニ。荀勗カ云ク。趙ノ牛角ノウヘノ鐸ヲエテ。スナハチトヽノヘテムト云ヘリ。時ニコホリクニヨリコト〳〵クニオクラシムルニ。音律トヽノホルコトヲエタリト云ヘリ。

スミニコルコヱノヒヽキヲシル人ノ心ノ水ノアサカラヌ哉

〔舊本歌同〕

伯牙絶絃

々々琴ヲヨクヒキケリ。コレヲシルモノハ鐘子期ヒトリソアリケル。(伯)白牙山ノ曲ヲヒク時。鐘子期カ云ク。峨々タルコト大山ノコトシ。心サシ流水ニアリ。伯牙水曲ヲヒク時ハ。鐘子期カ云ク。洋々タルコト江河ノコトシト云ヘリ。鍾子期死後。伯牙絃ヲタチテ琴ヲヒカスナリヌ。知音ノナカクタエタル事ヲイタミケルユヱナリ。

イカニセム昔ノトモヽ琴ノヲモカキタエニケル心ホソサヲ

〔舊本缺闕〕

戴逵破琴

晉ノ戴安道ハ譙國ノ人ナリ。ツ子ニ心ヲスマシツヽ。琴ヲヒキ実ヲマナヒテ。シツカニヨヲオクリキ。時ニ武陵王晞琴曲ヲユカシク思テメシニツカハシケリ。ツカヒニムカヒテ。琴ヲウチワリテ云ク。ワレ王門ノ伶人《タルコト》アタハストコタヘケリ。王イカリテ戴安道カコノカミ逵ヲメスニ。スヽミテユキテ琴ヲヒキケリ。

獨ナホ思ヒステケム琴ノヲノウケヒク聲モアレハアルヨニ

〔舊本缺闕〕

蒙求倭謌第十三

酒部二十首

杜康造酒	欒巴巽酒(潠)	阮宣杖頭
陳遵投轄	楚元置醴	山簡倒載
左慈擲杯	泉明把菊	叔夜玉山
盧植音鐘	玄石沉酒	劉伶解酲
廣客蛇影	陶侃酒限	文伯羞鼈
孝伯痛飲	畢卓甕下	句踐投醪
阮籍青眼	文舉座滿	

杜康造酒

杜康酒ヲツクリシ人也。魏ノ武帝詩云。何以解我憂。唯有杜康酒。

竹ノハノ緑ノツユチクム程ソヨノウキフシモシハシ忘ルヽ

「程もなくうきこのはそわすれ草人の情そたねとなりける」

欒巴巽酒

々々字叔元為尚書ニ武帝ノトキ正旦群臣ニメシテ大會アリ。欒巴酒ヲフクミテ西南ニムカヒテフキケリ。オホヤケユヱヲ問給ニ。蜀江ニ火災アリ。カルカユヱニコレヲスクフト申ス。人ヲツカハシテミセラルヽニ。失火アリトイヘトモ。ニハカニ東北ヨリオホアメアリ。ソノアメ酒氣アリテ。火ヲケチヲハリヌト奏セリ。

都ヨリフリクル雨ヤ春草ノモエイツルノヘヲ空ニシリケル

〔心あれやさはへの雪のしたねとてもえ出るあしに春雨の空〕

阮宣杖頭

晉ノ阮宣字ハ宣子トイヘリ。ツ子ニ百ノ錢ヲツヱノサキニカケテ。カチヨリ酒店ホトリニイタリテ。ヒトリヱヒクラシテカヘリケリ。時ノ人オホキニタフトヒラル丶ミナレトモ。ヨニモツカヘサリケリ。心シタテ丶。トキメク人ノモトヘモユカサリシカトモ。酒ノカタニナリヌレハ。カクナムアリケル。

ツ杖ツキカヘル家路ニマヨハヌハモ（ト歟）丶ノ心ソシルヘ之ケル

〔うつゑつき入ぬる里の歸るさはもとの心そしるへ之ける〕

陳遵投轄

々々家ニ貧客キタリアツマリテ酒ヲス丶ムルニ。カヘラムナコリヲ丶シミテ。客車ノ轄（クサヒヲ）ヌキテ□テ井ノソコニナケ丶ルナリ。

春風ニコホリノクサヒ打トケテ流ル丶水ノナコリヲソセク

〔舊本歌同〕

車ニ有流水之號故云々。

楚元置醴

楚元王劉交書術ヲコノミテ穆生ヲメシテ賓トス。生酒ヲタシナマス。王コレカタメニ醴酒ヲオケリ。

玉簾ノコカメナラテハ綿津海ノ深キ道ヲモイカ丶トフヘキ

〔今そしる花の紐とく奥山のふみ丶る道もかすを折けり〕

山簡倒載

々々字ハ季倫。荊州刺史タリキ。家ヲイテ丶カナラス酒ニ酔テノミソカヘリケル。峴山ノ南ニ范蠡養魚作魚池。池ノホトリニ。タケ。ヒサキ。イロ〱ノハチス。ヒシナムトヲウヱマハシテ。ヲリ〱ノ景氣心ヲウコカサスト云コトナシ。天下ノ人キタリアツマリテアソフトコロナリ。山簡ツ子ニコノ池ニキタリテオホキニヱヒテ。ワカ高陽池ナリトイヒテ。アラヌケシキニナリテカヘル。襄陽城中ノワラハヘウタヲツクリテ云ク。山公何許往。至高陽池。日夕倒載歸。酩酊無所知。時ニノリテ白接䍦サカサマニシケルナリ。接䍦白帽アリ。白鷺翅上有長旄毛。コレヲトリテツクルナリトイヘリ。永嘉三年ニ天下オホキニミタレテ。万ハウシツカナラサリケルモ。山簡ヒトリ酒ニ酔コトオコタラサリケリ。

夏ノ池ニス丶ミ暮シテケフモナホ影サカサマニカヘル浪哉

〔夕風の玉こす池のはちす葉にさめぬ心のみつもありけり〕

左慈擲杯

々々ワカキトキニ五經ニタツサハリ六甲ニ通シ。兵氣ニアキラカニシテ鬼神ヲツカヒケリ。オホヤケコレヲキ丶給テ。メシテ酒ヲス丶メラル丶ニ。冬天サエサムカリケレハ。酒ヲアタ丶メケルニ。酒ヲアタ丶メスクシテケリ。左慈カムサシヲヌキテ。酒ヲ攪（カク）コト物ヲ摩（スル）カコトシ。サテノミヲハリテ。サカツキヲヤノム子ニナクルニ。カ丶リテツキテウコクコト。トフトリノカタチノコトシ。ヤ丶ヒサシクシテ地ニオチヌ。諸人サカツキヲ

ミルホトニ。左慈ヲハミウシナヒテケリ。

アマノ原雲井ニミエシサカツキハ山ノハイツトイハヌ許ソ

「舊本缺」

泉明把菊

晉ノ泉明ハ陶潜カアサナヽリ。琴詩酒ヲコノミシ人ナリ。門ニハイツモトノ柳ヲウヱテ。春ノ心ヲナクサメ。ミキリニハ一本ノ菊ヲツクリテ。秋ノトモトソタノミケル。九月九日ニ酒ナカリケレハ。ヒトリ菊ヲツミテヰタリケルニ。ヤヽヒサシクアリテ白衣ノ人キタレリ。王弘カモトヨリ酒ヲオクレルツカヒナリケリ。泉明ノミテヱヒニケリ。琴ヲヒキテ心サシヲアラハシケリ。泉明モトハ淵明ナリ。淵字ヲ泉ニナセル事ハ。唐高祖ノ諱ヲサルユヱナリ。宋朝ニハ複舊ト云リ。

トフ人ヲイクタヒハカリウレシトカ籬ノ菊ニ数ヲヽラマシ

「とふ人の心のはなの情こそきくより外のかさしなりけれ」

叔夜玉山

晉ノ山公カ云ク。嵆叔夜カスカタハ巖々トシテ。孤松ノヒトリタテルカコトシ。酔タルコトハ隗峨トシテ。玉山ノマサニクツレムトスルカコトシトイヘリ。ツ子ニ琴ヲヒキ酒ヲスヽメテ心ヲナクサメケリ。後中散大夫タリ。晉代ナリ。「マヽ」

秋山ハ紅葉ノ色ニヱヒニケリサメタルナツノナホソツム逆

「秋山のもみちの色に酔にけりさめたる松の名をも頼ます」

盧植音鐘

々々コヱノヒヽキ鐘ノコトシ。酒ヲノムコト一石。ヱハヌトキモナシトイヘリ。

聲ハタヽカ子ノ音カト聞エツヽ心ハヱヒノ子フリナリケリ

「一睡の夢たにさむるかねのをとにいかにかなひく酔の眠そ」

玄石沈酒

々々中山ノ酒家ニユキテ酒ヲカフニ。酒家千日酒ヲアタヘケリ。ノミテヱヒフシヌ。家人コノ事ヲシラス。シニタルソトオモヒテ。ナク〳〵ヒツキニイレテ。ツカニウツミテケリ。サケヌシ千日ニモナリヌラムトカソヘテ。アタヒノセニヲセメニキタレルニ。玄石ハヤクシニヽキトイフ。酒主ツカヲアケテミルニ。スナハチヱヒサメテ。ヒツキノナカヨリイテタリ。ヤヲラタスケテクシテ家ニカヘシテケリ。家人オトロキアヤシムトイヘトモ。ヱヒサメヌトオモヒトキテケリ。トキノ人云ク。玄石酒ヲ飲。一酔テ千日ト云ヘリ。

苔ノ下シツムウキナハフリニケリサテシモイケル命ナレト

「埋れし苔の下よりさめぬれはしての山路はやえいつる里」

劉伶解酲

々々字ハ伯倫。タケ六尺。カタチミニクカリケリ。ツ子ニ鹿車ニノリテ。一壺酒トスキヲトモ人ニモタセテアリク。我ノミヱヒテシナハ。イツクニモアリウツメトイヒケリ。

劉伶ムカシノトカワキテ酒ヲモトメケルニ。ソノ妻シキリニナキワヒテイハク。キミカサケヲノムコトオホキニスキタリ。生ヲヲサムルミチニアラス。コレヲトヽムヘシト云ヘリ。劉伶コタヘテイハク。ヨクイヒタリ。マサニカミニチカフヘシ。酒肉ヲマウケヨト云ケリ。メイフマヽニサマ〳〵トヽノヘテケリ。劉伶ヒサマツキテイハク。天劉伶ヲウメリ。酒ヲモテナヲエタリ。ヒトタヒ一石五斗チノミテ解酲。婦人ノコトハハナハタキクヘカラストイヒテ。劉伶酒肉ヲスヽメテ隗然トシテ又醉ヌ。

春風トトモニエヒヲハスヽム𪜈情ナカレトワレナイサメソ

〔を車のえいにのりける道ならて又心やるかたもなき身そ〕

廣客蛇影

樂廣カ家ニ親客キタリテ。酒ヲスヽメテ。カヘリテ後ニカキタエコサリケルヲアヤシトオモヒテ。ソノユヱヲトフニ。キミカ家ニテサケヲタウヘキニ。サカツキノソコニ蛇アリキ。コヽロニケヤケク思ナカラ。ステニノミヲハリニキ。ソレヨリヤマヒニナレルヨシヲナムコタヘケル。樂廣サケノミシトコロヲミルニ。河南ノ廳ノカヘノウヘニ。ツノユミヲハリテタテタリ。ユミニウルシヽテ蛇ノカタヲカケルアリ。サカツキノ蛇ハコノユミノカケソト心エテ。又サケヲマウケテヨフニ。カクキタリヌ。コノコトヲサトリテ。ヤマヒスナハチイエニケリ。

ユミハリノ月ニモイマソシラ雲ノ空ノ心ノヤミハシリヌル

〔弓張のかけにまとひしさかつきは心の闇のそらめ成けり〕

陶侃酒限

々々ハ孝子ナリ。母湛氏賢明ニシテ法訓ニアキラカナリ。陶侃ニメノウチ八翅オヒテ天門ニイルトミテケリ。後ニ八州ノ都督タリ。陶侃武昌ニアルトキ。モロ〳〵ノカシコ人キタリアツマリテ。酒ヲスヽムルニ。陶侃三盃ヲノミケリ。客各シヒケリ。ヤヽヒサシクアリテイハク。ワレハカクイトケナカリシムカシ。父ノハムヘリシトキ。酒ノ失アリキ。父ニチカヒシカキリヲスキテ。ノムヘカラストコタヘテ。カタクイナヒテヤミヌ。母ウセテノコロ。ハカニキテヒトリナキケルニ。二人ノ客キタリトフラフアリ。カヘルヲミレハ。白鶴トナリテトヒサリケリ。陶侃武昌ノミチノホトリニウヱタルヤナキヲ。人ヌスミテ家ニウヱテケリ。陶侃ノチニミテ。ヌスマレタル柳トイフニ。ヌシカミナリトオトロキケリ。

チカヒオキシ心ノ末ヲカヘシトソナキ跡マテモ思サタメシ

〔舊本歌同〕

文伯羞鼈

々々南宮敬叔カ酒ヲエテ。鼈ヲマウケテ。露都父ヲムカヘテ客トメ。客ニハスコシキヲスヽメ。オノカミニハオホクシケレハ。都父イカリテクハスシテイテヌ。文伯カ母敬姜コレヲキヽ

テイハク。祭養尸（ニハチ）饗養上賓（ニハ）トイヘリ。サテ文伯カ禮ヲシラサルコト、ロヲハチシメテ。オヒイテ、五日家ニイレサリケリ。敬姜ハ穆伯カ妻。文伯カ母。莒女也。

ハル山ニトモヲコヒケル鶯ノオノレヒトリヤ花ニエフヘキ

〔春風の人を木蔭にさそひきて花をはおのかものとなしける〕

孝伯痛飲

王孝伯カイハク。名士ハカナラスシモ奇才ニオヨハストモ。ツ子ニコトナクシテ（痛飲シテ（圖書寮本））酒ヲノムコトヲイミテ。離騷ヲヨムヘシト云リ。

長キヨノエヒノマトヒノ夢ノウチニ獨サメハヤト思計ソ

〔うきふしもしらてこそよは呉竹の上葉の露に心おけとや〕

畢卓甕下

李部郎中畢卓ハ晉代人也。酒ヲコノミテ職ヲモスタレケリ。ヨルエヒテ。トナリノ人ノ家ノ甕（モタイノ）ホトリニユキテ。酒ヲヌスミノムホトニ。酒ヲアツカレルモノ。ヌス人イリニケリト。オトロキテシハリテケリ。アケユクホトニ。アルシキヽツケテユキテミルニ。畢李部ナリケリ。アサマシクヲカシクオホエケリ。スナハチトキユルシテ。モタヒノモトニイサナヒユキテ。サケノミアソヒテ。ハルカニトキウツリテカヘシツ。

ヌシヤ誰カヘルヤ我身心ニモアラテマヨヒシエヒノサト人

〔蘆かきのまちかき宿をたとる哉心にもあらぬ夢のまとひに〕

勾踐投醪

越王勾踐呉王夫差ヲセムルニ。醇醪一器ヲタテマツルモノアリ。勾踐コレヲエテ。ツカヒヲシテミナカミニソヽカセテ。士卒ニ下流ヲノマシムルニ。アチハヒヨキサケナリケリ。士卒タヽカフチカラ百倍セリトイヘリ。醇ハ清。醪ハ濁ナリ。トモニ旨酒也。

岩ソヽクタルヒノシタヲ行水ノスヱクム水ノカスモシラ浪

〔岩そゝくたるひの下を行水の末こそ袖のかすもしら浪〕

阮籍青眼　晉代人。阮嗣宗トイヘリ。

阮籍ハ竹林ノ七賢ノソノヒトツナリ。廚ニ美酒ヲオホクオケリ。眼ニ青キ白キノ色ヲワカテリ。凡俗ノ人ニハ白眼ヲシテムカヒ。異才ノ人ニハ青眼ヲシテムカヒケリ。阮籍父ニオクレテキタルニ。楊州ノ刺史嵆喜ト云人キタレルニ。白眼シテムカヒケリ。嵆喜ノチニ琴酒ヲクシテユキテ訪時。青眼シテムカヒケリ。

白雲ノハレユクイロハコケ莚アヲ子カ嶺ノコスヱナリケリ

〔しら雲のはれゆく跡は(已下同)〕

文擧座滿

魏ノ文擧北海ノ相タリキ。卅八ニナリケルトシ。タカフトコロアリテ。官ヲ解テ家ニ居テ。イキホヒヲウシナフト云トモ。世

人才蓋シメテテ。カレコレキアツマリテ。酒ヲスヽメテ日々ニアソヒクラシケリ。座上客恒滿。（罇）尊中酒不空。ナニヲカウレヘトセムトソイヒケル。

逢莫ハルニヨソナルヤトトテモ霞ノクマヌトキシナケレハ

「舊本闕同但カスミノクマヌ作霞をくまぬ」

蒙求倭詞第十四

雜部五十首

蕭昭棄臺　司馬稱好　蒼舒秤象
丙吉牛喘　陳寔遺盜　魯恭馴翟
劉昆反火　廣漢鉤距　陳重送金
袁安倚賴　秦宓論天　黃琬對日
荀陳德星　任座直言　孫綽才冠
戴馮重席　韋賢滿籯　安世三篋
子房取履　大叔辯給　摯仲詞翰
管寧割席　周公投髮　鄒陽長裾
夏侯拾芥　黃向訪主　南風擲孕
彥倫鶴怨　孟宗寄鮓　王承魚盜
毛寶白龜　養由號猿　鄒衍降霜
不疑誣金　檀卿沐猴　邊韶經笥
嵇紹不孤　文翁興學　優旃滑稽
惡來多力　飛廉善走　蘇章負笈
孔愉放龜　西門投巫　郭伋竹馬
劉寬蒲鞭　黃霸飛錢　馮援折券
何曾食萬　婁敬和親　王陽囊衣
馬援薏苡　董遇三餘　桓溫奇骨

蕭昭築臺

々々王位ニツキテ。ミヲイヤシクシ幣ヲアツクシテ。賢ヲ禮シ交ヲコノミ給ヘリ。郭隗ヲメシテ師トス。昭王國ニ才智ノ人ノナキコトヲナナケキウレヘ給フニ。郭隗申シテ云ク。君ワレヲタニモモテナシアカメ給ハヽ。才智ヲオモクシ給フ君ツト。アマ子クキコエテ。ホカノクニ〳〵ヨリ。ワレニマサレラム人オホクキタリツトフヘキヨシ申スニ。心ツキテ。臺ヲ築テ郭隗ヲヲモクシ給ヒケリ。時ニ樂毅魏ヨリキタリ。鄒衍齊ヨリキタリ。劇辛趙ヨリキタレリ。コノヽチヒサシク國ヲタモツコトヲエタリ。

オモヘタヽ人メマレナル山陰ニ花マチエタル春ノウテナヲ

「めづらしき影を雲井にさそひこしるへは月の臺之けり」

司馬稱好

後漢ノ司馬徽アサナハ德操。潁川ノ人ナリ。口ニ人ノ短ヲイハス。人トモノカタリスルニ好惡吉凶ヲトハス。スヘテ人ノ云コトヲハ。コト〳〵クヨシトノミ稱シケリ。鄕人來テ我子ノシニタルトイヒアハスレハ。オホキニヨシトコタヘケリ。妻コノコ

トブキヽテ。ナムチカ有德ノユヱニ人キタリテ。ヨキコトモアシキコトモイヒアハスルニ。子シニタルカヘリコトニサヘヨシトコタフルコト。コヽロナキニヽタリトイサムレハ。ナムチカイフコト。マタナホキニヨシトコタヘケリ。

トツ人ニ言葉モチヽニカハレハコタフル道ソ一ツナリケリ

「秋山のつきと紅葉をとふにさへ花にこたふる三芳野の宮」

倉舒秤象

魏ノ倉舒ハ武帝ノ小子鄧哀王ノ字ナリ。九歳ニシテ成人智ヲニヨリ。孫權ト云フモノ武帝ニ大象ヲソテマツレリ。イカホトヽシラムコトヲオホシケリ。群臣ニトハルヽニ。コタヘテ申人ナシ。倉舒カ云ク。象ヲ船ニノセテ。船ノシツマム水ノタケヲキサミテ。物ヲハカリテ船ニツミテ。クラヘテシッスヘシトイフニ。衆ミナコノ智ニツキヌ。

ウキ舟ノユクヲハ誰カシラ浪ノワカノウラ風思ヒヨラスハ

「思ひよる人もなきこの董小舟ためしにひきしわかの浦風」

丙吉牛喘

丙吉ハ魯人也。ハシメ獄吏トシテ功ヲツミテ廷尉ニイタル。後ニ丞相ニノホル。大體ヲツトメ謙讓ヲコノム。丙吉春ノ日ミチヲユクニ。街道ノ群人ノタヽカヒテシニテ。ミチニヨコサマニタハレフセルアリ。丙吉コレヲハトハスシテ。人ノヒキテスクル牛ヲ見ルニ。牛アヘキテ吐舌。コレヲオトロキテ。イクサトヲユケルソトヽフニ。行人丙吉ヲソシリテ云。オナシミチノホトリニタヽカヒシヌルアリ。ウシノアヘクアリ。ナムチ人ノシヌルヲハミモトカメスシテ。ウシノアヘクヲオトロケリ。大ト牛トオナシカラストイヘリ。丙吉コタヘテ云ク。人ノコロサルヽコトハ長安令京兆尹ノオコナフトコロナリ。（三公ハ陰陽ヲトヽノフル事ニツカサトルトコロナリ。）トシノヲハリヨリ陽氣ノオホセニ不調小事。コレニヨリテ春小陽ナリ。イマタアツカルヘキコトニアラス。ミチヲユク牛ノ暑々ハサルユヱニアヘクコトハ。スナハチ時節ノタセヘルナリ。キノミタル、コトハ。ヨノタメ君ノタメオホキナルウレヘナリ。カルカユヱニ牛ノアヘクヲトフナリトコタヘケリ。行人コトワリヲホメテカウヘヲタレテサリヌ。昔陳留ニ富老翁ノトシ八十ナルアリ。女子ヒトリアツテ男子ナシ。妻シニテ後。田舎ノムスメノトシ十八ナルヲメニシテ。一夜アヒミテノチニオキナシニヽケリ。女ヒトリノヲノコヽヲウミテケリ。オキナノメノハラノヲムナコ。オヤノタカラヲワレ一人トラムト思テ。後メノウメル子ハコト人ノ子ナリ。八十ノノチ男子アルヘカラス。ソノウヘチヽニニストウレヘケリ。州郡サタメニス。丙吉コトワリテイハク。ワレキク。老翁ノ子ハ寒ニタヘス。又カケナシ。トキハ八月ナリ。オナシトシノ小兒ヲハタカニナシテナラフルニ。カタハラノ小兒ハナカス。オキナノコハ寒ヲウレヘテナキケリ。又

サナシク日中ニナラヘテミルニ。カタハラノ小兒ハカケアリ。オキナノ子ハカケナカリケリ。スナハチ男子ニタカラヲアタヘテ。女子ニハイツハレルツミニオコナハレニケリ。王公ハ正天下。謂陰陽節爲雨ト云ヘリ。

ウシト思フ夏ノ心ノフカケレハ霞メル空ノナヲシタノマシ

「うしとのみそよひの空の夏衣折にもあらぬよをそ恨むる」

陳寔遺盜

〻〻ハ後漢ノ人大丘ノ長也。家ニヌス人イリテ梁上ニアリ。陳寔ヒソカニコレヲミケリ。ソラシラスシテ。ワカコトモヲヨヒテ云ク。不善ノ人イマタカナラス シモヽトヨリアシキコトアラス。イマサラニナラヒキタレルナリ。梁上君コレナリトイヘリ。ヌス人コノコトヲキヽテ。ウツハリヨリオチテ。ハチカナシミテミツカラツミヲウケヽリ。陳寔カイハク。君ヲミルニ。カタチアシキ人ニアラス。マツシクトモシキニヨリテ。心ヲナコセリト云テ。布二タムヲアタヘテカヘシヤリケリ。ナカクヌスミコヽロヲヤメテケリ。コレヨリ一縣ニヌス人ナシ。

ニコリケル心ノソコヲナホシトソ思ヒカヘリヌオキツ白波

「いまよりは心の浪もきよかれとおもひしらせん布引の瀧」

魯恭馴翟

〻〻ハ中牟ノ令ナリ。徳政ヲオコナヒ慈愛ヲホトコシケレハ。國トミ人タノシヘリ。司徒袁安ツカヒヲヤリテミセシムルニ實ナリ。ツカヒ魯恭カ桑木ノカケニヤスムトコロニイタレリ。小兒アリ。カタハラニヒトツノ雉アリ。ツカヒ人小兒ニトヒテイハク。キシカタハラニアリ。汝何不捕。小兒コタヘテ云ク。キシマサニヒナナリ。ワレニナツケリ。イタハシク思ユヱニトラヘスト云リ。トキニツカヒ人ノ云ク。君ステニ三ノ異アリ。一ニ螟蟲ノサカヒニイラサルコト。徳ヲツミテ災ヲハラフナリ。二ニキシマナニナツケリ。仁スナハチ鳥獸ニオヨヘリ。三ニハ小兒仁心アリ。コノ三ツノ異ヲホメテサリヌ。ノチニ司徒ニイタレリ。

ウレシトヤ澤ヘノ雉子シタヒコシ道アル里ノアトヲ尋ネテ

「ここにても雛やとる雉はあるものをまた二葉なるのへの夏草」

劉昆反火　陳留人也。

後漢ノ劉昆アサナハ桓公トイヘリ。光武帝ノ御時。衛江陵守トシテオモムキケリ。ニハカニ火イテキテ民家、ヤケヽルニ。劉昆火ニムカヒテ。カシラヲタヽキテウレヘケレハ。風ヲカヘシテ火ノケチテケリ。後ニ弘農守ニウツリニケリ。弘農ニハタケキ虎オホクシテ。人ヲカイシケリ。劉昆ツカヒニイリテヨリ。キタノカタカハヲワタリテ。ナカクサリニケリ。オホヤケメシテ侍中トス。イカナル徳政アルユヱソトヽヒタマフニ。偶然(タマサカニ)ト申セリ。左右ソノスナヲナルコトヲワラフニ。ヲホヤケ長者之言ナリトテ。策ニシルサレニケリ。

オモヒケツ人ノ心ニシタカヒテ烟ニクモルソラモアレニキ

〔煙かとみえし霞の空はれてとらふすのへの跡そのとけき〕

廣漢鈎距　漢代涿郡人也。

後漢ノ代趙廣漢トイフ人アリ。廉潔ナルユヱヲモテ。コニツカヘテ少為涿郡吏。京兆尹ニウツレリ。鈎距ヲナシテモノヽコヽロヲエテ。盗賊ヲヽサメシニ。人ミナ稱伏セリ。鈎距ハ馬ヲトハムトテ。マツ犬ヲトヒ。ヒツシヲトヒテ。ツキニウマヲトフナリト云リ。鈎距トイヘルハ。鈎求致ソノコヽロヲウルナリ。距ハコヽロニカクシテハカルナリ。馬ヲトハムトキ。イヌヒツシヲトヒテ。ソノヽチウマノアタヒニオヨフトイヘリ。

チカツカム羊ノアユミサトリエテ後ソ隙ユク駒ヲシリケル

〔ちかつかむ羊のあゆみ尋てそひまゆく駒の跡そしるへき〕

陳重送金

後漢ノ陳重ハ汝南人也。獄吏トシテ死罪ニオコナハルヘキヲモユルシテケリ。カキリナクウレシトオモヒテ。百金ヲオクリテムクイケリ。陳重カ云ク。汝カアハレトミシユヱハカリニテユルシキ。ムクヰヲエムカタメニハアラストイヒテカヘシテケリ。ツミ人陳重カイヘノ承塵ノウヘニオキテサリヌ。陳重コノコトヲシラス。トシヲヘテ後ニ。ヤヲコホチケルトキニ。金ヲミイテヽケリ。ヌシヲタツヌルニ。ヌシヽニケリトキヽテ。アトノ妻子ノモトヘオクリテケリ。金ヲカヘノナカニサシハサミテカヘリヌトモ云リ。

哀テフナサケ許ヲサトリテモオモヒシレトハ思ハサリシヲ

〔[illegible]波潟哀と[illegible]江の思ひもよらぬ浪のむくひを〕

袁安倚賴

後漢ノ袁安アザナハ邵公。汝南人也。司徒トシテヨニツカヘケリ。タテキノコトハニハ。ヨノマツリコトヲサマラムコトヲノミ。ミノウヘノコト、思ヘリケリ。マツリコトノイサヽカモタカフトコロアレハ、ナケノヽナケキケリ。コノユヱニオホヤケヲハシメテ大臣已下コト〳〵クコレヲヨリタノミケリ。

コレヤコノ人ノ心ヲミヨシノヽタノムノ鴈ノヨルト鳴聲

〔世中のうき世をひとり思川心をよせぬたみもなかりき〕

秦宓論天

蜀秦宓カ智アルコトヲキヽテ。呉ノ國ヨリ張温ヲツカハシテ試ケリ。張温マツ秦宓ヲ心ミテ云ク。天ニカシラアリヤ。イツレノカタニアル。秦宓コタヘテ云。詩云ク。乃眷西顧トイヘルハ西ニアリ。又云ク。足アリヤ。コタヘテ云ク。詩云ク。天歩艱難トイヘリ。アシナクハナニヲ以カアユマン。又云ク。天耳アリヤ。コタヘテ云ク。詩云ク。鶴鳴九皐聲聞天ニトイヘリ。モシ耳ナクハナニヲモテカキカム。又云ク。天姓アリヤ。コタヘテ云ク。姓ハ劉ナリ。其子姓劉ナリトイヘリ。父子姓コトナルアラムヤトコタヘヲハリヌ。コノ四ツノコト。コタフルトコロタラヌコトヲ殊美。張温秦宓ヲ子ムコロニウヤマヒヲカミケリ。

一聲モト、コホリケルコトツナキ空ニコタヘシアマノ川浪

［舊本歌闕］

黄琬對日

後漢ノ魏郡ニ日食アリケリ。オホヤケ勘ヲイタシテ。食スル所ノ多少ヲトハル、ニ。食スル所十ガ分オヨヒケリ。祖父瓊コノオモフキヲカキノヘムトスルニ。フテマトヒケリ。トキニ黄瓊少子黄琬六歳ニシテ。カタハラニアリテ云ク。食ノアマリハ月ノハシメテナルカコトシトイヘリ。コノヲモムキヲカキノヘテケリ。イトケナキ心ニサトリノフカキコトヲ。アリカタキタメシニシテ。ソレヨリナヲエテケリ。

消ノコルヒカケノ雪ノ色ハカリ月ハ雲マニアラハレニケリ

［けふも猶心にくれてやみたまし光あらはす雲なかりせは］

荀陳德星

陳寔字仲弓。荀淑字季和。仲弓從諸姪造。荀淑父子。陳寔諸子アツマリテ。オノ〳〵文才ナキホヒ論談ヲナセリケリ。時ニ德星天ニアツマレリ。大史奏云。五百里ノ内ニ賢人アツマレルコトアリト申セリ。

マトキスルカケヲ雲井ニミツル哉メツラシカリシ星ノ光ニ

［舊本歌闕］

［舊本此項闕］任座直言

魏ノ文侯トマヲスオホヤケ群臣ヲメシテ。ワレトムカシノオホヤケトイカムト、ヒタマフニ。ミナ賢君ナリトホメ申ケリ。次第ニトハル、ニ。任座ニイタリテ賢君ニオハセスト申ケリ。ユヱヲトハル、ニ。中山ヲウチトリテハ。弟ニ封シタマハスシテ。王子ニ封シタマヘリトコタヘ申ケレハ。文侯イカリテオヒタテラレニケリ。次翟璜ニイタリテ。賢ノキミニオハスト申。ユヱヲトハル、ニ。臣キク。其君賢ナルトキハ其臣直ナリ。任座カコタヘ申コトノ直ナルハ。君ノ賢ナレハナリト申ケルトキ。文侯コトワリヲヨロコヒテ。任座ヲ召返拜上卿シ給ヒケリ。

アマノ原ミチナキ空ヲウシトミシ心ハ月ノトカムヘキカハ

孫綽才冠

晉ノ孫綽字興公トイフ。ヒロクマナヒケリ。才學キコヘタカキ人ナリ。天台山ノ賦ヲツクリテ。トモタチニミセシムニ。トモタチホメテ云ク。ナムチ心ミニ地ニナケヨ。マサニ金玉ノコヱアルヘシトホメケリ。トキノ人孫綽ヲ才冠ナリトイヘリケリ。

山高ミ雲ノイハ子ヲトメテオツル瀧ノシラタマ聲ノナリ

［舊本歌闕］

［舊本此項闕］戴馮重席

々々才ヨニキコエ義理人ニスキタリケリ。オホヤケ正旦ノ朝賀ニ。文道ニカシコキ人ヲヌキイテ、メシアハセテ。論議ヲナシテコ、ロミラル、ニ。マケタル人ノ莚トリテ。カチタル人ノムシロニカサ子ラレケリ。時ニ戴馮五十餘枚ヲカサ子テケリ。天

下日ヲオトロカシ人悉ホメケリ。

五十アマ〔リ歌〕ノ春ノ莚ヲカ子サケル言葉ノ花ニシクモノソナキ

〔五十あまり花の莚をかさねける心の春にしくものぞなき〕

韋賢満籯

魯人韋賢アサナハ長孺トイフ。漢ノ丞相ナリ。丞相ノ致仕スルコト。韋賢ヨリハシマレリ。少子玄成モ丞相ニイタレリ。韋賢ツ子ノコトハニ云ク。子ノタメニノコシオカムコト。黄金満籯不如一經ト云ケリ。玄成字ハ少翁トイフ。范陽侯ニナリニケリ。籯ハ筐篭ノ類也。韻箒竹書為籯。々ハ篭也。致仕トハ家ニテ政事行也。

遮莫コカ子ハハナサク山ノハモコヲ思フ道ノシルヘナラ子ハ

〔舊本歌闕〕

安世三篋

漢ノ武帝河東ニミユキシテ。書三篋ヲウシナヒ給テケリ。安世ソノフミヲムカシミテケリ。ソラニカキテ帝ニタテマツル。帝ウタカヒオホシテ。ノチニツノリテ本ヲ得テアハセラル丶ニ。一字モカハラサリケリ。

アケテミル緑ノイロモカハラヌヤオナシ昔ノハコサキノ松

〔舊本歌闕〕

子房取履

漢ノ子房張良カアサナ丶リ。子房ワカキトキ。下邳ノイシハシノウヘニユキテアソヒケルニ。褐ヲキタル人ノ老翁ノコトサラニクツヲオトシテ。子房ニトリテハカセヨトイフヲ。コ丶ロニヌコト丶思トモ。オイタルヲウヤマフユヘニ。クツヲトリテ。ヒサマツイテハカスルニ。オキナタチナカラハキテ。ワラヒテサリヌルコト。一里ハカリアリテ。オキナマタカヘリキタレリ。ウチワラヒテ。ナムチニミチヲシヘムトイフ。スナハチ大公兵法ナサツケテイハク。コレヲヨミテ。オホヤケノ御師タルヘシトイヒケリ。

老翁ハ黄石公。々々々ハ土星也。

道ノヘノクツノ跡マテ思ヒキヤフミ丶ル橋トナラム物トハ

〔舊本歌闕〕

大叔辭給　摯仲詞翰

大叔ト摯仲トハトモニ列朝タリ。公座ニノソムコトニアラソヒケリ。大叔カコトハニハ摯仲コタフルカタナク。摯仲カフテニハ大叔ノフルトコロナシ。トリ〳〵ニキコエケレトモ。フテナホマサレリトス。

イカテカハ詞ノナミチラシテモ筆ノウミチハ波盡スヘキ

〔いひちらす木々のこのはの紅にそめなす筆の色ぞ有ける〕

管寧割席

々々ト華歆ト丶モニ書ヲヨミケリ。時ニ車ニノリテアル人カトノマヘヲスキケリ。花歆ハミヽステヽハシリテミケリ。管寧割

席。ナムチマサニワカトモニハナラサリケリトソイヒケル。花歆。邴原。管寧。コノ三人ハ友ナリ。世人一龍トイヘリ。花歆ヲ頭トシ邴原ヲ腹トシ管寧ヲ尾トセリ。又花元メニオクレテフタヽヒメトラス。魯参コレカタメニシチヽヘリ。王駿メニオクレテ。フタリカアトヲマモレリ。管寧モメニオクレテ。ムカシヲカヘリミテ。ヒトリナムスミケル。

秋風ニヤトモサタメヌムシロタノイナハノ露ニ心ヲソオク

〔もろ共に心もとめぬむしろたに踏みる友と何たのみけん〕

周公投髪

々々ハ周成王ノ執政ナリ。周公ノ子伯禽ニ魯國ニタマハリケリ。伯禽國ヘオモムクトキ。周公イサメテ云ク。國ニ[illegible]ルコトナカレ。ワレハ文王ノ子。武王ノオトヽ。成王ノ叔父也。天下ニオキテシカハアレトモ。ヒトタヒカシラアラフトキ。三タヒカミヲトリ。ヒトタヒモノヲイフ時。三タヒハキテ人ニアフナリ。天下ノ士ヲウシナハム事ヲオソルヽナリトイヒケリ。

事シケシヽハシト思フ事ソナキワレ尋子クル人ハカハレト

舊本此項伯英草聖其歌つゝ(ら、歟)らたに風になみよる春の池のさえぬ霞の跡も有けり〕

鄒陽長裾

齊ノ鄒陽カ呉王ニタテマツル書ニイハク。臣智ヲツクシ議ヲヽヘ。精ヲカヘ慮ヲキハムルニ。オカサストイフクニハアルマシ。イツレノオホヤケノ門ニテモ。長裾ヲヒカサラムヤトカキテノセテオモヒヲナムノヘケル。

アマノトノ明行空ヲミルコトニタナ引雲ノモスソナリケリ

〔春のなかゐ秋のあはれを重ねても同し錦の衣手のもり〕

夏侯拾芥

漢ノ夏侯勝字長公トイフ。云ク。士經術ニアキラカナラヌ事ヲ病トスヘシ。マコトニヨクアキラカナレハ。ソノ青紫ヲトルコト如俯拾地芥トイヘリ。青紫卿大夫ノ服ナリ。文ニタニモアキラカナラハ。卿大夫ニノホラムコト。ノヘニフシテシモノアクタヲヒロハムカコトク。ヤスクウヘキコトナリトイヘリ。

アキラケキミチタニアラハ位山ミチシホラテモ心ナルヘシ

〔あくた川つきの舟をこそ思ふへきせのほる道に何まとけ(かはよはイ)ん〕

黄向訪主

後漢ノ黄向字ハ文章。清廉ナセリシ人也。ムカシミチユクニ。金珠璞(タマキ)一嚢オチタルアリ。ソノ價百倍ニアタリヌヘシ。ヌシノナケクラムコトヲアハレヒカヘリミテ。カタ〳〵ヌシヲモトメテ。ツヒニタツ子アヒテ。タシカニタツ子アタヘケリ。ヌシノイハク。オトシテ後マサニワカモノニアラス。ハシメテナムチカモノヲウルナリ。シカレハ半分ヲトラムトイヒテ。半分ヲ黄向ニアタヘテムクイケレトモ。カタクイナヒテ。トラスシテ

サリヌ。

チル花ヲモトノ嵐ニフキカヘス嶺ノアラシハアタナラヌ哉

〔ちるはなをもとの梢に吹かへす嶺の嵐の情をそしる〕

南風擲孕

晋惠帝ノキサキ南風。ムカシテヲオロシテオホクノ人ヲコロシテケリ。アヤマツトコロナケレトモ。人ノコト ニツキテ。ミツカラホコヲトリテ。ハラメル女ヲサシコロシテケリ。アルヒハアハレミナケク人モアリ。アルヒハオトロ キニクム人モアリケリ。キサキカタチミシカク。イロアヲクロニシテ。マユノシリニヲホキナルキズアリ。惠帝トモニエヘルカコトクニシテ。コヲサマルトキナカリケリ。惠帝カクレタマヒテノチ。趙王倫ウチコロシテケリ。〔り歌ニノワ歌〕

アラカラシワカキノ風ノ吹シヨリ千種ノ花モ露ニナクナリ

〔花の色むしの根もたえさりき野分の風のけはしかりしに〕

彥倫鶴怨

齊ノ彥倫ハ汝南ノ人ナリ。ハシメハ鐘山ニコモリテ。後ニハ剡令タリ。孔稚珪旅行ノ隙ニテ。カノ草堂ヲミテ思ヒイツルコトヤアリケム。北山移文ヲツクレリ。ソノコトハニ云ク。蕙帳空兮夜鶴怨。山人去兮曉猨驚。

山人ノアトノイホリニ月フケテアリ明ノ霜ニヒトコエノ鶴

〔舊本歌闕〕

孟宗寄鮓

々々ハ江夏ノ人也。秦武ノトキ魚池ノ監タリキ。時ニ母ノモトヘ魚ノスシヲオクリケリ。母コレヲカヘシテイハク。ナムチ魚官ノミニテ。スシヲ人ニホトコサハ。ウタカヒヲ池ノ魚ニマヌカレカタカルヘシ。イマヨリハ魚ヲ人ニホトコスコトナカレト。子ムコロニイサメケリ。

思ヒヨル浪ノ心モウカルヘシ人ニイハレノイケトナリナハ〔み歌〕

〔あやふましなみ の心もふかゝりき子を思ふ魚の池の通路〕

王承魚盜

々々字ヲハ安朝トイフ。東海郡守也。小吏池ノ魚ヌスムアリケリ。綱紀推之。王承カイハク。文王ノソノハ與衆共同シ。魚ヲシムヘキニアラストテナタメツ。又ヨヲオカセルモノヲメシトリテキタレリ。ソノ人ヲトフニ。ワレシノモトニユキテ書ヲヨムホトニ。日ノクルヽヲワスレテ。ヨニ入リテユキカヽレルナリトイヘリ。文ヲコノメル心サシヲホメテ。鞭撻甯越ニ立威名〔クリテ歌〕非致化之本ニイヒテ。ツカヒヲソヘテ家ニカヘシオイテケリ。綱紀推之トイヘルハ。綱紀ハ主簿ナリ。主簿ヲシテ宜之ナリ。犯夜トイヘルハ。モロコシニハ夜人ノ里ニイタレルヲハ。オカシヲナストイヘリ。甯越ハ中牟鄙人也。ホナカリツラヒシノヽトモ田ツクルミチヲウキコトニオモヒテ。マヌカレムコトヲ、トモ

タチニイヒアハスルニ。文チマナフニハシカシ。卅歳シテイタリナムトイヒケリ。甯越カイハク。人ハマサニヤスム。ワレハマサニヤスマシ。人ハマサニフセリ。ワレハアヘテフセラシ。十五歳ニシテイタリテムトイヘリ。ツヒニ十五歳ニシテ周公ノ師トナル。又云。人ハマサニ寢。ワレハイ子シ。人ハマサニ食シ。ワレハ不食。

春風ニ吹コサリセハフカヽリシ池〔ノ歟〕ノツラヽヲ誰カトハマシ

〔春風の吹こさりせは深かりし池のつらゝを誰かとかまし〕

毛寶白龜

々々ハ江ノホトリニテ。漁人ノ白龜ツリタルヲ見テ。アハレミテマナヒテ〔アカ歟〕。江ニハナチテ。ノチニ石虎將軍トアラソヒタヽカフニ。マケテ江ニオチイリヌ。〔ニ〕物ヲフムコヽチシテ。岸ニイタリテタスカリヌ。〕アヤシト思テミレハ。ムカシハナチシカヘナリケリ。コフノナカサ四尺ハカリナリトイヘリ。晉書ニイハク。毛寶イチニイテタルニ。白龜ノ四五尺ハカリアルヲウルモノアリ。毛寶コレヲカヒトリテ。タスケヤシナヒテ。オホキニナシテ江ニハナチテ。ソノ後邾城ノイクサニオチテ毛寶カツハモノ六十人江ニオホレテシヌ。毛寶ヨロヒヲキカツナカラ江ニオチイリヌ。オホキナルイシニヰタルコヽチシテ。ヒカシノキシニイタリツキテタスカリヌ。アヤシトオモヒテミルニ。ムカシハナチシカメノ五六尺ハカリニナリテ。毛寶ヲタスケヽルト云ヘリ。

年ヲヘテ思ヒハナチシカハ龜ノメクリ逢瀨ノアサカラヌ哉

〔年をへて思ひはなちし河龜もめくり逢せは有ける物を〕

養由號猿

々々基ハユミイルコトタクヒナカリシ人也。柳ノ葉ヲ百歩ニテイルニ。モヽタヒハナツニ。ソノヤモヽタヒアタリキ。楚ノ恭王カリシタマフニ。ヒトツノシロキサルアリ。カレコレイルトイヘトモ。サル木ノエタヲメクリテ矢ヲノカレヌ。又恭王養由ヲメシテイサスルニ。養由ヒトタヒツルヲナツルニ。サル木ヲタキテカナシヒナケキケリ。

梓弓ハルノミトリノ柳カケマサルマトヒハアラシトソ思フ

〔梓弓春のまとゐの柳かなまさるなかめはあらしとそ思ふ〕

鄒衍降霜〔書本北頭闕〕

々々燕惠王ニツカヘテ忠ヲキハムトイヘトモ。人ノ讒ニヨリテ惠王ニトラヘラレケリ。鄒衍天ニアフキテウレフルニ。夏ノ〔衍歟〕月ニコレカタメニ霜フクタシケリ。

シラ露ノヲハリノミカハ草ニムスフ霜モシモトナリケリ

不疑讓金〔書本北頭闕し〕

漢ノ直不疑ハ南陽ノ人也。文帝ノトキ郎トシテツカヘケリ。同舍ノ郎コカ子ヲウシナヘリケリ。コカ子ノヌシ不疑ヲウタカ

ヘリケリ。不疑アラカハスシテ。金ヲカヒテツクノヒカヘシケルヲ。ウルハシク金ヌスミタル人ミテ。アサマシトオモヒテ。コカ子ヲヌシニカヘシテケリ。コカ子ノヌシオホキニハチカナシヒケリ。ヨノ人コレヲ長者トソホメケル。

夢ニタニマタミヌヨハノ濡衣ハカヘシテノチソ霽カレケル

〔舊本此項闕〕寛饒沐猴

漢ノ平恩侯許伯カ家ニ。丞相以下時人キタリ賀シケルニ。蓋寛饒ヒトリコサリケリ。許伯ヨヒニヤリケレハ。ヽシメテイリキタレリ。賓客酒タケナハニシテ。興ニノリテケルホトニ。長信少府檀長卿イヌトサルトノタヽカヒアヘルマ子ヲシテマヒケリ。トキニ客ミナワラヒケリ。寛饒ヒトリヨロコハスシテ。ノチニオホヤケニ奏シテ云ク。烈卿ノミヲモチテ。カルヽヽシク沐猴ノ舞ヲナスコト。禮ヲウシナヘルナリト申ケリ。ヨニキコエニケリ。

イカハカリ水ノ心ノエヒニケム浪タチサワクサルサハノ池

〔舊本此項闕〕邊韶經笥

後漢ノ邊韶字ハ孝先トイフ。數百人ノ弟子ニ文道ヲヽシヘサツケケリ。ムカシヒル子ヲシタリケルニ。弟子アサケリテ云ク。邊孝先腹ハ便々トシテ書ヲヨムニモノウシ。タヽヒル欲眠トイヘリケリ。邊韶キヽテコタヘテイハク。邊ヲハ姓トス。先ヲハアサナトス。腹ノ便々タルニ五經ノ笥ナリ。タヽ子フリヲ欲スルハ經ノコトヲ思ナリ。ヒルイ子テハ周公トユメヲ通シ。シツカニシテハ孔子ト心ヲオナシクス。師ヲシテアサケルヘキコトハ。イツレノ典記ニカイテタルトイヘリケレハ。アサケルモノオホキニハチケリ。

玉筐アケクレ子フルナノミシテ心ハノリテサメヌモノヲヤ

〔舊本此項闕〕嵇紹不孤

々々字ハ延祖トイフ。嵇康カ子ナリ。ムカシ嵇康人ノ讒ニヨリテ死罪ニオコナハルヽトキ。嵇紹ヲヨヒテイハク。ワレシヌトイフトモ。山公アリ。ナムチミナシコタルヘカラストイヒテ。山公ハ山濤ナリ。嵇康ト竹林ノトモニテ。心サシアサカラサリシユヱナリ。山濤ハクヽミタスケヽリ。嵇紹メサレテ侍中ニナサレニケリ。後王ノイクサ汾陰ニヤフルヽトキ。百官ニケハシリケルニ。嵇紹ヒトリオホヤケニツキソヒタテマツリテ。イクサノヤチフセクホトニ。アタリテイノチヲウシナヒテケリ。嵇紹カミヨリ血ナカレイテヽ。オホヤケノ御衣ニツレソヽキケリ。イクサヲハリテ。人御服ヲアラハムト申ニ。嵇侍中カ血ナリ。スツルコトナカレトテ。ナケキタマヒケリ。

タノミコシ竹ノ林ノ友ノミソワカコノヨチモ哀トオモハム

〔舊本此項闕〕文翁興學

漢ノ文翁ハ蜀郡ノ大守ナリ。クニノウチニ文道ヲオコシ學校チタテヽ。人ヲスヽメミチチヒロメケルナリ。

トタニテモ抑ヤミナマシ古ヘノ道ヲアラハス人ナカリセハ

（舊本无項目）優旃滑稽

ヽヽハ秦ノ倡ナリ。タケミシカクシテ。ヨノツテニ咲言ヲコノミケリ。タハフレコトシイヒケルカ。ソノコトハコトニ政理ニカナヒケルナリ。始皇帝群臣ニ酒ヲタマヒケルニ。冬ノ天ニ寒雨クダリケルニ。階楯ノ人ミナヌレシホレテサムカリケリ。優旃檻ニヨリテ云ク。ナムチタケタカケレトモ。アメノウチニタテリ。ワレタケミシカケレトモ。ヌルヽコトナシトイヒケリ。オホヤケキヽタマヒテ。ナカハヤスメカヘラレケリ。又オホヤケ苑囿ヲオホキニマサムトシタマヒケルヲキヽテ。優旃カイハク。ヨイカナ。アタヒムカシヨリキタラハ。トリケタモノオホクシテ。コレヲフセカルヘシトイヒケリ。オホヤケキヽタマヒテ。ソノコトヲトヾメラレニケリ。又二世帝ノトキ。城ニウルシヌラムトシタマフトキヽテ。優旃カイハク。ヨイカナ。アタノキタラムトキ。ウルシニヨリテ。ノホルコトアタハサラムコトヲトイヘリ。帝キヽタマヒテトヾメラレニケリ。タハフレニイヘルコト。シカシナカラマコトノコトハニテナムアリケル。

何トナククチスサフカト聞エシハヨノ爲フカキ誡ナリケリ

（舊本此項缺）惡來多力　飛廉善走

惡來ハ飛廉カコナリ。飛廉ハアシハヤクシテ。ハシリツヽクモノナカリケリ。惡來ハチカラツヨキコトナラヒナカリケリ。トラヲテツカラヒキサキナムトシケリ。殷ノ紂トイヘル惡王ニ父子トモニツカヘケリ。心ニタカフ人ヲハ讒シケレハ。[紂?]ニツキテホロホサルヽモノオホカリケリ。周武王紂ヲウツトキ。惡來モコロサレニケリ。飛廉ハ北方ニウツリキテ。紂カタメニ石（槨）郭ツクリテマヌカレニケリ。

行水ノイハ淺タカキセヽヨリモ早キハ人ノアユミナリケリ

（舊本此項缺）蘇章負笈

後漢ノ蘇章字士成トイフ。負笈師ニシタカウテ行コト千里ヲモトホシトセス。笈ハ文入ルヽ器也。

行カヘリ道ヲハオモク思フ哉ミニオフ程ノアユミナラネト

（舊本无項目）孔愉放龜

晉ノ孔愉アサナチ敬康トイフ。カメヲ餘不溪（溪[illegible]）ノナカレニハナチケリ。龜ヒタリニカヘリミテサリヌ。孔愉ノチニ餘不亭侯ニナサレニケリ。サカヒニイリテ印ヲ鑄ルニ。龜ヒタリニカヘリミルカタナリ。マタサラニイルニナホシカリ。コノトキサトリオ（衍歟）ヒニシケリ。

フナ人ノオシテノ淺ノアトコトニ昔ノ龜ノカケヲミセケル

（舊本此項缺）西門投巫

後漢ノ西門豹鄴縣ノ令タリ。ソノトコロノナラヒニテ。河伯ニヲマツルトキ。人ノムスメヲカサリテ。河伯神ノメトナツクテ。イキナカラ水ニイレケリ。オヤハラカラヲシミカナシムコ

トカキリナカリケリ。西門コノコトシヤヽテ。ソノトキワレニツケヨトイヒケリ。キタリツクルトキ。ユキテ大巫嫗ナラヒニ弟子ノ女ノ三老トテ。コノコトニツカサトルモノトモヲ。シカシナカラ水ニイレケレハ。ソノトコロノ長者以下。ミナカウヘヲタヽキチヲナカシテ。オソレオノヽキテ。イロヲウシナヒテヲカミケリ。コレヨリノチ。人ノムスメノイノチヲタモツコトヲニタリトナムイヘリ。

セキトムル人ナカリセハ河神ヤ思ハヌ浪ニナホシツマヽシ

（舊本此項脱）郭伋竹馬

後漢ノ郭伋字ヲ細侯トイフ。并州ノ刺史トシテ任ニオモムクトキ。河東ニ數百ノ小兒各ノ竹馬ニノリテ拜迎シケリ。郭伋トヒテイハク。兒等ナムソトホクヨリキタレルトイヘリ。兒コタヘテイハク。使君クタレルヲヨロコフユヘニ。キタリテ拜迎スルナリトコタヘケリ。後ニ兒又使君カカヘルヘキ日ヲトフ。郭伋リヽルトキ。一日アキタチテ山拜ニマチウケテマタオクリケリ。

立ノホルナトシ友ヲソムレテコシ常磐ノ里ノアルシ待トテ

劉寛蒲鞭

後漢ノ劉寛字文饒トイフ。南陽ノ大守トシテ國ヲヲサムルトキ。トカアルモノヲハ蒲鞭シテイマシメケリ。シモトニアラサレハ。人イタムコトナシトイヘトモ。人ノ心ヲハツカシムルシルシナリ。コレニヨリテコホリノツカサ。ナカクオカストコロナシトイヘリ。

アタナリシ草葉ノ露ニヒトコトノ心ノコマノヨリニケル哉

（前項跋脱）

一玉にのる同し友をそむれてこし常磐の里のあるしまつ迄と

一（舊本本項次朱雲折檻但歌闕）一

（以下舊本闕）黄尋飛錢

海陵ノ人黄尋ミニマコトフカクカヽリキ。ハシメハマツシカリケレトモ。後ニハオホキニ風フクトキ。アメノコトクニセニトヒチル。家ノマカキノコスヱ。ソノホカノニハノキリマテニオツルコトカスモシラス。ミナヒロヒエタルコト數千万ニオヨフ。ツヒニトヒサカヘテ。河北ニナヲホシキマヽニシケリ。

風ニチルキヽノコノハノ音ナクテカキ山カキニ雨トフル哉

馮援折券

々々ハ齊ノ人也。家マツシクトモシクシテ。孟嘗君ヲヨリタノミケリ。孟嘗君薛トイフトコロニ人ニモノヲオホクカシテアツケタルコトアリケリ。馮援ヲツカヒトシテ。薛ニユキテ債主ノモノヲセメヲサメテ。ワカモトニナカラムモノヲ。市ニテカヒテキタレトイヒケレハ。コトウケテ薛ヘキモムキニケリ。債主ヲヨヒテ。券トモヲシカシナカラトリアツメテ。ヤキウシナヒテケリ。人ミナ万歳ヲヨハフ。ヨロコフコトカキリナシ。馮

諼カヘリキタリテ。君カモトニナキモノヲカヒテナムマウテキタルトイフ。ナニヲカヒタルソト、フニ。義ヲカヒテハムヘルナリトイフ。義トハイカナルモノソト、フニ。コタヘテイハク。君府藏ニ財物ミチツメル。ナキモノハタヽ義ノミナリ。コレニヨリテ債主券ヲカキウシナヒツルニ。君ヨロコフコトカキリナシ。コノユヱニ義ヲカイテ君ニサツクルナリトコタヘケレハ。孟嘗君イミシクウレシトオモヒケリ。債主トハモノオホセタル人ナリ。

宿コトニ年ノセメテヤナケカマシ春ノ使ノカヽラサリセハ

何曾食万

晉ノ何曾ハ字穎考トイフ。日コトノ食物イルコト萬錢ニオヨフニ。ナホハシヲクタストコロナカリケリ。餅ハ千(十歟)字サカレハ(サ脱點)クハストイヘリ。

一度ニヨロツノカスノツモリケル宿ノナサケニ烟タツナリ

婁敬和親

々々ハ齊ノ人也。洛陽ニキタリテ輓輅ノ轄ヒヲヌキテ。漢ノ高祖ヲスヽメテ。ミヤコヲ關中ニウツシタマヘト申ケリ。後建信侯ニナサレニケリ。トキニ匈奴王單于ツハモノヲオコシテ。國々ミタレコト〳〵クウレヘケル。婁敬申シテイハク。長公主ヲモテカレニ妻ニアハセタマハヽ。ヨロシカルヘキヨシヲマウセリ。漢祖キサキ呂大后ヒルヨルナキナキテウレヘテ。ワレハタヽタヽ太子ト一女トノミアリ。イカテカ匈奴国ニステムトイヒテ。ツヒニ家人ノムスメヲトリテ。長公主トナツケテ。單于ニアハセラレニケリ。長公主ハ漢祖ノムスメナリ。輓輅ハ木横車。前ニ一人挽之。一人推之ト云ヘリ。

浪ノ音モノトカニナリヌ護守アフクマ川ノシルヘセシヨリ

王陽嚢衣　馬援薏苡

後漢ノ王吉字子陽トイフ。瑯琊ノ人ナリ。及テ子孫ニ奉養甚善。シカハアレトモウツリサル(移徙)トキハ。コロモイレタルフクロヒトツモチタリケル。奢侈ノ名ヲサケムトテ。フクロニコロモハカリヲイレテ。他國ヘサリケルナリ。時ニ馬援ハシメ交趾ニアルトキ。ツ子ニツシタマヲ沐シテミヲカロクシケリ。南方ニツシタマノミオホキナルアリ。ユキテソノミヲオクリテ。一車ニツミテカヘリケレハ。トキノ人南土ノ珍怪トオモヘリケリ。貴戚皆望之。馬援時有寵。故莫以聞。及卒後上書譖之者。以爲前所載還皆明珠文犀トイヘリ。又呉祐カ父恢南海ノ大守タルトキ。青竹ヲトリテ書ヲウツサムトシケルニ。呉祐イサメテ云ク。昔馬援ハツシタマニヨリテソシリヲオヒ。王陽ハコロモノフクロヲモテ名モトム。嫌疑ノアヒタ。マコトニ先賢ノツヽシムトコロナリト云ケリトイヒケリ。

嚢衣ハ一嚢之衣也。有底曰嚢。无底曰橐トイヘリ。

キシカタヲ思ヒカヘシテタヒ衣イカナル里ニウツリ行ラム

董遇三餘

魏ノ董遇アザナヲ季眞トイフ。左傳ヲヨクマナヒサトレリケリ。從學モノヽ、苦渇ニシテ日ナシトイヒケレハ。董遇カ云ク。ツチニ三餘ヲモテストイヒケリ。三餘トイヘルハ。冬ハトシノアマリ。夜ハ日ノアマリ。雨月ノアマリトイヘリ。三餘ノ學コレナリ。

雪ノソコ月ノモトヽテ思ヒシニアメモ心ノハレマナリケリ

桓温奇骨

晉ノ桓温アサナハ子元トイフ。父ハアサナハ茂綸トイフ。桓温ウマレテノトシ。温嶠トイフ人相トシテ云ク。コノ兒ハ奇骨アリ。心ミニナクコヱヲキカムトイフ。兒ナクコヱヲキクニ。マコトニ英物ナリケリトイフ。コレニヨリテ桓嶠カ一字ヲトリテ桓温トハナツケケル。ヒトヽナリテ。マツ大司馬ニナサレテ。ツキニ丞相ニナサレニケリ。温嶠カムカシ相セシトコロタカハス。天下無雙ノ名士タリケリ。

子サスヨリカツ〳〵人ノ仰キシヤコタカヽルヘキ松ノ行末

城門郎者多年之弟子也。拾螢聚雪之處々。久守函杖之禮儀。嘲風哢月之時々。先存視草之故實。爰李瀚蒙求。李嶠百廿詠。白居易新樂府等之中。抽其義幽玄其詞花麦的之句々。以假字言其詞。以和語詠其事。撰集數百首。卷及十軸。斯中於樂府者重呈周詩所副和歌也。依閑之隙披閲之處。目不暫捨。心多所感。尋繹吟翫。欲罷不能。依雖顧愚魯之才。慾寄和漢之什矣。

翰林老主孝範

百詠蒙求新樂府。　採其精旨述歌詞。
歌詞一々兼華實。　還咲元和天寶詩。

カラクニノヤヘノシホチノアサキリニタマナクハラフシキシマノカセ

漢久仰翰林之嚴訓。得耆文苑之苦學。毎呈短詞。必加高覽。依賢取捨。合散詩家。然間云關東之昔。云洛陽之今。爲教幼稚之兒。抄出兩三之書帙。所謂撰蒙求之中。叙十四卷。抽百詠之句。連十二卷。述樂府之章。分五箇卷。各々和其詞。軸々發其詠是也。或詩或歌。可慙可秘。爲決是非。偸伺賢慮之間。忽投周詩被副和歌。拜見之處。自愛難休。依敬押本韻。猥述中情矣。

城門郎源光行

李翰李嶠居易作。　爲人爲物顯妍詞。
然撰漢語成和字。　添感兩篇歌與詩。

カラクニヤシホチノキリノフカケレハアラハレヌラスワカノウラカセ

〔右蒙求和歌舊本奧書云。右蒙求和歌一卷以島原侯秘本書

寫檢校保己一閲之註文全闕失僅二十九葉而已今以小山田與叔本騰寫而以括弧〔　〕與舊本對照以帝國圖書館所藏古

寫本及圖書寮本加校合但《　》者據圖書寮本所補也〕

續群書類從卷第四百六

和歌部四十一

百詠和歌幷序

夫[illegible]國公始以百廿詠之詩。以論于幼蒙。張庭芳追述數千言之註。以備于後[illegible]。是以少壯之昔學之。閑居之今抄之。所謂四韻之間取二句。一題之中撰兩語是也。伏以詩者唐室之志。歌者我朝之風也。予天性尤拙。〔[illegible]〕雖隔碎金彫玉之譽。皆習斯深。猶就中對外形之詞。窓裏案[illegible]。久徇白氏齊。山邊霞[illegible]。專慕赤人蹤。仍詠二百四十之歌。成一十有二之卷。繼顧亥豕成字之[illegible]。何耐夜鶴思子之志乎。于時元久之初々冬律。朝議大夫源光行納中綠之而已。

もゝちあまりはたちのとわさは唐國の千里のなみよりつたはり。みそちあまり一もしのうたはわかくにによりひろまれり。ときにはるかにみやこの月□へたゝき。ひさしくあつまのしものとさしにしつめるものあり。〔[illegible]〕見るところまなこにすくなしといへとも。聞ところみるにあさしといへとも。窓の中に雪をあつめしゆふへには。たゝ白氏の跡を。〔[illegible]〕山のへに霞をさゝけさける曉は。偏に赤人か思ひをねかはすといふ事なし。依之十歳のむかし此文を讀傳て。四句の今心をしるしあらはせり。並四韻の中をえらひて兩句の[illegible]を[illegible]きいて。二百四十の歌を連て一十有二のまきをなせり。ことはゝたとひ秋の風のみにしみて色にあらすといへとも。こゝろさしはなほよるのつるの子をおもふこゝろにたとへさるをや。于時元久[illegible]年[illegible]月上のゆみはりとなんいへり。

百詠和歌第一

天象部

日　月　星　風　雲　煙　露　霧　雨　雪

日

日出扶桑路。　宮古の東碧海のうちにひとおりて。萬里の地に林有。その木の葉みな桑に似たり。又槻(クハ)の木有。長さ數千丈二千餘圍。仙人其桑の實をくひて。その躰金色のことし。空を飛かける。千歳に一度實をむすふ。其實あかくあちはひ甘く香し。扶桑是なり。日陽谷より出て扶桑をわたるほとにはとりなく也。

谷の戸のふかき梢をいつる日にたかねの里は今そあけゆく

傾心比葵藿。　あふひ草は日かけのめくるかたに。はをかたふけて根をかくすなり。朝には東北。夕には西南に葉をかたふけて。おのか根をあらはさゝるなり。あふひの葉をかたふけて日にむかへるかことく。人も心を傾て君にむかひたてまつるとなり。

神山のみねの朝日にあふひ草おのか影のみかたふきにける

月

蓂開二八時。　堯の時世をさまり政すなほにして。瑞草蓂英庭におひたり。月のついたちより一日にひとつの花を開く。十五日に十五の花あり。十六日よりひと日に一の花落て。つこもりにいたりておちはてぬ。もし小月なれは一の花をのこせり。

又云。ついたちよりひと葉つゝおひて。十六日よりひと葉つゝおつといへり。蓂はおつ二八の時とそあるへきを。ひらくの字おほつかなし。もし蓂は開二八の時までと心得へきにや可勘之。又月のうちに桂あり。十五日迄いよいよあきらかにさかりなりといへり。

咲そむるいろにはれゆく月影のくもるは花のおつるなりけり

分暉度鵲鏡。　月の一の名に破鏡と云。光なわかつとは月のかけはしむるなり。昔女をとこ有けり。世の亂にあひて。別て遠き國へ行とき。鏡をわりてかた鏡つゝ取て。かたみとしてさりぬ。この女心ならす夫してけり。時にかたかゝみ鵲になりてはるかにとひて。をとこの鏡とひとつになりぬ。をとこあはれとおもひしりぬ。後の人鏡をいてうらに鵲をうつせり。このことは鄭の人曹文といへり。

へたてこし昔の影も歸きてあひみる月のかゝみなりけり

星

蜀郡靈槎轉。　天河うみと一になかれたり。昔海渚にすむ人あり。年々の六月にうき木にのりて行き歸ること期をたかへす。此人かてをもちてうき木にのりてさりぬ。うかひ出て。日のくれ夜のあくるもおほえすなりぬ。遙に行て一の家にいたりぬ。うちに屋舎あり。おくをみれはあまたのはた織女。ひとりの牛ひけるをとこ有。こゝはいつれの所そと問に。汝かへりて蜀郡の嚴君平にとへと答て。支機石をあたふ。是をえてかへりぬ。君平にとふ。君平かい

はく。其としの其月の其日。客星牛斗とうをおかしき。則汝は天河にいたれりけるなりといへり。

空にしる人も有けりあまの河くものうき木のなみのかよひ路

今宵犢河曲。誰識聚賢人。　後漢書曰。陳仲弓子姪と共に夜荀季和かもとにいたる。父子犢河人なり。時に天小に徳星あつまる。大史奏して申さく。五百里の中に賢人あつまることありと申せり。陳寔かあさなを仲弓といへり。荀淑か字を季和と云り。

いかにして星のやとりに通ひけん共にあふよのともしひの窓

風

天地のなけき風となる。陰陽いかりて風となる。世をさまる時は五日に風一たひふく。其風枝をうこかさすと云り。

松聲入夜琴。　琴有風入松曲也。云心は風松を吹て作聲似鳴琴也。

ふかぬまはいつかはとのねに通ふ風こそ松のしらへなりけれ

若至蘭臺下。還拂楚王襟。　宋玉風賦云。楚襄王遊於蘭臺之宮。有風颯然而至。乃披襟而當之也。

心あれやみゆきの秋を知かほにはなのうてなをはらふゆか風

雲

烟煴萬年樹。　烟煴はくもの色也。洛陽殿の前に大なる槐樹あり。一の名を萬年樹といへり。

行すゑは雲井はるかにしらかしの枝にも葉にも萬代の色

掩映三秋月。　通玄眞經云。日月あきらかならんとすれとも。らかへる雲蔽之といへり。三秋とは一月を一秋とす。三月は三秋なり。

はれぬよの空もおもへはうきものや心と月のおほろなるかは

烟

瑞氣凌丹閣。　慶雲たなひくと煙のごとくにして。しかもけふりにあらす。次郁々紛々たり。則瑞氣なりといへり。

しほかまの煙に似たるうす雲や人のうらみのはれにけるいろ

松篁暗晩暉。晴(李嶠百詠以下同)　松篁にゆふへの煙をなせり。

山人のゆふけのほかにたな引はたかねの松のけふりなりけり

露

夜警千年鶴。　露の草のはにおつれは。千年の鶴ときてまふ。八月白露結ふをりにのぞみて。鶴聲をたつといへり。

秋の夜は更にけらしなあしたつの澤邊の露に子を思ふこゑ

朝啼八月風。　孟秋涼風至。則白露降。又云。後漢桓帝時世すなほにまつりことやはらけり。永康元年秋八月天より甘露くたせり。又云。韮のうへのゆふへの露消やすきゆゑに。朝をむかへてさらにおつ。人死て一度去。そのみいつれの時にかかへらんと(するとイ)いへり。

露の身の草の庵にあくるまはさせほかすゑをよそにやはみる

霧

漢帝出平城。　漢高祖韓信をうち給ふに。韓信かいくさかへりて高祖を平城にかこめるとき。天より雲霧雨雪くたりて。世中くれたるかことし。高祖陳平かはかりことに随て。此まきれににけのかれ給へり。又陰陽みたれてきりと成といへり。

旅人のきりにまよひし道しもそ我身ひとつの晴まえける

別有丹山霧。　丹山丹穴也。雲霧おほし。又云。天晴て丹山の峯に俄に霧立て煙のことし。其後二日をすくさす。雨ふくたるといへり。

たれもみききのふの空の夕霧にけさ山のはのしくるへしとは

雨

世中をさまれるとき。十日に雨一度くたる。その雨つちくれをやふらすといへり。

靈童出海見。　昔馮夷八月庚子の日河に行て。水をあむとておほれしにて。河伯神となりぬ。その形是八尾八有て黄青の色也。白馬に乘て十二の童子したかへり。水の上をはせ。行所に雨をなせり。

川上や陵ゆく駒のはやきせにあくるほとなく夕立のそら

神女向山廻。　昔楚王高唐にあそひて。晝まところみ給へる夢のうちに女きたりて。君か高唐にあそふを聞て。枕をならへむしろを一にせんとねんころにのそめり。王あひ給ぬ。女歸時に望て曰。妾は巫山の陽高丘の岨にあり。朝に雲となり夕に雨となりて。朝々暮々に陽臺のもとに來らんと云て去ぬ。後に見に朝に雲たなひき夕に雨そゝけり。

雲となり雨となりける名殘までおもへはかなしゆめのふる里

雪

瑞雪響千里。　一尺にみてる雪は豊年の瑞をあらはすといへり。

雪ふかきあつまのおくの千里まてあきらけきよをしら川の關

大周天闕路。今日海神朝。　周の武王殷紂をうたんとし給へるに。都に冬の天雲さえ雪ふれる事十余日。高さ一丈五尺迄になりぬ。ときにいつゝの車。ふたりの馬のり。門の外に來り臨て云。王をたすけて紂をうたんといひてきりぬ。車馬の跡なし。海神の天の使として來れるなりけり。つゐにうつ事を得たり。

跡なしと思ひし雪のしるへにそ深き心の末はとほりし

百詠和歌第二

坤儀部

山　石　原　野　田　道　海　江　河　洛

山

古壁丹青色。　古壁におひたる善文彩ありといへり。山水の景色を壁の繪にかけるあり。章孝標詠云。雨濺膠山斷。風吹消禁秋也。

あき山の梢はやすくうつしけりしかの音のみそ筆にまかせぬ

巳闕(聞イ)封禪處。希謁聖明君。　花岳は黄河の東に對へり。首陽山は神靈のひらく處也。手の跡華山にあり。足のあと首山に有。(マヽ)いまにのこれり。華山巳闕求。請聖君封禪なり。

花の山高き峯のあとふりて春のみゆきにいつかあふへき

石

巖花鏡裏發。　武都大夫化してをんなの身となり。すかたかたち世に勝れたりければ。蜀王のきさきと成ぬ。其後ひさしからすして命終りにけり。武檐山の上にはふりて。其前に石の鏡をかけたり。其鏡の中にいはほの花うつるといへり。石中菱花發。

むかしみしにほひはいつら鏡山いはねの花のかけはかりして

入来(宋)星初隕。　星地におちたり。これをみるに石にて五色なり。

谷水のいしまにもかくやとりけりあまの川原のほしの光は

原

江淹杞恨年。　江淹か恨の賦云。平原に人のかはねあり。蔓草ほねにまつへり。拱木たましゐをさむ。民生こゝにいたれり。天道こゝに論せんや。僕もとより恨たる人也。心驚ことやます。只古の人の恨にふしてしにゝしをおもふ。又云。土地豐に廣くして。めくりひとしきをはらと云り。

しもうつむまくすか原や秋風にくれ行ことにうらみける哉

長在鵁鶄。　鵁鶄は水鳥也。おほきさすゝめのことし尾なかくしてせなかの色青くはいろなり。腹の色白してくひのしも黒し。此故に桂陽の人なつけて連錢と云へり。この鳥水をはなれて原に有。古郷の浪をこひてとひ。ともをよひてなくと云り。

ふるさとはさそなこひしき水鳥のおもはぬ草のはらに鳴らん

野

鶉飛楚塞空。　鶉尾楚分野也。鶉翼宿井軫宿にあたれり。巳方也。鶉は巳の神にかたとれり。

これやこのみやこのたつみ鶉鳴ふしみのおくの野邊の夕暮

獨在傅巖中。　殷武帝位につきて後。三年まつりことをいはす。夢の中に傳說をみる。さめて其形をうつしてもとむるに。傅巖の野にして得たり。武帝まつりことをまかせて海を渡らんには。汝を舟かぢとせんとそきこえける。武帝は高宗也。

田

草枕ゆめちに咲し色なからさむるうつゝにみよしのゝはな

[illegible]萬葉布龍鱗。　菖蒲の花のしける色龍の鱗に似たり。この草のおふる時。田をうふへしと云り。

やましろのよとのゝ菖蒲生にけり鳥羽田のさ苗今やとるらん

嘉禾九穗新。　世のまつりとすなほなる時には。一くきに九穗ありと云り。又嘉禾穀也。春二月熟す。大平の時九穀にて含穗と云り。

きのふみし山田のさなへ一本にいくへ浪よるけさのほたちそ

道

玉關塵似雪。　玉關の地に塵沙おほく有て雪に似たり。

關の戸を雪にしらむとみしはらや沙にあくる空めえけり

今日中衢士。堯樽更可逢。　堯の時天下みち有。此時にあへる人みなむなしからす。得たる所有。此故に堯の道はちまたに樽酒をまうけたるかことし。ゆきすくるもの各くみてえたりと也。

せきのとをさゝて幾日に成ぬらんみちある御代にあふ坂の春

海

萬里大鵬飛。　北海に大魚有。鯤と云り。其せなかの廣き事幾萬里と云事をしらす。此魚化して鳥となれり。名て大鵬と云り。六月の空にうこきて南に向ゝ一度翥に九萬里に至ると云り。

越の海空とふほとはおほ鳥のかけはかりこそ底にみえけれ

珠含明月輝。　海中におほきなる蚌蛤有。中に明珠あり。月と共に虧盈。月の望にはなかにみあり。月のつともりにはなかむなし。明月の珠これなり。[illegible]蚌蛤珠と云り。

三ケ月の影とひとつにみし珠はおなしなみよに有明のそら

江

霞津錦浪動。　成都の西城はもと錦官所なり。此うちの江のなかれにて錦を洗に。水清くして色あさやかなり。故に錦里城といへり。又江のうへのかすみの色にしきににたりといへり。

霞しくしかつの春をきてみれははなのにしきをあらふさゝ浪

濤如白馬來。　伍子胥しにて。かはれ大江にすてられぬ。其靈水神となりて白馬にのりて顯ると云り。[illegible]

難波江のあしのはなけのこまの色と沈みしあみのなみの面影

河

河出崑崙中。　崑崙山の南に九井あり。皆玉の筒有。水丑寅の角より出て。國の中をなかれて龍門を隔たり。此故に河のみなかみ崑崙山にありといへり。

なみの音もゆくするゑ遠く響くえよゝにたえせぬ玉川の水

德水千年變。　黄河の一名を九曲といふ。一の名を孟津といへり。秦の文公の時黒龍終南山より出て水を臨てより。黄河をあらためて德水と云り。黄河の水常ににこれ

り。一石の水をすましむるに一斗の泥をとる。すへて三千年に一度すめり。はしめすまんとする水五色に變す。又聖人出るときこの水すむといへり。

水のいろもまたすみやらす此世には影宿すへき人やなからん

洛

元禮與仙客。　後漢の李膺か字は元禮といへり。郭林宗洛陽にきたりあそふ。元禮ねんころにかたらひむつひて。ともに文談をなす。後に郷里に歸とき。元禮と林宗とひとつふねにのりて河上に浮へり。諸の儒士衣冠をたゝしうして是を送る。人神仙なりとほめけり。

陳王覩麗人。　魏武帝第三の子曹植洛神賦云。我京城より東藩に歸る。みちのいはほの邊にひとりの麗人をみる。御者をひきて問しむるに。河洛の神名を宓妃と云り。是を見るに。髣髴たる事かるき雲の月を隱か如し。飄颻たる事なかるゝ風の雪をめくらすかことし。遠く望めは日の光の朝の霞にのほるかとし。近くみれははちすの色のみとりの浪よりいつるかことし。あるときは清流にたはふれ。ある時は神渚にかける。ある時は明珠をとり。あるときは翠羽をひろふと云り。

山姫の霞のそてにあくかれぬ風にひれふるあけほのゝそら

百詠和歌第三

芳草部

蘭　菊　竹　藤　萱　萍　菱　荿　茅　荷

蘭

虚室重招尋。　易曰。心をおなしくする人。蘭の氣しくかうはしきかことし。

ふち袴なつさふ露の名殘までいくかきえせぬ匂ひなるらん

雪儷楚王琴。　宋玉むかし遠くあるきて。とも人うへに臨み。むまつかれて。人の家に立入れり。あるしの女おもはく。宋玉を堂上にすへんとすれはたかく。堂下にすゑんとすれはひきしと思へり。この故に蘭房をつくりて。其中にすゑて。菰（彫イ）胡之飯。琴をとりいたせり。宋玉これをひきて。幽蘭白雪の曲をなすに。人皆涙をもよほさすといふ事なし。

草のいほに雪をしらへし琴の音のなこりにふるは涙なりけり

菊

金精九日開。　菊の花の色黄なる故に金菊と云り。又秋は西にかたとる。にしは金也。菊は九月九日に花開く。この花さけにうかふと云り。

長月のきくもあはれと思ひしれこゝぬかとのはなのまとゐを

靈雁塞潭側。　靈雁こまかなる形也。南陽に菊潭あり。此

水を取て酒に作れは。味ひ甘くしてしかもゑひをなさす。胡廣は南陽の菊水をのみて命長し。八十余といへり。

白菊のそこにうつろふ色みれはしつえをわけておつる谷水

竹

蕭條含曙氣。　　呉都賦云。竹は則緑の葉は青きくきあり。しもをおかし雪をとゝむ。檀欒とまとかに。蟬娟とたをやか也。梢雲無竊。嶰谷弗能連。

霜かれの冬にはよそのみとりにて夏は秋なる竹の下かけ

誰知湘水上。流涙獨思君。　堯の二人のむすめ娥皇女英は舜のめなり。舜かくれ給て後。二人の人湘水のほとりに哀哭。涙を落すこと雨のことし。涙竹に灑きて竹斑になりぬ。かなしひにたへすして。ともに湘水におほれてしぬ。此故にふたりを湘夫人といへり。

よをかされ物思ふ袖とひとつにや竹の末葉も涙落ける

藤

神農嘗藥罷。　　永陽縣有石室。爲神農窟。々前有異藤。朝紫。日中綠。晡黃。暮青。夜赤。五色也。神農氏藤をなめて良藥とし給へり。千金藤と名付。昔南郡の仲恭か母病に沈めり。山に入て藥を求に。ひとりの翁あへり。翁の云。此山に高き木有。其梢に懸る物あり。名を藤といへり。これを得てなんちか母の病たちところにいへなんと云て。かきけすやうにうせぬ。仲恭これをとりて母にあたへてなかむろに病則いへぬ。自爾以來今に至るまて。こほりの人藤を良藥とせり。

藤なみの匂はさりせは老にける松のたのみを何にかけまし

花分竹葉盃。　　西域藤の盃あり。おほきさ人の手に似たり。葉葛ににたり。花とみとはきりに似たり。藤樣の文有。是を盃に作れり。芳してゑひをけす。昔張騫大宛に行て是を得たり。国の人酒をもちて藤のもとに至て。はなをつみてゑひをさます。又野人藤の花を酒に作れり。又さけあり。竹葉の酒といふ。

かすみくむ春の袂のにほふまていろこき藤の花のさかつき

萱

忘憂自結叢。　　萱草の一の名丹棘なり。丹藤をなりて人憂をわする。忘憂草是なり。瀛州に生たり。名長樂。即萱草なり。

野邊の色に秋の心もわすれ草虫はうらむる比と聞とも

香傳少女風。　　管輅日てりのとき清河を過ていはく。けふ雨下へし。樹上に少女の風ありと云。しはらく有てはたして雨くたれり。西方を少女とす。西の風吹て雨ふる故なり。萱草の香此風にかほるなり。

天津風をとめの袖をそめてけり野原の花のかをさそひきて

萍

二月虹初見。三清蟻正浮。　うき草に雨字あり。おほきなるを蘋と云。是を鬼神にたむく。また風蘋の末よりおこる。少なるを萍といへり。虹は三月の節の後十一日に初て見えて。十六日に萍初て生。十月中の日よりにしかくると云り。虹の初て見ゆるとき萍生出といへり。二月の字おほつかなし。二月といふは選下三字也。又三月は獲初て。前月に稍同也といへり。又云。三清はさけの名也。又云。浮蟻うきくさのことし。虹初てみゆるとき萍おふと云り。

春の色のたな引空を知かほにやかてなみよる池の萍

蘋隨旅客遊。　萍は南北になかれ行事。旅人の浪に浮かとしと云り。

誰もかく春の浪路にうき草やさそふ水あらはあくかれぬへし

菱

東平春溜通。　幽明錄曰。春氷とけて後菱始て生出る也。昔東平郡のうちに氷の上にひしとる女あり。身にはちすの葉をきたり。呂求是を見て。人にあらす鬼の類也といへり。女曰。子不聞荷衣蕙茅。來て忽に不見。化して爲獺而去。

くみてしる人も有けりひしとりし妹かすかたの池の心を

潭花發鏡中。　ふちの色鏡に似たり。裏にひしの花を移す事あり。此故にひしの花鏡中に開くと云り。

ひしうつる鏡やみしと人とはゝうきぬの池のかけをこたへん

苽

欲識東陵味。青門五色苽。　秦東陵侯邵平くにやふれて。布衣らへくして司をのかれて。後長安城の東門のほとりに苽をつくれり。うり五色あり。味ひ殊に勝れたり。東は青也。又漢東盧江燉煌のたね熟しておほきなる事如斛。青うり如三斗。又蜀郡常にあたゝかなるか故に冬うり有。又君かためには四にけつり。諸侯の爲には中よりすと云り。

門田にはいつゝの色とみしかとも心のたねはふたつなかりき

龍蹄遠珠履。　苽にあまたの名有。女臂苽。羊角苽。蹄苽と云り。苽田に履をいらすといへり。くつをおとしてとらんとすれは。苽をとらんとするに似たり。

旅人のくつのかよひち心せよこまのわたりに露おちぬとも

茅

堯帝成茨罷。　帝嚳子堯位につき給て後。人の費を労て。殿舎を作給ふに。茅茨をもきらす。おところをもけつらす。賤き栖かなりしかとも。世ををさめ給ふ事九十八年。命百八十歳にしてかくれ給ひぬ。

長き世のすみかとこれをしらてみはあやしかるへき草の庵哉

殷湯禱桑林。　殷の代に九年ひてりありて。草木うせなんとす。ときに殷湯政のよこさまなるゆゑに。天のとかめ給ふならんとさとりて。我は命をうしなひて。天下をさまり上下おたしからん事を思ひて。桑林の下にして白茅をまとひて。身をいけにゑにして雨をまつるに。雨おほきにふれり。注をは白茅してつゝむ故也。

淺茅生やゝつらしかりし雨の音は桑よりこそ降はしめけれ

荷

魚戲搖翻葉。　詩云。魚戲新荷うこくと云り。翻葉はあをき葉なり。

風ふかてなみよる池のはちす哉うき葉かしたに魚さはくらし

龜浮見綠池。　千歲の龜荷葉の上に遊ふと云り。又龜むまれて三百歲。そのおほきさ錢のとし。荷葉の上にありといへり。

荷葉のみとりの池にすむ龜のかけに千とせはあらはれにけり

百詠和歌第四

、嘉樹部

松　桂　槐　柳　桐　桃　李　梨　梅　橘

松

鶴棲君子樹。　松をは君子にたとふ。衆木をは凡人にたとふ。年寒くして四方の木末霜雪にをかされて皆枯落時。松獨綠也。此故にたとふ。又千歲の鶴松樹にすむと云り。又君子樹あり。その葉松に似たりとも云り。又昔榮陽郡のみなみ石の室あり。後に一つの松の十丈なる有。この室に夫妻ありけり。數百歲をへて化して鶴となりぬ。鶴一つかひこの木に栖て羽をならふといへり。

やとしむる鶴の八千代の老木まていかにくちせぬ松の契そ

風拂大夫枝。　秦始皇泰山に御幸し給道に。俄に風雨にあひて。松の下蔭に寄て雨を過し給へり。此故に五の松樹に位を授けて五大夫樹と云り。

ふらぬ日はおなしみとりの松か枝に雨のめくみの春の一しほ

桂

花滿自然秋。　泰山の上にかつらの林あり。秋を迎事とに花白盛なり。

風かほる春の匂をみつる哉かつらの里の秋の梢に

仙人葉作船。　仙人かつらの葉の船にのれり。黄帝見浮葉。乃爲船也。

かつら川木の葉の舟にさをさして浪をわたるは山おろしの風

槐

暮律移寒火。　冬は槐檀の火をとれり。又槐樹の火難消久憐となれり。又十月上巳日槐子を取て服人。長生を得と

いへり。

うつみひとなりて霜こそ消やらね雪にこりつむ賤の爪木は

　鴻儒訪道來。　槐市は學館名也。月との朔望をむかふるとに。もろ／＼の儒士槐下に來れり。集て論談をなし市をなせり。

花にきほひもみちあらそふ友なれや木の下蔭の道もなきまて

柳

　樓際葉如雲。〔[illegible]〕　柳の花白くして雪に似たりと云り。

いとはまし月にのほりし秋ならはみとりにくもる軒の柳を

　夜星浮龍影。　廿八宿の中に柳星あり。この星みなみに有。柳の葉龍の鱗に似たりと云り。

誰かしるあまの川原のたま柳雲になみよる春の光を

桐

　孤秀嶧陽岑。　嶧陽山の桐を取て琴瑟につくるに。其音勝れりと云へり。

おく山の音樓の桐にのこる之音にしむ秋の風のしらへは

　秋葉落非陰。　周成王戯て桐の葉をきりて。玉そと云て叔虞にたふ事あり。時人天子無戯言そしれり。龍門山に桐あり。道さかしうして人にしられすしてかれぬ。只秋の月の照のみありといへり。

露のそめ風のみかきしもみち葉はそよくも玉の響之けり

桃

　〔[illegible]〕含露似啼粧。　梁冀妻孫壽みめ形人に勝たり。よて愁ふる眉啼粧をいつはりなせり。みる物こゝろをまとはさすといふ事なし。桃花の露にぬれたる。美人のなけるよそほひに似たり。すへて桃花の滴をのむに。百病を除きて。かほの色光ありと云り。

朝露の紅にほふ花のかほこほるゝ色そなみたなりける

　仙人路漸長。　晉太康のとし。武陵の人魚とりに谷の流を行に。道を失ふ。桃林のきしをはさめるに行かゝりぬ。百歩か内に異うゐ木なし。芳花鮮美にして落英繽紛たり。待みなかみをきはめ行に一の山あり。山に少きなるくちあり。舟を捨てあゆみ行に人の家あり。田有。池あり。桑竹さま／＼のうゐ木あり。鶏犬あり。をとこ女あまたあり。漁人是問に答て云く。秦の時の人也。世の亂を遁てこゝに來てより。よの人通ふ事なしと云り。桃源これ也。秦二世青三年亂より晉武帝大康十年に至迄。五百八十七年なり。

水上や浪路の花にさをさすもこかちにすむもおなし旅人

李

　花明玉井春。　玉井のほとりに桃の木あり。もゝの木のかたはらにすもゝの木有。又崐崙山に玉の李有。其實堅して光かゝやけり。玉水にあらふ時。和かになれりと云り。

春風になみよる花の雫まてむすふて匂ふ玉の井の水

特用表眞人。　老子は上世の眞人。李氏は楚國苦（縣）厲鄕の人なり。流星をみて心をよろこはしめて始てはらめり。腹の内にして八十一歲をへたり。周の定王三年乙卯二月十五日。卯時に李樹の下にして右の脇より生たり。即よく物云り。李樹をさして我姓とせよと告しむる故に。李老君と名つく。是を嬰兒といはんとすれは即年既八十也。是を老父といはんとすれは新に生たり。この故に老子と云。重耳と名つく。あさなは伯陽。鬼神をうなかしつかはしめて。簡王十三年周のおとろへたるにのそみて。靑牛にのりて。西に趣てさりぬ。迦葉佛の御身と云り。すへて、老子の世に出給ふ事九變八十義と云り。黃帝の時は天老といひ。帝堯の時は門樂臣の其一和升と云り。周の世鬢王の時には伯陽といひ。吳國にては季札と云。越王勾踐につかへては范蠡といひ。齊の國にては景公の臣晏平仲と云り。漢の世高祖のはしめには蕭荷といひ。文帝の時には河上公と云。武帝の時には東方朔と云り。又說云。伏羲時號鬱花子。神農時號豫子。祝融時號廣壽子。軒轅時號廣成子。顓頊時號赤精子。帝嚳時號錄圖子。堯時號務成子。舜時號尹壽。禹時號箱有眞子。湯時號錫則子。又經文王武王。爲十二帝師。

さきそむる花の木末はゝそちまて霞にこもる老木之けり

梨

秋來葉早紅。　なしの葉は秋をまちて紅也。詩云。梨紅大谷晩といへり。

伊勢島やいくしほ風のそめつらんから紅のおふの浦なし

還冀議張公。　後漢の光武帝の時張公夏なしを奉れり。國中に只ひとき有故に。御門おもくし給へり。

移しうゑしたゝひともとは夏山にたくひもなしの梢之けり

梅

院樹斂寒光。梅花獨早芳。　よろつの花の中に。梅のはなは年のうち雪の底より咲始る故に。ひとりはやくかうはしといへり。

雪きえてめくむ柳も有物をまたふるとしの梅の初はな

昔能長止渴。　魏の武帝軍の道に水なくして。士卒みな水にうゑて口のかはけり。武帝の詞に云。このさきに梅林あり。おほくみをむすひて其味甚すし。行てうゑをやむへしと仰けり。この時衆人にはかに口の中うるふことを得たり。

旅のそらおもひの外になくさみぬするゑを梅つのさきに聞より

橘

千株布葉繁（蘩）。　李衡江陵に千株の甘橘うゑたり。李衡をはりに望て子に云。われ千戶の奴をして橘を植て。年ことと

に絹一疋をとゞめて。是を千頭木奴と號せんと云り。
千もとまておもひおきける橘の匂ひは家の風に殘れり
玉蕊含霜動。　花橘白きたまのうるへるか如し。此ゆゑに霜を含めるに似たりと云り。
吹風になみよる霜や橘の花ちるさとの庭のおもかけ

百詠和歌第五

靈禽部

鳳　鶴　烏　鵲　鴈　梟　鶯　雉　燕　雀

鳳

有鳥自丹穴。其名曰鳳凰。　丹山に丹穴有。かたち鶴のことし。をとりを鳳といひ。めとりを凰と云。又鸞といへり。鳳はあかく鸞は靑しといへり。天下をさまれる時にこの鳥出と云り。黃帝の時いつ。堯の時出。周の始にいつ。又鳳凰のかくるゝ時。諸の鳥丹山にあつまり來て。かなしみなくといへり。
山鳳のねぐらの枝もならさぬをのとけきよとや鳥はいつらん
九苞應靈瑞。　九苞一に苞命。二に合度。三に耳聰。四に屈申。五に色彩。六に冠矩。七に距鋭。八に音激。九に腹有文なり。又鳳の形は麟のまへ。鹿のうしろ。蛇の頸。魚の尾。鸛顙細文。龜の脊。龍脣。燕頷鷄喙是なりともいへり。
ふかき山のきりの梢にすむ鳥の心の花はひとつ色かは

鶴

翩翔一萬里。　燕雀も鴻鶴につけは。萬里をかけるといへり。
野原ゆくつはめも空にかよひなん雲井のつるの友となりなは
來去幾千年。　遼東城門に白き鶴來たれり。わかきもの弓矢していんとするに。鶴とひ去て空にありていはく。丁令威家を去事千歲にいまかへり來れり。城郭はもとのことし。人民なほまれなり。何仙をまなはさると云り。
三千代へてあれにし里に鳴鶴の聲はむかしのあるし之けり

烏

日路朝飛急。　日の中に三足のからすあり。陽の精といへり。
今そしる山の端いつるやたからすかけは朝日とひとつ之けり
白首何年改。　燕太子丹秦に取篭られて。本國に歸らん事を愁るに。烏の頭の白なり。馬に角の生んをり。かへすへしと聞えける時に。太子丹天に仰て歎くに。頭白き烏きたれり。地にふして嘆くに。角おひたる馬來れり。秦王驚きてゆるしつかはされぬ。
故郷をへたてはてゝや山からすしろきにかへる色なかりせは

鵲

危巢畏風急。　かさゝきは風のふかん事をしれる故に。林にすをしむる事。風をしりて高下ありといへり。いふこゝろは風のとかならんことをさとりては。かみの枝にすをうつし。風のはけしからん事をさとりては。しもの枝のそこにすをしむる也。

かさゝきのすをそよのまにしむるなる明は梢に風や吹へき

愁隨織女歸。　七月七日かさゝきつはさをならへて天河にはしをなせり。織女是を渡といへり。

かさゝきのわたす程なく明わたる夜半のつはさや夢の浮橋

鴈

春暉滿朔方。歸鴈發衡陽。　かりは北の地にあり。きたの地極てさむき故に。秋の月に宮古に來りて寒を送り。春の暖氣をむかへて即北に歸る。朔方は北。衡陽は南也。又云。鴈は氷とちて南にかけり。氷とけては北へ歸る。又晨鳧[illegible]候鴈銜蘆ともいへり。

ふるさとの春しりかほに歸鴈都の北やまつかすむらん

寄語能鳴伴。　莊子山を過給に。木をきる物有。すくなる木をはきりて。ゆかめる木をはきらす。又人の家にやとり給に家にかりあり。あるし一をころさんとす。一はよくなく。一はなかす。よく鳴をはいけて。よく鳴さるをはころしつ。あくる日弟子莊子に申て云。きのふの山中の木はすくなるを切て。ゆかめるを不切。又家の二のかりはよく鳴をいけて。よくなかさるをころしつ。よき木もきられ。よからさるかりもころされぬと申せり。莊子答のたまはく。よの中のためし是に有とこたへ給へり。

杣山やきのふのくれに引かへてけふをたのむの鴈もよしなし

鳧

颯沓雎陽渓。　颯沓むらかりとふなり。梁の孝王雎陽の園の中にして。鳧鴈の池をほりなせるに。いつしか鳥むらかりすみけり。

むれてすむをしのかも鳥とともはむなれまつ池と誰かをしへし

王喬曳舄來。　葉縣の令王喬後漢の人也。神術あり。葉縣よりみやこにまうつることに。むまもなくくるまもなく。たゝふたつの鳧のみそみなみより來りける。大史をして是をうかゝはしむ。網を張てまつに。二のかもおちて一雙のくつとなりぬ。

久かたの雲をあゆみし跡はたゝふたつの鳧の翅之けり

鶯

聲分折柳吹。　鶯に折柳の曲あり。又落梅の曲あり。鶯の聲これにかよへり。すへて鶯の聲管よりもたへなりといへり。

鶯のこほるなみたは青柳のいとのをよりそうちとけて鳴

遷喬若可冀。幽谷響遐遁。　黄鸎ひとりともを求む。こゑ谷より出て喬木にうつる也。

鸎のたかきにうつる聲すなり谷の梢の雲のそこより

雉

白雉振朝聲。飛來表太平。　白雉みゆれは則天下太平也。周の武王の時越白雉たてまつる。是太平をあらはすと云り。さはのきし十歩に一度啄。もゝあゆみにひとたひ飲といへり。

雪の色のきゝすあさ立春のゝにのとけきみよの跡はふりにき

楚郊疑鳳出。　楚人小雉をになひて道をゆく。行客なにそと問。楚人いつはりてほうわうと云り。行客名をは聞けとも未見。故に此鳥を楚王に奉らんと思へり。則千金を分てこの鳥をかひとりつ。此鳥わつかに一宿を經てむなしくしぬ。行客あたひのむなしくなりにし事をは更に悔る事なし。只楚王に奉らさりつる事をうれへ痛めり。楚王此事を聞たまひて。志をほめあはれひて十倍の金を給へり。

終にかくはくゝむ御代に逢にけり鳥のなたてのねに沈みしを

燕

燕池休時雨。　燕池はとふ形也。零陵山の上に石燕あり。雨くたれは飛とひ。はるれはもとの石となりぬといへり。

天津風雲とゝもにやかへすらんもとのいはねにつはめきに鳧

相賀雕楹側。　淮南子曰。大厦成而燕雀相賀。湯沐具而蟣虱相弔。

我たにもけふこそきつれ槙の屋に軒のつはめのすみ馴にけり

雀

入幕應王祥。　王祥まゝ母朱氏につかうる心さし。誠の母の如に思へり。後母病に煩て。黄なる雀のあふり物をねかふに。王祥求れとも得す。なく／＼是を歎くに。黄雀數十飛て幕のうちに入。王祥是をまゝ母にあたへて。病たすかりにけり。

雀いるはゝその原は秋ふかき梢そさそふしるへなりける

朝逢遶水傍。　公冶長鳥の語を悟りしれり。時にとかありて獄の内にいましめおかるゝ時に。群雀の聲を聞て。この雀の由詞をしれりと云。獄の使是を問に。公冶長答て云。すゝめ嘖々曰。白蓮水の邊に有車。翻覆黍粟。牡牛の角折たり。相將往啄といへり。

みち人のおちほにいそくむらすゝめともよふ聲を獨しる哉

百詠和歌第六

祥獸部

龍　麟　象　馬　牛　豹　熊　鹿　羊　兎

龍

龍は春分に天にのほり。秋分に水に入。いろくつあるを蛟龍といひ。翼有を應龍といふ。つのあるを虬龍と云。いまたのほらさるを蟠龍といふ。

銜燭耀幽都。　幽都北に有。日月の光り及はさるさかひなり。龍ともし火をふくみて照せり。くにのあきらかにくらきこと龍の出入によれり。又云。龍目をひらく時をひるとし。目をふさく時をよるとせり。

あきをやく紅葉の色のともし火にこの下闇もさもあらはあれ

含章擬鳳雛。　徐直云。諸葛亮臥龍たり。龐士元鳳雛なり。又鳳に五彩あり。爾龍章に似たり。此故に龍又鳳彩にかたとれり。世説云。陸雲十五歳の時。聞鴻是をみていはく。この兒はもし龍駒にあらすはまさに鳳雛なるへし。いふ所は龍章鳳姿有故なりといへり。

ひなとりの行末とほくみて（えイ）しかな龍田のおくの雲井はるかに

麟

（麒麟）牡を麒といふ。牝を麟といふ。又云。歳星散爲麟。又云。麟馬足黄色圓。蹄角端有肉。又云。麒麟鬪へは則日月蝕す。又云。麕の身牛の尾一の角五蹄有。又云。麒麟は仁獸也。王者仁あれは世にいつ。又云。毛虫三百六十。麒麟を長とす。又云。麟鳳龜龍これを四靈と云。又云。含仁懷義。あそふに土をえらふ。行に蟲をふます草をしたかす。むらかれゐす。よこさまにゆかす。

戒角諭英才。　文をまなふ物は牛の毛のことくなれとも道に長せるものは麟角のことしといへり。

まこも草なへてしけれるとのはもつのくむ色にしかん物かは

畫像臨仙閣。　後漢の功臣廿八將。麒麟閣のうちにかたちをうつしおけり。

鄧禹。　吳漢。　賈復。　耿弇。　寇恂。　岑彭。　馮異。
朱祐。　蔡遵。　景丹。　蓋延。　銚期。　耿純。　臧宮。
馬武。　劉隆。　馬成。　王梁。　陳俊。　杜茂。　傅俊。
堅鐔。　王霸。　任先。　李忠。　萬修。　邳彤。　劉植。
　已上廿八將。
王常。　李通。　竇融。　卓茂。　此四人をくはへて三十二人也。

又麒麟閣の功臣。

霍光。　張安世。　趙充國。　魏相。　丙吉。　杜延年。　劉德。　蕭望之。　蘇武。　已上十人。

又云。天下の秘書麟閣にをさむといへり。麟臺ともいへり。

あらかりし浪をしつめしから人のかけをゑしまの月にみる哉

象

萬推方演夢。　會稽の張茂夢に大象をみる。萬推ときて

いはく。象は獸也。此字のこゝろは守也。汝郡守になるへしと云り。張茂か云。象は有牙榮。其身このゆゑによしと思はすといへり。則呉興太守になりぬ。後に王敦かためにころされぬ。

草枕たひねの夢をみよしのゝきさ山陰のおとろかしけり

惠子正葬書。　象雖華あり。そのめしぬるとき。百餘日泥土を身にぬりてひとり酒をのます。しゝむらをくはす。ある人其故を問に。涙を流て悲しめる形ある如しと云り。博物志にみえたり。昔莊子女におくれたる時惠子弔。莊子うれへたる色なし。箕踞してほときをうけてうたふ。惠子これをそしる。莊子のいはく。人はしめてしぬるにあらす。もと生なし。もとかたちなし。もと氣なし。芒芴のあひたにましはりて變して氣あり。氣變して形あり。形變して生あり。今又變して之死。これあひともに春夏秋冬四時に行といへり。莊子第十八にみえたり。莊子のうたのことはゝみな象のことなり。又莊子めしにてうたふ。大象このかはをみて。とをくもちかくもかならすなく。いかゝしのはんとうたふ。惠子これを聞て則その書をやかんといへり。莊子方寰にみえたり。書をやかむといへるは。象のあならしなへる書の事成へし。

わか草のつまも姫とのほりにし野へをかきねていかゝ燒へき

馬

天馬來從東。　漢武帝代大宛胡得千里馬。ときに天馬歌をつくり給へり。其詞云。天馬來兮從東道となり。

吾妻路の關の千里をこえすして都に駒の名をとゝめけり

蒼龍逐逐日。紫燕追追風。　蒼龍紫燕逐日追風。ともに馬の名也。とき事日をおひ風をおふに似たる故也。又月をは浮雲と云。くらをは月に似たりともいへり。

つはめとふ霞のそことみるほとにいはゆる聲はのへの春駒

牛

商歌初入相。　甯戚齊の國にゆけり。桓公よるいてゝ賓にあへるに。甯戚牛を車下にかふ。自ら角をたゝきて歌て云。南山粲白石爛。生不逢堯與舜禪。短布單衣纔至骭。長夜漫々何時旦といへり。桓公これを聞て賢をほめて相とす。

哀しる御代に逢ては身の程をうしといひてもかひなからまし

不降五丁士。如何九折通。　秦の惠王蜀の國をうたんとし給へるに。みちをへて人のかよふへきさかひにあらす。王はかりことをめくらして。石の牛を作りて。しりに金をおきて。ひそかにさかひのほとりにおくりつかはされぬ。其後蜀の國の人此牛をみて。石牛天よりくたりて。身より金をいたせりと思へり。則五人の力人をして山をきり牛

をひくに。さかしき山たいらける道になりぬ。時に秦の相張儀をつかはして。石牛の跡を見て。蜀の國をうち取てけり。

くらかりし山路ははれぬ彦星のうはの空なるかけをはかりて

豹

虎豹の鞹はなほ犬羊の鞹のことしといへり。たとへは虎豹犬羊とのかはゝ。毛の色一つにあらす。毛をおろしすてつれは。いつれも同しけれとも。なほ犬羊にこえたりといへるなり。鞹つくりかはなるへし。

山おろしにおつる木葉(ゝ)のふるかはゝかはる淵瀬もいかゝ白浪

若今逢霧雨。長隱南山霧。　荅子三年のうちにおほきにとみさかえたり。その妻みとり子をいたきてなきかなしめり。しうとめおほきにいかりてこれをとかむるに。妻答て云。それ能なくしてつかさあるをは嬰害といふ。功なくして人とめるをは積殃と云。昔楚の令尹家まとしくして國はとめりしかは。福子孫につき名後代にあらはれて。〔マヽ〕今荅子能なく功なくしてとみさかえること。後害をかへりみさるなり。我きく。南山に玄豹あり。七日の雨きりに隱て。おのか衣毛のしほれん事をしみて。あへてくひ物を求る心忘れたり。此故に害をのかる。犬彘にいたりてはひとへにくひ物をのみ思ふ。ゆゑになかなか害をまつなり。これ則荅子に似たり。この故になくといふ。荅子つひに害にあひぬ。

山深み霧にかくれしけたものゝ跡ふむへくもなきみえけり

熊

乗春別館前。　西京賦云。離宮別館卅六所あり。漢武帝元鼎三年の春射熊館にみゆきし給へり。

梓弓はるのかすみにいるさやまめつらしかりし例にそ引

猶冀飲清泉。　黄帝炎帝と阪泉にあらそひたゝかふ時。熊羆前驅せり。

こき淺すせゝをもなにかあやふまむひの隈川の淺いしろへに

鹿

奈花開舊苑。　西國に奈花鹿あり。國王かりにいてゝ。ふたむれの鹿にあへり。ひとむれに五百つゝ有。鹿王すゝみて國王にむかひて曰。一日におほくのしゝを殺給はゝ。鹿つもり徒にすてられんよりは。日ことに一つの鹿を奉らは。國王のためはあさやかなるしゝを得て。殘りのしゝは又しはらくの命をのへん事を悅とすへしと申せり。國王此事に隨給ぬ。則日ことに一のしゝを奉れり。かくしつゝ日數をふる程に。はらめるしゝあり。其日にあたりて鹿王のもとに行ていはく。我ははらめる身をもちて今日のいけにゑにあたれり。命をなしむに非す。子の生れての後ま

ての命をのへて。次の日にあたれらんしゝを。けふにひきかへ給へと。ねんころに歎くといへとも。鹿王命を惜事は何も同事なり。次の日にあたらんしゝも。かはらんことかたしと答て。鹿王もちひす。此時はらめるしゝかたはらの鹿王に行て。我鹿王此事をもちひす。なんち子のむまれん日まて。我を助け給へとなく〳〵いふに。鹿王おもはく。命を惜む事はいつれもおなし身なれは。かはらんことかたし。又はらめるしゝの命をうしなはん事かなし。たゝわか命をすてゝ。此しゝを助けんと思ふなり。すゝみいてゝ鹿王則王厨に來れり。國王此しゝをみるに。かたちもの色うちまかせたるしゝにあらす。あやしみ問給に。鹿王つふさに此事をのふるに。無限命と思ひて。我は是かたちは人なれとも心は鹿なり。汝は形は鹿なれとも心は人なりと答て。けふよりしかしなからしゝのいけにゑを止められぬ。

消かへりをしみしとも哀なり子を思ふしかの露の命を

方慎大夫志。執手別心期。　子高と云人趙に行。道の平原君か客鄒文節と共に立たり。子高鄒のふるさとに歸るとき。人わかれをゝしむ。文節したひおくること三宿。文節涙を流す。子高手をあけて是を謝す。子高か云。人生れて有四方之志。是鹿豕哉。而常聚乎。

さを鹿のはなれぬともゝ有物をわか思ふ中のかゝらましかは

羊

跪飲然澆俗。　ひつしの子は母のちをのむ時。かならすひさまつけり。禮有に似たり。法訓云。羊有跪乳之禮。雞有識時之候。雁有庠序之儀。人(取イ)禮法焉。

はかなしとみゆる羊のあゆみにもなほこの道の淺からぬ哉

仙人擁石去。　初平は仙術にかしこかりし人なり。年十五にして羊をかはしめて。金花山の石の室にあり。そのこのかみゆいてみるにひつしなし。このかみ羊の在所を問に。山の東に有と答。行てみるに白き石のみ有。このかみ猶石のみありといふ。此時に初平行て羊をよふに。石こと〳〵くたちて羊となれり。いはつゝしの名を羊躑躅と云。羊つゝしを見て伏まろふ故なり。躑躅はふしまろふとよむなり。玉支青羊はともにをかつゝしとよむなり。

つゝし咲色におとろく心にてねさすいはほそみをなしてける

菟

月暗桂葉長。　桂之生也。入季春。五日兩菟の日。十日而輪の耳と云り。

漢月澄秋色。　月のうちに玉の菟あり。月は陰の精なり。けた物にかたとるゆゑなり。

雲りゆかむ雑の空そしられけるいつかをそむるこの菟はる雨

吹風に雲の毛衣はるゝ夜や月の菟も秋をしるらん

百詠和歌第七

居處部

城　門　市　井　宅　池　樓　橋　船　車

城

獨下仙人鳳。　漢の宣帝の時上林に鳳集れり。此時に鳳凰殿を作る。是によりて鳳城と名つく。又云。秦穆公の女弄玉簫を吹に鳳來り聞。是によりて丹鳳城とも云り。又云。東京城のさかひに三河のかためあり。洛陽のわたり卅六里一百六十八歩三尺と云り。又云。秦の始皇の時。将軍蒙恬をよひ公子扶蘇をして。長城二萬里をつきて匈奴をふせかしむ。

めつらしき花の都を人とはゝ栖の鳥のなをやちらさん

白日麗城隅。　古詩云。日出城南隅といへり。昔滕公馬に乗て東都門にいたるに。馬悲みいなゝきて。土をあかいてすゝみしりそかす。滕公あやしみ驚て。馬のあかく所をほらしむること二尺にして石槨を得たり。燈をかゝけて。あらひて銘を見るに。よくしれりと云物なし。叔孫通のみそ科斗の書といひける。つゐにうつしえてけり。佳城鬱々として三千年見白日。于差滕公居此室。滕公か云。是天のなせる所なり。しなはこのうちにをらんといひて。をはりに身にはふられにけり。滕公は夏侯嬰也。

契あれはあくる日影にあひにけりみちよしつみし昔の下より

門

煌々紫禁隅。　煌々は光の赤き形也。紫禁は宮門なり。皇居をは天上の紫微宮にかたとれり。

なかきよの老せぬ門の空よりやわかむらさきの光さすらん

疎廣遺榮去。　漢の宣帝の時疎廣大傅たり。兄子受又太子傅たり。疎廣受にかたりて云。我與汝共に帝者の師として富貴身にかさなれり。如栽實之木。其根必危。老子曰。知足不辱。知止不殆。功遂身退天之道也。われしりそかんとおもふ。なんち又然へからすやと云り。受答云。敬從大人命と云り。二人つゐに辭去。御門及太子ことはりをはなちてゆるされぬ。御門黄金卅斤をたひ。太子五十斤をたまふ。卿相以下都門の外に數百兩の車をならへて送る。二人組綬ときて長安城を出て。かふりを東都門のうへにかけてさりぬ。舊里にかへりて。したしきゆかりを集て。金をわかちて施せり。時の人のことわさに。賢なるかな二大夫といへり。

今はとてよをあやふみし初こそ家路にかへる門出之けれ

市

漸離初擊筑。　荊軻燕太子丹勸に隨ひて秦皇を犯に行。燕丹易水のほとりに餞す。荊軻か友高漸離わかれを惜み

て酒をすゝめて。叢市にして筑をうつ。荊軻うたひて云。
風蕭々兮易水寒。壯士一去不復還。筑は樂器なり。
つはいちのやそのちまたに袖ぬれし秋の時雨の竹をうつ音
誰背掛秦金。　呂不韋秦の相也。諸儒をまねきて。呂氏春秋をえらびて。すでになれる時。金を咸陽の市にかけて。一字なくはふる人。一字を減する人ことに。金をあたへんといへり。
春秋のあはれをいかゝ人ごとにいはれの市のいにしへの跡

井

蜀井(管)缺火。　蜀都火の井有。臨邛縣の東南の角にあたれり。火井暗の井なり。其火を出さんとしては。まつ家の火をいる。則いかつちの音の如くして。ほのほいてゝ天にのほる。光千里にかゝやけり。たけの筒に是をもるにその灰なし。
つゝ井つゝ井筒の底に夏の夜はもゆる螢の光をそくむ
杞園旦生雲。　杞園巴井のうへに五色の雲あり。
うす雲の五重の色やうつるらん底さへはれぬ山の井の水

宅

寂々叢蒿径。　後漢の張仲蔚よのましはりをもとめす。閑居を好めりし人也。家はよもきにうつもれて。人のしれるなし。庭には一つのみちのみそのこれる。
草の庵は蓬にのこる庭の跡の心ほそくてすむと知すや
喧々湫隘廬。　晏子か宅市に近くして。喧々とかまひすしかりき。齊の景公是を爽塏にあらためんとしていはく。晏子宅近市。湫隘囂塵なり。
としをへて住なれぬれは里とよむ市の隣ものとけかりけり

池

鏡潭明月輝。　明月の池あり。其淵鏡に似たりといへり又ふちの水鏡の如くして。なかに明月の光ありともいへり。
明ぬるかふたみの池の浪のうへに月のかゝみの影をのこして
欲識江湖心。秋來見瀟宥。　潘安仁秋興賦序云。風興晏寢。匪遑底寧。譬猶池魚籠鳥而有江湖山藪之思。
さりともとたのむの池も埋れてみくさか下にすみそあひぬる
百尺重城際。千尋大道隅。　百尺の樓あり。千尋の樓あり。七尺を尋とす。八尺を常とす。樓櫓在半天といへり。樓名樓霞といへり。樓に重屋あり。
みちのへの霞にすけゝ雨の屋はそらと庭とのなかはえけり
銷憂乘暇日。識識仲宣才。　王仲宣登樓賦云。登此樓以四望兮。聊暇日以銷憂。樓に窓あり。
なつの日はみとりの窓を吹風に身のうき雲そしはし晴ぬる

橋

形似鷹初飛。　橋は鷹背あり。又虹の形あり。はしのかたかりのつらのことしともいへり。

行鷹の雲のかけはしみわたせはおくるゝつらそと絶えける

即今滄海晏。無復白雲蔵。　秦の始皇石橋を作りて海に渡すといへとも。浪荒く風はけしくしてかなはず。又蓬萊山に使を遣して藥とらんとすれとも。白雲とひて風荒き故に至る事を得す。是皆おろかなりしむかしの事なり。聖主世をさめ給ふ今は。よもの海しつかに。白雲のとふもなしと云り。又云。始皇海の中に石橋を渡し給に。海神はしらをかたむ。皇この海神の姿を見んとおほすに。海神のいはく。我姿甚見にくし。姿をうつすことなかれと契りて。皇にみえ奉りてさりぬ。時に何人ひそかに案して。其姿をかく人おほれてしぬ。

四方の海路もなかりしいにしへや思ひよりける浪のいはゝし

船

黄帝刳木爲舟。

畫鷁浪前開。　舟のかしらに鷁といへる鳥のかしらを作りて。文鷁首となつく。鷁は水鳥なり。よく水になれたる故に舟にかたとれり。

あかしかた嶋かくれ行水鳥や鷁こく舟の跡のおもかけ

羽客乗霞至。　羽客は仙人也。むらさきの霞の舟。あをき霞の舟にあれり。

ほの〴〵と春の浪路にたなひくや霞の舟のつなてなるらん

車

竹鳳栖金轄。　霍光か家の車のくさひに鳳凰てゐたり。是より鳳轄といふ。くさひを鳳の形にきさめり。又鳳凰は車のかさりなり。くさひに鳳をきさみなせり。天子に鳳凰車あり。鳳をくさひのうへにつくると云り。

誰しかもうつしとめけんな車のとこめつらなる鳥のねくらを

先乗奉王言。　梁の惠王と齊の威王とかりに出て行合にけり。惠王の云。君はなにを財とする。徑寸の玉の前後の車十二両を照せるあり。威王の云。わか財は君か財にはことなり。我は人を財とす。わか臣檀子と云者有。南城にあれは楚人國をかたふけす。十二諸侯來朝す。盼子といふ者有。高唐にあれは趙人ひんかしのかたにすなとりせす。黔夫と云者有。徐州にあれは燕人祭北門。趙人祭西門。したかへるもの七十餘家有。種首と云もの有。盜賊をしへたくれは則道不拾遺。これを國の財とす。玉はたとひ千里を照す玉なりとも物の數に非。況十二乘をや。梁王是を聞てはち悲て去ぬ。魏の惠王ともいへり。

世をてらす人をは露もしら玉やみかくはくらき心なりけり

百詠和歌第八

服玩部

床　席　帷　簾　屏　被　鏡　扇　燭　酒

床

傳聞有象牀。嘻哉薦君王。　孟嘗君至楚。献象牙牀。郢公登徒送之。不欲往見。孟嘗君門人公孫戍曰。象牀直千金也。

旅人のうきねの床になりにけりきさのたかはの夕浪のうへ

瑠璃七寶裝。　漢武帝の時。柏梁臺のうへに瑠璃のゆかあり。又桂宮のうちに七寶のゆかあり。王母來とき是をのへしくといへり。

かほる香に光をさへそかさねけるはなの臺のなゝの玉ゆか

席

避座承宣父。　仲尼閑居せり。曾子侍座せりといへり。曾子避席曰。參不敏。何足以知之。孔子曰。孝德也。孔子の弟子曾子むしろをさりて孔子の詞を請る也。

苔莚おなしいはねをへたてゝそあをねか嶺のみなをとひける

蘭筵襲道風。　文選長門賦云。搏芬若以爲枕兮。席荃蘭茝香襲兮。又趙后遺風の席をたまへる事有。又むしろに半月並霞の名あり。

ふちはかま風の匂をかたしくやまかきにちかき閨のさ莚

帷

高褰大守車。　賈琮冀州刺史としておもむく時。古きならひによりて。國人さかひに向ふるとき。傳車驂駕に帷をたれたり。賈琮かいはく。刺の守はとほく見ひろくきゝて。よきあしき事をたゝしあきらむへき也。かたひらをおほひふさくへからすといひて。たかくかゝけてさかひにいりぬ。百姓これをきゝてみな震慄せり。

とをかりし心の月は小車やきりをかゝけしことのほかまて

方知決勝策。黄石受兵書。　漢の高祖の臣張子房黄石公か兵書をつたへて。はかりことをもて項羽をうち得たり。高祖ほめたまひていはく。それはかりことを帷帳のうちにめくらして。かつことを千里のほかに得たり。吾子房にしかしと也。

玉章のあとをかたみに殘しても人のこゝろにまけんものかは

簾

曉風清竹殿。　洛陽に竹の殿あり。詩云。漢宮の竹殿といへり。

竹の屋のみとりの窓を吹風の曉近く夜は成にけり

戸外水精簾。　漢宮に水精のすたれあり。

玉の戸に玉のしつくをかけなかす光はみつの光成けり

屏

屏風也。　王莽雲母の屏風をつくれり。

錦巾雲母列。　後漢の大尉鄭弘第伍倫をすゝめ申て司空となせり。まつりことにいつることに。第伍倫鄭弘なみて朝服。ゆゑにみかと雲母の屏風をたてゝ。其座をへたてたまへり。又異録云。景帝の時紀隣中書令たり。文英尚書令たり。朝のまつりことのにはに雲母の屏風をたてゝ。父子の座をへたてらると云り。

うとからぬ袖なしもこそ隔てけれとよのみそきのなみの諸人

山水含春動。　屏風のゑには山水をかけり。山には花のうゑ木あり。春過れともちることとなし。水には浪の色をあらはせり。冬くれともこほらす。このゆゑに屏風の山水の繪いつも春のいろをふくめりと云り。

花の色も浪のみとりの春の色もかき流してそみるへかりける

被

孔懐欣共寝。　後漢の姜肱仲海季江あにおとゝ三人。おなし心に孝心深かりけり。家まとしく衣薄かりけれは。霜ふり風さゆる冬の夜には。母子ともをみてうれへけり。三人ひとつふすまにふして。母の心をなんやすめけり。

たへていかゝよをとほしけん旅人のおなし衣の關の嵐に

蘭交桀北堂。　昔孟軻いとけなくして。北堂の學士にましはりて文をこのめり。母十二幅のふすまをとゝのへて。孟軻におくりていはく。もろ〳〵のまとしき家の子とも。衣さためて薄かるらん。此廣きふすまをもちて。諸の人〳〵とあつまりふして。あまたの言行をきゝまなふへしと云り。

うときをもらさゝりける心哉子をおもふ袖の廣きあまりに

鏡

含濤朗魏臺。　魏文帝の殿の前におほきなる鏡あり。にはとりかたちをうつしてまふと云り。又云。たかさ五尺ひろさ三尺の鏡あり。人これにむかへは。心腑あらはれてかくるゝ所なしといへり。又云。秦始皇の時照膽鏡あり。方四尺九寸。五臟をてらすといへり。

あきらけきみよの鏡の今もあらは人の心のくまはみてまし

方知樂彥輔。自有鑒人才。　衛灌か云。樂廣若水鏡。見之瑩然。若披霧而見青天。

くらきよりくらきにまよふ道にても人こそ人の鏡之けれ

扇

花輕不滿面。　扇名か九花といふ。白綺。雀羽。雉尾。蒲葵。同心。合歡とも云り。九花の扇とは交扇也。

身にそふる花のあふきの風もなほ夏の心のちらはこそあらめ

逐暑含風轉。　漢成帝妾班婕妤詠扇云。

新裂齊紈素。鮮潔如霜雪。裁爲合歡扇。團々似明月。
出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼風奪炎熱。

弃捐篋笥中。　恩情中道絕。
夏の日は扇の風もうき草のしけみかすゑとひとつにや吹
燭
浮香迎綺茵。　秋の夜しとねのほとりに蘭燈をかゝくといへり。蘭草をあふらに和して。そのかをとる也。又云。蘭草のしるを煎して。そのあふらのともしひをかゝくるに。光のいたる所かうはしと云り。
藤はかま露にかゝくるともし火の光そ秋の匂ひそへける
若逢燕相國。特用擧賢人。　郢人燕の相に書をおくれるとあり。ともし火を擧すれは高明也。賢を擧すれは國をさまるといへり。
淺からぬ心のそこのともし火をかゝけぬほとは人のしるかは
酒
臨風竹葉滿。湛月桂香浮。　竹葉の酒宜城より出たり。又桂の酒あり。さけの中にかつらを入て。そのかをとれり。月のなかにかつらあり。又風のまへ月のもとに古賢酒をすゝむといへり。
いかなれは色はさめたる竹の葉の雫にゑはぬ人なかるらん
長陪河朔遊。　袁紹夏のあつきあひた。ひるよる酒をすゝめて一時の暑をさる。この故に河朔有避暑之飲と云り。
盃やすゝしき招たまはゝき手にとるからにゆらく秋風

百詠和歌第九

文物部

經　史　詩　書　賦　檄　紙　筆　硯　墨

經
漢室鴻儒盛。　漢の世に公孫弘匡衡みな鴻儒也。五經の義に通せり。此時始て五人の博士をおかれたり。
なみたてるいつきの花のなを聞はふかきことはの林そけり
五千道德闡。　老子玄元道德經上下二篇。五千五百四十五字そ。
さらは又さとりをひらく道はなし嬉しかりける法の門哉
史
史はことはをたゝしうして載筆。
談諧方亹々。　晉の王濟三月三日洛水のほとりに禊飲す。明る日人そのことを問。王濟答云。昨日張花は史漢を談す。王戎は子房季札かあひたの事を談す。超然として着文。亹々は淸不絕貌也。
みかのはら今朝は思ひそいつみ川あふせの浪のかへる名殘を
方朔初匡漢。　司馬遷史記を作りをはりて。東方朔に見せしむるに。東方朔平定して。其下に大史公といへる署をくはふる所なり。東方朔は姓は金氏。郡東方の里にして。五月一日生たるゆゑに東方朔と名つく。

東方みちのおくまてふみゝれはよゝの昔の跡そきえせぬ

詩

陳王七步才。　魏の文帝陳思王をして。七步に詩をつくるへし。詩なからすはとかあるへしとさためられぬ。卽篇をなへたり。

煑豆燃豆萁。　豆子釜中泣。　本自同根生。　相煎何太急。

庭の面を七あゆみせし跡ことにしけるむくさの色そ程なき

祖德信悠哉。　謝靈運祖德をのふる詩に云。

苕々歷千載。遙々播淸塵。　苕々遙々はともにはるかなる形也。

なき跡をとほさかりぬと歎にしそのよも今日は昔之けり

賦

賦體物以登高。又云。不歌而誦曰賦。又賦物造端。材智深美。可與圖政事也。

布義孫卿子。登高楚屈平。　孫卿をよひ屈原みなよく賦をつくる。たかきにのほりて。よく賦をつくる物を大夫とすへしと云り。

たかねよりなかむるすゑに殘るかははなの匂ひも月の光も

平樂正飛纓。　前漢の牧皐平樂觀賦を作れり。其言は勝てたへなるゆゑに中郞とす。纓綏をかさゝるゆゑに飛纓といへり。

さき草やみつはよつはの深き色は人の心のそむるなけり

書

垂露春花滿。　字に垂露の點あり。又云。久花を筆の端に開と云へり。

いろ〳〵の花のひもとく秋の野の匂にすかる露の玉つさ

諸君看入木。一寸信非虛。　漢の桓帝の時。王平門の板扉に字をかけり。帝則けつり給へりといへとも。一寸木にいる。又云。王義氏之書。入木一寸餘也。

もしの關春のいりける跡みれはきえぬ霞の色そ殘れる

檄

二尺の書也。むかし紙なき時木上にかけり。又挿鳥羽なり

張儀猶璧征。　魏の張儀昔楚の相に隨て飲とき。楚の相璧をうしなひて。張儀かぬすめるかとあやめうたかへりき。後に張儀秦の國につかへて相となりぬ。檄をつくりて楚の相におくる。其こと葉に云。吾從汝飲不盜璧。吾今當盜汝城耳。

むすひおく行衞をたにもしら露の玉ゆらきける濡衣哉

頭風蹔覺愈。陳草未知名。　陳孔障書檄をつくるにたくみなり。孔障檄をつくりて魏武帝にたてまつる。武帝是をよみ給ふに。頭風則いえぬと云り。

眞葛原うらめつらしき言の葉に心のやみの風は晴にき

紙

妙跡蔡侯張。(紙)　後漢の黄門郎蔡倫くちたるいをのあみ
をとりてあみにつくれり。

蜑人の引かへてけるいをのあみはかよふ千鳥の跡みせんとや

莫竊反覆字。當取葛洪規。　葛洪文をこのむといへとも。
家まとしくてかみをえかたかりけれは。たきゝをこりて。
うりて紙筆の價になせり。書を寫す事反に覆(ウラカヘス)。あまりにこ
まかにして讀解人少なし。

心あてに誰かはさてもみくまのや霞みたるゝうらのはまゆふ

筆

含毫山水隅。　文士は山に臨み水に臨みて。思をうこか
して筆をそむといへり。

峯のこする谷の岩瀬の流まて心の筆をそむへかりけり

綺色夢中開。　梁の江淹いとけなき時。夢に人來て五色
の筆を授見て。後文章ありけり。十餘年をへて後に。又夢
の中に我筆は郭璞となんいへるとなのりて。汝に與へし
筆かへせといふに。江淹これをかへしつ。さめて後文章お
とろへ才つきにけり。

たのめしも思かへすとみし夢もおなしかきね・みつくきの跡

硯

躍水小學前。　春正月硯水こほりとくる日。童子はしめ
て入小學なり。又後漢の張芝池にのぞみて字をかくに。字
水にうかへり。また墨池の水硯に似たり。

山水のいはまのつらゝとけしより岸の若草衣をそむゝ

昔苗徒見熱。(爇)誰謝士衡篇。(篇)　昔苗文を好む。このかみ陸
士衡か文章におとれりと。いきとほりて筆硯をやけり。

ふかゝりし色のゆかりにをけしとや思ひ捨けるむらさきの石

墨

上黨結松心。(作)　上黨郡に松の煙をとりて墨につくる。禮
記云。禮在人也。如竹箭有筠。如松柏之有心也。

たれしかも松の煙の行衛までおもひたちけるすみよしのはる

繞畫蠅初落。　孫權屏風の繪をかくに。あやまりて筆を
おとせり。そのあとのすみ蠅に似たり。孫權ははへそと
て。手してはらふといへとも。はへはさることなし。此時
にはしめて墨と知りぬ。

すみた河ちりける浪をみる月のさはへなすかと驚かれつゝ

百詠和歌第十

武物部

劒　刀　箭　弓　弩　旌　旗　戈　鼓　彈

劒

鑄上蓮花劒。　越王區冶子をめして五のつるきをいる。

一の名を純鈎と名つく。案客の云。この鈎芙蓉の生か如しと云り。

つはなぬく野へのたよりにみつる哉池の蓮の咲そむるいろ

匣中霜雪明。　詩云。利劍嚴秋霜。又云。漢の高祖白蛇をきる。劔の上に如霜雪と云り。

明かたに夜は成にけり箱根山霜と雪との隙しらむまて

刀

惟良佩犢旋。　龔遂勃海の太守として農をすゝむるに。劔をうりては牛をかひ。刀をうりては犢をかふ。

ひとゝころ苗代水につなかれてうしやうきなた流しはてける

含毫彩筆前。　古人以簡書用刀削。これを筆削といふ。故に筆刀を云り。

漢武帝柏梁臺詩。御史大夫刀筆之吏臣執之也。江淹かゆゑに五色のふてをえたりしより彩筆と云り。

思ふ事深きいはねをふみなれて筆のかよひ路けつりなさはや

箭

燕城怨解圍。　魯仲連齊の國の人也。奇偉俶儻。書を好みつくれり。田單齊の將として燕を責るに。いまたおとし得す。仲連書檄を矢にゆひつけて城中をいる。燕將是を見てなく事三日にして自殺しぬ。

夕附日入野のすゝきほのめかす露こそ人の涙なりけれ

羿沉九日暉。　堯時十の日出て草木枯ぬ。時に羿をめして射させらるゝに。九の日を射落つ。この日海の中へ燋石となりぬと云り。

なみの上にあやなくおつる日影哉うはの空にも入やと思へは

弓

桃文稱避惡。桑質表初生。　桃の弓棘の矢その実を除と云り。禮云。士始て生るゝ時。くはの弧よもきの矢をして。天地四方を射る。又云。男子生るゝ時。くはの弓を門左にまうくといへり。

みとり子のあたりを拂ふためしには桑の弓をも引へかりけり

徒切烏號思。攀龍遂不成。　黄帝鼎湖に出給へるに。龍來て迎奉る。帝乘給て天に登て仙になれり。群臣七十人龍髯に取付て共にのはりぬ。又帝の弓にとり付てのほらんとする人あり。のほる事を得すして。弓にいたきつきてさけひ落ぬ。この故に烏號と云。又云。烏木の上に侍るに。たはまぬ枝を強と知て。弓につくるを烏號と云り。

弓はりの月をしたひしもろ人の心のやみにしつみはてけり

弩大ゆみなり。

玉彩輝星芒。　玉弩發驚天下と云り。秦の時狂矢あり。にしになかるゝ矢即玉弩星也。兵精として秦につかさとなれり。

梓弓雲井遙にみしはたゝたな引星の光之けり

玄猿坐見傷。　劉芝道を行に。玄猿の子をいたきけるを見て。弩をとりて是を射る。其子母にあたれる矢を拔て。木の葉を拾て。きすに覆ひて、人の如くさけふ。劉芝これをみるに。たちまちにわか心のなさけなき事を思ふに。悲の涙をさへかたし。これより弓矢をすてゝけり。

親を思ふあまたのみちを尋ぬともまさる例は又やなからん

旌

折羽爲旌。

告善樓臺側。求賢闔肆中。　管子曰。舜有告善之旌也。書云。旌別淑武。古人求賢於屠肆之間也。又云。旌自求於市肆也。

しるへする雲のはたての色なくは人の心の月をみましや

影麗天山雪。　祁連山の一つの名を天山と云。山高くして夏冬雪消ることなし。此故に白山とも云り。廣七萬里也。えひす軍に趣ことに。この山のもとを過るに。はたのつらなれる事たゆる事なし。また夕の色にまかへりと云り。はたにとりのつはさつくる事あり。

なみたてるふもとも雪の色なれや峯の梢のしろきのみかは

旗

熊虎鳥之旗也。又旗亭市門表也。

縱横齊八陣。舒卷列三軍。　兵法に八陣あり。方圓衡輪雁行あり。諸葛亮八陣の圖をつくれり。天子は六軍あり。諸侯は三軍あり。萬二千五百人を一軍とすと云り。蛟龍を旌とす。熊虎を旗とす。鳥隼を旟とす。

やはた山ふもともみえすこめつれは霞のうちを人もかよはす

虹輝接曙雪。　色とれるはた虹に似たりと云り。蚩尤かつか東都にあり。たかさ七尺。民十月にこれをまつる。赤き氣たなひけり。民名つけて蚩尤旗と云り。

立のほる煙のあとのなこり哉とよはた雲の曉のいろ

戈

落景駐琱鋋。　魯陽韓とたゝかふに。日すでにくれなんとす。魯陽ほこをひきて搖之（サシマネク）。日返三舍といへり。鋋はほこなり。

花すゝきいかにまねきし影ならんしつむ夕日の立歸るまて

夕償金門側。觴提玉塞前。　つかさ人うちにはほこをとりて。近くきみの門につらなり。ほかにはかてをつゝみ。はこをおひて。遠く西戎をせむと云り。

旅人のかれひもしるし玉鉾の道のをかへの椎の落葉は

鼓

震谷似雷驚。　雷鼓八面あり。天下のつゝみとす。天を圓丘にまつるとき。これをうつと云り。

夕立の雲の名殘のひゝきかと神祭ける空を聞哉

仙鶴排門起。　鶴飛來會稽雷門のつゝみのなかにゐる。つゝみの鳴聲洛陽までに聞ゆ。孫息つゝみをさきてみるに。白鶴飛出て雲の中にいりぬ。其後つゝみならすといへり。

つはさこそ雲に入とも白鶴の聲はかりたにのこらましかは

彈

來此傍垂楊。　狹（俠歟）客珠彈は垂楊のみち也。又金おちてほしの影に似たり。又まろなる事月に似たりと云り。漢の武帝金彈を作たまへり。長安の人苦飢寒逐金丸といへり。

春風の柳かすゑを吹たひに袂におつる露のしらたま

莫欣黄雀至。須憚微軀傷。　楚の襄王晋の國をうたんとす。孫叔敖是をいさめて云。園の楡上の蟬の露をのまんとするあり。うしろに蟷螂のおかさんとするをしらす。蟷螂又蟬をのみまもりて。うしろに黄雀のおかさんとするをしらす。黄雀又蟷螂をのみまもりて。楡下に狹彈て。童子又黄雀をのみまもりて。前に深谷うしろに掘株有ことをしらすして身をあやまてり。是みな前利をのみ思て。後害をかへりみぬゆゑなりと申せり。王此時にさとりをひらきて。晋をせむといふ事をおもひとゝまり給ぬ。

おのか身のきしかたをたに歸みぬまとひはせみの心のみかは

百詠和歌第十一

〔音樂部〕

琴　瑟　琵琶　箏　笛　笙　鐘　簫　歌　舞

琴

伏羲氏作長三尺六寸。三百六十日にかたとる。廣六寸。六合文にかたとれり。上を池と云。下を濱と云。

風前中散至。月下歩兵來。　中散大夫嵆康。歩兵校尉阮籍。山濤。王戎。向秀。劉靈。阮咸。この七賢竹林に隱居て。風の前月の下に琴詩酒の遊ひをもよほして。心をたのしまんと云り。

思へたゝ月も嵐のふかき夜のことのね（に歟）そよく竹の林を

淮海曾爲室。　楊州の淮海に戴安道か琴室あり。又孫登は彼郡人也。孫登琴をひく。當魏末居北山中。以石窟爲宇云々。又丹楊郡の北鐘山の琴室あり。武丘山に琴室有。皆淮海に近しと云り。

松風にかよふ響をうつしきていはやの床のものとなしけり

瑟

素女昔傳名。　黄帝素女に五十絃の瑟をつくらせてしらへをなすに。其聲を聞人悲にたへすなりぬ。此故になか

はをすてゝ。廿五絃になされぬ。

引わけし糸たに悲しいそちまていかに涙にむすほゝれけむ

流水游魚聴。　流水は曲の名也。瓠巴楚人也。瑟をしらふるに。とゝふとりくたり。いをこれにめておとると云り。

山水のいかになかれし音なれは心すみけるなみのいろくつ

琵琶

推手前曰琵。〔石補〕引手却曰琶。

半月分被出。　ひはの腹に穴あり。半月の如し。甲に有遠山之貌。

遠山のいつれのをより出つらんなかはの月の夜半の面影

唯有胡中曲。希君馬上弾。　漢元帝の時。ゑいすの王單于みやこに参りて。をんなを宮中に。御門きさきの中に暖からんをあたへんとして。あまたをみつくし給はんも煩あるゆゑに。畫工に仰て件かほをうつさるゝに。顏みにくき后は畫工に金を與へてまゐなふによりて。筆をかさりていろとれり。このなかに齊國襄王女王明君すかた形ち無類あてなりけれは。我かたちを憑て。まゐなふこゝろなきゆゑに。其中にみにくきすかたにいつはりうつされぬ。元帝締にかける姿の賤きにつきて。ことゝはすゑひすに獻るゝに。勝てかほよき人也けり。あさましく驚き歎給へとも。みかと歸へきにあらされは。つひにたまはせられぬ。ゑひすすてに請取て宮門を出時。明君おやにもわかれ。ともにもはなれつゝ。泣〳〵胡國へ趣かんとす。涙落てたきつせのことし。錦の袖かはくことなし。ゑひす馬にのせて。はたをさして左右にそへり。山高く岩さかしき道に出ぬ。日数つもる儘に。故郷をこふる愁いよ〳〵ねんころなり。馬の上にして琵琶をしらふるに。哀怨の聲みつからもあはれなり。心なきゑひすまて。涙をもよほすと云事なし。もとは王明君と云り。文帝のいみなにかよふゆゑに。あらためて王昭君とす。

こまうへに聲うらみける四のをの心ほそくやとほさかりなん

箏

蒙恬芳軌設。　秦の世に蒙恬はしめて箏を作れり。もとは五絃あり。其形筑の如し。并州沛州このふたつの國人改て瑟のことくなせり。

遊楚清音列。　遊楚音樂を好みてこと心もなし。ゐめつから道行にも。琵琶と箏とを身にはなつことなし。

たけむすふことちはちゝにかはれとも聲の色のみ常磐之けり

とのをにそむる心のふかけれはしはしもいかゝ引はなつへき

笛

羌笛寫龍聲。　馬季長々笛賦云。龍水中になく。おのれをみす。竹をきりて是を吹に音相似たり。

河竹に吹つたへける嵐かなめつらしかりし波の響に

　遥吹梅華落。　笛に梅花の曲折柳の曲あり。

思へたゝ梅ちるさとの春風に吹あはすなる横笛の聲

笙

　形寫調鸞翼。　笙のかたち鸞翼をうつせり。

鳥のねのことにしむよりあはれなりおなし翅のふえと聞とも

　蹌々鳥獸來。　鳥獸も笙のこゑにめてゝ來りまふといへり。又云。笙に悲音あり。鳳のこゑに似たり。又云。張女悲と云り。蹌々舞貎也。

笛の音の聞えぬ里の外ならはなへてとらふすのへとみまほし

鐘

　旣接南隣磬。還隨北里笙。　南隣に浮磬をうつ。北里に笙竽をふく。其音鐘と一つにかよひて。聞人涙をもよほせり。

あはれなる入相のかねにうちそへてとなりの石も響に(き脫歟)けり

　秋至含霜動。　霜くたる時鐘うこく。又云。豐山に鐘あり。霜に隨てなるといへり。

山風のたゝくにも猶つれなくて霜にはたへぬ鐘の音哉

簫

　舜簫をつくり給へり。其形參差して鳳のはねにかたとれり。十管なかさ二尺なり。笙事故不審。

　搜索動猿吟。　玄猿の音を聞て悲嘯搜索。

秋深きみ山の庵の笛の音にましら鳴之曉のそら

　仙人幸見尋。　周の靈王太子晉簫をふく。道士浮丘公しろき鶴になりて飛來て聞く。

ふえの音のうらかなしくや聞えけんかへるそらなき鶴の毛衣

歌

　漢帝臨汾水。　漢の武帝秋のはしめに汾水をすき給ふとて。景氣心をうこかして秋風の歌を作り給へり。

秋風起兮白雲飛。草木黃落鴈南歸。蘭有秀兮菊有芳。携佳人兮不能忘。泛樓船濟汾河。横中流兮揚素波。簫鼓鳴兮發權歌。歡樂極兮哀情多。少壯幾兮奈老何。

秋はてぬ木の葉の色も立田川よをあき風の名をなかしけり

　梁上繞飛塵。　韓娥齊に行時。雍門をすきて。乞食てうたふこゑの響。うつはりをめくること三日。梁の塵動くことやます。雍門の人いまにいたるまてにこれをまなへり。

日ころへて聲やゆるかす成ぬらんのとかにみゆる梁のちり

舞

　佳人滿石城。　吳縣の西十里に峴石山あり。(以下闕)

百詠和歌第十二

資財部

〔一〕（珠）玉　金　銀　錢　錦　羅　綾　素　布

〔端闕〕

其夜帝の夢の内に鯉來りて歡へり。次日池に行幸してみ給ふに。昨日の鯉來て。明月珠をふくみて。池の邊りにおきさりぬ。

知さりき思ひはなちし釣の糸のかへりて玉のをとならんとは

彩逐靈蛇轉。　隨侯傷蛇をみて。藥をもて是を治す。蛇たすかりてさりぬ。蛇のくちに玉を含て來てむくゆ。隨侯此玉を得て後とみさかへり。

なつさひし軒のあやめにおもひきや袖の玉水かゝるへしとは

玉

映廉先過魏。　魏に田夫有。田をすきて一尺の玉を得たり。玉と云事を知すして。隣人にみせければ。怪石也。是をたくはへはよのかるへからすと云。田夫等閑に持て歸て家に置り。其後家の内光耀けり。田夫あやしみ驚て野に捨つ。となり人行てぬすみて魏王に奉るに。此玉をみて又なき財之として。大きに悦て先千金を給ひ。つきに五城をたまはせらる。

悔しくそおもひすてける玉椿さらては人にをられましかは

連城欲向秦。　趙文王和氏璧を財とせり。秦の昭王この玉をいかて得てしかなと思て。つかひをつかはして。十五城をわかちて玉にかへんと聞ゆ。趙王おほきに歎き驚けり。藺相如つかひとして玉持て秦に行。昭王うけとりてかへさんともせす。相如はかり事をめくらして。潔齋の人にあらされは。この玉を取事なしと云て。玉を乞取て後に。遙にいかれる色をなして。はしらをにらみて。玉をうちわらんとす。此時に秦王ゆるしてかへされぬ。

おもはすなかりの使の玉章のまたふる郷にかへるへしとは

金

南楚標前貢。　禹の時荊州に始て貢金有。

あきらけき御代のためとや咲そめしみちのくに山の花の光は

西秦識舊城。　漢の高祖秦にうつる。張良かいはく。金城千里なりといへり。又云。秦城に四塞のかためあり。是を金城と云り。

今そしる花の都のふるきなを關より西の秋の色とは

銀

恩繞屛幃掩。遙人燭影長。　なんな銀屛の内にあり。又人銀燭をかゝけてあかすと云り。

なかき夜の光とゝもにしらみゆく閨に消せぬ秋のともしび

玉臺初下箭。　穆天子傳云。披圖視天下之寶器。有銀燭。漏箭以玉爲臺。以銀爲箭也。

あまの河ひま行ときのはやきせも玉の雫のもらぬにそしろ

錢

漢日五銖錢。　漢の文帝の時。元狩元年三官始て鑄五銖錢。王莽か時五銖を留て一銖の小錢をいる。

なつ衣うすき色にそかへてけるいつへかさねし花の袂を

金門應入論。　東方朔待詔金馬門。謂帝曰。侏儒長三尺。日捧一囊粟錢二百卌。臣長九尺。赤一囊粟。侏儒飽欲死也。

身にあまる民の心もあるものをいふにたらぬは我よそけり

錦

漢使巾車促(遊)。　漢の宣帝の時。錦して車をかさりて。女をおくりむかへ給ふといへり。

幾度かゆきかへりけるを車のにしきのひものとくるよな〳〵

色美廻文妾。　秦州の刺史竇泊任をさる時。妻蘇氏名殘を惜む。をとこ竇泊ふかくたのむよしして。又こと心あらしといひ契てわかれぬ。都に返てのちいつしか妻をまうけてけり。蘇氏うらみて錦文の詩をゝりて。をとこにおくれり。

かれはてし人をうらしとや立田姫萩のにしきの色に出ける

羅

雲薄衣初卷。　薄雲の文は羅衣に似たり。

朝ほらけ雲の衣をおるものはしつはた山の嵐なりけり

蟬飛翼轉輕。　羅衣飄蟬翼といへり。せみのはね輕くうすくして羅衣に似たり。蟬翼羅となり。

みやま木の枝もゆるかす照す日はなほおもけなる蟬のは衣

綾

落花遙寫霧。　洛神賦云。曳霧綃之輕裾といへり。

いと櫻ちりくる色をたよりにてなみのあやおる池の春哉

飛鶴近圖雲。　雲に鶴のあやの文あり。一雙からちに。むら雲にとひかふつはさをおりなせり。

めもあやにたれかみさらん村雲に鶴とひわたる夕くれの空

素しろきいと也。

魚腸遠方至。　古詩云。客從遠方來。遺我雙鯉魚。呼兒烹鯉魚。中有尺素書。此詩の心は人ふたつのこいをおくれり。なかに一尺の素書ありと也。

府瑞圖云。周武王伐紂渡孟津。白魚躍入王舟。王俯取魚。長三尺。赤文有字。天告伐紂之意也云々。

同圖云。呂望釣于渭渚。得魚封腹得書云々。

列仙傳云。呂尙釣于磻溪。三年不獲。果得大鯉。又得兵鈐於(腹中)魚腸中云々。

かきつめし跡をみましやもしほ草釣する蜑の便ならすは

砧杵調風響。　謝惠連か擣衣詩云。搗高砧響發。楹長杵聲哀。天寶文苑集擣衣詩云。杵調風裏韻。練守月前輝。此詩

のこゝろはしろき練物の衣は月のいろにまかひ。きぬたつちの響は風にたくひて聞ゆと云り。又漢河女素牛を洗とも云り。

いく里の人のね覺と成ぬらんあらしの空に衣うつなり

布

浣火有炎光。　南方に火の山あり。わたり四十里。ひるよる火あり。風雨にもきえす。火のなかに獸あり。形ねずみのことし。重百斤。毛の長三尺。其毛をとりて布におりなせり。色雪に似たり。そのけかるゝ時は。火にやけはきよくなると云り。其布の名をは火浣布と云り。

雪しろきふしの高嶺やいにしへのけふりの底にさらしける色

孫積登三相。　公孫弘始は御史大夫たり。世につかふるにおこりを好ます。身を暖くして布被をきたり。後に漢の丞相にうつりぬ。つゐに東閣ひらきて賢人を招き集き。後に平津侯とす。丞相の封侯是よりはしまれり。

水上やたかねにのほる旅人の袖しろたへの布引の瀧

城門郎者多年之弟子也。拾螢聚雪之處々。久守函杖之禮儀。嘲風嘯月之時々。先存翰草之故實。爰李瀚蒙求。李嶠百廿詠。白居易新樂府等之中。抽其義幽玄其說表的之句々。以假字書其詞。以和語詠其事。歌僅數百首。卷及數十軸。斯中於樂府者。重呈愚詩。所謂和詩也。余依閑之暇披閲之處。目不暫捨。心多所感。詩擇吟詠。飜者不能。仍雖頑愚寡之才。聊寄和漢之什矣。

翰林老主孝範

百詠蒙求新樂府。　採其義旨述歌詞。
歌詞一々兼花實。　還咲元和天寶詩。

から國の八重のしほちの朝霧にくまなくはらふ敷嶋の風

倭久仰翰林之綵詞。得嗜文苑之苦學。每呈短詞。必加高覽。依預取捨令散傳家。然間云關東之昔。云洛陽之今。爲教幼稚之兒童。抄出兩三之書帙。所謂撰家求之中叙十四卷。紬百詠之句連十二卷。述樂府之章分五箇卷。各和其詞。抽々綴其詠是也。或詩變歌。可藏可秘。爲決是非。偸伺賢慮之間。忽授周詩被副和歌。詳見之處自愛難休。仍敢抑本頽。猥表中情矣。

城門郎源光行

李瀚李嶠居易作。　爲人爲物顯好詞。（詩イ）
愁摸漢語成倭字。　忝感雨篇歌與詩。

唐國やしほちの霧の深ければあらはれやらぬわかの浦風

續群書類從卷第四百七

和歌部四十二

規子内親王家歌合 天祿三年八月廿八日於野宮行此事有順判詞并和歌號女四宮歌合

題

薄　女郎花　萩　蘭
芸　紫苑　荻　瞿麥
苅萱　虫聲

歌人

左
侍從　帥君　兵衛君
辨公　左衞門君　日向君
佐御許　小茂木　新入
右
但馬君

源輔正　同有忠　望城
守延　藤諸風文　大中臣安緣
藤原高忠　藤原忠延　橘正通
源爲憲
判者
源順

薄

左　侍從御許
花もみなひもとく野へのしの薄いかなる露かむすひをきけん
右　源輔正
秋風になひくゆふへの花薄ほのかにまねくたちとまりなん
この薄の歌。すけまさかなひくまねくといへる所。おなし

やうなれは。へたてたる心ちす。いましはしそおもひあはせまし。

こなたしもなひきおとるは花薄たまゝく葛のまくるなるへし　源　順

女郎花

左　師　公

たまのをゝみなへし人の絶さらはぬくへきものを秋のしら露

右　源有忠朝臣

くらふ山ふもとの野への女郎花露のしたよりうつしつるかな

此女郎花の歌。有忠朝臣のさか野をうちすきて。くらふ山までもとめありきけんもあいなし。又やまとことにいひにくきとをこそそへてはよめとて。持にさたむ。

わきもこか女郎花てふあたらなを玉のをにやは結ひこむへき

萩

左　兵衛君

さを鹿のすたくふもとのした萩は露けきとのかたへもある哉

右　望　城

萩のえにをくしら露のつもりせは花のかゝみは思はさらまし

この萩の歌。すたくふもとのしたはきなといへるわたり。いひなれたるさまなり。又もちきの朝臣。はきのえにをく白露なといへるわたり。めつらしきことにはあられと歌めきたり。

露をうすみ下葉もまたきもみちぬはあかくもみへす勝負の程とて持。

蘭

左　辨　君

くれかたの秋をゝ〔ま歟〕しらになく鹿の泪をさへやとゝおかぬらん

右　伊賀守延明臣

あたし野の草むらにのみましりつる匂ひは今や人にしられん

この歌。もりのふのあそむ。あたしの。ここになたかき野ならねは。匂ふといへるにつけて。

おほつかなあたしのみれは花もなし空に匂ふといふや何そも

辨の歌となることなけれと。そへところのすくなきに。いまひともしをくはへて。しらにといへるところ。すこしまされり。

芸

左　左衛門君

とこなつの露うちはらふたひとに草のかうつるわかたもと哉

右　源為憲

野へことに花をしおれはくさ〳〵のかうつる袖そ〔ま歟〕露けかりける

此くさのかうつる歌。うたさまさゑえんすこしやはらかにいはれてはへるめり。されとかみのくさはもとのくさ

なから。しものからうのみそへたれ（な歟）は。人にかくれむひとの
みかくれて。おもてはあらはあらん心ちなむしける。
ちくさのからうつる袂もありけるをなと朝貌をかくさゝりけん

紫苑

左　日向君

高砂の山のを鹿はとしを經ておなしおにこそたちならしけれ

右　藤諸文

しら雲のかゝりしをにも秋霧のたてはや山は空にみゆらん

このしをにの歌。これもかれもおなしさまなり。但もろふみかたてはや山は空にみゆらんといへるにつけて。川霧のふもとをこめて立ぬれは空にそ秋の山は見へけるといふ。ふるきことをおもひあはすれは。にせとりになん見へける。
蘆ともみねともわかす河霧のたちなはなにか空にみゆへき

荻

左　佐御許

おきのはのすゑこす風の音よりも秋のふけ行ほとはしるらし

右　淡路大掾大中臣安兼

そよとなる秋のおき原なかりせは何につけてか風をしらまし

此おきの歌。みつからも見たまへ。人してもよみあけさせはへりなん。
荻のはをそよかす風の音たかみ末こすかたはすこしまされり

瞿麥

左　小茂木

山かつのかきほのほかにあさ夕の露にうつるなてしこの花

右　藤原高忠

あきふかく色うつりゆく野へなから猶常夏にみゆるなてしこ

此なてしこの歌。いつれも／＼よし（ゝ歟）いひてはへり。

刈萱

左　よは人

秋もなをとこなつかしき花の色に疑ひをける露そはかなき

右　藤原忠延

行秋の風にみたるゝかるかやはしめゆふ露もとまらさりけり

移しうへはつかのまもなくかる萱のみちよの數もかそふ許そ
このかるかやの歌。忠延かみちよのかすもといへるわたり。秋の野のかるかやにはあらて。春の山にさきけんもゝのはななんおもひいてられける。

虫聲

左　但馬

とのはゝこはくみゆれとすまひ草露にはうつる物にそ有ける

右　加賀掾橘正

あさちふの露吹むすふこからしにみたれてもなく虫の聲かな

秋風に露をなみたとなくむしのおもふ心をたれもとはまし

此虫の歌。吹むすふこからしになといへるわたり。いひなれたりなとさたむる程に。まさみちか申すやう。こからしとは冬の風をこそいへ。この比の風をいはゝ。あめをも時雨とやいふへからんと申すをきゝて。みすのうちにこれかれかゝるとはふることをこそためしにはせめ。

こからしの秋の初風吹ぬなりなとか雲井にかりの聲せぬ

わか門のわさたの稲もからなくにまたき吹ぬるこからしの風

なといへるは。冬の嵐を秋のはつかせといへるにやあらん。そのわたりをさため申されよかしなとあるにつけて。

なく虫のなみたをなせる露よりもつゆ吹むすふ風はまされり

抑順昔なしつほにならのみやこのふる歌よみときえらひたてまつりし時。すこしくれたけのよこもりて。ゆくすゑをたのむおりふしもはへりき。いまはくさのいほりに。なにはのうみのあしのけにのみ。なやみわつらひこもりつれは。すへてわれふねのひく人もなきさに。すてをかれたらん心ちなんせられけり。しかあるうちにも。此としころは。

しらけゆくかみには霜やおきな草ことのはもみなかれはてに鳬

かくはへれは。この歌とものかちまけ定まうせるさま。いとことやうなり。猶おまへにて定させたまはむやよからんとまうすをきゝて。まさみちかいふやう。

霜枯のおきな草とはなのれともをみなへしには猶なびきけり

けふの判をみれはなといひたはふれて。まかり出なんとする程に。みすのうちをきけは。兵衞のすけたち花のなかきといふ人のむすめ。これかれなとさふらひて。夜のふけゆくまゝに。おもしろさまさる。とのねをしらへあはせたり。おまへの庭をみわたせみは。月かけのおほろなるに。はなのいろ〳〵うち見えわたり。風のをともよさむに成行に。むしのこゑ〳〵なきあはせたり。かゝるとゝもなきゝしのひ。みすてゝはまかてなむやとて。さらにはきの下露にころもてのぬるゝをしらすおりゐて。おほみきたふ也ときこしめして。おさめ殿よりみやのくら人ところのさうしきふちはらのたかたゝして。おほむくたものゝおろしみつしところより。なかとの櫃のかみあまたゝのあそむして。さかなにたふへき物ともを。いろ〳〵さま〳〵にたまへり。これにこれかれたへあきて申すやう。ことよひまたあかぬ物は。おまへのはなのいろと虫のねとなんありけるなと申して。やうやうまかてぬ。ためのり一人よるあくるまてさふらひて。きのふよりけふまてのことを書しるして奉りおく。天祿といふとしはしまりてみとせ。秋のなかはなる月のしものとうかにいまふつかをきてのとな

りとなむ。これはみやよりのちにありけるかへし。この歌しかまのいはの歌。女房かちそめたるもしろく。とにまけなりぬ。おとこかたはしめのたままくすのよりはしめて。くちをしとおもへと。そのよはたゝとのはにかちまくと定て。たかのふのあそむの申やう。こよひはたへゐひて。いとゝ物おほへはへらねは。ひかとも申てはへらん。のとかにかきしろしてまいらせんとてまかてぬれは。いつしかとたれ〳〵もおもふに。いとゝこの歌ともをいとゝくはしくいひたてまつりたるをみるに。なひきをとりたるすゝきはほにいてゝ。うちかたふきて。おもひむすひこめられたるをみなへしは。とけすいふせき心ちす。あしくも見えぬ萩は。くさかれたるをしろ人なかりけりとなけく。あらはなりといはれたるあさか ほは。きりのまかきにはひかくれぬへき心ちして。ときのまにおもひしのひぬへし。秋霧のたちわたりたるしをには。おほつかなき心ちしてそらめのせらる。をとにくけなるおきのはゝくたけて。おもふはかなしともとかれたる〔つり歟〕となつの露は。きえかへりむすほゝれて。露にうてたるかるかやは。たふれふしておもひみたる。露をなみたとおとしたる虫は。こからしをもときし程に聲よはく成ぬ。かくて人してさためられたる人々は。これもかれもまさらぬとをおもひ。すへてあけかたき秋のよなさゝかにのともれす。秋霧のたつとゐると。はれぬ心ちして。みつとりのしたやすからす。あしかものなをおしくおもひつゝも。ひとりむれゐて。かゝるなけきのこりすまに。いひあつめたるとゝもにあふらはれぬへし。おのゝえくたしてやみなんとおもひけるも。かきあつめたりけら〔る歟〕。しきのはねよりおとしたるすゝきのたうりのかへし。まけをとこ。

てもたゆく結はんよりも花薄玉まく葛はうろ〔う歟左〕さきものを

をみなへしたはりのかへし　ちの女房

しら露をつらぬく玉の女郎花うちとけてやはなをもきかせん

はきのかへし　七〔お〕いをとこ

下葉こそ露ふかゝらぬ色ならめしたにさすえはあかく成なん

女

白露の花のかたみにとまらすは数をたにこそおかまれ〔に歟〕しけれ

らにのかへし　まけをとこ

はなゝしといたる人なきあたしのはあたし心を思ひやらなん

くさのからのかへし

朝かほもかくれぬものを秋霧のゆたかにたゝぬたもと成けり

おきのかへし　まけ人

白雲のやへたつ山の嶺たにもわきて見えぬる物にやはあらぬ

なてしこのかへし　まけ人

常夏のいろもる露をおきなからしたにうつろふ花はなしやは

かるかやのかへし　おとこ

しめゆはて露か上にも女郎花たふるゝかたになひきやはせぬ

虫のねのかへし

あさちふに風をあらしと鳴虫のなみたもろなる露やをくらん

おきなくさのかへしはかちたる女房なんしける。それはからすわすれかたかりし。いにしへのしつのをたまきくりかへさまほしくなん。なよたけのゆくすゑはいまにてもたのもしけなりけめるを。なにはのあしのけなみによくうたせたまはゝ。なこりもなくたちゐはしたまひなむ。なきさの舟はつなてひかすとも。風まつ程はなにかはいそきたまはむ。ひく人なしとはいかゝ。みさまにひろひをきしかひもありなんものを。おきなくささは。

草のなはわかくもあかす閑ゆれとまた老さきの有そあやしき

年ふかみなをしもおくにかれせぬは君かとはのこまつ成けり

おとこかたおきなくさのかへし

我方はうらみつへしなおきな草まくる草にしなせりと思へは

なとあまたあり。八月晦日にそありける。

故小野宮右衛門督齊敏君達歌合

天元四年四月廿六日

題　なそ／＼語

歌人

天元四年〔四月歟〕廿六日。小野宮故右衛門督のきむたちのわたりよりいてきたりける。なそ／＼かたりあわせ。左はあをやきのうすやう一かさねにかきて。松の枝に付てかくなんありける。

わかをはえもいはしろのむすひ松千年をへても誰かとくへき

右は紫のうすやう一かさねにかきて。あふちの花に付たり。

おくて稲の今はさ苗と生たちてまくてふ種もあらしとそ思ふ

かくてえとかぬをは。おのか方々にとかせて。かちまけを定むるに。人の心いつれも／＼おなしやうなりけれは。いとようときつゝ。持にてあはせ／＼たるほとに。あるかたかにかしこくもあらぬことにおもひあなつりたるにやありけん。えたしかにときやらす。右かたに數ひとつさゝれてまけぬ。

左　なそ／＼このころふるめかしきかするもの

〔花たち花か〕いそのかみふるめかしきかするものは花橘のにほひなるへし

右　あつまのかたにひらけたるもの

〔うの花か〕東路のしつのかきねの卯花をあやたくなにとゝふそはかなき

左右そのとゝはおもひえなから。とのはしめにかつまく

といはしとにやありけん。かたみにしられすとてとかす成ぬ。持に定ておのかかた〳〵とく。左は昔のことのわすれかたけれは。花たちはなにやあらん。右は山かつのかきねなるうの花にやとて。持に定つ。

左　なそ〳〵なのり人たのめなるもの

頼めつゝなつくよもなしほとゝきす語ふとのあらは社あらめ（はと、きすか）

右　なそ〳〵うつくしかりし物又れ所のあつさ

うつくしと思ひにしかはなてしこの花はいつれの秋かゝる覽（なてしこか）

左のとくやう。うつくしかりし物は。おひたちて後はうとましけれと。おさなかりし程おもへは。なてしこかといふ。右方おもひはえたりけれと。つれに持ならんもむつかしとにやありけん。えしらすといひて。なにそとゝへは。このころ聲おしまぬ郭公といひてやみぬ。

左　なそ〳〵をりものゝさま〳〵

をりものゝあやめもしらぬ菖蒲草澤への浪やたちてきすらん（あやめくさか）

右　なそ〳〵おいてむまれたる物（又てやくむみのあいし）

むは玉の髪はしらけて恥かしくいちにてむめるこをそ悲しふ（いちこか）

右のいふやう。をりもの丶さま〳〵は。もし月たらはしるしらぬにひかるゝあやめくさかといふ。左。おいてむまれたるものは。もししらかおいて むめるこ にやあらんなといひて。いちこかといふ。持。

左　なそ〳〵いねのおいたるかゐつもの

秋またぬ稲かと見しはなよ竹の下葉にねさすこにこそ有けれ（たかうなか）

右　なそ〳〵なつむしのうらみ

なつむしのよはのうらみに久堅の月のかつらにうとき成けり（かつらか）

左いふやう。よろつよふれとも。ゝみちせぬ月のかつらゝ有いふやう。おいのよわいろかはらぬたけのたかうな。

左　なそ〳〵おやをわすれぬ

さほ山のはゝその野原なかりせは親をしのはぬ人もあらまし（はゝそか）

右　なそ〳〵ちとせまておとつれぬ

今こむといひしはかりを命にて松のこすゑといふそはかなき（まつのこすゑか）

右のいふやう。おやをわすれぬは。こたかきさほの山人のはゝそなりといふ。左はさま〳〵におもひえたれとも。いつれならんとおもふ程に。久しく成ぬとて。まけぬと定つれと。左のいふやう。よしさらはなにそとゝへは。ちきりし人をまつのこすゑといふにやあらんとて。

左　何々わたのはらのこひち

あさりせしうらを見しかは渡海の礒のはまくり色こかりしを（はまくりか）

右　何々としのうちに時をうしなふもの

ひとゝふせになつなしとたに思ひせはたこか袂はくみてまし（なつなしか）

左のいふやう。としのうちにときをうしなふ物とあるは。あつくるしき程なれは。くたものはなつなしとおもふに

やあらん。右のいふやう。わたのはらのこひちには。はまくりなといひて。これもかれも心ゆきていとをかし。持に定つ。

左　なそ〳〵おとゝひよりうそふきのかたにいとはるゝもの

千早振神のよりますまたならてけふみかはちのおそろしき哉

右　なそ〳〵はきものならへたるものにいのりのし

はき物を二つ並へてつとめこしくつ〳〵ほうしいつち成らん

左のいふやう。はきものならへたるいのりのしは。夏のすゑ秋のはしめに聲するくつ〳〵ほうしか。右のさなりとうけひきて。左のことはをえ心よくときやらす。かゝれは左はみかはちなりけりとてかちぬ。

左　なそ〳〵おほそらにつはものゝきたる

弓張のかたとの月を山のはにそらつはものゝいるかとそみる

右　なそ〳〵あとならぬたきもの

あとならてたく物やなき闇の内にかほりつきせぬ枕ならても〔は無〕

左いふやう。あとならぬたきものは。もしわきもこかよとこにちかみたちわたる。ちんのまくらか。右いふやう。わかせこかたひねのやとになかむらんゆみはりの月といひて。持になりぬ。

〔右故小野宮右衛門督家歌合以正編卷第二百廿六所收本加校合畢〕

男女房歌合 永延二年七月廿七日 蓋同朝臣家歌合

一條院御時也。おとこ女の歌合は天德の例によりてなり。

題

暮花色　曉虫聲　松下聞風　水邊待月

歌人

左

小持君　爲親朝臣　茂賢　行願

右

加賀守友範　侍從　衞門君　右近君

男女房のうたよみおの〳〵はけみて題をいたしてよめる。

暮花色

左　小持君

露おきてあすもみるへき色なれとくれゆくをしき本の色かな（けふもあるかなとも）

右勝　加賀守友範

ほのかなるをかはわかれと花の色のきりたちまさる秋の夕暮

曉虫聲

左　爲親

秋の夜のあか月かけてなくむしは草の宿りもつゆけかりけり

右勝　侍従

聲絶えすあけゆく空になく虫は秋のねさめのかすをしるらん

松下聞風

左　茂賢

松の葉に秋ふく風のおときけはくもらぬあめに袖そぬれける

右勝　衛門君

昔よりならふともなきことのねをひけはたかはぬ松のうは風

水邊待月

左　行顯

おとは山流れていつる水の面にかくれてみえぬ月をしそまつ

右　右近君

浪のうへにはなの色をはをかなめて水は曇らぬ月をこそまて

越中守頼家朝臣家歌合天喜元年八月

〔右舊本闕〕

内裏歌合右方後番承暦二年四月晦日（イ廿八日）

題

子日　霞　鶯　櫻　藤花

菖蒲　五月雨　郭公　七夕　月

鹿　紅葉　雪　祝　戀

歌人

保實朝臣美作君作　匡房朝臣

通俊朝臣　伊家

顯綱朝臣　通輔通家作

公實朝臣　爲家朝臣淨作

公定朝臣　季實紀伊君作

一番　子日

左　皇后宮美作君代匡房朝臣

ふたはなる子日のこ松引うゑてはなさくよをは君そみるへき

右勝　美作守匡房

今日よりはねのひの松もひきかへてやを萬代の春をこそまて

二番　霞

左　右中辨通俊

朝またき山のかすみを見わたせはよをさへこめて立にける哉

右勝

かつらきやたかまの山のあさかすみ春とゝもにも立にける哉

左歌のよをさへこめてたちにけるかなといへるは。あさまたきかすみをみむに。よをこめてたちにけりとはしりかたしとおほせことあるに。通俗〔俊歟〕ふるき歌にはなをよむに。またよをこめてちりにけるかなとよめりとまうすに。

それはこすゑをみるに花のなけれはいはれたり。これにはにすとてまけぬ。

三番　鶯

左持　伊　家

春くれはすたちのをのゝうくひすの聲ならはしに今そ鳴なる

右　顯綱朝臣

はる風にゆきのしたみつうちとけて谷のうくひす今そ鳴なる

此歌ともの姿心おなしやうなりとて持に成ぬ。

四番　櫻

左勝　通　宗通朝臣に書

おしむにはちりもとまらて櫻花あかぬ心そときは成ける

右　匡　房

山櫻おしむにちらぬ物ならは花は春ともかきらさらまし

いつれもおなし心なりとて持に成ぬ。

五番　藤花

左　通　俊

住のえにわかしめをきし藤浪の匂ふさかりに今日はきにけり

右勝　伊　家

藤の花さきそめしより松ならぬ心にかけてみぬおりそなき

左歌は姿うたあきたれともきせる心なし。右歌はふるめきたれとも心ありとてかちぬ。

六番　菖蒲

左持

なかきねを心にかけてあやめ草たつれぬ沼の今日はなきかな

右　公　實

玉えにや今日の菖蒲を引つらんみかける宿のつまにみゆるは

左歌はあやめもみえす。右歌はみかけるやとゝいへる。なにとゝも見えすとて持になりぬ。

七番　五月雨

左勝　通　俊

つれ／＼とふる五月雨は日もくれぬ軒の雫のをとはかりして

右　匡　房

五月雨はたこのもすそやくちぬらん衣ほすへき隙しなけれは

八番　郭公

左　みちとし

あけはまつ人にかたらん郭公よふかくやとをなきてすくれは

右　まさふさ

さつきやみいくよまたれて郭公おとはの山のかるになくとん

九番　七夕

左持　爲家母

たなはたのくもの衣もまれにきて重ねあへすや立かへるらん

右　匡　房

栩機のあひみぬ秋はなけれともとしにや戀のかすまさるらん
左右歌とも心あまりてことはたらすとて。持になりぬ。

十番　月

左　公定朝臣
月影のいたらぬくまはなけれともはるかに雲の上はのとけし

右勝　公實朝臣
曇なきかけをとゝめは山のはにいるとも月をおしまさらまし
左歌は心えられす。あめのしたにてこそあかしくらしもいはめ。雲のうへとしたとをは。いかてかくらへんとてまけぬ。

十一番　鹿

左持　一宮紀伊君（季實妻）
秋風そさむくふくらし妻こふる聲たかさこにをしかなくなり

右　匡房
戀わたるつまならなくに思ひこのこたふる聲をしかや聞らん
右歌は山ひこはなそのこゑにこたふれは。しかはきくそまつなくとといふとあるへしと いふ也。但左歌もよかられはとて持になりぬ。

十二番　紅葉

左勝　通俊
しくれする杜のもみちの色ふかみ秋をこすゑにそめてける哉

右　公實
時雨つゝしたはのこらす紅葉して空さへてらす神なひのもり
右歌はそら（さへ脫歟）てらすといはゝ。うはとこそよむへけれとてまけぬ。

十三番　雪

左持　紀伊君
都たにあとたつはかりふる雪にこしのたかねを思ひこそやれ

右
難波江の芦のはしのきふる雪にこやのしのやも跡たえにけり

十四番　祝

左持　美作君
君かよはくらひの山にとしを經てさかゆく末のはるかなる哉

右　匡房
君かよは行衛もしらぬわたつ海のなは（と歟）しろ水に成かはるまて
右歌は長元の歌合にも山のうみもならんあちきなしと定たり。これも心に似たり。左の歌は心ゆきてもおほえすとて。持に定させたまふ。おなし心なれはとてまけぬ。

十五番　戀

左　伊家
我戀は夢ちにのみそなくさむるつれなき人にあふとみゆれは

右勝　匡房

思ひかねいまは我身そうらめしきなとうき人の戀しかるらん
此歌はみな右方歌也。廿八日の歌合はかりの歌。むけにみくるしきに。かつとさへ定たる。のちのよのそしられ。わかよのはちなりとおほせられて。右のかきりをあはせて御判にせさせたまふ。左ののこり歌もめしてこらんするに。ゆゝしき歌のかきりあれは。それはすてさせたまひてあはせられすとす。

治承二年賀茂社歌合

〔右舊本云本書者已正編卷第二百八十八所收也故從省略焉〕

治承二年八月二種歌合

〔舊本闕〕

續群書類從卷第四百八

和歌部四十三

三百六十番歌合序

夫和歌者吾朝萬代之習俗也。見形外之言。知動内之意。象天法地。至哉玄哉。花匂鳥音自發陰陽之氣。春光秋色時含日月之明。物皆有之。歌亦有之。方今擬五行而次篇。感寒暑來往之應律。乘一年而結番。思朝暮廻轉之移時。左右合歌。慣兩十五番之昔。縮素定數。慕三十六人之風。不判優劣。見者思慮所好各異。何執一偏。抑重代未必得風骨。風骨未必依宏才。宏才未必詠秀歌。々々未必限名人。悉兼之者獨歩古今。不兼之者互有得失。取捨義區。敢勿是非。于時聖暦（正治二年歟）庚申涼秋已酉記之云爾。

三百六十番歌合第一　正治二年

春部

一番

左　御製

いつしかとかすめる空ものとかにてゆく末とをしけさの初春

右　左大臣

みよし野の山もかすみてしら雪のふりにし里に春はきにけり

二番

左　前關白

年くれて春にあけゆく山のはのよこ雲よりそかすみそめける

右　前齋院

なかめやるかすみの末はしら雲のたなびく山の明ほのゝ空

三番

左　天台座主

あさみとり春はかすみにたつた山よはにやとしも鶯こえけん

右　釋阿

春来ぬと空にしるきは春日山みねの朝日のけしきなりけり

四番

左　　　　定家朝臣

久方の雲井けるかにいつる日のけしきもしるき春は来にけり

右　　　　越　前

よろつよをひかりにこめて朝日山のとかにかすむはつ春の空

五番

左　　　　前関白

春たては霞はかりはみとりにてまた雪ふかしみよし野の山

右　　　　隆信朝臣

霞しくけささへさゆるたもとかな雪ふる年や身につもるらん

六番

左　　　　左大臣

空は猶かすみもやらす風さえて雪けにくもる春の夜の月

右　　　　内大臣

花さかてまたいろとらぬ梢こそ春のかすみのしたとなりけれ

七番

左　　　　権大納言

春もなを山かけきゆる谷風に解てはこほる雪のした水

右　　　　家隆朝臣

春風にしたゆく浪のかすみえてのこるともなきうす氷りかな

八番

左　　　　前宮内卿

音羽河岩間のこほり解ぬれはせきいるゝ水に春もみえけり

右　　　　有家朝臣

いつしかとみきはちかつく浪の音に春風しるきしかの明ほの

九番

左　　　　前関白

いつしかもあさみとりなるみそらかなこや名にたてる春の曙

右　　　　寂　蓮

山のはゝ分よるまゝにあらはれて霞をこむる松のむらたち

十番

左　　　　権大納言

山のはもいつくとみえぬおほそらの霞にやとる春の夜の月

右　　　　前中納言

さひしさをなにゝたとへてなかめまし霞にのこる有明の月

十一番

左　　　　有家朝臣

うきねしてあくれはおきつ浪間より雲井に霞むあはのしま山

右　　　　生　蓮

なくさめしをちのなかめもたえにけり霞にこもる深山邊の里

十二番

左　鴨長明
けさみれはおきつ浪まにねをたえて霞にやとる浮嶋かはら
右　寂蓮
ゆふかすみ夕日の影にたつた山春は木末も色かはりけり
十三番
左　權大納言
みよし野の花ともいはしあさほらけまさ(を歟)たつ楢のよこ雲の空
右　天台座主
をしかなく秋の有明のあはれまて霞にこむる春の夜の月
十四番
左　内大臣
春霞たえまを分てなかむれはとをちのこすゑなつなあをしも
右　小侍従
よそにてやかすむとみまし吉野山嶺に庵をむすはさりせは
十五番
左　家隆朝臣
花をのみまつらん人に山さとの雪まの草の春をみせはや
右　丹後
春の夜のおほろ月夜やこれならん霞にくもる有明の空
十六番
左　有家
うちむれてなれぬる人の心をは野への霞もへたてやはせん
右　入道右兵衛督
たちのほるけふりをたにもみるへきに霞にまかふ春の明ほの
十七番
左　三宮
鶯のなみたのこほりうちとけてふるすなからや春をしるらん
右　權大納言
こほりけん涙もけさはうちとけてはつ音をもらせ谷の鶯
十八番
左　定家朝臣
うくひすはなけともいまたふる郷の雪のした草春をやはしる
右　前齋院
あしひきの山のはかすむ明ほのに谷よりいつるとりの一聲
十九番
左　權大納言
朝ほらけ霞にあまるうくひすの聲のにほひは梅のした風
右　天台座主
うくひすの曉かけてなくなへに梅と竹とに春風そふく
二十番
左　左大臣
春の色は花ともいはし霞よりこほれてにほふうくひすのこゑ

右　天台座主

深山邊の雪けの雲を分出て霞にうつる鶯のこゑ

廿一番

左　前關白

梅の花にほはぬほとそまたれける香をとめてくる鶯の聲

右　仁和寺宮

花はなを枝にこもりて鶯の木つたふ聲そ色はありける

廿二番

左　權中納言兼宗

梅のはな咲そむるよりいつしかとまつちる物はにほひ之けり

右　宮內卿

軒ちかき梅のたちえやしるからんおもひの外にきなく鶯

廿三番

左　前關白

梅かゝをほかへや風のさそはまし夜深くあけぬ槇の戸ならは

右　前齋院

梅の花かをのみをくる春の夜はこゝろいく重のかすみ分らん

廿四番

左　家隆

梅花にほひをゝくる春風の色をも袖にうつさましかは

右　小侍從

いつかたの梅のたち枝に風ふれて思はぬ袖にかをとゝむらん

廿五番

左　寂蓮

梅か枝に色をはのこせ吹風もこゝろあれはそ香をさそふらん

右　前齋院

我やとはたちえの梅の咲しよりたれともなしに人そまたるゝ

廿六番

左　御製

梅かゝはなかむる袖にかほりきてたえ〳〵かすむ春の夜の月

右　天台座主

梅かゝをのかにほひになしはてゝ垣ねをつたふ春の山かせ

廿七番

左　有家朝臣

霞ゆくおほろ月夜の有明にほのかにかほる梅の下風

右　定家朝臣

春の夜は月のかつらもにほふらんひかりに梅の色はまかひぬ

廿八番

左　隆信朝臣

秋よりも梅かほるよの月をみん鹿こそなかれ袖に露けし

右　家隆朝臣

梅かえにむかしをとへは春の月こたへぬ影そ袖にうつれる

廿九番

左　内大臣

梅かえに尾羽うちふれてきなけはや聲の色さへ匂ふうくひす

右　家隆朝臣

いく里か月のひかりもかほるらん梅さく山のみねの春風

卅番

左　釋阿

雲井までにほふとならは梅の花やとの木末に春をしらせよ

右　前斎院

なかめつるけふはむかしに成ぬとも軒はの梅は我をわするな

卅一番

左　前斎院

春雨はふるともなくて青柳のいとにつらぬく玉そかすそふ

右　宮内卿

春雨のふるとは空にみえねともさすかにきけは軒の玉水

卅二番

左　權中納言（公繼卿）

今更に花ゆくなにか思ひいてん忘るゝときのあらは社あらめ

右　定家朝臣

みちのへに誰うへをきてふりにけんのこれる柳春はわすれす

卅三番

左　家隆朝臣

吉野山みねのさくらをきてみれは霞は花のふもとなりけり

右　顯昭

おしみかね思ひこりにし我こゝろ又花みれはあこかれにけり

卅四番

左　權大納言

尋きて匂ひに花はしるけれと猶雲ふかしみ吉野のおく

右　雅經

尋きてなかめくらせる木のまより待としもなき山の端の月

卅五番

左　入道左大臣

山里に花いかならんと思ふ夜は夢もうつゝの心なりけり

右　前斎院

花ゆへにけふそふみみるとしあれは心にならすみよしのゝ山

卅六番

左　前斎院

嶺の雲ふもとの雪にうつもれていつれを花とみよしのゝ山

右　丹後

春はまつ四方の山邊にあくかれて花より先にちる心哉

卅七番

左　内大臣

有明の月を木すゑに殘しをきて花よりしらむみよしのゝ山

右　天台座主

嶺は雪かよはぬほとの道ならは雲とや花を思ひはてまし

卌八番

左　權中納言公—

よしの山かよはぬ程の道ならは雲とや花を思ひはてまし

右　家隆朝臣

しら雲のまかふはかりや山櫻花より外のなかめなるらん

卌九番

左　權中納言兼—

しら雲とあたにもいはし山櫻よそにみる名のたちもこそすれ

右　顯昭

白雲にまかふとならは山さくら春にかきらぬ匂ひともかな

四十番

左　左大臣

いつまてか雲をくもともなかめけん櫻たなひくみよしのゝ山

左　釋阿

雲やたつさくらやまかふ山さくら花より外もはなとみゆらん

四十一番

左　左大臣

春はみなおなし櫻と成はてゝ雲こそなけれみよしのゝ山

右　小侍従

咲そめし花やさかりと成ぬらん雲に色そふみよしのゝ山

四十二番

左　左大臣

九重のはなのさかりに成ぬれは雲そくもちのしるし成ける

右　釋阿

よしの山花のさかりやけふならん空さへにほふ嶺のしら雲

四十三番

左　定家朝臣

櫻花霞にかほるはるのよはくもるそ月のひかりなりける

右　小侍従

ちらぬまはいさ木の本に旅ねして花になれにし身とも忍はん

四十四番

左　左大臣

けふこすは庭にや跡はいとはれんとへかし人の花のさかりを

右　定家朝臣

あしひきの山のはとに咲花の匂ひにかすむ春の明ほの

四十五番

左　定家朝臣

櫻花咲にし日よりよしの山空もひとつにかすむ白雲

右　家隆朝臣

春のよの月は雲井にかすめともひかりにかほる花の下風

四十六番

左　　權中納言兼

よしの山嶺たちかくす雲かとて花ゆへはなをうらみつる哉

右　　生蓮

いくさとの人の心をさそふらんはなよりつたふ春の山かせ

四十七番

左　　左大臣

三吉野の花のほかさへはななれや槇たつそまの嶺の白雲

右　　讃岐

さきそめて我よにちらぬ花ならはあかぬ心のはてはみてまし

四十八番

左　　内大臣

月ならぬ花も山路はをくりけり雲井をしのふ旅の空には

右　　越前

杉ならぬ花の木すゑをしるしにて春のやとをも人はとひけり

四十九番

左　　釋阿

いまはわれよしのゝ山の花をこそ宿の物とはみるへかりけれ

右　　生蓮

春きてもとはれさりける山里を花咲なはと何思ひけん

五十番

左　　有家

うき世いてゝたれなかむらん櫻さく吉野のおくの春の明ほの

右　　釋阿

春くれは猶この世こそ忍はるれいつかはかゝる花をみるへき

五十一番

左　　左大臣

初瀬山尾上のかねの明かたに花よりしらむよこ雲の空

右　　仁和寺宮

あさゆふの雲にめなるゝ山人は花をも花とみてやすくらん

五十二番

左　　御製

花ゆへにしかの古郷けふみれはむかしをかけて春風そふく

右　　天台座主

春をよそにうれへて過るやとなれとさくらか枝に秋風そふく

五十三番

左　　覺盛

よし思へたかねの雲も春過は花によそへて誰かしのはん

右　　寂蓮

山ふかく心すむへき庵りかな花ゆへならてかゝらましかは

五十四番

左　　　　　　　　　　雅　経
雪やそれ雲やあらぬとうつりきてまちえたる花に春風ぞ吹
右　　　　　　　　　　丹　後
かすみとけ花ちる嶺の朝ほらけ後にや風のうさもしられん

五十五番
左　　　　　　　　　　前中納言
あたにちる花そ思へはうらめしき常磐の松もあれはあるよに
右　　　　　　　　　　前宮内卿
何ゆへに猶うらむれは吉野山花をはおたにちらすなるらん

五十六番
右　　　　　　　　　　御　製
あたらよのまやのあまりになかむれは櫻にくもる有明の月
右　　　　　　　　　　前関白
櫻さくたかねに風や渡るらん雲たちさはくおはつせの山

五十七番
左　　　　　　　　　　御　製
花にくもる月みよとてやみよしのゝ木するゑをはらふ春の山風
右　　　　　　　　　　天台座主
花ゆへにとひくる人の別まておもへはかなし春の山さと

五十八番
左　　　　　　　　　　隆信朝臣
山櫻ちりなんのちの面影をかはらすみせよ嶺のしら雲
右　　　　　　　　　　雅　経
よしの山行ともみえぬ霞より風になかるゝ花の白雲

五十九番
左　　　　　　　　　　前中納言
たれもみなをしむ心にとまりける花をはえこそ風もちらさね
右　　　　　　　　　　顕　昭
山櫻みにくる人をとゝめをきてちるはかへさをゆるすなりけり

六十番
左　　　　　　　　　　權大納言
み山への木するゑにしつむ雲分て花のなこりを人のとへかし
右　　　　　　　　　　覚　盛
花さそふとも思へはなさけにてうかりし風もなこりにそ成

六十一番
左　　　　　　　　　　祝部允成
あらしふく谷の小川をきてみれは花そむすへる瀧の白糸
右　　　　　　　　　　顕　昭
むかしたれしかの山路をふみそめて人の心を花にみすらん

六十二番
左　　　　　　　　　　前斎院
いまはたゝ風をもいはし吉野川岩こすなみのしからみもかな

右　　讃岐

山高み嶺のあらしにちる花の月にあまぎる明かたの空

六十三番

左　　御製

よしの山木ずゑさびしく成ぬとも猶やすらはん花のあたりは

右　　入道左大臣

さらぬたにものあはれなる明ほのゝ雲井にのこる春のよの月

六十四番

左　　入道右兵衛督

ちるをみてうき世をいとふ花なれはおしむ心もはかなかり鳧

右　　生蓮

わひ人のやとにはうへし櫻花ちれはなけきの數まさりけり

六十五番

左　　御製

わきてこのよしのゝ花のおしきかはなへてそつらき春の山風

右　　權大納言

春の行かたはいつくとしら雲のかすめる空をうちなかめつゝ

六十六番

左　　前宮内卿

はる〳〵と荻のやけはら立ひはり霞のうちに聲あかるゝ

右　　前齋院

夢のうちもうつろふ花に風吹てしつ心なき春のうたゝね

六十七番

左　　正三位季經

雲路にはいつくを夜半のとまりとてくれ行空に歸る鴈かね

右　　定家朝臣

契りをけ玉まくくすに風ふかはうらみもはてし歸る鴈かね

六十八番

左　　權大納言

歸る鴈雲のいくへをかき分てゆく末とをく思ひたつらん

右　　大皇大后宮大夫

またもこん秋をたのむの鴈なれとかへるはをしき春の空哉

六十九番

左　　隆信朝臣

我おしむなけきにそへて思ふかな花にをくるゝ春の心を

右　　前齋院

何となく心ほそきは山のはによこ雲わたる春の明ほの

七十番

左　　左大臣

よしの山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風そふく

右　　仁和寺宮

我もおしむみちになこその關もあり思ひもしらす歸る春かな

七十一番

左　寂蓮

しかのうらやけふ立歸る春風にこほらぬ浪にとをさかるゝ

右　覺盛

くれて行春の日影もとりの音もひとつ雲路に入あひのかね

七十二番

左　御製

あけほのをなにあはれとも思ひけん春くるゝ日のにしの山陰

右　權中納言公

思ふには一よもなをそなかりける鐘よりのちは春のそらかは

三百六十番歌合第二

夏部

一番

左　御製

みわたせはなこりはしはし霞めとも春にはあらぬ空の明ほの

右　左大臣

山のはも霞のころもなれ〳〵てひとよの風にたちわかるゝ

二番

左　御製

くる方へ春のかへらはこのころやあつまに花のさかり成らん

右　天台座主

このころは櫻か枝に雲はれて卯花かきに月をみるかな

三番

左　定家朝臣

をしむにも心なるへき袂さへはるのなこりはとまらさるらん

右　諦盛

けふもまた同し涙をかけつれは袖はかはらぬころもとやみん

四番

左　正三位家隆

夏ころもうすきかひこそなかりけれ袂すゝしき風もふかねは

右　定家朝臣

なつこ立みとりの色にそめかけてうらめつらしき衣手の森

五番

左　内大臣

千早振加茂のみつかき年をへていくよのけふにあふ日成らん

右　小侍從

いかなれはその神山のあふひ草としはふれとも二葉なるらん

六番

左　定家朝臣

日影さす卯花やまのをみ衣たれぬきかけて神まつるらん

右　信盛

わすれては雪と月とにまかへけりうのはな山の明ほのゝ空

七番

左　権大納言

これやこのなきなたつまの里ならん浪のぬれきぬきたる卯花

右　有家朝臣

卯花のかきねほのめくひかりにて待へき月をまたぬ比哉

八番

左　顕昭

しはつ山卯花ふきのかり庵やよとこもさらぬ雪の下ふし

右　寂蓮

袖ぬれぬ雪かとみれは村雨のうの花すくるおのゝほそ道

九番

左　前関白

五月雨にぬれ〳〵ひかん菖蒲草ぬまのいはかき浪もこそこせ

右　定家朝臣

あやめ草なかき契りをねにかけてちよの五月といはふけふ哉

十番

左　寂蓮

あかさりしはるのなこりを郭公わするゝ程の一聲もかな

右　讃岐

あやめふく軒はすゝしき夕かせに山郭公ちかくなく之

十一番

左　御製

郭公くもるこよひのむら雨にまたしき聲やよにふりぬらん

右　前関白

時鳥たれも身にしむ初音哉あきならなくのゆふ暮の空

十二番

左　雅経

我もまたほのかにきゝつ郭公たかまちえたるよはの一こゑ

右　寂蓮

み山いつる雲ちさためよ郭公まつかたをたに心やすめん

十三番

左　御製

ほとゝきすそらかきくもる夏の雨におもはせかほの宵の一聲

右　前関白

たつねつるみちにやちかふ郭公都の方に聲きこゆ之

十四番

左　小侍従

郭公これやたつぬるかひならんたまさか山のよはの一聲

右　権大納言

猶またむなかてもやまし郭公心つくすはとしのみかは

十五番

左　權中納言

いとせめて人の心をつくせとは山ほとゝきすたれかをしへし

右　釋阿

わか心いかにせよとて時鳥雲まの月のかけになくらむ

十六番

左　入道左大臣

おひ（よイ）かみのおもひいてかな郭公まつにほとへぬさよの一聲

右　丹後

ほとゝきすたつねて聞と思ひけりみ山のおくのゆふ暮の聲

十七番

左　御製

ほとゝきす思ひもわかぬ一聲にあけぬるかたはしのゝめの月

右　天台座主

夏のよのかすにもいれし郭公きなかぬさきに明るしのゝめ

十八番

左　權中納言公

わか心しらぬ雲ちにさそへとてまちやはしつる山ほとゝきす

右　讃岐

郭公またすといかてきかれまし我をうらみてなくよありやと

十九番

左　内大臣

郭公聲はゝれまにおとつれてしつくを殘す軒のたちはな

右　前齋院

待〳〵てきくかとすれは郭公こゑもすかたも雲にきえぬる

廿番

左　御製

ほとゝきすまたよひなから明るよの雲のいつくに鳴渡るらん

右　左大臣

うたゝねの夢よりさきに明にけり山ほとゝきす一こゑの空

廿一番

左　有家朝臣

ほとゝきすまたよひなから村雨のはるれは明るそらになくこゑ

右　釋阿

なにとなく涙におつるむら雨のゆふへの雲に鳴郭公

廿二番

左　大皇大后宮大夫

郭公きゝても猶そまたれける心つくすは初音のみかは

右　祝部允成

郭公なゝのやしろにたむけせよ一こゑにてはいかゝすくへき

廿三番

左　定家朝臣

たかためのなくや五月の夕へとて山ほとゝきす猶またるらん

右　天台座主
ほとゝきすをのかさ月のゆふくれを猶いてかてのみねの一聲

廿四番
左　家隆朝臣
郭公まつよかさなる雲ちよりはつねにかへるこそのふる聲
右　前齋院
ほとゝきすよこ雲かすむ山のはのあり明の月に猶そかたらふ

廿五番
左　釋阿
雨そゝく花たちはなに風過て山ほとゝきす雲に鳴之
右　寂蓮
この世をはおもはしとても郭公花たちはなにゆふくれのこゑ

廿六番
左　左大臣
たちはなの花ちる里の庭の雨に山ほとゝきすむかしをそとふ
右　權大納言
五月雨の雲まの月のをりしもあれ身にしむときの鳥の一聲

廿七番
左　寂蓮
郭公なくにつけてや橘にむかしの人もたくひそめけん
右　丹後
梅かえにそめしもをなしはてなれとむかしにかよふ軒の橘

廿八番
左　隆信朝臣
さらぬたにかせなつかしき夏のよのねさめに匂ふ軒のたち花
右　入道右兵衛督
春秋の梅ときくとのうつり香にむかしの人のにほひやはする

廿九番
左　定家朝臣
古郷のはなたちはなになかめしてみぬ行末そはてはかなしき
右　前齋院
かへりこぬむかしを今と忍ひれの夢のまくらに匂ふ橘

卅番
左　左大臣
ゆく末に我そてのかやのころへきてつからうへし軒の橘
右　釋阿
誰か又はなたち花に思ひいてんわれもむかしの人となりなは

卅一番
左　雅經
我そてにむかしはとはんたちはなのはなちる里の五月雨の空
右　前齋院
いにしへを花たちはなにまかすれは軒のしのふに風かよふ之

廿二番

左　権大納言

橘の花ちる軒のしのふ草むかしをかけて露そこほるゝ

右　釋　阿

匂ひくるはなたち花のそてのかになみた露けきうたゝねの夢

廿三番

左　内大臣

五月雨にさなへの跡は水越てもすそもみえす田草ひくしつ

右　家　隆

立のほるけふりも雲と成にけりむろのやしまの五月雨の比

廿四番

左　三　宮

なかむれは庭のさゆりは水越て五月雨ふかき宿の夕暮

右　小侍従

をり立てつむへきなきの葉もみへす田中の井との五月雨の比

廿五番

左　御　製

五月雨にふしみの里は水越て軒にかはつの聲きこゆ之

右　左大臣

五月雨の雲をへたてゝ行月のひかりはもらて軒の玉水

廿六番

左　前關白

さみたれにみなの川岸水越て小篠かはらやいつく成らん

右　釋　阿

降そめていくかになりぬすゝか河八十瀬もしらぬ五月雨の比

廿七番

左　定家朝臣

山里の軒はの木すゑ雲こえてあまりなとちそ五月雨の比

右　寂　蓮

花のはる月の秋たに人とはぬ柴の庵りのさみたれの比

廿八番

左　有　家

遠方やなかめぬみねも雲路にて山こそなけれ五月雨の比

右　家隆朝臣

ふもとよりひとつ雲ちと成にけり山の端もなし五月雨の比 そらイ

廿九番

左　越　前

五月雨はふしみの小田のあせつたひ幾日に成ぬ人もかよはて

右　讃　岐

いそのかみふるのたか橋たかしともみえす成ゆく五月雨の比

四十番

左　前關白

五月雨に水かさやまさるつねよりもはたはりひろし布引の瀧

右　仁和寺宮

五月雨によどの川長舟出してわけしまこもか浪の下草

四十一番

左　生蓮

みわたせは末せきあくるたかせ川ひとつに成ぬ五月雨の比

右　丹後

山姫のいかにせけはか五月雨にくちせさるらん布引の瀧

四十二番

左　前關白

たちよれはいつく暑さのまさりけるおろてにかゝる常夏の露

右　顯昭

夏草のこしまかさきの朝露を分てそきつるはきの花すり

四十三番

左　有家朝臣

夏きてそ野中のいほは哀なる窓とちてけり軒の下草

右　前齋院

都にて雪まはつかにもえいてし草引むすふさよの中山

四十四番

左　前宮内卿

なつふかきをかやかはらの夕すゝみ秋にみたるゝ風の音かな

右　丹後

しらさりしやそせのなみを分過てかたしく物は伊勢の濱荻

四十五番

左　生蓮

夏ころもたもとすゝしく風過て螢みたるゝゆふやみの空

右　前齋院

秋風と鴈にやつくるゆふ暮の雲ちかきまてゆくほたるかな

四十六番

左　隆信朝臣

をとは川せゝのいはなみ玉ちりてもゆる螢もかけそ涼しき

右　定家朝臣

うちなひく河そひ柳ふく風にまつみたるゝは螢なりけり

四十七番

左　内大臣

ゆふ立や山下とよみ行水にひゝきをそふるせみのもろ聲

右　有家朝臣

雲井までひゝきやすらん夏山のみねより高きせみの諸聲

四十八番

左　顯昭

ゆふま山松のは風にうちそへてせみのなくねも滿わたる哉

右　寂蓮

なつふかき杜の木末にかねてより秋をかなしむせみのこゑ哉

四十九番

左　仁和寺宮

しはつ山風ふきすさむ松のはにたえ〳〵のこる日くらしの聲

右　前斎院

せみのこゑまたなつふかきみ山へに秋をこめたる松風そふく

五十番

左　親部允成

何ゆへにむすふいつみの水なれは夏をはよその物となすらん

右　生蓮

槇の戸をたゝく水鷄をそれかともおとろかすまてとはぬ君哉

五十一番

左　隆信朝臣

たそかれにまかひて咲る花の色を遠かた人やとはゝこたへん

右　小侍従

咲にけり遠かた人にとゝひて猶しりそめしゆふかほのはな

五十二番

左　御製

夏の月しはしみるまのあらはこそくもらはくもれ山のはの空

右　釋阿

なつかりのあしのかりねも哀也たまえの月の明かたの空

五十三番

左　御製

夏の月秋にかはらすすめるよはかけさへ涼しせみのはころも

右　天台座主

なつのよの月に涼まぬ人そなきねぬにあくともこれよりそ知

五十四番

左　家隆朝臣

夏のよはならのはそよく風よりも月のかつらに影そすゝしき

右　入道左大臣

夏の日に影さしそへてすゝしきはくるれはいつる山のはの月

五十五番

左　前中納言

ゆふされは秋のすかたをうつしえて月をそむすふ松陰の水

右　宮内卿

雲はるゝ山井の水に影みえてそこよりいつる夏のよの月

五十六番

左　内大臣

なつも猶ゆふまくれこそたゝならね秋にかはらぬ松のした風

右　寂蓮

なつのよのいはもる水にすむ月はそてよりむすふ氷成けり

五十七番

左　家隆朝臣

またよひに一むら過るゆふ立のはるれはやかて有明の空

右　丹後

ゆふ立のなこりの空に雲はれていさよふ月に秋そほのめく

五十八番

左　雅経

おほえ山木陰もとをく成にけりいく野の末のゆふ立の空

右　寂蓮

谷川のなかれをみてもしられけり雲こす嶺の夕立の空

五十九番

左　權大納言

入日さす柴のあみ戸に風もりて枕になつくみねの白雲

右　顯昭

哀にそ立はなれてはみえわたる我すむさとのあまのいさり火

六十番

左　權大納言

うちなひくしけみか下のさゆりひのしられぬ程にかよふ秋風

右　天台座主

夏ふかき嶺の松かえ風こえて月影すゝしあり明の山

六十一番

左　權大納言

松風に夏の日かすを忘れ草すゝしくなひく住吉の岸

右　隆信朝臣

たちよれはゆふ浪すゝし住よしのまつに秋風ふかぬ物ゆへ

六十二番

左　權中納言兼

ゆふまくれ秋のけしきをさきたてゝ袂にかよふ松のした風

右　丹後

すゝしさを松の木陰にさきたてゝまたこぬ秋の夕くれの空

六十三番

左　左大臣

陰ふかき外面のならのゆふすゝみひときかもとに秋風そふく

右　有家朝臣

ゆふすゝみ閨へもいらぬうたゝねの夢を残して明るしのゝめ

六十四番

左　内大臣

いなつまのきえゆく影やゆふつくよ入ぬる空のなこり成らん

右　入道左大臣

をのつから木間もりくる日影こそさすかに夏のしるしえけれ

六十五番

左　内大臣

まくすはらうら吹かへす風の音のやゝさひしきに秋の近きか

右　　顯昭

月のもるゆふくれたけの陰よりそ秋のけしきは先たちにける

六十六番

左　　前宮内卿

過かてに思ふ心そきよみかたなみにしられぬせきと成ける

右　　釋阿

あふさかは關の清水にせかれつゝすきそやられぬ杉のした陰

六十七番

左　　左大臣

たつた川きしの柳の下かけに夏なき浪を風のよすなる

右　　仁和寺宮

石はしる音さへすゝし水無瀨河なみにや夏の立はなるらん

六十八番

左　　左大臣

山陰やいつる清水のさゝ浪に秋をよすなりならのした風

右　　寂蓮

山陰の岩もる水のいつはりを秋きにけりとたのみけるかな

六十九番

左　　前關白

底きよく心の水をすまさすはいかゝさとりのはちすをもみん

右　　覺盛

たくひなき御法の花にたとふれはまことの色にはたす成けり

七十番

左　　定家朝臣

またしらぬ山のあなたに宿しめてうき世隔つる雲かともみん

右　　入道右兵衛督

あし引のあをねか峯の岩のうへにこけをへたてゝかゝる白雲

七十一番

左　　權大納言

山里も雲はみやこにかはらしを雲の色さへあはれなるかな

右　　仁和寺宮

いはねふむ山路は苔にうつもれて雲こそかよへ人はとひこす

七十二番

左　　權大納言

萩はらや秋にかはらぬゆふ風に時しもまたぬ袖の露かな

右　　前齋院

御禊して河邊すゝしき浪のうへにやかて秋たつ心こそすれ

三百六十番歌合第三

秋部

一番

左　　御製

秋やときしくれやをそき三室山そめぬ梢にあらしふくなり

右　仁和寺宮

風わたるをとかはるなり紅葉せぬ松にしもこそ秋はしらるれ

二番

左　權中納言

とのねも秋のこゑにや成ぬらんきのふにかはる嶺の松風

右　前齋院

うたゝねのあさけの袖にかはるなりならすあふきの秋の初風

三番

左　入道右兵衛督

すゝしくもけさふく風を思ひなす心よりこそ秋はたちけれ

右　丹後

野邊にいてゝ風のけしきをみぬ人は音かはるにや秋を知らん

四番

左　權大納言

たなはたの雲の衣に風たちてうらめつらしき星合の空

右　天台座主

たなはたの心やこよひ晴ぬらん雲こそなけれほしあひの空

五番

左　仁和寺宮

たなはたに心をかしてあちきなくあかぬ別のよそにくるしき

右　生蓮

棚機のまちつる程の久しきにはかなく明るよはをかへはや

六番

左　有家朝臣

さらてたにうらみんと思ふわきもこか衣のすそに秋風そふく

右　家隆朝臣

さゝわけし道たにあるを天の川かへるあしたの袖をしそ思ふ

七番

左　御製

おきのはにをく白露のたまゆらもきゝしのふへき秋の風かは

右　左大臣

くらきよの窓うつ雨におとろけは軒はの松に秋風そ吹

八番

左　隆信朝臣

たひ衣やゝはた寒き秋のよに風こそわたれ小野のしのはら

右　仁和寺宮

ゆふされの秋のあはれをさきたてゝ朝風渡るをのゝしのはら

九番

左　定家朝臣

みわたせは花も紅葉もなかりけりうらのとまやの秋のゆふ暮

右　前齋院

夕まくれそこはかとなき空にたゝ哀を秋のみせける物を

十番

左　御製

あさくらやきのまろとのにすむ月の光はなのる心ちこそすれ

右　天台座主

ふけゆかはけふりもあらし塩竈のうらみなはてそ秋のよの月

十一番

左　内大臣

山河の音せさりせは月影をひまなくむすふ氷とやみん

右　仁和寺宮

ちさとまてさえゆく月にとゝはん跡なき雪はをのか光か

十二番

左　前中納言

いつかたへ思ひやらまし秋のよの空にもあまる月のひかりを

右　正三位經

なにとなく心のすむや月影のひるにかはれるしるし成らん

十三番

左　権大納言

月さゆるうらはのみつに風ふけは氷のうへにかくるしらなみ

右　仁和寺宮

面影にすまもあかしもさそひきて心そ月にうらつたひする

十四番

左　前関白

こよひしもなとわかやとをとはさらん月にそみゆる人の心は

右　権大納言（中イ）

月ゆへにおなし空をはなかむともくもれとまては君に思はし

十五番

左　御製

住よしのまつに秋風さよ更てうらよりをちに月そさやけき

右　天台座主

きえはてぬすまのもしほのうす煙月にうれしき秋のうら風

十六番

左　前関白

をしなへて秋はおきゐの里なれや月にまとろむ宿しなけれは

右　定家朝臣

むかしたに猶ふる郷の秋の月しらすひかりのいくめくりとも

十七番

左　隆信朝臣

くまもなく月すむみねにきてみれはちさとは山の麓成けり

右　顕昭

思ひやる心のみちやちかゝらんゆかて千里の月をみるかな

十八番

左　御製
難波かたさやけき秋の月をみてはるのけしきそ忘られにける
右　天台座主
なかめこしこゝろはなの名殘にて月そ春あるみよしのゝ山
十九番
左　前關白
月みれとなくさむかたもなき物をうき世は秋の心なるらん
右　有家朝臣
こやの池の氷にみゆる月影にゐなのさゝはら雪もつもれり
廿番
左　前關白
おほそらにあかぬ心のみちぬれは我身のうちの月かとそみる
右　顯昭
なかむれは思ひやられぬ里そなき月や心のしるへなるらむ
廿一番
左　左大臣
きよみかたはるかに秋の空はれて波より月のさえのほるかな
右　隆信朝臣
さらしなやをはすて山もまたみぬに思ひしらするよはの月哉
廿二番
左　權中納言公
をちこちに思ひ〳〵のふえの音もひとつにすめるよはの月影
右　顯昭
浪かゝるきよみか崎の岩まくらこゝにて月はみるへかりけり
二十三番
左　仁和寺宮
風わたるこすゑに雨のをとはして月のみそもるまつかうら島
右　天台座主
夢かともおとろく程に成にけり雲の衣をかへす月かけ
二十四番
左　法印靜賢
くさ枕月もはかなくやとれとて露のむすふにまかせてそみる
右　丹後
月影をくりむかふと山のはによかれぬものはこゝろ成けり
二十五番
左　御製
うす雲のたゝよふそらの月影はさやけきよりもあはれ成けり
右　左大臣
むら雲のしくれてすくる木すゑより嵐にはるゝ山のはの月
二十六番
左　有家朝臣
松風のをとはくもらぬしくれにて木すゑのそらを分る月かな

右　家隆朝臣
さらしなやをはすて山のたかねよりあらしを分ていつる月影
二十七番
左　御製
柴の戸やさしもさひしきみ山への月ふく風にさをしかの聲
右　天台座主
月影の身にしむをとゝ成ものはひかりを分る嶺の松かせ
二十八番
左　家隆朝臣
月さゆる淺茅かはらをみわたせは雪のうへにも露はをきけり
右　雅經
ひかりもる軒のしのふの露なからそてにみたるゝよはの月影
二十九番
左　前齋院
なかめわひぬ秋よりほかの宿もかな野にも山にも月や澄らむ
右　丹後
秋のよはたつぬるやとに人もなし誰も月にやあくかれぬらん
三十番
左　隆信朝臣
常よりもくまなき月は中〳〵に涙にくもるものにそ有ける
右　寂蓮
月を思ふこゝろのそらは中〳〵に時雨するよのなかめ成けり
三十一番
左　權大納言
こはき分るたもとの露にかけみえて草より移る月のはなすり
右　越前
白露のたままくすはに風さえてうらかなしくもすめる月かな
三十二番
左　隆信朝臣
何事をおもふともなき人たにも月みるたひになかめやはせむ
右　前齋院
なからへはいかゝはすへき秋をへて哀をそふる月の影かた
三十三番
左　有家朝臣
秋きてはくさ葉にのみや露はをく袖にもやとれよはの月かけ
右　入道左大臣
咲匂ふちくさのはなにをく露や月にくたくる心とはなる
三十四番
左　權中納言公
あと殘るまかきは鹿のふしとにてねやには月そ住なれにける
右　前齋院
なかめても思へはかなし秋の月いつれの年のよはまてかみん

三十五番

左　正三位経

くまもなきをのか光をこほりにてすはのとわたる秋のよの月

右　顕昭

かくれぬとみれは程なく廻りきて月もうき世ははなれさり鳬

卅六番

左　前宮内卿

さやけさに池のこゝろやすみぬらん宿れる月の影そにこらぬ

右　釋阿

世の中をそむきてみれは秋の月おなしそらにそ猶めくりける

三十七番

左　御製

しかの浦やにほてるおきに霧こめて秋もおほろのあり明の月

右　左大臣

山遠き門田のほする霧はれてほなみにしつむ有明の月

三十八番

左　左大臣

さらぬたにふくるはおしき秋のよの月よりにしにのこる白雲

右　天台座主

うちよするなみに有明の月さえて秋風かなしすまの關守

三十九番

左　祐盛

月影のいるをおしむにくらふれは待宵のまはのとけかりけり

右　顕昭

山のはをなにいとひけん月影のいらぬに明る空もありけり

四十番

左　左大臣

槇の戸のさゝてあり明に成ゆくをいくよの月とゝふ人もなし

右　定家朝臣

あけは又秋の半も過ぬへしかたふく月のおしきのみかは

四十一番

左　左大臣

秋のいろのはてはかれ野と成ぬれと月はしもこそ光成けれ

右　顕昭

ふしの山いくかすきぬとかそふれは同し麓に有明の月

四十二番

左　内大臣

あくかれていまはと思ふ山さとにすみなれにけるよはの月哉

右　定家朝臣

大方の秋の哀はくれはてゝたゝやまのはの有明の月

四十三番

左　前關白

人しれすまちしもしるし女郎花いつしかとくる花の下ひも

右　定家朝臣

をみなへしなひくけしきや秋風のわきて身にしむ色と成らん

四十四番

左　定家朝臣

里は荒て時そともなき庭の面ももとあらの小萩秋はみえけり

右　宮内卿

そこきよきのさはに秋のいろみえてわけぬ水さへ萩か花すり

四十五番

左　釋阿

いとかくや袖はしほれしのへにいてゝ昔も秋の花はみしかと

右　寂蓮

こはきさくかた山陰にひくらしのなきすさみたるむら雨の空

四十六番

左　前關白

よそなからみやきかはらをみわたせは心にうつる萩か花すり

右　讃岐

心にはうつらぬはなもなけれとも袖にみゆるやはきか花すり

四十七番

左　隆信朝臣

おきの音にしかのねそへて秋はきぬ風より外にとふ人もなし

右　寂蓮

なくさむるともなきやとの夕くれに哀はのこせおきの上風

四十八番

左　左大臣

うちなひく入江のおはなほのみえて夕なみまかふまゝの浦風

右　宮内卿

外山なるならのはまてはけはしくておはなか末によはる秋風

四十九番

左　家隆朝臣

けふみれはいはたのをのゝまくす原うらかれわたる秋風そ吹

右　前齋院

常よりもせめて心のくたくるはわれやはかはる秋やとなる

五十番

左　權大納言

野はらよりたもとにかよふ風の音におなし露ちる秋の夕暮

右　前中納言

秋といへは露はくさはにかきるかは袖にもあまる夕暮の空

五十一番

左　仁和寺宮

千草まて花にうつろふうは露はちるにそもとの色はみえける

右　小侍從

しら露やわかそめかほに思ふらん千草の花の色をうつして

五十二番

左　内大臣

淋しさを身にしめとてやあはらやのすたれ吹こす秋の夕風

右　入道左大臣

霧こめて千草の花はみえねとも色あるのへの夕まくれ哉

五十三番

左　左大臣

秋霧のはれ行まゝに色みえて風も木のはを染むるなりけり

右　天台座主

うす霧のみきはをこむる有明の月にうらあるしかのから崎

五十四番

右　前關白

常よりもふかきたくもの煙かなしほやをこめて霧や立らん

右　隆信朝臣

いかなれは□にしられぬ色なから松にも風の淋しかるらん

五十五番

左　釋阿

秋はこれいかなる色そそれならぬのはらの虫も露になくなり

右　寂蓮

軒はなるしのふにつたふ虫の音によもきか末のほとをしる哉

五十六番

左　正三位經

虫のねもちくさの花にうつろひて色〳〵にこそ聲はきこゆれ

右　生蓮

秋といへはものを思はぬねさめまて聲恨めしききり〳〵す哉

五十七番

左　左大臣

みすしらぬむかしの人の心まて嵐にこもるゆふくれの空

右　家隆朝臣

露さむきあさちかもとにうちわひて月影かこつ松むしのこゑ

五十八番

左　權大納言

霧ふかきたつたの里の夕まくれこすゑを分てかりわたる之

右　家隆朝臣

まつ人は霧のまかきに跡たえてたのめぬそらの初かりのこゑ

五十九番

左　隆信朝臣

をしかなく小萩かはらに月さえてなかむるそてに秋風そ吹

右　前斎院

我門のいな葉のかせにおとろけは霧のあなたに初かりの聲

六十番

左　大皇大后宮大夫
さそひくる嶺のあらしやよはるらん遠さかる也さを鹿のこゑ
右　入道左大臣
山おろしに鹿のねたかくきこゆ之おのへの月にさよや更ぬる
六十一番
左　内大臣
我ならぬ人も哀やまさるらんしかなく山の秋のゆふ暮
右　入道左大臣
とやまふく嵐のをくるしかのねをまちとるものは涙なりけり
六十二番
左　有家朝臣
秋はきぬ鹿はおのへに聲たてつよはのねさめをとふ人もかな
右　生蓮
たのめをきしいもまちかねてねたるよの秋風寒み鹿そ鳴なる
六十三番
左　釋阿
雲となり雨となりてやたつたひめ秋の紅葉の色をそむらん
右　寂蓮
このはちる秋のこするゑと聞程に心のそこをはらふ山かせ
六十四番
左　大皇大后宮大夫
しくれする朝日の山の紅葉ゝはあらひてさらす錦なりけり
右　慈圓
何をかは思ひまさまし紅葉はのこの色なからときはなりせは
六十五番
左　御製
秋の色はまつひとしほの紅葉ゝに心してふけ山おろしの風
右　釋阿
心とやもみちはすらむたつた山まつは時雨にぬれぬものかは
六十六番
左　左大臣
山人のこのした道は絶ぬらん軒のまさきも紅葉ちるなり
右　定家朝臣
から衣すそのゝいほの旅枕そてよりしきのたつ心ちする
六十七番
左　權中納言兼
をかやはらふきくる秋のゆふかせに心みたれとうつら鳴なり
右　顯昭
夕霧のたえまにみゆる柴の戸のぬしはとゝへはうつらなくこゑ
六十八番
左　定家朝臣
山かつの身のためにうつ衣ゆへ秋のあはれを手にまかすらむ

右　前齋院

更にけり山のはちかく月さえてとをちのさとに衣うつ聲

六十九番

左　正三位経

ころもうつ音は哀と聞ものをわかねさめをはしる人そなき

右　釋阿

うつをとはよその袂にひゝきゝて衣はたれになれむとすらん

七十番

左　權中納言兼

秋田もるしつか庵りに宿からんさてもこの世は過ぬへき身そ

右　祐盛

衣うつ音をきくにそしられける里とをからぬ草枕とは

七十一番

左　内大臣

つきはつる名殘をしかの聲しはしかねより後は秋のそらかは

右　入道右兵衛督

待えてや山のにしきは思ふらんけふかへりぬる秋の夕日を

七十二番

左　天台座主

秋はけふにしきをきてやかへるらんくれ行空に紅葉ちりけり

右　法印靜賢

浮世をは我もさこそはあきはつれとはりなくもおしきけふ哉

三百六十番歌合第四

冬部

一番

左　御製

秋くるゝかねのひゝきはすかはらやふしみの里の冬の明ほの

右　天台座主

秋にまた吹かはりぬる風の音も猶霜かれのおきのまかきに

二番

左　隆信朝臣

分過し露をは霜にをきかへていくたのをのに冬はきにけり

右　有家朝臣

おしと思ふ心ひとつにとまりけり秋のなこりは袖のゆふ露

三番

左　左大臣

木のはちりて後にそ思ふ小野山のまつには風もときは成けり

右　入道左大臣

名殘なくならのはかしは散にけり庭にをとなふ木からしの風

四番

左　三宮

木のはちるみ山のおくの通路は雪よりさきにうつもれにけり（云古字）

右　〔前齋院〕

梧の葉もふみ分かたく成にけりかならす人をまつとなけれと

五番

左　權大納言

更にまたしくれやそむる紅葉散ちりしく庭の露の色〳〵

右　覺盛

神無月かけにふりくる紅葉こそ袖をそむるしくれ成けれ

六番

左　前中納言

よもすから木葉に窓をたゝかせてとへはあらしの風そ答ふる

右　前齋院

うらかるゝ庭の淺茅にかつつもるこの葉かき分誰かとふへき

七番

左　權大納言

露霜にまかきの秋はかれはてゝ木のはのそこに殘る虫のね

右　小侍從

しもいとふとりのうはけにくれなゐの紅葉をのこす木枯の風

八番

左　内大臣

秋はてゝ哀は猶ものこりけり花もあらしの野への夕暮

右　寂蓮

しくれ行松のみとりは空はれて嵐にくもる嶺のもみちは

九番

左　定家朝臣

あしのやのつたはふ軒のむら時雨音こそたてね色はかはらす

右　天台座主

しくれつる嶺のむら雲晴のきて風よりふるは木葉成けり

十番

左　前關白

色みえぬ秋をあらはす紅葉はのちるはくれぬる心ちこそすれ

右　天台座主

よひのまはもらぬ木のはに袖ぬれてしくれに成ぬ曉の空

十一番

左　左大臣

すきぬるかあらしにたくふむら時雨竹のさ夜に聲はのこりて

右　讃岐

袖ぬらすをしまかいそのとまりかなまつかせ寒み時雨ふるなり

十二番

左　御製

津の國のこやもあらはに霜かれてやへふく軒に時雨ふるなり

右　仁和寺宮

哀しるなかめはひとつ空なから月のあたりの雲そしくるゝ

十三番

左　仁和寺宮

をともなくやへたつ雲に道分て涙しくるゝさやの中山

右　天台座主

わひ人のやとをしくれは過ぬれと猶ふりやまぬ袖のうへ哉

十四番

左　有家朝臣

風の音雲のけしきに冬きぬと思ひ□□はうちしくれつゝ

右　顯昭

紅葉はを染るのみかはときは木の色も時雨にあらはれにけり

十五番

左　大皇大后宮大夫

晴くもりしくるゝ空のなかめには思ひもあへす袖ぬらしけり

右　有家朝臣

冬きぬとなかむる空のうき雲のゆくゑはやかてしくれ成けり

十六番

左　前宮内卿

ならしはをまはらにさせるかり庵にもらて過ぬる初時雨かな

右　家隆朝臣

あはし島はるかにみつるうき雲はすまの關屋に時雨きにけり

十七番

左　生蓮

なかめやるをちの山邊の村雲のはるれは□□にしくれふらん

右　丹後

よそのみとしくれて過る跡にまたしきたついはの曉の夢

十八番

左　入道左大臣

冬かれの野へのけしきをなかむれは秋は哀のはしめ成けり

右　釋阿

と山なるまさきのかつら色つけは吉野の冬のおくそしらるゝ

十九番

左　權大納言

おきはらやしもをく色はかはれとも嵐に秋のなこりをそきく

右　越前

きのふにも人の心はかはらねと秋にはあらぬ村しくれかな

廿番

左　有家朝臣

降そむるなのみたつたの村時雨もとのなけきは色もかはらす

右　寂蓮

雪ふらはみちもたへなん山さとをしくるゝまてはとふ人も哉

廿一番

左　天台座主
しもかれの山田のくろのむらすゝきかる人なしに殘る比哉
右　寂蓮
冬こもるくさの戸さしは霜かれてま近き山のみねのしるしは
廿二番
左　雅經
かけとめし冬のやとりや思いてゝ霜に跡とふあさちふの月
右　宮内卿
みしま江のたまえのあしの霜枯て風の音さへ色かはる之
廿三番
左　家隆朝臣
しま風のあしの葉わたるゆふ暮にみきはのつるも聲かよふ之（よとふイ）
右　前齋院
難波かた苫へをさしてこきゆけはうらかなしかるたつの一聲
廿四番
左　雅經
おほかたは哀もしらぬものゝふのやそうち川の冬の明ほの
右　祝部允成
風の音もはけしき冬のけしきかな秋の哀はかゝらさりしを
廿五番
左　雅經
秋の色をはらひはてゝや久方の月のかつらに木からしのかせ
右　鴨長明
すはのとにくめちの神やかよふらん夜そこほりの橋渡りける
廿六番
左　御製
ときはなる松のみとりをふきかねてむなしき枝にかはる木枯
右　家隆朝臣
もみち葉も秋もとまらぬ山里は松に嵐の聲そのこれる
廿七番
左　入道左大臣
心すむ柴のかりやのねさめ哉月ふく風にましら鳴之
右　前齋院
ひきむすふ草の戸さしのはかなきに心してふけ木からしの風
廿八番
左　天台座主
神無月しくれは過ぬ竹のはにはけしき音やあられ成らむ
右　寂蓮
淋しさは思ひやるたにある物をまさきのかつらあられふる之
廿九番
左　釋阿
あられふるみ山の里の苫の庭淋しとやいはんさひしからぬや

右　前齋院

故郷のまきの板屋にふるあられをとつるゝしも淋しかりけり

卅番

左　大皇大后宮大夫

たひ人の分行のへのたまさゝに霰ふりしくなにこそ有けれ

右　覺盛

まきのやにたはしる音は霰にてひとりかたしく袖そしくるゝ

卅一番

左　定家朝臣

と山よりむら雲なひき吹かせにあられよこきる冬の夕暮

右　寂蓮

窓ちかきしゐの下しは音つれてみ山のさとにあられふる之

卅二番

左　權大納言

嵐ふくたかねの雲をかたしきて夢路もとなしうつの山こえ

右　釋阿

みるまゝになくさみぬへきうみ山も都のほかは物そかなしき

卅三番

左　左大臣

山人のそてになれたる松の風雪けになりぬいとゝはけしき

右　釋阿

さもこそは庭の木のはにうつもれん苔おひにけり松のした道

卅四番

左　内大臣

雪ならは月とゝもにもなかめやらんいとひなはてそ嶺の白雲

右　釋阿

ふるさとはさゆる雲とやみよしのゝ吉野のおくの嶺のしら雪

卅五番

左　御製

此比は花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪

右　天台座主

雪つもるときはの松の下みとりわすれぬへきか花も紅葉も

卅六番

左　正三位經家

雪とのみ思ひもはてし山里はものゝ哀もつもる成けり

右　隆信朝臣

さゝ浪やこたかき山に雪ふりてくにつみ神のうらさひにけり

卅七番

左　天台座主

ひにそへて秋の哀そむもれ行雪ふる山のまつの下風

右　入道左大臣

雪きえてのちこそ人もたつねけれ花ゆへにのみ春をまつ哉

卅八番

左　御製

ふりつもる雪は朝日にむらきえて雲にしられぬ軒の雨哉

右　仁和寺宮

なには人あし火たくやにふる雪のうつみ殘すはけふり成けり

卅九番

左　御製

雪やこれはらふたかまの山風につれなき雲の嶺にのこれる

右　寂蓮

雪ふれははるまつ花も咲にけり匂ひはかりや枝にのこれる

四十番

左　權中納言兼

とへかしな庭のしら雪跡絶て哀もふかき冬のあしたは

右　釋阿

こしちをそ冬のかたとは思ひしによしのゝおくも雪の白山

四十一番

左　仁和寺宮

ふしのねはとはてもよそにしられけり雲より上にみゆる白雪

右　釋阿

雪ふれは嶺のまさかきうつもれて月にみかけるあまのかく山

四十二番

左　雅經

ふりにける跡ともけさはみえぬかなしかの都の雪のはなその

右　顯昭

玉すたれむかしをかけてふる雪に山さへけさは忍ふもちすり

四十三番

左　隆信朝臣

ふる雪にふもとのみちは跡たえてたれ小野山に冬こもるらむ

右　家隆朝臣

明わたる雲まのほしのひかりまて山のはさひし嶺のしら雪

四十四番

左　前中納言

いつくとも庵りはみえぬ遠方の風になひくは雲かけふりか

右　家隆朝臣

なかめつゝゆふこえくれは初瀬山ふしみの里も麓成けり

四十五番

左　釋阿

遙なるあしやのおきのうきねにも夢路はちかき都成けり

右　前常陸

遠さかる都の空をなかむれはたもとによその月そやとれる

四十六番

左　左大臣

てる月のかけにまかせてさよ千鳥かたふくかたに浦つたふ之

右　讃岐

かちまくらたまもかたしくうたゝねの苫屋か軒に千鳥鳴之

四十七番

左　家隆朝臣

月きよみ眞砂ふきまくはま風に心くたけと千鳥鳴之

右　釋阿

たとへてもいふかたもなき玉つしま千鳥なくなる有明の空

四十八番

左　前宮内卿

かせさゆるとしまか磯のむらちとりたちゐは浪の心成けり

右　寂蓮

さ夜千鳥あかしのせとの浦風に島かくれ行こゑきこゆ之

四十九番

左　權大納言

しほかせに月かけわたる友千鳥なみにくたくる有明の聲

右　有家朝臣

うら風のたよりにそきくなるみかたあしのほのかに千鳥鳴之

五十番

左　御製

あはち島ふきまふすまのうら風にいくよの千鳥聲かよふらむ

右　仁和寺宮

うらまつの葉こしにおつる月影に千鳥つまよふすまの明ほの

五十一番

左　太皇大后宮大夫

よふねこくいらこかさきのはなれ石に友なし千鳥聲うらむ之

右　小侍從

はまきよきゆらの湊に鳴千とりよふねやのほる立さわく之

五十二番

左　顯昭

なるみかたしほかせさむみね覺するなみのまくらに千鳥鳴之

右　越前

忍ふにも猶あまりぬる哀哉千とりとわたるすまの明ほの

五十三番

左　權大納言

しもかれの尾花かすゑに月さえてこほらてこほるまのゝ浦浪

右　範盛

夜半にふく嵐や浪をかけつらん苫のかれはにたるひしにけり

五十四番

左　左大臣

清水もる谷のとほそもとちはてゝ氷かたゝくみねの松風

右　定家朝臣

とけぬ上に重ねてこほる谷水にさゆるよところの數そみえける

五十五番

左　御製

冬くれはいしまのたきつこほりして思ひ絕たる山河の水

右　左大臣

よし野川たきの水上こほるらしけさよはり行岩浪のこゑ

五十六番

左　家隆朝臣

さゆるよのみきはにのこる浪の音やうら風わたるしかの濱松

右　寂蓮

しかの浦に釣するあまの袖さえてかへる浪ちは氷りしにけり

五十七番

左　左大臣

池水にさゆるひかりをたよりにて氷は月のむすふ成けり

右　權大納言

朝ほらけさゆるあしまを行舟の氷を分る跡のしら浪

五十八番

左　權大納言

露こほるかれのゝ原の霜のうへにさひたるよはの月をみる哉

右　天台座主

散はてゝこのはかくれもなかりけりのこる嵐にやとる月影

五十九番

左　家隆朝臣

しかのうらや遠さかり行浪まより氷りていつるあり明の月

右　前齋院

玉の井のこほりのうへにみぬ人や月をは秋の物といひけん

六十番

左　前關白

なみたてはしらゆふかくる住吉のまつこそ神のさかき成けれ

右　釋阿

月さゆるみたらし川に影みえてこほりにすれる山あひの袖

六十一番

左　隆信朝臣

はゝそはら下葉折しき山科のいはたの小野にわひつゝそぬる

右　仁和寺宮

さてもよを過しけるかとよそにみしひなの笹屋に幾夜泊りぬ

六十二番

左　前關白

たひの空ならはぬ磯の浪枕かゝるうきねといもしるらめや

右　有家朝臣

一とせを花よ月よとすくしきて身に雪つもるはてそかなしき

六十三番

左　前齋院
むれてたつ空もゆきけにさえくれて氷のねやに鴛そなくなる
右　丹後
かたしきのしもよの袖に思ふかなつらゝの床の鴛のひとりね
六十四番
左　内大臣
なかれ行水のあはともみゆるかな雪もはらはぬをしの上毛は
右　寂蓮
おほ井川ゐせきの水やこほるらんはやせにをしの聲くたく之
六十五番
左　三宮
水鳥のをのかよとこのうす氷は風よりこそむすひそめけれ
右　内大臣
大原やおほろのし水冬くれはおもかはりせすつらゝゐにけり
六十六番
左　天台座主
ね覺して物思ふやとのあり明に月かけわくるしきの羽かき
右　寂蓮
さひしさは空にもしるしすみかまのけふりにつゝく嶺の白雲
六十七番
左　家隆朝臣
もろ人のこゑをつらねてさゆるよの雲井に鴈も名のり行之
右　鴨長明
ふけぬれはみよの佛の數ならぬおほみや人のなをもきく哉
六十八番
左　釋阿
くれて行としは北へやかへるらんなをこしちには雪つもる之
右　前齋院
行末はいまいくよとかいはしろの(をかのかやねに新古今)枕むすはん
六十九番
左　前關白
行年をおしみもとめぬ物ゆへにまたさゝきとや花はうらみん
右　小侍從
かそふれは物うかるへきけふをしも年くれぬとや何急くらん
七十番
左　内大臣
年のうちに二たひ春をむかへても花みる數のかさならはこそ
右　小侍從
ゆく年やうらしまのこかはこならん哀は老の身につもりぬる
七十一番
左　前關白
春秋のあかぬわかれもありしかと年のくれこそ猶まさりけれ

右　仁和寺宮

過ぬる年のかよひちいかならんひまゆく駒は跡たにもなし

七十二番

左　釋阿(権中納言イ)

いつくにか今宵旅ねの床しめてあけなは春のたゝむとすらん

右　権中納言(釋阿イ)

ひとゝせは一よはかりの心ちしてやそちあまりを夢にみる哉

三百六十番歌合第五

雜部

一番

左　御製

萬代世のすゑもはるかにみゆる哉みもすそ川の春の明ほの

右　前関白

すみわたるみたらし川のそこみれはきよきは神の心のみかは

二番

左　前関白

けふまつる神のこゝろやなひくらんしてに浪たつさほの川風

右　定家朝臣

霞しくはるのはしめの庭の面に先たちわたる雲の上人

三番

左　権大納言

くもりなくはこやの山の嶺晴てゆくすゑ遠くいつる月影

右　前中納言

いせの海のきしうつなみによる玉やひろへとつきぬ萬世の數

四番

左　正三位[illegible]

宮居せしそのはしめにもいそのかみふるの社と人やいひけん

右　定家朝臣

いそのかみふるの神杉ふりぬとも常磐かきはの影はかはらし

五番

左　権中納言公

色かへぬ竹のそのなる鶯はいく萬代の春をまつらん

右　越前

これやこのさしての磯の友千鳥今よりさらに八千世とをなけ

六番

左　御製

はまひさき波のまに〳〵なかむれはみゆるこしまの有明の月

右　仁和寺宮

風わたるいらこかさきのそなれ松しはしはなみの花咲にけり

七番

左　雅経

またしらぬらきねのとこのかちまくらなれぬ袂になるゝ浪哉

右　寂　蓮

わかのうらを松の葉こしになかむれは梢によするあまの釣舟

八番

右　入道左大臣

思ひいつる人はありとも誰かこの苔ふりにける道をたつねん

右　寂　蓮

まとひこしむかしの跡はおとこ山みちある時に哀ともみよ

九番

左　定家朝臣

かへるさをちきる別をおしむにもつゐに哀はしりぬへき哉

右　祐　盛

そへてゆる心の外になにの又猶わかれちをなけく成るらむ

十番

左　定家朝臣

古郷をいてしにまさる涙かなあらしのまくら夢にわかれて

右　雅　經

波の上もなかめはかきりある物を心のはてそ行ゑしられぬ

十一番

左　前關白

あまのすむいそのとまやの旅ねにはかるもそくさの枕成ける

右　丹　後

おほつかな都にすまぬみやことりとゝふ人にいかゝこたへし

十二番

左　内大臣

行さきの程をはしらてかへるへき日數はかりをかそへつる哉

右　隆信朝臣

こし道をけさたちかへりなかむれは雲にきえぬる古郷の空

十三番

左　釋　阿

たちかへり又もきてみん松嶋やをしまのとまや浪にあらすな

右　讃　岐

たひねするすまのうらちの笘屋かた音せぬ浪も袖にかけけり

十四番

左　内大臣

さ夜更てむまやつたひの鈴きけは山路かさなる物そかなしき

右　顯　昭

遠さかるまゝに都のしのはれてかさなる山のうらめしき哉

十五番

左　權中納言兼

思ひをく人ある身にはやかてこのたひの空にそこひち成けれ

右　讃　岐

よそにみし波の上にもとこなれぬ幾夜あかしのうきね成らん

十六番

左　前斎院

松かねのをしまかいそのさよ枕いたくなぬれそあまの袖かは

右　丹後

立かへりそなたをのみそなかめやる思ひてもなき都なれとも

十七番

左　天台座主

かへりこはかさなる山の嶺とにとまる心をしをりにはせん

右　寂蓮

行衛なくあとなしとても忘るなようきねになるゝあまの釣舟

十八番

左　定家朝臣

いてゝこし道のさゝはら茂りあひて誰なかむらん古郷の月

右　家隆朝臣

あし引の山のあなたにみし雲をいくへかたひの空にわくらん

十九番

左　御製

我こひはしのたのもりの忍へともそての雫にあらはれてけり

右　前関白

中〱にそれゆへ人にしらるれはしのふそ戀のしるし成ける

廿番

左　家隆朝臣

くちはつる袖のためしとなりねとや人をうきたの杜のしめ縄

右　釋阿

としふれと人の心はつれなくてなみたは色のかはりぬるかな

廿一番

左　御製

思ひわひれられぬ物をなにとまた松ふく風のおとろかすらん

右　左大臣

たつねつる道にことよひはふけにけり松の梢に有明の月

廿二番

左　前関白

君にかくみたれそめぬとしらせはや心の内のしのふもちすり

右　権大納言

したにのみしのふもちすりくるしきは心の中のみたれ成けり

廿三番

左　内大臣

むかしみし人にかはりて我なからなれし心よ物かたりせよ

右　家隆朝臣

夢かとそなをたとらるゝさよ衣うらみなれたる袖をかさねて

廿四番

左　前關白
そのかみに逢嬉しさやなりなましけふ迄人のつれなからすは
右　寂蓮
あふまての思ひはとのかすならてわかれそ戀のはしめ成ける
廿五番
左　前關白
みる人の心の中もあるものをすめるは月のひかりのみかは
右　釋阿
世中を思ひつらねてなかむれはむなしき空にきゆる白雲
廿六番
左　内大臣
きぬ〳〵になるともなき鳥たにも明ゆく程は聲もおします
右　小侍從
思ひきやなけきて過し年月にけさのわかれのまさるへしとは
廿七番
左　鴨長明
こえかねし逢坂山に哀けさかへるをとむる關もりもかな
右　祐盛
けさ歸るならひを誰か始めけんとまるためしに我やならまし
廿八番
左　前關白
いつしかとおほつかなさに行かよふ心にくれもまた數へけり
右　隆信朝臣
と〻めつるわか心にやちかふらんかへるをゝくるけさの面影
廿九番
左　内大臣
これそこのあひみしよはの形見とてわか手枕を我こそはすれ
右　釋阿
戀しともいは〻をろかに成ぬへし心をみするとの葉もかな
三十番
左　權中納言
思ひねの夢の別にならひきてけさもうつ〻の心ちこそせね
右　定家朝臣
おもかけはをしへしやとにさき立てこたへぬ風の松に吹聲
卅一番
左　内大臣
あひみしは昔かたりのうつ〻にてそのかねとを夢になせとや
右　法印靜賢
こひしくはきてもみよとて逢坂の關の清水に影はと〻めつ
卅二番
左　生蓮
つらかりしとの葉をなと恨みけんそれをたにこそ聞す成けれ

右　　　丹　後

たのめこし僞さへも絕にけるそれもなさけをかけしかきりそ

卅三番

左　　　丹　後

わすれしのとの葉いかに成にけんたのめしくれは秋風そふく

右　　　顯　昭

つれもなき人も物をやおもはましいとふ心もくるしかりせは

卅四番

左　　　左大臣

みし人のねくたれかみの面影に淚かきやるさよの手まくら

右　　　權中納言兼

ぬるにこそ夢もみゆらめさよ衣かへすはうすき思ひなりけり

卅五番

左　　　生　蓮

我身たに思ふにたかふ物なれはことはりなりや人のつらきは

右　　　小侍從

身のうさを思ひもしらぬ物ならは何をか戀のなくさめにせん

卅六番

左　　　天台座主

後になき名はかりはたつた河わたらぬそてをいくよぬらしつ

右　　　入道左大臣

たのめすは思ひたえてもやみなましたに中〳〵の情なるらん

卅七番

左　　　法印靜賢

思ひしれ秋のなかはの露けさをしくれにぬるゝ袖の上にて

右　　　顯　昭

おもはしと思ふにたかふ淚川こひは心の外にやあるらん

卅八番

左　　　入道右兵衛督

みし人も我身ももとの身ならぬにそのまゝなるは心なりけり

右　　　丹　後

つれもなき人の心もとし月のかはるにつけてかはらましかは

卅九番

左　　　有家朝臣

わか戀はむくらのなかのしのふ草忍ふとたにも人はしらした

右　　　讃　岐

跡たえて淺茅かすゑに成にけりたのめしやとの庭の白露

四十番

左　　　前中納言

人しれぬ心にたつるにし木々のくちぬる色やそてにみゆらん

右　　　前宮內卿

いかはかり戀ちはすゑの遠けれは思ひ入てもとしのへぬらん

四十一番

左　顕昭

としふれと思ひ忘るゝとそなき命や戀のかきり成らん

右　小侍従

絶はてぬ命はかりをなけくかなあひみん事はこの世ならねは

四十二番

左　仁和寺宮

戀しなは又もこの世にめくりきて二たひ君をよそにたにみん

右　前斎院

君ゆへやはしめもはても限なきうき世にめくる身とも成けん

四十三番

左　祐盛

我ならぬ人そといひて心みんさてつれなくは身をも恨みし

右　小侍従

つらきをも恨みぬ我にならふなよ憂身をしらぬ人もこそあれ

四十四番

左　有家朝臣

こひ衣かへすゆめちはむなしくて月をそみつる有明の空

右　前斎院

しるへせよ跡なきなみにこく舟の行衛もしらぬやへのしほ風

四十五番

左　前中納言

さよころもそなたの風をかたしきてうらむる袖に夢を待つゝ

右　家隆朝臣

逢とみてこそともなく明にけりはかなの夢のわすれかたみや

四十六番

左　天台座主

わかこひは松をしくれのそめかねてまくすか原に風さはく之

右　寂蓮

あさましやなとか思のさしも草露も置あへすはてはもゆらん

四十七番

左　入道右兵衛督

落つもる涙のうみと成ぬれは身はうきしまの心ちこそすれ

右　宮内卿

かりそめのよはのけふりと思はすは鶴の林の名こそをしけれ

四十八番

左　太皇大后宮大夫

かくしつゝいはて我身の戀しなはしのふはかりにかへん命か

右　家隆朝臣

思ふにはたくひなるへき伊勢のあまも人を恨みぬ袖そ濡ける

四十九番

左　有家朝臣

思ひれの心ひとつをしるへにてむかしにかへる夢のかよひち

右　　祝部允成

ゆふかけしみつの濱松忘れすはをひえの杉のしるしあらせよ

五十番

左　　有家朝臣

大方は身をも恨みしあまのかるもにすむ虫の名こそつらけれ

右　　仁和寺宮

風そよくしのゝ小篠のかりの世をおもふね覺に露そこほるゝ

五十一番

左　　天台座主

またしなてつゐの報をみつる哉いきてもかゝる世に生れけり

右　　生蓮

うきなから猶をしまるゝ命かな後の世とてもたのみなければ

五十二番

左　　前宮内卿

なにとなくね覺におつる涙とそうき身をさそふしるへ成けれ

右　　鴨長明

これも又なにゝたとへん朝ぼらけ花ふく風の跡のしら浪

五十三番

左　　内大臣

としへぬるをのれかまゆにをもなれて初瀨の山のしもに住人

右　　天台座主

こくらくへまたわか心行つかす羊のあゆみしはしとゝまれ

五十四番

左　　權中納言

世をすつる心は猶そなかりけるうきをうしとは思ひしれとも

右　　入道左大臣

人なみに家をはいてぬさてもけに眞の道をしらはこそあらめ

五十五番

左　　隆信朝臣

みし世よりみぬ昔まて尋ぬれはこたへぬ月そいふにまされる

右　　家隆朝臣

いつかわれこけの袂に露をゝきてしらぬ山ちの月をみるへき

五十六番

左　　御製

くれてゆく秋のなこりはおほあらきの杜の梢に有明の月

右　　内大臣

横雲のしらむにつけてかなしきやうはの空なるなかめ成らむ

五十七番

左　　左大臣

またしらぬ山より山にうつりきぬあとなき雲の跡を尋て

右　　前中納言

なにとなく花やもみちをみし程に春と秋とをいくめくりしつ

五十八番

左　隆信朝臣

うき身とは思ふ物からすてやらてこれさへ人にをとりぬる哉

右　生蓮

さりともとはかなく世をも頼む哉あるへき程はみゆる我身を

五十九番

左　釋阿

うき身をはわか心さへふりすてゝ山のあなたにやと求なり

右　入道左兵衛督

しはの庵に身をは心のさそひきてはては行衛もしらす成ぬる

六十番

左　家隆朝臣

先たてし心のはてはあし引の山のあなたにきゆるしら雲

右　宮内卿

みわたせは雲よりなみにこきいてゝ朝日にちかきあまの釣舟

六十一番

左　隆信朝臣

いかにこは反きもやらぬ世成らん入やは惜む身やはすゝまぬ

右　仁和寺宮

山ふかくなるゝ心よいかにまた雲より外にやともとむらん

六十二番

左　天台座主

いかにして今まて世にはあり明のつきせぬ物をいとふ心は

右　生蓮

存命へていけるをいかにもとかまし憂身の程をよそに思はゝ

六十三番

左　三宮

秋山の嶺のこすゑをつたひきてやとのゝきはにましら鳴之

右　前宮内卿

すてやらぬけしきを人や知ぬらん憂身をもるを惜みけりとは

六十四番

左　法印静賢

とにいてゝいはゝかしこしいはす共たのむ心は神にまかせん

右　讃岐

都いてゝふかく入ぬるおく山に猶のこりける夢のかよひち

六十五番

左　權大納言

山ふかきくさの庵りの雨のよにをとせてふるは涙なりけり

右　小侍従

しきみつむ山ちの露にぬれにけりあかつきおきの墨染の袖

六十六番

左　仁和寺宮
むくらはふしつのふせやの夕煙はれぬ思ひによそへてそみる
右　覺盛
つくはねのすそはの里の夕煙このもかのものすまぬをそしる
六十七番
左　入道右兵衛督
秋はきの花もふるえに咲にけり人こそかはれもとのこゝろは
右　讃岐
山里はのはらにつゝく庭の面に栽ぬまかきの花をみる哉
六十八番
左　前宮内卿
心ありてすむにはあらす山里はしけき人めをいとふはかりそ
右　覺盛
うきことは猶心にそのこりける身をなきものに思ひなせとも
六十九番
左　宮内卿
竹の葉に風吹よはる夕暮のものゝあはれは秋としもなし
右　越前
何ゆへにはるをもまたん山かけやかきねの梅に鶯の聲
七十番
左　内大臣
山ふかき窓のしるしは月ゆへにいとひし雲になるゝ成けり
右　天台座主
山さとは哀うき身のすみかゝなとひくる人もけしきかはりて
七十一番
左　隆信朝臣
とはゝやな猶山ふかき宿もあらはこれより月やさひしかる覧
右　寂蓮
すみわひて猶山ふかく跡たえはたれをかこゝに松たてる門
七十二番
左　顯昭
あま雲やいまさらしなに晴ぬらん月すみにけりをはすての山
右　釋阿
つねにすむわしのみ山の月たにも思ひしれとそ雲かくれける

〔右正治二年三百六十番歌合以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百九

和歌部四十四

正治二年十月一日歌合　當座

題

初冬嵐　暮漁舟　枯野朝

作者次第不同

公經卿　春宮亮範光

散位保季　侍從隆祐

安威女房

能登守具親　左衛門尉藤季景

左近少將定家　散位鴨長明

散位宗長　前大和守公景

判者衆議判

執筆定家

一番　初冬嵐

左　公經卿

冬こもるねやに嵐の音さえてあはれ住うき柴のかりいほ

右勝　春宮亮範光

ふき來ぬとあらしにつくる人はまたとはん物かは秋の故郷

左歌優にきこえ侍れと。右。とはん物かは秋のふる郷と侍り。ことによろしく侍れは勝へし。

二番

左持　散位保季

秋の色を楢のよそになしはてゝ昨日にかはる山嵐のかせ

右　侍從隆祐

これもなを秋の名殘のあはれ哉み山をろしの木のは吹音

左歌はいとよろしく侍を。下句にはかくかゝるうたは侍

にや。右も木のはふく音といひはてたる。きゝよからす侍れは。なすらへて持とす。

三番

左持　　安　成

いつしかと梢にかはるあらし哉庭には秋をよそになかめて

右　　女　房

山川やいはねの水のいはれともあらしにしるし冬の初空

左。下句すこしおほつかなきやうには侍れと。こゝろはたかひ侍らし。右。かやうのくにしそはんかためくたす詞。ふるきよろしき歌の中には侍れと。おほくは戀の歌にやいふにもきこえ侍らん。冬の初空もすこしめつらしくや侍らん。持とす。

四番

左勝　　能登守具親

暮はてし秋はかたみにのころかははらはゝはらへ末の松風

右　　左衛門尉平季景

色きゆる冬の梢をとひしとや嵐も今朝は庭にうつれる

左歌よろしく聞え侍うへに。右の歌色きゆるとうち出たる。きゝならはすや侍らん。以左爲勝。

五番

左勝　　左近權少將定家

けふよりや冬のあらしのたつた川嶺のにしきは波のまにまに

右　　散位鴨長明

冬きぬとしらする峯の松の音にね覺よ深き大原の里

みねのにしき紅葉にこそは侍らめと。さるものゝあらん心やらん。松の音も嵐にこそはと聞え侍れは。いつれにもおほつかなくや。よりて爲持。

六番

左勝　　散位宗長

山おろしに秋のあはれや殘るらんけふもかなしき夕くれの空

右　　前大和守公景

昨日より秋は初瀬の山里と今朝の嵐の氣色にそしる

左歌。殊めつらしきふしは侍らねと。とはつゝきはなたらかなるにや侍らん。右歌。はつせの山里。しゐてたかふへきにはあらねと。聞ならはすや侍らん。仍以左爲勝。

一番　暮漁舟

左勝　　安　成

暮かゝる明石の浦のきりのまに島よりいそくあまの釣舟

右　　隆　祐

くれかゝる波路の末に數きえてこき出る舟そあきの友舟

左歌。島よりいそく。きゝつきてや侍らん。仍以左爲勝。

二番

左勝　公經卿

とにかくにあはれつもりのうら風やみにしむ暮のあまの釣舟

右　公景

夕霧にみえみ見えすみ釣舟をこき行末も消にける哉

夕霧にみえみみえすみつり舟なといへる事。こゝろすくなくや。あはれつもりの浦風やなと。いふなるさまに侍れは。勝とすへくや。

三番

左勝　宗長

友船をのか家路によひ侘て暮行磯のあまのもしほ火

右　長明

わたの原しつむ夕日にこきかけて光をこむるあこのうき舟

左歌。心をかしく侍にや。右歌。しつむゆふひはよろしからぬにや。

四番

左勝　具親

夕日影空ひとつなる浪路より雲にこきいるあまの釣舟

右　季景

世をすくすをのかならひそあはれなる暮れは出るあまの釣舟

左歌はすかたかなひてみえ侍るうへに。右歌させるとかなけれとよはく侍にや。左爲勝。

五番

左　保季

浪のうへにいつくを宿とさためてかくろれは歸るあまの釣舟

右勝　女房

あはれそふたみの浦のくれかたにはるかに遠きあまの釣舟

波のうへに宿をさためす。くるれはかへらん。こは何かなはすや侍らん。はるかにとをき海士のつり舟。面影みえて。いとよろしくみえ侍れは勝とすへし。

六番

左持　定家

たそかれはたのまぬ舟もかへりけりをちにこかるゝ漁火の影

右　範光

わたの原夕日くれ行ゆふなきに跡も波なきあまのつり舟

左歌。はしめにたそかれはとをける。夕暮の日とはいひなから。何事そときこゆるにや。いさり火の影もさゝへてや侍らん。右歌。夕日暮行夕なきとかさなりつゝきゝよからす侍らん。持とすへし。

一番　枯野朝

左勝　公經卿

草の原露の名殘もかれはてゝいつくへ秋のけさはゆくらん

右　季景

かれはつるのへにも色はかはらぬは朝霜をける尾花なりけり
右の歌。させるとかはみえす侍れと。朝霜をける尾花なりけりと。すこしよはく侍にや。左。よろしくみえ侍れは。勝とすへし。

二番

左　　具親

ふみ分し跡さへ霜やまよふらんあさたつのへをたとるたひ人

右勝　　隆範

わけしの丶千種のはてをけさみれは心にかれぬ花のいろ／＼

左。さまてたかふへきにはあられと。野徑霜なといはん題の歌なとや覺て侍らん。右歌。心にかれぬなと。殊におかしくは聞えねと。題の心たしかに讀すへられて侍れは勝とすへし。

三番

左持　　定家

あさ霜の色にへたつる思ひ草きえすはうせし武藏の丶原

右　　女房

おもふよりうら枯にけりなら柴やかりはのをの丶明ほの丶空

左歌。色にへたつるといへるとは聞にく丶や。右歌。すかたよろしくみえ侍れと。なら柴やかれのといはんには。かなはすきこゆらん。持なとにや。

四番

左持　　宗長

野邊の色は秋をく霜にむすほ丶れうらみによはる葛の下風

右　　長明

みるま丶にかつきえて行月の色を枯野の末に殘すあさ霜

月の色のかつきえもてゆかん事さらにあるへからす。左。させる難なきにつきて勝とすへし。

五番

左　　安成

野邊は冬思ひは秋の朝露に心を霜そ結ひすてつる

右勝　　公景

今朝よりは千種の霜に埋れて色みしのへの名殘ともなし

野邊は冬思ひは秋のなと。上手めきたるさまにては侍れと。いふなるさまの歌なと申へき姿ならすや侍らん。心を霜そむすひすてつる。又ことなる事なきにや。右歌。題の心にあひて。すてかたくいひしりて侍にや。右勝とすへし。

六番

左持　　保季

今朝みれは野への尾花は霜かれて露のした折かくれはもなし

右　　範光

哀とも千種の花は故郷とかれ行のへかみてそあさたつ

左歌。今朝みれはのへの尾花は霜かれてといへる。題の心いひつくして。下句いるましきさまに侍た。つゆの下折かくれ葉もなし。よしなき事をいひつゝけたる。なにゝたかうへにかくれはもきゝならはすや侍らん。右歌。又かれ行野へをみて。朝の心みえ侍らぬを。よみすへむとかまへたる朝たつ心。字さゝへてきゝにくゝ侍れは。なすらへて持とすへきにや。

［右正治二年十月一日歌合以圖書寮本校合］

正安元年五種歌合

題

春曙　春夕
春夜　戀形見
戀命

一番　春曙
左勝　女房
そことなき花のかほりにかすまれて春ものふかきやとの曙
右　九條左大臣女
しらみゆくかすみのうへのよこ雲に有明ほそき山のはの空

二番
左持　前大納言教良女
しらみゆく空のひかりはみえなから霞にくらき遠の明ほの
右　従二位藤原兼行卿
花のあとはさひしかるへき春の色を霞にのこす遠のあけほの

三番
左持　藤大納言典侍
明ほのやよもは霞のうすくもり外やまのはなの色そしらめる
右　中将
よるの雨の余波の風に雲たえてはな吹みたすはるの明ほの

四番
左　延政門院新大納言
ほの〳〵とあくる光もおほろにてかすみのうちにまかふ横雲
右　従三位親子
常にみるはなの匂ひも猶すきてかほりみちける明ほのゝ空

五番
左持　中納言藤原家雅卿
とをつ山かすみて明る東雲に峯のさくらの色そほのめく
右　永福門院内侍
いろうすき柳の末葉みえそめてかすみのやまは明もはなれす

六番

左　　左近衛權中將藤原家親

花の色はかすみしらみて遠近の木末かほれる明ほのゝ空

右勝　　新宰相

朧なる月そみえつる色よりも明てそまさるしのゝめの花

七番

左　　左近衛權中將藤原俊兼

はなをみし心にかへるなかめかな色こきふちのはるの明ほの

右勝　　永福門院小兵衛督

いつれともわきてなかむる色そなき花も霞ににほふ曙

八番　春夕

左勝　　女房

あはれをはあすにのこさぬ暮なれや春つくる日の入逢の空

右　　九條左大臣女

あにちかき庭の櫻のひと木のみかすみのこれる夕くれの色

九番

左勝　　前大納言教良女

なかめやる霞の空は色こくて花にゆふ日の影そかゝやく

右　　兼行卿

夕くれやなつにすゝめる庭の面の木くらき中に山吹の色

十番

左持　　藤大納言典侍

つく〳〵と夕の軒におつる雨のはるなるをとを長閑にそきく

右　　中將

咲かほる花の上のみ光見えて入逢くらき遠の山もと

十一番

左持　　新大納言

これのみや殘れる春の色ならんすみれつゝしの夕はへの庭

右　　從三位親子

なかめんと入日の名殘猶しはしはなに色ある春の夕くれ

十二番

左勝　　家雅卿

いますゝむなさけもやかて後の情すきこし春もけふの夕くれ

右　　内侍

折しもあれなかむる花のうへにゐてゆふへわひしき鶯の聲

十三番

左勝　　家親朝臣

わきていまはるのなさけはしられけり花もかすみも夕暮の色

右　　新宰相

はる〳〵と霞のをちに山みえてそなたの空そくれまさりゆく

十四番

左勝　　俊兼朝臣

立のこすかすみの色もいまいくか別にちかきけふのゆふくれ

右　小兵衛督

けふのみにおしみなりぬる春の日を夕は更におとろかれつゝ

十五番　春夜

左　女房

つく〲とみぬ空までもかなしきはひとりきくよの軒の春雨

右　九條左大臣女

風にさそ散らん花の面影のみぬ色おしき春の夜のやみ

十六番

左　前大納言教良卿女

うちおほれ月かすむ夜の哀よりこゝろうかれてものそ悲しき

右勝　兼行卿

のきの空は花にしらみて遠かたのかすみにふかきあり明の影

十七番

左　藤大納言典侍

花にかほる月の光よちかくさなれしかなく秋もさもあらはあれ

右勝　中将

長閑なるはるの雨夜のあはれよりふかきおもひそ更に悲しき

十八番

左　新大納言

しほるらんはなやいかにと雨風の荒きよすからしつ心なき

右　従三位親子

詠めては寝られぬものをつく〲と影なき月の霞む夜すから

十九番

左勝　家雅卿

散しける櫻かうへに影落て木の下しろき春の夜の月

右　内侍

花の香はそこはかとなく匂ひきて音しつかなる夜半のはる雨

廿番

左　家親朝臣

ゆく春の一夜に残る今宵しもやすく更ぬる鐘の音かな

右勝　新宰相

なにとなく春のうたゝ寝更ぬらしのとかに鐘の音のきこゆる

二十一番

左持　俊兼朝臣

風かよふ枕は花のにほひにてまとふかきよの月をみるかな

右　小兵衛督

春の雨の夜ふかき音に聞しほれものゝ哀になりまさるかな

廿二番　戀形見

左持　女房

夕くれの空をかたみとむかへとも戀しき人の面影もなし

右　九條左大臣女

としふれとうきはためしと忘れすはいとふ心も形見とやなる

二十三番

左持　　前大納言教良卿女

わすれなはなにか名殘と今はわかこゝろを人の形見とそなす

右　　兼行卿

わすれぬは我心なる余波なれや人のかたみと何をしのはん

二十四番

左持　　權大納言典侍

かた身とも人はちきらぬ月の夜半雲のゆふへをたゝ詠めつゝ

右　　中將

かた身かと思ふ哀にくらされてたのむ月さへさたかにもみす

二十五番

左　　新大納言

わひあまりせめてかた身と思かなきみになれける人の移り香

右　　從三位親子

かきみたりさらに心もかなしきはいまはかたみの人の玉章

二十六番

左持　　家雅卿

なれしかは我をそのよの形見そと思なすには身もなつかしき

右　　內侍

うけれとも人になれこし哀より果はかたみと身をおしみぬる

二十七番

左　　家親朝臣

佛のはかなき跡はのこれともけにたのむへきかたみたになし

右勝　　新宰相

かはかりのとの葉今はいつかみんかたみなるへき水くきの跡

二十八番

左持　　俊兼朝臣

うきにそふかたみはかゝはかひもなし殘る情の行衞ならねは

右　　小兵衞督

これのみや形見とおもふ移香のうすくなりゆく程そかなしき

廿九番　戀命

左勝　　女房

〔玉葉〕いくたひの命にむかふ歎してうきはてしらぬ世をつくすらん

右　　九條左大臣女

せめてなとあふにもかへす存命へてうき數つくす命なるらん

三十番

左持　　前大納言教良女

〔玉〕有とてもあふよもしらぬ命をはなにのたのみに猶をしむらん

右　　兼行卿

あらはもし賴みもいつそうさをのみ見きく命のはてそ悲しき

三十一番

左勝　藤大納言典侍
よそにたにみすきかさらん哀さようしや命といとふものから
右　中　將
うさも限りいのちもとちめ今よこれよその人たに哀かけてよ
三十二番
左　新大納言
うくつらく同し世ならぬおなしよに殘る命をいとひかねぬる
右勝　從三位親子
玉
いとはれし命のはてのきはに成て有てやもしと又おほえける
三十三番
左　家雅卿
命たにせめてつらさはなからへて猶うき上のうきよをやみん
右勝　內　侍
とへや猶いのちのたえすなる上はたにの情もよしやと思へと
三十四番
左　家親朝臣
なからへは思ひやしるとたのみしもかひなき命今はくやしき
右勝　新宰相
思ひとらぬ心もかきりある世あれや更に命をいとひそめぬる
三十五番
左　俊兼朝臣
いきて世にうきをみはてん爲なれやいとふ命のせめて久しき
右勝　小兵衛督
存命ふる命のきはをいつとてかさのみのとかに人のつれなき

歌合 後光嚴院御宇 文和之比

〔端闕〕

□□□□□□□□いひおゝ

□□□□□□又たまさかと申へくや

〔三番〕

左持　一　條
朝つくひいてあへぬ空のにほひよりやかてなきたつ蟬の聲哉
右　隆　家
しくれつる雲のたえまに日影見えて秋すさましき夕くれの色
兩首となるとなく。持と申へきにや侍らん。
四番
左　源　大
朝日さすのきのうす雪ほともなくきゆると見れはおつる玉水
右勝　小宰相
なをしはし入日のにほひさめやらて暑さをのこす雲の色かな
左歌。雪にのみむかひて。初句のあさ日はさしての題の心と

もきこえ侍らぬにや。右歌。たしかにいひとをされて侍れは勝とすへくや。

五番

左　新大

中空にまたかたふかぬ日の影のよる方もなきものをこそ思へ

右勝　女房

あすはいさみもやみすもやあはれ又けふも夕日の入かたの影

左歌。こゝろふかくあるさまにきこえ侍を。右歌。見もやみすもやといひ。けふも夕日のと侍。あはれも猶かきりなくや侍らん。よりていますこしはまさると申へきにや侍らん。

六番

左勝　女房

蚊遣火のけふり一筋弓みゆるしも月にはれたる里のをちかた

右　公宗卿女

今やとふ泊もたゆまぬよな／＼は月にのみ馴なれてなかむれ

右歌。初の句きゝよからすや。左。かやり火の煙は一すちなと。見ゆるものにはあらすやと覚侍れとも。おりによりてさるともや侍らん。いかにも右にはまさりてや侍らん。

七番

左持　隆家

ふくるまゝにをちのきぬたの音すみて中空たかき秋のよの月

右　新大

なかめうれへ我心なる友はあらしおなし月をは誰もみるとも

左右ともにとなる事なし。同ほとゝ申へくや。

八番

左　太政大臣女

くるゝまゝに空はうき雲はれつきて山のは上る月そさやけき

右勝　一條

村雲のたえまゝれなる空みれはすみかたき世や月もわひしき

左歌。たゝしく難とすへき所なくきこえ侍を。右歌。心詞いひしりて。猶勝と申へきにや侍らん。

九番

左持　女房

すみかたき世のうき雲をいとふ／＼心はにしにありあけの月

右　一條

つれなしとおもふもあはれいつまてそ人のうき世に有明の月

百首のありあけ。ともにこゝろふかく言葉えんに。とりとりにきこえ侍にや。勝負をわきまへ申にをよひ侍らす。よろしき持なと申へくや。

十番

左　公宗卿女

ゆふ立の雨のなこりのつゆ見えて秋おほえたる草のうへの月

右勝　新大

廻あふさても其夜のとはかりにさたかに月もみえは社あらめ

左。となる難なくや侍らん。右。さたかに月の見えさらんゆへ。おほつかなきやうにや。涙に月もと侍らは。きこえ侍へくや。たゝしふかきなんにはあらすや。猶勝と申へきにや侍らん。

十一番　風

左勝　女房

けふまてはまたはらひえぬ塵の内にあはれいつをか松風の聲

右　隆家

うらめしやきもの(所〓)にそ有ける春の花秋の紅葉も風のさそへは

右。心うるはしくと葉たゝしくて。あらまほしきさまに侍を。またはらひえぬちりのうち。こゝろまとにふかく。すかたをよひかたくて。まさると申へくや。

十二番

左勝　一條

秋にまかふ竹の夜風にねさむれは窓のほたるの影そみたるゝ

右　新大

うはの空に吹かふ風のつてにてもそのあたりとて聞道もかな

右。初五文字やいますこしおもはまほしく侍らん。左。竹のよかせ。難とすへきふしもきこえ侍られは。勝とすへきにや侍らん。

十三番

左勝　小宰相

夕くれのまかきの草に風たちて花こそ見えね秋にもあるかな

右　源大

吹かよふ風のつてにもなかめわふる心を人にしらせてしかな

左歌殊難なくや。右歌。吹かふかせもとつてに。思ひわひぬるくれのなかめをと侍。歌の心と葉あまりにすきてや侍らん。また左の勝にや。

十四番

左勝　女房

うら葉かへる梢の風になく蟬のこゑふきみたすもりの夕立

右　新大

こよひしもたれかはと思ふ槇のとに音する風も猶あちきなし

左。こゑ吹みたすもりの夕立と侍。と葉のつゝきいかにそやきこえ侍れとも。あなかち難にはあらすや。右。まきの戸を風のならすもあちきなしと風雅集に侍にや。ちかころの歌は一句もとにはゝかるへき事にや。猶左まさるとゝ申へくや侍らん。

十五番

左持　源　大

夕立の雨はまはらにおちそめてくさ木にあらき風そすゝしき

右　公宗卿女

さもあらぬ風のをとさへかなしきと心のはしにものを思へは

左歌こともなくうるはし。右。心ふかくすかたとにみゆ。よき持なと申へくや。

十六番　雲

左持　女　房

忘れはやおもひみたるゝうき雲のかゝる行衛は跡なきものを

右　一　條

はれすのみおもふ行衛はむなしくて君にちきりやうす雲の空

かゝるゆく衛はあとなきものをといひ。君に契やうす雲の空と侍。ともにこゝろうつりて。さらに勝劣をしるし申かたく侍り。又持とすへきにや。

十七番

左持　隆　家

よそにして日をは蔽はぬ雲の色よ暑さこそそへ涼しくはなし

右　新　大

よこ雲のわかるゝみるもうらやましたゝ徒にまちあかす夜に

左。一二の句つゝきいかにそや。きゝよからすや侍らん。右。まちあかす夜のよこ雲は。わかるゝ空をうらめしきかたにそなかめなされ侍へきを。うらやましからんことゝまことすくなくや侍らん。猶同品にや侍らん。

十八番

左持　一　條

夕立はよそなる雲のひとむらにくさ木の色そはやもすゝしき

右　小宰相

ほしたにもたえまたえまにまれなるよ月なきよひのむら雲の空

左右ともにめつらしからす。又さしたる難も侍らぬにた　このつかひも又おなしほとゝ申へきにや。

十九番

左勝　新　大

それをたに哀と人はなかめしに身やうき雲のそらにまかはん

右　女　房

何となくみるに物こそあはれなれ松にかゝれる山のはのくも

身やうき雲の空にまかはんと侍。まことにあはれにきこえ侍にや。山のはの雲もさる事とは見え侍れとも　うき雲猶たちまさるにや侍らん。

廿番

左　公宗卿女

思ひあまりなみたにしほる夕くれのなかめにすこき雲の一すち

右勝　新　大

なかめうかれいまも心をそめかへしそのよに〻たる雲の夕暮
なかめにすこき雲の一すちよりは。こ〻ろをそめかへされたらんゆふ暮の雲。猶いろふかくや侍らん。

廿一番　雨

左　　女房
しほ〳〵とねこそなかるれ人こふる宿のなかめの雨の夕くれ

右勝　　新大
さはりやすき我にかとの雨をしも深きあはれに誰かまちみる

左。やすらかにきこえ侍を。右は猶こ〻ろこもりて。勝とや申へからん。

廿二番

左勝　　太政大臣女
さりとものたのみも今はつきはてぬ猶降まさる雨のけしきに

右　　一條
くる〻まにのきはの山も雲とちて雨にこもれる宿そさひしき

左右ともにつねの風情にやと見え侍にとりて。左はいさ〻かまさるにや侍らん。

廿三番

左勝　　新大
いましもあれ心にあまる思より降いつる雨そなみたかほなる

右　　源大
さらはふれふらぬ夜とてもとはれねは雨にさはると猶思めん

雨首するの句。ともにいかにそやきこえ侍れとも。左歌。心は猶ふかく見え侍にや。よりて又勝とすへきにや。

廿四番

左勝　　隆家
窓をうつ雨うちき〻てふくる夜に何としはなく物のわひしき

右　　公宗卿女
おちやまぬ軒の玉水つく〳〵となかめわひぬる雨の日くらし

右。日くらしのなかめも。まとにさこそとこ〻ろほそくきこえ侍を。左。やすらかに首尾と〻のほりて。ともなくよろしくまさり侍へきにや。

廿五番

左勝　　女房
いつまてか古屋の軒のあまそ〻きあまりも今は厭はしき世に

右　　新大
き〻しほれ窓うつ雨のよもすから我ならぬ人もねられし物を

窓うつ雨のよもすから。ことにあはれふかくきこえ侍をふるやの檐のあまそ〻き。猶よそのたもともぬれまさるこ〻ちし侍にや。この番も又左の勝にや侍らん。

〔右歌合以内閣本校合〕

和歌部四十五

前攝政家歌合 嘉吉三年二月十日

題

初春　中春　後春　初夏　中夏
後夏　初秋　中秋　後秋　初冬
中冬　後冬　春待戀　夏逢戀　秋別戀
冬恨戀　春述懷　夏懷舊　秋神祇　冬釋教

作者

女房（前攝政）　權大納言資廣卿
左近衞中將教房卿　近衞局
入道正二位爲盛卿　大僧都良濟（淨土寺殿）
右衞門督雅永卿　左近中將藤原持和朝臣
中納言局　法印堯孝
沙彌常秀（細川阿波守入道）　小宰相
侍從藤原爲季朝臣　正徹
入空（三福寺 淨土宗）　散位源持純（細川右馬頭）
前和泉守藤原經清　權少僧都宗我（西光）
散位源持房（大館治部大輔）　從三位仲方卿
散位和氣茂成朝臣　權大僧都實政
大藏卿祝部成前宿禰　前下總守平氏數
施藥院使丹波盛長朝臣　前伊與守藤原定衡
左大史小槻時緊　左近府生秦兼任
講師　衆議判

一番　初春

左　女房

春風に消る氷のとゝめあへすむへも年とは岩そゝくなり

右　　權大納言資廣卿

春きぬとたれ岩代の雪に猶むすほゝれ行松の下草

やまと歌は天地ひらけし神代より。わか國のならひ。人のしはさと成にけれは。是を好もてあそへは。名をくちせぬ世に殘し。これをまなひたつさはらさるは。なさけしらぬ人といはる。かゝりけれはならの葉の名におふ都には。萬葉集をえらはれて勅撰とはしめをかれ。芦原の代々の御門はもゝのすへらきにあまり給ぬれとも。此道今にたえさるへし。しかのみならす。亭子。聖代にはひたり右のつかひをむすはれ。村上の御時にはかちまけのと葉をしるさる。それより此かた永承々暦等の内裏の歌合。ならひにわたくしの家〳〵にいたるまて。時にのそみ事にふれて。つとめきたれる跡。しらすいくはくそや。或時はあさかの沼のあやめ。なか〳〵みしかきねをひきかけ。或時は吹上の濱のきく。ふかきあさき霜をかとゝせり。閨の中の夏の扇はおり〳〵の風をあらそひ。前栽の秋の花はさま〳〵の色をつくす。抑六くさのすかたにかなふをとり。八のやまひをさるをよしとする事は。そのおもむき同しけれはとて。唐のうたにもあはせたる成へし。こゝに春日山の麓のちりをつきては數世にをよひ。わかの浦の人なみにたちましりては。四そちの齢にすきぬるまて。春の花のときかへをわすれ。秋の草とおとろへたる。あやしのひとりのおきなありけり。もとよりほたるの窓にむつひす。雪のつくえにうとけれは。なにかは心の泉みなもと淺からす。言の花匂ひふかゝらむ。いはんや歌合は浦のはまゆふかさなれるあとありといへとも。あまのあしかきまちかき世にはたえにたるを。まめやかに思ひくはたて侍る事。作のあら田かへす〳〵かたはらいたく侍れと。かゝるときもひとゝむるくせなんあやにくにて。後のあさけりをかへりみさるなるへし。事なるきになまほさゝれは。わつかに卅人をえたり。歌はかすをたとひたれは。をの〳〵卅首をよめり。この道にすゝめ入れんことをこひねかへは。きのふけふはしめてまなふともからをものそかす。かのふみにもたつさはる事をしらしめむとなれは。ものゝふのたけき家とてもこれをきらはす。なにはほり江のよしあしをわかち。しかまの市のかちまけをさたむる事は。いにしへの先達もかたきわさにいふめるを。このたひかく〳〵おこし給へ侍れは。この道かへりてあさ〳〵おほえ侍れと。たゝ昔のかゝみ。ちりの世の末に傾をたにみとさむる心さしなれは。こゝにいたりて又さしをくへきにあらす。おほよそひとりの判をもちゐすして。衆の議をとふらふ事は。われしらぬとなら人しれ。人のいはさる事も我いふ。かれこれの

と葉なかよはして。ほめそしる道なつくさんとなり。わかゝらかことくは。詞につけ心につけ。いまたそのさかひにいらされは。たとひよしといひあしといはんも。なんそまことなとらむや。あたのいつはり恨ふ事なかれ。きすなきそしりいたむ事なかれ。いかにいはんや。その座にあたりては。いそのかみふるのくさ／＼ひきみるになよはねは。本歌といひ同類といひ。見し事聞しことゝ。ゆふへの雲のあとかたなく侍るは。いとくちをしきわさならし。たま／＼もいひかはせる事ともは。みなものおほえぬひかとのみそあるへきを。もしほ／＼さかきあつめん事は。はゝかりの關のはゝかりねほく侍れと。たゝにやみなんとのさすかなれは。いさゝかにさせてふむしのつゝりなけるになんありける。

左右の歌。講頌の後。たの／＼難せらるへきよし申侍しかは。人／＼一同に申され侍しは。左歌。むへもとしとはいはそゝく／＼と侍る。本歌のより所たよりありてきこえ侍り。右の歌又すかたあしからす。たゝし君代のむすひ松。公宴にはあらされと。はしめのつかひには猶こひねかふへくやあらさらんとて。左の勝にさため侍り。

二番

左　　左近衛中將教房朝臣

谷河のなみもけさより葉たてゝ春と岩間の水まくなり

右　　近衛殿

きのふまて雪ふりつみしみよしのゝ山はかすみに春や立らん

左歌。なみもけさより葉たてゝといひ。又春といはまくといへる。こと葉のつゝきおかしく覺侍り。右の山は霞に春や立らむも。首尾相叶て難なく侍るよし。各一同に申されしかは。持とさためられ侍き。

三番

左　　入道正二位爲家卿

あら玉の年は一夜のへたてそとけふよりみえてたつ霞かな

右　　大僧都良清

もろ人の待かえうたふ此宿に聲をそへたる春のうくひす

左は續拾遺集の卷頭爲家卿の歌に。あら玉のとしは一夜をへたてにてけさより春とたつ霞哉と侍るに。たゝ二三字かはれるはかり也。いかにも老耄のしわさとそおほえ侍る。右は臨時客のこゝろなり。となる難なきうへ。左同類あるによりて勝とせり。

四番

左　　右衛門督雅永卿

空の海も氷とけ行春風に打いつる雲のなみそのとけき

右　　左近中將藤原持和朝臣

雪消る山は麓のちりよりやつもりて霞む春をしるらん

左右兩首。左は源當純か打出るなみやといへる歌の心をおもひ。右は紀貫之かふもとのちりひちよりなりてと書る序のこと葉をひけり。ともに古今集より出たり。勝劣を論するにいとまあらす。

五番

左　中納言局

立かはる春のしるしに今朝よりや霞たなひくみよしのゝ山

右　法印堯孝

うちきらし雪はふれともほの〳〵と春の光にあくる空かな

左はふるめかしき姿めつらしからす。右は優なるににたり。勝とす。

六番

左　沙彌常秀

きのふけふかすむとみえて春の色は朝な〳〵の空にしらるゝ

右　小宰相局

風さむみ猶かきくらす雪の中に春をしれとやうくひすの鳴

左右とも無指難。可謂同科。

七番

左　侍從藤原爲季朝臣

久かたの空そ長閑きけふといへは霞のころも立やそむらん

右　正徹

春のきるみのしろ衣打かすみ山風ふけはあは雪そふる

右歌は二首の本歌をとられ侍るにつきて。行平卿の霞の衣は春のきるといはんも。まことにことはりにたかひ侍らし。みのしろ衣春のきるへき事はいかゝと覺え侍り。又敏行朝臣のふる雪のみのしろ衣うちきつゝは。おほうちきを給はれるにそへたるにや。此うちかすみも。下にはあは雪そふるなと侍れは。敏行か歌をとられ侍とはをしはかられ侍れと。又古歌にせなかためみのしろ衣うつときは空行鴈のねもまかひけりと侍るによらは。擣衣の心にもやとりなされ侍らん。いさゝかおほつかなきやうなれと。一首の姿左の歌の霞の衣よりもたちまされるよし。おの〳〵申て。勝にさためられ侍りき。

八番

左　入空

去年もみし霞にかへる久堅のあまつみそらや春のかよひち

右　散位源持純

山河や岩こすなみの朝氷またくたけゆく春風そふく

左歌無殊事。右歌。またくたけゆくと侍る。いひおほせすや侍らんと。うたかひ申人々も侍しかとも。かくもなとかいはさらんとて。持と定られ侍りき。

九番
左
春風に紅葉はなかる山河のしからむ氷今やとくらん　前和泉守藤原經清
右
いせの海やあまのうけのをくる春のうちはへ霞む浪の上哉　權少僧都宗我
左歌は何かしか歌とかや申つたへたる。立田河紅葉の氷
けさとけてこその時雨の色そなかるゝと侍るは。選集な
とには入侍らねと。あまねく人の口に膾炙そろをは。ふか
くはこれをされるにや。右歌無殊難。かつへきにこそ。
十番
左　散位源持房
春のくるしろしにあとやつくは山このもかのもの雪のむら消
右　從三位仲方卿
春霞たてともいまたふる雪は雲のいつくに猶のこるらん
右の歌。春霞たて共いまた降雪と侍るは。後鳥羽院の御
製。ふくひすの鳴ともいまた降雪に杉の葉しろきあふ坂
の山と侍るに。心詞相似たるよし申ともからあリて。左の
勝とせり。しかれ共此たてともいまた降雪なとゝいへる
ほとの事は。その作例も有へけれは。同類といふまての咎
には成侍るましきにや。
十一番
左　散位和氣茂成朝臣
峯たかみ猶ふる雪も消なくに何を春とかかすみそむらん
右　大僧都實政
奥山に聲たてそめて鶯や谷のふるすの春をしるらん
左右の歌ともなる事なし。左はいさゝかまさされると申へし。
十二番
左　大藏卿紀部成前朝臣
吉野山みねの白雲かすめともふるさとさむき春の明ほの
右　前下總守平氏數
雪をふく梢は花とみえなからさくらに遠き春の初風
左は全篇聞ふるし侍る。右は初句よろしからす。仍爲持。
十三番
左　施藥院使丹波賴長朝臣
天地の春をしれとや神代より霞たなひき氷とくらん
右　前伊與守藤原定範
今朝よりは霞そめつゝあめか下よろつの國も春にあふらし
左天地。右萬國。春色之所及。已似無遠近。霞彩之所蒙。亦
不辨淺深。
十四番
左　左大夫(史歟)小槻時繁
年くれし道やいつこと朝戶明ていつれはともに立霞かな

右　左近府生秦兼任

春來れと今朝や鳴らんきのふまてよそに思ひし谷の鶯

左ハ既罷年去之路。右ハ纔思春來之聲。共無殊難。可謂同調。

十五番

左　左近衛中將

山さくら咲るさかさるみよしのゝ花もなかはの春のしら雪

右　入空

月にすき雪にもらとき都人今きさらきや志賀の花園

左はよしの山。右は志賀の花その。いつれも捨かたきによりて。咲るさかさるみよしのといへる。詞のつゝきいかにそやきこえ侍る。又月にすきもてつゝに聞え侍るうへ。右歌の雪月をはいかにも賞すへきを。かへりて厭却する心は。花を詮要とせるには侍れと。猶無念なるかたもや侍らん。

十六番

左　小宰相

たつきとのいかなる梅をさそひ來て我袖にしもにほふ春風

右　右衞門督

長閑なる比を盛の春にしもあひあふ春の契をそしる

左歌。題のこゝろたしかならす。仍右爲勝。

十七番

左　從三位仲方卿

春は今花のさかりの中空に　　　ほかりなと歸るらん

右　入道二位

此比は梅もさくらも同し枝にさくかと空に匂ふ春風

左右兩首勝劣一揆也。

十八番

左　權大納言

富士の根や春の半にふる雪のつもるもみえす立霞哉

右　經清

もろ人の春の衣の二月や梅さくらをこきまぜにして

左歌。心姿あしからす侍れと。ふしのみゆき。万葉にはみな月のもちに消てやかてその夜ふると申侍り。それにいま春の半にふる雪と時節をさゝれ侍るそ。いかにと覺侍る。右歌は玉葉に。もろ人の春の衣にまつそみゆる袖に迷き花のいろ〳〵と侍りしやらむ。下句なとは心を葉かはり侍れと。かゝる歌をそ同類とは申侍るへき。

十九番

左　時繼

雪消るきひの中山おひにせる霞もさむし二月の空

右　權少僧都宗我

山姫の袖のかすみの八重かさねさくらたちそへて二月の空

左歌。きひの中山の霞。承暦二年の歌合に。吉野あふさかの山のまちかくいひならはしたるをうちすてゝ。はるかにきひの中山まておもひ入けむ。霞のたちところいかゝなと侍しやらん。そのうへかすみもさむしと侍らは。雪きえ白心にてやとはりにかなひ侍らん。右歌。八重かさねもいたくみゝなれす。さくらたちそへても。あまりのひてや聞え侍らん。兩首の霞。おひにすると袖にかさぬると。いひかへたるはかりにて。をはりの句なとたゝ同し事に侍れは。なそらへて勝負をさためすや侍らん。

二十番

左　　法印尭孝

青柳もわつかになひく比よりやうす花さくら匂ひそむらん

右　　女　房

けふまつる三笠の山の梅かゝは神のおとめこ袖やふれけん

右は源氏物語に女樂の日女三宮の御かたちをたとへ侍るまて。きさらきの中の十日はかりの青柳の。わつかにしたりはしめたらん心地して。鶯の羽風にもみたれぬへく。あたにみえ給ふとあり。此事を思ひてよめるにや。いとおかしくこそ侍れ。右は素子のうたに。梅の花のことみかさの山のおとめをはすてゝとうたひ侍れは。その事とは聞え侍れと。青柳の糸のしなひには立ならふへくもあらさるを。なとてか持とつけられ侍らん。いとおほつかなくこそ侍れ。このつかひを判せられ侍しは。きさらき十日の事なりけり。時こそありけれ。その日しも春日のおほんまつりにあたりて侍りしかは。神の納受うたかひなきよしを人々申侍りて。かつは永年の例にまかせつゝ。神慮をもて持とはしるされ侍りけり。

廿一番

左　　持和朝臣

二月やおほろ月夜の影まてもかすめる花のえに社有けれ

右　　近　衛

待侘る花の日数のつれ／＼に雨さへはれぬきさらきの空

(注)紫式部歌讀のほとよりも物かく筆は殊勝の上。花宴の巻殊に艶ある物なりと。六百番の判の詞にかゝれ侍るに。今の番の朧月夜のさし出侍るこそいとおかしく覚え侍れ。かの南殿の櫻のえんはてゝ。人々あかれ侍るに。れいのみすくしかたき御心地に。こきてんのかたに立より給へるは。まことにおほろけならぬえにこそはありけめ。きさらきやとさたかにうち出すとも。その事とはたかふましく覚え侍るを。なとてかおほめかすありけん。かの人の御ため。いよ／＼つみのかれかたうも侍るものかな。右歌さへはれぬも。春のものとて詠くらしけんつれ／＼。なくさ

めかたうこそおほえ侍れと。猶朧月夜のあはれにはしく物なくや侍らん。

廿二番

左　爲季朝臣

梅か香の空にみちぬる春風にさかぬ梢やなへてにほはむ

右　持　房

狩人のおるかやあやな花とりもつまこめてなく山のさくらを

左歌。是も題のこゝろうとくや侍らむ。右歌は京極中納言の花鳥の詠を思ひて讀るなるへし。おるかはあやなは古歌の詞なるに。一字の相違こそおほつかなく侍れと。右は歌めきて覺え侍るによりて。勝とさためられ侍りしやらむ。

廿三番

左　大僧都

佐保姫の衣きさらきふる雪に又立かへりさむき空かな

右　權大僧都實政

山の端に初櫻花匂ふらしみし雲ならぬ春の明ほの

左右ともに無殊難。爲持。

廿四番

左　定　衡

しら雲も櫻に匂ふ山のはに時なるかなと雉子なく也

右　正　徹

花さかり霞のみおも深き夜の春のも中ににほふ月影

左歌。時なるかなは山梁の雌雉を讀るにや。本文古集たとを歌によむ事は。不明不晴朧々月なとを。大江千里か詠したる作例なきにあらされと。是は歌の本意にあらさるよし。ふるくもさたある事にや。右。霞のみおに春の夜中の月影匂ふらん。艶にきこえ侍り。勝に侍るへし。

廿五番

左　持　純

いなり山けふとて越る春の空花もこゝろにおもひそめてき

右　中納言

足曳の山のしらゆき消やらて霞もさむききさらきの空

左。いなり山の花は。かの青かりしより思ひそめけん。紅葉を花に折たかへたるにや。二月の初午にはしをしなへて杉をこそかさすなるに。花に思ひそめけむ心の色。わりなくおほえ侍る上。右の雪は近き世の家の集に。足曳の山のみゆきの消ぬまは宮古の春もさゆる空哉と侍れは。同事にやとて。左の勝に定められ侍き。

廿六番

左　氏　數

立かくす霞に峯は遠くとも見にくる花の奥はのこらし

右　常秀
梅ならぬ櫻か枝も袖ふれてかさせはおつる二月のゆき
左歌。すかたよろしく侍れと題の心うとく。右は二月の雪たしかなるによりて勝とせり。但後に勘見侍れは。曾根好忠か三百六十首の歌中春の題に花を尋る心をよみ侍り。此作例によらは。左歌。霞に峯はとをくともみにくる花とつかふまつれる。ひたすら落題にはなり侍るましきにや。

廿七番

左　秦兼任
さほ姫の衣二月いつとてかかすみかくれに雪のふるらん

右　茂成朝臣
手折つゝかさす袂に二月の雪とや梅の花はちるらん
左歌。さほ姫の衣二月。あまりに耳ならし侍り。右の二月のゆき落衣もめつらしからす。なそらへて持とや申侍らん。

廿八番

左　成前宿禰
きのふけふ花に長閑き心かな春もなかはの日数とおもへは

右　盛長朝臣
足曳の山下きゝすなれも又花の時しるききさらきの空
左。山下きゝす。いたくみゝなれ侍らす。左もよろしからさるよしさたありて。持と定られき。

廿九番　後春

左　權大納言
別れ行とりの跡まて玉つさに春の名殘をかきはつくさし

右　小宰相
年をへてしたふかひなく行春に又こりすまの心そめけり
左は詞花集に。崇徳院御歌。おしむとて今夜かきをくことの葉やあやなく春のかたみなるへき。又顯昭法師歌。今夜かくこゝろつくしのとのはや秋をとゝむる文字の關守。この二首の心にかよひ侍れと。歌から右よりははるかにまされるにより。勝とさためられ侍り。

三十番

左　右衛門督
咲藤のわかむらさきのかさしにもかくれぬ老の浪そかひなき

右　女房
淺みとり野原のつゝち末つゐに春のいやおひと成にける哉
左はおりてかさゝむ老かくるやといへる歌の心をとりて。かくれぬ老の浪そかひなきといへり。右はひき野ゝつゝちすゑつゐにといへる歌の詞をかりて。春のいやおひと成にける哉とよめり。ともに本歌を忘すといへとも。若紫の藤猶色ふかくして。あさみとりのつゝち。さらにみ所

なゝ侍るに。持にさため侍るはいかなるとにかありけむ。

卅一番

左　　　　　　権少僧都宗我

春さくれみはしの花もちるなへに聲やはおしむ宮の鶯

右　　　　　　氏　数

うくひすはかへりてうとき歟冬の花のあたりにかはつ鳴なり

左。禁花春暮。宮鶯聲老。偏賤上陽之愁。不類内閣之曲賦。右歌。うくひすはかへりてうとき山吹といへり。詞のつゝき。鶯も山吹になくへきものと聞え侍り。ともに心もとなゝ侍るにつきて。宮のうくひす。今一こゑなきまさるにやありけん。勝のよしを各申されき。

卅二番

左　　　　　　成前宿禰

嵐ふく花の白雲空に消てゆくゑもしらぬはるの別路

右　　　　　　為季朝臣

此春をさかふる時に待えてや猶色まさる藤のむらさき

左の花の白くも。西行かふしのけふりを本歌にとれるに似たり。不可然事にや。右は祝の歌に事よせて。勝侍るへし。

卅三番

左　　　　　　左近衛中将

散しける櫻山吹いろ〳〵にこゝろをわけておしむ春哉

右　　　　　　持和朝臣

おしむともなくてかわつは鳴ぬらし春行水のはやき日数を

左右ともに春をおしむにとりて。花の色よりも猶蛙の聲は心ありて聞え侍れは勝侍らんかし。

卅四番

左　　　　　　正　徹

行春のやみのうつゝの遅櫻夢路さたかに見をそ聞

右　　　　　　法印堯孝

さほ河や千代の藤浪匂ふえなかれ久しき春のとまりに

左歌。やみのうつゝの遅櫻。ことはのつゝきいかにそや聞え侍る。たゝしやみのうつゝの鵜かひ舟なと。つゝけよめる事も侍れは同しことにや。右歌。千代の藤浪もしをさへたる造語にやと侍りしを。千代の詞はとによりてかくのとくもつゝけ侍り。千代のふる道。千代のくれ竹なともよみ侍るうへ。藤氏はしまりて累葉に及侍れは。祝詞によせてもなとかよみ侍らさらんと人々も侍しにや。よりて持とはさためられ侍り。

卅五番

左　　　　　　定　衛

梢まて花は咲こす藤なみのしたにのこれる松風の聲

右　　　　時　業

大かたは花鶯にとつきていまはた惜むはるの別路

左歌無殊風情。右歌。おほかたはの詞も。このましからぬよし申ならはし侍るとかや。又持とす。

廿六番

左　　　　持　経

あふてたる花の色香をとめをかは袖のほかにや春はくれまし

右　　　　入道二位

やよひきて心ひけとも梓弓春はいくかもあらしとそ思ふ

左歌。第三句いさゝか聞にくゝ侍り。右歌。下句春はいくかもあらしとおもへはといへる。古今の歌をきなからそのまゝによめり。作者さためて忘却歟。よりてしはらく左の勝とさたり。

廿七番

左　　　　持　房

暮て行かきりしあれは鴬のなき世をはるに何とうらみん

右　　　　大僧都

さくら花ちりての後のおもかけはやよひの空にあり明の月

左歌。かきりの聞えぬにて侍らぬと。鴬のなき世とうちさたまたる。詞めつゝきやたとらるゝかた侍らん。右歌。さくも花散ての後の面影は三月の空に有明のなとは。誠に妖艶にきこえ侍れと。のゝ字五かさなりて侍こそあまりに侍れ。大よそ蜂腰鶴膝の病といふ事の侍ことにや。しかれとも六百番の判者五條三品は。この病たゝす華苗侯ことて。さまてさたせらるゝことも侍らす。それ〳〵も千五百番の歌合に家隆朝臣。かねのこゑしきの羽をとゝ異なり暁寺のきりの明かたの空とよみ侍るを。定家卿門〔?〕侍とて。基俊は鶴膝蜂腰なとたに申て侍るに。右歌のゝ字六かさなりて侍るやあまりに侍らぬと申されしにや。しからは五字六字の同字をは。歌合にいたりては。猶はゝるすましきことに侍るにや。

廿八番

左　　　　茂成朝臣

すまの蜑の塩やき衣なれにしもしらぬなみちに春そ暮行

右　　　　秦兼任

散しより待へき花ものこらぬに残るやよひそ人のためなる

左はなれしもしらぬ春をうらみ。右は人たのめなるやよひをかこてり。ともに殊難なし。同科とや申侍らん。後日に勘見侍れは。左歌。定家卿。さとのあまの塩やき衣たちわかれなれしもしらぬ春のかりかねと侍る。同類なるへきにや。

廿九番

左　　權大僧都實政

みし秋の一入そめの紅葉かと人やたとらん山ふきの花

左　　近衛

あふさかの山の櫻はちりはてゝ春をとゝむる關守そなき

左歌。順德院の御製。川のせに秋をやのこすもみちはのうすき色なる山吹の花と侍るをは。もみちうす色。古來山ふきによみ殘し侍るよし。定家卿も申されしにや。この作者しらすしてよめるとも。いはゆる遼東のゐのこのたとへ成へきをや。右。相坂のさくら。これもみゝならし侍り。春をとゝむるに關城の岡をもちひさるよしは。今に始ぬ事成へし。

四十番

左　　常　秀

楕さへ若紫に色かへて老木やいとふまつのふちなみ

右　　入　空

長閑なる池の心の藤なみもむかしにかへるやとのはる風

わかむらさきの藤老木の松にかゝれる風情。常に見及ひ侍る事にや。池の心のふちなみも。詞のつゝきはいかゝとおほえ侍れと。祝言に事より勝侍るへし。

四十一番

左　　盛長朝臣

花までも今一しほは三笠山さかゆく藤のかけそしらるゝ

右　　中納言

なれけるも悔しとまては思はれすしたふに花の散はうけれと

左右の歌ともなる事侍らぬにや。勝劣の科にをよはさりき。

四十二番

左　　從三位仲方卿

さくら花ちりて日數を殘さすは藤山ふきの春やなからん

右　　經　清

行春を鳴てとゝめよ相坂の關の外山のうくひすの聲

左右の歌同科なるによて持と定られき。但左歌。さくらた賞し侍らは。藤山吹の春はなくとも。今一日もとこそいふへく侍に。ちりて日數をのこさすはなとゝ侍るは。櫻のとくちるをよしと思へるかたにやとりなされ侍らむ。そのうへさくらのあるによりて。ふち山ふきの咲ましき道理も侍らぬにや。

四十三番　初夏

左　　右衛門督

たちそへてさらにそしたふ夏衣うらみはてたる春の名殘を

右　　左近衛中將

夏衣しのにかけほし卯の花のさける垣ねは川やしろかも

雨育の夏衣。左は恨はてたる春の名殘をといへる。優によ

ろしく侍り。右はさける垣ねは河やしろかもといへる。又たけありて聞え侍るにや。抑河社は貫之か歌よりとおこれり。六百番の歌合にも。此事再往さたありしかは。しねんに芳躅にかなへるにたり。先しのにかけほすは。常にしけき心にて。七日ひさらんのとはりもかなひ侍に。卯花のさかりいくはくもなきものに。河社をたとへんといかゝと申さるゝ輩は侍しを。その時はとりわき一決するまての事は侍らさりしかとも。たとへは卯花にとりて。あるひは月にたとへ。あるひは浪にまかへたる。作例うたかひなき上は。河社にたとふるにつきて。しのにかけほす夏衣かとうたかはんは。その心たかはす侍らん。續後撰集後京極攝政歌に。春霞しのにころもをおりかけていくかほすらんあまのかく山と侍り。あしたに立ゆふへにきえて。山風にもみたれやすき霞の衣をたにも。しのにおりかけとよみ侍るにや。

四十四番

左　　　　　　　　　近　　衞

年毎にけふはあふひのもろかつらかけてそ賴む神のしるしを

右　　　　　　　　　爲季朝臣

けふは又ひとへにみゆる夏衣いく千とせをか猶かさねまし

左歌。堀河院百首に。昔よりけふのみあれにあふひ草かけてそたのむ神のしるしをと侍にや。右歌は續古今後京極攝政うたに。けふよりは千代をかさねんはしめとて先なとへなる夏衣哉と侍り。左右共に同類有。仍爲持。

四十五番

左　　　　　　　　　常　　秀

をしなへてしける梢に成にけりいつれを花のあとゝたにみん

右　　　　　　　　　藤長朝臣

山さくら咲るさかさる陰まても青葉にかへす夏木立かな

右歌。古今に。春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかさる花のみゆらんと侍るは。當時半開の花にさしむかひていへるにや。それに夏木立になりぬるまて。さかさる花やはあるへきを。咲るさかさると侍るは。おほつかなく覺侍り。左はとはりたしかに侍るにつきて勝へきにや。

四十六番

左　　　　　　　　　時　　賢

したひこし春はいつくにくれはとりあやしときけは鳴時鳥

右　　　　　　　　　入　　道

夏きてはかけも梢もふかみとりなにかはうすきころも手の杜

左歌。くれはとりあやに戀しくなとは優に聞え侍り。あやしときけはなくほとゝきす。よろしくも侍らぬにや。右歌は聲韻平仄の二病をおかし侍り。たゝし近比は是まての

猶たゝす事も侍らぬにや。時にしたかひ事により侍らんかし。

四十七番

左　　　　持房

夏衣たれゆへならすたちかへて春はきのふとしのふもちすり

右　　　　中納言

卯花のさける垣ねのあるしとや人よりさきに夏をしるらん

左歌。しのふもちすり誰ゆへにの本歌をおもへり。右は堀川院の百首に。梅花さける垣根のやともりや人よりさきに春をしるらんと侍り。心詞同しきによりて左勝とせり。

四十八番

左　　　　定衡

たちかふるならひもさすかつらからし花のかとりの衣之せは

右　　　　正徹

一こゑに身をやはすてむほとゝきす卯月の花の雪の山人

左歌。花のかとりの衣。みゝならし侍る風情之。右は雪山の童子半偈の偈に身を捨る心。ほとゝきすの一聲におもひよせたる。めつらしきにつきて勝侍りなんかし。但千載集に俊頼歌に。なとてかく思ひそめけんほとゝきすゆきのみ山の法の聲かはと侍るに。面影にかよひ侍れは。いかゝとおほえ侍れと。孤白裘をぬすむといふ事は。詩家の法にも侍れは、さのみこそ侍らめ。

四十九番

左　　　　権大納言

神代よりかゝる契にあふひくさけふのかさしと成にけるかな

右　　　　大僧都

榊葉に卯月のみしめ引はへて八十氏人の神まつるころ

左右殊事なきによりて持と定られき。後日に勘侍れは。ともに同類侍り。左は有家朝臣歌。神代より年に一たひあふひくさあふひまれたるかさしなりけり。右は行家朝臣歌。さかき葉に卯月のみしめひきかけてみむろの山は神まつるなりと侍るにや。

五十番

左　　　　持房

春過て夏箕の河になくかものあをはにしける山の陰かな

右　　　　持和朝臣

忍ふなよ卯月のものと時鳥雲にもしめをゆふくれのこゑ

右歌。雲にもしめを夕くれの聲なと優に聞え侍り。左は萬葉の古風を存せるはかりにて見所なく侍る。勝とさためられ侍るは。ひとへにおたのいつはりに侍るへし。

五十一番

左　　　　從二位仲方卿

夏くれは薄きみとりにかへてけりとを山櫻の花そめの袖

右　法印堯孝

榊とりあふひかさしての〻宮に神わさしけき時は來にけり

さか木とり葵かさして神わさしけきなとは。齋院の御禊の事をいふめり。絶をつき廢をおこさる〻時代にあたりて。みそき河の浪もむかしに立かへり。むらさきの野の宮も。ふたゝひつくらるへきしるしと覺侍れは。遠山櫻の花そめの袖も。あしからすきこえ侍れと。いにしへをこひ今をいはふに寄よせて。右を勝と申し侍るへし。

五十二番

左　成前宿禰

ほと〻きす夜半にきにけり一聲を夢とやいはん現とやいはん

右　氏數

櫻色になれし雲の衣手もはや立かへて山風そふく

ほと〻きす夜半にきにけり一聲よりも。さくら色の雲のころもは。たちまさるにやありけん。勝ときさためられ侍り。

五十三番

左　入道二位

夏衣けふも殘れる花の香に日數はつれて移らすもかな

右　經清

しらなみのよるの垣ねの卯花に月の御船のかけやさすらん

左歌。殊に難も侍らぬにや。右歌。白波のよるの垣ねなとをき月の御船のかけやさすらむといへる。いさゝかあやつらしきさまに侍れは。勝にさためられ侍り。但後日にみ侍れは。右歌は遍身病侍りけり。その子細はさきにしるし侍れと。近比はこの病たゝす事も又舊儀なる事也。

五十四番

左　小宰相

花染の衣も今朝は立かへてすゝしき袖に夏はきにけり

右　持綱

山かけに今は垣ねやしめ置ん身をうの花の咲にまかせて

右歌。身をうの花のさくにまかせてと侍る。心有て聞え侍り。勝へきにや。

五十五番

左　權大僧都賢賴

夏きては里のかきねに白妙の衣ほすかとみゆる卯の花

右　權少僧都宗義

一夏を今朝よりむすふ露分て卯花山にしきみつみつゝ

左の歌。あまのかく山の本歌をとり用るにや。此風情常に見及侍り。右歌。一夏といへる詞このましからす。又つの字五まて侍れと。一夏安居の苦行の趣は。心さし淺からす

覺侍れは。勝字をさつけられ侍り。

五十六番

左　　　　　　　　　　茂成朝臣

花の香をとめし名殘も夏ころも今はひとへにたちそかへぬる

右　　　　　　　　　　秦　兼　任

みよしのゝあをねか峯の夏木立しけろも同し色やそふらん

左右同し程なる歌也とて。勝負を論するに不及侍りき。

五十七番　中夏

左　　　　　　　　　　大　館　都

たかさとも鳴ふりぬへし時鳥ひとひもはれぬ五月雨の空

右　　　　　　　　　　持　　　房

五月雨は詠くらして飛鳥風たゝいたつらにふる日數かな

左歌。鳴ふりぬへし時鳥ひとひもはれぬ五月雨のなと。いひしりて聞え侍り。右。あすか風たゝいたつらになと。又柿本の餘風を存せり。たゝし爲家卿歌。たをやめの袖もほしあへすあすか風たゝいたつらに春雨そふると侍り。春雨の五月雨になりたるはかりにて。本歌のとりよせも同事にや。仍しはらく左を勝とせり。

五十八番

左　　　　　　　　　　正　　　嶽

軒の草あやめも露の匂ひにて袖まきほさぬこすの夕風

右　　　　　　　　　　持　　　経

過やらぬ雨はさ月の玉かしは軒はのこけにおつる露かな

左歌。まつ軒の草とをかれたる。てつゝに聞え侍り。連歌なとにはかやうの五文字も侍にや。袖まきほさぬもことゝいはんとての秀句にやと覺侍れと。こゝにはよせなくや。袖まきほきん人もなき身にといへるは。艶にこそ聞え侍れ。右歌。過やらぬ雨もはれくもり。さためなき梅雨夕立の心地そし侍ろ。さみたれのをやみなきは。過やらぬなとのさたにおよはすや侍らむ。軒はの苔も下朽るはかりなる。まやの軒は青苔ふかくすろ事は。うたかふへきにも侍られとも。玉かしはといひ。又苔とをかれ侍る。あまりにくたけてや聞え侍らん。軒の草。軒の苔。露のをき所なと。大器等閑なるにや。仍持とさためられ侍りき。

五十九番

左　　　　　　　　　　持和朝臣

あやめ草花たちはなも折からや軒はにかほる妻と成けん

右　　　　　　　　　　経　　　清

しつのをか早苗とりつゝ五月雨のひまある比やひまなかる覧

左歌。大中臣能宣はあやめを妻とおもひ。花山の上皇は花たちはなをつまとよませ給へり。この二のうち。いつれをももらさすつまとみ侍る。やとのあるしの心おほさそ。中

くおかしくおほえ侍る。右歌。さなへとる田子のもすそしほるゝをやくにし侍れは。五月雨のはれまのまつへきことはりも侍らぬにや。左歌いさゝかまされるにや。勝とせり。

六十番

左　　女房

さ月とて咲や橘まひなしにたゝなのるへきほとゝきすかな

右　　入道二位

袂にも千代をかくへきためしとやぬま江の菖蒲けふは曳らん

左歌おやしの翁か歌に侍りけり。風情のつきぬるにより。み、遠き旋頭歌をさへひきゐて侍れは。勝負なとの事は思ひもかけ侍らぬを。右の歌のきたに不及。左右なく勝字を付られ侍りぬる。かへすくも片はらいたくこそ侍れ。

六十一番

左　　權少僧都宗我

たかね猶雪とや氷る五月雨にさのみまさらぬふち河の水

左　　法印堯孝

きたかにはいつ開わかんほとゝきすをのかさ月もやみの一聲

左右共に無殊難侍るにや。なすらへて持とす。

六十二番

左　　[illegible]

夏衣ほすまもあらし五月雨の雲をかさぬる天のかく山

右　　右衛門督

雲ふかきへたてもいつか山鳥のおろのはつおの五月雨のころ

左。雲をかさぬる天のかく山。右。おろのはつおの五月雨の比。ともにいひしりて聞え侍り。又爲持。

六十三番

左　　權大僧都實政

春はまつ御はしをちかみ咲し梅の名殘ににほふ庭の立はな

右　　左近衛中將

時鳥契ありてやふるさとの花たちはなにかれす鳴らん

左歌。御はしをちかみ咲し梅の名殘に匂ふ庭の橘と侍るは。右近の橘の事にやと覺侍るを。梅のなこりに匂ふと侍るはおほつかなく侍る。後照念院關白歌。九重の御はしのさくら君か代にいつまて梅の匂ひなりけんと。讀給へるを思ひわたり侍るにや。右歌。千さとかやとりせし花たちはなもかれなくになと時鳥こゑたえぬらんと侍る心をとりて。花立はなにかれす鳴らんなと侍るは。難ならさるにあらすや侍らん。勝へきにこそ。

六十四番

左　　近衛

我心かよふよとのゝあやめ草ひかすはいかて妻となるへき

右　　　　定衡

五月雨はおもはぬ浪のたか島やかち野も舟の往來とそなる

左歌。陸とも聞とも侍らて。たゝ妻と計はより所なくや。

右。五月雨。かち野も舟のかよひちと成らん。あまりに水

おひたゝしく侍るうへ。おもはぬといへる詞も。好用へき

にあらされは。たすらへて勝劣を決せすや侍らん。

六十五番

左　　　　茂成朝臣

山城の淀野のあやめ露分てかるてふ人も袖にかゝらし

右　　　　入空

月にとはたのめぬものを時鳥なそも難面さみたれのそら

左歌。あやめひきさくる賤のおのおりたつこひちも。をの

かためとは心さし侍らぬものから。猶かりにも袖にかく

らん。心ありてみえ侍り。右のなそもつれなきなと。又い

ひしりて聞え侍り。又持にや。

六十六番

左　　　　小宰相

おのつから人こそとはね五月雨のふるやのなかめ日を重つゝ

右　　　　秦兼任

玉水の數もかきりもなかりけり軒のしのふのさみたれのころ

左歌。ふるやのなかめ。よろしくも聞え侍らす。なかめは

なかむる事。あはれはあはれ成事に詠すへし。なかめあは

れとて。別にものゝあるやうには不可詠之由。定家卿も申

侍るにや。右の歌。數もかきりもなかりけるも。又優にし

も侍らす。これも持とやありけん。

六十七番

左　　　　時案

三吉野や瀧のみかさはみえわかて雲に音そふさみたれの比

右　　　　中納言

五月やみ待ともしらて鳴こゑはまたもともしの山ほとゝきす

右歌。まつともしらては。ほくしの松に時鳥をまつ心をよ

そへたるにや。またもともしとは。聲のまれなる心とはを

しはかられ侍れと。あはれしらぬまつ[illegible]おの鹿をさしむき

て。郭公をまつへき事おほつかなく侍れは。難なきにつき

て左を勝とせり。

六十八番

左　　　　從三位仲方卿

三輪の山杉こそ立れ五月雨の降そふ空(雲イ)のみおのしるしに(ヲイ)

右　　　　盛長朝臣

五月山(雲イ)ともしの松による鹿も身はやすからぬよにこそ有けれ

左歌のみを。川とも海ともなくては。そのよせなくてや侍

らん。亭子院の歌合に。水なくて滕浪と讀るをたにも申侍

しにや。又千五百番歌合に定家卿。雲の波霞のなみにまかへつゝ。吉野の花の奥をみぬかなと讀侍るを。俊成卿は雲のなみ霞のなみといへる。ともに浪のよせなく〳〵や侍らんと判せられしにや。右のともしの篝も。かれか身にたはりておもひ侍れは。身はやすからぬといはんは。なをさりの事にや侍らむ。よて又持とせり。

六十九番

左　氏数

しらさりし昔をかたる友なれや花立はなの軒はもる月

右　權大納言

足曳の山のは出るほとゝきすなく〳〵や五月の雨のくれかた

左歌。軒はもる月は。千五百番歌合に。後京極攝政らた。夕くれの一むら雲の山めくり時雨はつれは軒はもる月とよみ給へるをたに。定家卿は終句の月やすこしさゝへて聞え侍らんと判せられしにや。右歌。ほとゝきすなく〳〵や五月とつゝけ侍る事は。古今の歌の詞なれは。いく〳〵たひよめるともはゝかり侍らし。それに雨のくれかたとつゝけられ侍れは。又かの攝政の雨の夕くれの歌と同し事になり侍るにや。仍又同科とや申侍らん。

七十番

左　常秀

またて聞ならひもあれな時鳥をのか五月も猶そへ〳〵れなさ

右　爲季朝臣

過やらてしはしやすらへほとゝきす花たちはなも今盛なり

左右のうたゝをのかさ月も猶そへ〳〵れなさ。花立はなもさかりなり。おなしほとの事にや。

七十一番　後夏

左　法印[illegible]守

けふしこそ夏と秋との中つゝを御祓せし世はいつにか有けむ

右　右衛門督

露なからもはる螢は淺ちふのをのかおもひや身にあまるらん

左歌。中つゝおは。かのあはきの原にみそきせし時あらはれ給へる。住吉のおほん神の御事にや。夏と秋との中へ、おなと。めつらしきにめうつり侍るにやありけん。又[illegible]をいとそれ侍るにやありけん。左右なく勝にさためられ侍りき。右歌。あさちふのをのか思ひなと。をとるへきには侍らぬにや。

七十二番

左　小宰相

我宿の庭の草葉にとふ螢秋より先に露かとそみる

右　時家

かきくらし山のはめくる夕立の雲ひとかたは月やいつらん

左右のうた。殊勝劣も聞え侍らぬにや。

七十三番

左　持　和朝臣

消もあへすやかてふりこんふしのねの雪や時しる望月の空

右　正　徹

みな月の風の上なる雲やこれ夏の外なるあまの羽ころも

左。赤人の歌。ふしのねにふりをく雪はみな月のもちにけぬれはその夜降けりと侍るに。心詞いくはくの相違も侍らぬにや。右。第三句もみゝにたちて聞え侍り。たとへはかやうの詞つかひは一首の姿によるへきことにや。又上なると外なるとは。喜撰からんといへる詞の二侍るを。同心病と申によらは。尤はゝかるへく侍るを。西行歌に。ふりにけるわかよのかけを思ふまにはるかに月のかたふきにけりと讀るをは。御裳濯歌合に。五條三品その言葉をくはへ侍らぬにや。しからはこれらの同字をは。きらはさる時もあるにこそ。いかさまこの番又持とさためられ侍き。

七十四番

左　盛長朝臣

秋風をさそふ水あらはらき草のうきてはもえし夜はの螢火

右　持　房

秋ちかくうつれはかはる草葉哉花は紐とき露はむすひて

兩首のうた得失わきまへかたし。仍爲持。

七十五番

左　入　空

すゝしさも中々しらしひむろもりてる日はよその山の下かけ

右　大僧都

外面なるならの木陰にかよひきてまたきに秋の風そすゝしき

左は山の下かけに夏日をさり。右はならの木陰に秋風を得たり。兩篇の恩露をしたてゝ一味の納涼となせるもの歟。

七十六番

左　經　清

夏もはや末葉の萩の夕風にほのかにかよふ秋のこゑかな

右　入道二位

わきてしもたか爲とてか吹さらんなへて涼しき松の下風

左歌。荻の末葉とそいふへき。末はの萩はきゝつかすや侍らん。右歌無殊難。勝へきとこそ。

七十七番

左　常　秀

みそきするかもの川浪いつとかはたゝすの杜にかよふあき風

右　女　房

みな月の照日のあせの流出てかへらぬは身のよはひなりけり

左歌。たゝすの森にかよふ秋風なと。優に宜しくきこえ侍り。右歌は例のつたなき詞に侍りけり。あせのなといへるたくひ。古人も詠せさるにはあらされとも。ほりもとめたる躰装なからあやしく思侍るを。いかなる事にか有けん。勝へきよし申人々も侍りしを。堯孝法印すゝみて申侍りしは。此たひの歌合は上陛のまつりことをしたひ。中興の業をこひねかはれ侍れは。いかにも正しき風をあふき。すたれぬる路をすくはるへきを。かへりて耳なれぬ僻字をもとめ。目をおとろかす奇語をえらはれ侍らはいかゝはせん。初學いよ〳〵このみちにまとひ。後輩さらにかの非をさとることなからむ。其故は六百番歌合に後京極攝政の詠。あら玉のとしを雲井にむかふとてけふ諸人にみき給ふなりと讀給へるを。判者五條三品は。あら玉のなとをかれたる。一番のつかひとは覺へ侍るを。下句のみき給ふなりといへる。無下にたゝ詞に侍らむと申き。部のはしめの左の歌にて侍れは。かた〳〵勝のよしを申へかめれと。かの三品は此みちの本意を存せしによりて。ことはの中にも猶詞をいたはる躰を執せられしにや。照日のあせなと。作例あるへき事は申に及す侍れとも。此歌勝侍りなは。道のため心もとなくや侍らんとありしかは。かの直言誠にとはりをせめておほえ侍れは。まけに付られ侍るへきよし申侍りしを。猶折中の儀をもてなためられしにや。持とつけられぬるこそかたはらいたくおほえ侍れ。

七十八番

左　氏数

日ももらぬ梢を高み風吹はさなから秋のころもての森

右　持純

秋ちかく空こそならめうたゝねのよ半の枕も露そ置そふ

左歌は風吹秋衣。右歌は露濕夜枕。一得一失。無勝無劣。

七十九番

左　左近衛中將

住吉や松に涼しき夕風も夏と秋とのゆきあひのそら

右　中納言

夏はつる岩間の水の朝な〳〵むすふ袂に秋そしらるゝ

岩間の水の朝すゝみは。住吉の松の夕風に難及歟。仍以左爲勝。

八十番

左　從三位仲方卿

吉野河みおさかのほるうき雲や御舟の山の夕立の雨

右　權大僧都實政

みるまゝに野島か崎の夕すゝみ草にもなみをたつる浦風

左はみふねの山のうきくも。右は野しまかさきの夕風。と

もに無珠事。可謂同科。

八十一番

左　權少僧都宗我

またれつる月も軒はにかたふきて端居すゝしくふけぬ此夜は

右　爲季朝臣

年なみの半こえ行みそき河せきとめられぬ月日なりけり

左歌。はしゐはふるき詞に侍れとも。猶俗にちかく聞え侍り。右歌。後京極攝政歌。はやき瀬のかへらぬなみにみそきしてゆく年なみのなかはをそしると同し事にや。仍なそらへて爲持。

八十二番

左　茂成朝臣

末とをき君か經ん代はなかさかの氷室もたえぬみつき成へし

右　秦兼任

風そよき螢みたるゝ夕暮に夏と秋とをみな月の空

左。御代なかさかの氷室。堀河院百首師頼卿のうたに同きにや。右の風そよきも。門田の稻葉。まかきの荻なとあらまほしくや侍らん。又爲持。

八十三番

［闕］

八十四番

左　定衛

暮そむる光にみえて山陰もなつみの河にとふほたるかな

右　權大納言

西の海や夏も暮行浪の上に秋をまつらの沖の舟人

左。暮初る光とは夕陽返照の事にや。又螢の光にや。おほつかなく侍る。右。沖の舟人の秋をまつへきゆへ。何事と聞え侍らぬにや。なすらへて又持にや。

八十五番　初秋

左　入道二位

草も木もまた色みえす吹風の音はかりにそ秋はしらるゝ

右　左近衛中將

戀わたる紅葉の橋も七夕のなみたの色におもひそめてき

左無珠事歟。右。もみちのはし。古今には紅葉をはしにわたせはやと。うたかひて社よみ侍るを。もみちの橋とて。あるへきやうにつゝけ用る事は。このましからぬ事に。古人も申置侍るうへ。うちまかせて撰集なとにも見え侍らぬにやと申人侍り。證歌なと覺悟せるに及はされは。まつ左の勝になされ侍き。後日に勘見侍れは。新古今集實方朝臣歌。天河かよふうき木にこととはむもみちの橋はちるやちらすや。又公經公歌。星合の夕すゝしき天の河もみちの橋をわたる秋風。新勅撰集法橋顯昭歌。天の河わたらぬ先

の秋風にもみぢの橋の中や絶なん。續古今集天台座主澄覺歌。天の河もみぢのはしや秋をへてわたれと絶ぬ錦なるらん。賤過二句をはるたとへに侍れと。後學の爲にいさゝかしるしつけ侍る也。

八十六番

左　近衛

こく船のかいの雫や天の河みつかけくさの露と置らん

右　大僧都

秋には露も置あへすこのねぬる朝けの風に秋は來にけり

右歌は拾遺歌。秋たちていく日もあらねとこのねぬるあさけの風はたもとすゝしもと侍るに。心詞おなしきにや。よて左の勝とす。

八十七番

左　經清

天の河めくりあふせのなみもうし車をあらふ今朝のわかれち

右　茂成朝臣

常盤なる山の岩根の松風も秋とやけさはふきかはるらん

左歌。二星の心窓にはいかゝをしはかり侍へき。浪もうしとさしつめていへる。覺束なくや侍らん。右。ときはなる山の岩根。後京極攝政の歌と同しきにや。仍爲持。

八十八番

左　小宰相

露は又むすひもあへぬ初秋にはやふきかはる荻の上風

右　成前宿禰

置あまる露を秋にさそひきて草葉よりふく秋のはつかせ

左右共に金風玉露をよめり。いくはくの勝劣も侍らぬにや。

八十九番

左　持　純

よる浪も聲うちそへつまこもかるおふのかはらの秋の初風

右　權少僧都宗我

置そむる露もしくれて初秋の風におとろく草の手まくら

左。まこもかるおふの河原の秋の初風なと。萬葉の古風を存せれは。たけありて聞え侍り。但上句やいさゝかおもひたく侍らん。すみよしの松を秋風と云。又河風のすゝしくもあるかなとやうに申侍てや。うちよする浪も聞よく侍らん。右歌も無殊難。仍持と定められ侍り。

九十番

左　爲季朝臣

いつしかと軒の下荻はのかにも音こそかはれあきのはつかせ

右　權大僧都貫政

七夕は一夜そかきる荻の葉はなへての秋をちきるゆふ風

雨首の萩の風。いつれをよはしと聞わかすやありけん。一聲の秋なりとて。勝劣を附られす。

九十一番

左　女房

山かけや秋とあらしの吹なへに聞もかなしき日くらしの聲

右　常秀

古郷の秋は誰にか忍ふらんまたほに出ぬ萩の上かせ

左。日くらし。聞よくも侍らぬうへ。かなしきなといふ詞。いたくさのみ用へきにあらさるをや。右。又穂に出ぬ萩の上風なと優にきこえ侍り。尤勝侍るへきを持と付られ侍るは。こゝろもとなくこそおもひ給れ。

九十二番

左　氏數

露けさも身にしむ色もから衣袖にたゆまぬ秋の初風

右　權大納言

初瀬山たかね覺よりかねのねを枕にさそふ秋のはつ風

左は袖にたゆまぬ秋の初風。右は枕にさそふ秋の初風。斷腸のこゑとりとりに聞え侍るにや。

九十三番

左　正徹

色つかぬ秋の梢の露にさへ萩の錦のおくそみえゆく

右　右衛門督

秋きぬと岩井の水もむすはぬをけふは夏なき松の下風

左歌。錦のおく。さためて證歌も侍るらん。まつ家隆卿歌に。さえくらすさ夜の中山なかなかにこれより冬のおくもまさらしなと侍るは。山にかゝりて。冬のおくともよまれたるにや。萩の錦のおく。とはりのきこえぬには侍らねとも。猶おくのより所なくやと侍き。右歌は惠慶法師か歌をとられ侍につきて。かれは夏なから夏なきとよめる。一ふしをあらはせり。今の歌は秋きぬと侍るうへは。夏なきとは本よりいふに及はすや侍らんとて。しはらく勝劣を決するにあたはす。これみな儒案の判吹毛の難なるへし。おろかなる序にも。きすなきそしりいたむとなかれと申侍し事をは

九十四番

左　時榮

身にしめはいかてたへなん夕暮のいまたにつらき秋の初風

右　從三位仲方卿

草木より露は先置我か袖にふきてや風も秋をしる覽

此番初五文字みなてつゝに聞え侍り。左の身にしめはは身にしめなはの心にや。右の草木よりは草木よりものこゝろにや。童女のかふしなたらかなるへきものにこそ。

九十五番

左　持　房

うちなひき秋來る軒の下荻を露とやいはん嵐とやいはん

右　定衡

ふく風の音計かは秋といへは雲に日かけの色もかはりて

左右無殊難。又持にや。

九十六番

左　持和朝臣

きのふけふ秋かやなれぬ露の間も身はをき侘ぬ淺茅生の宿

右　秦兼任

秋そとも我またしらぬしのゝめにはや吹かはる風のをとかな

左歌。第二句古歌の詞はしり侍らす。いかにそやきこえ侍る。右歌は源氏の歌を思へり。いさゝか勝へきにこそ。抑源氏物語の歌本歌にとる事。持和朝臣は源氏は詞をはとる。歌をはとるへからさるにや。大よそ三代集の外うちまかせて本歌にとるへき事いかゝと申き。堯孝法印はかの物語歌よりもと葉をとるへきよし先達も申侍れと。歌をもまたく取へからすとは申侍らす。そのゆへは定家卿俊成卿女なとも歌をとりてよめるにや。又三代集の外とるへからさる事もいかゝ。後拾遺堀河院の百首作者まても。人の口にあらん秀歌をは。とりもちゆへしとこそうけ給り侍れと申す。後に勘見侍れは。三代集に入らぬ歌をは本歌とせすと申人〳〵も侍れと。それはさるへき事にも侍らすと。定家卿の判詞にもかき侍り。又後鳥羽院御抄に。釋阿寂蓮の說とて。源氏等の物語の歌の心をはとらす。詞をとるはくるしからすと申侍れと。近代はそのさたなしとしるし給へり。

九十七番

左　盛長朝臣

朝露もをきあへぬまの床の上にちりならぬ秋の風や立らん

右　法印堯孝

吹にけり露もいつしか深草や野となるさとの秋の初風

左歌不字有二。おほつかなきやうに侍れと。俊成卿定家卿等の判にとかめ申さるゝむねもみえ侍らねは。いまもこれにしたかひ侍るへし。但右歌頗優なり。勝へきにや。

九十八番

左　入空

なれぬるも荻の上葉をたよりにて心とさはく秋の初風

右　中納言

いつしかと荻の上葉に置露をけさ吹はらふ秋のはつかせ

第二句荻の上葉。終句の秋の初風。左右一同。勝劣難分。

九十九番　中秋

左　　持和朝臣

風寒みわさ田鴈金なく比は民のね覺を空にもよほす

右　　常　秀

すみにけり秋の㝡中の石清水神の心も月にしられて

右歌傍題を犯せるにや侍らん。三條大政大臣家歌合。叢中夜虫といへる題にて源順よめる歌。草むらのそこまて月のてらせはやなく虫のねはかくれさるらん。此時水上秋月といへる題ありき。又寛治御歌合。大納言公相卿早春霞に。あさみとり春の日かすもしられけりまた色うすき山の霞にとよみ侍るを。爲家卿判云。また色うすき霞にて。早春をしる心なしかと見え侍を。ふかきまての難には侍られと。かたはらの題の山や花より先に出きて侍らんといへり。此時十首の中山花といへる題あり。月といひ山といひ。一字をたに傍題と難せり。このたび秋神祇といへる題侍るに。石清水の㝡中の月まつこそいかゝとおほえ侍れ。これによりてしはらく左の勝とせり。

百番

左　　女　房

常盤山色もかはらて光そふこよひの月に秋は見えつゝ

右　　中納言

露ふかき淺茅か原によもすからいかなる人のころもうつらん

常盤山の色もかはらぬ風情。めつらしからぬ事なれとも。名月を賞せるにや。勝とつけられ侍り。

百一番

左　　法印堯孝

水の面に何かかそへんいさきよく月にもしるし秋の㝡中に

右　　持　房

すまのあまの袖には月もかけてうき秋の㝡中の浪そ立ける

左右兩篇の月。おの〳〵秋㝡中の光をあらそへるにつきて。左は西行歌。かそへねとこよひの月のけしきにて秋の半を空にしるかなと侍るに。その心おなしく侍るにや。右は心なき蜑の袖かけてうきと思はんまての事は。おほつかなく侍らんとて。持とさためられ侍り。

百二番

左　　左近衞中將

水の面にかそへし月も今夜とやそこの玉もに光そふらん

右　　持　純

こよひしも堺なたてそあまのかる㝡中の秋の月の光に

左歌。源順か後撰こそしは〳〵見え侍れ。但そこの玉もと侍るは。潭融可算藻中魚なといへる。心にもかよひ侍るにや。右歌。あまのかるもなかの秋。よろしくも聞え侍るのかな。これそ勝に侍るへし。

百三番

左　大僧都

引分のつかひもこゝに出にけり雲井の庭の望月のこま

右　小宰相

相坂の山の嵐に誘はれてかけさやかなる望月のこま

左右の望月の駒。ひき〳〵にあらそひ侍りしかとも。いつれを勝負としり侍らねは。しはらく持にさため侍き。

百四番

左　茂成朝臣

昔に牽駒のこゝろも引分のつかひは千代の秋もたえせし

右　經清

かそふれは身につもり行としなみを秋の宮中の月はしらしな

右歌。としなみはいさゝかたちまさるやうに侍りしかとも。宮中の月たひ〳〵出にしかは。めつらしからぬにや。大略持に定られ侍り。

百五番

左　右衛門督

鳴かりの涙の露も眞萩原もとの心のいろに出らし

右　入空

さゝかにの雲間の月も初鴈のくへき宵とやいねかての空

左右ともに本歌をおもへり。なすらへて持とや申侍らん。

百六番

左　權大納言實政

もえ出しみとりは同し色なから千くさにかはる秋花かな

右　權少僧都宗我

いたつらにわかよふけても秋に猶たかはの虫の月なくるかな

左歌は古今にみとりなるひとつ草とそ春はみし秋はいろ〳〵の花にそ有けると侍る歌と。その心露かはらぬにや。右歌。千載集清輔朝臣歌に。ふけにける我世のほとそ哀なるかたふく月は又も出なん。又待賢門院堀河歌。殘りなく我世ふけぬと思ふにもかたふく月にすむ心かなと侍り。この二歌に月のおもかけおもひ出られ侍れは。しはらく持とや申へからん。

百七番

左　定衡

さしのほる雲のちまたの光にもなかはおほゆる秋の夜の月

右　盛長朝臣

かよひくる鹿のねなから秋の色もなかはうつろふ萩の下露

左歌。唐人詩。關々萬海樹。清々出雲河。今夜一輪滿。清光何處無といへる心をおもへるとは見え侍れと。詩文の詞このましからぬよしはさきに申なはりぬ。右の歌は清原元輔か鹿の音なからうつしてし哉といへるをとれるにや

とおほえ侍れと。猶たしかにいひおほせすや侍らん。仍爲
持。

百八番

左　氏數

秋の月待出るかたの峯こえてこゝろをわくる初鴈の聲

右　從三位仲方卿

かそへしるならひなく共月かけを空にや秋の最中とはみん

左右いくはくの勝劣も侍らぬにや。

百九番

左　權大納言

名にしおふ秋のも中とてる月はこよひ千さとのひかり成けり

右　入道二位

くるかたも目にみぬ山の霧のうへに聲はかりきく秋の初鴈

又爲持。

百十番

左　時繁

久方のなかはの秋のさと人もこよひしれとやころもうつらん

右　爲季朝臣

またれつる秋のなかはにあふきみる月やてりそふ光成らん

左歌。しれとやといふ詞。六百番の判に不庶幾樣にみえ侍れと。久かたのなかはの秋のさと人なと。いひしりて聞え侍り。頗勝へきにこそ。

百十一番

左　正徹

たかねよりのほりつくして天の原秋のなかはにかゝる月かけ

右　成前宿[illegible]

天つ空くもゐよはぬ月影にこよひなかはの秋風そふく

秋のなかはにかゝる月影よりも。こよひ半の秋風吹と侍るは。月の光すみまさるよしをの／＼申侍りて。右の勝に定られ侍り。これにつきてさしもなき事なれと。筆者の得分にいさゝか申侍らん。良暹法師か板間より もりくる月のかけみれはやとはあらしてすむへかりけりとよみ侍るを。懐圓法師か初五文字を難し侍て。貫之かあれたるやとの板間よりと。歌の中間にをけるは。何とも聞え侍らす。これはおひたゝしく侍るといへり。今の歌のはしめの五文字に高ねよりと侍るは。俊頼のこからしの雲吹はらふ高根よりさらても月のすみのほるかなとよみ侍るには。をとりて聞え侍るにや。さは侍らぬやらん。

百十二番

左　近衛

かそへつる秋のもなかの空晴て名たかき月の光をそみる

右　秦兼任

やとりこし月の光もまし水に秋のなかはをくみてしるかな

右の歌殊外に宜しく聞え侍り。うたかひなき勝にこそ。

百十三番　後秋

左　經　清

朝な〳〵くれ行秋の俤もとをさかりぬるあり明の月

右　左近衛中將

しらきくのうつろふ色に紫の袖にのこりてにほへとそ思ふ

左はおもかけかすかにきこえ侍り。右はたけあらんとよめるや。なすらへて持とせり。

百十四番

左　近　衛

山寺のいかにをれはか唐錦名にもたつ田のもみち成らん

右　右衛門督

みるまゝにおしくも有哉長月の月ものこりの。秋そとおもへは

左右ともに優に聞え侍り。又爲持。

百十五番

左　女　房

長月は殘る霜夜の有明によはりはてたるむしの聲かな

右　氏　數

夕くれの秋こそあらめ鴈鳴てさむきあしたもうちしくれつゝ

右歌。鴈鳴てさむき朝は。殊にしくれもこそし侍るへき夕暮の。秋ならてはするましきやうに聞え侍るはいかゝとおほえ侍れと。左歌の下句。俊成卿のさりともと思ふ心もむしのねもよはりはてぬる秋の暮哉と侍るに。おもかけ思ひいてられ侍るよし。をの〳〵申侍て。右の勝とさためられ侍り。後日勘見侍れは。六百番歌合定家卿歌に。あり明の名はかり秋の月かけによはりはてたる虫のこゑ哉と侍りけり。との外の不覺にこそ侍りけれ。

百十六番

左　持和朝臣

夢さそふ八聲の後もしはし夜をかけのたれおの長月の空

右　權大納言

紅葉する梢の秋もみえわかし霧よりをちのさとの夕くれ

かけのたれおの長月なと。常に見及樣に侍れとも右の紅葉の梢きりにこもりて。その色みえわかれ侍らぬよりは。八聲の鳥猶聞所やあらんとて。勝とさためられき。

百十七番

左　正　徹

かたみとや木の葉かつ染置露を霜にまかせて秋の行覽

右　大館持房

菊ならてまた咲花も長月や霜にかれにし草のまかきは

左は木の葉の露。右はきくの霜。ふかきあさゝ。しはしてわ

きまへかたくや侍らん。

百十八番

左　爲季朝臣

今ははや秋の日數もほとなさに山の木の葉も染つくすらし

右　時業

くれなゐの色にそ風もたつ田山もみち吹おろす秋の夕暮

兩山秋興。雖有淺深之色。兩篇詞華。難決勝負之思。

百十九番

左　法印覺孝

秋はけふかねの音にも初瀨山もみち吹おろす嵐のみかは

右　入道二位

いをとせの數にもあまれ老をせくためしにむすふ菊の下水

左歌。秋はけふ鐘の音にもはつ瀨山と侍る。定家卿は正治百首に。初秋の心に侍るにや。又秋のはつる心にもちゐたる作例も侍るにこそ。右歌は液下流而傳上壽者三十餘家。〔[illegible]〕食日精與歸年類者五百箇歲といふ心にや。いつれもとに難なく侍れと。左はもみちの色いさゝかそめまし侍るにや。

百二十番

左　入空

床しむる尾花かもとに秋くれて野わきの末にらうつら鳴也

右　茂成朝臣

ね覺して夜を長月の有明に身さへつれなきかけそしらるゝ

夜を長月の有明よりも。尾花かもとの秋のおもひはいさゝかあはれもまさり侍るにや。

百廿一番

左　小宰相

昔か代も猶長月に咲ぬれはうつろふ色もしらきくの花

右　常秀

うきものと詠そめつる秋のかけもくるれはをしき長月の空

左右長月。或祝言或悲秋。惟情三吟嘆同。歌詞未辨。

百廿二番

左　持　純

秋風のさそふとみれはよしの川いはとかしはも紅葉しにけり

右　權少僧都宗[illegible]

聞わひぬしつはた帶の長月やあらしのつての夜半のきぬたを

左。いはとかしはのもみち。たけあらんとをこのめり。しにけりの詞こそ。文永の歌合に。眞觀はすてに撰集なとも此詞の侍るうへはその難侍らしと申侍れと。爲家卿は猶用意有へき事に申侍り。右。しつはた帶の長月。又おかしく聞え侍れは。しはらく勝劣をさためすや侍らん。

百廿三番

左　　中納言
外山なる正木のかつら長月の末野にかけてうちしくれつゝ
右　　權大僧都實政
さをしかの聲にも霜や結ふらんかれ〳〵になる野への草ふし
正木のかつら長月とをき。末野をかけて打時雨つゝなと
おかしく聞え侍り。又聲にも霜やむすふらんかれ〳〵に
なる野への草ふしなと優に侍るにや。又なすらへて可爲
持。
百廿四番
左　　從三位仲方卿
よしさらは時雨てはれよ長月の有明の月の夜半のむら雲
右　　持房
咲にけりちとせの種を手にまかせ植しみきりの白きくの花
左雖無殊難。右寵言に尋より勝と定らる。
百廿五番
左　　成尚宿禰
白きくのまたうつろはぬ露の上に霜とみるまてやとる月哉
右　　定衛
今よりは紅葉をさそふ色みえて木からしふかき秋の山もと
左。紫菊の句尋露上寒月。右。紅葉色混山下秋嵐。各述其
志。亦有同科。

百廿六番
左　　盛長朝臣
秋くれぬ正木のかつらくりかへしきぬたうつ夜の寒き嵐に
右　　秦兼任
なそもかくねてあかすらん長月の月に名殘も幾夜あらしを
左。正木のかつらくり返しきぬたうつ夜なとおかしく聞
え侍り。右はねてあかすらむ人さへそうきといへるふる
ことをおもへり。たゝし句恒はかんなりのつほにして事
につきてよめり。これはゆへなくや侍らん。又いきたなさ
も我人のあひたゝしかに聞わかれ侍らす。左歌。いさゝか
たちまさるさまに侍れと。正木のかつらも。と山の里にう
つ衣なとはさも侍らん。こゝにはいさゝかより所なくや
侍らんとて。しはらく持とさためられ侍り。
百廿七番　初冬
左　　女房
から錦けさより冬や立田姫染あへぬ枝にしくれ降なり
右　　小宰相
寢覺して聞は時雨の音す也これさへ秋のうきをのこして
左歌。宮内卿かちりあへぬ枝におとしふくなりと侍る歌
に同し心詞なり。右内の不覺にや。右歌勝へきに。なとて
か持とつけられ侍りつらん。

百卄八番

左　持

冬枯の朽葉か上の霜消て日影になるゝ木々の下つゆ　純

右　持和朝臣

うち時雨袖かへす日の入あやにかさしの菊は露こほれつゝ

左。清輔朝臣歌。冬枯の杜の朽葉の霜の上に落たる月のかけのさやけ さと侍る。上の句おもかけよりかよひ侍るにや。右歌は源氏の紅葉の賀の事をおもへり。本説たしかなるにつきて勝へきにて侍るを。かの物かたりのことはに。神無月十日あまりとは。御賀は菊もみちにとより。猶秋を賞したる證據とも侍れは。すこしはその心しらひもあらまほしく侍るを。うちさためてはしめの冬の心に詠し侍るは。物語の本意やたかひ侍らんと申人〳〵侍しは。これまた一儀ある事にこそとて。しはらく勝負をさためす侍りき。そも〳〵朱雀院の行幸は神無月のよしは。もみちの巻に侍るのみならす。若紫末つむ花の巻にも見え侍を。藤のうら葉の巻六條院の行幸の所に。むかしのことを書侍るとて。朱雀院のもみちの賀。れいのふるとおほし出ける。賀王恩といふものを奏するほとに。おほきおとゝの御おとこの十計なる。せちにおもしろうまふ。内の御かと御そをぬきて給ふ。おほきおとゝおりてふたうし給ふ。あるしの院きくおらせ給て。青海波のおりおほしいつ。色まさるまかきのきくのおり〳〵に袖よりかけし秋をこふらし。又朱雀院の御うたに。秋をへて時雨ふりぬるさと人もかゝるもみちのおりをこそみれ。此二歌にむかしの朱雀院の行幸をまさしく秋の事によみ給へり。此六條院の行幸も。やかて神無月廿日あまりもみちの盛とみえ侍るを。わかなの巻に。此秋の行幸の後。いにしへのことゝりそへてゆかしくおほしいつと書けり。かの二たひの行幸ともに十月の事なるを。歌といひ詞といひ。秋のよしかき侍る。式部か所存いともおほつかなく侍り。おろかなる心にいさゝか料簡し侍る事共侍れと。くた〳〵しけれはまつもらしつ。さるにても物語のおもて神無月と侍るにつきて。初冬の題によめらんは。うちまかせて難あるましき事にこそ。おほかた右の歌のすかた詞艶にはきこえ侍れと。ふる事をありのまゝにくさりつゝけ侍るは。我ちから入たる所侍らぬにや。無念に侍らん。そのとはり侍らす。題のこゝろはあらはれ侍るにや。

百卄九番

左　持

朝霜のふるからをのゝ秋の色はやゝとをさかる神無月かな　房

右　從三位仲方卿

散かゝり紅葉にそむる衣手を又色かへて山風そふく

左右となる勝劣も侍らぬにや。右の初五字こそいさゝかなたらかならぬさまに聞え侍れ。

百三十番

左　　近衛

閨の上に木のはのをとも時雨ふれは覚さひしき夜半の床哉

右　　右衛門督

冬の色はまた朝霜のさのみなと我もとゆひに置そはるらん

左歌。ねやとね覚と文字同しからされと。ふるき歌合にかゝるたくひをは同心病と難する時も侍るにや。右歌。拾遺集歴うた。くれて行秋のかたみにをくものは我もとゆひの霜にそありけると侍るを思ひ出られ侍れ。勝へきにこそ。

百卅一番

左　　権大納言

神無月しくるゝ雲の晴やらてあれぬ關屋にとまる旅人

右　　茂實朝臣

冬来ぬと名に社たてれ神無月秋もしくれし空のうき雲

左歌。時雨ははれくもり定めなきものにこそ侍れ。はれやらてと侍る。おほつかなくや。また關のすゑられ所もよせなくや。旅人のにはかにみえ来れるもいかゝとおほえ侍り。右歌。冬来ぬと名にこそたてれ。優ならさるにや。なすらへて持とさためられ侍り。

百卅二番

左　　中納言

時雨ふるま木の板屋もね覚して冬きにけりとおとろかれぬる

右　　前宮内卿

もみちはをぬさとは（本ノマヽ）たむくらん神無月にも成ぬと思ふに

左歌は實行朝臣かふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬると侍るにおなし。右歌は曾禰好忠かなにとなゆきていのらんとおもひしに神な月にもなりにけるかなと侍るにとならす。これらは同類なとゝいはまたくはへれと。本歌と文字の置所かはらぬにとりて。やかてその歌の思ひ出られ侍るにこそ。又一の難に本歌の詞をさなからとりもちゐて。心をひきちかふる事の侍り。詩家にはこれを鐵案の法と名つけ侍るにや。此二首の歌いつれもつかぬ難にや侍らん。

百卅三番

左　　季[illegible]任

時雨こそ星をわくとも神無月今日はたれとや冬をしるらん

右　　大僧都

散のこる秋の木の葉を手向置て時雨過ぬる神な月哉

左歌。常に見及すかたに侍り。右歌。實守卿うた。紅葉ゝを
幣も神に手向をきてあふ坂山を過る木からしと侍るに
心詞おなしきにや。仍又爲持。

百卅四番

左　　經　清

時雨ふり木のはをとする山里にさひしさ添て冬は來にけり

右　　盛長朝臣

長月はきのふの風のあらち山いつより冬の時雨きぬらん

左右の時雨いつれまされると聞わきかたく侍り。右歌。い
つよりのとゝは。いつのまにそとあるへき事にや。

百卅五番

左　　定　衡

たえ〱にしくるゝ雲の晴間より雫もみえてちる木のは哉

右　　入　空

落葉するおいその杜の下草も霜をいたゝく冬はきにけり

雫も見へてちる木の葉よりも。霜を いたゝく森の下くさ
は。いさゝか見所侍るにや。右勝に侍るへし。

百卅六番

左　　入道二位

梢をは拂ひつくして吹風の音のみ殘る冬は來にけり

右　　時　繁

したひわひし秋の形みの袖の露今はた染てふるしくれ哉

左歌は後京極攝政歌。露はみな はらひ はてたる秋風を松
に殘して月をみるかな。右歌は五條三品歌。いつしかとふ
りそふけさの 時雨哉露もまたひぬ 秋の名殘にと侍るに。
心詞おなしきにや。ふかき同類まてはならすや侍らん。

百卅七番

左　　權少僧都宗我

冬のくる色にみたれてをとも猶正木のかつらあらしふくな

右　　權大僧都實政

足曳の嵐やさらに神無月秋の名殘の庭のくれなゐ

左の嵐は 冬の來る色にみたれ。右の嵐は 秋の名殘の紅を
さそふ。淺深いつれとさためかたくや侍らん。

百卅八番

左　　氏　數

夕まくれしらぬ山路の外までもしくれ身にそふ冬はきにけり

右　　爲季朝臣

いつしかとめにこそみえね神な月時雨とゝもに冬やきぬらん

左は增基法師か神な月時雨計を身にそへてしらぬ山路に
入そかなしきと侍る心を とれるにや。いたく本歌とかは
れる所の侍らぬ とこそいかゝと おほえて侍れ。又夕まくれ
と侍るも。時はいつにても有へき事にや。右は秋きぬとめ

にはさやかにみえねとものうたをおもへるにや。此風情いにしへといひ今といひ聞ふるしたる心地し侍る。なすらへて持にや侍らん。

百卅九番

左　　常　秀

神無月峯の木のはなきそひきてあらしそ埋む山の下庵

右　　正　徹

人めさへかれの〻うへのむらしくれよそに聲するみねの松風

右のよそに聲する峯の松風よりも。左の嵐そ埋む山の下庵は。とほりたしかに聞え侍るや。勝へきにこそ。

百四十番

左　　左近衛中將

降まさる木のはを冬の初にてしくれは秋にかはらさりけり

右　　法印堯孝

花の香もしたはぬ比と衣かへいそきのみたつ冬はきにけり

左歌は雅經卿歌。秋山に時雨は過ぬ神な月木の葉そ冬のはしめとはふる。心詞同しきにや。右歌。ころもかへと侍るに。またいそきのみたつは。同しとのかさなりてや聞え侍らん。いかさま此番は持とさためられしにや。

百四十一番　中冬

左　　女　房

山あひにすれる衣のたけのふしいくよに成ぬかものみつかき

右　　持　房

ちはやふる神もさこそはみたらしや河風さゆる山あひの袖

かものりんしのまつりは寛平の比よりはしまれるにや。事の子細は。貞治の歌合にみえ侍れは。かさねて申におよはす。源氏若菜の巻すみよしまうての事に。山あひにすれるたけのふしとかける詞の侍りしやらん。たとへは臨時のまつりの舞人。あをすりの袍は竹を文にすれる事こそ。右。山あひの袖も。十人の中をいて侍らし。行粧の勝劣さたかにみえわかれ侍らねとも。たゝ左にたち侍るはかりをとにて。勝になされ侍にこそあらめ。

百四十二番

左　　左近衛中將

白雪も袖ふりとちよ乙女子かあとまてもみん雲のかよひち

右　　右衛門督

あまつ風あられみたれて乙女子かこれやかさしの玉しきの庭

左の雲のかよひちは。あまつ乙女の朝夕往來のみちなれは。めつらしからす覺侍り。右。玉しきの庭は。とへとしらたまいはなくにといへるふる事おもひ出られ侍りて。と葉の光みかきまし侍り。勝へきにや。

百四十三番

左

左　近衛

夕かけて秋のみむろの榊葉に霜をく月とはや成にけり

右　中納言

いかはかりかねのひゝきも消ぬらん霜ふる月のあけ方のそら

左。夕霜。右。曉霜。さか木葉の色も鐘のひゝきも。をきまよひてや侍らん

百四十四番

左　大僧都

をみ衣きつゝなれても年〳〵のとよのあかりはめつらしき哉

右　小宰相

さよ更て友さそひ行濱千鳥なにをうらみの音には鳴らん

左は殊難なく侍り。右。千鳥は花鳥の歌を思へるにや。たゝし京極中納言も。千鳥なくかもの河原の夜半の月一重にみかく山あゐの袖とよまれ侍れは。中冬の事と聞え侍り。千鳥はかりは題の心かすかにや侍らん。

百四十五番

左　經清

雲の上も夜や深ぬらし乙女子かかへす袂にあり明の月

右　茂成朝臣

乙女子か袖かへすなる久かたのくもゐの庭に代々をかされて

數輩の乙女子。いつれとおもひさためかたく侍れは。さらになへてや哀とおもはんと。かはらのおとゝの跡をそ尋ぬへきにや。

百四十六番

左　法印堯孝

けふとてや神のみやつこ雪をさへいたゝき侍るかすか野の原

右　持純

なをそたつ春と秋との中空に花ももみちも遠きおもかけ

左歌。いたゝきまつる。祭主輔親か御和たてまつりしも思ひ出られ。又俊頼朝臣のきさらきのはつさるなれやかすか山みねとよむまていたゝきまつるなと侍れは。たけありては聞え侍れと。雪をいたゝくと侍しは。猶そのすちの心詞あらまほしくや侍らん。右。春と秋との中空は冬の季とこそ算用せられ侍りつらめ。されとも夏の季も春と秋との中にあたりて。花も紅葉もなき比なるや。殊なる子細なと侍らすは。落題にや成侍るへき。左も勝までの事やなかりけん。持としるされ侍りぬ。

百四十七番

左　成前宿禰

夜半の霜月もさやけき眞砂地に數さへみえて鳴千鳥哉

右　權大納言

榊葉にをく霜月のはらさるは神まつるてふかすか山人

左。千鳥ゝ百四十四番の右の歌の例なるへし。これは何をへたて侍れと。月の名をあらはされ侍れは。いさゝかのかるゝかたもや侍らん。右。かすか山人もさゝへてきこえ侍り。又なすらへて持とす。

百四十八番

左　　　　従三位仲方卿

これも又とよのあかりか乙女子か袖ふる山にさゆる月かけ

右　　　　入　空

かへるより猶こそさそへ柏木の葉守の神のいとふあらしは

左。袖ふる山の月影。これも又とよのあかりどいへることゝろありて聞え侍れ。右。かへるよりと侍るは。葉もりの神のかへりをいふにやと。をしはかられ侍れと。猶左の歌たしかなるによりて勝とせり。

百四十九番

左　　　　入道二位

神もきけみたらし河の川音にまかはぬ今のうとはまのこゑ

右

萩のはもかれにし宿に害たえて氷るは冬の中川の水

左はあつま遊ひの心にや。誠にかみさひて聞え侍り。右。氷るは冬の中河の水。おかしく覺えはへり。かれにしそと〔と歟〕侍るは。かのなかはは霜にむすほゝれけん。風のをとつれなとたえはてぬる時のとにや。左右いつれも思ひ定かたく侍るに。左の歌。をと葉と同心病とふるゝも申侍れは。つゐに萩のはの風たかやかなるにやありけん。

百五十番

左　　　　常　秀

乙女子か袖の追風立ゐにも霜はらふなり玉しきの庭

右　　　　權少僧都宗我

寒る夜の月に嵐のはらふかと五たひかへす袖のうす雪

左右ともに五節の舞妓にとりて。霜はらふ風といひ。雪はらふあらしといひ。袖のよそほひ殊なるけちめも侍らぬにや。

百五十一番

左　　　　爲季朝臣

御狩野や鳥ふみ立る跡をたにみせぬはかりにつもる雪かな

右　　　　權大僧都賞數

風寒る乙女の袖も月影もとよのあかりの光そへつゝ

左。みかり野。中冬の題によまれ侍る。おほつかなく侍り。おきなさひ人なとかめそとよめる。芹川の行幸は仁和二年十二月の事也。源氏物語の大原野の御幸も師走とそしるせり。但女御入内の月次の御屏風の繪に。たかゝりの心な十一月に書たる事の侍やらん。それはかりにては。中冬

の題にはいかゝとぞおほえ侍る。右。とよのあかりの月もたひ〳〵出侍り。今はめつらしからすや。みかり野の鳥の跡。いまたわかれ侍らぬあひた。しはらく勝負をさためてや侍らむ。

百五十二番

左　氏數

春日野も雪降ぬらししらゆふをかけてよし田の神祭る比

右　時繁

冬をへて手向きぬらし秋の田の千代の初穂のめくみゆたかに

左歌。春日吉田の兩社は垂迹同體なりといへとも。霜月の祭は日かはれるにや。右はにゐなめのまつりを讀侍り。大よそ歌のすかた相似たるにや。仍爲持。

百五十三番

左　[illegible]朝臣

神な月をくりし月の返しにややかて雪けの雲きそふらん

右　定衡

さえわたる豐明の月影に御はしのあしや霜をふむらむ

神無月をくりし風も心もとなく侍り。御はしのあしも作例侍れと。このましからぬにや。なすらへて爲持。

百五十四番

左　秦兼任

代々を經し乙女の姿それなからへたても行かくものかよひち

右　持和朝臣

神無月くれにし春の名計にかへぬたもとをとふあらしかな

左の乙女。めつらしからされとも。さなる難なく侍り。右歌。十月を小春と名つけ侍る事。詩には作り侍れと。やまとうたにはおほつかなくやと申ともからも侍りし。それは定家卿も初冬の歌に。この比の冬の日數を春ならはとよまれ侍れは。難あらしとて。しはらく勝とさためられしやらむ。但十一月に更衣のさたこそあまりにおほえ侍れ。後鳥羽院も歌合のうたをはいたく思ふまゝにはよますと。釋阿寂蓮なとそ申けるとしるしをき給へる。そのうへ六百番歌合に寂蓮歌。らくひすの涙のつらゝ聲なからたよりにさそふ谷の山水とよめるたに。俊成卿はあまりに風情のすきたるよしを難せられ侍にや。今のうたの上をしも申にあらす。おもひよるとなれは。筆のついてにしるし侍る也。

百五十五番　後冬

左　女房

むかしよりすさましき物といひ置し霜夜の月にとしの暮ぬる

右　經清

明はまた霞こむへき山の端をこよひはとしのへたてけるかな

左歌は清少納言枕草に。すさましき物はしはすの月よと申侍る心にや。たゝし紫式部はすさましきためしにいひ置けん人のこゝろあさゝよと。朝かほの卷にかきのせ侍るをかし。ひとへに少納言か方人をし侍るこそあやしく覺侍れ。右歌。霞こむへきと侍るも。思ひたきにや侍らむ。いかさま此二首持とこそ侍りし。

百五十六番

左　　左近中將

中垣に春をへたつる梅かゝはとしをこえてや風もにほはん

右　　小宰相

長閑なる春に心はいそけともかへらぬ年のくれそ悲しき

左右無殊事。又爲持。

百五十七番

左　　大僧都

何とたゝ暮行年をなけく覽老のこゝろも物わすれせて

右　　法印慈孝

春はたゝめかれぬ花にすさみなんとしの光はくるとあくとも

左は暮年老後の心をあはれなるよほし侍る。右うたは貫之かくるとあくとめかれぬものを梅の花いつの人まにうつろひぬらんと作るを思へるにや。たゝし彼の貫之はくるゝとあくるとよめるを。今の歌にはくるゝともあくるともと。とりたされ侍るにや。さら侍りなんや。これも又持と侍り。

百五十八番

左　　右衞門督

とし波のこえ行みみ（本ノマヽ）あすか河瀬になるよりもうらみえけり

右　　近衞

足曳の山路は雪に絶にけりいつくを年のくれて行らむ

左歌は古今の序に。あすか河の瀨になるうらみもきこえすと侍る心にや。右歌も姿詞優に侍れと。猶あすか河のとしなみは立まさるへきにや。

百五十九番

左　　秦兼任

霜かれのあさちか末も今ははや殘りすくなき年そくれぬる

右　　中納言

嶺たかき岩根をつたふ瀧つせのせきとめかたき年の暮哉

左はあさちの末殘りすくなきとしたなけき。右は（本ノマヽ）とりとりに勝劣さためかたくや侍らん。

百六十番

左　　茂成朝臣

いそかれと年のをはりになるみ潟こえ行老の浪もうらめし

右　　成蔭宿禰

かきくらし降は日数もつもりつゝ雪のうちより年そくれける
左歌。としのなはりになるみかた。古今の歌を思へり。右歌。くらし。暮ぬる。同字の病侍り。左勝へきにこそ。

百六十一番

左　常秀

いたつらにおろかなる身のなからへて老をのみしる年の暮哉

右　権大納言

年くれぬなゝらふ弓のもゝしきにあしの一夜や春をへたつる

左歌。老をのみしる年の暮哉と侍る。とはりをさゐて。たもともしほるはかりに覚えて侍れ。なゝらふ弓のもゝしきなと。めつらしく侍れと。猶左はまされるにや侍らん。

百六十二番

左　持和朝臣

霰かてくらす心をかへりみはせめても年のやすらひやせん

右　従三位仲方卿

年くるゝ鏡の山のかけはたゝおいその森につもるしらゆき

左歌。心ありてきこえ侍り。たゝし猶かゝみの山のかけにおいその森の雪をとりよせたる。風情めつらしく侍るにや。勝とせり。

百六十三番

左　入道二位

日数はやまちかき春にとし木こる山はかすみも立や初らん

右

立かはる春をもまたてさく梅やまれなる色に匂ひそむらん

左の霞。右の梅。ともに春容をいそくのみならす。又風情もひとしきをや。

百六十四番

左　持房

としくれて身にそふ数なるをよそになしてもおしみける哉

右　正徹

山さむみちるとも消えし白雪の花櫻戸のあけん年まて

左歌。上西門院兵衛歌。かへりては身にそふ物にしりなからくれ行年を何おしむらむと侍る。心詞同しきにや。右花さくら戸のあけんとしなと。めつらかなるすかた。たくみなる心とはみえ侍れと。風雅の正しき道には心もとなくや侍らん。

百六十五番

左　為季朝臣

いとはやも冬木なからに咲梅はまちかき春をいそくとやしる

右　時業

うきとも皆あら玉のとしにあはゝいとゝ我身の春や待らむ

左右となる事なし。持とす。

百六十六番

左　持純

あら玉の年そ暮行うき事も今は我身にのこらすもかな

右　氏數

雪ふかき園の梅かえいてゝみん今いくか花の春を待そと

兩首又同前也。勝劣を決せすや侍らむ。

百六十七番

左　權大僧都貫致

色とめぬ春と秋とを思ふまにおほえす年のくれにける哉

右　權少僧都宗我

あけて社又相坂の春ならめ今夜はとしのすきの下みち

左歌。中五字のまにの詞。六百番歌合にも。御裳濯歌合にも。庶幾せさるさまにみえ侍るにや。右歌。殊難なし。勝へきにこそ。

百六十八番

左　定衛

宮人のとる榊葉に霜なきてうたふも星の光さやけき

右　盛長朝臣

つもるよりくるゝ日數も年のはも殘りすくなき松のしらゆき

左。榊葉は内侍所の御神樂の事にや。おほかたは賀茂臨時の夜をこなはれ侍れは。うちまかせては霜月の事にや侍らむ。右も殊事なし。持にや。

百六十九番　春待戀

左　正荻

こぬ人を待夜の空のわかれちにうき身のよその春の隔かね

右　左近衛中將

人を待ほとは心もはれやらてくらしそかぬる春雨のそら

左は春隔の別を身の外に聞。右は春雨のはれを心中におしむ。まつ夜の空。まちくらす空。いつれなよし。いつれをあしとさためかたくや。例の持にて侍らんかし。

百七十番

左　近衛

春の日を正木の綱のうちはへてくるしやくれを何たのめけん

右

けふいくか詠くらして人まてはなみたそ春のものなりぬる

左は後撰に。てる月を正木のつなによりかけてあかすわかるゝ人をつなかんと侍るを思ひてよめるにや。右は又左中將の餘風をしたひ。涙そ春のものと成ぬるなと聞こえ侍れは。尤勝侍るへきを。かの思ひもかけぬ正木のつなにかたひく人やありけむ。勝とつけられ侍るとこそ。ふたはらいたくおもひ給けむ。

百七十一番

左　　右衛門督

くるゝまを待たに遲き春の日のはれぬなかめに又やさはらむ

右　　中納言

さかぬまは花を待ともいひてましうつろふ色の春の夕くれ

右歌。うつろふ色の春の夕くれなと。餘情あるにやと見え侍れと。猶左のうたとはりたしかに侍につきて勝とせり。

百七十二番

左　　秦兼任

心をは猶つくすとも春の夜のあけやすからて待よしも哉

右　　持純

此ゆふへたのめし宿は花ちりてよもきか庭にのこる松風

左歌。心をは猶つくすともと侍るは。こひねかふはかりの事には侍らすやと覺え侍れと。下句なとは宜にや侍らむ。

右歌。よもきか庭に殘る松風と侍る。まことに可庶幾之體にきこえ侍るを。たのめし宿は花ちりてなとは。いさゝか念なきやうにや侍らん。いかさまこの番持こそ。

百七十三番

左　　持房

たのめをく床の山河下とけむはるさへいさや氷る心は

右　　法印堯孝

うちはらふ跡まちつけて心さへいつか雪まの野への道芝

左は山河の氷こゝろのとけん春を待。右は野への雪あとまちつけん時をのそむ。姿詞までに相同。勝劣又難分。

百七十四番

左　　權大納言

春といへは花にも染ぬ心にてまつはつれなき名にや立覽

右　　從三位仲方卿

花にさへ待名はくるしいもせ山こゝろをつくす中の契に

左右ともに花をまち名を思ふ心。いくはくの相違も侍らす。仍又爲持。

百七十五番

左　　常秀

春の日の永うらみも忘れはや此夕くれのちきり待えて

右　　茂成朝臣

涙ゆへかすむもしらてかこつかなまつ夕くれの袖の月影

左は春の日の長きをうらみ。右は月影の霞をかこつ。ともに一夕のおもひをのへたる。支儒の科をさためすや侍らむ。

百七十六番

左　　成前宿禰

春の駒野かひかてらになる人をはなちも捨す待そはかなき

右　　經清

しらせはやいなはの山の春の雨まつにはかゝる袖の雫を

左。古今誹諧の歌。いとはるゝ我身は春の駒なれや野かひかてらにはなちすてつると侍るをおもへるにや。たゝし本歌も戀の心にて侍を。同し戀の歌によみ侍らんは。無念におほえ侍るうへ。初の五文字なともすへらかならす聞え侍るにや。おほよそ誹諧は又一體をまうけ侍れと。それを本歌として。よのつれの歌によみなせる。昔より今にいたるまて。その數おほく聞え侍れは。今さらそれをあるましき事といふにはあらす。たゝし萬葉の詞も三代集のうたも。優なるをとるへきなりとこそ古人も申侍れ。かの野かひかてらはなちもすてすなといへる詞は。こゝのうたの中にぬきいてゝ。もとへなすへきほとの艶なるふしはきこえ侍らぬにやとそ覺侍る。右のいなはの山は。まつといはんためにや。しからは名所とてもまつある山は。こゝにかなひ侍らむ。いなはの詞は猶別なとの題にたよりあるへきにや。仍又持とさためられ侍り

百七十七番

左　定衛

松にふく風もつれなしおきもせすねもせぬ春のよはの（本ノマヽ）は

右　盛長朝臣

永き日を暮せるたにもうき中にたのめぬ月よなとかすむらん

左右ともに歌の心いひおほせぬにや侍らむ。右はいさゝかまされるとそ侍りし。

百七十八番

左　權大僧都貫政

人そうき月は待夜もならぬさへなみたにかすむ夕暮の空

右　大僧都

玉たれのひまも涙に待わひてくらせる夜半の軒の春雨

兩首の月と雨と。おなしく涙をむすはれ侍るにつきて。左みきのたもと。いつれをぬれまさると申かたくや。

百七十九番

左　時繁

今こんと暮せる春の大空にさもあらぬ花の色そかすめる

右　小宰相

待人のこぬ夜かさなる袖の上に月もおほろの影そやとれる

かすめる花の色。おほろなる月の影。春の眞はとり〳〵に侍れと。此歌にとりてはとなる勝劣も侍らぬにや。

百八十番

左　入道二位

待侘る人ゆへいと〳〵よゐ〳〵のなみたにかすむ春の月かけ

右　持和朝臣

草はみな若葉にかへる年月を猶聞かたみかゝる中かな

右歌は大かた不逢戀の心にて。さしあたりてまつ心や不足に侍らむ。左もすくれたる事は侍られと。題のこゝろたしかに侍れは勝へきにや。

百八十一番

左　　爲季朝臣

暮やらて永き春日やかこたまし今宵といひし人の契に

右　　氏　數

待こふる心のいつからうちとけむ藤のうら葉の春日さすなり

右歌は後撰集。春日さす藤のうらはのうらとけて君しおもはゝ我もたのまむといへる思ひをおもへるにや。下句なとよくきこえ侍れは。左にはまさるへきにこそ。

百八十二番

左　　權少僧都宗我

待わひて猶たちぬるゝ袂かなまやのあまりの春雨の暮

右　　入　空

永日を又や涙にくらさましたのめつる夜は春の明ほの

左歌。まやのあまりの雨にたちぬるゝなとは。ふりにたる心地し侍るにや。右歌も待てむなしき戀のこゝろに侍れは。うちまかせて待戀にはいかゝおほえ侍れと。左歌よりはすこしまさり侍らん。

百八十三番　夏逢戀

左　　入　空

短夜やなくさむほとも夏かりの玉江のあしの露のなさけは

右　　權大納言

あふうちも猶そくるしき夏虫のきえぬ思ひや身にのこるらん

左は夏かりのあし。右は夏虫の思ひ。姿詞いくはくの勝劣もはへらぬにや。仍持とす。

百八十四番

左　　法印堯孝

かく計あくるわひしきみしか夜になとかくめちの夢の浮はし

右　　氏　數

明は又涙や袖にさみたれの雲間の月の宵のおもかけ

左歌。あくるわひしきなとは。後拾遺の歌をとられ侍るにや。たゝしかつらきの橋なは。おほくは岩橋かけはしなとそいふめる。橋は同しとなれは。河池なとにわたすをは橋といひ。此峯よりかの谷にかくるを梯と申侍るにや。大かたかつらきの神のよるの契をも。其後は未文たしかならぬとに申侍るうへ。夢のうき橋とても。無實のたとへにて侍れは。しゐてことはりをきはむへきにあらされと。歌合のならひ。吹毛のとかをも申侍にや。右歌。雲間の月のよゐの面かけといへる。それはかりにては逢戀の心やかすかに侍らん。おもかけといふ事は。そのぬしにあはさる時

の事にや。これによりて定家卿歌にも。かきやりしそのくろ髪のすちことによりふすほとはおもかけそたつなとよみ侍にや。そのうへあけはまたなみたや袖にさみたれのと侍る心は。わかるへきとをかれていふにやとをしはかられ侍れと。これも猶ことはりたしかならすや侍らむ。いかゝ。

百八十五番

左　定衡

あたなりやかはす枕もみしかよの夢はかりにて明るしのゝめ

右　茂成朝臣

時鳥さ月の空の一こゑにあふ夜ほとなく明る比かな

左。夜枕一覺の夢。右。郭公五月の聲は以彷彿似乘着。

百八十六番

左　大僧都

引むすふ今夜よとのゝあやめ草たゝかりそめの露の契りは

右　經清

さらに又ねこそなかるれ空蟬のあふ人からの夜半のみしかさ

左右ともに無殊事。不足辨是非。

百八十七番

左　右衛門督

いかにせんあひみる空も夏かりのみしかき夜のよるの契は

右　小宰相

あふとは名のみなりけりみしかよの夢かとたとる人のおも影

左右歌殊難もなく。又すくれたるふしも侍らぬにや。なすらへて持とせり。

百八十八番

左　正徹

さめけりと思ふうつゝそ夏衣むれもあふ夜は夢にまきれて

右　持房

夢かさはとけてうちぬる現たにうき下紐のみしか夜の空

左右兩首ともに夢うつゝをとはの中にむすひ侍り。又第四句むれもあふ夜。うき下紐と侍る。いつれもすこしみゝにたちて聞え侍り。仍又爲持。

百八十九番

左　入道二位

戀〳〵てあふ坂山のされかつらくるさへつらきみしか夜の空

右　女房

むすひをけ蓮の糸のあふ事も此世の露のちきりのみかは

左歌は後選に。名にしおはゝあふ坂山のされかつら人にしられて來るよしもかなと侍るをとれるにや。たゝし戀の歌をやかて戀にとりて。しかも文字のをき所なと。いたく本歌にかはらす侍るは念なくそ覺侍む。右は萬緑[illegible]行

の事に異して。蓮取再會の緣を契れる計なり。勝へきよしおの〳〵申され侍しを。この歌遍身の病侍るよし申出侍るにより。持とは付られけり。

百九十番

左　　　　　　　　　　　　從三位仲方卿

重ねてもうすき契は蟬の羽のころもみしかき夜半の手枕

右　　　　　　　　　　　　持和朝臣

新枕こよひは餘所の思ひそとおもひけたれて行ほたるかな

左喩契於蟬翼之薄。右比思於螢腾之光。善否相交。褒貶難分。

百九十一番

左　　　　　　　　　　　　持　　親

今夜こそみすの葵をしるへにてかけゝるよゝの契をもしれ

右　　　　　　　　　　　　近　衛

夏引の手引の糸のよる〳〵もあふは程なくあくるしのゝめ

左歌は周防内侍。かゝれしもかひなきものはもろともにみすのあふひのかれ葉なりけりと詠せるを思いつるにや。たゝしるへとしれといへる詞おなし心にや。右歌。又聞ふるせるすかたに侍り。なすらへて持とせり。

百九十二番

左　　　　　　　　　　　　中納言

なからへし我玉のをのたまさかにあふ夜となりて夜半の短さ

右　　　　　　　　　　　　秦兼任

夏の夜はあふもほとなき契そと我になつけそ人の手まくら

左歌。させるめつらしきふし侍られと。右よりはまされるにや。

百九十三番

左　　　　　　　　　　　　權少僧都宗我

引むすふあやめの枕ならへても行末しらぬれこそなかるれ

右

わかれちをさそはぬ鳥の聲そうきともにかたらふ時鳥哉

左はあやめのれになき。右は時鳥の聲にかたらふ。ともに五月を契るにことよせて。二首の科をさためすや侍らむ。

百九十四番

左　　　　　　　　　　　　成前宿禰

いのりつゝこよひあふひの諸かつらかくる契を神にまかせて

右　　　　　　　　　　　　常　秀

うつゝとはかけてもいはしうたゝれの夢のちきりの短夜の空

左はもろかつらかゝる契といひ。右はうたゝれの夢のちきりといへり。姿詞となる勝劣に侍らぬにや。依以爲持。

百九十五番

左　　　　　　　　　　　　左近衛中將

戀せしと新やせましみそき河今夜あふせをしらぬ身ならは

右　　爲秀朝臣

下紐のとくるかひなく鳥のねをやかてうらむるみしか夜の空

左歌。天承元年内大臣家歌合源兼昌歌。戀せしとおもひなろをによる浪のかへりてそれもくるしかりけりとよめるを。俊頼朝臣判し侍て。初五文字名歌なれは。うち聞におもひ出られ侍り。古人のとはさるへしと申にやとて。まけにつけ侍れは。今もいかゝとおほえ侍れと。此歌はかの古今の歌をことさら本歌とてよみ侍れは。さきの歌の比量になり侍ましきにや。そのうへ初の句に戀せしとよめるたくひまゝ見及侍り。右の歌又ことなる一ふしも聞え侍らぬにや。又爲持。

百九十六番

左　　盛長朝臣

忘るなよひとへなりとも夏衣あさはかならぬ中の契を

右　　時繁

身にそしろめくり逢せのうかひ舟あくるもはやき水の心を

左のうた。夏衣あさはかなるなとはさもと聞え侍れ。右のあくるもはやき水の心は。なさけふかく見え侍れは。まさると申侍へし。

百九十七番　秋別戀

左　　爲季朝臣

きぬ／＼の別となれは長き夜もほとなくあくるあかつきの鐘

右　　權大僧都實政

いつかはと思ひあかしのうら人は袖のわかれの秋風そふく

左歌はあまりさしめに侍るにや。右歌。その事とは聞え侍られと。かの光源氏のとしふるうらをわかれし秋のとなとをおもへるにやと。をしはかり侍れは。いさゝかおかしくなりて勝へきにや。

百九十八番

左　　持純

おきて行たもとの月もしくるらん秋きりふかししのゝめの空

右　　氏數

折しもあれ月もわかるゝ道芝の露の袂を送る秋風

左はたもとの月もしくるらんといひ。右は露の袂をおくる秋風とよめり。ともに優に聞え侍り。勝劣わきまへかたくや侍らむ。

百九十九番

左　　時繁

かへるさをいつならひてかまつむしのわか道芝の露に鳴らん

右　　成尚宿禰

わかれちをなと曉にかきるらんこゝろをとよめ（めよ一）有明の月

左右ともに心ありて聞え侍り。仍又爲持。

二百番

左　　　　　　　　　　　　女　房

いかにせん手をわかるへき折しもあれ人に扇の風そ秋なる

右　　　　　　　　　　　　右衞門督

袖の露もおきわかれ行あけくれに尾花かもとに思ひ消めや

左はいかにせんとをけるより。風情つきにけるにやと聞え侍れは。尤右をもて勝とさためらるへきと申き。

二百一番

左　　　　　　　　　　　　近　衞

明ぬれは猶我袖にかけとめて月はきぬ〳〵になりもやられす

右　　　　　　　　　　　　右衞門督

あけぬ夜の限は猶や朝きりの立いてん空もしらぬ別に

左歌は。猶きぬ〳〵になりやらてといへる歌の侍るは。中古の歌と覺侍るよし申人あり。たゝしいつれの集又作者なとまてをは不覺悟にや。右歌はあはぬしらぬ不の字二有り。難とせる事もあり。さたに不及事も侍るや。仍しはらく爲持よしさためられき。後日に引勘侍れは。新古今に二條讃岐か歌。あけぬれとまたこひ〳〵になりやらて人の袖をもぬらしつるかなと侍りけり。又不の字二ある事。天德歌合に源順か歌。こほりたにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬうくひすの聲と讀るは勝になれり。其後六百番歌合に俊成卿判。ならひに千五百番歌合定家卿判なとにも。此事をとめ申されす侍れは。尤以可爲指南者歟。おほよそ同心病といふに二の義侍るにや。喜撰式に同心病と申侍るは。一首のうたに同字の侍るをいへり。假令らんといふ詞二あり。夜といふ字の二ある類なるへし。又俊頼朝臣の判に同心病と申侍るに。空と雲井といふ詞の一首の中に侍るを病とせり。顯昭は香と匂とを同心病と申侍り。建保の比の歌に。定家卿も年と代とを同心病と申されき。此等の砌は歌合につきて一端は申出侍れと。さらにふかき難にはあらす。頓阿法師か愚問賢注に。近來は同心病はかりとをはしるし申侍るは。喜撰式の同心病の事をいふにや。こゝにはいらぬ事に侍れと。とのつゐてにおろかなる心さしのへ申侍り。さためてひかおほえもや侍るらん。恐本ノマヽ々々。

二百二番

左　　　　　　　　　　　　秦　兼　任

きぬ〳〵のわかれしなくは曉の秋風はかり身にやしましし

右　　　　　　　　　　　　中　納　言

有明の月は誰ゆへのこれともわかれし人のおもかけもなし

きぬ〳〵の曉。有明の月。別の歌にめつらしからぬ事なれ。

と。これらをすてゝは又歌の道なかるへし。いくたひなりともとりもちゐんに。そしり侍るましきにや。此うち語驚人ほとの事よみいてんはいとかたかるへきにこそ。此左右の歌となる難は侍られとも。又すくれたる所も聞え侍らぬにや。仍同條の科に侍るへし。

二百三番

左　大僧都

いとゝしくぬれこそまされ別路に篠分るあさの袖のしら露

右　茂成朝臣

折しもあれ野ゝ宮人の名殘さへ我身に秋のうきわかれかな

左の篠わけしあさの袖。右の野ゝ宮人の秋の別。共詞となる（善惡）善異も侍らす。また持にや。

二百四番

左　經清

袖しほる露のかたみも哀なりしのゝおさゝの床のかりふし

右　權少僧都宗我

引とめてしはしは月にしたふ哉おき別れぬる夜半のもすそを

右歌。よはのもすそ。なとてか袂をと侍らさりつらむとおほえ侍れと。左の歌わかれの心きし。必後朝とやいふへきとありしを。後朝と別とはふるくもかよはしてよめるにやと申人／＼侍りしかとも。その證歌を覺悟し侍られは。まつ題の心たしか成によりて。右の勝に見え侍りし。

二百五番

左　權大納言

ほしあへぬ涙もあるに秋は猶わかきぬ／＼の袖のしら露

右　侍從朝臣

きぬ／＼の袖行水を澤邊とやうき道芝に鳴もなくらむ

左歌。よのつねにしてをよはさるへし。右歌は結構にして過たり。過たるは猶不及かことしといへる。聖人の格言も侍れは。中道を以て持とすへきよし定侍りき。

二百六番

左　入道二位

あふとを又はいつとも白露のしらてわかるゝ中そはかなき

右　從三位仲方卿

思ひさへ猶身にしみてきぬ／＼のたもとにたえぬ秋風そふく

左のしら露はかなき色よりも。右の秋風身にしむをとは。いさゝかたちまさるにや。

二百七番

左　入空

さらてたにうきは身にしむきぬ／＼の袖のなみたに秋風そ吹

右　持賢

ありてこそ涙も月もかこたれめつゐにくちなむ袖のわかれち

左の歌。身にしむ秋風はしは〳〵みえならし侍れは。めつらしからぬ心地し侍り。右の袖のわかれちも。あり〳〵て題のこゝろあらはれ侍るにや。いかさま此番持とそ侍りし。

二百八番

左　常　秀

ふかき夜の袖のわかれを送きて折しもつらし秋風のこゑ

右　小宰相

きぬ〳〵の庭の淺茅に置露や袖よりあまるなみたなるらん

左は袖のわかれを送る秋風。右はきぬ〳〵の涙にあまるあかつきの露。別離の心すてにおなし。勝負のおもひ又定かたし。

二百九番

左　正　徹

かへりみぬためしそのこる別路にそふるをくしのあり明の月

右　法印堯孝

有明のあるをみるたにしたはるゝ時しも秋のきぬ〳〵の空

左歌は源氏絵合の巻に。わかれちにそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめしと侍るを思てよめるにや。いとおかしく聞え侍れと。そふるをくしの有明の月とつゝき侍るや。すこし心もとなきかたや侍らむ。さしくしのあかつきなと申侍るには。いさゝかかはり侍へきにや。右歌は忠岑か。時しもあれ秋やは人にわかるへきあるを見るたに戀しきものをといへるをとられ侍るにや。たゝしあるをみるたにしたはるゝと侍り。すこしいひおほせぬさまやし侍らむ。これらはみなその時にのそみて。人〳〵の申されしかたはしを思出し侍りてかきつけ侍り。はしめはうた人の名をかくされ侍れは。言者無罪。聞者足以誡と詩の序にかき侍ごとく。我も人もいふにはゝかりなく侍り。今名をあらはされて後。かたのごとくかきのせ侍れは。おの〳〵の心もいかゝとそらおそろしく侍れと。おのつからわたくしなき心さしはかりをはみゆるし給ひてん。かつは又これによりて陳申さるゝむれも侍らむ。道まなふものゝため。かへりてくらきなうつたよりにならん。又作者のふかきおもむきもあらはれ侍らむ。その時はおろかなる筆のしわさもかしこくそとおもふ事や侍らんとなり。

二百十番

左　定　衛

小夜ふかき雲井の雁もれをそへて涙落そふきぬ〳〵の袖

右　左近衞中將

別行袖にみたれて道芝の露にも月のかけそこほるゝ

左右無咎事。又持とす。

二百十一番　冬恨戀

左　爲季朝臣

今ははや何をたよりに恨まし冬野のまくす風かよふとも

右　持　房

霜をいたみ庭の木の葉の朝な〳〵したに朽なく名さへ恨めし

右歌。名さへうらめしとはかりにて。題の心いかゝとおほえ侍れは。たしかなるにつきて。以左爲勝。

二百十二番

左　左近衛中將

鶴の海や氷る汀の浪ならてうらみし中もとをさかりつゝ

右　盛長朝臣

聞わひぬなみは袖こそ御熊野の浦よりをちも舟の追風

左歌。鶴の海こほる汀とをき。又うらみし中もとをさかりなと。心あるやうに聞え侍る。右歌も浪は袖こそ御熊野のうらよりをちのなと。作情あるにやと覺侍れと。初五文字に聞わひぬといひて。むすひ句に舟の追風といひとゝめたる。いさゝか心なきやうに侍れと。難なきよしおの〳〵申されしかは持とし侍り。

二百十三番

左　共和朝臣

人そうきかけし契のあさ河もこほれはたゆる水のけふりに

右　右衛門督

身をうらのゆきも契もふりはてぬさらても逢ふ里のしるへに

左は朝川萬葉より出たりと申なから。たゝこのましからぬにや。右は身なうらの雪。うらみの心有ふかく聞こ侍るによりて勝とせり。

二百十四番

左　女房

さ夜千鳥ひとりあかしの浦なりと我計なるねをはなかしを

右　定家

風しほる霜の岡へのくすかつらくるしやかれて殘るうらみに

左歌。浦なりといへる詞。聞にくゝやと申されしかとも、後鳥羽院御製に。たかめすは人をまつちの山なりとなと侍れは。かゝること葉つかひはとなる難には侍らしと覺侍り、しかれとも右のくすかつら、下句なと優に聞え侍れは。右勝へきにやと申侍り。

二百十五番

左　常秀

うらみわひあかしかねぬる小夜時雨はるゝまもなき片敷の袖

右　入道三位

むすひしも根になりぬ深き袖の氷のとけぬちきりは

左のはるゝまもなき時雨よりも。右のとけぬ氷は。猶うらみのこゝろ。ふかくむすほゝれ侍れは勝侍るへし。

二百十六番

左　　氏數

いかにせん人は心もとの葉も霜ふりはてゝうきちきりかな

右　　權少僧都宗我

うらみわひ時雨ふりをけ袖の上に待夜は霜を又はらひつゝ

左歌。終句のうき契かなと侍る。初句にいさゝかかけあはす侍らむ。右歌。待夜は霜を又はらひつゝと侍りし。題のこゝろにそむき侍るにや。いかゝ。

二百十七番

左　　權大納言

しるらめや枯野のまくす下にのみ霜のふりはの恨ありとは

右　　近衛

霜枯る深山かくれのくすかつらうらみはつれと知人もなし

左歌。古今の霜のふりはもと侍るは。霜のふりさまの心にて侍を。まくすの霜のふりはのうらみとつゝけられ侍るは。いさゝかその心にやたかひ侍らむ。續後撰に順徳院御歌。水莖の岡のあさちのきり〳〵す霜のふりはや夜寒なるらむと侍るなとそ。證歌にもなり侍るへかめれ。此御製も猶霜のふりさまの心にたかひ侍らぬにや。右歌。難なきによりしはらく勝とせり。

二百十八番

左　　從三位仲方卿

風寒るまくすのかれ葉置霜のとけぬうらみのしけき比哉

右　　茂成朝臣

いかにせん庭の眞葛葉冬枯にことのはもなき中のうらみを

左右共にまくすのうらみ淺深わかちかたく侍り。持にや。

二百十九番

左　　持純

消かへり聞もうらめし霜寒てむなしき床の曉のかね

右　　時業

恨ある身のたくひとや小夜鵆つまもなきさのかたに鳴らん

左はあか月のかねむなしき床にきこえ。右はさ夜千とりつまもなきさに鳴わたる。うらみの心はとなれ共。歌の心同にや。

二百廿番

左　　法印堯孝

霜の下に朽行まくす何とたゝかれぬうらみの世に殘るらん

右　　中納言

冬枯しうらみを殘すくすのはの風こそ人のたよりなりけれ

兩首の眞葛。或結遺恨於霜下。或寄好便於風前。數等二首

得失ニ不及一字褒貶者歟

二百廿一番

左　　　　秦兼任

風さはく冬野のまくす我なれや枯行すゑのうらみられぬる

右　　　　大輔

うらみわひ友もなきさの濱千鳥なくねは我もかはらさりけり

まくす。ちとりの根すてに重疊せり。勝負例してしるへし。

二百廿二番

左　　　　經清

霜はらふまくすか原の風の音をよそにはきかぬ袖の夕くれ

右　　　　權大僧都實政

これそ此思ひの果やあまの住さとのしるへとちとりなくなり

左右のうた又持とす。

二百廿三番

左　　　　小宰相

うらむへきことのは草も霜枯てなみたはかりそ袖に氷らぬ

右　　　　成前宿禰

うらみわひ冬枯はつる野への色におもひ絶たるもすの草くき

ちとりのうらみ。こは聞ふり侍るに。もすのくさくき。めつらしく見えきたり侍り。さのみ持とさたむへきいかゝにて。右の勝になされ侍りき。

二百廿四番

左　　　　正徹

涙さへうき袂かな露とをき氷とむすふこゝろかけりは

右　　　　入空

いへはえに岩根の水の薄氷うらみにむすふなみたともしれ

右歌に。いへはえにいはねとよまれ侍る。左中将か餘情にや。といとおかしく聞え侍るを。大納言為定卿歌に。色にこそつゐに出にけれいへはえにいはねにさけるやまふきの花とよみ侍れは。いへはえにいはねとつゝけよまむは。今はめつらしからすや侍らむ。おほよそ歌合に同類をさる事は古賢のおもむきまち／＼に侍るにや。俊成卿は撰集なとの外はかならすしもさりあふへからさる事なりと申され侍る。定家卿は準例雖今之事。條違遁之謂はなをさりのそくへきよしかゝれ侍り。文久二年の御歌合に。光俊入道もさせる公宴にあらすは。さのみさりあへかたく侍れと。それをゆるし侍りなは。道違たるへしと申侍るにや。かの山吹の歌も貞和の百首につかふまつりて。今は世にかくれなくまかりなり侍れは。おのつから覺悟せるともからも侍にや。左の歌。心姿いかゝ覺え侍れと。又一ふしなきにあらす。勝へきにこそ。

二百廿五番　春述懐

左　春述懐　　　　　　　　小宰相

数ならて今年の春もくれはとりあやしや何を待身なるらん

右　　　　　　　　　　　　時　繁

身に積る我身の春そ哀なる花はありてもなかめせしまに

左歌。六百番歌合季経卿。つねよりもとしの秋のくれはとりあやしきまてにおしまるゝかなと侍るに相似たるを。右歌。身といふ文字をかさねられ侍る。あなかち所詮も侍らぬやらむ。尤以可為持。

二百廿六番

左　　　　　　　　　　　　持　房

はては又花散けりな咲をたに山もうき世となかめせしまに

右　　　　　　　　　　　　権大納言

つかへこしうき身の春をかそふれは御垣の櫻かけそふりぬる

右歌。事君之節。拜趨之勞。尤以可有抽賞侍るを。此歌定家卿の春をへてみゆきになるゝ花の陰ふりぬる身をはあはれとや思ふと侍るに。心詞おもひ出られ侍ろよし申出し人侍りて。しはらく左の勝になされ侍り。いかゝあるへき事にや。

二百廿七番

左　　　　　　　　　　　　持和朝臣

つゝむへき袖せはくとも我君のひろきめくみの春にあふまて

右　　　　　　　　　　　　定　衡

うき身には花みてくらす程計つもれる老の思ひ出にして

我君の仁恵は秋津島までもなかれ。つくは山のかけよりもしけくなん侍るを。いかなれは猶せはき袂につゝみかね侍らんと。いとかなしくもきこえ侍り。右歌。花みてくらすとをのみ老のおもひてにせるも。哀をもよふし侍れは。勝劣をさためすや侍らむ。

二百廿八番

左　　　　　　　　　　　　右近衛中将

櫻ちる吉野の山のおくまても花のうき世をいとひかねつゝ

右　　　　　　　　　　　　近　衛

いとゝしく我身世にふる花の色うつる月日のおしき春哉

左歌。花のうき世をいとひかねつゝなとはおかしく侍るを。初の五文字。木の下かけはさむからてといへる歌のゝちは。いたくよまさるにやと申出人侍りしに。右歌も又勝へきほとのとは侍らぬにや。持とさためられ侍り。

二百廿九番

左　　　　　　　　　　　　法印覚孝

九重にをくる六とせの花の陰つかへし道の春をしそ思ふ

右　　　　　　　　　　　　入道二位

老か身のうきをかさぬる年波の春はかりにはあふかひもなし

左歌。八くる六とせの花のかけと侍る。作者の意趣ふかく聞え侍り。抑對九重之花。送六年之春れる人。此作者の中にて誰人ならむとおもひめくらし侍るほとに。はやしりはてぬ。かの和歌所にして勅撰をはしめられしより奏覽まては。その間六とせはかりにやまかりなり侍りつらんと申侍りしかは。そのきそくやしるかりけむ。右の歌の是非におよはす。勝の字を衆中より申うけ侍りし。

二百三十番

左　女房

うき身にも四十年の春は過にけりなれにし花よ哀ともみよ

右　從三位仲方卿

誰ために咲ともきかん山さくらうき身は花をよそにてやみむ

左歌はあやしの愚老か述懐の歌に侍りけり。あはれといへる人のなきほとのしられて。花をかこち侍るさへものはかなく聞え侍り。右歌もおなしうき身の花なるうへ。こゝろの色の淺深もわかれかたく侍るを。とりわき左の勝ときためられ侍るこそかたはらいたく覺え侍れ。

二百卅一番

左　右衞門督

馴にしも近きまもりを忘れすはいさことゝはん花の下かけ

右　權少僧都宗我

哀なりふりぬるうき身猶も世にうへてさくらの春を待らむ

左のなれにしも近きまもりなといひしりて侍る。右のふりぬる身うきをも世になと。又難なく侍れと。花の下かけは猶たちまされるにや。勝とせり。

二百卅二番

左　正徵

年積る身をうら風もゆるくふけ浪のしはさへのふる春へに

右　氏數

よそに思ふ春をうき身のならひとや花は心もなくて咲世に

左歌。なみのしはゝ古今のとはなるうへ。身をうら風もゆるくふけなと。一ふしありて聞え侍り。右歌もとなる難は侍らねとも。猶左のなみのしは立まさるにや。勝とせり。

二百卅三番

左　常季

移り行空にかそふる月も日もおもへはおなし春の夜の夢

右　權大僧都實耽

こたふへき色しみえねは世の中をとはてたゝにや山吹のはな

左歌。光景のうつりやすきを春宵の一夢にたとへたり。おかしからさるにはあらす。右歌。世の中をといへるや。その事となくては。おほ空にや侍らむなれと。とはてたゝにや山吹のはなといへるなとは。うためきて聞え侍れは。な

すらへて持とさためられ侍り。

二百卅四番

左　盛長朝臣

とのはのなと一ふしもなかるらむやふしもわかぬ春の光に

右　成前宿禰

定なきうき世の中の花なれは開て散をもいかてうらみむ

左歌。やふしもわかぬは。ふるの今道か餘風を思へるにや。世俗に竹のおひたる所をやふと申ならはし侍るにつきて。一ふしとは思ひよれるにや。おほよそ字書には大澤を藪と申侍れは。かならすしも竹にかきらさるにや。右の歌も又勝へきまての事は侍らぬにこそ。持と定められ侍り。

二百卅五番

左　中納言

心なき身こそつらけれ山人も花のかけにはやすらふものを

右　持純

咲匂ふとはの花のかたはらになにみ山木の立ましるらむ

左歌は大伴黒主か歌のさまを。たき木をへる山人の花の陰にやすめるかとくといへる心なるへし。右はちゝのおとゝの舞のすかたを。深山木のはなのかたはらに立ならへるにたとへ侍るとを思へるならし。いつれも本說あるに付て捨かたく思ひ侍れと。咲匂ふと葉の花とおき。なにみやま木のなとゝ。おもふこゝろさしありてつかふまつるにやおほえ侍れは。時にあたりて興あるよし人々申侍りて。勝の字を右に付られ侍りき。

二百卅六番

左　大僧都

春毎に花しちらすは世の中のうきはかりをや身にはなけかむ

右　入寂

春の色にもれぬは嬉し數ならぬ深山かくれの松のとのはに

左歌。心詞とゝこほりなく聞え侍り。右歌。かすならぬ深山かくれなと。おかしく覺侍れは。いつれとおもひわきかたく侍れと。前の番の右の作意に同しく侍れは。當座の儀をもて。しはらく右の勝になされ侍り。

二百卅七番

左　茂成朝臣

人ふるす我ならなくに世の中の春をうしとやうくひすの鳴

右　秦兼任

みるかうちに移ふ色のなかりせは花にうき世や忘れはてまし

左右ともに無殊難侍り。左はいさゝかまされるにや。

二百卅八番

左　爲季朝臣

立まよふわかの浦半の春かすみ心はるけてみるよしもかな

右　経清

我もかく心とゝめぬ世中に散とて花をなにしたふらむ

左は心はるけてみるよしもかなといひ。右はちるとて花をなにしたふ覧といへり。ともに心ありてきこえ侍れは。又勝劣を辨せすや侍らむ。

二百卅九番　夏懐舊

左　左近衛中将（ヒ院歟）

高砂の山ほとゝきす尋こんむかしの聲をしるへにして

右　時繁

今も猶袖にそしたふ橘のむかしわすれぬ匂ひはかりを

左右の歌。おなしくむかしを思へるにとりて。立はなのわすれぬ匂ひよりも。猶郭公の聲をしるへにせるはきゝ所侍るにや。勝とさためられ侍り。

二百四十番

左　茂成朝臣

忍ふてふ昔なからの匂ひそと猶袖ふれん軒のたちはな

右　秦兼任

むかし思ふ窓の螢の數〳〵になみたの玉もみたれぬる哉

左。軒の橘の袖の匂ひ。心詞ふりにける。右。まとの螢の玉のひかり。風格聊まさると申侍るへし。

二百四十一番

左　法印堯孝

ふりはつる窓にもかれすとふ螢なれしむかしやなれも戀しき

右　持和朝臣

はれやらぬ空にそうかふたらちねの五月雨かみをなてし昔は

左歌。ふりはつると昔とは同し心にやと申出侍りしを。實定公のふりにける松ものいはゝとひてましの歌をひき申さるゝ人侍り。右歌。面かけとも心ともいはて。たゝむかしのうかふと計は。作例うたかはしく思給へ侍りなから。さるさたに侍らぬうへ。さみたれ髪なとの物語のおもかけおもひいてゝ。優にきこえ侍りしにや。勝とさためられ侍り。

二百四十二番

左　中納言

手枕に花橘の匂ひきてむかしにかへる夢をこそみれ

右　小宰相

むかし思ふ涙隙なき袖の上にはな立花そかほりきにける

左は夢の枕。右は涙の袖。盧橘之句。淺深難分。詞花之趣。勝劣易迷。仍持とせり。

二百四十三番

左　成前宿禰

いにしへの誰袖の香もひとつにて形見かはらぬ軒の立はな

右　　大僧都

時鳥涙や袖にかよふらんむかしかたりの夜半の一こゑ

左右無殊難侍り。又持とす。

二百四十四番

左　　權少僧都宗我

なのり行きのまろ殿の時鳥なれもむかしやおもひ出らむ

右　　常秀

はれすのみ五月の雨のふることを思ふ袂そいとヽ朽ゆく

左歌は千五百番歌合に公經歌に。ほとヽきすきのまろとのヽ雲井にてあさくら山をおもひての聲と侍り。心こと葉あひにたるにや。右歌。無殊難侍り。勝へきにこそ。

二百四十五番

左　　爲季朝臣

夏かりの玉江の芦の代々をへてむかしの跡そ今も戀しき

右　　氏敎

むかし思ふ空にもわきて時鳥なきけんかたの有明の月

左歌。夏かりの玉江の芦のふると。をき所をあらためすしてよまれ侍る。念なくや侍らむ。右のうた。時鳥のなきけんかたさたかならすや聞え侍らむ。しはらく持とそ定められし。

二百四十六番

左　　近衛

軒ちかき花立はなはかほれともしのふむかしは遠きかけ〳〵

右　　經清

朽果て軒はにふけるあやめ草むかししのふのかれやそふらん

左右の立花あやめ。おなし軒端にむかしをしのへり。なすらへて又持とせり。

二百四十七番

左　　女房

すきにけり親のいさめを思はすは此短夜もうたヽねにせん

右　　入空

白雨の雲のは遠くなる神のをとにたに聞むかしなりせは

左。親のいさめのうたヽね。めつらしからぬふる事なるうへ。このみしか夜なとは。たとへは五條三品のうたに。この一ふしをおもひをくかなと。父子の心にとはをかれる。證例とも申へけれとも。おほよそ此一首の心。あまりいふくろなるもれかはしからさるにや。右歌。をとにたに聞むかしなりせは〔と歟〕侍る。いさヽかおほつかなく侍り。そのゆへは上古の繩を結し世の中も。典籍はしまりてより此かたは。をとにきかぬはかりの事はありかたく侍るにや。いかヽ。しからはしはらく持とすへくや。

二百四十八番

左　　　持　房
夏草のとしけく共わすれめやおもかけふかきのゝみやの秋
右　　　從三位仲方卿
あふけ猶しのふむかしのかけよりも今は名たかき軒の立花
左右同等たるによて持とせり。
二百四十九番
左　　　持　純
ほとゝきす忍ふか代々のふる聲になれさへ鳴て遠さかりゆく
右　　　入道二位
したはるゝむかしの人の袖のかけ夢ならてしる軒の立はな
又爲持。
二百五十番
左　　　權大僧都實政
跡そなきさむるうつゝも空蟬のむなしき夢にかへるむかしは
右　　　正　徹
夕されは香をしめをかぬ橘もむかしの雲の袖や戀しき（この雲）
左歌。初五文字あとそなきとうち出侍る。あなかち　ま
しからぬにや。右歌。定家卿歌。ゆふくれは（る歌）いつれのくも
の名殘とて花たちはなに風のふくらんと侍り。おもかけ
思ひいてられ侍り。いかゝ。
二百五十一番
左　　　右衛門督
ほとゝきす我身も年をふる聲にむかしを忍ふ涙からなん
右　　　定　衡
袖にちる露もみたれていにしへをしのふの軒に匂ふたちはな
右歌。忍ふの軒といへる詞のつゝきおほつかなく侍り。左
はいさゝかたちまさるにや侍らん。勝とせり。
二百五十二番
左　　　權大納言
茂るとも道をはのこせ昔思ふ庭のをしへの跡の夏くさ
右　　　盛長朝臣
家の風つたふる宿をむかしよりいまはたあふく軒のたちはな
左は庭訓に夏草をそへ。右は家風に盧橘をよせたる心姿。
大畧同品なるにや。
二百五十三番　秋神祇
左　　　中納言
おとこ山今夜の月のさやけさに神もむかしや思ひ出らむ
右　　　右衛門督
やはらくる光やたくふ夜半の月猶住よしの秋の神わさ
左はおとこ山のむかし思ひ出らん。古今の序の詞をおも
ひ侍にや。いとおかしく侍り。右。住よしの秋の神わさ。又
無殊難。仍持とす。

二百五十四番

左　持和朝臣

秋風のめにみぬ神も紅葉〻のちりにましりて手向うくらし

右　法印堯孝

かけたかみ今もふりさけ御笠山遠き神代もいてし月かも

右歌。貞永元年光明峯寺攝政うた合に家長朝臣。いつくにもふりさけ今やみかさ山もろこしかけて出る月影と侍るに同しきよし申出人侍り。た〻しみかさ山の月にふりさけみるといへるは。安倍仲丸か詠なれは。いくたひなりとも。なとかとりよまさらむ。た〻一首の作意にこそよからめとおもひ侍れと。しはらく衆議にしたかひて。左の勝とはさため侍り。

二百五十五番

左　従三位仲方卿

秋の夜を（に歟）空にことはる月をこそ國つ神代の光をそしる

右　小宰相

吹かふる風そ身にしむ住吉の松には床のいろもみえぬに

左右無殊事。仍為持。

二百五十六番

右　大僧都

千早振神やそめけん三室山よそよりはやき秋のもみちは

右　成雨術綱

榊葉も幾世の秋の霜をへてかはらぬ色の露の玉かき

左歌。三室山のもみちならんからに。よそよりはやかるへき事そ。いか〻うたかひ申ともから侍るやらむ。たとへは神の三室の紅葉。不例の例用をほとこし。すみやかに染織の工をあらはさん事。思なしもなとかさら侍らさらむ。これつらの證歌をもとめ侍らは。いくらも侍るへきにや。右。榊葉のかはらぬ色。又見さめすへきにあらされは。なすらへて持とすへくや。

二百五十七番

左　権大納言

さらに又秋の光もさしそひてくもらぬ御代の月よみの宮

右　定衛

すゝか山ふりぬる跡をみてくらの秋のにしきになひく秋風

左歌。續後撰集に公經公。いかはかりくもりなき代を照すらむ名にあらはる〻月よみの森と侍るに。心詞おなしきよし申人侍り。たとへはこれほとの事はみゆるし侍らむかし。右歌は九月の伊勢幣の事にや。すゝか山とをき。秋のにしきなといへる。いさゝか左のうたよりたちまさるよしなの〳〵申侍りて。勝とせられ侍り。

二百五十八番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　盛長朝臣

神路山内外くもらぬかゝみにも秋こそ月を嶺のまさかき

右　　　　　　　　　　　　　　　　　茂成朝臣

ふりにける神のいかきは霜をけとかれぬ眞葛に秋風そふく

右歌。神のいかきにはふくすも秋にはあへすとこそよみ侍るに。霜をけとかれせぬとひきかへられ侍らは。そのことはりや猶あらまほしく侍る。霜やたひをけとかれせぬさか木葉の例にはかはり侍るへき事にこそ。左。秋こそ月を嶺のまさか木なと。優ならさるにあらす。勝へきにや。

二百五十九番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　權少僧都宗我

男山むかしもさこそおもほえて猶てらしぬる袖の月かけ

右　　　　　　　　　　　　　　　　　權大僧都實政

夕かつら長月まつる神ち山たえすもあふく影そあまねき

左歌。第三句こそあまりふるめかしく聞え侍れと。袖の月かけなと。垂跡のいにしへ思ひ出られ侍り。右歌。結句かけそあまねきは。神路山かけをいへるにや。いさゝかおほつかなきさまに侍れは。しはらく男山の月影すみまさると申侍るへし。

二百六十番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　氏數

かそへてや神も待けん石清水てる月なみの秋の今夜を

右　　　　　　　　　　　　　　　　　爲季朝臣

春日山もりくる月の木の間より影さたまらす秋風そふく

左右うたおなし程に侍るにつきて。春日山まくへきにあらされは。勝にこそはへらめ。おほかた歌合のうたに神祇を募る事は。貞永の夏の歌合にかたくいましめ侍けるにや。此度は神祇の題たるうへはいふに及はさるへし。

二百六十一番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　正徽

八幡山ふもとのみゆき夜をこめて惠もふかき秋の河霧

右　　　　　　　　　　　　　　　　　入道二位

榊葉は色もかはらて春日山そむる紅葉や秋のまに〳〵

左。八幡山ふもとのみゆきは。すへらきの行幸なとも侍れは。またあひてやきこえ侍らむなれとも。放生會とても延久より行幸に准せられて。六座なと供奉し侍れは。ことはりたかふましく侍にや。前番にもこの兩社つかひ侍て。春日山勝になり侍れは。さのみなるうへ。左は歌からもよろしくきこえ侍れは。かた〳〵勝とさためられ侍り。

二百六十二番

左　　　　　　　　　　　　　　　　　經清

ちはやふる神の御代より曇なく今もみかさの山のはの月

右　左近衛中將

春日山いつれは影もさやかなる月こそ神のちかひなりけれ

左右ともに春日三笠山の月なり。勝劣あるへしともおほえ侍らす。

二百六十三番

左　入空

おさまれる世のこゝろなれや三笠山神さひわたる杜の秋風

右　持房

あまひこも神代の光さしそへて照やみかさのみねのもみちは

左は治世の聲を杜の秋風にきゝ。右は神代の光を紅葉のあさ日にそへたり。いつれよし。いつれあしと申かたくや侍らむ。

二百六十四番

左　持純

春日山御戸の鎰も野をかけて花の紐とく秋の萩原

右　常秀

をしほ山神代の秋にとゝへは木高き月に松風そふく

左右兩首共にいひしりて侍るにそ持とす。

二百六十五番

左　時繁

光をや神もそふらむ春日山みれたちのほる秋のよの月

右　女房

久方の空に光は猶てらすさてそくもらぬ月よみの杜

右歌の月よみの森。さきに同類のさたの侍しやらむ。又さてそなといへる詞。古人も讀侍る事は子細に及はす侍れは。いたくこのみもちゆへきにあらさるよし。申さるゝかた〳〵も侍りて。左の勝に付られ侍りぬ。

二百六十六番

左　近衛

秋風の吹をとはかり住吉の松は千とせの色もかはらす

右　秦兼任

立田山もみちの手向おりをえて神代の秋もしろくみえけり

左はすみよしの松ちとせの色をあらはし。右はたつたのもみちかみ代の秋なおもへり。ともに無殊難侍り。尤可爲持歟。

二百六十七番　冬釋教

左　大僧都

薪とる法のみちにはまよはしなあとを尋ぬる雪の山人

右　正徹

春日野や霜夜の法はもろこしに聞えてのこる鐘のこゑ哉

左は雪山の童子六年の跡をたつね。右は興福の維摩會名聞三國といへる事をよめるにや。とはりたしかにきこえ

侍り。右はいさゝかなと云る様に侍れと。歌からめつらしく侍り。なすらへて持とにやあるへきと。おの〳〵もちあつかひ侍るに。左の作者苦行の功に報ひて。勝字を付らるへきにやと申請られ候うへは。さゝへ申ともからもなかりしやらむ。これによりて勝と付られ侍り。中〳〵興ある事にこそ。抑文永二年御歌合に普光園大閤歌。よろつ代につかへてそみん月も猶かけをとゝむる關の藤川とよみ侍り。大閤申されしは。左歌。忠清の心さしなあらはせり。勝の字を申請へきよし申されき。やかて此うたの番は後一條關白歌なりしかは。關白申侍りしは。於歌之勝劣者暫不可論之。仕君之勤節。誠非可申子細。早以左可爲勝之由申されき。ふるくもかゝるためしの侍りける。符契をあはすとも申すへきにや。

二百六十八番

左　茂成朝臣

霜拂ふ曉をきのあか水に氷をむすふ袖そさむけき

右　小宰相

おのつから御名をとなふる我まても西にかたむく冬の夜の月

左右の勝劣わかちかたきにより持とせらる。たゝし右歌。御名をとなふるは佛名とおほえ侍るに。西にかたむくと侍るは。彌陀の稱名にもわたり侍るへきにやと。うたかひ申人も侍りしかとも。たとへは三世十方の佛を念したてまつるも。西方の往生を所期とし侍れは。これもとはりはたかふましく侍るにや。

二百六十九番

左　經清

夜もすからたけの燈かゝけつゝ思へはつみも消ぬへきかな

右　盛長朝臣

柴の戸の雪のしるしにたつひちも心の外にえやはさとらむ

左歌。おもへは罪もきえぬへきかなといへる。優ならさるにあらす。右歌はかの少林の一擲斷臂白雪の道なとよめるにや。作者の見解こゝろもとなく侍れと。しはらく歌の道には達广宗とかや申侍て。中頃いみはゝかる事の侍るに事よせて。左の勝と定められ侍り。

二百七十番

左　定衡

今も猶出にし道にまよふなよ雪のみやまのあとをたつねて

右　持和朝臣

六とせ經ていつる山路のすて衣やつるゝ袖にひきてかへけん

左右ともに釋迦老子出山見明星の成佛をよめるにや。其中に右うたは冬のと葉をましへすして。六とせへて出る山路のすて衣といへる計にて。題の心なとりまはせる心

はせなと。いさゝかまさるにや有けむ。勝とさためられ侍り。

二百七十一番

左　　持　　　房

身を捨る行衛ならすは雪の山迷ひやせまし法の道芝

右

雪の中にたれ山ふかくすみ染の袖ふりはへてしきみ摘らん

左の雪山。度々みえきたれり。今めつらしからすや。右。雪の中に袖ふりはへてなとは。わか菜をよめるにやと申侍るへき。しきみつむ人の袖ふりはへてなと。いかゝとおほえ侍り。

二百七十二番

左　　入道二位

音に聞法のはやしの冬されに心の月のさはらすもかな

右　　入　　空

身の罪の消ぬに夢はさめてけり霜夜のかねの十聲一こゑ

左うた。法のはやしの冬され。鶴村日枯樹なおもへるにや。功徳林のこゝろなるへくは。冬されいかゝとおもへはんへり。右の歌もとなるとも侍らぬにや。これも持と定められき。

二百七十三番

左　　權大納言

さゆる夜もその曉にあはゝやと氷をむすふあかの水かな

右　　權小僧都宗我

まよひなる心なれはや思ひけん氷の外に水のありとは

右うたは氷水の喩。天台の法門にやとをしはかられ侍り。薄地の凡慮是非に及はされは。しはらく勝負をさためす侍るへし。

二百七十四番

左　　權大僧都實政

朝毎の霜をかされて色かへぬ松は御法のすかたなりけり

右　　持　　純

消わひて西のむかへをまつの戸にことしも雪の積るをそみる

左の歌は世間相常住のこゝろにや。翠竹黄花ことくゝく眞如なと申事の侍れは。松を法躰といへり。さしや申侍らむ。きのみ持とのみさため侍らむもいかゝにて。左の勝になされ侍りき。

二百七十五番

左　　氏　　數

世の中の常なる色や是ならむ紅葉し山のみねのしらゆき

右　　爲季朝臣

寒き夜に佛の御名をとなふれは雪とともにそ罪は消へき

左歌。紅葉し山といへる。詞たらぬやうに聞え侍り。さためて證例も侍らむ。右のうた。雪とゝもにそつみもきゆへきと侍るは。即時滅罪の心にあらて。春を期すへきにや。

二百七十六番

左　　　　　　　　　　　　　　　時繁

あかむすふ苔の袂にふる霰かけしころもの珠かとそみる

右　　　　　　　　　　　　　　　常秀

にこりなき心の水は氷られとあかつきさえて鐘そ聞ゆる

左歌は高辨上人の歌。まつの下いはほの苔に墨染の袖のあられやかけししら玉。新勅撰集に入り。あられを衣裏の珠に比する事はおなし心に侍れと。これほとのことは大なる難には侍るましきにや。右うたは衣笠内府歌に。哀わかこゝろの水のいつよりかとけぬ氷のむすひそめけむと侍る。面かけ思ひ出侍れと。心の水のこほりといへることも。いくたひなりともなとかよみ侍らさらむ。いかさま此番持と定められき。

二百七十七番

左　　　　　　　　　　　　　　　成前宿禰

かすかすのつみ消としも墓ぬへし三世の佛の御名をとなへて

右　　　　　　　　　　　　　　　左近衛中將

神無月なにおふならの古寺に霜ときをける法のことの葉

左の歌。第二句きゝよくも侍らす。右の歌は文屋ありすへか歌。神無月時雨ふりをけるならのはの名におふ宮のふるとそこれと侍るをとりて。維摩會の事によみ侍るは。いとおかしくもはへるかな。これは右の歌かち侍らんかし。

二百七十八番

左　　　　　　　　　　　　　　　女房

今も猶草の莚やしきしのふしもといふ月の廿日あまりに

左　　　　　　　　　　　　　　　近衛

春よりも西のむかへを待身には御名をとなふる年の暮哉

左の歌の草のむしろ。なにとそなとゝ。をのをのうたかひおもへるにや。たとへは十一月廿四日は天台智者大師の忌日たかし。その日にあたりて大僧正慈惠のよみ給へるうた。そのかみのいもゐの庭にあまれりし草のむしろもけふやしくらむと侍るは。續後撰に見をよひ侍りしよし申出し侍りしかは。さる事ありとて勝の字をゆるされ侍りし。

二百七十九番

左　　　　　　　　　　　　　　　中納言

おほかたの佛の御名はとなふれと法の道をはしる人そなき

右　　　　　　　　　　　　　　　兼任

法のため我わけなれし峯の雪みきりにかよふ道もまよはし

左右同品の歌也。持とさためらる。

二百八十番

左　法印堯孝

これも又むなしき空に散花のたとへをみせて雪そみたるゝ

右　右衛門督

さとりえぬ御法の水のあさ氷とゝろつからそむすほゝれ行

左うたは了義經の文に。猶如空花。從空而有幻。華雖滅空性不壞といへる心にや。右歌もさきの番の心の氷るの内府のうたにかよひ侍るにや。いかさまこれは左の勝とそ。をの〳〵さため申侍し。

【右前攝政家歌合以圖書寮本校合】

續群書類從卷第四百十一

和歌部四十六

三十番歌合　文明十三年十一月十五日

一番　寒夜月

左（勝）　大納言殿

秋にみし露をは霜に結ひかへて枯野の月の影そさひしき

右　前大納言爲富

空の海氷をわけて出ぬらしさらてもさゆる月の色かな

右方申云。露をは霜にむすひかへたる枯野の月。殊勝のよし一同申之。

左方申云。波とも水とも侍らて。氷を分るといへる。いかにそやきこえ侍る。

陳云。海と侍るうへは。氷といはんこと難に侍らす。

左歌。右方より一同に褒美申さる。誠一篇幽玄五句相應せり。常歌合の例として。同科なるをたに左の勝とするとに侍るを。これは右歌の是非に及す。早左の勝と定め申侍也。

二番

左（持）　按察使親長

板間もる影さへ霜を置そへてはらはぬ袖にさゆる月かな

右　前中納言雅康

いむなりと思はぬ人も寒き夜の月をはしゐて詠やはする

右方申云。ことなる難なく侍り。

左方申云。後撰集に月をあはれといみそかねぬるといへる。本歌の心をおもへるにや。宜侍る歟。

左歌さしたる難なく侍り。右歌。寒月をしゐてなかめぬ心さる絆には侍れと。月のため無念にきこゆ。すさましきためしにいひおきけん人の心あさゝよと。紫式部もかき侍

り。又雪のうへなる月を見さらんなとよめる歌も。月を賞
する心なるへし。いむといふと。後撰集の歌源氏物語のや
とり木の巻のとはにも侍れと。此五文字には優ならすや。
しかれとも左歌にはいかてかまけ侍らん。持なとにや。

三番

左持　前大納言公躬

影さむみ松の木のまを吹分て嵐よりもる峯の月かな

右　權大納言高清

置まよふ霜よをさむみ雲はいま跡なき月にあらし吹也

右方申云。殊事なし。

左申云。となる難なし。

左右の申さるゝに任せて。難なき持となす。

四番

左持　參議基綱

もとゆひの霜夜かさなる手枕にめてしと思へは月もすさまし

右　右衞門督爲廣

霜まよふ枕のあらし聲さへて軒端の山に有明の月

右申云。殊難なきよし申侍り。

左方申云。難申へきとなし。

月をもめてしといへる歌を思て。本結の霜をなけく心お
かし。二番の右歌に。しゐて月をなかめぬとにつきて。く
はしく申侍り。これはめてしとおもへはといへるは。めつ
る心深かるへし。軒端の山に有明の月もよろし。勝負難決
歟。

五番

左持　侍從中納言實隆

更る夜の月吹しほる木枯に森のしつくもつらゝゐにけり

右　參議永繼

深行は影さへとをる衣手に霜をきかさねやとる月哉

右申云。殊なる難なし。

左方申云。よろしくきこえ侍り。

月吹しほる木枯にといひ。森のしつくもなといへる。心詞
宜しくこそ侍れ。夜衣にさへとをる月も霜も。又身にしむ
心地し侍る。仍爲持。

六番

左持　政國

庭の面は猶白妙に深そ行雲井の月や霜に落らん

右　宗伊

行月の中なる水の氷る夜や（れるやイ）影にも霜の猶むすふらん

右方申云。となる難なく侍るよしを申。

左方申云。中なる水。さる事に侍れとも。さしつめたるや
うに侍るにや。

左歌。常の落月にはあらす。杜の朽葉の霜のうへにといへる歌の心なるへし。歌のさまよろし。右歌。中なる水の事。久かたの中なる川の なともよめるにや。日中火月中水うたかひなし。本文もたしかなり。つよき所もあれは爲持。

七番

左勝　　政茂

おきゐつゝこりしく袖の霜をたに宿る月ゆへはらはてそ見る

右　　頼行

木枯のさゆる雲間をゆくりなく誘はれ出てこほる月哉

右方申云。題の心たしかにいひ知て侍り。

左方申云。第三句源氏物語の詞には侍れと。耳にたち侍る歟。

右歌。第三句耳にたつよし難せらる。此ゆくりなくといふ詞。作者いかなる心と思たまふるにかおほつかなし。大和物語に。泉大將左のおほい殿にまうて給へりけり。ほかにて酒なとまいり。ゑいて夜いたく深て。ゆくりもなくものしたまへりとあるか。又よもきふの巻には。物思ひなきさまして。ゆくりなくはしりきてと侍るやらん。いかさまにもこの歌にかけあはぬ心地し侍るは。さためて老のひか事に侍るへし。左歌。題の心たしかにいひ知りて侍るよし申さるれは。其義に同心し侍る也。

八番

左持　　政行

霜さゆる影すさましく庭の面のあさちに深き冬の夜の月

右　　貞綱

雲はらふ夜半の嵐を光にてこほれる月や影みかくらん

右方申云。さゆるとすさましき重疊歟。

左方申云。光と影おなし心にや。

右冴冷。左光影。重疊之由互難之。さゆる影すさましくとある。をもきとかにはあらすや。光影。古歌合に。秋来ぬとほのみか月の光りにそかねてくまなき影はしらるゝとある歌の侍りしをは。不難やうにおほえ侍る。しかれともいつれも不庶幾事に侍るへし。強て不論勝劣。

九番

左勝　　政凞

冬の夜は水なき空にすむ月の千里をかけて氷をそしく

右　　元爲

深る夜は水なき空も氷けりかたふく月のさゆる光に

右申云。殊なる難なきよし申侍り。

左方申云。となる事なし。

左右。水なき空。月の氷。同さまに侍るへし。秦甸之一千餘里。凛々氷鋪といへる句をとられたる歟。八月十五夜賦に

て侍るにや。但第二句以下秋歌によろし。題の心をそむかしとにや。冬の夜はと置れたる五文字そ。無下によはくきこえ侍る。右のかたふくも詮なきに似たり。兩首二なき所とも侍れは又持とす。

十番

左持　重信

白妙の影をかされて置霜に猶色さむきあさちふの月

右　玄就

うちとけてねぬ夜の月の影さむみ氷をしける床のさむしろ

右方申云。させる難なく侍り。

左申云。霜結ふ袖のかたしきうちとけてれぬ夜の月の影そさむけきといへる歌侍る。同類にや。

左歌無殊難。右詞有同類。仍左のかちとす。

十一番　竹雪深

左勝　親長卿

ふりつみてなか〳〵雪やおちつらん青葉そましる窓のくれ竹

右　元爲

あしからやふりしく雪のたかけれは末葉を分る竹のした道

右方申云。となるとなく侍るよし申。

左申云。となる事なし。

左。雪にたへすをのれおきかへり。竹の葉のあらはるゝ心おかし。右。あしからやと事〳〵しくいひいたされたる。いかなる用にかと見侍る程に。竹のしたといはんためなりけり。かの所の名東海道足柄近所とかや。若竹あるによりて名付たる所にて侍るやらん。作者定て覺悟ある歟。竹と云詞に付て。一夜やとかるといひ。うきふししけきなとよめる古人も侍る。さも侍るへき事也。ふしの山きよみか關なとも。いまたみぬ所には侍れと。此竹のした道はことにたと〳〵しく侍れは。先左の勝とす。

十二番

左持　大納言殿

ふりつみし籬の竹はおれふして雪よりはるゝ窓の曙

右　宗

山高み麓の竹はおれふしていく千尋ともしらぬ雪かな

右方申云。首尾相應よろしくきこえ侍り。

左申云。いひしりてきこえ侍り。

左の籬の竹雪におれふして。曙窓遠望おもかけたくひなくみえ侍り。右。麓の竹と〳〵くうつもれて。深雪幾千尋ともしらぬこゝろたくみに侍る。よき持にて侍るへし。

十三番

左持　公躬卿

ふるまゝになひくもおもしとしおひの竹のさ枝につもる白雪

右　頼行

松は猶つれなき軒の呉竹をけちめみせてもうつむ雪哉

右方申云。ことしおひの竹に雪のおもき心ふかくきこえ侍り。

左申云。源氏物語の心やさしく侍り。

右歌。あさかほの巻に。松と竹とのけちめおかしくといへ（侍るイ）る歟。松は猶つれなきとよまれたるは。松はなひかす竹はおれふしなとする心歟。猶いひおほせてもきこえす。短慮いさゝかまよひ侍れと。力あるさまに侍り。左歌。さしたる事なし。又持なとにや。

十四番

左持　政熈

呉竹を千尋と（にイ）見れは君か代の光もたかく積る雪かな

右　為富卿

住人の千代の數かも雪おれのたけの聲のみしけき砌は

右方申云。殊難なく侍り。

左方申云。優祝言不及難。

左右歌皆奉祝君之心不淺。尤珍重。於歌方共以頗無氣力。又無（不能イ）勝負歟。

十五番

左持　實隆卿

はれてたにさ枝そおもき呉竹の我友を待雪のした折

右　貞頼

埋るゝ籬の竹をゝのつから軒端の山とむかふ窓かな

右方難なきよしを申。

左方申云。さる躰に侍り。殊難なき歟。

左右の雪。淺深いつれもわきまへかたし。

十六番

左持　政茂

うつもるゝ竹の末葉や千尋まて積れる雪のしるしならまし

右　永継卿

下おれの音さへ絶ぬ雪の日のあまり程ふる窓の呉竹

右方申云。指難なし。

左（方イ）申云。心あるさまに侍り。

左。雪のしるしにさほなとたつる事侍るやらん。さやうの事によせられたる歟。皆竹千竿なとからの歌にも侍れは。竿にはよれる事なから。雪になひく竹にゝるへくもあらす。右。あまり程ふるに竹のおれつきたる心。いかにそやきこゆる。可爲持歟。

十七番

左持　基綱卿

船つなく小河の水におれふして雪の笛ふく岸の呉竹

右　　　　　　　　　　　　高清卿

埋れてそれとも見えぬ一村の竹をしらする雪おれの聲

右方申云。竹篷なといへる心宜しき歟。但水におれふして雪の笘ふく。いかゝのよし侍り。

左方申云。それとも見えぬまて。竹のこらへ侍らんとおほつかなし。

陳云。うつもれても必しもおれ侍らぬ事もあるへきにや。小川の水におれふしてといへる。水上の事なるへし。雪篷なとゝ詩にもつくれり。優にはあられと。一のすかたに侍り。それとも見えぬ竹。雪おれの聲に竹としられんと。さこそ侍るへけれ。又持とや申すへからん。

十八番

左　　　　　　　　　　　　政國

下おるゝ程をもまたてなよ竹のよはきや雪のたよりなるらん

右勝　　　　　　　　　　　雅康卿

降雪にまつ下おれし竹の葉やひとりさめたる色を見すらん

右方申云。無殊難。

左申云。竹葉酒にとよりて。ひとりさめたる詞。いひしりて侍り。

左歌。下句猶いひおほせてもきこえす。右歌。竹葉を酒にとりなされて。屈原衆人皆醉といへる心によせられたる。たくみには侍るを [illegible]のさまこのむへき姿にあらす。されとも左には勝侍るへきにこそ。

十九番

左勝　　　　　　　　　　　重信

なひくかと見るかうちより呉竹の末ふす程に積る雪かな

右　　　　　　　　　　　　爲廣卿

うつもれてそれともみえぬ呉竹の有とやこゝに雪折の聲

右方申云。宜く侍る之由申。

左方申云。さきの番に此心侍り。但ありとやこゝになと。いひしりたる歟。

右歌。十七番に侍し。めつらしけなし。左。みるかうちよりなと宜く侍り。かちなとにや。

廿番

左持　　　　　　　　　　　政行

あかすみん猶ふりそへよ呉竹の千世をこめたる宿のしら雪

右　　　　　　　　　　　　玄就

積れ猶ゆたかなる代のしるしをは雪にみるへき園の呉竹

右申云。となる難なし。

左方申云。となる難なし。

二首の呉竹。さしたる一ふしも見えす。持にて侍るへし。

廿一番　忍逢戀

左　　政茂
東路のしのふの山もこれやこの心の奥の逢坂の關
右勝　　貞頼
しきかはす袖のうらはに寄浪のよるさへ人めいとはすもかな
右申云。忍ふの山とありて。心の奥の逢坂の關。すこしいひおほせてもきこえさる歟。
左申云。初五文字ふとしたるやうにきこえ侍るにや。左歌。とはのつゝきすこしたとらるゝ所も侍り。又千五百番歌合に家隆卿。鐘の聲鳴の羽をともあはれなり野寺の霧の明かたの空とありしを。定家卿判に。の文字六かさなりて侍るやあまりに侍らんと難せり。七まては猶こそあまりに侍れ。右歌。しきかはす。誠にふとしたる心地す。初五文字と童子のかしらとは。なたらかにとこそ古人も申侍れ。〔しかれとも重きとかにあらさるへし。イ〕歌合のならひ吹毛のと〔なかれイ〕となれは右勝侍るへし。

廿二番
左　　政凞
こすのとによふかき人の衣の音をしるへにひけは匂ふ袖哉
右勝　　爲廣卿
妹脊川あさきあふせにいかなれはつゝむ思の淵は有けん
右方申云。しのふ心もいかゝ。逢事又おほつかなきよし各申。
左方申云。たくみにきこえ侍り。
左の夜ふかき衣の音をしるへにひく心。さためて忍逢戀にかなへる古事の侍るにや。老耄覺悟せす。口おしくそ侍る。先右の勝とこそ申侍らめ。

廿三番
左持　　政行
相坂の關路くるしき行末に思ふ忍ふの山そ夜深き
右　　雅康卿
ふけてとひあけぬに急き人めよく契はいつをひまとしもなし
右申云。殊難なし。
左申云。無可難申之旨。
左。相坂の關をこえて忍ふの山の行末をはるかに思ひ。右は深更にとはれても。やかて別離のみちにおもむき侍る。ともに心くるしくおほえ侍り。勝劣定申かたし。

廿四番
左持　　重信
よそにもしゝれなは扨も逢とをたかしのはぬになして嘆かん
右　　爲富卿
下帶のとけぬるよはも物そ思人のきかしをつゝむ心に
右方申云。第四句申不甘心之由。

左方申云。第四句ふるき詞には侍れと。聞にくゝや侍らん。

左右第四句互難之。誠に以不庶幾歟。

廿五番

左勝　基綱卿

忘れしなたゝ夢はかりあひ見るも人めわりなき夜半の手枕

右　元為

すり衣らなき中にかされても忍ふのみたれ心ゆるすな

右申云。無指難侍。

左申云。すり衣とうちいてたる。いかにそきこえ侍る。大かたはよろしきにや。

すり衣と初五文字にうちいたされたる。けに優ならすや。左勝へきにこそ。

廿六番

左持　政国

おく深くたちそ忍はんふたりみる今宵の月は物言すとも

右　頼行

つらかりし限しらるゝ今夜さへ心の忍ふいとゝみたれて

右申云。初五文字。するに居所なとなくて。おく深くいかゝ。

左申云。心の忍ふ。いひおほせても聞侍らす。

左右互に難申さるゝ所かなへり。勝負難弁。

廿七番

左持　親長卿

わりなくも思ひやかはすから人の袖ふるとをかけゝ契は

右　永継卿

今夜なを人もさこそは忍ふらめ逢を限りの契りならねは

右方申云。申無異難侍之由。

左方申云。心深く聞へ侍り。

左歌。もみちの賀の巻の心にや。忍通ふは戀なとの題ならましかは宜しくや侍るへき。右一首のこゝろたしかならす。仍為持。

廿八番

左勝　実[illegible]卿

あちきなや又かはかりの逢事もいつの人まをさても待へき

右　玄[illegible]

人しれす結ひおきつるしろしとや今夜とけぬる中の下紐

右申云。難なきよしを申。

左申云。結ひおきつるといへる言葉。契なともなくては。いかにそや侍る。

右。結ひおきつるしるしにやとて。末に中のしたひもと侍れはとかなくや。左。題の心もたしかに。又かはかりの逢

事もなといへるわたり宜く聞ゆ。勝侍るへし。

廿九番

左勝　大納言殿

逢ひみてそ心の奥にしられける忍ふの山の露のした道

右　高清卿

むつともよしや忍はししるとても人にはいかゝつけのを枕

右方申云。下句優美殊勝之由申侍り。

左方申云。無可難申事。

心の奥のしらるゝにつけても。忍の山の露のした道を分まよふ心姿。おかしくも侍るかな。右歌。左にはかはりて。ことはつよくいひつめられたる。これもさるすかたには侍れと。猶左には及ひかたし。

卅番

左　公躬卿

もらさしとたのめし中はかた糸の逢てふ夜半も猶そくるしき

右勝　宗伊

涙ほす袖にあまりのうれしさも猶つゝましくあかす夜半哉

右方申云。難なく侍るよし申す。

左申云。よくいゝつゝけられて宜く侍り。

左歌。凡姿よろしく侍るを。下句にてふといへる言葉いかにそや聞へ侍る。たゝ逢ふ夜はもとこそいひたく侍れ。右歌なにゝつゝまむといへる歌をとりて。猶つゝましくなと。戀の心にいひなされたる。いとよろしく侍り。

題

寒夜月　竹雪深　忍逢戀

作者

左			
大納言殿	勝二	持一	
按察使親長	勝一	持二	
前大納言公躬	持二	負一	
参議基綱	勝一	持二	
侍従中納言實隆	勝一	持二	
政園	持二	負一	
政茂	勝一	持一	負一
政行	持三		
政熙	持二	負一	
重信	勝二	持一	
右			
前大納言爲富	持二	負一	
前中納言雅康	勝一	持二	
權大納言高清	持二	負一	

右衞門督爲廣	勝一	持一	負一
參議永繼	持三		
宗伊	勝一	持二	
親行	持二	負一	
貞顯	勝一	持二	
元爲	持一	負二	
玄就	持一	負二	

讀師

講師

判者　衆議

入道大納言榮雅　後日書判詞。

文明十三年十一月廿日

〔右三十番歌合以圖書寮本校合〕

天正七年内裏歌合

〔右舊本闕内閣記錄課藏一本闕之與正編所收文祿三年八月後陽成院歌合全相同故從省略〕

内閣本奧書云

右之寫本後陽成院歌合云々。作者作年數旁不相應。書失無疑。委勘之。御製正親町院。内大臣ハ三光院實枝公也。則天正年中歌合也。仍改題號天正歌合。後人爲無疑記之。

延寶三年林鐘日

續群書類從卷第四百十二

和歌部四十七

陽成院歌合

題

夏虫　戀

一番

左持

いたつらに身はなる□と夏虫の思ひはえこそ離れさりけり

右

身をすてゝひとつ思ひにこかれたる心そ夏の虫にまされる

二番

左

おもひをはいかにしれはか夏虫のもゆる中にも入まとふらん

右

戀すとてみはいたつらにならはなれ我なら〔つ歟〕虫に成やしなまし

三番

左

おの／＼かみをはおもへと夏虫のかゝる思ひはえ社はなれね

右

こひによりみのうせむをはみゆれとも猶夏虫のなをや立なん

四番

左

こひ／＼てたゝにやゝまむ夏虫の思ひのほかにみをや捨てむ

右

獨〔ひとにイ〕よりひとつ思ひにみをすてゝ今年も夏の虫となりしよ

五番

左

身を捨て思ひにいれる夏虫の今いくすちもあらしとそ思ふ

右
年をへてこひにみなるゝ夏虫のあふにはかへていかゝ成にし
六番
左
逢ことをいつともしらぬ夏虫の思はかきりなくやあるらん
右
かた〳〵にみをそ捨つる夏虫のなをあきたらぬ戀をたのみて
七番
左
あひみたるともなくては夏虫のいかてか思身にはゝなれむ
右
身のならむとをはしらて夏虫のいかなるこひに思いるらん
八番
左
限なき思ひのほかに夏むしのまとふを人のうへとこそみれ
右
たゝひとや思ひをたにも夏むしの命をすてゝ頼むなるらん
九番
左
思ひにそみをもかへたる夏虫のきえてもあふと誰にいひけん
右
あひもみし戀にしよりて夏虫のもえこかるれとかひなかり鳬
十番
左
みよりまたおもひのとに夏虫のなれてすへにもたのむなる哉
右
夏虫のわかたましひにみをつくし(かへてイ)心とことにこかれけるかな

【右陽成院歌合以圖書寮本校合】

河原院歌合　九月五日庚申夜　廿首

一番　霜鶴立洲
左
あしたつのたてる渚の河浪はちよをかす□すむにや有らん
右かつ
景見えてみきはにてたてるたつは皆うつしたるよを思成へし
二番　翠松臨池
左かつ
池水に松のみとりのそめぬれはいとゝふかさの底もしられす
右
たれにとかいけのこゝろも思覽そらにやとれる松はちとせを

三番　旅鴈聞雲

左勝

くさまくら我こそたひに露けゝれ空にきこゆるかりのこゑ哉

右

行とくと雲ちをならすかりかねのつねの旅とは思はさるらん

四番　夜虫鳴叢

左

あきのゝのくさは露にそほとへつゝ鳴虫のねに我もおとらす

右

くさむらのねになく虫のあけかたくなり行秋のよはにきく哉

五番　花薄招人

左持

花すゝきまねく袂のあまたあれはゆきもやられす秋の野の道

右

はなすゝきまねく袂やたゆからんはかろの風にかへる人なみ

六番　秋萩鳴鹿

左

なくしかの涙なるへし秋野の〔こ脱歟〕はきのつゆはとにみゆるは

右

篠路よりものゝふ萩にいとゝしく鹿のねをさへ鳴てきかする

七番　露光宿菊

左

白露のやとりし時はしろかりし菊はいかてかいろのとなる

右

かさしにはをかまほしきを白菊の花にやとれる露やこほれん

八番　月景漏屋

左持

あめならぬ年のふるにもわか宿は月もるはかりあれにける哉

右

月もりて荒たる宿の〔露脱〕あひたにはいつれをあすの明るとかせん

九番　茯生坂薄霧深

左勝

外よりはたちやそふ覧あき霧のうりふのさかにくらくも有哉

右

なに高くなりはしぬれと瓜生坂霧のみたてはみえすも有哉

十番　佐保山紅葉淺

左

さを姫にとひみてしかなわきてしもはゝその紅葉うすき心を

右勝

さほ〔ひ脱歟〕めのなたてに薄き紅葉はをあたりの風の吹ちらさなん

御傳本

多武峯歌合
河原院歌合
千代君歌合
右一卷者小野宮忠家卿眞跡。
但俊成卿祖父定家卿曾祖父にて。到而古代の眞筆にて。定家卿小倉色紙よりも遙に珍書と。冷泉爲村卿も賞美に御座候。
高松彈正尹好仁親王御重寶に御座候。其より花町式部卿良仁親王御傳御重寶に御座候。其より有栖川兵部卿幸仁親王に御つたへ。其れより有栖川一品中務卿織仁親王え御傳來候。明和五年紫野大德寺寂巖和尙へ御傳へ御座候を。中川主稅頭。豐島大舍人頭。當人より世界之名物と申事にて達而申受候。其より亡父左兵衞尉傳來仕罷在候。以上。

多武峯往生院千世君歌合

題
凉風入簾　閑山秋月　叢露爲玉
野花錦延　水害幽音　戀

歌人
右　仁昭　長昭　千世君　惠勝　長嚴　長運
左　靜範　明尋　成嚴　修勝　泉圓　覺運

判者
紀伊入道

一番　凉風入簾
左　仁昭
わきもこかあたりのこすはまかね共まとをしに吹風そ凉しき
右　靜範
秋風のみすのまとをしふきかへてなれしあふき（の脱歟）行衞しられす
わきもこにあふきのかせをくらふれとさたかに見えすこすのまとをし

二番　閑山秋月
左　長昭
月のみそみれのつゝきにすみわたる妻よふ鹿の聲はかりして
右　明尋
秋のよの月すみわたる山のはゝたちよる雲のかけたにもなし
つまこふるしかもしかとはきこゆれと山にはくもやたちまさるらん

三番　叢露爲玉
左　千世君
月かけにみかける玉とみえつるははきの上葉の露にそ有ける
右　成嚴

草むらにはにおりし白露にいろ／＼の玉をぬけるえけり
しらつゆはよきのうはゝやおきまさるはなにかゝるはあ
たにみえけり
これはさもあるましきことをこのきみにさゝまうすとてこ
ゝろゆかす思てなん

四番　野花錦道

左　恵　果
から錦におれる錦をそれもなそやまとの秋のゝにはをかしな

右　修　尊
のへことにきてにほへはいろ／＼の花の錦とみえわたる哉
からくにのいろにはしかしあきのゝのはなのにしきはつ
ゆのあたなり

五番　水有幽音

左　長　[illegible]
やまかくれやゝかすかにそ聞ゆなるなほ谷川の水のなかれは

右　泉　圓
岩間わくみの音こそきこゆなれあきのよ深くなるにや有らん
ひとへつゝかすかにむせふたにかはをよふかきこゑはな
をやますらん。

六番　戀

左　長　暹
いかにしてか包みかくさむ忍ふれともかほにはかりみえし我戀

右　愛　世
あさましや浅間のたけの嶺ことにつらきもしらすもゆる我戀
みることにあさまのたけのけふりあひてよにあまるこひの
ほともしられけり

〔右多武峯往生院千世君歌合以内閣本校合〕

源大納言家歌合

歌人
あるし殿
しゝうのめのと
上
上宮君
少將めのと

題
ありあけの月　雲　さわいつる
かくら　ふらくしけ

源大納言家歌合　六番
ありあけの月

左勝　あるし殿

有明の月をまつ夜のうたゝれは山の端のみそゆめに見えける

右　しゝうのめのと

まつとねすみるとても又まとろます有明の月をなかめつゝ哉

山雲

左持　あるし殿

しら雲のかゝれるときよ足ひきの山路を人はいかてわくらむ

右　しゝうのめのと

をちにすむ人はめなれて思ふらんはるかにみゆる嶺のしら雲

左　あるし殿

つくはねの嶺のつゝきにいる雲は山もすきゆく心ちこそすれ

右勝　上

吉野山かすみにけりと見えつるはたなひく雲のうすき成けり

さわのつる

左　あるし殿

さわの鶴のとかに遊ふけしきこそ千年ふるまふすかたゝけれ

右勝　上宮 君御

うちむれてさわへにつるの來る哉いつれの浦にしほかみつ覧

かくら

左　少将のめのと

まとひするそのかみの代の初よりとれとつきせぬ山の榊は

右　しゝうのめのと

ときはにてをらんと思へは榊葉をさしてそいのる萬代まてと

からくしけ

左　少将のめのと

風ふけはしら浪たちておきからくしけき苫まに舟はこきよれ

右　しゝうのめのと

乗てより神は知覧きのふからくしけつり置しみてくらそこれ

〔右源大納言歌合舊本闕今以内閣本補之〕

範永宅歌合 十番　年　月　日

題

野花　小鷹狩　駒迎　十五夜月　秋田

露　鴈　霧　臨　擣衣

歌人

一番　野花

左勝　宮若乳母

秋のゝはしたはのみとりなかりけり錦とみゆる花のにほひに

右　小禪師 聖范云々

秋野にしめやゆはましさま〱にいろめく花の後めたさに

二番　蟲　持

左　　宮若乳母

むら鳥はいかゝ聞らんたかはなしかりはのをのゝすゝ虫の聲

右　　成　元

かりくれぬ野邊にこよひは旅ねしてくさの枕にすゝ虫のなく

三番　駒迎

左勝　　宮若乳母

□ほら□ふちの駒をなつけてそゆきあふさかの關に引つる

右　　則　元

あふさかの關のあなたに引つれていまやみゆらんきり原の駒

四番　十五夜

左　　小乳母

あまの原みちてそすめる秋の月てらさぬ里はあらしとそ思ふ

右勝　　成　元

つねよりも秋のなかはの月影にまさる光はあらしとそおもふ

五番　秋田

左　　式　部

、、なかるそらをやたのむ秋のたはくるほともなき、、、、

右勝　　小禪師

うへしよりかりてほすまてを山田の草葉の庵に幾夜ねぬらん

六番　露

左　　若乳母

草しけき淺茅か原におく露をいとにもぬかぬ玉とみるかな

右勝　　則　元

しら露のおくあれたには秋風をいとふわかみとなりにける哉

七番　鴈

左勝　　乳　母

衣うすみわられぬ秋のさよなかには風涼しくかりそなくなる

右　　五節君

ゆきかへり、、、、なる鴈かねはかよふ雲ちをいかゝわく覽

八番　霧

左　　小乳母

はゝそやまおほつかなしや秋霧の紅葉の錦たちし、、、、

右　　成　元

秋霧のやまへもみえすたちぬれは紅葉の錦にゝやなからん

九番　鹿

左勝　　若乳母、、

鹿のねに秋をしるかなたかさこのをのへの松は綠なれとも

右　　、、衍

〔つゝ衍〕まつこふる聲なかりせは擣鹿のたへまを人はいかてしらまし

十番　擣衣

左　　式　部

よと丶もに衣うつなる音にこそ人まつやとはしるくきこゆれ

右　　　爲丶

秋風のふきしまされはから衣うつこゑあまたきこゆなる哉

歌繪合

やよひの十日あまりのゆふくれに。月影みつにうつるおりしも。人あまたさふらひて。物かたりのついてに。たれともなくいひあはせし。はるの日のつれ〳〵にくらすよりは。つねならぬいとみとをおまへに御覽せさせはや。むかしよりきこゆる花あはせなとは。ちりてふるきれにかへりぬれはにほひこひしく。くさあはせとかは。たつねてもとのところにかへしやれはなこりうるさし。さておくらか歌林とかいふなるより。古萬葉集まてはこゝろもおもはす。古今後撰こそあをやきのいとくりかへしみれともあかす。もみちのにしきそめいたすこゝろふかきいろなれとて。左右さためつ。歌繪にかくはよのつねのことなれは。題よみ人をかくへきなり。ことはをとれは歌はかきにくし。うたをえるにはことはあらはれす。かみのこゝろにはめてらるゝとも。人のそしりをはのかれかたし。いにしへうたのふるきにそへても。あたらしきとの あさくともあらんはめつらしくやとて。うたみつをそへたりつる。うの花。月。ほとゝきすこそあろへきほとなれと。おほとのゝ歌合の題なれはつるにかへたるなり。女房廿人を十人つゝとりわけて。繪かく人をつて〳〵にたつぬるほとに。卯月のなかはにもなりぬれは。あふひのさかりにひきかゝりて。もろ人いとまなきころをすくして。廿六日に空のけしきくもりなきに。淸涼殿のひんかしおもてのもやひさしを。かんたちめのおほんさにしたり。源大納言殿。小野宮の中納言。左衞門督。新中納言。中宮權大夫。右大辨。左大辨。三位侍從。殿上人はくらへ馬のさためしける日なれは。そのところより右のとうの中將つき〳〵八九人はかりひきつれてまいりたまへり。みすのうちには北南ゐわきて。左なてしこかさね。右ふちかされ。左。かねのすきはこにこゝろはして。かねのうのはなかさねのかみしきて。かねのむすひふくろに。いろ〳〵のたまをむらこにつらぬきてくゝりにしたり。古今繪七帖。あたらしきうた繪のかねのさらし一帖いれたり。へうしさま〳〵にかさりたり。うちしき。なてしこのふせむれうに。うのはを〔[illegible]〕いたり。かすさし。かねのすはまにさしてのいそをつくりて。いはやまに松おほくうへたるを。かすにははまへにさしうつすへきなり。うちしき。ふかみとりのふせむれうなり。右。かゝみのうみにかねのあみをうかへて。たまのいかりにかねのつなをかけたり。かねのすきはこをうちにをきて。繪のさらし六帖。あたらしき繪のさらし一帖いれたり。へ

うしさま〳〵にかさりたり。うちしき。ふたあゐのさうかに。しろき文をぬいたり。かすさし。かねのすはまに。かねのつるあまたたてたり。ちとせつもれるといふこゝろなり。かすにはつるのうらつたひすへきなり。うちしき。ふかみとりのさうかにぬひものしたり。日もやう〳〵くれぬれは。こなたかなたにゐわきたまふ。おほきとのはくゝませたまふおほむすかたなれと。上らふものしたまふとて。しのびあへさせたまはす。左。うたよむ人。四位少將。右兵衛佐。かた〳〵のさうしとりてよみあはするほとに。ひたりのかたより兩掌人〻七八人くしてまいりたまへり。かた〳〵うるはしくなりて。一二番かんたちめおほん中にさためもやりたまはぬに。殿上人いとみことさためそむる日なるを。かちまけはいみあるとになんとはへりしかと。けにこの京とも〻おほろけにては見さためかたきことのさまなれはとて。たゝこなたに見たまふ。なか〳〵かちまけあらんよりは。みたれをかしくそ見はてたまふて。

鶴

左　をのゝみやの中納言あたらしきうたよみたまふ。

よろつよの影をならへて鶴のすむふちえのうらには松そ木高き

こゝろはへあり。すかたかさりをかしきはし（マヽ）事

右　新中納言よみたまふ。

はかへせぬ松のねくらにむれ居（つ脱歟）ゝ千年を君にみなゆつる哉

つゝきなともをかしときこゆるに。左の人々はかへとあるをなんいひなしたまふやうありける。

卯花

左

みわたせはなみのしからみかけてけりうの花さける玉川の里

したゝかにきこゆれと。

右

うの花のさけるさかりは白波のたつたの川のゐせきとそみる

するいまめかしくこゝろありなとはへるは。ゆかぬとにそ。

月

左

やとにかはらぬものは山のはの月をなかむる心なりけり

ゐのさまをかしくおもひあるやうなとほめ給ふに。

右

山のはのかゝらましかは池水にいれとも月はかくれさりけり

なへてならすや。つゝみもならほめたまふ。とうの弁。みまさかのかみなと。あまりなるまて、きこゆ。かくてわたとのにうつりたまふまゝに。はやくより ふりにけるやり水なれと。こよひあたらしくて。いしな とをほめたまふ。かはらけあまたゝひになりて。おほんとなとはゝからせ

たまへは。大納言殿ふちせとなるこゑとはへりしに。ありしほとに。ひきてものゝうまにや。ともしひのかけにみゆるは。ひさかたのつきけならねと。目とまりはへりし。かゝるとはかたはらいたけれと。ゆく末もときはの松のことのはをかきとゝめすは。ちよへんつるのふるきあと。たつねましきともやあるとてなむ。

西行法師の手跡にて寫侍る也。

金玉歌合

左伏見院御製
右爲兼卿

一番　春

左

かすむてふ姿はみえす世の色ののとけき空のなにこそ有けれ

右

空は猶雪けなからの朝くもりくもるとみるも霞也けり

二番

左

花やいかに春日うらゝに世はなりて山のかすみに鳥の聲〳〵

右

しつみはつる入日のきはにあらはれてかすめる山の猶奥の嶺

三番

左

うき世にはよしなき梅のにほひ哉色に心をとめしとおもふに

右

梅かゝは枕にみちてうくひすの聲よりあくるまとのしのゝめ

四番

左

あかしかぬる寢覺の思ひつきもせすたゝ秋のよのねやの春雨

右

霞みくるゝ夕日の空にふりそめてしつかになれるよひの春雨

五番

左

しられすも心のそこや春になる時なる比とはなのまたるゝ

右

梅かえはむつきの比の花にしてさくらは末のやよひきさらき

六番

左

末たるゝ柳のいとをつたふ雨のしつくもなか（にイ）き春の日くらし

右

霞ふかみしられぬ雲もたちやそふのとけき空は雨に成ぬる

七番

左

山さくら盛のうちにうつさはやまつは久しきあたら日数を

右

思そめき四の時には花のはる春のうちには明ほのゝそら

八番

左

花をなかめ鶯の香を聞なしてともおもひなき春のひくらし

右

春とに花の所をたつねてもみぬおくのこるみよしのゝ山

九番

左

雨をやむ梢にあらき夕あらししつくも花もともにおつ之

右

外まてはさそはぬ花のなさけそへて木本めくる庭の春風

十番

左

とまれかし春こそかきりありとても花は日数を定めやはする

右

廻ゆかは春には又もあふとてもけふの今宵は後にしもあらし

十一番　夏

左

をしや猶櫻山吹ちりしをれ春なりぬへきけふのけしきを

右

夕月夜卯花かきにかけろひて軒端にちかく水鶏なく之

十二番

左

今とまつ夕くれとのあらましにきかてなれぬる郭公かな

右

ほとゝきす人のまとろむ程とてや忍ふる比はふけてこそなけ

十三番

左

くれぬかや思ふなかめのさなからに夕へさひしき五月雨の空

右

五月雨は所〳〵にたきおちてみぬ山川の數そゝひゆく

十四番

左

月の出るほしの光のかくる哉すゝしき風のゆふやみのそら

右

川むかひ柳のあたり水みえてすゝしき陰に鷺あそふ之

十五番

左

一方にたわむこすゑをふきかへし夕立おくる風そ涼しき

右

あをみわたるしはふの色も涼しきはつはなさゆるく夏の夕暮

十六番　秋

左

我もかなし草木も心いたむらん秋風ふれて露くたるころ

右

哀しる夕くれとに色そふ秋こしよりの袖のしら露

十七番

左

なひきかへり花（ズイ）の末より露ちりて萩のはしろし庭の秋かせ

右

露をもる小萩か末はなひきふしてふきかへす風に花そ色そふ

十八番

左

萩のうへ尾花か末もしつかにて秋風みえぬゆふ暮の庭

右

暮はてゝ千くさわかれぬ秋の庭に尾花はかりそ風にほのめく

十九番

左

袖の涙草葉の露の夕まくれ秋にしほれぬよの色もなし

右

露の色ましはの風の夕けしきあすもやとにたへてなかめん

廿番

左

ふけぬともなかむる程はおほえぬに月より西の空そすくなき

右

月のほる峯の秋風ふきぬらしふもとのきりそ色くたりゆく

廿一番

左

むかし今ゆく末かけておもひ出ぬこよひ一夜の月のあはれに

右

いかなりし人のなさけかおもひ出るこし方かたれ秋の夜の月

廿二番

左

まとしらむ軒はの空は明そめて枕のうへにきゆる月かけ

右

更ゆけは千里の外もしつまりて月にすみぬるよのけしき哉

廿三番

左

雲になく鴈かね寒し長月や木葉色つく秋風の暮

右

夕日うつる柳か末の秋風にそなたのかりのこゑもさひしき

廿四番

左

露ふかきまた朝かけの草かくれよのまの虫のこゑそ積れる

右

恨みつくすしのゝめまての虫のねもあくる光になきとまるゑ

廿五番

左

染つくす木末にましる松の色のひとりさめたる秋の山もと

右

心とめて草木の色も詠おかん面かけにたに秋やのころと

廿六番　冬

左

嵐のみこたへぬ枝にふき過て木葉のあとの山そさひしき

右

曉の時雨のなこりちかゝらし庭のおちはもまたぬれてみゆ

廿七番

左

雪もくたり水もこほるやあめ土のさむきをうくる心なるらん

右

さゆる日も雨はくたるをいかなれは氷れる河の水とまるらん

廿八番

左

ふりつもるよな〳〵とにをれそひて雪にしかるゝ庭のくれ竹

右

くるゝまてしはしはらふ竹の葉に風はよはりて雪そ降ゆく（しイ）

廿九番

左

山あらしの杉のはゝらふ嶺にむら〳〵なひく雪のしら雲

右

ねやの上はつもれる雪に音もせてよこきる霰窓たゝくゑ

卅番

左

うつもるゝ松のしつえやこれならん岡へにちかき雪の一むら

右

ふきしをる嵐をこめてうつむらんふけ行山そ雪にしつまる

卅一番　戀

左

いひかたみ心にくたすいくおもひこゑより人に知みちもかな

右

思きはも道なきかたにしらせぬをしらぬに告ん人やつれなき

卅二番

左
忍ひ妻まつとしすれはあやにくにねぬ人しけみさよそ更ゆく
右
人もつゝみ我も重てとひかたみたのめしよはゝたゝ更そゆく
卅三番
左
人まもとめかくとしもなき玉章を涙なからそおしつゝみぬる
右
しのふ程のとはりとのみ思ひしをうつるかたにも聞始めぬる
卅四番
左
契しをわすれぬ心そこにあれやたのまぬからにけふの久しき
右
待との心にすゝむけふの日はくれしとすれや餘り久しき
卅五番
左
明ぬなりこりれや心さしもこそまたしと千度おもひつるよを
右
更もせはまたしといひしとのはゝおのか物から今そくやしき
卅六番
左
待わふるその久しさの程よりはまたよひすきぬ月そうれしき
右
とはれんも今はよしやの明方もまたれすはなき月のよすから
卅七番
左
人のみする（イ充）面影ならはいかに猶我みにそふもうれしからまし
右
まきれすきてさて自からあらるゝをおもはれたちて後の夕暮
卅八番
左
餘いかゝ遠さかる方に成やせんとしはしたのめは又そ悲しき
右
身にかへてされはよさ迄思ひけりといふと計もせめて聞はや
三十九番
左
思ふとて思ひもせはのあらましにはかなやそれに哀そひぬる
右
恨むるを思知らぬにもてなすもそれしもつらき方はみえけり
四十番
左
たえすなるけにそのきはの身と迄も流石しらてや人の難面き

右

身をしれはうらむるともなけれとも戀しき外に袖もぬれけり

四十一番

左

夜もすからこひなく袖に月あれとみし面影は通ひしもせす

右

こすもこすたのましまたし忘れんと思なからも月をなかめて

四十二番

左

あすしらぬうき世はかりをなけかはや命をきはの中と定めて

右

おなし世にわかさきたちて戀しなは君か心の後そゆかしき

四十三番

左

うきうらみ戀しきあはれいつ方にまさるおもひと心をそ見る

右

さらし又忍ひまさると聞からにうさもつらさもいはすなる比

四十四番

左

しはしたゝうらくとも人にしたかはて恨のきける我そくやしき

右

思とりし昨日のうさはまくれはやけふはまつそと又云れぬる

四十五番

左

よしや人いかにもうかれそれによりて更にとかくは思はれぬ物を

右

人のとかに思とかめぬふし／＼もうく成はてはうさに社なれ

四十六番

左

おひつゝさもうかりけりと思ふ後に又戀しきそとのはもなき

右

をり／＼のこれやかきりの幾思ひそのあはれさは知人もなし

四十七番

左

あくかるゝたまの行衛に戀しとも思はぬ夢にいりやかぬらん

右

なれてみし面影せめて忘られよたちそへはこそ戀しさもそへ

四十八番

左

變らしと頼むきはまて許しける我はかなさそいひてかひなき

右

をりにふれてうき哀さはかはれとも君ゆへならぬ思しもなし

四十九番

左

いとふとも同し世はかり許さなん有てよそにも思ひやるへく

右

とのはにいてゝうらみはつきはてゝ心にこむろうさに成ぬる

五十番

左

そのまゝにそはましみまし徒にをしやあはれやよそのとし月

右

命こそいとひなからも哀なれらきをもかくてみきくと思へは

五十一番　雑

左

ふけぬるかすき行里もしつまりて月のよみちにあふ人もなし

右

とまるへき宿をは月にあくかれてあすのみちゆく夜半の旅人

五十二番

左

ぬるゝかとたちやすらへは松蔭や風のきかせる雨にそ有ける

右

旅の空雨のふる日は暮ぬかと思て後もゆくそひさしき

五十三番

左

こえてこそ幾重の峯としられけれみしはなへてのよその山端

右

ふもとなる草になしけき山嵐の峯の松にはふくかともなし

五十四番

左

やむましき雨のけしきになるならし近き尾上も雲に消ゆく

右

大そらはあまねくおほふ雲の心くにつちうるふ雨くたすゝ

五十五番

左

をちこちの夕日の山の色くれてすそのをわたる浮雲のかけ

右

雨ふれは雲おりかゝる山まつのふもとに残る數そすくなき

五十六番

左

雨の音のきこゆる窓はさよ更てぬれぬにしめるともし火の影

右

ふりよはり又ふりまさり夜もすからたゆまぬ雨の音に明ぬる

五十七番

左

つくろはぬ岩木をもとの姿にてやとめつらしき山のおくかな

右

身はかくてしはしとおもふ山さとに心をかへすみねのまつ風

五十八番

左

かさりいふとはのうへはまよへともはつれて人の心をそみる

右

おもひみる心のまゝに言葉のゆたかにかなふ時そうれしき

五十九番

左

なさけをも知人なみのもしほ草かきおくあとの數のみそそふ

右

世にこゆる君かとのは玉はあれと光のそこを見る人やなき

六十番

左

代々たえすつきて久しくさかへなんとよあし原の國安くして

右

たねとなる人の心のいつもあらは昔にをよへやまとことのは

〔右金玉歌合以圖書寮本校合〕

頓阿勝負付歌合

題

早春　浦霞　若菜　雪中梅　山殘雪
梅　春雨　花　落花　暮春
待郭公　卯花　螢　夏月　鵜川
納涼　初秋　七夕　草露　鹿
浦月　殘月　鶉　秋興　擣衣
紅葉　時雨　霜　冬閑居　江氷
雪遠見　水鳥　初戀　忍戀　切戀
夕戀　不逢戀　別戀　逢不會戀　恨戀
曉　夕竹　河　關　野徑
山路　述懷　寄神祇祝

一番　早春

左持

春くれは三輪のかみやまかすむなりしるしの杉もたとる計に

右

あし曳のやまちの雲のきえそむる跡や春くるしるへなるらん

二番　浦霞

左勝

たちこむるかすみも八重のしほ風に音はかりしてよする白波

右
さゝなみやいくらかけて春の日のなからの山も霞たつらん
三番　若菜
左持
消はつる比をおそしとかすか野につむや雪まの分れなるらん
右
いつよりか若菜はつまんしら雪のきえてもふかき春のさわ水
四番　雪中梅
左持
あわ雪にうつもれはつる梅枝はにほひはかりに花そしらるゝ
右
春きてもなをさきやらぬ雪の中ににほひすくなき梅のはつ花
五番　山殘雪
左勝
時しらぬたかれの雪も殘るゝきえぬはふしのけふりのみかは
右
深山路やまさ木のかつら春かけてくる人なしにみゆき降つゝ
六番　柳
左勝
青柳のみとりのいとにぬきとめて玉をたれたる春のしら露
右
見わたせはよはきやなきの枝にのみ聲なき風ののこる夕くれ
七番　春雨
左勝
あけくれは袖のみぬれて春雨の世にふるかひもなき我身かな
右
春雨はしつかにふりて山さとの軒はのまきのしつくそふなり
八番　花
左持
山賤となりにし身には色も香もいつしりかほに花を見るらん
右
さくらかり山路にくらす春の日のなかきにあかぬ花の比かな
九番　落花
左勝
おく山のみねのあらしにちる花をさそひていつるたに川の水
右
ちりはつるあらしのあとの一枝になを猶のこすさゝかにの糸
十番　暮春
左勝
花に見しそのおもかけもなこりなく梢しけりて春そくれぬる
右
暮ことにこれやかきりとおもひみし入相のかねに春もいぬめり

十一番　待郭公
左勝
郭公いかにしのふる比なれはふけてもおしむ初音なるらん
右
きゝぬとは人にもつけしほとゝきす忍ふる聲を我にかたらへ
十二番　卯花
左持
月うときもりの木かけもしろ妙にむら／＼さけるうの花の色
右
名もしるし卯花かきのしろたへにむすふや露のたま川のさと
十三番　螢
左
うらやましあつむる窓のほたるたにをのか光そ身を照しける
右
秋ちかき野澤のほたるいかなれはもえても影の涼しかるらん
十四番　夏月
左勝
なつかりのなにはのあしの短夜に月もいりえのなみそあけ行
右
はれそむる雲のたえまにかけみえて月めつらしき五月雨の空
十五番　鵜川
左
〔歌闕〕
右
〔同　〕
十六番　納涼
左
〔歌闕〕
右
〔同　〕
十七番　初秋
左
〔歌闕〕
右
〔同　〕
十八番　七夕
左
たなはたのちきる一夜を待わひてつもる涙やあまの川なみ
右
七夕のあまのはころもかされてやかはらぬ秋を久ちきるらん
十九番　草露
左勝

をのつから風ふかぬまは草の葉にあまりておつるのへの白露

右

みやき野や野原のあとのしら露におきもかへらぬ秋はきか花

二十番　鹿

左持

むさし野のおなし草葉にふしなれてかへる山なきさを鹿の聲

右

おもひきやいりぬる山の鹿の音になをうきことをきかん物とは

廿一番　浦月

左持

清見かた遠き浪ちの末はれておきつしほあひに月そかたふく

右

舟よするいり江の苫まかきわけてあとにさはらぬ月をみる哉

廿二番　殘月

左

山のはにのこるはそれとみえなから光そそはぬありあけの月

右勝

はれやらぬとやまのそらの朝霧にのこるもうすき月の影哉

廿三番　霧

左持

眞柴たくふもとのけふりたちそひてなを夜をこむる里の朝霧

右

吹おろすふしのすそ野のあき風にのこれるきりやうき島か原

廿四番　秋興

左持

長月やしくるゝそらに雁なきて秋すさましき雲の色かな

右

あらしふくひらのみなとの夕霧に山もとみえてかへるつり舟

廿五番　擣衣

左勝

今よりの夜寒そたへぬさと人のおなし心にころもうつらん

右

すみそめの衣はうたしかくれかを浮世の人にしられもそする

廿六番　紅葉

左持

蔦かゝるとやまの松のむら時雨おなし木末をそめやわくらん

右

龍田姫いくしほそめて紅のいろそふ山のもみちなるらん

廿七番　時雨

左

あらしふくたかねの雲のあと晴て夕日のかけに時雨ふるなり

右勝

はれくもり影さたまらぬ冬の日のけふもしくれてくるゝ空哉

廿八番　霜

左持

霜ふかきおちはの上やこほるらん庭にをとせぬ木からしの風

右

かれまさる葎のとほそ日にそへて中〳〵霜やふかくとつらん

廿九番　冬閑居

左持

冴る夜はあか井の水のあさこほり我よりさきにはや結ひけり

右

いかにせん花さく草は霜かれぬしきみは雪にうつもれにけり

三十番　江氷

左持

みなと江やあさみつしほは礒こえて氷のうへによするしら浪

右

をとたてゝいり江の浪はこほれとも尾花にのこるまのゝ浦風

卅一番　雪遠見

左勝

わたつ海のおきつ小島もあらはれて浪まにみゆる雪の一むら

右

うつもるゝ軒端の竹のすゑふしてけさみえそむる雪のとを山

卅二番　水鳥

左持

霜むすふうらはのあしの冬かれにのこるは鴨のあをはえけり

右

水鳥のをりゐる浪のうきまくらむすひさためぬうす氷かな

卅三番　初恋

左勝

人しれすおもひいる野の初尾花やかても袖の露けかるらん

右

おもひたつ心ひとつをしるへにてなれぬ恋路にまよひ初ぬる

卅四番　忍恋

左勝

くちねたゝ沼の川のみをつくし深きしるしのみえもこそすれ

右

もらすなよ苔にむもるゝ山の井の下にはせめてわきかへる共

卅五番　切恋

左持

うきゝはもなをつくされぬ水茎のはては涙にかきくらしつゝ

右

こひしなん後さへ物や思はまし此世にかきるむくひならすは

卅六番　夕恋

左持
まちなるゝゆふへのかねの聲ことに今宵いかにときくそ悲しき
右
きかしたゝ待しはいつのゆふへとも今は忘るゝいりあひの鐘

卅七番　不逢戀
左
あふまても待に命の殘る世を思ひはてゝはいかにすくさん
右勝
徒にこよひあけぬときゝなれてひとりぬるよも鳥の音そうき

卅八番　別戀
左勝
いかにせんしたひし程のやすらひにあけはなれぬる横雲の空
右
袖のうへにあまる涙やむすふらん我かへるさのみちしはの露

卅九番　逢不會戀
左勝
一夜とはせめてもいひしとのはをまとに人のなすそかなしき
右
ともすれはうつゝになしてしたふ哉みしよの夢の昔かたりを

四十番　恨戀
左
おもひける数とは人のしれはこそ憂身につらき色はみすらめ
右負
僞のあるよをうきになしてたにかはるちきりを猶やうらみん

四十一番　曉
左持
身につもるよはひしられて曉のねさめになるゝとりの聲かな
右
をのつからわすれしとも思ひ出て昔になるゝあかつきのとこ

四十二番　夕竹
左持
ゆきくるゝふしみのさとは月影のいてゝもたとる竹のした道
右
くれ竹の枝たれおほひふる雨にゆふへのまとそくれまさり行

四十三番　河
左勝
うきしつむ世にくらふれは飛鳥川淵瀬の涙はかはらさりけり
右
山ふかみ苔のしつくのたえ〳〵におちそふすゑやたに川の水

四十四番　關
左勝
いのりつるこゝろの末や遠からん關の戸さゝぬ御代に成ぬる

右
あつまちやけふあふさかの山こえて末はかきりもしら川の關
四十五番　野旅
左持
行くれていなのにやとをかるもかくふすゐの床は秋風そふく
右
こよひともちきらぬのへの草枕なにとて露のむすひをきけん
四十六番　山路
左持
こえかへるやまちの月をまちわひてしはしおりしく峯の椎柴
右
わけきつるあとにもかゝる白雲のふかき山路はあふ人もなし
四十七番　述懐
左持
世中にすむかすならぬ身にしあれはさりともと思ふあら□
右
いつまても思ふはかりや世の中のうきになくさむ心なるらん
四十八番　寄神祇祀
左持
石清水なかれをみてそ水上のにこらぬ程もあらはれにける
右
今さらにいのらすとてもおとこ山かみのすつへき御代□

續群書類従巻第四百十三

和歌部四十八

定家卿百番自歌合

建保四年二月撰年來愚詠二百首結番。同五年六月更
破此番。少々改之。同七年密々經　天覽。申請勅判。

春

一番

左持　　最勝四天王院障子

春日野にさくや梅かえ雪まよりいまは春へと若菜つみつゝ

右　　千五百番歌合

續拾 きえなくに又やみ山を埋むらんわかなつむ野もあは雪そふる

二番

左勝　　仁和寺宮五十首

新古 おほ空は梅の匂にかすみつゝくもりもはてぬ春のよの月

右　　院五十首

續後 こゝろあてにわくともわかし梅花ちりかふ里の春のあは雪

三番

左持　　院百首初度

續古 うちわたすをちかた人はこたへねと匂そなのる野への梅かえ

右　　三宮十五首

あすか川遠き梅かえにほふよはいたつらにやは春風の吹

四番

左　　院百首初度

續後拾 花のかのかすめる月にあくかれて夢もさたかにみえぬ比哉

右　　私百首文治五年

春の夜は月のかつらもにほふらん光に梅の色はまかひぬ

五番

左持　　内裏詩歌合

外山とてよそにも見えし春のきる衣かたしきねての朝（ケイ）とは

右　　仁和寺宮五十首

新古　春のよの夢のうきはしとたえして峯にわかるゝ横雲の空

六番

左持　　或所歌合

續後拾　里のあまのしほやき衣たちわかれなれしもしらぬ春の鴈かね

右　　院百首

續拾　花の色にひと春まけよ歸かりとしこし路の空たのめして

七番

左持　　花月百首 建久元年 左大將家

續後　櫻花さきにし日よりよしの山空もひとつにかほるしら雲

右　　同上

新古　かすみたつ峯のさくらのあさほらけ紅くゝるあまの川浪

八番

左持　　院百首 初度

續古　花の色をそれとそ思ふをとめ子かそてふる山の春の曙

右　　内裏詩歌合

續古　櫻かり霞のしたにけふくれぬひとよやとかせはるの山守

九番

左持　　最勝四天王院障子

續後　みよし野は花にうつろふ山なれは春さへみゆきふる郷の空

右　　千五百番歌合

新古　櫻色の庭の春風跡もなしとはゝそ人の雪とたにみん

十番

左持　　同上

續古　櫻花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬるあさちふの宿

右　　仁和寺宮五十首

櫻花うつりにけりなとはかりをなけきもあへすつもる春かな

十一番

左　　花月百首

槇の戸は軒はの花のかけなれは床も枕も春の明ほの

右勝　　内裏詩歌合

續古　花の色のおられぬ水にさすさほのしつくも匂ふうちの川長

十二番

左持　　同上

續後　名取川春の日數はあらはれて花にそしつむせゝのむもれ木

右　　同

新勅　名もしるし峯の嵐も雪とふる山櫻戸の明ほのゝ空

十三番

左　　千五百番

花のかも風こそよもにさそふらめ心もしらぬ古郷の春

右勝　　私百首 文治五年

けふこすは庭にや春ののこらまし梢うつろふ花の下風

十四番

左持　院詩歌合

網代木に櫻こきませ行春のいさよふ波をえやはとゝむる

右　百廿八番建久七年

あはれいかに霞も花もなれ〳〵て雲しく谷にかへるうくひす

夏

十五番

左　院五十首

續後拾　櫻色の袖もひとへ（つイ）にかはるまてうつりにけりな過る月日は

右勝　家隆四天王院障子

ふみしたくあさかのぬまの夏草にかつみたれそふ忍もちすり

十六番

左持　仁和寺宮五十首

新千　たかためになくや五月の夕とて山時鳥猶またるらむ

右　院五十首

新古　五月雨の月はつれなきみ山よりひとりも出る時鳥かな

十七番

左　院百首

玉葉　いたつらに雲ゐる山の松のはの時そともなき五月雨の空

右勝　私百首 閑居百首文治三

山里の軒はの梢雲こえてあまりなとちそ五月雨の空

十八番

左持　私百首文治五年

新古　玉鉾の道行人のことつてもたえてほとふる五月雨の空

右　院庚申五首建保五年

續後　なきぬなり夕つけ鳥のしたりおのをのれにも似ぬ夜半の短さ

十九番

左　院百首初度

續古　かた糸をよる〳〵峯に燈す火にあはすは鹿の身をもかへしを

右勝　千五百番

新古　久かたのなかなる川のうかひ舟いかに契りてやみをまつらむ

二十番

左　家隆四天王院障子

新古　あしの屋のかりねの床のふしのまに短くあくる夏のよな〳〵

右　仁和寺宮五十首

續古　うちなひくしけみか下のさゆり葉のしられぬ程にかよふ秋風

二十一番

左持　院百首初度

いまはとてあり明のかけの槙の戸にさすかにおしき（六イ）月の空

右　院百首

續古　あすかゝはゆくせの波にみそきしてはやくそ年の半過ぬる

二十二番

左勝

續後 秋とたに吹あへぬ風に色かはるいくたの森の露の下草　寂勝四天王院障子

右

すまのあまのなれにし袖もしほたれぬ關吹こゆる秋のうら風　同

二十三番

左持

續後 なをざりのをのゝあさちにをく露も草はにあまる秋の夕暮　内裏歌合

右

あさちふのをのゝしの原うらなびきをちかた人に秋風ぞふく　水無瀬殿秋十首

二十四番

左持

續後 うつりあへぬ花のちくさにみたれつゝ風の上なる宮城野の露　寂勝四天王院障子

右

ちらはちれ露わけゆかむ萩原やぬれてのゝちの花のかたみに　私百首文治五年

二十五番

左勝

新勅 しのへとやしらぬむかしの秋をへて同しかたみにのこる月影　賀茂社歌合元暦元年

右

秋をへてむかしは遠き大空に我身ひとつのもとの月影　院五十首

二十六番

左勝

新勅 あまの原おもへはかはる色もなし秋こそ月のひかりなりけれ　初學百首養和元年

右

千 いかにせむさして浮世はなくさますたのみし月も涙おちけり　大輔百首文治三年

二十七番

左持

續後拾 なかめつゝおもひしとの數〳〵にむなしき空の秋のよの月　述懐秋歌建久元年

右

續後 むかしたに猶故郷の秋の月しらす光のいくめくりとも　百廿八首

二十八番

左勝

新勅 あけは又秋のなかはも過ぬへしかたふく月のおしきのみかは　花月百首

右

淺里か露けきのへにやとかりし光ともなふもち月の駒　同

二十九番

左

たかさこのおのへの鹿のこゑたてゝ風よりかはる月の影かな　千五百番

右勝

露きえてねぬよの月やつもるらんあらぬあさちのけさの色哉　仁和寺宮五十首

三十番

左　千五百番

（新古）獨りぬる山とりのおのしたりおに霜をきまよふ床の月影

右　　　　關白左大臣家百首（貞永）

した萩もおきふしまちの月の色に身をふきしほる床の秋風

三十一番

左　　　　院百首（建保）

しろたへの衣しでうつひゝきよりをきまよふ霜の色に出らん

右（勝）　　　　千五百番

（新古）秋とたに忘れんと思ふ月影をさもあやにくにうつ衣哉

三十二番

左（持）　　　　二見百首

山かつの身のためにうつ衣ゆへ秋のあはれをてにまかすらん

右　　　　後京極攝政家十首（建久六年大將時）

（續後）川風によわたる月のさむけれはやそうち人も衣うつゝ

三十三番

左　　　　仁和寺宮五十首

秋風にそよぐ田面のいねかてにまつあけかたのはつかりの聲

右（勝）　　　　内裏百首名所題

（玉）いこま山あらしも秋の色にふくてそめの糸のよるそかなしき

三十四番

左（勝）　　　　水無瀬殿十首

（續後）高砂の外にも秋はある物を我夕暮と鹿はなくゝ

右　　　　院百首（建保）

思あへす秋ないそきそさをしかのつまとふ山の小田のはつ霜

三十五番

左（持）　　　　千五百番

（續拾）さをしかのふすや草村うらかれてしたもあらはに秋風そ吹

右　　　　水無瀬殿十首

（玉）ゆふつくひむかひのをかのうす紅葉またきさひしき秋の色哉

三十六番

左（勝）　　　　關白左大臣家百首

（新勅）しくれつゝ袖たにほさぬ秋の日にさこそ御室の山はそむらめ

右　　　　三宮十五首

久かたの月のかつらの下紅葉（ウスイ）やとかる袖そ色に出ゆく

三十七番

左（持）　　　　院百首

契ありてうつろはんとや白菊のもみちの下の花にさきけん

右　　　　内裏詩歌合

ゆふつくひうつる木葉やしくれにしさゝ波そむる秋のうら風

三十八番

左　　　　花月

なか月の月の有明の時雨行（ゆへイ）あすのもみちの色もらめし

右（勝）　　　　歌合百首（建久五年左大將家）

新古 時わかぬ浪さへ色にいつみ川はゝその森にあらし吹らし

三十九番

左　　内大臣家百首建保三年

朝な〳〵あへすちりしく葛の葉にをきそふ霜の秋そすくなき

右 勝　　内裏歌合

秋はいぬ夕日かくれの峯の松四方の木葉の後もあひみむ

四十番

左 持　　二見百首

たゝいまの野原をゝのか物とみて心つよくもかへる秋哉

右　　千五百番

冬はたゝあすかの里のたひまくらおきてやいなむ秋の白露

四十一番

左 持　　初學百首

千 冬きてはひとよふたよを玉さゝのはわけの霜の所せきまて

右　　二見

はれくもる同なかめのたのみたに時雨にたゆるをちの里人

四十二番

左　　三宮十五首

續拾 神無月くれやすき日の色なれは霜のした葉に風もたまらす

右 勝　　千五百番

新續古 花すゝきくさの袂もくちはてぬなれてわかれし秋をこふとて

四十三番

左 勝　　二見

新拾 朝夕の音はしくれのならしはにいつふりかはるあられ成らん

右　　閑居百首

續拾 霰ふるしつかさゝやよそ（のイ）よさらに一夜はかりの夢をやは見る

四十四番

左 勝　　三宮十五首

玉葉 しからきのとやまのあられふりすさみあれ行冬の雲の色哉

右　　院百首初度

玉 山かつのあさけのこやにたく柴のしはしとみれはくるゝ空哉

四十五番

左　　大輔百首

たひねするゆめちはたえぬすまのせきかよふ千鳥の曉の聲

右 勝　　千五百番

續古 なく千鳥袖のみなとをとひこかしもろこし舟もよるのね覺に

四十六番

左 勝　　閑居

續拾 うら風やとはになみこす濱松のねにあらはれて鳴千鳥哉

右　　最勝四天王院障子

しかの浦や氷もいくへゐるたつの霜のうはけに雪はふりつゝ

四十七番

左持　院百首初度

新古 こまとめて袖うちはらふかげもなしさのゝわたりの雪の夕暮

右　後京極攝政家雪十首文治五年

新古 まつ人のふもとのみちやたえぬらん軒はの杉に雪をもるなり

四十八番

左持　同家歌合建久七年

雪をれの竹の下道跡もなしあれにしのちの深草の里

右　内大臣家百首建保三年

おほとものみつのはま風ふきはらへ松ともみえしうつむ白雪

四十九番

左持　院五十首

かみさひていはふみむろの年ふりてなをゆふかへる松の白雪

右　院百首初度

續拾 なかめやる衣手さむく降雪にゆふやみしらぬ山のはの月

五十番

左勝　最勝四天王院

續古 をはつせや峯の常磐木吹しほりあらしにくもる雪の山本

右　院百首初度

しろたへにたなひく雲と吹ませて雪にあまきる峯の松風

戀

五十一番

左　歌合百首

新古 なひかしなあまのもしほ火燒そめて煙は空にくゆりわふとも

右　院句題五十首

續拾 しられしな千入の木葉こかるともしくるゝ雲に色しみえねは

五十二番

左勝　院百首初度

新古 松かねを礒邊の波のうつたへにあらはれぬへき袖のうへかな

右　院百首

續拾 初かりのとわたる風のたよりにもあらぬ思なたれにつたへん

五十三番

左持　院百首初度

續後 久方のあまてる神のゆふかつらかけて幾代をこひわたるらん

右　三宮十五首

露時雨下草かけてもる山の色かすならぬ袖をみせはや

五十四番

左勝　私百首文治五年

續拾 なとり河いかにせんともまたしらす思へは人をうらみつる哉

右　同

あひみての後の心をまつしれはつれなしとたにえこそ恨みね

五十五番

左勝　歌合百首

新古 としもへぬいのるちきりははつせ山おのへの鐘のよその夕暮

右　同

新後 面影はをしへしやとにさき立てこたへぬ風の松にふくこゑ

五十六番

左持　内大臣家百首 建保

續後 世とゝもにふきあけの濱の鹽風になひく眞砂のくたけてそ思

右　同

住の江の松のねたくやよる波のよるとはなけく夢をたにみて

五十七番

左持　同

新勅 くるゝ夜はゑしのたく火をそれとみよ室のや島も都ならねは

右　同

續後 あしの屋にほたるやまかふ蜑やたく思ひも戀も夜はもえつゝ

五十八番

左勝　關白左大臣家百首

續後拾 うへしける垣ねかくれのたか篠原しられぬ戀はうきふしもなし

右　同

新千 よな／＼の月も涙にくもりにきかけたに見えぬ人をこふとて

五十九番

左　内大臣家百首

續後 我袖にむなしき波はかけそめつ契もしらぬ床のうら風

右勝　同

續後 しら玉のをたえの橋の名もつらしくたけておつる袖の涙に

六十番

左持　庚申百首

新勅 戀しなぬ身のをこたりそ年へぬるあらはあふよの心つよさに

右　内裏歌合

新勅 あふ事はしのふの衣あはれなとまれなる色にみたれそめけん

六十一番

左持　關白左大臣家百首

いまのまゝ我身にかきる鳥の音を誰うき物とかへりそめけん

右　歌合百首

新古 忘れすはなれし袖もやこほるらんねぬよの床の霜のさむしろ

六十二番

左持　同

わすれしの契うらむる古郷の心もしらぬ松虫の聲

右　内裏歌合

新勅 こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ

六十三番

左持　無題

新勅 誰もこのあはれみしかき玉のをよみたれて物を思はすもかな

右　同

続後 いかゝせむありし別をかきりにてこの世なからの心かはらは

六十四番

左持　一宮百首建久元年

うつろはん色をかきりにみむろ山時雨もしらぬよをたのむ哉

右　千五百番

新古 きえわひぬうつろふ人の秋の色に身を木枯のもりの下露

六十五番

左持　二見

新古 あちきなくつらき嵐の聲もうしなと夕暮に待ならひけん

右　閑居

新古 かへるさの物とや人のなかむらん待よなからの在明の月

六十六番

左　千五百番

おもかけはなれしなからの身にそひてあらぬ心の誰契るらん

右勝　戀不離身

心をはつらき物とてわかれにし世々の面かけなにしたふらん

六十七番

左勝　千五百番

新後 思出よたかきぬ／＼の曉もわかまたしのふ月そ見ゆらん

右　同

久方の月そかはらてまたれける人にはいひし山のはの空

六十八番

左勝　院百首

続後 よもすから月にうれへてねをそなく命にむかふ物思とて

右　同百首初度

待人のこぬよのかけに面なれて山のはの出る月もうらめし

六十九番

左　住吉社歌合

続後 やとりせしかりいほの萩の露はかりきえなて袖の色に戀つゝ

右勝　院廿首建暦二年

続後 契をきし末のはらのゝもとかしはそれとをしらしよその霜枯

七十番

左　千五百番

新千 あふとのまれなる色やあらはれんもりいてゝそむる袖の涙に

右持　院廿首

なく涙やしほの衣それなからなれすはなにの色かしのはん

七十一番

左　千五百番

かれぬるはさそなためしと詠めてもなくさまなくに霜の下草

右勝　院廿首

秋の色にきてもかれなて苫へこくたなゝし小舟我そつれなき

七十二番

左持　　伊呂波卅七首
せめておもふいま一たひのあふ事はわたらん河や限なるへき
右　　無題
新古 かきやりしそのくろかみのすちことにうちふす程は面影そたつ
七十三番
左持　　同
續後 さそなけく戀をするかのうつの山うつゝの夢の又しみえねは
右　　一字百首
はまゆふやかさなる山のいくへともいさしら雲のそこの面影
七十四番
左勝　　和歌所被忘戀
新古 むせふともしらしな心かはらやにわれのみけたぬしたの煙は
右　　同月前戀
新古 松山と契りし人はつれなくて袖こす波にやとる月かけ
七十五番
左　　内大臣家百首
たのめ證しのちせの山のひとことや戀をいのりの命之ける
右　　同
續後 形見こそあたのおほのゝ萩の露うつろふ色かいふかひもなし
七十六番
左勝　　同
袖の浦かりにやとりし月草のぬれてのゝちを猶やたのまん
右　　關白左大臣百首
はるかなる人の心のもろこしはさはく湊にことつてもなし
七十七番
左　　内大臣家百首
忘れ貝それも思のたねたえて人をみぬめのうらみてそぬる
右勝　　同
續後 わすられぬまゝのつきはし思ねに通ひしかたは夢にみえつゝ
七十八番
左持　　千五百番
新古 尋ねみるつらき心のおくの海にしほひの方のいふかひもなし
右　　内裏名所百首
續古 あたなみのたかしの濱のそなれ松なれすはかけて我戀めやも
七十九番
左　　無題
續拾 心からあくかれそめし花のかに猶物思はるのあけほの
右勝　　水無瀨殿戀十五番
續古 しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風そふく
八十番
左持　　大輔百首
新古 すまの蜑の袖に吹こす鹽風のなるとはすれとてにもたまらす

右　内大臣家百首

新古 やすらひに出けん方もしら鳥のとはやま松のねにのみそなく

雜

八十一番

左　千五百番

おほかたの月もつれなきかねのをとに猶うらめしき在明の空

右勝　於北野聖廟詠之

したもゆるなけきのけふり空に見よいまも野山の秋の夕暮

八十二番

左持　千五百番

新後 いくとせのかさし折けんいにしへに三輪のひはらの苔の通路

右　十題百首

見すしらすうつもれぬなの跡やこれたなひきわたる夕暮の雲

八十三番

左持　同

出てこしみちのさゝ原しけりあひてたれなかむらん故郷の月

右　仁和寺宮五十首

新古 わくらはにとはれし人も昔にてそれより庭の跡はたえにき

八十四番

左勝　和歌所歌合

新古 もしほくむ袖の月影をのつからよそにあかさぬすまのうら人

右　院句題五十首

むしあけのまつとしらせよ袖の上にやとりしまゝの浪の月影

八十五番

左勝　二見百首

新古 わするなよやとる袂はかはるともかたみにしほる袖の月影

右　初學

千 わかれても心へたつる旅衣いくへかさなる山路なりとも

八十六番

左持　左大臣家歌合正治二年

新古 わすれなんまつとなつけそ中〳〵にいなはの山の嶺の秋風

右　同家歌合

新古 いつくにかこよひはやとをかり衣日も夕暮の峯の嵐に

八十七番

左持　仁和寺宮五十首

新古 ことゝへよおもひおきつの濱千鳥なく〳〵出し跡の月かけ

右　内裏名所百首

關の戸をさそひし人は出やらて在明の月のさやの中山

八十八番

左持　關白家百首

都出てあさたつ山のたむけより露をきとめぬ秋風そ吹

右　百廿八首

新古 旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし

八十九番

左持　閑居

玉葉 世の中を思軒はのしのふ草いくよのやとゝあれかはてなん

右　於先妣舊宅詠之

新古 玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふるやとの秋風

九十番

左持　建久四年九月盡詠

見し人のなきかすまさる秋の暮わかれなれたる心ちこそせね

右　建永二年春

たのまれぬ夢てふ物のうき世には戀しき人のえやはみえける

九十一番

左持　百廿八首

あらしふく月のあるしは我ひとり花こそやとゝ人もたつぬれ

右　同

うきよりはすみよかりけりとはかりに跡なき霜に杉たてる庭

九十二番

左　栗田宮歌合于時侍從

和歌浦や和たる朝の身をつくしくちねかひなき名たに殘らて

右勝　同

思かねわかゆふ暮の秋の日に三笠の山はさしはなれにき

九十三番

左勝　同比詠之

續拾 なきかけのおやのいさめはそむきにし子を思道の心よはさに

右　百廿八首

新後 つゐに又いかにうき名のとゝまらむ心一つの世をははつれと

九十四番

左　和歌所述懐

新古 君か代にあはすは何を玉の緒のなかくとまては惜まれし身を

右勝　院廿首于時建暦二年

思ふ事むなしき夢のなか空にたゆともたゆなつらき玉の緒

九十五番

左　内裏詩歌合

ふみまよふ山なしの花みちたえて行さきふかきやへの白雲

右勝　同

はしたかのとかへる山路こえかねてつれなき色の限をそみる

九十六番

左持　内大臣家百首

海わたる浦こく舟のいたつらにいそちをすきてぬれし涙哉

右　同

あれまくや伏見の里の出かてにうきをしらてそけふに逢ぬる

九十七番

左　　最勝四天王院障子

大井河まれの御幸にとしへぬる紅葉の舟ちあとは有けり

右勝　　同

たらちめやまたもろこしにまつら舟としもくれぬ心つくしに

九十八番

左　　加任納言參外記麗

新勅　おさまれるたみのつかさのみつき物二たひきくも命なりけり

右勝　　關白家百首

新勅　もゝしきのとのへをいつる宵々はまたぬにむかふ山のはの月

九十九番

左持　　千五百番

新古　わかみちをまもらは君をまもるらんよはひはゆつれ住吉の松

右　　參伊勢外宮

新古　契ありてけふみや川のゆふかつら長きよまてにかけて頼まん

百番

左持　　住吉社歌合

我君のときはの陰は秋もあらし月のかつらの千代にあふとも

右　　入内屛風

新勅　ちりもせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかさすさくらは

〔右定家卿百番自歌合以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百十四

和歌部四十九

百番歌合

素純

春

一番

左　立春

岩戸あけし天津日影のいくめくり年かへりては春の立らん

右

ふしのねの御手洗河にわく玉の數くみそふる春の若水

左歌。四時の運轉めつらしからぬことはりを。ありのまゝにいひたてたる。かへりてあたらしくみえ侍り。右のみたらし河にわく玉も。此天津日影には光及ひかたくや侍らん。以左爲勝。

二番

左　關立春

關こえて春やきぬらん相坂のゆふ付鳥の夜半のはつこゑ

右　關霞

あつまより春立きぬる相坂の關しまさしき朝かすみ哉

兩方の會坂。關しまさしき朝霞立まさりぬへし。

三番

左　山霞

駒とめてむかへは空の朝霞うすきや雪のふしのしは山

右　松殘雪

あまの原たかねやいつこ霞たつ春になひかぬ松の白雪

此番下句いつれも優美に侍り。可爲持歟。

四番

左　春雲

もるとなき日影も春にさゝのはのみ山露けき雪の村きえ

右

春されは野への淡雪まつさけるなにの花とかいひなしてみん

左右の雪。右は古今集旋頭歌をよくとりなされたる。なかしく侍れとも。左歌。心詞相叶て猶よろしく侍るにや。

五番

左　雪中鶯

ちる雪をけさ鶯の花かさにぬふや木つたふ青柳の糸

右　澤若菜

日影さす春の野澤の朝氷ひま〳〵しろきねせりつむ之

ひま〳〵しろき根せり。ことにおもしろく侍るにや。

六番

左　池餘寒

梅の花ひも打とくる春風に氷つれなき庭の池水

右　溪餘寒

立かへり又ひまこほる谷風に咲てとくちる波のはつ花

池水谷風の餘寒。池水は猶あさからすやとみゆ。

七番

左　草漸青

うくひすのこゑする野への朝な〳〵春の色つく霜の下草

右　梅花夜薫

春の夜の月なき比のうたゝねにしく物なにか袖の梅かゝ

左歌。いひしりてきこゆ。可爲勝。

八番

左　軒梅

すみ侘て宿をはさこそかこつともいつくに軒のむめの一本

右　梅待客

咲ぬやと人はいつの日くれなゐのこそめの梅のうくひすの聲

左右同科。

九番

左　霞中柳

朝霞色こきかたの一むらに風のみゆるや柳なるらん

右　春雨

代々ふりし我道芝の霜枯もたのむめくみの春雨の空

右。有心躰に侍るへし。爲勝。

十番

左　待春月

花の香の空に更行あたら夜をたれにまたるゝ山のはの月

右　春月

山のはの霞をきはに行舟のまほにもみえぬ春のよの月

左。こともなくよろし。

十一番

左
春の夜の霞むならひもかはかりはいつみし月のいにしへの空
右　故郷待花
淺茅原かゝる人めのたよりにも花より外は待とそなき
左歌。慈鎮和尚の秋まちえても秋そ戀しきといへる心も
おもひよそへられて。感慨ふかく侍れとも。右。花より外
は待とそなき。古郷の閑趣あはれ淺からす。猶まさると申
へくや。
十二番
右　花
花見てはいとゝ昔そしのはるゝあはれ朽木も春にあはゝや
右　櫻
心なきたか名はたゝし春霞かすめる山のはつさくらはな
兩首おなしほとにや。
十三番
左
ことのはの花にもあはぬ身の春を宿の櫻にかこちてそ見る
右　花有遲速
旅衣ひもとく花に天津鴈かへるかた枝はむすほゝれつゝ
右歌。南枝北枝開落ことなる心をかしくみえ侍り。
十四番
左　花時無外人
花やみな中たちしつゝ里わきてくるをも思ふとちになすらん
右　花時不閑
心とむる花の色とや世の中はなみのさはきに春風のふく
左歌。第四第五の句のつゝき。心ゆかす覺侍るはひか事に
や。右歌もすこし思たき所あるににたり。なすらへて持と
すへし。
十五番
左　行路花
あかさりし花の中にや玉くしけかりねあけ行峯の横雲
右　古寺花
春くれはあかたてまつる朝夕のはなに櫻をおらぬ日もなし
左はあかさりし袖の中にや入にけんといへる歌をおもへ
るにや。をかしく侍るを。右歌。ことにやさしく覺侍れは
爲勝。
十六番
左　雨後花
つれ〳〵のなかめ晴行夕日影色ほす花そ名殘すくなき
右　深山見花
外はみなうつろひ雪のふる比やみ山櫻の花のはつ春
左の夕日影。はなやかにみえ侍り。可爲勝。

十七番
左　惜花
ちることのさらぬわかれは花も□そ思ふにたへて風を□
右　落花
いく春か雪とふるのゝさくら花風のうらみもあとなかるらん
此兩首共以出群。短慮難定是非也。

十八番
左
ふかぬ代の花にあはすは風のうらみ終にはれせて春やくる覽
右　苗代
山里は石まの水のたよりあるところ〳〵の小田の苗代
左歌。よくおもひめくらしてよみ出せるとみえたり。右。
又かた山かけの苗代。みる躰に侍り。いつれと勝劣を申か
たくこそ。

十九番
左　欵冬
さけはかつ春もとまらす吉野川よしなの花やきしの山吹
右　藤
咲花のさかりに色のしほみてはみらくすくなき松の藤なみ
左の山吹。芳野河よしなの花や。能したてられて侍れは。
右の百なみ立をよひかたくや侍らん。

廿番
左　暮春花
色も香も外のちりなん後にとやをしへし宿の花の一本
右　暮春月
やよやまて山のはつかに霞つゝ春もいまはの横雲の月
左。後花の宴の詞さなから出來たり。右。又よのつねの事
に侍り。可爲持。

夏

廿一番
左　更衣
ちるとみてあるへき春の櫻色に染てかへうき夏ころもかな
右　山家首夏
山里は春の花いまさかりにて日數はかりの夏に□〔うつ〕ろふ
左。素性法師うたてにほひのといへる心をおもへるにや。
此さくら色ことにふかくこそ見え侍れ。

廿二番
左　首夏郭公
夏衣きのふの春の露もひぬ梢のけさの山ほとゝきす
右　遲櫻
山櫻あなたの花の夏かけてなれもいとはん世の草木とや
此番等同歟。

廿三番

左　山中餘花

ふしみねは咲へき春の櫻さへ雪をかさねて卯花の比

右　卯花

夕月夜やかてさしいる山かつのかきほにふくるうの花のかけ

左歌。其境に臨て其景を詠せる。をしはかりても見躰に侍り。右歌。第二句は月の山のはに入たるかたにとりなされたるにや。京極黄門のやかてさしいる月のかけ哉は。ことにさし來れるを詠せり。さしと云詞に心ありてみゆ。いかゝ心得へきにか。いかさまにも左はまさり侍らんかし。

廿四番

左　侍郎公

あふひ草みあれのけふは取そへて心にかくるほとゝきす哉

右

しかりとてこゑやはもらす時鳥村雨あやな有明の月

左右勝劣なくや。

廿五番

左

ほとゝきすなれて年／＼ふる聲をしらぬ誰とか又忍ふらん

右

村雨の雲まの月のいてさらははつねももらせ山ほとゝきす

左歌。よくいひかなへてよろし。可爲勝。

廿六

左　曉時鳥

ねすらにてことよひ打ねは時鳥かたふく月のをちの一こゑ

右　時鳥

夢うつゝことよひきたあよ時鳥思やわきしやみのひとこゑ

左右ともに心詞相叶て珍重。

廿七番

左

またよひの村雨なから月影は雲のいつくの山ほとゝきす

右　時鳥何方

思ふかたいつれ一こゑ時鳥はなたちはなに有明の月

左方餘情ありて神妙。爲勝。

廿八番

左　美豆御牧

時鳥またて此暮心をやみつのみまきの村雨のそら

右　早苗

早苗とる田子の浦波おり立てほさぬ日いつれあまの衣手

左は心ふかく。右は詞つゝき上手のしわさとみえたり。いつれと定かたきによりて爲持。

廿九番

左　五月雨

軒ちかくみきはまさりて庭たつみ日なみかさなる五月雨の比

右　夏草

跡遠き庭のをしへのかたはかり行衞もいとゝ夏草の原

左歌。軒ちかくみきはまさりてと侍る。句のつゝきや甘心せすも侍らん。右の述懐あはれに見給ふるにつき一爲勝。

卅番

左　夏草露

玉ほこの道行人もけさはまた夏野の草にむすふ白露

右　夏露

枕さへむすひもあへす夏草のかりふみしかき夜半の朝露

兩方の露。右は心あるさまに侍り。勝とすへし。

卅一番

右　夏深

都人花に入こし山さとの道の名殘も夏草の露

右　夏月

今年生の竹のはならすさよ風に枕まかせてふし待の月

夏草の露よりも。竹のは風はまさりてきこえ侍るにや。

卅二番

左　螢來窓

よひのまの灯消て窓ちかき竹のは風にてるほたるかな

右　水邊螢

夏草に水行野へのわたりとや一すしすたくほたるなるらん

双飛の螢火。窓の光はてりまされるにやとて爲勝。

卅三番

左　疎屋夕顏

草たかき賤屋の小家それかとも今そ時めく夕顏のはな

右　鵜河

鵜かひ舟たなはくりすて波枕いたつらふしの月に成行

左右ともに下句優に侍るにとりて。右はまさり侍るへきやらん。

卅四番

左　夏河

夕立のたかねおろしに舟よはふ袖は雪ちるふしの河なみ

右　夏山

花の時紅葉の折の中空に風一さかり山松のかけ

左歌。作者眼前の境界さもこそはと。不及加詞。爲勝。

卅五番

左　竹風夜涼

もる月の光を花と竹のはに匂ふ南の風のよなく〳〵

右　河夏秡

なかれきてなかは今年もはやせ河袖打ぬらし御秡をそする

左。南薫の心しかるへし。但右猶幽玄にや。爲勝。

秋

卅六番

左　立秋

秋きぬとゆふ付鳥のしたりおのなかき夜やかてしるね覺哉

右

ふけや袖ことしも露の吾身世にありふるうちの秋のはつかせ

左。この心おほくみし心ちし侍り。右。又初五字不甘心やうにおほゆ。しはらく先爲持。

卅七番

左　早秋

音にのみきくとやいはん身にしむは色の千入の秋のはつかせ

右　早秋朝

夏草の繁ひとつに朝露の萩のはわくる秋のはつかせ

左。色のちしほ。誠に身にしむ心ちして爲勝。

卅八番

左　七夕露

天の河いつの露よりひこ星の中のうきつにさはく白波

右　織女契久

秋といふ秋やわたさんなかれてはいもせの中の天の河なみ

兩方の銀河。いつれをふかくいつれをあさしと定かたし。可爲持。

卅九番

左　荻風

まかきこす荻の根わたり年／＼におもはぬかたの秋の初風

右

はらふやとたゝめま［も歟］袖の露は猶吹につけても荻の上風

吹につけてそおきの上風。言語道斷殊勝。左の歌の是非に不及。勝と定へし。

四十番

左　萩

なきてくる鴈の涙や染つらん夕色ます秋萩のはな

右　萩露

鴈かねのきこゆる空の朝戸出にみれはたはゝの庭の萩かえ

左歌。鳴わたる雁の涙や落つらん［　　］所も心も不相替。いかゝとこそ覺侍れ。右は難なきにや。

四十一番

左　行路萩

武藏野や行かふ袖もをのつから色こき時の秋萩の花

右　萩纈色

下葉さへ秋ふかくなる色みえてうつろふ物は秋萩のはな

此番右の秋萩色ことにみえ侍るにこそ。

四十二番

左　籬槿

朝な〳〵籬にさける槿の花とはかりや誰も見るらん

右　草花交色

秋霧の野はから衣おりはへて花さへ葉さへしのふもちすり

左の槿。無常觀念の心おもてにはあたならで。いとふかく見え侍れは。右の草花は目にもたらすなん侍る如何。

四十三番

左　田家鹿

小山田の色こきいねに立ましりもる庵ちかきさをしかのこゑ

右　稻妻

秋の空風待比のうたゝねに涼しくかよふよひのいなつま

左歌。後小野の山里のさまみる心ちし侍り。右。又艷に侍れは持なるへし。

四十四番

左　夕露

夕されは玉のをとけて花薄草の袂の秋のしら露

右　泊瀨山

山かけてみたれにけりなはつせ□（山手缺）にまく玉の秋の夕露

雨顆の玉とり〳〵なりといへとも。手にまく玉はなを光ありてこそ侍れ。

四十五番

左　山家秋夕

吾心柴の戸あけてやるかたは岩木もぬるゝ秋の夕露

右　初鴈

秋の風夜寒のけさの朝露におき出てきけは初鴈のこゑ

おき出てきけは初鴈のこゑ。優美にきこゆ。又以右爲勝。

四十六番

左

霧立て衣手寒き朝戸出に露をきそふる初鴈のこゑ

右　曉鴫

秋の夜のね覺の袖の行水に我そ數かく鴫のはね音

左右ともに風躰よろし。よき持とす。

四十七番

左　淺霧

すみた川舟しはしまてこしかたは空打きりて晴やみぬ比

右　月待出

秋の雨けしきはかりの山のはに影にほはしていさよひの月

左歌。晴やみぬ比と侍る比の字いかゝと覺侍り。右歌。見躰にて有其興。可爲勝。

四十八番

左　月

いく秋もおなし光の月にわかよはひかたふく哀をそしろ
右　月迎秋明
秋といへは水もやのほる大かたのすめるにはあらぬ空の月影
左歌。老年の述懐身にしられてあはれなるまゝ。左右なく
まさると申へし。
四十九番
左　山月
嵐吹山立はなれすむ月の行衞さためぬうき雲の空
右　徑月
月やとる草はの露は玉ほこの道行人もさ夜ふくる比
左歌。心詞相叶て尤神妙。
五十番
左　關月
不破の關戸さしせぬ代はもる人もひまある月の板ひさしかな
右　禁中月
更のほる月の雲井のとのゐ人ふむ跡みえぬ庭の白雪
禁庭の雪見所ありといへとも。關路の月になん心とゝま
り侍ぬる。
五十一番
左　月照瀧水
よな〳〵の月の光にくりためてたか衣をる瀧のした〔[illegible]〕いと
右　山家月
山里は心つくしもなくさみもひとつ木のまの秋のよの月
左歌。山分衣をりてきまくをといへる心をおもへるにや。
いとをかしく侍るを。右歌。心つくしもなくさみもひとつ
木のま。誠にいひしりてたくひなくも侍かな。勝とすへ
し。
五十二番
左　閑對曉月
なけくなよ吾よ更行れ覺まてなれすは月を見ぬ人ならん
右　秋枕夢
秋風につなかぬ夢のうき枕こそ舟なかす床のうら人
左は心ふかく右は詞たくみなるにとりて。左のむすひ句。
右の第二句。愚意におきて庶幾せさる所あり。短慮のをよ
はぬにそ侍らん。いかさまにも先以爲持。
五十三番
左　擣衣
秋萩のうつろふ花のすり衣獨〔[illegible]〕ある人やいれかてにうつ
右　菊送多秋
梅にさき菊にうつろふ一とせのいく秋花のかきりとか見し
左。古今集。秋萩の下葉色つく今よりや獨ぬる人のいれか
てにするといへるをとり用らるゝ歟。舊歌はかやうにと

れるも。一の修には侍れとも。京極黄門は二句の上三四字免之。愚案之としるしをかれぬれは。此歌過分してや侍らん。然者以右可爲勝。

五十四番

左　岡紅葉

たかために色とる露のうすくこくならひの岡の木々の紅葉は

右　秋時雨

村時雨くもりみ晴み秋の日のうす花薄袖ほさぬころ

うすくこくならひの岡。秋の日のうす花薄。えんなる詞つゝきとも。よき持なるへし。

五十五番

左　暮秋月

玉くしけ二夜の外に殘りきて猶かけふりぬ有明の月

右　暮秋興

秋はけふ菊の花さき紅葉てる山路を誰に殘してか行

右の暮秋興誠に其興あり。可爲勝。

冬

五十六番

左　初冬

花も葉も根にかへりつゝさらに見ん春秋こもる冬はきにけり

右　時雨

たゝひとへ嵐の上にうき雲の日はてりなから時雨てそ行

此時雨の空みるやうに侍り。又以右爲勝。

五十七番

左

山めくる時雨の雨にことゝはんもちて住よきかけもこそあれ

右

こゝに時雨かしこに晴てさためなきよや浮雲の袖ぬらすらん

左歌。心あるやうに侍れと。右歌。餘情かきりなくあはれおほく見ゆ。勝とすへし。

五十八番

左　夜時雨

わきてとふ人のね覺もあるならしまなく時雨のめくりては行

右　野霜

秋をゝきて冬野の霜の朝ほらけ花の一本むしの一こゑ

左は心うるはしく。右は逸興あり。そのさまことなりといへと持と申へし。

五十九番

左　寒草

葛の葉のかへりし秋の音信はあるかなきかの霜の下おき

右

水の音はたえて風のみなかるゝや氷にたてるさゝれおき原

右歌。めつらしからんとたくみ出せる風情也。但左はこと
もなきにとりて勝とす。

六十番

左　寒草處々

冬くれはまそをの薄かた糸をこなたかなたにむすふ霜哉

右　寒草霜

霜もとへ庭のあさちふうすくこく色付うへの霜の花その

薄淺茅の霜。こなたかなたに心まとひして。いつれとわけ
かたくこそ。

六十一番

左　千鳥

和歌の浦やかよひし代々の名殘とも跡しらなみになく千鳥哉

右

いにしへの跡をしたひて和歌の浦やかへる波にも鳴千鳥かな

素暹法師九代のあと。わかのうら波におもひをよせられ
侍る。老の袂左みきにしほれはてゝ。千鳥の蹤跡をわきま
へ侍らすなん。

六十二番

左　曉天千鳥

さゝ千鳥友なしにしてれをなかは霜のおきなのれ覺かたらへ

右　水鳥

有明の月かけなから打はらふ朝の霜のをしの毛衣

朝の霜のをしの毛衣。兼題にも侍るかな。霜のおきなたけ
て侍れかし。

六十三番

左　冬月

霜枯は八重むくらにもさはられは冬こそ月は宿の物なれ

右　冬天象

嵐吹あかつきふかくすむ月に雲の一むらちるあられかな

左右ともにとり〳〵をかしとみゆ。持なるへし。

六十四番

右　待雪

ふみ分てこん人もなし道たえはいとゝ古郷雪のまたるゝ

右　連日待雪

玉霰のあられをけふも先たてゝつれなき雪の庭の松か枝

左は古郷の雪にこん人もなからん事をおもひ。右は玉さ
ゝのあられに松か枝の雪をおもへる。いつれも其心すて
かたし。仍爲持。

六十五番

左　雪

跡そなき身のあらましにたのまれしことし〳〵も雪積りつゝ

右　遠山見雪

天の原ひとつ緑にわかさりし山のはちかき今朝の初雪

左は身のあらましの心さしふかく侍れとも。右。又たけたかくやすらかにいひくたされて。よろしく侍れは。猶まさるとや申侍らん。

六十六番

左　積雪

雪あられはるゝ日も見ぬよもきふに思ひやらるゝこしの白山

右

みわ山をしかもうつむる白雪のたかきや杉のしるしなるらん

左歌。源氏物語の詞さなからそのまゝのやうにみえ侍り。右は人にしられぬ花やさくらんの心をとれるにこそ。歌のさまはおなしほとにや。

六十七番

左　都雪

見わたせは柳櫻も白雪の花の都のけさのあけほの

右　松雪

おれかへりこほるゝ雪や白波のこえし名にたつ末の松山

是又左は古今集。右は源氏物語。前のことく爲持。

六十八番

左　雪中夜長

雪おれの聲いくたひのね覺にかひましらみ行軒の呉竹

右　雪中興遊

思ふとちなさけすゝむる圓居して雪にすたれをまきの戸の内

左歌。冬の夜の明やらぬさま。能いひかなへられて侍り。右の興遊は凡俗にこそ侍りけれ。

六十九番

左　爐邊閑談

もらさしの心のおくもこしかきのあらはにふくる埋火のもと

右　炭竈煙

たちのほる煙にもしれ朝夕のやくとは炭を大原の里

左の爐火よりも。右の炭竈は立のほりたる煙にそ侍るへき。

七十番

左　歳暮松

木からしの外山にたてる松のはの雪のうちなる年の暮かな

右　歳暮

程につけて事こそかはれ世の人のなみのさはきにくらす年哉

左。松のはの雪のうちなる。何となくやさしくみゆ。可爲勝。

戀

七十一番

左　初戀

年へても終にもみちぬ松ならは時雨そめしやくやしからまし

右　言始戀

しのふ山ありて猶うきみちのくのいはての里をけふそ出ぬる

右。いはての里をけふそ出ぬる。をかしくとりなされて侍る。但時雨そめしやくやしからまし。猶優にやとて爲勝。

七十二番

左　忍戀

人ゆへにたつへきなとかいとふとて枕にも身をやすめさる覽

右　待戀

更ぬるかちり打はらひ空にたくかたはらさひし床のさ莚

左歌。上句くたく〵しきやうにみゆ。右。空にたくかたはらとつゝけて。そら薫物にとりなされ侍る歟。毎句是もくたく〵しくきこゆ。不及申優劣。

七十三番

左　契待戀

さのみやとならふ物から僞も打はをかれぬよひ〵の空

右　契戀

とりとめて何のたのみもなをさりのとのはにたにかゝる白露

僞もうちはをかれぬ。戀の心深切に侍れは勝たるへし。

七十四番

左　逢戀

重てもあかてやあけん獨ねになかゝりし比の夜半のいくよを

右　後朝戀

引とめぬ袖のかたみのうつり香にはらひ侘ぬるけさの朝露

左。心ふかく侍り。第四句比の字こそあまりてきこえ侍れと。強而とかむへきには侍らねは。又以左爲勝。

七十五番

左　後朝切戀

ねし床の朝の露の玉きはる身の夕暮をたれにかくらん

右　忍絶戀

年そふる心のおくもみぬさきにしのふの山路跡もなきまて

左右ともに下句よろしく侍り。なすらへて持とさたむ。

七十六番

左　新戀

この比のつらさにこえて神垣やへたてあれとは祈らさりしを

右　久戀

物思へとなからへけりな命やはなにそは露もあやにくの身や

右歌。なにそは露もあやにくの身や。妖艶に侍り。勝と申へし。

七十七番

左　經年戀

思川年なみこえていとゝしく遠きわたりになかめくらしつ

右　春戀

ふくるまてまたるゝかたに誰ならしおほろ月夜の梅かえの聲

右のおほろ月夜の梅かえの聲。優にきこえ侍れと。左猶いひしりて侍れはまさるとすへし。

七十八番

左　披書恨戀

引返し猶やうらみん一ふてのあまりおくなき人の心を

右　戀筵

いたつらに七ふ更行すかこものかたはら淋しねられたにせよ

右歌。むすひ句すこし平懐にや。左はまさり侍らんかし。

七十九番

左　寄風戀

夏かけし人の契はうつせみのはかなやつゐに秋のはつかせ

右　寄雲戀

いて人は嵐はけしき大空のなにゝつきたる雲の一むら

左。初五文字秋かけてなといへるにはをとりて覺ゆ。右も古今集ことのみそよきといへる歌の五文字には侍れと。強て難好用もやとて覺侍る。於歌絆者おなし程にや。

八十番

左　寄煙戀

こりはつと思ひのなけきいかにしてたえす煙の胸にこかるゝ

右　寄露戀

消やらてしか思ふともたかつてにかけていはせの森の下露

左の煙不隔の儀顯然珍重。但右は歌さまよろしくみえ侍れは勝へくや。

八十一番

左　寄木戀

身は終にならぬ思ひの吾方へかれねうき名をおふのうらなし

右　寄瀧戀

返してもいかゝまとろむ烏羽玉のよるの衣のたきつせなれは

おふの浦。衣の瀧。いつれとわきかたく侍れはしはらく持とす。

八十二番

左　寄筏戀

筏士よいく瀬たか波しのきゝてまたるゝ暮の床はらふらん

右　寄鳥戀

ふるされし身のかたうつら露霜の野となる床にいつと鳴らん

右歌。初五字不甘心。所詮鷄の床よりも筏の床まされりと定申へし。

八十三番

左　寄郭公戀

時鳥夜ふかくもらす忍ひねに我も涙を袖にまかせつ

右　寄獣恋

かれはてぬなくさみ草につなかるゝ心の駒のちからなの身や

左。我ゝ涙を袖にまかせつ。殊幽玄。心の駒のちから。かけてもをよふへからすや。

八十四番

左　寄虫恋

もえあかしなきくらす虫のよる晝を吾身一つにしるや何なり〔不審〕

右　寄原恋

今はたゝ思ひきえなん草の原とはすは露の跡もはかなし

左歌。ちからあるさまにみえ侍り。右はよのつねの事に侍れは又左を勝とす。

八十五番

左　寄衣恋

うつりなき色もかさねぬはつしほの一花衣比もへすして

右　寄名所恋

とはれねは我もうき身のからさきや松とてたてる獨のみかは

左右ともにことなる事なし。可為持。

雑

八十六番

左　暁鶏

またれしを待てこそきけいつのまにあらぬね覚の鳥のはつ聲

右　嶺松

いつのちりいつの二葉そ久かたの空なる峯に松の木たかき

此嶺の松まことにたけたかくみゆ。勝なるへし。

八十七番

左

朝夕にすまはかけにと峯の松心のおくの庵もふりけり

右　名所松

吾よはひけふよあすよと武隈のまつとつきて身こそやすけれ

左。心のおくの庵もふりけり。とにあはれに覚て。たけくまの松。二たひ吟味にも不及。左のみねの松に心とゝめ侍るになん。

八十八番

左　古郷松風

すてやらてありふる里は浅茅生にけふ暮あすと松風のこゑ

右　江蘆

いかなれは世にこもり江のうきにのみおひ立蘆の下根成けん

左の古郷の松。右のこもり江の蘆。述懐の心とり〳〵なるにつきて。猶蘆の下根はふかく思ひ入たる所。能いひなかされたりとこそ見給ふれ。いかゝ。

八十九番

左　竹

人の世の夢のわたりに渡さはやうきはうつゝのまゝのつき橋

右　夢

さらはなと夢を見る世の夢ならてよしやあしやの跡殘るらん

左歌。うきはうつゝのまゝに。夢のわたりにわたさはやとこひれかへる心おほつかなくや。但厭離穢土の心ざしのためはさも あるへき歟。すこしはいかにそや覺侍り。右歌。よくいひかなへてまさるとこそ申へけれ。

九十番

左　寄山雜

秋冬のあひやとりする山やふし麓は紅葉峯は白雪

右　寄枕雜

枕ゆへ昔の夢やかきりなきいさをくやらんあかつきの空

右歌。心こまやかにをかしく侍れとも。左。秋冬のあひやとりすらん富士の山。人間の丹丘。なへてのことのはゝたちならふへきにあらすとなん見給ふる。尤珍重々々。

九十一番

左　朝市

かさしおるしけ山風の朝寒にのむあち酒のみわの市人

右　寄市雜

何をかもうる道にして行かへり身の年月はたつの市人

左。萬葉の古風其興ありといへとも。右の辰市心詞とゝのひてよろし。

九十二番

左　山家

雲ならて行水くゝり雨ならて草木うるほふ宿の明暮

右　山家路

通路の山路を見てそ都人とはぬたえまの思ひしらるゝ

左歌。ならてといへる詞。句をへたてゝ二侍り。さなくてもあらはやとそ覺侍る。右。後宇治の中君の都へ□けん道すから匂宮のとたえを思出られけん。心も思よそへて殊興感不斜。尤可爲勝。

九十三番

左　山家鳥

吹おろすおく山風のさそひくる木のはにつるゝ庭の色鳥

右　山家客來

人目こそ思ひの外にかれ殘れかきれ梅さく冬の山さと

左。木の葉につるゝ庭の色鳥。連歌の句にそ相似たる。右。いと艶にこそ見え侍れ。

九十四番

左　山旅

水とをくはるけき山路白雲のうつむ梢に鳥のひとこゑ

右　月前旅

武藏野や分行秋の花かたみめならふ月のいつくにかれん

左歌。山行の趣にて旅の心をろそか〔に歟〕やと見給ふれとも。

白露山深鳥一聲といへるは。朗詠集行旅の詩に入ぬれは。

さやうの事をおもひてよまれけるにや。但むさし野の月。

旅の心もたしかに。歌のしたても神妙に侍る。可勝哉。

九十五番

左　旅行曉

さそはれし月かたふきぬ行末の里か宿かせ鳥のはつこゑ

右　旅泊雨

雨くらき入海かけてよる舟のうきねにしつむ鐘の一こゑ

左歌。第四句すこし不甘心侍り。右。うきねにしつむかねのこゑ。耳にとまりてまさると申侍り。

九十六番

左　嶺中雲

袖に今かけてそこゆる久かたの空のはるかに峯の白雲

右　述懷

心ともなくてふる世のとにかくにわふる〳〵そ身は老にける

左の白雲。此心つねにみる心ちし侍り。右。まことに身の人に思しられたる老のとはりさる事なから。第四句あまりにたゝ詞のやうにや侍らん。仍爲持。

九十七番

左

たらちねの親のまもりの身にそつくまよはしはつな敷嶋の道

右　寄道述懷

たらちねの跡いかさまに分もみんなくれて遠き道の芝草

兩首の述懷。孝心あさからさるもさる事にて。此たらちねの家の風は。ほのかにつたへ聞事ありし身にて。ことさら老の涙をさへかたくて。よしあしをもわきまふるにたらすなむ。

九十八番

左　寄關述懷

とゝめすはなにゝなくさむ世ならまし昔の歌のもしの關守

右　夕懷舊

いつまてか行末しらてけふことにきゝとめさりし入相のかれ

此番又とり〳〵にて。短慮をよひかたく。持とや申へからん。

九十九番

左　月前懷舊

月の秋の數そふ露の玉くしけ二たひあはぬいにしへの空

右　見月思昔

いにしへは月の都をすみかにてなかむる人にかへりあふかも

右は由ありけにきこえ侍れは卑詞をくはへかたし。左。う

ちまかせたる懐舊の心いひしりて侍れは爲勝。

百番

左　寄社祝

住吉や松にそしろきちりうせぬことのはもりの神は此神

右　神祇

玉津嶋見れともあかぬ所とかしめゆふ神の心しるしも

左右の歌。かけまくもかしこき道をまもりまします。兩神の威光に ことよせられ侍り。いつれをいつれと申述んもをそれあるに似たり。しかしなから 冥慮にまかせて わたくしの輪贏をしるすにをよはす。

抑よろつの道物を判斷する事は。理をきはめ非をたゝし。善をすゝめ惡をさけて。毫釐といふとも偏頗なからんことをもとゝす。こゝに八雲出雲の道あさきに似たりといへとも。境に入たゝすしてはそのふかきことを知かたし。されは歌合の判者といはん事。螢雪のつとめをつみ。箕弓の塵をつけらんなかにも。そのえらひに堪なん事 思ふにかたかるへし。まして今末の世となりては。誰の人ももたしてやみぬへきことになん。しかあるに此一まきは素純法師みつからの歌二百首を一百番につかひて。よのつねの歌合なとには侍らねは。ひそかに此拙き翁に判の詞くはふへきよし。雲井の鴈のたよりにつけられしかとも。入江におふるあしよしをも。山井の水のふかさあさゝをも。もとよりたとりしらさりし身の。久しく桑の門の世すて人と成て。ひとへに花の臺のむかへを待のみなるうへに。此四とせあまりは世中うつりかはりて。うつの山へのうつゝともなく。あかしくらし侍れは。そのかみわつかに見きゝしふる事も。うと濱のうとくのみ成はてゝ。すへて一言をのふへきさまにも侍らねとも。するかの海のはまつゝら。くり返しもよほさるゝにつきて。みおのうらわのしらつゝし。しらさるをはしらすともせす。すゝろなるひかことゝもを筆にまかせ侍る。いとかたはらいたくこそ。

ふしのねのあふけは高き道をいかて麓の塵の身にはからまし

堯空

判者逍遙院殿

亨祿三庚年三月廿三日ニ到來

續群書類從卷第四百十五

和歌部五十

三百六十番自歌合

松下正廣

春秋

一番

左　立春

明にけり光をうけてもろこしもけふ日の本の春や立らん

右　立秋

草も木も染へきものとそめいろの山の西より秋や來ぬらん

二番

左　山花盛

高砂や花の外なる嶺の松それもひとつに埋む雲かな

右　名所月

三吉野や花にかすまぬ秋の月出るも匂ふ山の端の空

三番

左　暮春鐘

難波かたいかなるえにか入相のかねをしるへに春の行らん

右　暮秋霜

冬もこはみよとや霜の花苑に草木をかさる秋の行らん

四番

左　初春霞

打出る雲の波まの朝日かけにほふかすみや春の初花

右　七夕雲

七夕にかすか山姫立雲のころも吹やる遠の秋かせ

五番

左　毎春花香

むかしよりかはる浮世を春の花更にけちめもなき匂ひ哉

右　嶺上月

晴のほる月に浮雲はらひてもわかころ曇る嶺の松風

六番

左　獨摘若菜

つみいるゝわかなは雪の花筐めならふ人もみえぬ野邊哉

右　荻似人來

吹たひにとふ人ありとおとろけは簾うこかす風の下荻

七番

左　春曉月

さほ姫の霞の袖の山かつらひきとくゝしか殘る夜の月

右　河邊月

みや人のみし夜の月に花薄まねくそ殘る宇治の河風

八番

左　歸鴈

たをやめの誰と引とく帶ならん霞の袖につゝくかりかね

右　初鴈

湊田やあまのかるてふいな舟をほなみに見れは渡る鴈金

九番

左　呼子鳥

さらに世をいとひはてねと山ふかく誰よふこ鳥聲聞ゆらん

右　野徑虫

われからとなにいとふらん花薄風に波よるむしの聲〳〵

十番

左　松藤

花ちらす風のやとりを松にみて恨やかくる春の藤浪

右　秋霜

そめかねて殘るか松に夢路をは夜のまにからす秋の初霜

十一番

左　遠山霞薄

うと濱の霞とみるや富士の根の山をいはほの天の羽衣

右　初秋朝雲

今朝たつはいつれの雲そ一葉吹風も音せすちる雨もなし

十二番

左　戸外春風

花の香を松の戸とつる香さえて猶雲ちらす春の山かせ

右　月契多秋

いくめくり秋もはてなき契り哉神代を過て人の世の月

十三番

左　欵冬

事とへは露そこほるゝ物いはてなにかうらむる山吹の花

右　秋草

秋の風まねくもあかて恨むなり尾花葛花色もかはらて

十四番

左　水郷柳

橋姫のおもひの煙はるそへて柳になひく宇治の河風

右　七夕木

春ならていま一しほや箱さきの松もちきりに色まさるらん（星イ）

十五番

左　初春待花

神の代の春にそ明る天地も花のためにやひらけそめ劍

右　薄未出穗

稻妻や心をわけてかよふらん田つらの薄露そはらめる

十六番

左　野亭鶯

氷しく野守のかゝみ曇りなく春にそむかふ鶯の聲

右　霧中鳫

山本の霧のうへ行秋の鳫聲きくよりもみるそまされる

十七番

左　雲雀

あかるへき道やをしふる草葉より子をおもふ雲雀空に立聲（鳴きイ）

右　山鹿

槇檜原つれなき色を秋山になして妻こふ小男鹿の聲

十八番

左　初春雪

ふる年につもるは消て九重や又めつらしき春の初雪

右　初秋月

龍田姫秋きにけりと月のまゆ出て誰にか向ひそむらん

十九番

左　行路海

道の邊にしはしそとまる梅かゝの袂ひかふる風のつかひに

右　月秋友

曇るなよ憂もつらきも月ひとりわれなくさむる蓬生の宿

廿番

左　若菜

さほ姫の霞うちはへ野邊に立みとりの袖やわかな摘らん

右　荻風

大かたにいつかはきかん春の花秋も心を荻のうはかせ

廿一番

左　遠尋花

もろこしはやまとにありと吉野山花にをよはぬ苔のふる道

右　十五夜月

初瀬山尾上の月にかねの聲ともに名高き秋の空かな

廿二番

左　花盛久

咲殘る花こそなけれ十かへりの松もやましる高砂の山

右　水邊菊

天の河あふせもかくや白菊のほしをうかふる庭のやり水

廿三番

左　花隨風

とゝまらぬ花もわか世をさかの山身をうき雲の風にまかせて

右　臥待月

秋萩の下葉の露も小夜更て獨ねまちの月をみる哉

廿四番

左　霞春衣

諸人のうへにとりきはしるからん春の衣をたつかすみ哉

右　初秋露

もろこしやいつくの國の露ならん西より秋のちらす初風

廿五番

左　殘雪

時をえておいその森もわか年にいたゝく雪をはらふ山風

右　荻風

荻原やなれも嵐にふしなから我おとろかす夢のかよひち

廿六番

左　月前梅

槙の戸をゝし明かたの梅かゝに霞てしたふ月そ殘れる

右　原上月

見し人のいく世をとひて草の原露を泪に月やとるらん

廿七番

左　尋花

櫻かりあけはいつくの花を見んかたみの雲の夕暮の空[雨イ]

右　待月

出ぬまはあふきをあけてまつやみんまたれて遲き山のはの月

廿八番

左　山霞

天津袖なつるはしらすいはくにや山は春きてたつ霞かな

右　山霧

夕日影山は下てる紅葉ゝにくれなゐくゝる嶺のあき霧

廿九番

左　河邊柳

風しふく河そひ柳一かたに青葉亂れてちるつはめかな

右　月前枕

更ぬるか枕かたふけさぬるまにあらし音してさむしろの月

三十番

左　去鴈幽

もしうすき昔のふみをみるやこれ霞にきゆる鴈の玉章

右　月前鹿

照射せしおもひを秋にしのひかれ弓張月に鹿や鳴らん
卅一番
左　梅風
匂ひきてよろつ梢に梅一木我春名のろ山かせの聲
右　萩風
萩原やほに出てのちはあまのすむ笘屋を波の打嵐かな
卅二番
左　立春朝
春としる人の心も天の戸もともにひらくる朝明の空
右　立秋露
梲つむ曉露にくる秋のめにみぬ色をしる袂かな
卅三番
左　柳露
河内女か霞の袖にくる糸の玉の緒長き春の青柳（霞の手染をイ）
右　萩露
高圓のむかしよいかに萩の戸の露分いつる月のみや人
卅四番
左　鶯
春寒きやふしかくれにつたひきてなかぬもましる園の鶯
右　虫
とはろへき誰松虫の秋ふけて生田の小野に聲よはるらん

卅五番
左　花匂
花にふく山風よりも夕月夜光にとをく行匂ひかな
右　萩露
秋の風しはしなふきそ玉の枝花にそまさる露の萩原
卅六番
左　折花
龍田山さのみはおらし白波を我名にたてゝ花やうらみん
右　待月
かへりきていまそほのめくきのふかもいなはの山の嶺の月影
卅七番
左　松藤
千世ときく松にもつゐに老の波こえける藤の春そ暮行
右　蔦風
吹風にしからみかけて音までもまつにはなさぬ蔦の紅葉ゝ
卅八番
左　初春祝
末遠くのとけかるへきわか年の山くち見えて出る日の影
右　初秋雨
都より四極にあまねくちらすへき露のはしめや秋のむら雨
卅九番

左　河邊鶯
吉野河山本遠くうちけふる霞をみれはうくひすの聲
右　初鴈
たか中に契りたのめて三吉野のたのもによるの初鴈の聲
四十番
左　山霞
色かへぬ松にも春をしら鳥のとは山遠くたつ霞哉
右　山霧
明る夜の雪をくつしてふしおろしなかすとみるや秋の河霧
四十一番
左　磯春草
冴かへり積るはきえて春の草わかゆきかくる磯の波哉
右　薄露
天津袖なつるとみれは露かろき岩もとすゝき秋風そふく
四十二番
左　梅薫風
今も猶春や昔とさく梅に匂ふやかほろうちの河風
右　鹿聲近枕
照射せしわかれを鹿や宮城野の枕によりて聲うらむらん
四十三番
左　歸鴈
はかなしな雲の波まの春の鴈數かく水と跡そきえ行
右　左右聞鴈
しかの山やこゆる雲路に來る鴈のすくるもありて渡る聲〳〵
四十四番
左　花盛
山櫻枝もとをゝにかたふきて木ことにあまる花の色哉
右　野月
秋の月なかはゝ露のひかりかな千種を分るむさしのゝ原
四十五番
左　山路花
雲となり花とひらけて山さくらかへさは道を埋む雪哉
右　月前鴈
葛城やよわたる月に岩橋をかくると見るやつゝく鴈金
四十六番
左　落花風
さそふへき契りあれはそなひくらんよしや嵐の花に吹聲
右　十三夜月
出て世に今宵も月の名取河はるゝかそらにとこの山風
四十七番
左　江歸鴈
ふかき江に契りあさくも歸る鴈つなかぬ舟の波さとふてそ

右　澤邊鴨
淺澤に數かく水のうたかたをはかなしとてや鴨のなくらん
四十八番
左　閑居花
いとふとてしのふか花の陰に來てかたえうこかす庭の春かせ
右　江上月
月そこれ水なき空の玉柏藻にうつもるゝかけもくもらす
四十九番
左　嶺歸鴈
春の夢たれかはかよふ嶺の庵うき橋かけてわたるかりかれ
右　初鴈成字
まなふへきふみにはあらてかきつらねくる鴈むかふ窓の北風
五十番
左　霞中花
たをやめのかさぬるきぬの八重櫻霞にあまる匂ひをそみる
右　船中月
沖津空もろこしまての月やみき袖の湊によるの舟人
五十一番
左　夜梅
曇りなく匂ひきにけりさく梅の星のまきれの庭の春風
右　深夜荻
更にけり待人ならはいかにとも恨やかけん荻の上風
五十二番
左　月前花
ちらぬまにいとしも花を思へとやをし明かたの木のまもる月
右　月掛嶺
夕ま暮たか待出る嶺ならんこなたの月はあくる光に
五十三番
左　堤柳
船まつや淀のつゝみの柳かけかすめるうちに人そあつまる
右　七夕木
秋の風さそはねは又あやにくに梶の葉ちらすけふの諸人
五十四番
左　夕雲雀
跡もなき夢のうちのゝ夕雲雀さのみ雲井に誰をこふらん
右　澤鴫
玉章に秋のおもひの數かくや野澤の鴫にましろかりかね
五十五番
左　霞春衣
辛崎や松を煙の春はかりしほやき衣たつかすみかな
右　初秋衣
河社衣やしのにほしあひの雲の波まの秋のはつかせ

五十六番

左　餘寒

春やとき梅さく軒につらゝゐて花のか寒き霜の朝かせ

右　荻風

うき秋のおもひやわれに夕ま暮聲する風の軒の下荻

五十七番

左　桃花

たをやめのひかふるみきかさく桃の花にかたふく春の夜の月

右　河月

すむ月のかつらの花や梅津河さてもそ波にかけにほふらん

五十八番

左　關霞

海士やすむ霞のみほの船岡に春はいさりをたくつゝし哉

右　關月

有明はみやこのかたの白河や同しあつまの關屋もるかけ

五十九番

左　閑居見花

夕闇暮れの人めもすみはてゝ花にひまある木の本の宿

右　閑居荻

うき事そなかはまきるゝ荻原やまつたちならふ風の聲〳〵

六十番

左　見花

高砂の松の心よいかならんとしもあかて花にみえぬる

右　水郷月

心あれや月を入江のあしすたれ巻て夜ふかくともすひもなし

六十一番

左　未花館

さのみかく明れはむかひ日暮れは心のそふを花やいとはん

右　月前煙

空はれて中〳〵賤か夕煙月にはへたる秋のやまもと

六十二番

左　霞隔遠樹

うす墨の霞のうちに色こきや繪嶋か磯の松のむらたち

右　七夕雲

雲の波今宵なこえそ七夕の契りをあきの河かみの松

六十三番

左　水邊藤

山高み木のまに落て石はしる瀧に音する松の藤なみ

右　月如鏡

玉くしけ明れは袖につまかゝみ影をならふる有明の月（月ニ殘れるイ）

六十四番

左　初春霞

春も今朝岩戸を明て千早振神代の袖をたつかすみ哉

右　曉荻風

いかゝれんかけのたれ尾の長き夜に亂れそへたる荻の上かせ

六十五番

左　初見山花

明そむる山櫻戸の花のかほまたれしほとをいかゝうらみん

右　隣家槿花

打とけておきふすやとのかいまみを誰そとみれは花の朝かほ

六十六番

左　夕霞

墨染の夕の寺にさほ姫のなとてかすみの衣たつらん

右　七夕鳥

をしなへてけふ鵲やみえさらん天津雲井の橋わたすとて

六十七番

左　早春水

けふそ春心の水も手にくむもはやうちとくろ松かもと哉

右　早秋日

秋はけふ西吹かせの香羽山まつ出むかふ朝日かけかな

六十八番

左　夜春雨

春の夢かよはんとすれはうきはしに水かさそふへき雨の音哉

右　月前秋風

よしやふけ月に初せの山颪はけしからすは嶺の浮雲

六十九番

左　早春風

朝明に千代の聲〳〵聞ゆなり初春しるや庭の松かせ

右　暮秋風

吹かはる軒はの露の山風に日かけもよはき日くらしの聲

七十番

左　漸待花

われこそは心にかけめ山さくらかたへに松の色そならへる

右　織女朝

星渡る夢のうきはし鵲のけさかけつくやよりはなるらん

七十一番

左　濱歸鴈

濱つゝら秋くる鴈のかへるなみまたつらなるやあまのうけ縄（ひをそへたイ）

右　山家秋夕

老にけりよしいくほとそ太山風庵吹おらせ秋の夕くれ

七十二番

左　春曉花

とくあくる花のひかりに鳥の聲たつたの山やみしか夜のそら

右　山家月

都をは思ひすてつる袖にきて昔なとひそ軒はもる月

七十三番

左　霞春衣

春のきて人のたちぬふわさならは霞の衣ひまやなからん

右　浦秋夕

はかなしなたか世を聞も身をうらにあまの袖かる秋の夕暮

七十四番

左　軒梅

下崩（もゆイ）る軒のしのふの梅かゝにむかしをとひて春風そふく

右　菊久盛

老やいつ霜をいたゝく後も猶花はさかりの庭の白菊

七十五番

左　歸鴈幽

とことまてたか僞の中ならんかすめてかへす鴈のたまつさ

右　薄暮霧

うき秋のおもひそいとゝ身にせまる霧に道なき夕暮の宿

七十六番

左　春草

風ふけはなひく芝のはうちかはしつまこめいそく野邊の若草

右　荻風

荻原やとし〳〵秋のやとりとる風のつかひに何さはくらん

七十七番

左　花如雪

吉野山やよひの末にふゝきしてこその嵐のうつむ雪かな

右　山月

あなし山嵐や雲を巻向の檜原の秋の雪の月影

七十八番

左　早春

うきなからさすか都そたれもすめさてもそふるき春もきぬ覽

右　紅葉

時雨つゝ紅葉色こき忍ふ山たかむねこかすゆふへなるらん

七十九番

左　海邊霞

淡路かた霞（のイ）をあみに（をイ）引あまのつな手とみるや嶺の横雲

右　行人隔霧

霧ふかみ駒引よくるほとなれや聲をあはせて過る旅人

八十番

左　早春水

やまとかは人も心をめくらすや氷とけ行水のうたかた

右　駒迎

逢坂やひま行駒にひきそへてほとなや秋のもち月の影

八十一番

左　朧月

花の香のおほつかなくて曇る夜は照にそまさる闇の月かけ

右　月前秋風

たかならす月のあふきそ雲の袖空に亂れてかよふ秋かせ

八十二番

左　故郷花

からき世をふる里人はあとふりて花のみ殘るしかの濱松

右　瀉月

限りなき秋のおもひも象瀉や月に濱風ふけぬこの夜は

八十三番

左　歸鴈

天河あふせもしらて鵲のよりはにならふ春のかりかね

右　浦鴈

春や夢秋風よする浦の波ひとりそかへるはつかりの聲

八十四番

左　初春霞

さほ姫の雪のはたへのうすものや嵐のひまのかすみなるらん

右　初秋露

うき身とてめさまし草の袂よりむすふか露を秋の初かせ

八十五番

左　若菜

神山や卯月は遠きあふひ草これも二葉をとるわかな哉

右　荻風

うき事になすも心そ秋の風めてゝを聞ん露の下荻

八十六番

左　落花

山櫻散てくちすは世々の花積るを雪の高根とやみん

右　月前舟

かち枕浦風あらくちる波や月にとまもる秋のむら雨

八十七番

左　朝見花

老か身はあしたの露の花のかけ又いつの世にむまれてかみん

右　寄月旅（月前竹風イ）

（霜なから月影いたす呉竹のあらしに秋もちるあられかなイ）

さむしとも誰にかいはのうへの袖月の衣はうすき雲かな

八十八番

左　曉花

明ぬとてわかれよいかに妹脊山花にそふ夜の月のみや人

右　秋夕雲

さためなく時雨ん雲を秋の袖泪にいそく夕まくれかな

八十九番

左　立春

天地も惠をうけて人心いさみある世に春は来にけり

右　早秋

涼しとてならす扇を入毎にまねくとみてや秋のきぬらん

九十番

左　霞籠山

なひきあふつまならなくに若草の山も霞にこもるいろ（比イ）哉

右　月前萩

曇りなくさしむかふ月の小夜中にひとりかたふく露の下萩

九十一番

左　花半落

苫むしろ散しくほとに又ちらはひとつも枝に花やなからん

右　南北擣衣

紫のうへの礒の夜もすからあかしの波もうつひゝき哉

九十二番

左　梅香留袖

柳たつ霞の袖そうちけふる匂ひやとむるましろ梅かえ

右　薄風

契りありて山田にかよふ稲妻をよそよりまねく畔の小薄

九十三番

左　初春霞

今朝みれはきのふの雪の薄くもりそのまゝ春にたつ霞哉

右　山紅葉

龍田山ゆふつけ鳥にむら鶏いかなる色を秋にとふらん

九十四番

左　霞隔遠樹

そらの海や霞のみほのみるふさに山松なひく嶺の春かせ

右　暮秋雨

行秋のわかれやしたふ（よいかにイ）龍田姫泪色こき木々のむら雨（くれなゐイ）

九十五番

左　殘花

色も香も名殘の花そ月ならは此一もとや有明のかけ

右　十三夜月

相生の松をためしそ今宵名のまた高砂や住の江の月

九十六番

左　靜見花

咲しよりなるれはさすかめかれつゝ花にねふれる木の本の宿

右　秋夕

いかにともおもひの家を出ぬ身に猶もとさすや秋の夕暮

九十七番

左　初春祝

雲井にて神の七代に立そむる春をもなれや白鶴の聲

右　早秋露

月出よ難波の芦の亂れなく露の玉しく初秋のそら

九十八番

左 霞春衣

宮人の柳櫻のうへのきぬひとつにはへて立かすみ哉

右 遠荻

いかゝねん遠山鳥の荻のはに秋風たちぬなかき夜の夢

九十九番

左 梅移水

咲梅のうつろかゝみの波のしは花も老木の池の春かせ

右 待月

心ありて夕の雲はいなは山さてもつれなき嶺の月影

百番

左 殘花

暮て行春の心の岩木かなさきてなとめそ山さくら花

右 夢籬月

ほしきよき籬の山の夜半の月てらすはいつれ白菊の花

百一番

左 立春

日の本にくもらぬもしの關こえて四極に道しる春やきぬらん

右 七夕天

天にしてめかみおかみと分置やふたつの星をはしめなるらん

百二番

左 朝山霞

出る日のひかりに山は空はれて西なる嶺にたつかすみかな

右 萩露

花の色は枝にこもれる秋にまつ露のたまゝく庭の萩原

百三番

左 雪中若菜

はらひえぬかしらの雪はそのまゝにありて翁のつむ若菜哉

右 初秋月

ゆく秋の雲まにほそきあしたまてなれてみよとや三ケ月の影

百四番

左 春月

春雨に霞の袖やくちぬらんはるれはたえてすめる夜の月

右 秋月

なかれてのいそのかみ代の秋の月ふるき世のともみえぬ影哉

百五番

左 雲雀

散花の雲路のひはり聲おちてわか床たとる雪の淺茅生

右 田家虫

小山田のかりほもさそな苅はてゝ秋もいなこのきみ（宿イ）そ稀なる

百六番

左 花下忘歸

さかぬまも花にひらけし色もなくわかれて嶺にかへる雲哉

右　遠郷月

月にうき袖の時雨もましろらんむら雲過る遠の里人

百七番

左　三月三日

咲桃のなかれにうかふうたかたも花に色こきけふのさかつき

右　江上月

難波かた明ろか波路月おちて入江のさとに庭鳥の聲

百八番

左　夜花

空にみぬおほろ月夜にむかふ哉花を光のやみのうつゝは

右　野虫

露分しむかしは遠く跡ふりぬたれ野の宮に松むしのなく

百九番

左　礒花

よしやふけ礒山さくらいはほにも花さく波の春のうら風

右　河月

龍田河月の桂そ中たゆる波しくかけに雲もなかれて

百十番

左　戸外藤

諸人の言葉の花を松の戸にまつ色ふかし春の藤浪

右　暮秋雲

行秋をしたふと見れは夕ま暮かへるところもしらぬ雲かな

百十一番

左　立春

諸人の待えてあふく日の本の國のあるしとなれる春かな

右　野萩

たをやめの秋のやとりと萩の露錦に玉をみかく野へかな

百十二番

左　雪中鶯

雪の中に鳴や鶯夏もこはまたうの花に山ほとゝきす

右　月前秋風

ふしのねやすみのほる月に秋の風しはしは雪に木枯の聲

百十三番

左　林花

みし雪は木々の林の春の風うつむを花になす匂ひ哉

右　竹間月

雲の上とたれかみさらん影なひく竹の苑生に月のみや人

百十四番

左　霧中見花

くれすとも宿かせあまの家さくら花の波まにみるめかりてん

右　故郷月

波かたふるき浦の芦の葉に夢の跡とふ月そのこれる

百十五番

左　若草

草の原とはぬ限のたれとてか春にかれ葉の猶ましるらん

右　萩露

宮城野やともしの跡に鹿そなく涙や萩のくれなゐの露

百十六番

左　池柳

さほ姫のむかふかゝみに亂れかみかゝるや御庭の池水

右　七夕月

ものゝふのかすかかふとの星合に同し雲まの弓張の月

百十七番

左　春曉月

はらひえぬ風や音羽の山かつら霞をかけて月そかすめる

右　秋夕

うき事も我いくほとゝなくさめて思ひそすつる秋の夕暮

百十八番

左　梅移水

咲梅の匂ひを鶯のおもひ羽と同し色しく庭の池水

右　深山見月

きひしさの限りを月に太山風なれもしつまる槙のかり庵

百十九番

左　惜春不留

かすむとも誰かは春にかり衣けふはかりにてくるゝ空哉

右　暮秋霜

かきりあれはよもきか髪も霜ふかし老となりてや秋の行らん

百廿番

左　暮春夕

くれて行いまはの春の夕かな花は匂ひを袖のかたみに

右　暮秋野

槙の松つゐにかはらて行秋や枯野を分る霜の淺茅生

夏冬

一番

左　首夏風

花の香のわかれをしるもうちま山衣はかへし袖の朝かせ

右　初冬朝

冬やけささゝ分る朝の太山風袖をあまたに雲そこえくる

二番

左　五月雨

山河や松も檜原も雲の波みなむもれ木の五月雨の比

右　松雪

この比は雪にひらけて高砂やさくらにもれし松のはもなし

三番

左　六月秡

御禊河老のみつゑを又そへてあさちすかぬく袖の夕波

右　歳暮

なくさまぬ身のならはしに年くれぬかくてやつゐに更科の月

四番

左　貴賤更衣

夏はけふきその麻衣あさの袖人の心もかはるをそみる

右　時雨知冬

冬きぬと誰も都にしら鳥のとは山こえてふるしくれかな

五番

左　新樹雨

藍よりも山は青根か嶺の雲むら雨はれて色そ涼しき

右　残雁

三吉野や田面の雪のはなに雁むかふを冬とふゝく山哉

六番

左　暮郭公

時鳥花鷲のたかねよりあをはの山のあけほのゝ聲

右　水鳥

生田川跡なき波にいにしへのわかれを鴛のひとりなく聲

七番

左　夏[illegible]

夏山やしくれてましる松の風さてそみとりを秋にそむらん

右　落葉

きのふかもこのめはる雨ふるしくれ程なき夢にちる嵐哉

八番

左　野螢

打けふり春焼野火の消やらて猶此比もちる螢かな

右　千鳥

川千鳥いもにあふ夜のたかなかを月にをくりて聲わかるらん

九番

左　夏夕月

風かろき蟬のは山の夕月夜たれもこのまにうすき影哉

右　雪散風

曇りえぬ嵐は雪を卷向のひはらに遠きいりあひの聲

十番

左　夕顔

誰かみるおらてそのまゝ夕顔の花をあふきに出す月哉（夜の月イ）

右　寒草催

夏やいつは山としける野邊の草かれて麓の塵となりぬる

十一番

左　瞿麥

置露も哀やかくろ夕顔の花よりつたふ宿のなてしこ
右　寒草
淺茅ゆく庭のやり水音たえてねやまてかゝる夢の浮草
十二番
左　夏虫
竹の子のおひゆくするはしられともまつ顯るゝ螢の聲哉
右　陣嶺雪
降雪にまたそかたふくさく花の夕貌おもき賤か庵は（家イ）
十三番
左　河螢
來ぬ秋の星合みれは行螢かた野にこゆる天の河波
右　千鳥
暮渡の夕波千鳥われも世をいとふ枕そ聲ならふみそ
十四番
左　閑中扇風
花もなき門に槿のみへかきねいつしか風をならす比哉
右　炭竈煙細
里人の道ふむ雪のひと筋にけふりもならふ横の炭竈
十五番
左　朝更衣
玉手はこ明れは夏の蟬衣こそのひとへをまつ出しぬる
右　朝時雨
神無月いつれの冬のかたみとてあしたの雲の時雨行らん
十六番
左　新樹
たれかきる雲の衣の山藍に紅ましる木々のわくらは
右　海邊松雪
浦風におれかへる雪の末の松冬はかさねてこゆる浪哉
十七番
左　雲間郭公
むら雨の雲のふるまひかねてよりしるくも過るほとゝきす哉
右　湊千鳥
よる舟の棹とりなをす音深て湊の月に千鳥鳴也
十八番
左　照射
苦しくもともしの鹿のは山陰なかぬもなくにまさの葉かつら
右　冬鳥
霜の後松のためしを朝からすひとりあらはす雪の中かな
十九番
左　夜螢
いる月をしたふ心やふかき夜の空にもえて行螢かな
右　[illegible]

枯はつるたからき中に殘すらん眞葛か原に鷹の玉章

廿番

左　夏月

契あれやうすき衣もいとはしくもりて身にそふ月そやとれる（のてイ）

右　冬月

冬來ぬと月の桂もむら雲に散かけみえてふる時雨哉

廿一番

左　五月雨

芳野川たきつみかさにちる泡や花に嵐の五月雨のそら

右　時雨過

年月の過るも夢の村しくれおとろくほともなき枕哉

廿二番

左　氷室

雲のなみなかれ出たるふし川の月やいたせる氷室成らん

右　薄氷

明行にこほろか庭のさゝれ水やとれる月の影もうこかす

廿三番

左　郭公稀

郭公みつかひとつに聲そなるたかかねこともしらぬ枕に

右　冬鳥

道野邊のかきほのうはら傳ひきてしふく嵐にしとゝ鳴之

廿四番

左　樹陰蟬

むら雨のきほへる雲に鳴蟬の聲さへきゆるは丶木々のかけ

右　時雨過

たれも世をやすの渡りの河風に時雨なれてや雲も行らん

廿五番

左　待時鳥

月待と人にいふへき契りかは雲まにいそけやまほとゝきす

右　鷹狩

狩くらしたとる眞柴を立鳥の近き羽音に我そおとろく

廿六番

左　瞿麥

春日野にはるつまこめしわか草の露のゆかりや撫子の花

右　落葉

葉の落る梢いまはの夕にてあらしのはてを聞枕かな（かなわれもあらしに身をそおとろくイ）

廿七番

左　氷室

凉しさをいつまて袖にかすか山ふるき氷室のまきの下風

右　月前雪

吳竹の雪の葉分をもる月の光うちゝるこすの下かせ

廿八番

左　隣家夕顔

事とはて中垣こえぬ人ならはしらなみの名や花の夕貌

右　杣山雪

山風の雪はとふさに丹生の川杣木たをすや下折の聲

廿九番

左　故郷橘

難波津に匂ふものからさくやこの花たちはなも昔戀らん

右　早梅

春の月かすむならひやいとふらんまつさく梅の匂ふ光は

卅番

左　照射

筑波山ともしを秋のおもひとやこのもかのものよるそ悲しき

右　瀉千鳥

いもにこひたれ象瀉の夜半の月影かたふきて千鳥鳴聲

卅一番

左　螢

あまかける螢よさても人としてなとひかりなき道まよふらん

右　鴫

浪の上に青葉ちらして鴫そゐる山ははかひのはるゝ嵐に

卅二番

左　蚊遣火

風ちらす煙のうへの蚊の聲をはらふあふきや軒端もる月

右　冬田霜

あらゝかに吹とも民のいとはぬやひつち花さく霜の朝かせ

卅三番

左　郭公遍

いつのまに聲もしけみそわくらはにとひてまたれし山郭公

右　千鳥

わかの浦や我も心のひくかたにしはしおりゐる友千鳥哉

卅四番

左　氷室

時しらぬ山より出るひむろかも氷になかは雪そなかるゝ

右　爐火

人ならは恨やましはふすへたく煙にむせふ泪おちつゝ

卅五番

左　採早苗

せき入てなひくみとりの露の玉月より水をとる早苗哉

右　歳暮澗水

年木こるをのゝ音して梅さきぬ初花いそけ谷川の水

卅六番

左　夕郭公

たそかれの宿を水鶏にたゝかせてわか名のりする時鳥哉

右　屋上霞

きほひくる風に霞のなりたかしやかてなりやむねやの上哉

卅七番

左　浦夏月

かつらかた月のあよみもいかゝせん波まに遠き海の中道（中のイ）

右　江寒芦

芦筒のうすきを霜に顯はして入江によはき浦風の聲

卅八番

左　墻夕顔

かきほあれて露を泪にかたふきぬ（あらはしイ）誰を恨の花の夕貌

右　枯野霜

朝日影とくや霜はら打けふりこぬ春かすむ野邊の冬かれ

卅九番

左　故郷橘

匂ひくるはなたち花のもとの身にあれてな見えそ故郷の月

右　冬梅

匂ふなり暮行年を待かぬる春のつかひや梅の下かせ

四十番

左　餘花何方

尋ねてもおらはや花をたちかへてうすき袂は身にそ匂はん

右　雪中孤舟

よりこかし波のみあれて濱庇雪も友まつ沖津舟人

四十一番

左　山照射

哀共よしや見さらんともしけち山のかせきの身をかへてこそ

右　遠近炭竈

山姫の尾上へたつるむかひ火やともに炭燒煙なるらん

四十二番

左　盧橘

契りあれや花たちはなの花とみの共に匂へる池の蓮葉

右　早梅

年の内に春もやこえてこもりくの初瀬の檜原梅かゝそする

四十三番

左　納涼

ぬきかへる袖をそなをす秋のくる風のつかひに心をくとて

右　山路雪

板ひさし雪のあれゆく關すへてたれかまたもるみのゝ中やま

四十四番

左　更衣

たちかふる袖はあれともうらもなき心とみるそ人にまれなる

右　嶺時雨

嵐吹雲はいなはの嶺の松さても時雨を殘す聲かな

四十五番
左　浦夏月
湊津浪うら風はやくさすしほにかけ（のイ）もをくれて（ぬイ）短夜の月
右　河冬月
影うかふ雪も氷もふし川になかれてあまる冬のよの月
四十六番
左　河五月雨
さほ川やいつれのとしの（きイ）水かさより名にあふ山そ五月雨の比
右　河薄氷
空蝉の一へのきぬを波のあや氷りて残す中川の水
四十七番
左　瀧下螢
瀧殿にともすはしらす石の火を打出す波の散螢かな
右　暮山雪
伊駒山はれ行雪のうへこえて夕くれたとる嶺の浮雲
四十八番
左　叢螢
草高み端山に見れはよる鹿のともしもありてすむ（あるイ）螢哉
右　千鳥
ねさめうきかはたれ時は老の袖なみたにありと千鳥鳴之
四十九番
左　浦夏月
いそけ月この比とてや宵のまを吹ゐにやとすよはの浦波
右　山家雪
のきはよりかきほをみれは散積る木の葉もなかはましる雪哉
五十番
左　水郷早苗
夕ま暮桂の里にやとりくる月をさなからとるさなへ哉
右　寒草霜
置渡す霜の枯葉に松のたね草にもありと残るいろかな
五十一番
左　礒夏月
出るよりはやく浪分こゆるきのいそくか月も短夜のころ（そらイ）
右　枯野雪
むさし野のすゝき高かや埋れてあまたの山のならふ雪かな
五十二番
左　河夏月
明やすき比とはたれか太山河岩こす波の雪の月影
右　冬暁霜
老ぬるか遠山鳥のやまかつら月影しろくまよふ夜の霜
五十三番
左　夕盧橘

暑楽の夕の空にたちはなをつゝむもしるく袖の香ぞする

右　網代尋遊

よる波はたゝこゆるきぞ網代木に肴もとむる宇治の里人

五十四番

左　荒和祓

御祓河身のうたかたは年へても浅茅ぬ(たゝよふなみのイ)かつき越るわそなき

右　埋火消盡

埋火を曉おきにみましかはけさひはとらしはいそぬるめる

五十五番

左　月前郭公

しかの浦やたか世したひて郭公ふるき都の月になくらん

右　篠上霰

一ふしもなき身よさゝの上にたに言葉の玉をなす霰哉

五十六番

左　竹亭夏來

すむ人のなをき心の竹の庵涼しと見てや夏のきぬらん

右　河落葉

龍田河散しく波を水かさにて山は木の葉のふる時雨哉

五十七番

左　江上夏月

秋よいかに明やすき月の枕たにさひ江に更る夜半の舟人

右　追日待雪

徒に吹や嵐の飛鳥河きのふも雪のそらたのめして

五十八番

左　餘花

花の香の残る(かイ)しけみよし(イ死)らす世に暮にし春や身をかくすらん

右　時雨

山風の日影に過るむら雲にあまりてしはし降時雨かな

五十九番

左　樹陰蟬

蚕のかるみるめなききさの松の蟬なとわれからとよを恨むらん

右　寒松嵐

しもなからしふく嵐にそめますや冬に色こき岡のへの松

六十番

左　郭公

月なからもりくる閑のあれまくも惜からぬ夜の時鳥かな

右　閑中雪

竹をうつ音にはあらて雪折にねふりをさます床の上かな

六十一番

左　簾葵

こすのとにかくる二葉の草の名にたれあふ中に神祭るらん

右　寒草嵐

いとひこし春のあらしの冬に來て吹に花さく霜の淺茅生

六十二番

左　盧橘

風吹は一むら薄(寒イ)橘に來ぬ秋まねく袖の香ぞする

右　冬山

霜しろくまつ色かへて槇檜原難面山も木枯の聲

六十三番

左　夏雲

移り來て卯の花山はかゝるなり春は櫻に嶺のしら雲

右　原雪

たか中そ秋風さはく眞葛原根ははれて積る雪かな

六十四番

左　螢近飛

ぬるか中にいりきて閨の火をとるやともすは消て飛螢かな

右　古寺雪

法の師のはらふとみれはかさき寺松になたるゝ雪の山風

六十五番

左　瀧邊蟬

聲涼し瀧のしら糸布引に織つゝくるや蟬のはころも

右　網代霰

闇き夜に後のむくひをまつしるや網代守身を打霰かな

六十六番

左　納涼

まつかもとあふきは風のいつみにて涼しくむかふ庭のやり水

右　歳暮

春をまつ人の心を恨てや世はうきものと年の行らん

六十七番

左　新樹

草も木もひとつに茂る色ぞこき空はみとりのあまのかく山

右　落葉

常盤木も嵐(ひとつイ)にちらは谷をうめ嶺もたいらに山やなるらん

六十八番

左　郭公何方

郭公いつれの雲ぞ山彦と(のイ)二聲過るむらさめのそら

右　古寺夕雪

打拂ふ袖に夕はあらはれて墨染うすき雪のふるてら

六十九番

左　月前螢

さらしなやなくさめかねしおもひかも月影みれは行ほたる哉

右　古寺冬月

寺ふりぬたれもむすはて月ひとり水なき池に氷をそしく

七十番

左　蚊遣火

偽のありとふすふる妻ならて涙袖せく宿の蚊遣火

右　曉爐火

さえ侘るうき身にいつかむかひみんその曉の埋火のもと（かけイ）

七十一番

左　水上螢

あはさりし夜々のおもひの螢かも岩もる水によるの光は

右　遠山雪

九重にしらぬとこよを日にそへてちかくよせくる嶺の白雪

七十二番

左　夕立

曇りきて過行庭の夕立をしくれにつくる（もイ）軒の松風

右　雪

老か身よ冬はいつく（さなからイ）もとこよかなかしらの雪に雪をかさねて

七十三番

左　夏鳥

鳴蟬をしくれにきけは枝たはに雪をなひかす鷺そむれゐる

右　月前時雨

月に雲風にまかする空はれてやすく世をふるむらしくれかな

七十四番

左　故郷郭公

錦たつむかしの人や時鳥聲のあやおるふるさとの空

右　寒閨霰

みかきもつ心の玉を閨の戸にしるや霰の竹を打聲

七十五番

左　橘薫袖

かひなしや花たち花をすみのかになかはもてけつ袖の上かな

右　瀧邊時雨

雪ちらす那智の太山の瀧波を雲（雪イ）になしてふる時雨かな

七十六番

左　夜河篝

嶋津鳥うき世を浪の上にみよ魚と水とにかゝり火の陰

右　窓前雪

灯に（われ壁にイ）むかひてねふる窓ちかく又かたふくや雪のむら竹

七十七番

左　雲外郭公

湊河雲しく波のほとゝきすなかすはひとつ（ともにイ）にほの通路

右　初冬時雨

山かせや紅葉の錦冬の來てはつるゝ糸を時雨にそ見る

七十八番

左　鵜河

魚のすむおもひをしらて島津鳥いけるをはなつ波そはかなき（かなしきイ）

右　庭上雪

たれもみよ雪もとしふる庭の松つもれは人の老のすかたを

七十九番

左　更衣

はころものうすきにかへて人毎に天にすむ世の夏は來にけり

右　落葉嵐

遠近や（にてのはみたれて信濃路や山をあさまになするらしかなイ、）いつれをみるも淺間山冬は木の葉を拂ふ嵐に

八十番

左　夜橘

木のまよりもるかけ匂ふ橘に天津袖しる月のみやひと

右　氷初結

今朝みれは曉起の花たなに雫もこほるあかの水かな

八十一番

左　行路夏衣

かすましな旅たつ春の夏衣けさはいかなる色にかふらん

右　時雨告冬

世に吹や嵐の謳風ふゆの來てさらにいとまもなき時雨哉

八十二番

左　故郷郭公

なには潟ふるき都にさくやこのこゑを花なる郭公かな

右　袖寒月

吹みたす袖山風は冴（すみイ）のほる月をとふさの木のまもる影

八十三番

左　江五月雨

淺き江に捨たる舟の洲にゐるもうかふ道（よきイ）ある五月雨の比

右　驛路雪

降つもる山こそあらめ鈴舟も浪に雪こすすまの浦風

八十四番

左　新樹露

たれかきる山はみとりの雲の袖五月の玉をかくる朝露

右　故郷初冬

秋はいぬたれすめとてか故郷を落葉にかこふ冬のきぬらん

八十五番

左　島螢

事とはむ闇路をてらすたねやこれ螢を波に横の島人

右　初冬雨

冬きぬと風もならしの躑野邊にむら雲かけて降時雨かな

八十六番

左　納涼

筑波山吹こす風に涼しさも嶺より落るみなの河かな（なみイ）

右　神樂

雲の上の庭火によるの韮うたへと秋の面影もなし

八十七番

左　橋螢

天の河星のおもひの螢かも夏にもわたる鵲（せイ）のはし

右　網代

世を宇治にたれも網代を守身哉おもひの篝それもかはらて

八十八番

左　首夏朝雲

夏きぬと明れはたれもきぬかさや日影も（にイ）うすく雲そ（、イ）かくれる

右　爐火似春

春そこれ焼火にあまた（たれもイ）圓ゐして心を花にひらくさかつき

八十九番

左　河夕立

天の河水かさよいかに雲の浪かた野にあまる（くたるイ）ゆふたちのこゑ

右　木枯

冬の色は草にも木にもむなしくて時雨ひとつに木からしの聲

九十番

左　夏草

鹿やよるさゆり花さく夕月夜ゆすえかへしてともす火のかけ

右　冬雲

年の暮雲も世にふるあしなみの更にひまなき雪よ霰よ

九十一番

左　家々納涼

山ふかくすまはや行て松かもと谷にくたれは庭のまし（やりイ）水

右　池水半氷

水は水氷は氷けさみれは益田の池のます方そなき

九十二番

左　行路夏衣

布引や瀧ついはほの苔衣かへぬも露のうへそ涼しき

右　時雨晴

衣ほすさほ河はれて行雲の山はみかさをふるしくれ哉

九十三番

左　納涼

瀧殿はさらにひむろそ結ふ手の氷は袖の上の月かけ

右　竹雪

よしやわか千代をこめたるよはひたに雪にかたふく庭の村竹

九十四番

左　雨後夏月

心ありて涼しくはるゝ村雨にまたれてみゆる（いつイ）十六夜の月

右　月前雪深

ふりつみてかたふく雪にふし待もはやくそ出る庭のむら竹

九十五番

左　鵜河篝

鵜舟さすほかけ匂へる梅津河花にはあらて闇そあやなき

右　落葉風

山姫の心言葉の散空にうへなき風のすかたをそみる

九十六番

左　閑扇

つまこかす是もあふきそ空焼の煙も匂ふねやの月かけ

右　深雪

雪高き天のかく山出る日に身のしろ衣いくゑほすらん

九十七番

左　黒螢

飛ほたるひとつふたつの影ならは夜半にひをとる宇治の里人

右　松雪

さえ〳〵て積るからへの木枯に雪の聲きく庭の松か枝

九十八番

左　首夏

難波かたはなとり過てあし垣や誰もひまある夏は來にけり

右　初冬時雨

冬の來て柳櫻をひらくへき花のたねまくむら時雨哉

九十九番

左　夏月涼

涼しとて今宵はならす風もなしあふきをあくる月にまかせて

右　河冬月

雲ゐよりひとつにおちてみなの河月は氷の散あらしかな

百番

左　山家夏月

はかなしな柴の庵に竹の垣わかすむほとも短夜の月

右　月前雪

これそ此積れは人のそれならぬおいその森も雪の月影

百一番

左　夏夜待風

秋やいつ月待ほとの袖に來てふけかしゝはし荻の上かせ

右　雪埋山路

うつめにし心木の葉も道たえて色なき比そ雪の山かせ

百二番

左　雨中盧橘

春ならは消る水かさを雨にみんはな橘の雪の山河

右　海邊初雪

難波かた今朝こそつゝけ白波のあはとはるかに嶺の初雪

百三番

左　魂郭公

にはつ鳥明るを告る空に又をのか時しる時鳥かな

右　樵路雪

山人そふるきをかたる都にはつもらぬ雪をしはに残して

百四番

左　鵜河

島津島宇治のあしろによるひをのおもひをまたや篝火のかけ

右　神樂

あふせあらは空にやめてん天の河星うたふ夜の雲のうへ人

百五番

左　菖蒲

かれ〳〵にみえつる夢の浮草や袖にかたしくあやめなるらん

右　枯野朝風

春日野のかのこにちりて朝あらし山はふるともみえぬ雪哉

百六番

左　餘花

山櫻人の心のあかしとて夏くはゝるになを匂ふらん

右　峯松嵐

山かせの松の葉はらふ朝霜にむら〳〵くもる岡野邊の里

百七番

左　初郭公

ほとゝきすたれ待とてか歸りくるいなはの山のこそのふる聲

右　海邊雪

和田の原みぬもろこしも浪にきておもかけうかふ雪の遠山

百八番

左　夕早苗

にきはへるいなはの雲の夕煙又いやつきにとるさなへかな

右　河氷

みなの河雲の浪まの月なからみねよりよもにしく氷哉

百九番

左　卯花初開

つもれ猶吹こす風も寒からすうの花山のみねの初雪

右　遠山初雪

霞たち霧のへたつる山を今朝うつみあらはす嶺の白雪

百十番

左　水風涼

さえ〳〵て冬の風こそ袖にふけむすふひ水とならす扇に

右　暮山雪

うつみなく山こそあらぬ空はれて夕暮かくす四極の山哉

百十一番

左　郭公一聲

辛崎の松もやゝとりほとゝきす漕行舟のあとの一聲

右　雪中爐火

冴あかす夜半ともしらすあたゝかに松をは雪の埋火のもと

百十二番

左　鵜河篝

たれも身をたのめのちせをうかひ舟晴きに入もかゝり火の影

右　早梅開

ききつゝけひとつの花に初春を冬よりひらくあめかし（よもの梢山イ）た哉

百十三番

左　水上螢

うき草にほたるなかるゝ鵜飼舟ともすかゝりに庭のやり水

右　夕木枯

夕ま暮松にやとりをたのみきてわか名をかくす冬の山風

百十四番

左　郭公一聲

郭公みのゝを山の松にきて聲も（はイ）たくひは（もイ）なき嵐哉

右　島千鳥

たちわかれなくや千鳥の妹か島月をかたみの有明の聲

百十五番

左　馬上蟬

駒とむる一木のかけに鳴蟬の雨にはあらて聲そしくるゝ

右　冬雲

雪あられいつれのためそ中空にまつあしはやき雲の一むら

百十六番

左　簟中更衣

たちかへて薄きうちめはこすのとにしらぬもしるき衣の香哉

右　時雨

さためなき嵐のやとに聲すきて松にとゝまるむら時雨哉

百十七番

左　卯花似雪

松たてるうの花山の夕けふりさらによそめは雪のすみかま

右　寒草霜

さえ氷る嵐もよしや朝な〳〵かれて花さく霜の淺茅生

百十八番

左　初郭公

ほとゝきす櫻（そこさくらイ）の花を鶯の雪のふるすと聲しのふらん

右　淺雪

天つ空くもるはかりをけちめにてたゝ朝霜に（のイ）ふかき雪哉

百十九番

左　湖邊螢多

風にちる螢かほしか高島やかちのは袖のくらき夜もなし

右　爐邊閑談

とふ人もかたりそあかす我思ひ世のなけきをは燒も盡さて

百廿番

左　六月祓

みそき河淺茅すかぬくはては又わか身に越ゑ老の波哉

右　歳暮

夢かさはきのふの春をあすか河送りむかふるとしの暮哉

戀雜

一番

左　初戀

みやこをはけさそ旅たつわか思ひ忍ふも遠きあまのたくなは

右　曉鷄

心なきなにの恨[思イ]そ龍田山夕つけ鳥に雲のわかるゝ

二番

左　寄天戀

さてこそは空をは人のなかむらめ天と地との戀をはしめは

右　山家雪

いて入はあらしなはてそ嶺の雲なかはとこかす庵のさゝふき

三番

左　傳聞戀

水上の山路よいかに菊の水すえのなかれもそてそ匂へる

右　旅宿見月

月はさそやとりかねてや曇るらんいふせや土に賤か菅こも

四番

左　寄月戀

天津空袖の涙に雲とちて心のみちにまよふ月かな

右　岩松

すむ水に同し[もイ]みとりの岩ね松よせこし浪やたねと成らん

五番

左　忍戀

日にそへて身のおとろへそますかゝみ我にしられぬ心とも哉

右　旅行鐘

鐘の聲いつの契りにしたふらんとまらて過る道のへの宿

六番

左　寄山戀

いにしへのおもひや猶も淺ま山けふりたてゝもみえん戀かは

右　閑居松風

松の風ふる葉亂れて板ひさし音もさなから降時雨哉

七番

左　憑媒戀

遠淺にいかりおろして人はこす我身こしてよあまのはし舟

右　旅宿嵐

見し夢やふもとの野邊にまよふらん枕を越る嶺のあらしに

八番

左　寄舟戀

かよひこし世々の浦風したひきて猶すて舟をくたく波哉

右　野篠

有ふれにうきふし繁み我身よにすまてたゝにやゐなのさゝ原
九番
左　誓戀
玉くしけ鏡をみてもおもふかなつらきまつらの神のこゝろを
右　慶賀
尋ねみよ蓬か島そわかの道心をのへて人は老せす
十番
左　寄笠戀
むすひをく契なりともいかゝせん笠のかりての隠れはてすは
右　月前鐘
初せ山すみのほる月をおほろ夜の春にかすめる鐘の聲哉
十一番
左　契久戀
夢かとよたのめしなから久堅の月もそのよは曇りはてゝき
右　夜過關路
我にみる夜の關よいかにともこゆる道なくまよふ闇哉
十二番
左　寄貝戀
まさこ山くたけてましる忘れ貝いつの世まてか浪もかけゝん
右　海路
われおきつ浪をはこかていそ物に命をつなく舟そはかなき
十三番
左　催見戀
立つゝく道行ふりにさはかりをかへり見すれは人そまきるゝ
右　山中瀧
山姫のおもひをたかくみ熊野やみつの煙に瀧の岩波
十四番
左　寄花別戀
心なき夜半の嵐よ人そみん花に雪ふむきぬ〳〵のあと
右　松樹增色
二葉よりそめて幾世の霜の松ことしも春にそふみとりかな
十五番
左　忍逢戀
陸奥やしのふのおくにこえそ行ありともきかぬ逢坂の關
右　旅店
故郷もおなしはにふのすか莚身はならはしのいふせくもなし
十六番
左　寄潟戀
たちかへりいつ浪かけん遠ひかた眞砂の上のあまのすてふね
右　岸頭竹
いそきゝて舟待ほとのやすらひに馴のむちきる岸のさゝ竹
十七番

左　時々見戀
身をうらにはかなや蚕のかいつもの汐のみちひにひろふ計は
右　眺望日暮
ふしの根は残る日影を暮はてゝたかふす雲そ小夜の中山
十八番
左　寄雲戀
夕ま暮しはしたな引雲きえて心のやとる契りたになし
右　暮雲
ゆふは山うきて世にふる人心さそひかれてや雲かへるらん
十九番
左　契戀
むすへとも心の秋の亂れはゝ又ふしわふる露の下荻
右　里竹
呉竹の垣うちありて家もなしたれ世をうしと住はなれけん
廿番
左　寄虫戀
鳴蟬の涙しくるゝ袂にてよるは螢のむねそくるしき
右　樵夫暮
夕ま暮かへるや木こり息杖の石に音する山の下みち
廿一番
左　難忘戀
月をめて花をみるにも面影のまつさきたちてそふおもひ哉
右　嶋松
つらき世をはなれ小嶋のひとつ松われ宿からん陰なへたてそ
廿二番
左　寄杖戀
くるしさをしはしやめてよ鳩の杖よはり行身の陛たてすとも
右　霧中舟
一夜ぬる河邊の舟のあさのまに里の子出てまつそおりのる
廿三番
左　祈戀
いつかさて憂身をかへん生れきてたまたま祈る道そはかなき
右　海邊松
海士のたく烟もなみに立そゝふこや浦島かはこ崎のまつ
廿四番
左　寄遣水戀
はるけやる庭のやり水やる方も涙に袖は草かくれつゝ
右　橋上苔
苔きさむ石にはあらて石の橋うたかたとむる波の下水
廿五番
左　秋久戀
秋をへて正木のきつな身のために又長月のそふおもひかな

右　故郷路

ふるさとゝとひしはいつそ道の草駒かふのみのあけまきの聲

廿六番

左　寄柏木戀

朽ぬへきのちのおちはやおもひをくその世に消し柏木の露

右　旅人休橋

岩つたふ水のなかれをしはしみてあとの人まつ山河のはし

廿七番

左　逢戀

こすの外にひとりや月の更ぬらん日比の袖の涙たつねて

右　山家花

めかれせぬうき世やいとふ花までも咲てひまある山の奥哉

廿八番

左　寄松戀

契りこしわか世もつゐに月讀の松のはらすき有明の影

右　不破關

あらせかし人の心も言のはもあはぬうき世そ不破の關守

廿九番

左　冬待戀

人心さためなき世を中空にをしへて過るむらしくれかな

右　河橋

八橋やくもてにかけて誰も世のひとすちならぬ道そくるしき

三十番

左　寄鐘待戀

契りきやひとつ嵐の松にきておもかけはこふいりあひの聲

右　霧中憶都

すみ田河むかしはさそなわかゝたをとふへき鳥も浪のうへ哉

三十一番

左　逢不遇戀

板ひさしむかしは月やもらさらんあれてくるしき不破の山風

右　江上舟

難波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる波のうへかな
（波に釣するあまな小舟うかふにしつむ道そはかなきイ）

卅二番

左　寄山恨戀

色かはる人の心のあはた山なか〱こえし關の岩かと

右　山館杉

山川やまへになかれてひとりすむかりほにおしき杉の村たち

卅三番

左　稀問戀

限りあれははなたち花に雪の袖又露はらふ蓬生のやと

右　夕鳥

むら雀聲あつまりてまたそたつねくらやあさき庭のさゝ竹

卅四番

左　寄衣戀

たちそめし月日はいつそ小夜衣うらみをそへて獨ふしぬる

右　河上鳥

夢の世をしるやえかはのふし柳ふさてねふれる鷺の心は

卅五番

左　卜戀

おとろふる末いかならん石かみもあかりての世は占や正しき

右　山居夕

さひしさもうきも限りはなき世哉太山おろしに夕くれの雨

卅六番

左　寄海戀

わかおもひ入ぬる礒のいつまてかよる渡しらて人をこふらん

右　樵路日暮

山人の眞柴やつゝく夕日影（闇くれイ）雲のは（みイ）らこく岩のかけみち

卅七番

左　契經年戀

むかしたになをそのかみの草の名よ分る山路の露のまもなし

右　河水清

かみに（もイ）身をあはせてたれ（君とイ）もきよくすめ心の水に宮川の波

卅八番

左　寄涙戀

泪河人のかよはん中たえてくれなゐなかすそてゝうへかな

右　田家雨

守人はいなはかりほの冬されにひとりしく（つイ）れをはこふ雲哉

卅九番

左　前世恨戀

しらすわか眞葛か原に捨し身の露や泪にきえかへるらん

右　古寺夕嵐

今も世にさそはましかは鷲の山かねを嵐の夕暮のこゑ

四十番

左　寄櫛戀

くしのはを心に引てかよへともわか手にかくろ黒髪もなし

右　樵夫歸

なけきこるうき世のさかよ山人も息つくほとは休むならひを

四十一番

左　憚人不逢戀

思ひ（かよイ）しはいつれのとしそふみをさへ明て（やすくイ）とをさぬもしの關守

右　江雨鷺飛

風むかふみなと入江のむら雨にふかれてかへる鷺の一つれ

四十二番

左　寄鳥戀

羽かはすためしにはあらて鳥の子をなとてかさぬる契なる覧（中と頼けんイ）

右　旅宿夕

日暮たりよしやとまらんうつの山蔦ちるあらし夢路ふくとも

四十三番

左　逢後増戀

漕むかふ人の心の高せ舟として中〳〵しつむなかかな

右　嶺上雲深

わたつみに見れはいくへそ龍田山嶺こす雲の沖つしら浪

四十四番

左　寄月逢戀

しるらめやねよとのかねをさきたてゝ今宵は出ぬ山のはの月

右　山家嵐

しかりとて又いつくにかいなり山松のあらしよ我ないさめそ

四十五番

左　閑戀

いかにしてかりにも人を三瀬河ひとり渡らぬ道はあれとも

右　羇中衣

草枕露しく野邊のぬれ衣身をうらならは名にやたゝまし

四十六番

左　寄塵戀

言のはに塵をたにともえそかけぬとこなつしらぬ中の垣ほは

右　田家鳥

旅人の行ての小田の鳴子なは引にまかせて立る鳥哉

四十七番

左　契待戀

ふけにけり秋をたのもにくる鴈の聲にもいとゝそふ泪哉

右　關路雲

引とむる袖にはあらてたつか弓紀の關山に雲そかゝれる

四十八番

左　寄竹戀

風吹はむなし契りを待かほになれもおきふす庭の村竹

右　羇旅

旅の空駒にまかするあよみたにくるしや後の身をいかにせん

四十九番

左　祈逢戀

袖ゆくはいのるにたえて初せ河ひとつなかれにかへる浪かな

右　古山幽栖

山もうしさていかさまに推のはのまきるゝ方もなきあらし哉

五十番

左　寄篷戀

浪風の篷にしたゝるともしひもおもひもけたぬ袖のあめ哉

右　名所松

からさきやたれを恨のそひはてすつゐに一木の松となるらん

五十一番

左　待戀

嶺の松心の色も暮はてゝ夜ふかき袖におつる山かせ

右　野亭鐘

我ならは野邊のさゝふきかりの世をたれにいさめん入相の鐘

五十二番

左　寄露恨戀

もらさしと露の玉まく葛の葉をさのみな吹そ宿の秋かせ

右　軒忍草

荻（萩イ）原やほなみをかけて軒の草吹やしのふの浦の秋風

五十三番

左　別無書戀

小夜ふかく人はわかれて朝鳥のあとのみ殘る庭のうす雪

右　曉眠覺

わか身また人のねさめにちかゝらんさきたつ夢のうかふ涙に

五十四番

左　寄蜻蛉戀

我身よにあるかなきかを契にてなとかけろふのもゆる思ひそ

右　窓前竹

吹かせの竹になる夜ハ窓の夢われもよわたる程そはかなき

五十五番

左　厭戀

玉襷世はいひしらぬあやにくにそむくをこふる心なるらん

右　旅宿嵐

今朝みれは嵐そあるし松かもといつれは床のちりはらふこゑ

五十六番

左　寄苔戀

さらは人心いは木になりはてよ衣の苔のいろにかされん

右　夕鐘

はかなしないつれの暮をとちめにてわれきゝすてん入相の聲

五十七番

左　思不言戀

年をへておもひそふかき山吹にせかれてむせふ井手の下水

右　對鶴倂齡

天にすむ人のよはひを君にみて雲ゐの鶴や庭にきぬらん

五十八番

左　寄花祈戀

いのるてふ神の心のまゝならは花やはちらんかたき戀かな

右　船中夢覺

わかるとてふるさと人の（やイ）袖ぬらすかひの雫に夢そさめぬる

五十九番

左　舊事戀

道の草幾世の夢にかれぬらんふるき枕にかよふおも影

右　山家木

薪こりならはぬ業をしゐのかけ身のおちふるゝ果そかなしき

六十番

左　寄鐘戀

寺ふりて道行人のつく鐘にまつとわかれの面影そたつ

右　山旅

雲の浪袖こそぬれねあら磯や嵐岩うつ嶺の枕は

六十一番

左　隔物逢戀

中垣やこなたにさくもひとつにて言のはかはす宿の朝かほ

右　對月聞鐘

すむ月に向ひの寺の鐘の聲むかしよいかにうちの山さと

六十二番

左　寄袖戀

わか袖はさ月の比にふの河袖ひけ浪の聲おちぬまて（にイ）

右　山家嵐

いとふ世をしらてかたるや軒の松聞はものうき山風のこゑ

六十三番

左　秋逢戀

うき中も秋をと山になしはてゝ逢坂こゆる杉の下道

右　園竹

吳竹の苑生の枕ふし侘ぬやすけなき世を告る嵐に

六十四番

左　寄雪戀

色ふかきみさほの松を君もみよしくれにたへて雪折の聲

右　海路遠

すみ侘ぬわれいつくにも送りてよ浪路分行沖つ舟人

六十五番

左　歳暮戀

春もこはすめる涙を又や見ん袖の氷にくるゝとしかな

右　山家鳥

世もうくはたれすまさらん（行てをすさんイ）山鳥の鳴聲きくも二親にして

六十六番

左　寄鹽木戀

われにうき君高麗人の帶ならぬ鹽木を取てからき中哉

右　林下幽閑

はかなくもかたらふ聲（にイ）よ鳥のきてならふ梢の夕暮の宿

六十七番

左　旅宿戀

たひにけさたれか水かさを侘ぬらん泪そへやるとこの山川

右　古寺松

室ふかくむかしをほえて攀折老かゝまれる松そ残れる

六十八番

左　寄鳩戀

われのみやむなし契りのそのゝ竹ふたつならへる家鳩の聲

右　田家鹿

よる鹿のいなはの雲の色かへてわれをしくれのもる夢路哉

六十九番

左　山家戀

夕ま暮袖をそほさんさひしさのひとかたならは露の山かせ

右　水郷芦

言の葉にわからうたかたを見るもうし芦火にそへよこやの里人

七十番

左　寄藻戀

はかなしやとこの浦風浪こえは玉もなひかんそこの黒かみ

右　曙嶺雲

かへりいる雲をとさしの嶺の菴あくるかはるゝ山かせの聲

七十一番

左　顯戀

袖したふわかれを人にみえてけり折ふし月は空にくもらて

右　苔為石衣

法の道にたれいらさらん石山や石もころもを苔ふかくして

七十二番

左　寄月顯戀

世にめつる月にはあらて秋今宵われも名にたつ袖の上哉

右　苔松年久

苔ふかみくち木のうへに生る松むかしをとふや山風の聲

七十三番

左　面影戀

いとふ身に人のはそひて（にイ）人になとわか面影のわかれはつらん

右　述懐

言の葉をおちはのほともまなひえぬ老木の陰そ更に戀しき

七十四番

左　寄神戀

手折えぬ泪にふしてとこやみや神の代つらき峯のまさかき

右　獨述懐

とふ人もなきさにたてるひとつ松つれなやいつの春を待らん

七十五番

左　隱在所戀

杉たてるかとにはあらて三輪の里市にまきれて人そとひしき

右　山館煙細（きひの中山谷河の水の煙をたれかゝ庵イ）

たれかすむ細谷川の庵ならし煙もめくるきひの中山

七十六番
左　寄夕戀
身をせむる戀のやつこの聲やこれたそかれ時の宿の松かせ
右　社頭水
たれもくめやとる月日はあらたなる神のみかけそ宮河の水
七十七番
左　秋旅戀
袖しほる秋のおもひの野山にて戀に旅たつわれを待らん
右　旅宿灯
かへにけさいかてそむけんたとりきてくらきにたのむ宿の灯
七十八番
左　寄書戀
形見とてしけく巻とく文のもしそれさへうすくなる契哉
右　浦鶴
いまはとてむかしいく世を忍ふらん我身吹ゐのうらになく鶴
七十九番
左　久忍戀
もえそめしはしめはいつそ我みてもひさしの草の軒の下露
右　曉雲
わかれかね離とぬる夜そわきも子かかつらき山の雲の亂れは
八十番
左　寄草戀
おもひたちて思ひのねせり君もみは御垣か原に身をや捨まし
右　寄月祝
あま照す神代のかゝみ雲の上に出すと見るや秋の夜の月
八十一番
左　不言恨戀
尋ねてもたれ宿からんしほこえて島に鐘つく浦の夕なみ
右　山寺隱雲
大ひえやわかたつ杣の山口につゝくや雲のはやしなるらん
八十二番
左　寄衣戀
心して夜半の衣をぬきをくになをも人香のとまる袖哉
右　故郷草
鶉島やむかしはさそな道の草色に花さく故郷の宿
八十三番
左　秋逢戀
ならはすもはつとやたしの朝風に心やすめてむかふ戀哉
右　古砌苔
所うる庭の蓬生秋もこはいとゝさしいる月もなからん
八十四番
左　寄橋戀

神代よりいく世の人のおもひ河かけしそつらきあまの浮橋

右　曉更灯

高野山後の佛に石の室ひらくをみはや法のともし火

八十五番

左　尋緣戀

琴の音にかよはゝ行て嶺の松風のしらへを松やとはまし

右　岸頭苔

苔の上に又そかさぬるさむしとはたれかいはほのつるの毛衣

八十六番

左　寄花見戀

心をは人にうつして山さくらみるにむかはぬ花の陰かな

右　披書知昔

橘にあらぬむかしをしるふみのかほるおもひやうちの山さと

八十七番

左　等雨人思戀

袖の露もいつれのかたかふかゝらんおもかけ分るふるの中道

右　春秋野遊

櫻かり秋は小鷹にたつ鳥のけはなものへにちるあらし哉

八十八番

左　寄草別戀

起て行涙やそむるみちの草なさへちのはの色にかれぬる

右　心靜延命

すましみる心の水の長閑さに老の浪よる身ともおほへす

八十九番

左　恨身戀

千世もとは人やはいのる長岡やさのみいのちの我そつれなき

右　幽栖

あらすなよ我すみすては松の聲ひとりそもらん宿の秋かせ

九十番

左　寄烟戀

むねにたつ烟をとはゝ引いるゝ袖のひとりと人にこたへん

右　晩鐘

山もとにふすとてさはく村鳥をしつめてくるゝ鐘の聲かな

九十一番

左　馴不逢戀

おきふしもおなし籬のたけのよをむなし契に何たのめけん

右　老後述懷

うき度に心によする老の浪こえてあまるや袖（涙なるイ）ぬらすらん

九十二番

左　寄槇戀

日數のみつもる思ひをよそに見は槇たつ山も色になひかん

右　懷舊

よしや袖むかしを遠く陸奥や月ものいはてしのふもちすり
九十三番
左　從門歸戀
三輪の山杉たつかとの夕嵐やとりもとらてかへる雲かな
右　深山狩獵
かり人の太山踏くれて弓はりの月のうさきの出るをそまつ
九十四番
左　寄秋山戀
我袖も中〳〵そめよ槇檜原さりとて秋にもれん山かは
右　岸頭待舟
たひの空われかの岸の舟ならてこの世にいそく浪そはかなき
九十五番
左　自重戀
雨やとりたちそふほとを契りにてはかなや袖をひく心かな
右　松蟲
よろつ木にたゝ一もとも音たかしあらしや松をはしめなる覽（もと一もとイ）（いかなる契イ）
九十六番
左　寄月恨戀
とはぬ夜を袖にうらみてふけゐかたおほくの浪をしのく月哉
右　閑居松風
人すまぬ池邊にたてるそなれ松風のなひかすまゝにふりけり（つゝイ）

九十七番
左　臥無言戀
こよひ人枕ならへてふし待の月も涙のつらき夜のあめ（いかにせんイ）（へやてある身をイ）
右　寄水釋教
あかの水うつしもて行花皿につたふる法のふかきをそしる（心イ）
九十八番
左　寄鷺戀
はれかたき泪の雨にみのけかせ袖はえかはそ鷺の一つれ
右　田家興
湊田や冬の日よりとまふつるにおくて刈おのうたふ聲〳〵
九十九番
左　欲別戀
いまはとて車をよする人のきてうちこはつくる明かたの空
右　逢懐言盡
わか身よに根は秋を限りにて冬に眞葛の枯葉たになし
百番
左　寄草戀
いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風ならね共
右　水鶏鳥
橋姫の水のかゝみやかほよ鳥とりとなりてそ影うつすらん
百一番

左　片戀

秋の葉の一つもそめぬ常盤木にこかれてならふ色そはかなき

右　島松

そなれ松むかしをしらはやとりかせ身は老鶴のよる島もなし

百二番

左　寄枕忍戀

うへのきぬをしやるほとにおとろくや枕ならへし中川の宿

右　旅宿嵐

へたつなよ月とふたりの中山に雲の衣をあらしうつこゑ

百三番

左　不逢戀

おひかたみきてこそかゝる憂世には我身生（生え、イ）かれ袖なしほりそ

右　歸中嵐

立かへり見れは嵐の嶺の松したはぬ雲そひとりわかるゝ

百四番

左　寄坂戀

人心秋たつ風になら坂やうらふくのみのかしは木の露

右　寄都祝

常盤なる花の都の天つ風にほはぬかたもなきめくみ哉

百五番

左　歎無名戀

かれねたゝしらぬ花さく藤かつらわれもなけきの庭の松かえ

右　海上夕雲

浪の上に人はかへりてあまのうけ夕ゐる雲そあまたならへる

百六番

左　寄原戀

さしもわかしめちとたのむ露の身を眞葛にくたく原の秋風

右　冬懐舊

身一つに世々を忍ふのたねとめていつれの草もかるゝ野（先イ）へ哉

百七番

左　別戀

すゝめつる恨そはるゝわかれてもなに心なき鳥の八聲に

右　山家水

今はわれ水をのみてもこゆるきのいそかてなとか世には住總

百八番

左　寄車戀

つゐにわか身をうち河のむな車けふりたてゝも誰かとはまし

右　嶺上雲

麓より積るはしらす雲のちり嶺いや高くみゆる空かな

百九番

左　晝戀

思ひ侘いねつるほとの夢路とへ我身くちたる木にたとふとも（たとれとてイ）

右　名所橋
道ありてみはやなからの浪の上山かつらきにくめの岩橋
百十番
左　寄月忍戀
ともし火はあれとも月のかたはらに出てかつみる露の玉章
右　松戸夕嵐
たか世をかわれ松の戸の夕嵐しもにかたふくかけそつれなき（となる身にイ）
百十一番
左　詞和不逢戀
山風にむかへは匂ふ聲なからおられぬ花の瀧（やイ）つ岩なみ
右　山家待友（宵と夕の松の聲イ）
今更にたれをか松の夕嵐われも一木と聲（そイ）ないさみそ
百十二番
左　寄獸戀
更（さらはイ）にわれ打ともさらし招くともよらぬかせきの中そはるけき
右　叢樹猿
さひしさはみねたつしかの聲よりも冬にましらの椎の下風
百十三番
左　俄變約戀
沖つ風まほふきかへていかりなは浪のたゝちにとまる舟哉
右　浦鶴鳴月
いにしへの跡は難波のみやこ鳥月にはあかて田鶴そ鳴なる
百十四番
左　寄秋露戀
露はらふ袖をやすめぬ秋の來て戀のはてしる夕間暮哉
右　山家惜花
花よりも我そあらしの松かもとさそはれやすき露の身にして
百十五番
左　深夜逢戀
更にけりいかにとゝへは宵の間は人鎭めてとうちそかたふく
右　閑居松友
露の身よ我きえはては宿の松たれとゝもにか年を送らん
百十六番
左　寄花戀
むらさきの色にはあらてかは櫻何をゆかりに匂ひきぬらん
右　旅宿月
苦しくはうちねにとてや曇るらん山路なかやとにおくる夜の月
百十七番
左　押濱恨戀
よる浪にさすか思ひをけたしとて身の業つらき海士のたく繩
右　野旅宿
明ぬとてはかなの夢や枕には月をのこしてゐなのさゝはら

百十八番

左　寄石戀

いかにして筆をもそめん紫の硯の石のかたきこゝろは

右　嶺雲

雨となりあしたに契る行衞とやいまもわかるゝ嶺の横雲

百十九番

左　非心離戀

おもひつく浪のいはほのあはひ貝あまの手にとる巾と成ぬる

右　旅泊夢

空蟬のわか世むなしきからとまりさてそはかなき夢通ふらん

百二十番

左　寄鳥別戀

月に鳴聲そと人にいひなせはきぬ〳〵いそく朝烏かな

右　貴賤祝言

みや人の日かけの糸も時つかせとき世になひく賤の小手卷

詠法花二十八品和歌

序品　今見此端與本無異

鶯そさへつりかはす瀧河や山は春ともとかぬこほりに

方便品　十方佛土中唯有一乘法

春の來ていつらはあれと吉野川花の名たかき山さくら哉

譬喩品　火來逼身苦痛切己

聞捨てなと出さらんもろ雨にかゝる思ひの家鳩の聲

信解品　於窓牖中遙見子身

窓ふかくはるかにみゆる竹の子のいつか我世の風になひかん

藥草喩品　現世安穩後生善處

わか緑春にさかへて霜のゝちまたあらはるゝ庭の松かえ

授記品　於未來世咸得成佛

色〳〵にうへしこのみは行末にみなあらはれて花そひらけん

化城喩品　至珍寶處有一導師

やまとちをはるかにのほる長閑やそれより高き九重の空

五百弟子品　醉酒而臥繫其衣裏

たひ衣身にさめかたくぬる玉のありかを夢としるまくら哉

人記品　踏七寶花

身を捨ているとはみえて灯の華をひかりに出る夏むし

法師品　於此經卷敬視如佛

さらにいま春にひもとく花そこれまきもく山の嶺のしら雲

寶塔品　如所說者皆是眞實

春の風岩まの氷とく水を空よりすます日のひかり哉

提婆品　即往南方無垢世界

わたつ海をはるかに出て雲の浪みなみにめくる月の影哉

勸持品　何故憂色而視如來

山風にしくるゝ色を更科やかてはるけん空の月かけ（月の影哉イ）
安樂行品　欲説是經當安住四法
木たちよき庭（ルイ）の梅かえ匂ひつゝ心の花を世にそひろむる
涌出品　是諸菩薩從地出已
浦風にうきすを出てにほの子のおほくうかへる浪の上かな
壽量品　常在靈鷲山
鷲の山遠くてらして其世にも雲かくれせぬ嶺の月影
分別功德品　聞世尊分別得法利者
うすくこき嶺の紅葉の村時雨うけをく露のほとそしらるゝ
隨喜功德品　如是展轉教至於第五十
神路山いすゝ川浪つたひ來て末まてふかる嶺の松かせ
法師功德品　又如淨明鏡悉見諸色像
にほの海や向ふかゝみに草も木も皆あらはるゝしかの山こえ
不輕品　杖木瓦石而打擲之
河風に[illegible]ふす竹を打浪もかへりて同しみとりにそすむ
神力品　如風於空中一切無障礙
なる神の空にとゝろく雨はれて凉しき風に匂ふたち花
囑累品　如是三摩諸菩薩
穗に出て色あらはれん思ひ草なつるをはなか袖の秋かせ
藥王品　病即消滅不老不死
谷の戸にふるとしあけて老せしと若な摘なり雪の山人

妙音品　化作八萬四千衆寶蓮華
あふみちやしなのはちすはひとつにて花の都に出る旅人
普門品　音聲皆得解脫
初せ山入相のかねの打かすむ聲より花のひらくをそ見る
陀羅尼品　令百由旬內無諸衰患
山賤やめくりのうはら引捨て花の色もるそのゝ垣うち
嚴王品　現如是等種々神變令其父王心淨信解
まよひつる月こそはるれ木枯の聲〳〵雲のうへにかよひて
勸發品　於如來滅後必得是經
日のひかりむかへてなつに又とくや春みしふちの雪の下ひも
あふけともきよきいはほの松かもと
はかなやつゐにふるはをそかく
（以下宸翰本奥書）
文明三年二月十五日　正廣
應永三十一年九月五日。清巖の御年四十四。正廣十三歲より仕
まいらせて春秋を送侍しに。長祿三年五月九日。御年七十九に
て此世をさり給ふて。御跡に正廣有て。歌道の事は三十一字を
ならふる計にて月日を送り侍るに。應仁元年五月より世の中
みたれ侍るに。草庵もすて都のほかにさすらひ侍る。歌道は數
寄計のことにてつとめ侍るを。おろかなることのはのなり行

さまをも見んとて。とりあつめしるしをき侍り。後にとくやふるへし。

長享二年卯月廿日

正廣在判

〔右正廣三百六十番自歌合以内閣本校合〕

以宮内省圖書寮本一讀了　芝葛盛

昭和四年七月十日印刷
昭和四年七月十五日發行
昭和十五年六月十五日再版發行

不許複製

發行者　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
新英社印刷所

發行所　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八